

京都府遺跡調査報告集

第174冊

新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第6・9次

水主神社東遺跡第6・7次

2018

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) K・L地区上層遺構全景(南から)



(2) J地区溝SD04全景(南から)



(1) H地区溝 S D25全景(北西から)



(2) H地区溝 S D25方形組み合わせ木製品出土状況(北から)

序

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年4月に設立されて以来、37年間にわたって京都府内の各地域に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

これらの調査成果を広く府民の皆様方にお伝えし、我々の祖先の歩んできた跡を多くの方々に知っていただくよう努めることが責務だと考えております。

本書は、平成26・27年度に西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した、城陽市下水主遺跡・水主神社東遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書を学術研究の資料として、また、地域の歴史や埋蔵文化財への関心と理解を深めるために、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された西日本高速道路株式会社をはじめ、城陽市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの皆様に厚くお礼申し上げます。

平成30年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 井 上 満 郎

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

新名神高速道路整備事業関係遺跡平成26・27年度発掘調査報告

下水主遺跡第6・9次

水主神社東遺跡第6・7次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
下水主遺跡第6・9次	京都府城陽市寺田金尾・今橋	平成26年4月9日～ 平成27年3月6日、 平成27年5月18日～ 平成28年2月5日	西日本高速道路株式会社関西支社	岡崎研一・ 筒井崇史・ 山崎美輪・ 渡邊拓也・ 桐井理揮
水主神社東遺跡第6・7次	京都府城陽寺田金尾	平成26年4月9日～ 平成27年3月6日、 平成27年5月18日～ 平成28年2月5日		

3. 上記事業は本部事務所(向日市寺戸町)及び新名神城陽事務所(城陽市寺田金尾・大畔)で整理・報告作業を実施した。なお、本部での整理・報告作業については、現地担当者からの指示のもと調査課企画調整係が協力して実施した。

4. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

5. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は、原則として農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

6. 本書の編集は、調査課担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

7. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係主査田中彰が行なった。

本文目次

新名神高速道路整備事業関係遺跡平成26・27年度発掘調査報告	1
下水主遺跡第4・6次、水主神社東遺跡第6・7次	1
1. はじめに	1
2. 位置と環境	3
3. 調査の経過	8
4. 調査の方法	17
5. 下水主遺跡第6次調査	24
6. 下水主遺跡第9次調査	147
7. 水主神社東遺跡第6次調査	179
8. 水主神社東遺跡第7次調査	183
9. 総括	191

挿図目次

第1図	調査地および周辺主要遺跡分布図	4
第2図	調査年度別調査区配置図	9
第3図	調査区配置図	18
第4図	下水主遺跡・水主神社東遺跡全体地区割図	19
第5図	小地区割概念図	20
第6図	調査地基本層序柱状図	22
第7図	下水主遺跡1～9次調査遺構配置図	25
第8図	I地区遺構配置図	26
第9図	I地区東壁土層断面図1	27
第10図	I地区西壁土層断面図	28
第11図	I地区東壁土層断面図2	29
第12図	I地区島畑54平面図	31
第13図	I地区島畑55・56平面図	32
第14図	I地区島畑57・58平面図	33
第15図	I地区出土遺物実測図	34
第16図	J地区遺構配置図	36
第17図	J地区南壁土層断面図	37

第18図	J 地区島畑59(北半部)・60平面図	38
第19図	J 地区島畑59(中央部)平面図	39
第20図	J 地区島畑59(南半部)平面図	40
第21図	J 地区島畑59区画溝 S D01・02土層断面図	41
第22図	J 地区溝 S D04平面図	43
第23図	J 地区溝 S D04土層断面図	44
第24図	J 地区出土遺物実測図 1	46
第25図	J 地区出土遺物実測図 2	48
第26図	J 地区出土遺物実測図 3	49
第27図	J 地区出土遺物実測図 4	50
第28図	J 地区出土遺物実測図 5	50
第29図	K 地区上層遺構配置図	52
第30図	K 1 区東壁土層断面図	53
第31図	K 2 区東壁土層断面図	55
第32図	K 地区島畑61～63平面図	57
第33図	K 地区島畑64平面図	58
第34図	K 地区島畑65平面図	59
第35図	K 地区島畑66平面図	61
第36図	K 地区島畑67・68平面図	62
第37図	K 地区溝 S D35実測図	65
第38図	K 地区出土遺物実測図	67
第39図	L 地区上層遺構配置図	69
第40図	L 地区南壁土層断面図	70
第41図	L 地区島畑70・72(南半部)平面図	72
第42図	L 地区島畑70・72(北半部)平面図	73
第43図	L 地区島畑断ち割り土層断面図	74
第44図	L 地区島畑ほか断ち割り土層断面図	75
第45図	L 地区中層遺構配置図	77
第46図	L 地区溝 S D21・22実測図	78
第47図	L 地区土坑 S K20・不明遺構 S X26実測図	78
第48図	L 地区下層遺構配置図	79
第49図	L 地区焼土坑 S X39実測図	80
第50図	L 地区落ち込み S X40土層断面図	81
第51図	L 地区自然流路 N R38土層断面図	82
第52図	L 地区自然流路 N R38、氾濫流路 N R42縄文土器出土状況投影図	82

第53図	L地区氾濫流路N R 42平面図	83
第54図	L地区氾濫流路N R 42土層断面図	84
第55図	L地区出土遺物実測図1	86
第56図	L地区出土遺物実測図2	87
第57図	L地区出土遺物実測図3	88
第58図	L地区出土遺物実測図4	89
第59図	L地区出土縄文土器深鉢の主要型式	90
第60図	L地区出土縄文土器浅鉢の主要型式	91
第61図	L地区出土遺物実測図5	93
第62図	L地区出土遺物実測図6	94
第63図	L地区出土遺物実測図7	95
第64図	L地区出土遺物実測図8	96
第65図	L地区出土遺物実測図9	98
第66図	L地区出土遺物実測図10	99
第67図	L地区出土遺物実測図11	101
第68図	L地区出土遺物実測図12	102
第69図	L地区出土遺物実測図13	103
第70図	L地区出土遺物実測図14	104
第71図	L地区出土遺物実測図15	105
第72図	L地区出土遺物実測図16	106
第73図	L地区出土遺物実測図17	107
第74図	L地区出土遺物実測図18	108
第75図	N地区上層遺構配置図	109
第76図	N地区北壁土層断面図	110
第77図	N地区島畑73平面図	111
第78図	N地区島畑74・75(南半部)平面図	112
第79図	N地区島畑74・75(北半部)平面図	113
第80図	N地区島畑76平面図	114
第81図	N地区下層遺構配置図	116
第82図	N地区溝S D 38実測図	117
第83図	N地区溝S D 39・40実測図	118
第84図	N地区土坑S K 35・83実測図	119
第85図	N地区土坑S K 36・37・88・90・95・106実測図	120
第86図	N地区土坑S K 86・87・105実測図	121
第87図	N地区出土遺物実測図1	123

第88図	N地区出土遺物実測図 2	124
第89図	N地区出土遺物実測図 3	126
第90図	N地区出土遺物実測図 4	128
第91図	N地区出土遺物実測図 5	128
第92図	下水主遺跡 1～9次・水主神社東遺跡第 1～7次調査遺構配置図	130
第93図	D3区上層遺構配置図	131
第94図	D3区東壁土層断面図	132
第95図	D3区北壁土層断面図	134
第96図	D3区島畑83平面図	135
第97図	D3区島畑83検出素掘り溝土層断面図	136
第98図	D3区島畑84平面図・素掘り溝土層断面図	136
第99図	D3区島畑85～88平面図	137
第100図	D3区溝 S D42実測図	139
第101図	D3区下層遺構配置図	140
第102図	D3区溝 S D40平面図	141
第103図	D3区溝 S D40土層断面図	142
第104図	D3区溝 S D40遺物出土状況図	143
第105図	D3区出土遺物実測図 1	144
第106図	D3区出土遺物実測図 2	145
第107図	H地区上層遺構配置図	148
第108図	H地区南壁土層断面図	149
第109図	H地区島畑96・97平面図	150
第110図	H地区島畑98・99平面図	151
第111図	H地区島畑100・101平面図	152
第112図	H地区島畑25平面図	153
第113図	H地区溝 S D24平面図	155
第114図	H地区下層遺構配置図	156
第115図	H地区溝 S D25平面図	158
第116図	H地区溝 S D25地形測量図	159
第117図	H地区溝 S D25土層断面図	160
第118図	H地区溝 S D25遺物出土状況図	161
第119図	H地区溝 S D25遺物出土状況拡大図	162
第120図	H地区土坑状遺構 S X56土層断面図	163
第121図	H地区土坑状遺構 S X64周辺杭検出状況図	163
第122図	H地区溝 S D25方形組み合わせ木製品出土状況図	164

第123図	H地区不明遺構S X27・43・44断面図	165
第124図	H地区出土遺物実測図1	166
第125図	H地区出土遺物実測図2	168
第126図	H地区出土遺物実測図3	169
第127図	H地区出土遺物実測図4	170
第128図	H地区出土遺物実測図5	171
第129図	H地区出土方形組み合わせ木製品復元図	172
第130図	H地区出土遺物実測図6	173
第131図	H地区出土遺物実測図7	174
第132図	H地区出土遺物実測図8	175
第133図	H地区出土遺物実測図9	175
第134図	L3区遺構配置図	176
第135図	E9区遺構配置図	177
第136図	E10区遺構配置図	178
第137図	B4区遺構配置図	180
第138図	B4区北西壁土層断面図	181
第139図	B4区島畑30平面図	182
第140図	B4区島畑89平面図	182
第141図	B4区溝SD04実測図	183
第142図	D地区遺構配置図	184
第143図	D地区東壁土層断面図	185
第144図	D地区南壁・北壁壁土層断面図	186
第145図	D地区島畑111平面図	187
第146図	D地区島畑111上面検出素掘り溝土層断面	188
第147図	D地区中層遺構配置図、検出遺構土層断面図	189
第148図	D地区不明遺構S X31土層断面図	190
第149図	D地区溝SD30実測図	190
第150図	縄文土器出土地点分布図	192
第151図	山城地域における縄文時代晩期中葉の主要遺跡分布図	194
第152図	遺構ごとの角閃石含有土器の比率	195
第153図	角閃石を含有する浅鉢	195
第154図	弥生時代終末期の下水主遺跡	198
第155図	各遺構の帰属時期	199
第156図	溝SD25の機能模式図	200
第157図	類似した構造を持つ弥生・古墳時代の木製品	203

第158図	下水主遺跡遺構変遷図1(弥生時代中期)-----	206
第159図	下水主遺跡遺構変遷図2(弥生時代後期)-----	207
第160図	下水主遺跡遺構変遷図3(古墳時代)-----	209
第161図	下水主遺跡遺構変遷図4(飛鳥時代～中世)-----	211
第162図	下水主遺跡遺構変遷図5(中世)-----	212

付 表 目 次

付表1	下水主遺跡調査次数一覧表-----	10
付表2	水主神社東遺跡調査次数一覧表-----	10
付表3	下水主遺跡調査地区別一覧表-----	15
付表4	水主神社東遺跡調査地区別一覧表-----	16
付表5	出土土器観察表(縄文土器)-----	218

図 版 目 次

巻頭図版1 下水主遺跡第6次

- (1) K・L地区上層遺構全景(南から)
- (2) J地区溝SD04全景(南から)

巻頭図版2 下水主遺跡第9次

- (1) H地区溝SD25全景(北西から)
- (2) H地区溝SD25方形組み合わせ木製品出土状況(北から)

- 図版第1 (1) I地区全景(西から)
- (2) I地区全景(北東から)

- 図版第2 (1) I地区全景(南から)
- (2) I地区島畑54全景(北東から)
- (3) I地区島畑54土層断面(北西から)

- 図版第3 (1) I地区島畑55全景(北西から)
- (2) I地区島畑55土層断面(東から)
- (3) I地区島畑56全景(北西から)

- 図版第4 (1) I地区島畑56土層断面(西から)
- (2) I地区島畑57全景(南西から)

- (3) I 地区島畑57土層断面(西から)
- 図版第5 (1) I 地区島畑58全景(南西から)
 (2) I 地区島畑58土層断面(西から)
 (3) I 地区溝状遺構 S D06全景(北西から)
- 図版第6 (1) I 地区溝状遺構 S D07全景(南西から)
 (2) I 地区溝状遺構 S D08全景(南西から)
 (3) I 地区溝状遺構 S D09全景(北西から)
- 図版第7 (1) J 地区(南半部)島畑59全景(西から)
 (2) J 地区(南半部)島畑59全景(北から)
- 図版第8 (1) J 地区(北半部)島畑59全景(南西から)
 (2) J 地区(北半部)島畑59全景(南から)
- 図版第9 (1) J 地区(南半部)島畑59全景(南東から)
 (2) J 地区(北半部)島畑59全景(北から)
 (3) J 地区(北半部)島畑59全景(北東から)
- 図版第10 (1) J 地区南壁土層断面(北から)
 (2) J 地区島畑59(西半部)土層断面(北から)
 (3) J 地区溝 S D01g-g' 土層断面(北から)
- 図版第11 (1) J 地区溝 S D01f-f' 土層断面(北から)
 (2) J 地区溝 S D02土層断面(南から)
 (3) J 地区溝 S D02b-b' 土層断面(北から)
- 図版第12 (1) J 地区島畑断ち割り状況(南東から)
 (2) J 地区島畑59断ち割り土層断面(南から)
 (3) J 地区下層断ち割り状況(南から)
- 図版第13 (1) J 地区溝 S D04全景(南から)
 (2) J 地区溝 S D04全景(上が西)
- 図版第14 (1) J 地区溝 S D04全景(北西から)
 (2) J 地区溝 S D04全景(南東から)
- 図版第15 (1) J 地区溝 S D04全景(北西から)
 (2) J 地区溝 S D04建築部材出土状況(北東から)
- 図版第16 (1) J 地区溝 S D04検出状況(南から)
 (2) J 地区溝 S D04a-a' 土層断面(南東から)
 (3) J 地区溝 S D04b-b' 土層断面(南東から)
- 図版第17 (1) J 地区溝 S D04土器群 1 出土状況(北東から)
 (2) J 地区溝 S D04土器群 1 出土状況(北西から)
 (3) J 地区溝 S D04土器群 2 出土状況(北西から))

- 図版第18 (1) J 地区溝 S D04不明有機質繊維出土状況(北から)
 (2) J 地区溝 S D04不明有機質繊維出土状況(北東から)
 (3) J 地区溝 S D04不明土製品出土状況(北東から)
- 図版第19 (1) J 地区溝 S D04建築部材出土状況(北西から)
 (2) J 地区溝 S D04建築部材出土状況(南西から)
 (3) J 地区溝 S D04杭出土状況(北西から)
- 図版第20 (1) J 地区溝 S D04完掘状況(南東から)
 (2) J 地区溝 S D04杭検出状況(北西から)
 (3) J 地区溝 S D04作業風景(北西から)
- 図版第21 (1) K 1 区全景(北から)
 (2) K 1 区島畑62・63全景(北から)
- 図版第22 (1) K 1 区島畑62全景(東から)
 (2) K 1 区島畑63全景(東から)
- 図版第23 (1) K 1 区島畑64・65全景(南から)
 (2) K 1 区島畑66、溝状遺構 S D05全景(南から)
- 図版第24 (1) K 1 区島畑61土層断面(西から)
 (2) K 1 区島畑64全景(東から)
 (3) K 1 区島畑65、溝状遺構 S D03全景(南東から)
- 図版第25 (1) K 1 区島畑65全景(東から)
 (2) K 1 区溝状遺構 S D03土全景(東から)
 (3) K 1 区溝状遺構 S D03土層断面(西から)
- 図版第26 (1) K 1 区土坑 S K 15完掘状況(東から)
 (2) K 1 区溝 S D16完掘状況(南東から)
 (3) K 1 区下層遺構確認状況(東から)
- 図版第27 (1) K 2 区全景(北から)
 (2) K 2 区全景(南から)
- 図版第28 (1) K 2 区島畑65・68、溝状遺構 S D20全景(南西から)
 (2) K 2 区島畑67、溝状遺構 S D22全景(北西から)
- 図版第29 (1) K 2 区島畑65全景(西から)
 (2) K 2 区島畑68全景(西から)
- 図版第30 (1) K 2 区島畑67全景(西から)
 (2) K 2 区島畑63・67全景(南から)
- 図版第31 (1) K 2 区島畑63全景(西から)
 (2) K 2 区島畑67、溝状遺構 S D46全景(南西から)
 (3) K 2 区島畑68、溝状遺構 S D20全景(北西から)

- 図版第32 (1) K 2区島畑65全景(南西から)
 (2) K 2区島畑66、溝状遺構 S D 18全景(南西から)
 (3) K 2区島畑66全景(南西から)
- 図版第33 (1) K 2区焼土坑 S X 30 ~ 32検出状況(西から)
 (2) K 2区焼土坑 S X 30土層断面(南西から)
 (3) K 2区焼土坑 S X 30断ち割り状況(西から)
- 図版第34 (1) K 2区溝 S D 35全景(北西から)
 (2) K 2区溝 S D 35(拡張区)全景(北西から)
- 図版第35 (1) K 2区溝 S D 35a - a' 土層断面(南東から)
 (2) K 2区溝 S D 35e - e' 土層断面(北西から)
 (3) K 2区溝 S D 35d - d' 土層断面(北西から)
- 図版第36 (1) L 地区全景(北東から)
 (2) L 地区全景(北から)
- 図版第37 (1) L 地区島畑70全景(北から)
 (2) L 地区島畑71全景(南から)
- 図版第38 (1) L 地区上層遺構全景(南東から)
 (2) L 地区南壁土層断面(北西から)
 (3) L 地区島畑72土層断面(北から)
- 図版第39 (1) L 地区島畑70・72全景(北西から)
 (2) L 地区溝状遺構 S D 10全景(西から)
 (3) L 地区溝状遺構 S D 10磨製石斧出土状況(北から)
- 図版第40 (1) L 地区溝状遺構 S D 04土層断面(北から)
 (2) L 地区溝状遺構 S D 10土層断面(北西から)
 (3) L 地区北西部確認調査区全景(南西から)
- 図版第41 (1) L 地区土坑 S K 09遠景(南から)
 (2) L 地区溝 S D 22全景(南から)
 (3) L 地区作業風景(西から)
- 図版第42 (1) L 地区落ち込み S X 40完掘後全景(東から)
 (2) L 地区氾濫流路 N R 42全景(西から)
- 図版第43 (1) L 地区氾濫流路 N R 42完掘後全景(西から)
 (2) L 地区氾濫流路 N R 42完掘後全景(東から)
- 図版第44 (1) L 地区下層断ち割り作業風景(北西から)
 (2) L 地区中央断ち割り土層断面(東から)
 (3) L 地区島畑72下層縄文土器出土状況(東から)
- 図版第45 (1) L 地区断ち割り a - a' 縄文土器出土状況(東から)

- (2) L 地区断ち割りb-b' 縄文土器出土状況(北西から)
- (3) L 地区断ち割りb-b' 縄文土器出土状況(北から)
- 図版第46 (1) L 地区焼土坑S X39全景(東から)
- (2) L 地区落ち込みS X40全景(東から)
- (3) L 地区落ち込みS X40全景(西から)
- 図版第47 (1) L 地区落ち込みS X40完掘後全景(北西から)
- (2) L 地区落ち込みS X40遺物出土状況(南西から)
- (3) L 地区落ち込みS X40遺物出土状況(南から)
- 図版第48 (1) L 地区落ち込みS X40遺物出土状況(東から)
- (2) L 地区落ち込みS X40遺物出土状況(南西から)
- (3) L 地区落ち込みS X40遺物出土状況(南東から)
- 図版第49 (1) L 地区自然流路N R38、落ち込みS X40全景(北西から)
- (2) L 地区自然流路N R38全景(西から)
- (3) L 地区自然流路N R38a-a' 土層断面(南西から)
- 図版第50 (1) L 地区自然流路N R38中央土層断面(西から)
- (2) L 地区自然流路N R38土層断面(西から)
- (3) L 地区自然流路N R38縄文土器出土状況(南から)
- 図版第51 (1) L 地区氾濫流路N R42全景(東から)
- (2) L 地区氾濫流路N R42全景(北から)
- (3) L 地区氾濫流路N R42完掘後全景(西から)
- 図版第52 (1) L 地区N R42完掘後全景(北西から)
- (2) L 地区N R42東壁土層断面(西から)
- (3) L 地区N R42東壁土層断面(西から)
- 図版第53 (1) L 地区N R42縄文土器出土状況(北から)
- (2) L 地区N R42縄文土器出土状況(南から)
- (3) L 地区N R42縄文土器出土状況(南から)
- 図版第54 (1) L 地区N R42縄文土器出土状況(南から)
- (2) L 地区N R42縄文土器出土状況(北から)
- (3) L 地区N R42縄文土器出土状況(南から)
- 図版第55 (1) L 地区N R42縄文土器出土状況(南から)
- (2) L 地区N R42櫛状木製品出土状況(北から)
- (3) L 地区N R42縄文土器・櫛状木製品出土状況(南から)
- 図版第56 (1) L 地区N R42縄文土器・櫛状木製品出土状況(北から)
- (2) L 地区石鏃出土状況(南から)
- (3) L 地区石鏃出土状況(北から)

- 図版第57 (1) N地区全景(北から)
(2) N地区島畑74～76全景(北西から)
- 図版第58 (1) N地区全景(北から)
(2) N地区全景(北西から)
- 図版第59 (1) N地区島畑73全景(北西から)
(2) N地区島畑74、溝状遺構S D02全景(北西から)
- 図版第60 (1) N地区島畑75全景(北から)
(2) N地区島畑76全景(北西から))
- 図版第61 (1) N地区北壁土層断面(南東から)
(2) N地区島畑74～76、溝状遺構S D02・04全景(東から)
(3) N地区溝状遺構S D04遺物出土状況(東から)
- 図版第62 (1) N地区島畑73～75全景(南西から)
(2) N地区島畑73全景(南西から)
(3) N地区溝状遺構S D32全景(北西から)
- 図版第63 (1) N地区島畑74・75全景(南から)
(2) N地区島畑74北半部全景(南から)
(3) N地区作業風景(北から)
- 図版第64 (1) N地区島畑75素掘り溝土層断面(南から)
(2) N地区島畑75素掘り溝土層断面(南から)
(3) N地区島畑75素掘り溝土層断面(南から)
- 図版第65 (1) N地区土坑S K35全景(北から)
(2) N地区土坑S K35遺物出土状況(北から)
- 図版第66 (1) N地区柱穴S P97土層断面(北東から)
(2) N地区柱穴S P98土層断面(北から)
(3) N地区溝S D38全景(北西から)
- 図版第67 (1) N地区土坑S K35土層断面(北から)
(2) N地区土坑S K36遺物出土状況(北西から)
(3) N地区土坑S K95遺物出土状況(西から)
- 図版第68 (1) N地区土坑S K90遺物出土状況(東から)
(2) N地区土坑S K90完掘状況(東から)
(3) N地区土坑S K105完掘状況(南から)
- 図版第69 (1) N地区土坑S K83遺物出土状況(南から)
(2) N地区土坑S K83完掘状況(東から)
(3) N地区北端部下層断ち割り状況(南から)
- 図版第70 (1) D3区全景(北から)

- (2) D 3 区全景(南から)
- 図版第71 (1) D 3 区島畑84全景(西から)
(2) D 3 区島畑85全景(西から)
- 図版第72 (1) D 3 区島畑86～88全景(北から)
(2) D 3 区島畑86全景(西から)
- 図版第73 (1) D 3 区島畑87全景(西から)
(2) D 3 区島畑88全景(西から)
- 図版第74 (1) D 3 区北壁土層断面(南から)
(2) D 3 区島畑83全景(北から)
(3) D 3 区島畑83全景(南から)
- 図版第75 (1) D 3 区島畑85土層断面(西から)
(2) D 3 区島畑86土層断面(西から)
(3) D 3 区島畑87土層断面(西から)
- 図版第76 (1) D 3 区島畑88・溝状遺構 S D02土層断面(西から)
(2) D 3 区溝状遺構 S D04土層断面(西から)
(3) D 3 区溝状遺構 S D08土層断面(西から)
- 図版第77 (1) D 3 区溝 S D42全景(東から)
(2) D 3 区溝 S D42土層断面(西から)
(3) D 3 区溝 S D42遺物出土状況(南東から)
- 図版第78 (1) D 3 区溝 S D40全景(北西から)
(2) D 3 区溝 S D40遺物出土状況(南東から)
- 図版第79 (1) D 3 区溝 S D40土層断面(南から)
(2) D 3 区溝 S D40土層断面(南東から)
(3) D 3 区溝 S D40北壁遺物出土状況(南から)
- 図版第80 (1) D 3 区溝 S D40遺物出土状況(東から)
(2) D 3 区溝 S D40遺物出土状況(西から)
(3) D 3 区溝 S D40(東半部)全景(東から)
- 図版第81 (1) D 3 区溝 S D40(東半部)遺物出土状況(北から))
(2) D 3 区下層断ち割り状況(南東から)
(3) D 3 区下層断ち割り状況(南から)
- 図版第82 (1) H 地区北半部全景(南東から)
(2) H 地区北半部全景(南から)
- 図版第83 (1) H 地区島畑96全景(東から)
(2) H 地区島畑97全景(東から)
- 図版第84 (1) H 地区島畑98全景(東から)

- (2) H地区島畑99全景(東から)
- 図版第85 (1) H地区南半部全景(西から)
(2) H地区南半部全景(上が東)
- 図版第86 (1) H地区南半部全景(北から)
(2) H地区島畑100全景(東から)
- 図版第87 (1) H地区島畑101全景(東から)
(2) H地区島畑25全景(南から)
- 図版第88 (1) H地区北半部全景(南東から)
(2) H地区北半部全景(北東から)
(3) H地区島畑96土層断面(東から)
- 図版第89 (1) H地区島畑97土層断面(東から)
(2) H地区島畑98土層断面(東から)
(3) H地区島畑98上面検出ピット群全景(南東から)
- 図版第90 (1) H地区島畑99土層断面(東から)
(2) H地区溝状遺構 S D02土層断面(東から)
(3) H地区溝状遺構 S D02上面素掘り溝群全景(東から)
- 図版第91 (1) H地区溝状遺構 S D04土層断面(東から)
(2) H地区北壁東半部土層断面(南から)
(3) H地区南壁土層断面(北から)
- 図版第92 (1) H地区南半部全景(南東から)
(2) H地区島畑101全景(北西から)
(3) H地区溝状遺構 S D50上面素掘り溝群(東から)
- 図版第93 (1) H地区溝 S D25全景(西から)
(2) H地区溝 S D25全景(北から)
- 図版第94 (1) H地区溝 S D25木材出土状況(北西から)
(2) H地区溝 S D25木材出土状況(北西から)
- 図版第95 (1) H地区溝 S D25完掘後全景(北西から)
(2) H地区溝 S D25完掘後全景(北西から)
- 図版第96 (1) H地区溝 S D25木材出土状況(北西から)
(2) H地区溝 S D25木材出土状況(南東から)
(3) H地区溝 S D25完掘状況(南から)
- 図版第97 (1) H地区溝 S D25a-a' 土層断面(南東から)
(2) H地区溝 S D25b-b' 土層断面(南東から)
(3) H地区SX43a-a' 土層断面(南東から)
- 図版第98 (1) H地区溝 S D25付属土坑状遺構 S X44内小土坑土層断面(北から)

- (2) H地区溝 S D25付属土坑状遺構 S X43全景(東から)
- (3) H地区溝 S D25付属土坑状遺構 S X43遺物出土状況(北から)
- 図版第99 (1) H地区溝 S D25遺物出土状況(北から)
- (2) H地区溝 S D25遺物出土状況(北から)
- (3) H地区溝 S D25遺物出土状況(北から)
- 図版第100 (1) H地区溝 S D25方形組み合わせ木製品出土状況(北東から)
- (2) H地区溝 S D25方形組み合わせ木製品出土状況(北西から)
- 図版第101 (1) H地区溝 S D25方形組み合わせ木製品出土状況(東から)
- (2) H地区溝 S D25方形組み合わせ木製品出土状況(西から)
- (3) H地区溝 S D25方形組み合わせ木製品出土状況(北東から)
- 図版第102 (1) H地区溝 S D25方形組み合わせ木製品部分拡大(南東から)
- (2) H地区溝 S D25方形組み合わせ木製品部分拡大(南東から)
- (3) H地区溝 S D25方形組み合わせ木製品部分拡大(南東から)
- 図版第103 (1) H地区溝 S D25溝底土坑 S X56検出状況(南東から)
- (2) H地区溝 S D25溝底土坑 S X56全景(西から)
- 図版第104 (1) E 9区島畑102全景(北東から)
- (2) E 9区下層遺構面全景(北から)
- 図版第105 (1) E 9区島畑102全景(北から)
- (2) E 9区溝 S D07検出状況(北東から)
- (3) E 9区溝 S D07土層断面(南から)
- 図版第106 (1) E 9区南壁土層葬断面(北から)
- (2) E 9区完掘状況(北東から)
- (3) E 9区作業風景(南から)
- 図版第107 (1) E 10区全景(北から)
- (2) E 10区島畑103全景(北から)
- (3) E 10区西壁土層断面(南東から)
- 図版第108 (1) B 4区上層遺構全景(南西から)
- (2) B 4区下層遺構全景(南西から)
- 図版第109 (1) B 4区島畑30全景(南から)
- (2) B 4区島畑89全景(南から)
- 図版第110 (1) B 4区北西壁土層断面(南から)
- (2) B 4区土西壁土層断面(西から)
- (3) B 4区島畑30全景(北から)
- 図版第111 (1) B 4区溝 S D04全景(南から)
- (2) B 4区溝 S D04遺物出土状況(南から)

- (3) B 4 区下層全景(北東から)
- 図版第112 (1) B 4 区下層遺物出土状況(南西から)
(2) B 4 区下層遺物出土状況(北西から)
(3) B 4 区下層遺物出土状況(北西から)
- 図版第113 (1) D 地区上層遺構全景(東から)
(2) D 地区上層遺構全景(北から)
- 図版第114 (1) D 地区島畑111全景(北から)
(2) D 地区島畑111全景(南から)
- 図版第115 (1) D 地区溝溝状遺 S D02全景(北から)
(2) D 地区中層遺構面全景(北から)
- 図版第116 (1) D 地区南半東壁土層断面(南西から)
(2) D 地区島畑111土層断面(北から)
(3) D 地区溝状遺構 S D02土層断面(北から)
- 図版第117 (1) D 地区島畑27裾土層断面①(南から)
(2) D 地区島畑27裾土層断面②(南から)
(3) D 地区島畑27裾土層断面③(南から)
- 図版第118 (1) D 地区溝 S D23全景(北西から)
(2) D 地区土坑状遺構 S K25・26・28全景(北東から)
(3) D 地区不明遺構 S X31土層断面(東から)
- 図版第119 (1) D 地区下層遺構全景(北から)
(2) D 地区下層遺構全景(南東から)
(3) D 地区北壁土層断面(南から)
- 図版第120 (1) D 地区溝 S D30全景(北から)
(2) D 地区溝 S D30近景(北から)
(3) D 地区溝 S D30土層断面(南から)
- 図版第121 出土遺物 1
- 図版第122 出土遺物 2
- 図版第123 出土遺物 3
- 図版第124 出土遺物 4

新名神高速道路整備事業関係遺跡

平成26・27年度発掘調査報告

1. はじめに

新名神高速道路整備事業に伴う発掘調査は、平成20年度から西日本高速道路株式会社の依頼を受けて継続して実施している。新名神高速道路は、愛知県名古屋市を起点とし、兵庫県神戸市に至る総延長約174kmの高速道路で、既存の名神高速道路や京滋バイパス、近畿自動車道などと交通機能を分担することで、名神高速道路等の混雑を解消し、利用者の利便性の向上を目的として建設が進められているものである。また、大規模な災害や事故等による交通規制時には、名神高速道路等と相互に役割を補完することが期待されている。

新名神高速道路の予定路線のうち、京都府内では、宇治田原町・城陽市・京田辺市・八幡市の各市町を通過する路線として17.7kmが計画された。このうち、京奈和自動車道と第二京阪道路を接続することによる高速道路網の機能強化等を目的として、先行して事業認可が下りた城陽ジャンクション・インターチェンジ(以下、城陽JCT・ICと表記)から八幡京田辺ジャンクション・インターチェンジ(以下、八幡京田辺JCT・ICと表記)までの区間(事業距離3.5km)については、平成20年度より発掘調査に着手している。当該区間において調査の対象となる遺跡は、東から城陽市水主神社東遺跡、同下水主遺跡、京田辺市門田遺跡、同西村遺跡、同向谷遺跡、同向山遺跡、同松井横穴群、八幡市女谷・荒坂横穴群、同荒坂遺跡、同御毛通古墳群、同美濃山廃寺、同美濃山廃寺下層遺跡の各遺跡である。これらの遺跡については、現地の発掘調査終了後に整理作業を行い、順次、報告書を刊行しているところである。なお、当該区間については平成29年4月30日に開通した。

本書で報告する下水主遺跡ならびに水主神社東遺跡は、城陽JCT・ICの建設に伴い、平成23年度から継続して調査を実施しており、本書では、平成26・27年度に実施した下水主遺跡第6・9次調査と水主神社東遺跡第6・7次調査について報告するものである。

下水主遺跡と水主神社東遺跡は、木津川右岸の扇状地と埋没した微高地上に展開する。下水主遺跡は、当初、東西540m、南北760mほどが遺跡範囲と考えられていたが、本事業に伴う調査の結果、遺跡がさらに北に広がることを確認されたため、現在、南北の広がり^(注2)は1,200mとなっている。一方、水主神社東遺跡も当初、南北、東西ともに450mほどが遺跡範囲と考えられていたが、平成29年度の試掘調査の結果、遺跡がさらに東へ広がることを確認されたため、現在、東西の広がり^(注3)は約900mとなっている。両遺跡とも一連の発掘調査以前には、表採遺物のみが知られていた。

現地調査にあたっては京都府教育委員会、城陽市教育委員会、京都府立山城郷土資料館をはじめ、各関係機関のご指導・ご協力をいただいた。また、地元自治会や近隣住民の方々には発掘調査へのご理解とご協力をいただいた。記して感謝します。

なお、調査にかかる経費は、全額、西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所が負担した。 (筒井崇史)

[平成26年度現地調査体制]

<下水主遺跡第6次・水主神社東遺跡第6次>

現地調査責任者	調査課長	石井清司
現地調査担当者	調査課課長補佐兼	
	調査第2係長兼調査第3係長	岩松 保
	調査課課長補佐兼調査第3係長	細川康晴
	同 主 査	戸原和人・岡崎研一・筒井崇史
	同 副 主 査	石尾政信
	同 主 任	高野陽子・村田和弘
	同 調 査 員	福山博章・山崎美輪・渡邊拓也
調 査 場 所	京都府城陽市水主大將軍・倉貝・宮馬場、寺田金尾・今橋	
現地調査期間	平成26年4月9日～平成27年3月6日	
調 査 面 積	17,110㎡(うち本書報告分は15,510㎡)	

[平成27年度調査体制等]

<下水主遺跡第9次・水主神社東遺跡第7次>

現地調査責任者	調査課長	有井広幸
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第3係長	岩松 保
	同 主 査	筒井崇史
	同 調 査 員	桐井理揮・橋本 稔・清水早織
調 査 場 所	京都府城陽市寺田金尾	
現地調査期間	平成27年5月18日～平成28年2月5日	
調 査 面 積	4,540㎡	

[平成28年度整理作業体制]

整理作業責任者	調査課長	森 正
整 理 担 当 者	調査課課長補佐兼調査第3係長	岩松 保
	調査課 主 査	高野陽子・筒井崇史
整 理 期 間	平成28年4月1日～平成29年3月31日	

[平成29年度整理作業体制]

整理作業責任者	調査課長	小池 寛
整 理 担 当 者	調査課参事調査第3係長事務取扱	岩松 保
	調査課 主 査	高野陽子
整 理 期 間	平成29年4月15日～平成30年3月31日	

2. 位置と環境

1) 地理的環境

下水主遺跡・水主神社東遺跡の所在する京都府城陽市は、京都府南部を北流する木津川の右岸に位置する。城陽市域の地形は、大きく西部の平野部と東部の山地・丘陵部に二分される。西部は木津川による河川堆積と度重なる氾濫によって沖積平野が形成され、現在は水田地帯が広がる。しかし、これまでの発掘調査の結果、微高地や後背湿地が分布していることが明らかになっており、本来は起伏に富んだ地形であったと考えられる。一方、東部は鷲峰山山塊に連なる山地があり、山麓から沖積平野にかけての中間地帯には大阪層群からなる宇治丘陵(または城陽丘陵)が位置する。この丘陵部と沖積平野の境界には段丘が発達し、木津川の支流である大谷川、長谷川、青谷川などの小規模な河川によって形成された扇状地が広がる。このような段丘上や扇状地上に営まれた古代から中世にかけての集落が現在の城陽市街地の礎となっている。これら市街地に重複して、官衙遺跡や寺院などが営まれていたことから、地形上の重要な位置を占めていたことがわかる。また、木津川周辺に形成された微高地には富野、枇杷庄、水主などの集落が営まれる。これらの集落の周辺に広がる後背湿地を中心に条里型地割が良好に遺存し、水田と土を盛り上げて畑作を行う島畑^(注4)が分布している。

2) 歴史的環境

下水主遺跡周辺に分布する主要な遺跡について概観する(第1図)。

旧石器時代の遺構は確認されていないが、芝ヶ原遺跡でナイフ形石器と舟底形石器が出土している。また、森山遺跡で出土したサヌカイト片も同じ頃のものとして推定されている。城陽市域における人びとの営みはこのころまで遡ると考えられる。

続く縄文時代では、横道遺跡(丸塚古墳周濠下層)で、前期後半の深鉢形土器を納めた土坑が検出されており、周辺に集落の存在が想定されている。また、森山遺跡では後期後半と考えられる円形の竪穴建物が規則的に配置された状態で検出されている。一方、晩期になると、沖積低地に立地する塚本東遺跡や下水主遺跡、水主神社東遺跡などで縄文土器が出土していることから、木津川流域の沖積低地が活動領域として利用されていたと考えられる。

弥生時代になると、木津川沿いに遺跡が広く分布するようになる。前期ではおもに木津川左岸に遺跡が分布するが、中期になると木津川右岸でも遺跡数が増加し、巨椋池周辺にも集落が営まれるようになる。城陽市域では、森山遺跡で中期後半の甕棺と後期後半の竪穴建物2棟が検出されている。また、新名神高速道路整備事業に伴う下水主遺跡の調査でも後期後半の竪穴建物が2棟検出されている。さらに芝ヶ原遺跡や正道遺跡などでは、遺構は検出されていないものの、中・後期の土器や石器が出土している。一方、沖積平野に位置する塚本遺跡や塚本東遺跡、水主遺跡などでは後期末から古墳時代初頭の土器が出土している。特に塚本東遺跡では、北東から南東に流れる溝から大量の庄内式土器が出土した。出土した土器には壺・甕・高杯・器台・鉢・手焙形土器など多様な器種が認められ、丹波・丹後地域の特徴を持つ土器も多数出土している。近隣に



第1図 調査地および周辺主要遺跡分布図(国土地理院1/25,000 宇治・田辺)

庄内式期の集落が存在すると推定されている。しかし、後期に南山城地域各地でみられる高地性集落は、城陽市域ではほとんど確認されていない。

古墳時代になると、南山城地域にも多くの古墳が築かれるようになる。城陽市域における庄内式期のものとしては、芝ヶ原古墳や上大谷6・7号墳、長池古墳下層などが築造される。芝ヶ原古墳は、全長22.5m以上の前方後方形の古墳で、四獣形鏡や銅製腕輪、鉄製品、多数の玉類、土器などが出土している。次いで、南山城地域各地に前方後円墳が出現する。城陽市域にでも北部の大谷川の周辺に、前期では、庄内式期から続く上大谷古墳群をはじめ、西山古墳群、尼塚古墳群が形成される。これらの古墳群は小規模であるが、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳と多様な墳形の古墳が築造された。

中期になると、城陽市の北半部に多くの古墳が集中するようになる。これらは久津川古墳群と総称しているが、大きく3つの支群(広野支群・久世支群・富野支群)に分かれる。このうち久世支群では、久津川車塚古墳や芭蕉塚古墳という大型の前方後円墳が築造される。このほか、帆立貝形前方後円墳である丸塚古墳、方墳である梶塚古墳や青塚古墳、円墳である山道東古墳などの大規模な古墳も築造される。南山城地域の他地域と比べて規模の点では群を抜いている。久津川車塚古墳は、埋葬施設として竜山石製の長持形石棺を使用し、副葬品として三角縁神獣鏡をはじめとする銅鏡、多数の玉類や石製模造品、刀剣類などが石棺から出土した。また、石棺に付設された小石室から甲冑等も出土している。遺物の年代から5世紀前半の築造と考えられる。墳丘規模、埋葬施設、副葬品のいずれにおいても王権と密接な関係を持った首長が、城陽市域のみならず、山城地域を支配するような大首長であったと考えられる。久津川車塚古墳に続く首長墳として芭蕉塚古墳がある。同古墳は5世紀中頃の前方後円墳で、墳丘から埴輪列や葺石が検出されている。ただ、芭蕉塚古墳は久津川古墳群最後の大型前方後円墳である。

中期の後半から後期にかけて芝ヶ原古墳群、上大谷古墳群、芝山古墳群などで小規模な古墳が築造される。芝山古墳群は5世紀中頃から6世紀末頃にかけて造営されたもので、小型の方墳から円墳へと変化していくことが明らかになっている。また、規模も新しい古墳ほど小型化していく。そして6世紀末には造墓活動を停止すると考えられている。城陽市域のこの時期の古墳は大半は木棺直葬墳であり、このころ爆発的に普及する横穴式石室はあまりみられない地域として注目される。城陽市域で横穴式石室を埋葬施設に持つ古墳は黒土1号墳、尼塚5号墳、上大谷12号墳、上大谷17号墳と数少ない。このうち黒土1号墳は、全長約9.5mの巨石を使用した両袖式の横穴式石室が確認されており、須恵器や土師器のほか、馬具や鉄刀、胡籙、鉄鏃、鏝などの金属製品が出土している。出土した須恵器から古墳時代後期後半頃の築造と考えられる。

古墳時代の集落遺跡はおもに市域東部の段丘上に営まれたが、あまり多くは確認されていない。前期では芝山遺跡で竪穴建物1棟が検出されている。また、隣接する森山遺跡では方形周溝状遺構と竪穴建物が検出されており、方形周溝状遺構は豪族居館の堀の可能性が考えられている。中期前半には室木遺跡で小規模な竪穴建物が検出されている、滑石製白玉とその未成品や欠損品が出土したことから、玉作が行われた工房的な集落と考えられている。その後、城陽市域では古墳

時代の集落はあまり確認されておらず、後期後半から飛鳥時代にかけて、芝ヶ原遺跡、正道遺跡、芝山遺跡、森山遺跡などで竪穴建物や掘立柱建物が検出されている。特に芝ヶ原遺跡では150棟以上の竪穴建物が検出されており、この時期では城陽市域で最大級の集落である。

文献資料の検討から、飛鳥時代以前に城陽市域には栗隈県が置かれたと考えられている。県の実態は不明であるが、『日本書紀』仁徳天皇十二年十月条に「大溝を山背の栗隈県に掘」とあり、推古天皇十五年是歳条にも「山背国に大溝を栗隈に掘」と記載されている。この栗隈大溝を現在の古川に比定する説もあるが、発掘調査等では確認されていない。古墳時代から飛鳥時代にかけての木津川流域の沖積地における開発行為を物語る伝承であろう。

城陽市域は、古代律令制のもとでは山背国久世郡や綴喜郡に属していた。

飛鳥～奈良時代の遺跡としては、久世廃寺、平川廃寺、正道官衙遺跡などがある。久世廃寺は7世紀に創建された寺院で、塔を東に、金堂を西に置く法起寺式伽藍配置である。塔や金堂に遅れて講堂が造営されたと考えられている。また、8世紀中頃に再整備が行われ、平城宮や恭仁宮と同じ軒瓦が供給されている。出土遺物には、金銅製誕生釈迦仏立像のほか、唐三彩や新羅製の緑釉陶器など、海外の製品が含まれており注目される。平川廃寺は8世紀に造営された寺院で、塔を西に、金堂を東に置く法隆寺式伽藍配置で、塔や金堂の基壇がよく保存されており、築地の痕跡などから寺域の広がりほぼ確認されている。特に塔跡は一辺10.5mに復元され、地方寺院としては最大級の規模を誇り、国分寺の七重塔にも匹敵するものと考えられている。塔跡や金堂跡の周辺から塑像片が出土している。

正道官衙遺跡は当初、寺院跡と考えられていたが、大型掘立柱建物群が複数検出され、山背国久世郡衙跡と推定されるに至った。これまで見つかった官衙遺構は大きく3時期に分かれる。Ⅰ期は総柱建物跡を主体に構成され、7世紀後半に位置づけられる。Ⅱ期は長舎風の建物を「コ」字形に配置したもので、7世紀末～8世紀初頭に位置づけられる。Ⅱ期の遺構は大寶律令以前の久世「評」に伴う官衙の可能性が指摘されている。Ⅲ期は四面廂付きの東西棟建物中心にその周囲に掘立柱建物が広がり、南辺と西辺には築地が設けられ、南辺には門も設ける。Ⅲ期は8世紀前半～9世紀前半に位置づけられる。また、正道官衙遺跡では、瓦類を始め金箔の残る埴仏や相輪・水煙の一部など、寺院に関わる遺物が出土しており、官衙遺構に近接した場所に寺院の存在が推定されている。このほか、久世郡など、木津川東岸には古代の官道である北陸道や東山道が想定されており、芝山遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての道路側溝と想定される遺構も検出されている。また近接して長舎風の建物跡を検出しており、文献資料等にはみられないが、駅家の可能性も指摘されている。

飛鳥・奈良時代になると、古墳時代までの竪穴建物主体の集落から、掘立柱建物主体の集落へと変化する、ただ、山城地域では他の畿内諸国にくらべて遅くまで竪穴建物が残ることが知られている。城陽市域でも、芝ヶ原遺跡では飛鳥時代後半、正道官衙遺跡や横道遺跡では奈良時代まで竪穴建物が残るようである。これらの遺跡では竪穴建物と掘立柱建物が併存していた可能性が高い。このほか、奈良時代の掘立柱建物の集落としては芝山遺跡などがある。

ところで、この時期、城陽市西部の平野部には、条里制による方形の区画の遺構が明瞭に依存する。条里とは、方一町(109m四方)を基本単位とする古代の農畜か雨声であるとともに土地表示制度でもある。縦横六町分の一区画を「里」、里の列を「条」、方一町の区画を「坪」と呼んである土地の区画を表現するものである。今回の下水主遺跡・水主神社東遺跡の調査でも、復元された城陽市域の条里を参照しながら調査を行ったところがある。

平安時代以降の遺跡は顕著なものが少ないが、文献資料との比較からいくつか注目すべき事実がわかる。まず、鎌倉時代になると調査地周辺は、賀茂別雷神社、石清水八幡宮、元興寺などの寺社領となって寺田荘、富野荘、水主荘などの荘園が整備された。このころから現在まで、富野や水主などの集落周辺や、寺田集落の西側にはこの地域に特有の島畑が形成される。土を盛り上げた部分で畑作を行う一方、島畑と島畑の間の凹地では水田を行っていたと考えられる。

室町時代の応仁・文明の乱の動乱期には南山城地域が主要な戦場の1つとなったことから、在地の土豪たちが、枇杷庄城、外野(富野)城、水主城などを築造して防備を固めていた。水主氏の勢力基盤であった水主城は、木津川に近い現在の水主集落一帯に築かれた平城であるが、文献資料から山城国一揆の拠点であるとともに、当時の南山城地域支配の要の城郭であったと考えられている。発掘調査では遺構は検出されていないため、城郭の構造は不明である。また、寺田環濠集落も応仁の乱ごろに防御を目的として形成されたものと考えられている。

江戸時代になると、水主村は綴喜郡に属し、天領として幕府の支配下に置かれた。調査地周辺では中世から現代にかけて、島畑を主体とする景観から水田を主体とする景観へと変化していたと考えられる。^(注5)

(筒井崇史)

3. 調査の経過

1) 調査に至る経緯

新名神高速道路の予定路線うち、京都府内では17.7kmが計画されている。このうち、京奈和自動車道と第二京阪道路の接続を目的として、先行して事業認可が下りた城陽JCT・IC～八幡京田辺JCT・IC(事業距離3.5km)については、平成20年度より発掘調査に着手している。

本書で報告する下水主遺跡・水主神社東遺跡は、新名神高速道路の城陽JCT・IC建設予定地に当たり、橋脚建設や盛土造成の行われる範囲を主な対象として、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成23年度に開始し、平成27年度まで継続して調査を実施した。発掘調査にかかる調査回数・調査地点・調査期間等については、第2図、付表1・2の通りである。調査期間が足掛け5か年に及んだため、整理作業は随時実施し、報告書についても、順次刊行していくこととした。本報告は、新名神高速道路整備事業の城陽JCT・ICの建設に関わる発掘調査報告書としては、『京都府遺跡調査報告集』第167冊、『同』第168冊『同』第173冊に続く、第4冊に当たる。なお、本報告書の刊行をもって、城陽JCT・ICの建設に伴う発掘調査事業はすべて終了する。

さて、平成26・27年度の調査は、城陽JCT・ICの建設に伴って実施したもので、おもに新名神高速道路の本線から北に建設が予定されている城陽IC出入り口までの道路建設予定地と、これまでに未着手であった地点が対象となった。調査の対象となった遺跡はこれまでと同じく、下水主遺跡と水主神社東遺跡の2遺跡である。下水主遺跡の調査は平成26年度が第6次調査、平成27年度が第9次調査に当たる。また、水主神社東遺跡の調査は平成26年度が第6次調査、平成27年度が第7次調査に当たる。また、平成27年度には新名神高速道路整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に並行して、一般国道24号城陽IC関連寺田地区改良事業に伴う調査が実施された(下水主遺跡第8次調査^(注6))。

なお、今回報告の対象となった調査区では、平成27年9月6日に実施した下水主遺跡第8次調査に伴う現地説明会と合わせて下水主遺跡第9次調査のH地区で検出した古墳時代前期の溝SD25の調査成果について公開した。当日は雨天であったが、114名の参加があった。

2) 調査の経過

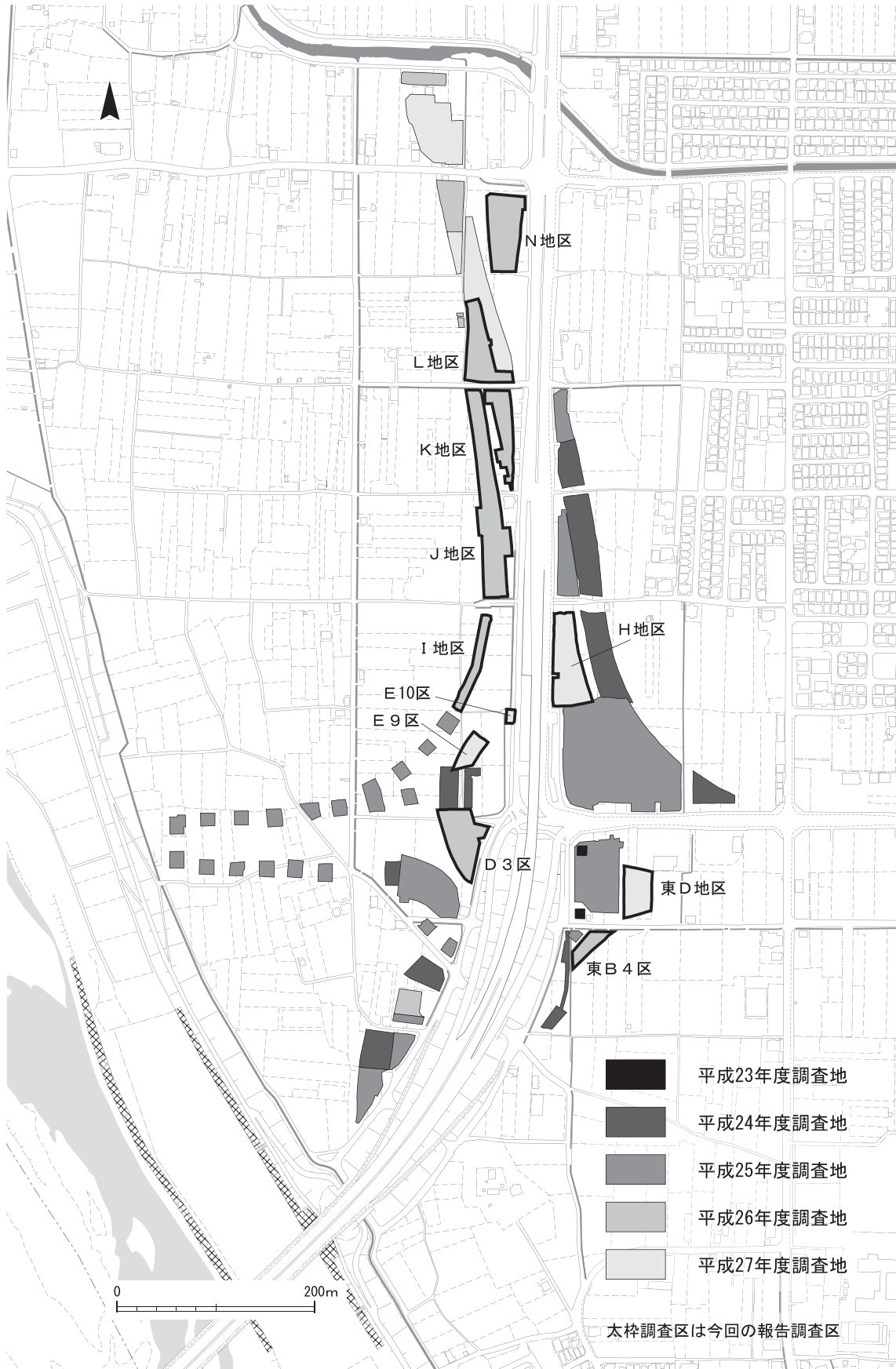
各年度ごとの調査の経過は以下の通りである。

(1) 平成26年度の調査経過

① 下水主遺跡第6次調査

平成26年度の調査は、前年度からの継続調査となったA～C地区の調査から開始した。これらの調査区は別に報告書をまとめた^(注7)。A～C地区を除く各調査区の調査経過は以下の通りである。

I地区の調査経過 調査は4月21日に開始した。まず、重機で表土や堆積層の除去を行った後、人力による精査を実施した。その結果、島畑5基、溝状遺構6条などを検出した。また、調査区の一部を断ち割って下層遺構の有無を確認したが、下層遺構は確認されなかった。雨天等により延期していた空中写真撮影を7月15日に行い、同日、調査を終了した。



第2図 調査年度別調査区配置図(1/6,000)

付表1 下水主遺跡調査回数一覧表

調査年度	回数	調査地区	調査期間	調査面積	調査機関	報告書
平成24年度	第1次	B地区(B1区)・C地区(C1区)・D地区(D1区)・E地区(E1・E2区)	2012.5.21～2013.3.8	3,360㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)本報告書
	第2次	24号 A・B・C地区	2012.9.24～2013.3.8	5,570㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第163冊(2015)
平成25年度	第3次	24号 A北地区	2013.4.26～2013.9.3	500㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第163冊(2015)
	第4次	A地区・B地区(B1・B2区)・C地区(C3区)・D地区(D2・D4～D6区)・E地区(E3～E8区)・F地区(F1～F12区)・G地区	2013.4.22～2014.2.27	10,393㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016) 『京都府遺跡調査報告集』第168冊(2017)本報告書
	第5次	-	2013.10.15～2013.10.22	530㎡	京都府教育委員会	『京都府埋蔵文化財調査報告書』平成25年度(2014)
平成26年度	第6次	A地区・B地区(B1・B2区)・C地区(C2区)・D地区(D3区)・I地区・J地区・K地区・L地区・M地区・N地区	2014.4.9～2014.3.6	17,110㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第173冊(2018)本報告書
	第7次	-	2014.9.19、10.8、12.8～12.10、12.12	636㎡	京都府教育委員会	『京都府埋蔵文化財調査報告書』平成26年度(2015)
平成27年度	第8次	L地区(L2区)・M地区(M2区)・O地区	2015.4.24～2015.10.9	6,000㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第170冊(2017)
	第9次	L地区(L3区)・E地区(E9・E10区)・H地区	2015.5.18～2016.2.3	3,260㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	本報告書

付表2 水主神社東遺跡調査回数一覧表

調査年度	回数	調査地区	調査期間	調査面積	調査機関	報告書
平成23年度	第1次	A地区(A1・A2区)	2012.2.15～2012.3.14	200㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
平成24年度	第2次	B地区(B1・B2区)	2012.5.23～2012.9.27	630㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
	第3次	24号 E地区	2012.9.24～2013.3.8	800㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第163冊(2015)
平成25年度	第4次	24号 D地区	2013.4.26～2013.9.3	2,800㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第163冊(2015)
	第5次	A地区(A3区)・B地区(B3区)・C地区	2013.5.14～2014.1.8	11,375㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
平成26年度	第6次	B地区(B4区)	2014.11.19～2015.2.27	590㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	本報告書
平成27年度	第7次	D地区	2015.11.24～2016.2.5	1,280㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	本報告書

J地区の調査経過 J地区は、排土置き場を確保するため、反転調査として実施した。南半部をJ1区、北半部をJ2区とし、J1区から調査に着手した。調査は6月17日に開始した。まず、重機で表土や堆積層の除去を行った後、人力による精査を実施した。その結果、調査区の大半を占める島畑1基などを検出した。J1区については、8月中旬から後半にかけて、台風の影響による調査区の水没とその復旧に日時を要したが、9月9日に空中写真撮影を行った。その後、断続的に図面等の補足作業を行い、9月25日にJ1区の調査を終了した。この間、9月18日からJ2区の調査に着手した。まず、重機による表土掘削を行い、その排土でJ1区を埋め戻しを行った。その後、人力による精査を行ったところ、下層遺構と遺物の出土を確認したため、当初の予定を変更し、11月末まで下層遺構の調査を実施することとなった。合わせて道路部分以外の盛土部分についても下層遺構の延長部に当たる地点の重機掘削を行い、調査区を拡張した。その結果、新たに島畑1基を確認するとともに、下層遺構の延長部分を検出した。下層遺構は溝1条を検出した。J2区については雨天等の影響により延期していた空中写真撮影を12月3日に行い、調査は12月5日に終了した。

K地区の調査経過 K地区は、2か所の調査区に分かれるが、調査と並行して一般国道24号の付け替え工事が行われることになったため、まず西側の調査区(K1区)の調査から着手した。調査は4月23日に開始した。まず、重機で表土や堆積層の除去を行った後、人力による精査を実施した。その結果、島畑6基、溝状遺構5条などを検出した。調査がおおむね終了した7月25日に空中写真撮影を行い、その後、下層遺構の可能性のある地点の補足調査を実施した。調査は8月5日に終了した。その後、東側の調査区(K2区)の調査を8月6日に開始した。K1区同様、まず、重機で表土や堆積層の除去を行った後、人力による精査を実施した。なお、K2区の掘削土でK1区の埋め戻しを行った。調査の結果、島畑6基(K1区と同一の島畑4基を含む)、溝状遺構6条(K1区と同一の溝状遺構2条を含む)を検出した。また、島畑のほぼ上面で下層遺構として溝1条と焼土3か所を検出した。調査がおおむね終了した10月10日に空中写真撮影を行った。その後、図面等の補足作業を行い、調査は10月30日に終了した。

L地区の調査経過 L地区は当初、長辺約108m、北辺約28m、南辺約52mの矩形の調査区予定していたが、北東側1,600㎡の調査を国土交通省の負担で実施することになったため、急遽調査区を分割することになった(L1～L3区)。北東側の調査区(L2区)については、一般国道24号城陽IC関連寺田地区改良事業として、平成27年度に調査を行い、すでに報告済である。^(注8)平成26年度はL1区を対象として、調査は4月25日に開始した。まず、重機で表土や堆積層の除去を行った後、人力による精査を実施した。その結果、島畑4基、溝状遺構3条などを検出した。また、島畑の上面で古墳時代初頭の遺構として溝1条、土坑1基、不明遺構5か所などを検出した。上層遺構ならびに中層遺構の調査がおおむね終了した8月27日に空中写真撮影を行った。これらの調査と並行して、島畑の断ち割りを行ったところ、下層から縄文土器が出土した。このため、遺構面の有無やその広がりを確認するための断ち割り調査を行った。その結果、下層遺構が広がると思われる調査区の南半部を対象に重機による堆積層の掘削を9月4日から開始した。その結

果、焼土1か所、溝1条、土器溜まり1か所などを検出した。これらの遺構からは多数の縄文土器片が出土した。下層遺構の調査を終えると、最下層に該当する遺物を含む流路状遺構の検出に向けて、重機による掘削を10月9日に開始した。最下層遺構として流路状遺構1条を確認し、多数の縄文土器や櫛の未成品、自然木などが出土した。これらの遺物の取上げや全景写真撮影などを行い、調査は10月30日に終了した。なお、L3区の調査は平成27年度に実施した。

N地区の調査経過 N地区は、調査前に工事用流用土が仮置きされていたため、調査可能な範囲を対象として、「L」字状の調査区(N1区)を設定し調査に着手した。調査はL地区と同じ4月25日に開始した。まず、重機で表土や堆積層の除去を行った後、人力による精査を実施した。その結果、上層遺構として鳥畑4基、溝状遺構3条などを検出した。また、鳥畑の上面などで、下層遺構として弥生時代の溝1条、土坑3基などを検出した。これらの遺構の調査がおおむね終了した7月25日に空中写真撮影を行った。その後、断続的に遺構図の作成や遺物の取上げを行い、8月5日にN1区の調査を終了した。N1区の調査の結果、工事用流用土の仮置き部分についても調査を行う必要が生じたことから、西日本高速道路株式会社による流用土の撤去を待って、8月21日からN2区の調査を開始した。まず、重機で表土や堆積層の除去を行った後、人力による精査を実施した。その結果、N1区の調査で確認した鳥畑や溝状遺構の延長部を検出した。また、下層遺構として弥生時代の溝1条、土坑8基以上などを検出した。これらの遺構の調査がおおむね終了した12月3日に空中写真撮影を行った。その後、図面の補足や遺構の写真撮影などを行い、調査は12月5日に終了した。

D3区の調査経過 D3区は周囲での工事が進んでいる地点が対象となったため、調査直前の状況としては工事に伴う盛土や地盤改良等が行われていた。調査は11月4日に開始した。調査にあたっては、工事に伴う盛土などを重機で除去した後に、本来の表土や堆積層の除去を行い、さらにその後、人力による精査を実施した。その結果、鳥畑6基、溝状遺構6条などを検出した。人力による精査を進めると、鳥畑の上面や溝状遺構の底で土色の変化が認められたため、下層遺構と判断した。調査の結果、古墳時代初頭の溝であることが明らかになった。上層遺構の調査がおおむね終了した1月21日と、下層遺構の調査がおおむね終了した2月20日に、それぞれ空中写真撮影を実施した。下層遺構の空中写真撮影後は図面の補足や遺物の取上げなどを行い、調査は2月26日に終了した。

②水主神社東遺跡第6次調査

B4区の調査経過 平成24・25年度に調査を実施したB1区とB3区の間に位置する調査区である。調査は12月15日に開始した。まず、重機で表土や堆積層の除去を行った後、人力による精査を実施した。その結果、鳥畑2基と溝状遺構1条を検出した。これらを対象として1月25日に空中写真撮影を実施した。また、調査区の断ち割りを行ったところ、下層に谷状の落ち込みが存在することを確認するとともに、土器の細片が出土する溝状の遺構を確認した。このため、再度重機を投入して鳥畑を構成する堆積土を除去し、下層遺構の調査を行った。その結果、弥生時代の溝1条と縄文時代晩期の土器片が出土する谷状の地形を確認した。これらの遺物の取上げや

記録等を行い、2月26日に調査を終了した。

(2)平成27年度調査の経過

①下水主遺跡第9次調査

H地区の調査経過 H地区の調査にあたっては、排土置き場を確保から反転調査とし、北側の調査区(H1区)から着手した。調査は5月18日に開始した。まず、重機で表土や堆積層の除去を行った後、人力による精査を実施した。その結果、鳥畑4基、溝状遺構4条などを検出した。また、調査区の北端付近の溝状遺構の底面に土色の変化が認められたため、一部を断ち割ったところ幅4m前後、深さ1m以上の溝の存在を確認した。出土した土器片から弥生時代終末期の溝と考えられたため、この溝(SD25)を下層遺構と判断した。上層遺構の調査がおおむね終了した8月6日に空中写真撮影を行い、その後、下層遺構の調査に着手した。下層遺構としては上記SD25のほか、縄文土器が出土する落ち込み(SX37・39)の調査を実施した。また、8月10日からH1区の一部を埋め戻しつつ、南側の調査区(H2区)の重機による掘削を8月24日に開始した。重機で表土や堆積層の除去を行った後、人力による精査を実施した。その結果、鳥畑3基、溝状遺構3条(うち1条はH1区と同一のもの)などを検出した。この間、SX37については8月29日作業を完了し、H2区の排土置き場とした。また、H2区の調査と並行してSD25の調査を実施した。SD25は遺構の掘削作業、遺物の検出作業を終え、9月29日と10月2日に全景写真撮影を行った。遺物の取り上げを行い、完掘状況の記録作業を終えたと考えたため、SD25を埋め戻す作業を開始したところ、SD25の東端で方形組合せ木製品が出土した。方形組合せ木製品については、記録作業を行うとともに、その取り上げ方法を検討したが、出土地点の状況や調査期間等の関係上、現地で記録をとりながら解体して取上げることにした。方形組合せ木製品は10月19日に取上げ、その後補足調査を行って、SD25の埋め戻し作業を再開し、10月22日にSD25を含むH1区の埋め戻しが完了した。なお、H2区の重機掘削は、H1区で検出したSD25やSX37・39の調査の進捗に伴い、断続的に実施したため、10月26日に完了した。H2区で検出した遺構の調査がおおむね終了した11月10日に空中写真撮影を行った。その後、図面の補足や遺構の写真撮影、下層遺構の確認作業などを行いつつ、調査区の埋め戻しを行い、11月19日に調査を終了した。

L3区の調査経過 調査は5月18日に開始した。まず、重機で表土や堆積層の除去を行った後、人力による精査を実施した。その結果、溝状遺構1条を検出した。この溝状遺構は同時に実施された下水主遺跡第8次調査のL2区で検出された溝状遺構SD46の延長部分に当たる。平面ならびに土層断面の記録作業を行った後、若干の中断期間を挟んで、6月25日には全景写真の撮影を行い、6月29日に調査を終了した。

E9・E10区の調査経過 調査は11月5日にE9区から開始した。まず、重機で表土や堆積層の除去を行った後、人力による精査を実施した。その結果、鳥畑1基と溝状遺構2条を検出した。これらの全景写真は12月8日に撮影した。また、12月8日からE10区の重機掘削を開始した。しかし、対象地内にコンクリート擁壁が存在したため、これを除去して調査を行うことになったため、人力による調査開始は平成28年1月7日に開始した。一方、E9区では、鳥畑部分の掘下

げを行い、溝1条等を検出した。平成28年1月19日にE9区・E10区の全景写真の撮影を行った。その後、E9区については重機を搬入してさらに下層遺構の有無を確認したところ、溝2条や土坑などを確認したため、これらの記録作業を行った。これらの全景写真を1月26日に撮影し、さらに下層遺構の有無を確認する作業を行ったのち、埋め戻しを行い、2月4日に調査を終了した。

②水主神社東遺跡第7次調査

D地区の調査経過 D地区は、新名神高速道路整備事業に伴う工事が始まる以前に、元の水田面から2mほどの盛土が行われていたため、西日本高速道路株式会社の協力により、水田面の直上まで盛土の除去を行っていただいた後に調査を開始した。調査は11月24日に開始した。まず、重機で表土や堆積層の除去を行った後、人力による精査を実施した。その結果、島畑2基、溝状遺構2条を検出した。これらの遺構の調査がおおむね終了した平成30年1月8日に空中写真撮影を行った。その後、下層遺構面に向けて島畑部分の掘り下げを人力で行い、精査を実施した。その結果、中層遺構として溝1条・土坑状遺構5基などを検出した。これらの遺構の調査を終えると、1月22日に全景写真の撮影を行った。その後、重機を搬入にしてかさらに島畑を掘り下げ、精査を実施した。その結果、溝1条を検出した。これらの調査がおおむね終了した2月4日に空中写真撮影を行い、若干の補足作業を行って、2月5日で調査を終了した。なお、この調査区については埋め戻し作業は実施しなかった。

3) 報告書作成作業について

下水主遺跡・水主神社東遺跡の報告書の作成にあたっては、調査の終えた調査区から順次、整理作業に着手した。整理作業は、まず、出土遺物の台帳登録と洗浄を行った。洗浄の終わった遺物は、注記や接合を行った。今回報告する調査区では、下水主遺跡と水主神社東遺跡合わせて、整理箱にして103箱の遺物が出土した。これらの遺物には、縄文時代晩期から平安時代までの土器類のほか、木製品や石器類などがある。注記等が終了すると、報告書に掲載すべき遺物を選別し、実測や拓本を行った。

報告に伴う遺構図は、現地で作成した実測図をもとに、原則、調査区の遺構配置図は縮尺1/500、島畑平面図は縮尺1/200、土層断面図は縮尺1/100、溝は縮尺1/100で、土坑・柱穴等は縮尺1/40・1/20で、また、遺物出土状況図は縮尺1/20で、それぞれ作成した。

本報告書に関する基本的な整理作業等は平成28年度までに終え、平成29年度は、遺物実測図のトレースや遺物の写真撮影のほか、報告書の本文執筆や遺物観察表の作成、並びに報告書の編集作業を行った。実測した遺物の一部については石膏による復元を実施した。復元した遺物や破片資料については、写真撮影を行い、遺物写真図版として掲載した。なお、最終的に本報告に掲載した遺物は546点である。

本報告は、現地調査を担当した岡崎研一・筒井崇史・山崎美輪(現京田辺市教育委員会)・渡邊拓也(現宇治市役所)、桐井理揮(現京都府教育委員会)が執筆し、全体の文章の調整等を筒井が行った。

(筒井崇史)

付表 3 下水主遺跡調査地区別一覧表(新名神高速道路整備事業分)

調査年度	調査回数	調査地区	調査区	調査期間	調査面積	報告書
平成 24 年度	第 1 次	B 地区	B 1 区	2012.5.23 ~ 2013.3.8	1,070㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 173 冊 (2018)
		C 地区	C 1 区	2012.10.9 ~ 2013.1.30	700㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 173 冊 (2018)
		D 地区	D 1 区	2012.11.28 ~ 2013.3.8	450㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 167 冊 (2016)
		E 地区	E 1 区	2012.12.10 ~ 2013.3.8	770㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 167 冊 (2016)
			E 2 区	2012.12.18 ~ 2013.3.8	370㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 167 冊 (2016)
平成 25 年度	第 4 次	A 地区		2013.10.4 ~ 2014.2.27	940㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 173 冊 (2018)
		B 地区	B 1 区	2013.11.1 ~ 2014.2.27	330㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 173 冊 (2018)
			B 2 区	2013.11.25 ~ 2014.2.27	580㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 173 冊 (2018)
		C 地区	C 2 区	2014.1.20 ~ 2014.2.27	200㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 173 冊 (2018)
		D 地区	D 2・D 4 区	2013.5.7 ~ 2013.9.20	2,617㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 167 冊 (2016)
			D 5 区	2013.9.9 ~ 2013.12.6 (中断期間あり)	150㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 167 冊 (2016)
			D 6 区	2013.9.9 ~ 2013.10.22	180㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 167 冊 (2016)
		E 地区	E 3・E 4 区	2013.7.17 ~ 2013.10.4	470㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 167 冊 (2016)
			E 5 区	2013.8.6 ~ 2013.10.2	220㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 167 冊 (2016)
			E 6 区	2013.8.6 ~ 2013.10.4	210㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 167 冊 (2016)
			E 7 区	2013.8.23 ~ 2013.10.23	160㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 167 冊 (2016)
			E 8 区	2013.8.23 ~ 2013.10.23	290㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 167 冊 (2016)
		F 地区	F 1 区	2013.5.21 ~ 2013.7.5	260㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 168 冊 (2017)
			F 2 区	2013.6.13 ~ 2013.8.23	255㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 168 冊 (2017)
			F 3 区	2013.6.11 ~ 2013.8.29	230㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 168 冊 (2017)
			F 4 区	2013.4.22 ~ 2013.6.12	218㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 168 冊 (2017)
			F 5 区	2013.6.6 ~ 2013.7.22	220㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 168 冊 (2017)
			F 6 区	2013.4.22 ~ 2013.7.22	265㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 168 冊 (2017)
			F 7 区	2013.4.22 ~ 2013.8.27	190㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 168 冊 (2017)
			F 8 区	2013.4.22 ~ 2013.7.8	220㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 168 冊 (2017)
			F 9 区	2013.5.9 ~ 2013.7.18	198㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 168 冊 (2017)
			F 10 区	2013.4.22 ~ 2013.7.18	185㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 168 冊 (2017)
			F 11 区	2013.5.7 ~ 2013.7.8	240㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 168 冊 (2017)
F 12 区	2013.5.1 ~ 2013.8.30		275㎡	『京都府遺跡調査報告集』第 168 冊 (2017)		

調査年度	調査回数	調査地区	調査区	調査期間	調査面積	報告書
平成 25 年度	第 4 次	G 地区		2013.9.5 ~ 2013.11.14	1,290㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 167 冊 (2016)
平成 26 年度	第 6 次	A 地区		2014.4.9 ~ 2014.6.13	600㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 173 冊 (2018)
		B 地区	B 1・B 2 区	2014.4.9 ~ 2014.6.13	400㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 173 冊 (2018)
		C 地区	C 3 区	2014.4.22 ~ 2014.5.30	600㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 173 冊 (2018)
		D 地区	D 3 区	2014.11.5 ~ 2015.2.27	2,050㎡	本報告書
		I 地区		2014.4.21 ~ 2014.7.15	900㎡	本報告書
		J 地区		2014.6.18 ~ 2014.12.5	2,590㎡	本報告書
		K 地区	K 1 区	2014.4.23 ~ 2014.8.5	1,660㎡	本報告書
			K 2 区	2014.8.6 ~ 2014.10.30	1,460㎡	本報告書
		L 地区	L 1 区	2014.4.25 ~ 2014.10.30	2,620㎡	本報告書
N 地区		2014.4.25 ~ 2014.12.5	2,420㎡	本報告書		
平成 27 年度	第 7 次	E 地区	E 9 区	2015.11.5 ~ 2016.2.3	365㎡	本報告書
			E 10 区	2015.12.8 ~ 2016.2.3	115㎡	本報告書
		L 地区	L 3 区	2015.5.18 ~ 2015.6.29	110㎡	本報告書
		H 地区	H 1 区	2015.5.18 ~ 2015.10.19	1,500㎡	本報告書
			H 2 区	2015.8.24 ~ 2015.11.19	1,170㎡	本報告書

付表 4 水主神社東遺跡調査地区別一覧表(新名神高速道路整備事業分)

調査年度	調査回数	調査地区	調査区	調査期間	調査面積	報告書
平成 23 年度	第 1 次	A 地区	A 1 区	2012.2.15 ~ 2012.3.15	100㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 167 冊 (2016)
			A 2 区	2012.2.15 ~ 2012.3.15	100㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 167 冊 (2016)
平成 24 年度	第 2 次	B 地区	B 1 区	2012.5.23 ~ 2012.8.7	200㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 167 冊 (2016)
			B 2 区	2012.6.4 ~ 2012.9.27	430㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 167 冊 (2016)
平成 25 年度	第 5 次	A 地区	A 3 区	2013.10.1 ~ 2014.1.8	3,100㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 167 冊 (2016)
		B 地区	B 3 区	2013.11.19 ~ 2013.12.17	100㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 167 冊 (2016)
		C 地区	C 1・C 2 区	2013.5.14 ~ 2013.12.12	8,175㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 167 冊 (2016)
平成 26 年度	第 6 次	B 地区	B 4 区	2014.11.19 ~ 2015.2.27	590㎡	本報告書
平成 27 年度	第 7 次	D 地区		2015.11.24 ~ 2016.2.5	1,280㎡	本報告書

4. 調査の方法

1) 調査の方法

調査にあたっては、A地区、B地区などの調査地区を設定し、その地区内に実際の調査を行った調査区を設定した(2項参照)。また、調査の対象となる範囲には、国土座標にもとづいて地区割を設定した(3項参照)。

調査開始にあたっては、まず、調査区の設定および基準点の設置作業を行った。その後、遺構面直上まで重機で表土を除去し、さらに人力による遺物包含層の掘削、遺構面の精査作業を行って遺構の検出に努めた。検出した遺構は、その位置を縮尺1/100の平面図に記録しながら、順次、掘削作業を行った。遺構の掘削を終えると、必要に応じて縮尺1/10ないし1/20の平面図や断面図、あるいは縮尺1/10ないし1/5の遺物出土状況図などの記録図面の作成を行った。並行して遺構や土層断面などの記録写真の撮影を行った。遺構面全体の調査を終えると、調査区ごとに全景写真を撮影した。さらに必要に応じて空中写真とそれによる図化作業を実施した。

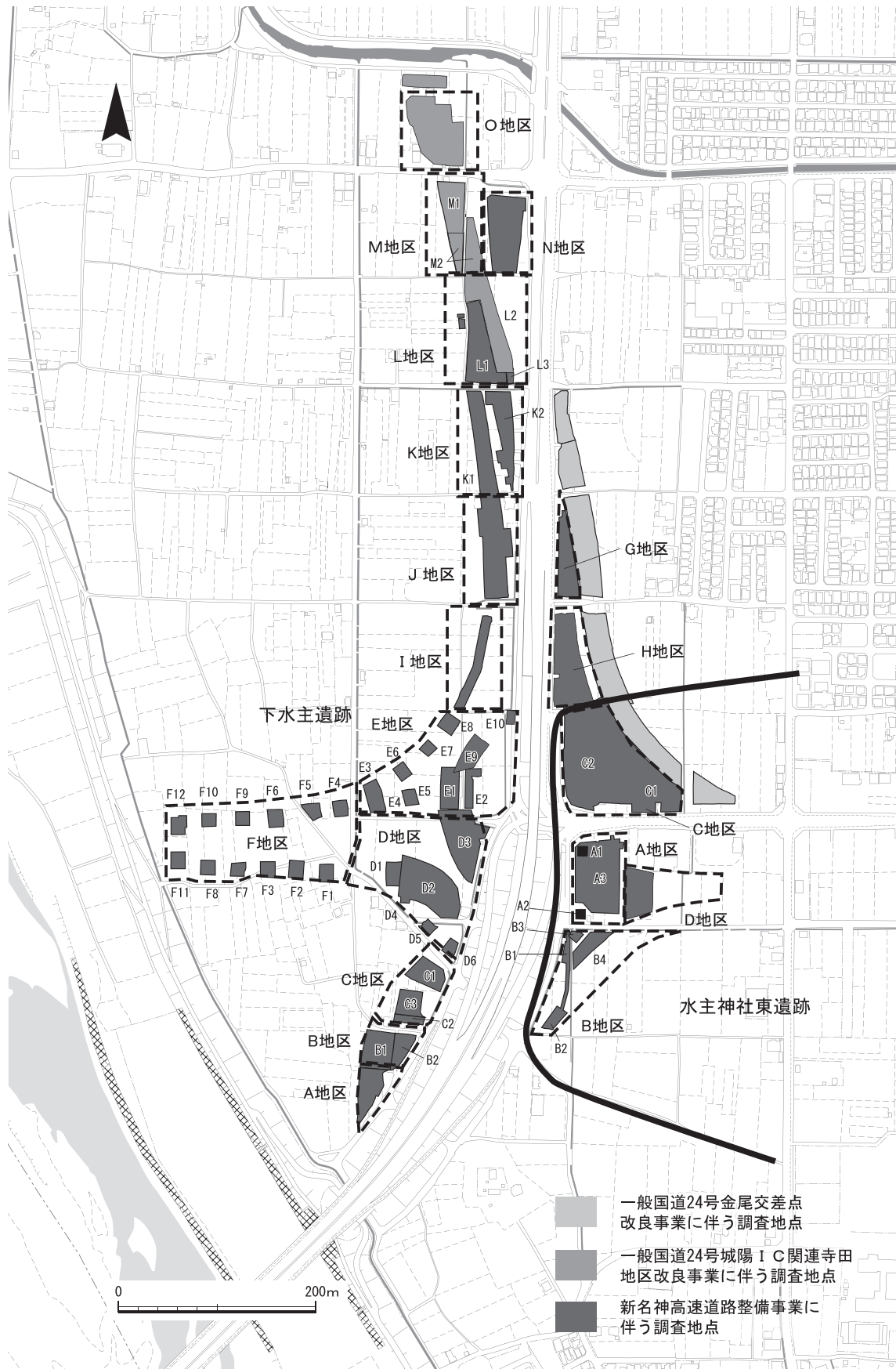
また、下層遺構を確認した場合、上層遺構面から下層遺構面まで人力もしくは重機によって除去し、上記の作業を繰り返した。

検出した遺構には原則として各調査区ごとに1番から通し番号をつけ、遺構の性格を示す略号を付与した。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。使用した略号は、土坑：SK、溝：SD、柱穴・ピット：SP、不明遺構：SX、氾濫流路NR、谷状地形：NVである。本報告で使用した遺構番号は原則として調査時のものであるが、調査時に番号のなかった遺構については、本報告作成時に新たに付与した。ただし、島畑の遺構番号については、調査時の遺構番号とは別に一般国道24号金尾交差点改良事業^(※9)の調査報告に始まる島畑の通し番号を付与した。なお、島畑番号の初出時に調査時の遺構番号も合わせて示した。

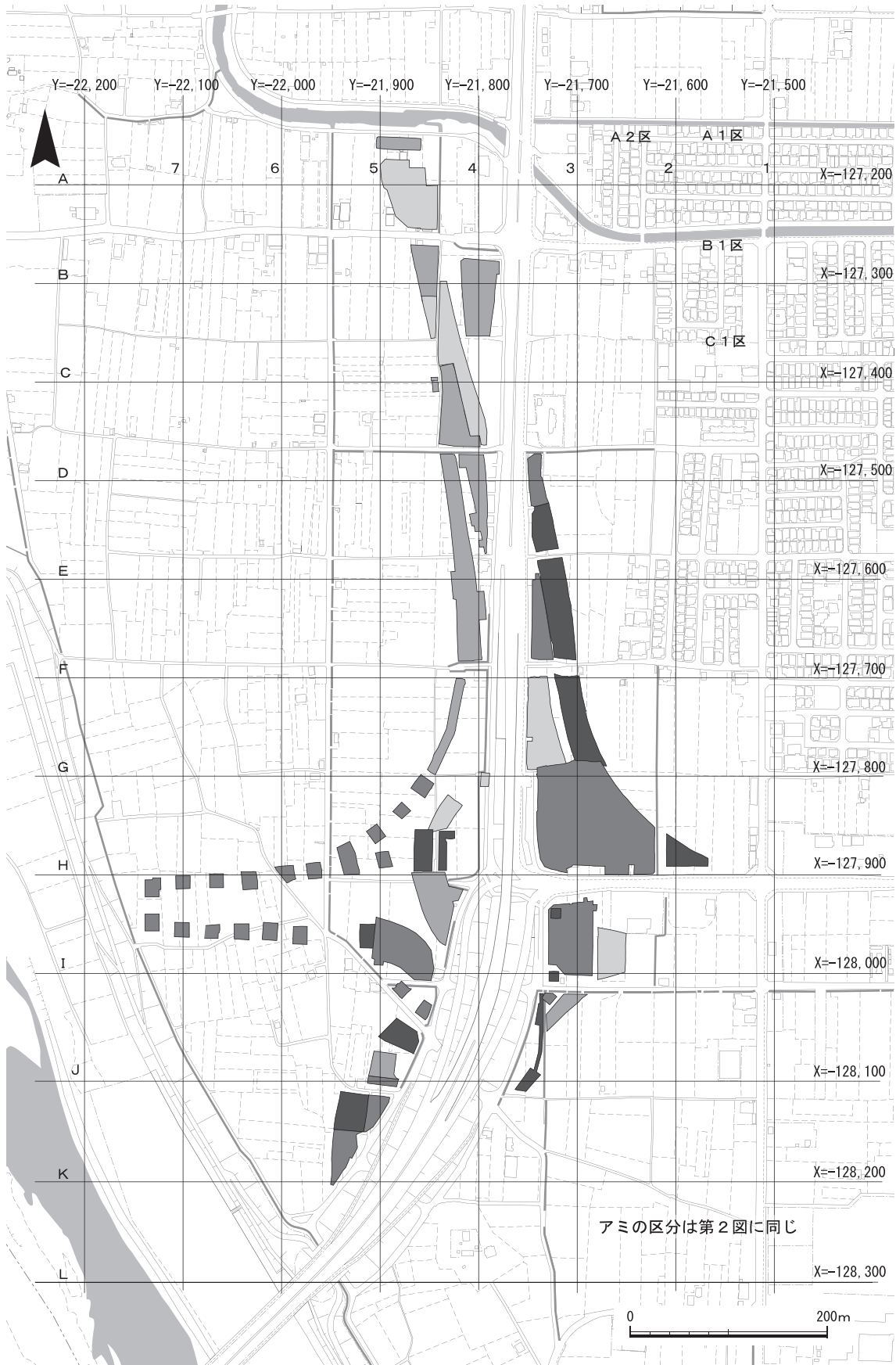
2) 調査地区の設定

調査対象地が広大であることから、調査対象地をいくつかの調査地区に分割して調査を進めることにした。この調査地区名は、平成24年度調査で一部使用をはじめたが、平成25年度の調査に際して、本格的に設定した。この「調査地区」は現行の市道等で区分したもので、面的な空間をさし、A地区、B地区、……、L地区、……というように、アルファベットで呼ぶこととした。この中に実際に調査を実施した「調査区」を設定し、複数の調査区がある場合はK1区、K2区と、アルファベットと数字の組み合わせで表すこととした。したがって、「○地区」と「○○区」は、異なるものをさす区分名称である。ただし、調査区が1つしかない場合は、「○地区」という名称を使用した(第3図)。

調査区の設定は、西日本高速道路株式会社の工事計画にしたがい、橋脚部分については、橋脚本体と施工に伴い掘削される部分を、また、盛土部分については、実際の道路幅の範囲に限って発掘調査を行い、下層遺構等が検出された場合に必要に応じて盛土造成範囲まで調査区を拡張することとした。



第3図 調査区配置図(1/6,000)



第4図 下水主遺跡・水主神社東遺跡全体地区割図(1/6,000)

なお、平成26年度以降は、平成25・26年度の京都府教育委員会の試掘調査等の結果、下水主遺跡の範囲が北に広がったことから、新たな調査地区を追加した。

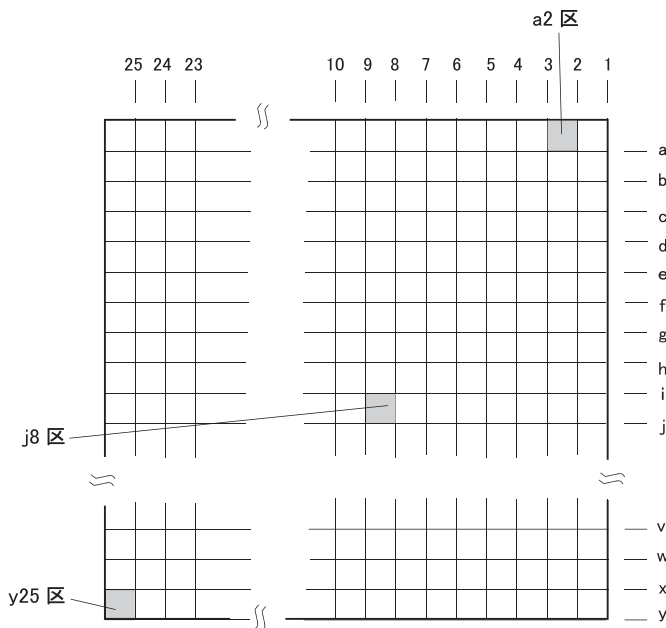
調査区ごとの調査期間や調査面積については、付表3・4にまとめた。

3) 地区割の設定

城陽JCT・ICの建設に伴う発掘調査では、上記の調査地区とは別に、検出遺構や出土遺物の位置を記録する目的で、対象地全体を覆う地区割を国土座標(世界測地系)にもとづいて設定した。まず、対象地全体に100m四方の大区画を設定した(第4図)。大区画の基準線は南北・東西とも国土座標系に一致させ、 $X=-127,200$ 、 $Y=-21,500$ を起点とし、東西方向は東から1、2、3、……とし、南北方向は北からA、B、Cとし、両者の交点をA1、B2、……、H4、などとした。大区画の地区名は100m方眼の南東隅の交点の名称で表すものとした。この大区画の一边を25等分して4m四方の方眼を設定し、小区画とした(第5図)。小区画の基準線も国土座標系と一致させ、東西方向は東から1、2、3、……、25とし、南北方向は北からa、b、c、……、yとし、両者の交点をa1、b1、c3、y25などとした。小区画の地区名も4m方眼の南東隅の交点の名称で表すものとした。Y軸座標の下2桁で表すと、1ラインは00m、25ラインは96mに当たる。また、X軸座標の下2桁で表すと、aラインは04m、yラインは00mに当たる。国土座標系にもとづく地区名は「G4-r9区」のように表記する。

なお、城陽JCT・ICの建設に伴う発掘調査では、多数の調査区を設けているが、100mを越える調査区はほとんどないため、大区画の地区割名を調査時に表記していないことが多い

報告にあたっては、鳥畑をはじめ各遺構が検出された地区名を明記したが、遺構の規模が大きいものについては、一部の地区名に代表させて表記した。また、個々の遺構図には小地区割の基準となるライン名を表記した。



第5図 小地区割概念図

4) 基本的な層序

ここでは、平成23年度から平成27年度までの調査成果をふまえて、調査対象地全体の基本的な層序について報告する。また、個々の調査区の層序については、各調査区の項で記述する。

まず、調査前の状況を概観しておく。調査前の土地利用は基本的に、水田、もしくは水田面よりも1m前後高くなった高まりを利用した畑地が広がっていた。後者が、いわゆる「鳥

畑」である。城陽市に所在する島畑では、江戸時代から大正時代にかけて広範囲に綿や果樹栽培などが行われていた。寺田地区の国道24号(大久保バイパス)よりも西側には、現在も寺田イモやイチジクなどの栽培を行う島畑が多く存在している。また、文化庁の『農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究』(平成15年度)では、「畑地景観」の種別で、城陽市所在の「木津川流域の島畑」が掲げられている。

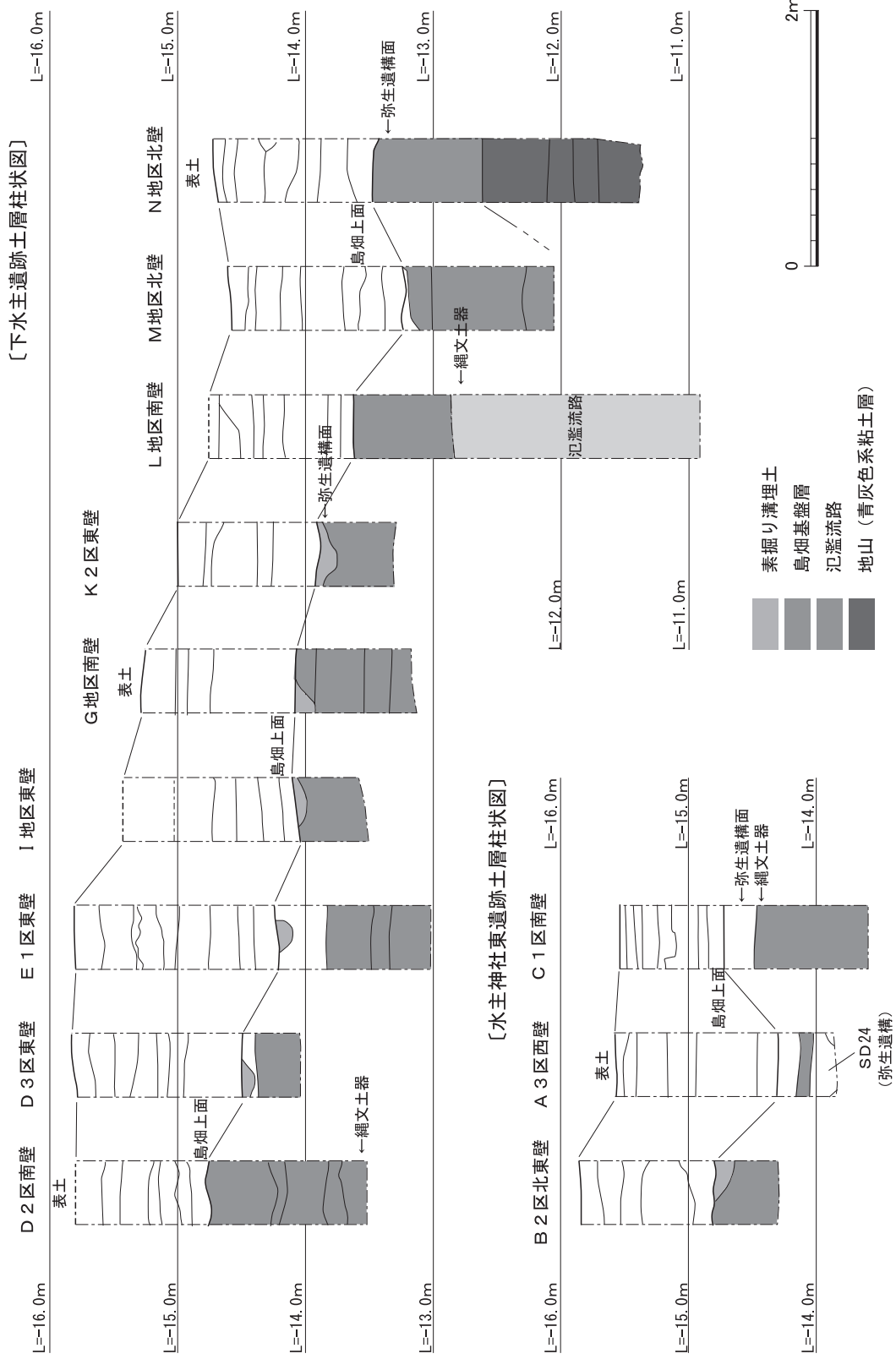
調査対象地周辺には、国道24号(大久保バイパス)や京奈和自動車道城陽インターチェンジなどがあり、これらと並行もしくは交差するように新名神高速道路ならびに城陽JCT・ICが建設されることになった。

次に現在の水田面の標高に付いて確認しておきたい。南北方向に見て行くと、下水主遺跡O地区付近で15.0m、同L地区付近で14.6m、同H地区付近で15.4m、同D地区付近で15.7m、同B地区付近で16.0mである。一方、東西方向に見て行くと、水主神社東遺跡C地区付近で15.6m、同A地区付近で15.6m、下水主遺跡D地区付近で15.7m、同F地区西端で15.6mである。現水田面の標高からみると、南北方向では、下水主遺跡L地区付近が最も低く、この付近から北と南に向かって徐々に高くなる。そして、木津川に最も近い下水主遺跡B地区付近が最も高い。一方、東西方向では、あまり大きな変化が見られず、おおむね平坦である。何れにしても下水主遺跡B地区付近がもともと高くなることが指摘できる。

次に第6図に示した柱状図をもとに調査対象地の土層の状況について概観する。おおむね現水田に伴う厚さ10~20cmほどの耕作土や床土が認められる。この下に淡黄色砂層・浅黄色砂層・青灰色砂質土などの砂層を主体とする堆積層がある。これらは調査地点によって厚さが異なる(20~80cm)ほか、砂層が確認されなかった調査地点もある。この砂層は木津川の氾濫等によるものと推定されるが、砂層の堆積した時期や回数などの詳細は不明である。この下に青灰色粘質土・灰色シルト・緑灰色シルトなどのシルトないし粘質土が堆積する。これらは島畑の溝状遺構に堆積したもので、最終的には島畑そのものの上面にまで達していることが多い。これらを除去すると島畑が検出される。

島畑は土層断面の観察によると、中世前半(13世紀前後)に形成され、おおむね同一地点で、溝の堆積土を掘削し、それを島畑の上部に盛り上げることを繰り返していたことが明らかになっている。島畑は、中世に形成された後、近世のある段階まで継続して営まれたようである。その後、島畑の周囲に広がる溝状遺構が、洪水等に伴う砂層やシルト質系の堆積土によって埋没すると、島畑の周囲が水田に変化していったと考えられる。

初期の島畑の多くは、それ以前から存在する比較的安定した地層を削り込んで溝状遺構を形成し、いわば安定した地層を掘り残して島畑を形成している。島畑の基盤層は灰黄色シルト混じり細砂・暗灰黄色粘質土・オリーブ灰色シルトなどの粘質土やシルトが主体となる。最も初期の島畑上面の標高は、水主遺跡O地区付近で14.0m、同L地区付近で13.6m、同H地区付近で14.1m、同F地区西端で14.5m、同D地区付近で14.5m、同B地区付近で14.7mである。一方、水主神社東遺跡C地区付近で14.4m、同A地区付近で14.4m、同B地区付近で14.8mである。したがって、島



第6図 調査地基本層序柱状図(1/50)

畑の上面の標高は、おおむね現水田面の標高に対応した高低差を読み取ることができる。このことは、島畑形成当時の小規模な地形の起伏が現在の水田面の形成に、多少なりとも影響を与えていることを示しているといえる。

ところで、島畑は安定した地層を掘り残して形成されるため、島畑の上面、もしくは島畑の上部を10～30cm掘り下げることによって下層の遺構が検出される場合がある。ここで検出される遺構の多くは弥生時代から古代にかけてのものである。また、溝状遺構の底で、こうした遺構や遺物包含層が確認されることはあまり多くないが、A地区の調査では多数の柱穴を溝状遺構の底で検出した。これに対して下水主遺跡L地区付近では、島畑を完全に除去した下層で、縄文時代の旧地形を検出した。

最後に、先にもふれたが、基盤層は灰黄色シルト混じり細砂・暗灰黄色粘質土・オリーブ灰色シルトなどの粘質土やシルトである。この粘質土やシルトの下層の状況を確認するため、北の下水主遺跡N地区から南の下水主遺跡A地区まで、何か所かで断ち割り等を実施して青灰色粘土を確認した。青灰色粘土の上面はおおよそ標高12.0～12.5mであることから、上述の黄褐色系粘質土が形成される以前の水成堆積による粘土層と考えられる。

(筒井崇史)

5. 下水主遺跡第6次調査

1) はじめに

本節は平成26年度に調査を実施した下水主遺跡第6次調査のうち、I～L・N地区の各調査区について報告する。ここで報告する各調査区の調査の結果、中世に形成された島畑を29基検出した。また、縄文時代から古墳時代にかけての氾濫流路や溝、土坑などの遺構を検出し、遺跡の概要を明らかにすることができた(第7・94図)。第6次調査では広範囲にわたって調査を行ったこともあり、大きな成果をあげることができたが、いずれの調査区においても集落のようすなどが明らかにできるような遺構を検出しなかった。(筒井崇史)

2) I地区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

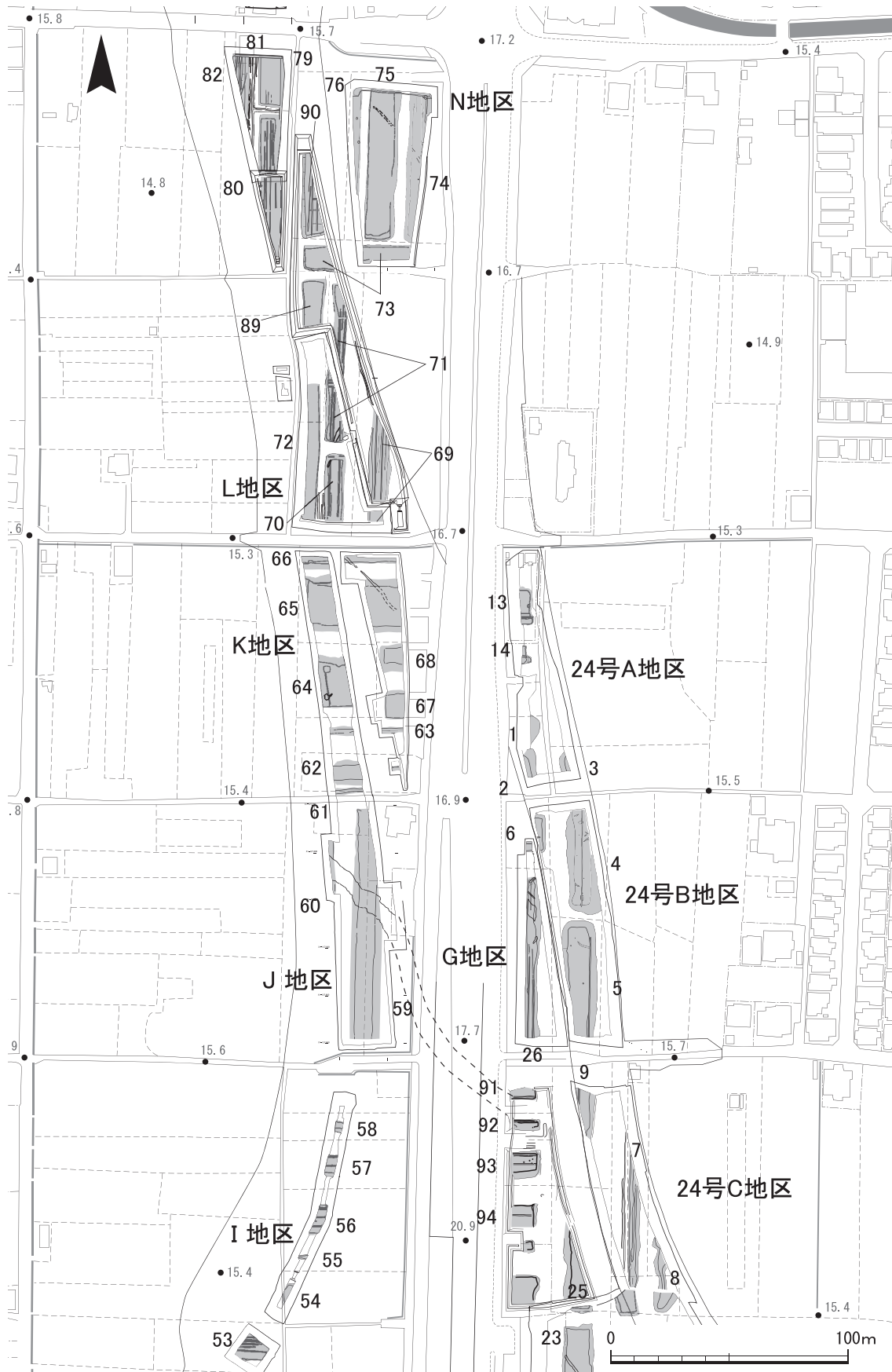
平成25年度に調査を実施したE地区(E8区)の北側に位置し、全長約100m、幅9m前後で「く」字状を呈する非常に狭長な調査区である(第8図)。現地表面の標高はおよそ15.4mである。現地表下約1.3mで島畑5基、溝状遺構6条を検出した。また、調査区の一部を断ち割ったところ、^(注10)縄文時代以前と推定される有機物層を確認した。調査面積は900㎡である。出土した遺物は整理箱にしてわずか1箱である。

基本的な層序について、第11図で説明すると、耕作土である暗オリーブ褐色細砂混じり粘質土(1層)の下層には、黄灰色ないし灰黄色を呈する細砂ないし中粒砂(2・7層)が0.5～1mほど堆積している。詳細な時期は不明であるが、近世以降の洪水等による堆積と考えられる。これら除去すると、島畑と溝状遺構の堆積層を確認することができる。島畑は基盤層である灰オリーブ色粘土(23層)の上部に島畑の盛土と考えられる灰オリーブ色・暗緑灰色・オリーブ灰色・青灰色などの粘土ないし粘質土が水平もしくは盛土の単位などの層序として認められる。溝状遺構の最上層には灰オリーブ色ないし暗オリーブ色を呈する細砂ないし微砂(6・11層)が堆積し、2・7層と同様、洪水等による堆積と考えられる。これらの下層はオリーブ灰色・灰オリーブ色・灰色・緑灰色などを呈する粘土やシルトなどがおおむね水平に堆積している。

(2) 検出遺構

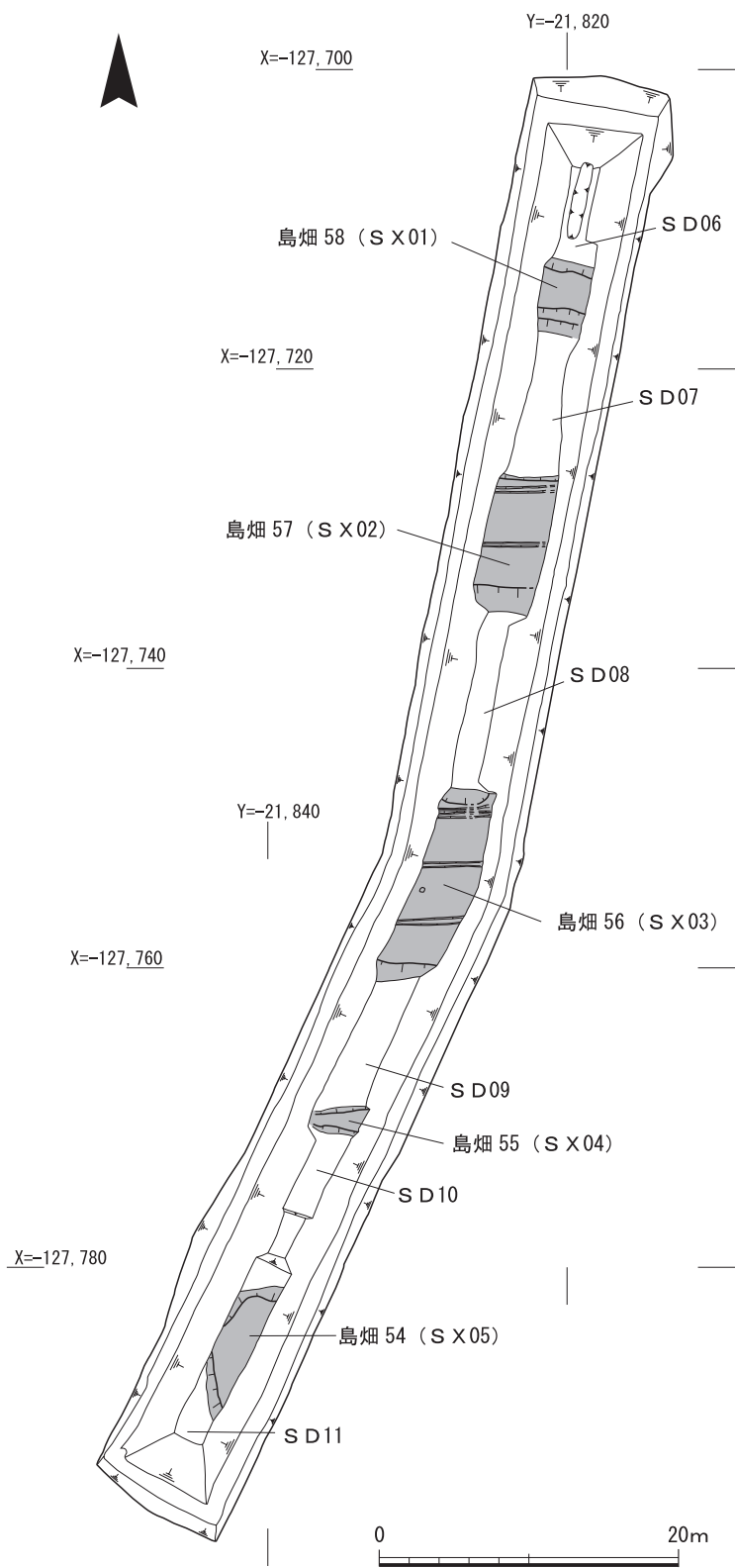
島畑54(SX05)(第12図) 調査区の南端で検出した(G4-u11区ほか)。東西方向と推定される島畑の北西角付近を検出した。島畑の断面観察(第9図)によると、基盤層であるオリーブ灰色粘土(27層)の上部に緑灰色粗粒砂(16層)、暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂(17層)、青灰色シルト(23層)のように水平の層序が認められることから、27層を基盤に形成された島畑の上部に盛土等を繰り返し行い、島畑が徐々に高くなっていったと考えられる。最初期の島畑の規模は、東西長5.1m、南北長8.9m、高さ0.3mである。島畑上面の標高はおよそ13.7mである。島畑に伴う素掘り溝は検出しなかったが、断面観察では、素掘り溝が認められた(24・25層)。遺物は陶器片などが出土したものの島畑の時期は不明である。他の島畑と同じ中世のものと推定される。

島畑55(SX04)(第13図) 調査区の南半部で検出した(G4-r9区ほか)。東西方向の島畑の一



第7図 下水主遺跡第1～9次調査遺構配置図(1/2,500)

部の検出にとどまる。島畑の断面観察(第10図)によると、基盤となる灰オリーブ色シルト(28層)の上部に、島畑の形状に沿うように灰白色粘質土(27層)、灰白色粘質土(26層)、灰色シルト(22層)灰オリーブ色シルト(20層)、灰色シルト(18層)の層序が認められる。島畑に順次、盛土をしてい



第8図 I地区遺構配置図(1/500)

ったことをうかがわせる。最初期の島畑の規模は、検出長3.7m、基部幅1.7~2.0m、上面幅0.8~1.5m、高さ0.6~0.8mである。島畑上面の標高はおよそ14.0mである。非常に幅が狭いため島畑ではなく、里道等の可能性もあるものの、城陽市域における条里型地割りの復原では坪境に一致しない。島畑に伴う素掘り溝は検出しなかった。遺物の出土がなかったため島畑の時期は不明である。他の島畑と同じく、中世のものと推定される。

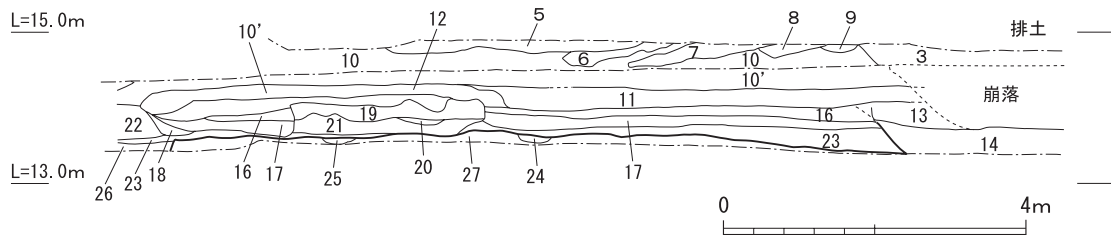
島畑56 (S X 03) (第13図)

調査区のほぼ中央で検出した(G4-m7区ほか)。東西方向の島畑の一部の検出にとどまる。島畑の断面観察(第11図)によると、基盤層である灰オリーブ色粘土(23層)の上部に灰オリーブ色粘質土(83層)、暗オリーブ色粘質土(82層)、暗オリーブ色粘質土(79層)、灰オリーブ色粘質土(85層・86層)、暗オリーブ色粘質土(78層)のように水平の層序が認められることから、23層を基盤に形成された島畑の上部に盛土等を繰り返し行い、

鳥畑が高くなっていったと考えられる。最初期鳥畑の規模は、検出長4.3m、基部幅13.0m、上面幅11.1m、高さ0.7mである。鳥畑上面の標高はおよそ14.1mである。各鳥畑の上面では3条の素掘り溝を検出した(S D15~17)。素掘り溝は検出長3.6~4.5m、検出幅0.3~0.45m、深さ0.1~0.25mである。遺物は鳥畑の上面精査時に瓦器や陶器の小片が少量出土したのみで、素掘り溝から遺物は出土しなかった。時期は中世前半と推定される。

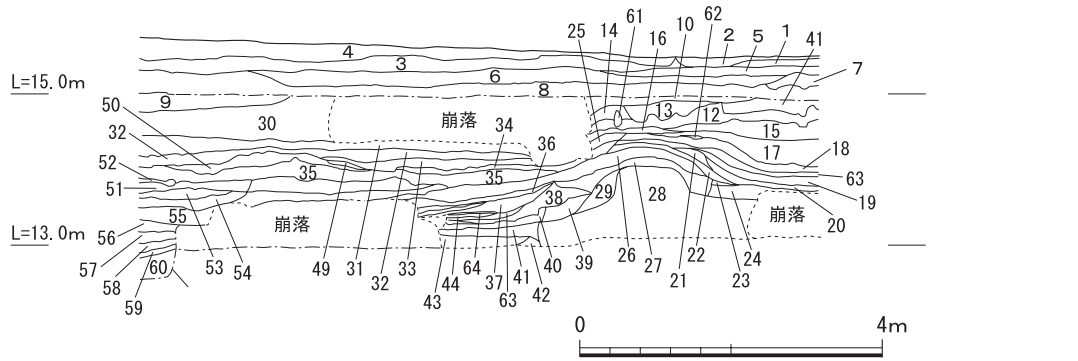
鳥畑57(S X02)(第14図) 調査区の北半部で検出した(G4-h6区ほか)。東西方向の鳥畑の一部の検出にとどまる。鳥畑の断面観察(第11図)によると、基盤層である灰オリーブ色粘土(23層)の上部に灰オリーブ色粘質土(59層)、暗緑灰色粘土(55層・54層)、暗オリーブ色粘質土(52層)のように水平の層序が認められることから、23層を基盤に形成された鳥畑の上部に盛土等を繰り返して行い、鳥畑が高くなっていったと考えられる。最初期の鳥畑の規模は、検出長4.4m、基部幅9.6m、上面幅7.3m、高さ0.7mである。鳥畑上面の標高はおよそ14.1mである。鳥畑の上面では2条の素掘り溝を検出した(S D13・14)。素掘り溝は検出長4.0~4.3m、検出幅0.35~0.5m、深さ0.1~0.15mである。遺物は鳥畑上面の精査中に土師器や須恵器、瓦器の小片などが出土したのみで、素掘り溝から遺物は出土しなかった。時期は中世前半と推定される。

鳥畑58(S X01)(第14図) 調査区の北端で検出した(G4-d5区ほか)。東西方向の鳥畑の一部の検出にとどまる。鳥畑の断面観察(第11図)によると、基盤層である灰オリーブ色粘土(23層)の上部に灰オリーブ色粘土(32層・31層)、オリーブ灰色粘土(27層)、暗オリーブ灰色粘土(24層)が認められるが、ほかの鳥畑の層序とは異なり、あまり水平になっていないため、盛土の単位を示しているのかもしれない。最初期の鳥畑の規模は、検出長3.5m、基部幅4.9m、上面幅2.6m、高さ0.7m前後である。鳥畑上面の標高はおよそ14.1mである。鳥畑に伴う素掘り溝は検出しなかった。遺物は鳥畑上面の精査時や盛土の掘削時に土師器や須恵器、瓦器など出土した。時期は中世



- | | | |
|---------------------------------|----------------------------|---------------------------|
| 1. 褐色 (7.5YR4/3) 中粒砂 | 10. オリーブ灰色 (5GY6/1) 極細粒砂 | 18. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト |
| 2. にぶい褐色 (7.5YR5/3) 中粒砂～
細粒砂 | 〈中粒砂～粗粒砂が縞状に混じる〉 | 19. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト |
| 3. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 細粒砂 | 11. 緑灰色 (5G6/1) 細粒砂 | 20. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト |
| 4. 青灰色 (5BG5/1) 極細粒砂 | 12. オリーブ灰色 (5GY6/1) 細粒砂 | 21. 灰黄色 (2.5Y6/2) 極細粒砂 |
| 5. 明褐色 (7.5YR5/6) 中粒砂 | 〈径3～5cmの緑灰色ブロック含む〉 | 22. 暗緑灰色 (10G4/1) 砂混じりシルト |
| 6. にぶい褐色 (7.5YR5/3) 中粒砂 | 13. 緑灰色 (10G5/1) 細粒砂 | 23. 青灰色 (5BG5/1) シルト |
| 7. 褐色 (10YR4/4) 中粒砂 | 14. 青灰色 (10BG5/1) シルト | 24. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト |
| 8. 褐色 (10YR4/6) 中粒砂 | 15. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 細粒砂 | 25. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト |
| 9. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂～
中粒砂 | 16. 緑灰色 (10GY5/1) 細粒砂 | 混じり細粒砂 |
| | 17. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト | 26. 暗青灰色 (5BG4/1) 細粒砂 |
| | 混じり細粒砂 | 27. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘土 |

第9図 I地区東壁土層断面図1(1/100)

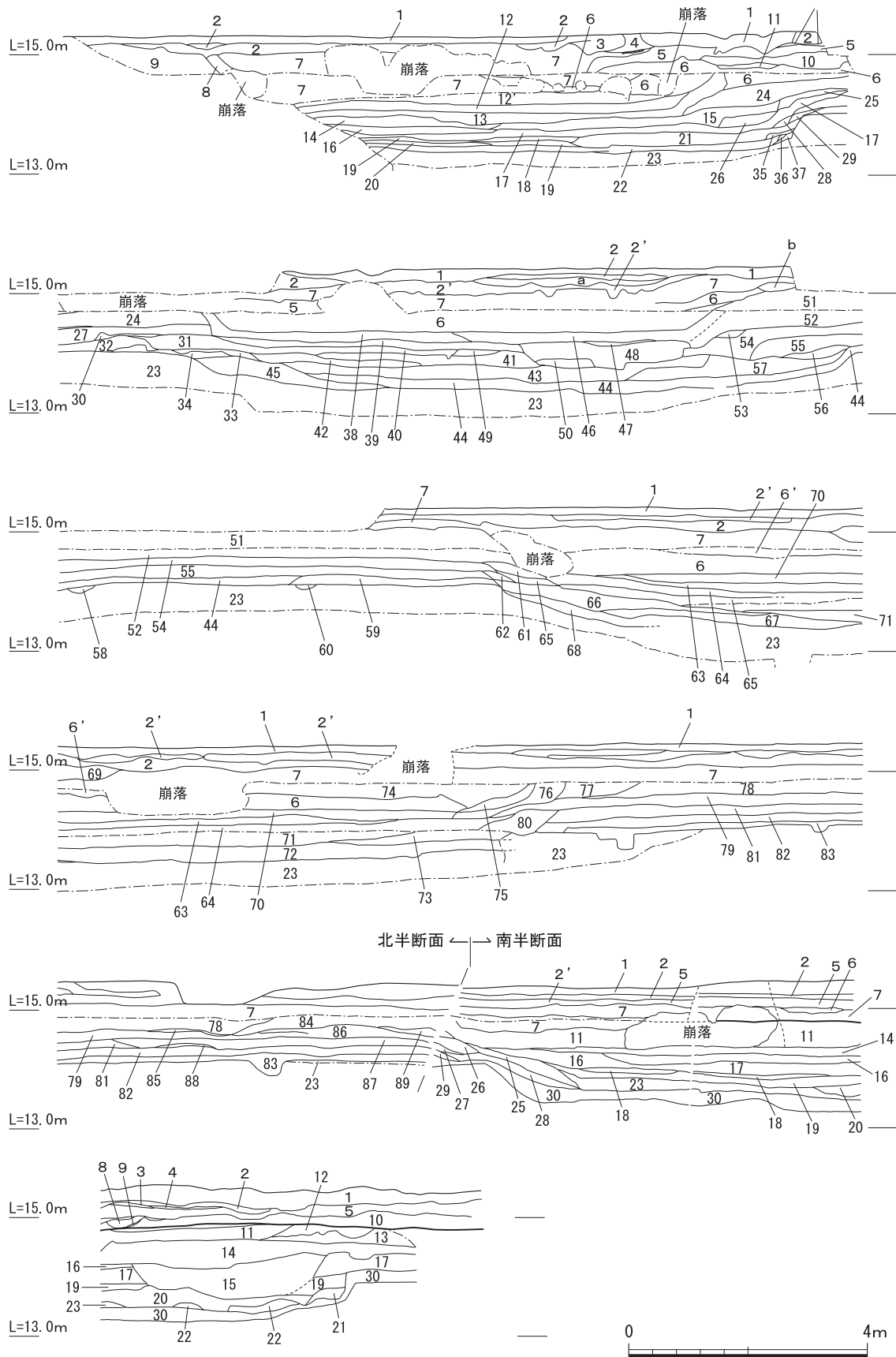


- | | | |
|--|---|--------------------------------------|
| 1. 褐灰色 (5YR4/1) 砂質土
〈赤褐色ブロック多く含む〉 | 24. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト | 44. 淡黄色 (2.5Y8/4) 砂 |
| 2. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 砂質土 | 25. 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト | 45. 淡黄色 (2.5Y8/4) 砂 |
| 3. 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土 | 26. 灰白色 (2.5Y7/2) 粘質土 | 46. 淡黄色 (2.5Y8/4) 砂 |
| 4. 表土 (ガラまじり) | 〈27 より細かい粘土〉 | 47. 明灰色 (10BG7/1) 粘質土 |
| 5. 褐灰色 (5YR5/1) 砂質土
〈茶色ブロック多く混じる〉 | 27. 灰白色 (7.5Y7/5) 粘質土
〈茶色ブロック混じる〉 | 48. 灰色 (10Y5/1) 粘質土
〈47 より粘り気弱い〉 |
| 6. 褐灰色 (7.5YR6/1) 砂質土
〈茶色ブロック多く混じる〉 | 28. 灰オリーブ色 (5Y6/2) シルト
〈茶ブロック多く含む〉 | 49. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) シルト |
| 7. 褐灰色 (7.5YR6/1) シルト質土
〈茶色ブロック多く混じる〉 | 29. 明黄褐色 (10YR7/6) シルト
〈下側は青灰色 (5G6/1) と混じている〉 | 50. オリーブ灰色 (10Y6/2) 砂
〈茶色ブロック混じり〉 |
| 8. 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂 | 30. にぶい黄褐色 (10YR7/4) 砂 | 51. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト |
| 9. 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂
〈茶ブロック含む〉 | 31. 灰色 (5Y5/1) シルト | 52. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 砂 |
| 10. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 砂 | 32. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 砂 | 53. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 砂 |
| 11. 灰色 (7.5Y4/1) シルト | 33. 灰色 (7.5Y5/1) シルト | 54. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト |
| 12. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト | 34. 灰色 (7.5Y5/1) シルト
〈茶色ブロック多く含む〉 | 55. 灰色 (10Y6/1) 粘土 〈ややしまる〉 |
| 13. 黄褐色 (10YR7/4) 砂 | 35. 灰オリーブ色 (5Y6/2) シルト質土
〈茶色ブロック多く含む〉 | 56. 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト |
| 14. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト | 36. 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘土 | 57. 明緑灰色 (10GY7/2) 砂 |
| 15. 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト | 37. 浅黄色 (2.6Y7/3) 粘土 | 58. 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂 |
| 16. 灰色 (7.5Y5/1) シルト | 38. 緑灰色 (5G6/1) 粘土 | 59. 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂 |
| 17. 灰色 (7.5Y5/1) シルト | 39. 灰色 (10Y6/1) シルト 〈やや粘質〉 | 60. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト
〈木片の堆積あり〉 |
| 18. 灰色 (10Y5/1) シルト | 40. 緑灰色 (10GY6/1) 砂 | 61. 灰色 (N6/0) シルト
〈茶色ブロック混じり〉 |
| 19. 緑灰色 (5G5/1) シルト | 41. 明緑灰色 (7.5GY7/1) 砂 | 62. オリーブ灰色 (5GY6/1) シルト
〈やや粘り気あり〉 |
| 20. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト | 42. 灰白色 (N7/0) 砂 | 63. 青灰色 (5B6/1) 粘土 |
| 21. 灰色 (10Y5/1) シルト | 43. 灰白色 (N7/0) 砂 | 64. 淡黄色 (2.5Y8/4) 砂 |
| 22. 灰色 (10Y4/1) シルト | | |
| 23. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘土 | | |

第10図 I地区西壁土層断面図(1/100)

前半である。

溝状遺構 S D06 (第14図) 調査区の北端、島畑58の北側で検出した (G4-b5区ほか)。東西方向の溝状遺構の一部の検出にとどまる。溝状遺構の土層断面の観察 (第11図) によると、基盤層である灰オリーブ色粘土 (23層) の上部にはオリーブ灰色粘土 (21層) や灰色粘土 (15層) などの粘土の堆積が認められる。これらは南側の島畑68における上方への盛り上げに対応した堆積を示している。検出長1.0m、検出幅3.6m、深さ0.8mである。溝底の標高はおよそ13.3mである。遺物は埋土から土師器や瓦器、瓦質土器、陶器などのほか、弥生土器の甕の底部なども出土した。時期は中世前半である。



第11図 I 地区東壁土層断面図2 (1/100)

〔東壁北半〕

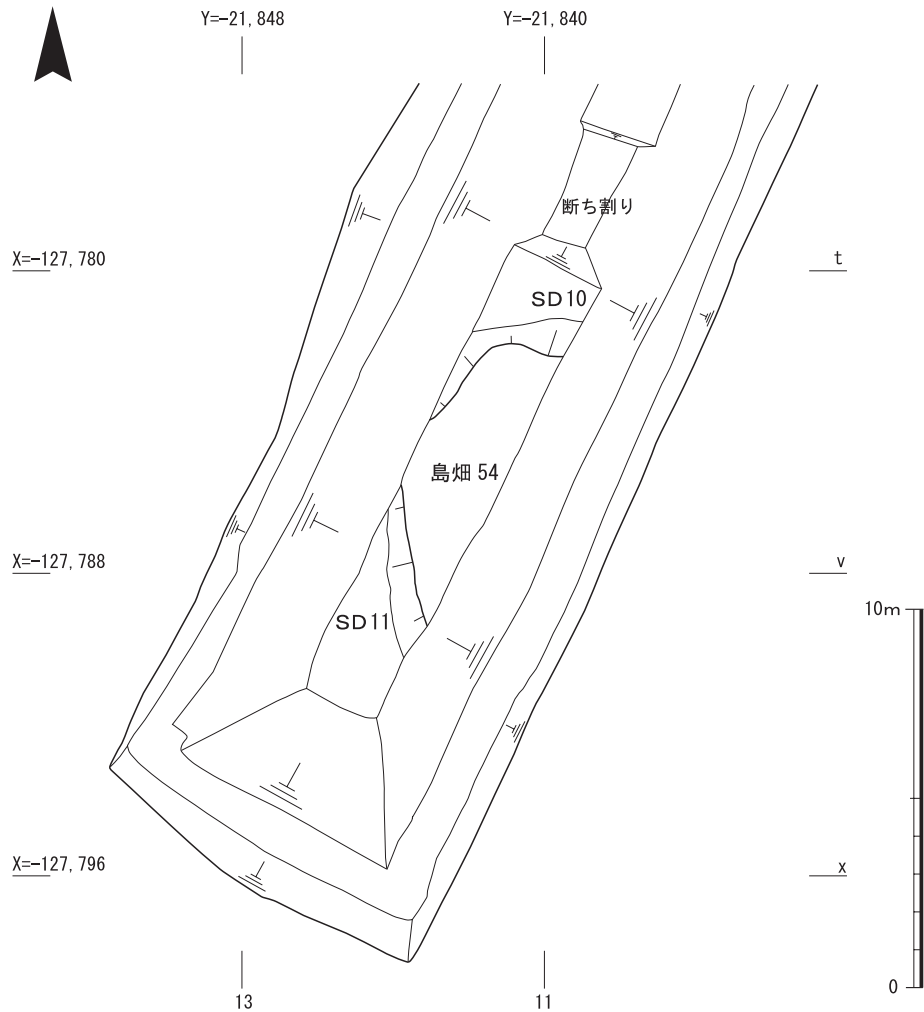
1. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 細砂
混じり粘質土〈耕作土〉
2. 灰色 (5Y4/1) 細砂
- 2'. 灰色 (5Y4/1) 中粒砂
3. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂
4. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中粒砂
5. 褐色 (10YR4/6) 中粒砂
6. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 微砂
〈非常に細かな砂〉
7. 灰黄色 (2.5Y6/2) 細砂
8. 黄褐色 (2.5Y5/4) 中粒砂
9. 灰色 (10Y5/1) 粘土
10. 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土
〈中粒砂混じり〉
11. 暗オリーブ色 (5Y4/3) 細砂
12. 灰色 (10Y4/1) シルト
- 12'. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト
13. 灰色 (10Y4/1) 粘土
14. 灰色 (10Y4/1) 粘土〈13より粘性あり〉
15. 灰色 (7.5Y4/1) 粘土
16. 暗オリーブ灰色 (5.6Y4/1) 粘土
17. 緑黒色 (7.5GY2/1) 粘土
18. オリーブ黒色 (10Y3/1) 粘土
19. 灰色 (10Y5/1) 粘土
20. 青灰色 (5B5/1) 粘土
21. オリーブ灰色 (10Y5/2) 粘土
22. 暗緑灰色 (5G4/1) 粘土
23. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘土
24. 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 粘土
〈よくしまる〉
25. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘土
26. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘土
27. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘土
〈よくしまる〉
28. 緑灰色 (5G5/1) 粘土
29. 灰色 (10Y4/1) 粘土
30. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘土
〈よくしまる〉
31. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘土
32. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘土
33. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘土
34. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘土
〈31より粘性あり〉
35. オリーブ灰色 (10Y4/2) シルト
〈粘性あり〉
36. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト
〈粘性あり〉
37. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト
〈粘性あり〉
38. 暗オリーブ灰色 (5GY3/2) シルト
39. 灰色 (10Y4/1) シルト

40. 灰色 (7.5Y4/1) シルト
41. 灰色 (5Y5/1) シルト
42. 暗オリーブ色 (5Y4/2) シルト
43. 暗緑灰色 (5G4/1) 粘土
44. 緑灰色 (10G5/1) シルト
45. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘土
46. 緑黒色 (7.5GY2/1) シルト
47. オリーブ黒色 (10Y3/2) シルト
48. 暗青灰色 (5BG4/1) 微砂〜粘質土
49. 暗緑灰色 (5G4/1) シルト
50. 灰色 (10Y4/1) 粘土、粘性あり
51. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘土
52. 暗オリーブ色 (5Y4/3) 粘質土
53. 暗緑灰色 (5G4/1) シルト
54. 暗緑灰色 (10G4/1) 粘土〈しまる〉
55. 暗緑灰色 (10G4/1) 粘土
〈粘性強い〉
56. 暗青灰色 (10BG4/1) 粘土
〈粘性強い〉
57. 暗オリーブ色 (5Y4/3) 粘土
58. 灰色 (10Y5/1) 粘質土
59. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘質土
60. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土
61. 青灰色 (5BG5/1) 粘土
62. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土
63. 緑黒色 (7.5GY2/1) シルト
64. オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト
65. 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘土
〈ややシルトっぽい〉
66. 暗緑灰色 (5G4/1) シルト
〈粘性強い〉
67. 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘土
68. 暗緑灰色 (10G4/1) 粘土
69. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 中粒砂
70. オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト
〈粘性あり〉
71. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) シルト
72. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土
73. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土
74. 浅黄色 (2.5Y7/4) 中粒砂ないし粗砂
75. 暗青灰色 (5B4/1) 細砂
76. 暗オリーブ灰色 (2.5Y3/1) シルト
77. 暗オリーブ灰色 (5G3/1) 粘土
〈シルトっぽい〉
78. 暗オリーブ色 (5Y4/4) 粘質土
79. 暗オリーブ色 (5Y4/3) 粘質土
80. オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト
81. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘質土
82. 暗オリーブ色 (7.5Y4/3) 粘質土
83. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土

84. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘質土
85. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質土
〈粘性あり〉
86. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土
87. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土
88. オリーブ色 (5Y5/4) 粘質土
89. 暗緑灰色 (10G4/1) 粘質土
90. 暗緑灰色 (5BG3/1) 粘質土
91. 暗オリーブ色 (5Y4/4) 粘質土

〔東壁南半〕

1. 北半1層に同じ
2. 北半2層に同じ
3. 灰色 (7.5Y4/1) シルト混じりの細砂
4. オリーブ黒色 (10Y3/2) シルト
5. 北半2'層に同じ
6. 灰白色 (2.5Y8/2) 粗砂
7. 北半7層に同じ
8. 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト
9. 明オリーブ灰色 (5GY7/1)
10. 灰色 (10Y5/1) 砂混じりシルト
11. 灰色 (7.5Y6/1) シルト混じり
極細砂〈鉄分粒子状に多量に含む〉
12. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細砂
13. 緑灰色 (10G6/1) シルト質細砂
14. 緑灰色 (5G5/1) 極細砂
〈黄灰色粗砂を縞状に含む〉
15. 緑灰色 (5G6/1) 極細砂
16. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 極細砂
17. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト
〈オリーブ灰色粘土を径5mm大ブロック状に含む〉
18. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト
19. 暗緑灰色 (10G4/1) シルト
20. 暗緑灰色 (10G4/1) 砂混じりシルト
21. 緑灰色 (10G5/1) シルト
22. 緑灰色 (5G5/1) 極細砂
23. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 極細砂
24. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト質細砂
25. 緑灰色 (5G5/1) 細砂〈鉄分多く含む〉
26. 暗緑灰色 (10G4/1) 細砂
27. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) シルト
28. オリーブ灰色 (5GY5/1) シルト
〈鉄分多く含む〉
29. 灰色 (10Y5/1) シルト
30. 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト※ベース

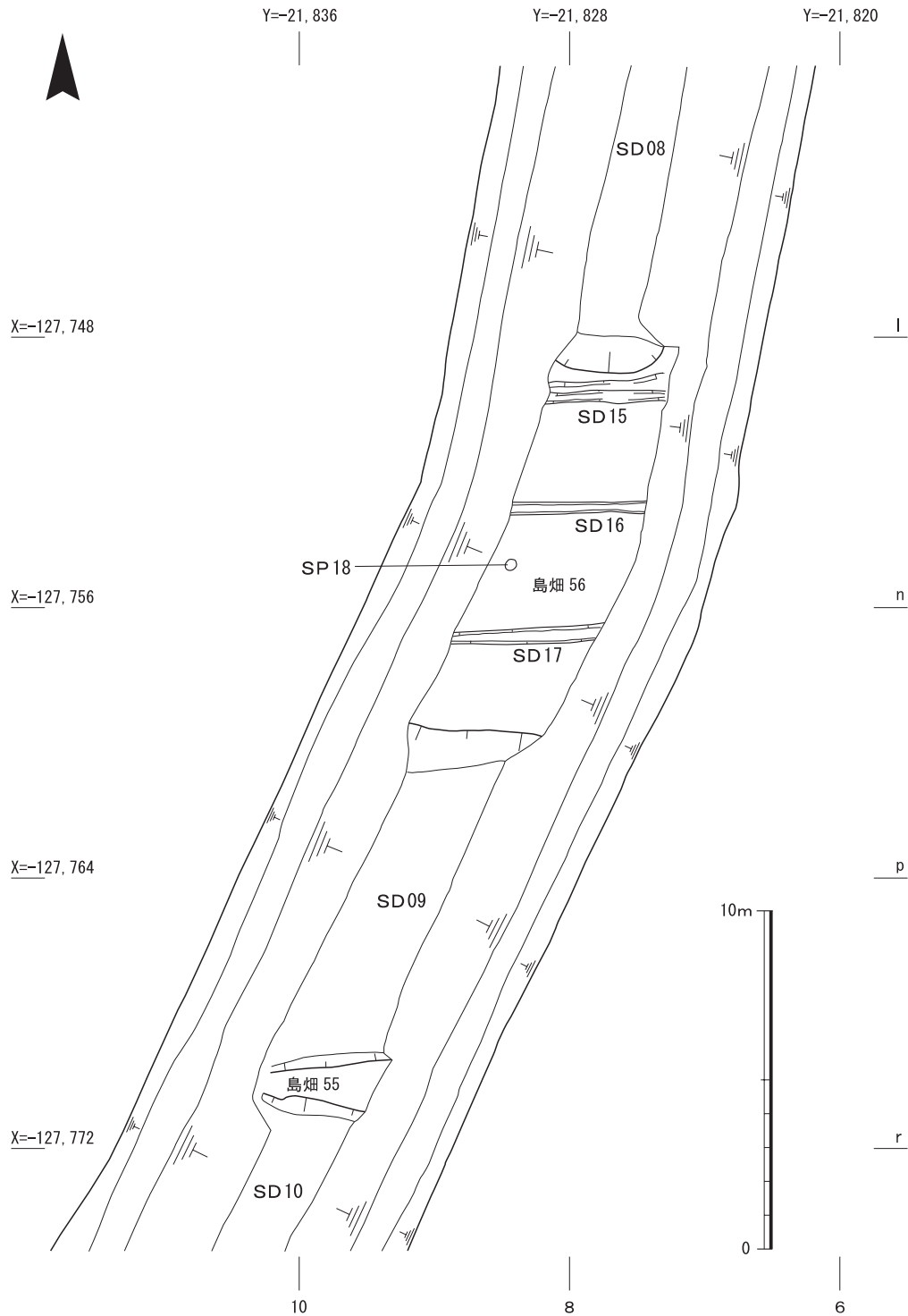


第12図 I地区島畑54平面図(1/200)

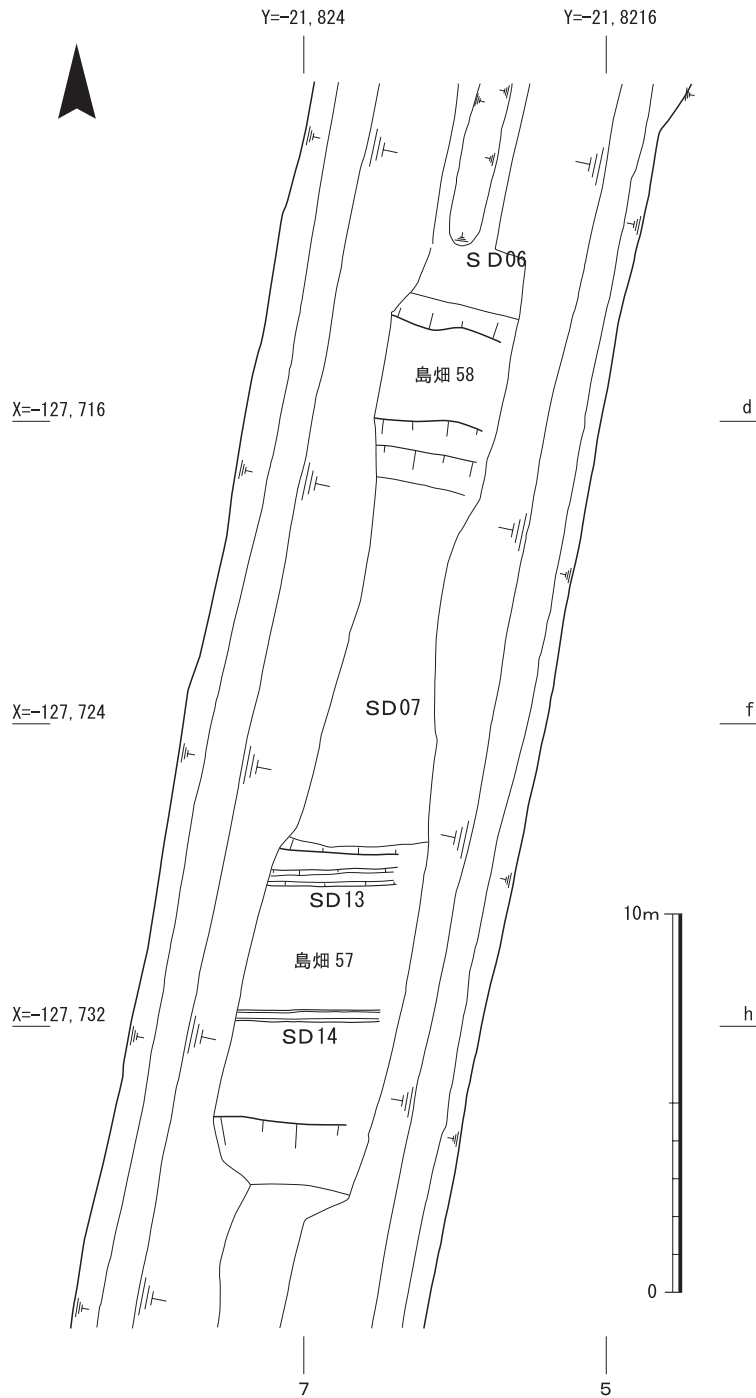
溝状遺構SD07(第14図) 調査区の北半部、島畑57と58の間で検出した(G4-e6区ほか)。東西方向の溝状遺構の一部の検出にとどまる。溝状遺構の土層断面の観察(第11図)によると、基盤層である灰オリーブ色粘土(23層)の上部には、緑灰色シルト(44層)、暗緑灰色粘土(43層)、灰色シルト(41層)、暗オリーブ色シルト(42層)、灰色シルト(40層・39層)、暗オリーブ灰色シルト(38層)、緑黒色シルト(46層)などのシルトや粘土の堆積が認められる。これらはほぼ水平である。また、別に溝状の堆積(暗青灰色微砂～粘質土、48層)も認められる。また、島畑の盛土の一部の堆積として灰オリーブ色粘土(45層)、灰オリーブ色粘土(34層・33層・31層)、暗オリーブ色粘土(57層)、暗青灰色粘土(56層)などが考えられる。検出長4.2m、検出幅11.4m、深さ0.7mである。溝底の標高はおよそ13.4mである。遺物は土師器や須恵器、瓦器、瓦質土器などが出土した。時期は中世前半である。

溝状遺構SD08(第13・14図) 調査区の中央、やや北寄り、島畑56と島畑57の間で検出した(G4-f7区ほか)。東西方向の溝状遺構の一部の検出にとどまる。溝状遺構の土層断面の観察(第11図)によると、基盤層である灰オリーブ色粘土(23層)の上部には、灰オリーブ色粘質土(72層)、暗オリーブ灰色粘質土(71層)、オリーブ黒色シルト(64層)、緑黒色シルト(63層)、オリーブ黒色

シルト(70層)などのシルトが水平に堆積している。また、島畑の盛土の一部と思われる層序として、暗緑灰色粘土(68層・67層)、暗緑灰色シルト(66層)、灰オリーブ色粘質土(73層)、オリーブ黒色シルト(80層)などが考えられる。検出長4.3m、幅14.4m、深さ0.7mである。溝底の標高はおよそ13.4mである。遺物は土師器や須恵器、瓦器、白磁、陶器など出土した。時期は中世前半である。



第13図 I 地区島畑55・56平面図(1/200)



第14図 I地区島畑57・58平面図(1/200)

溝状遺構 S D09 (第13図)

調査区の中央、やや南寄り、島畑55と56の間で検出した(G4-p8区ほか)。東西方向の溝状遺構の一部の検出にとどまる。溝状遺構の土層断面の観察によると(第11図)、基盤層である緑灰色シルト(30層)の上部に暗緑灰色極細砂(23層)、暗緑灰色砂混じりシルト(20層)、暗緑灰色シルト(19層)、暗オリーブ灰色シルト(17層)、オリーブ灰色極細砂(16層)、緑灰色極細砂(14層)などが水平に堆積する。別に溝状の堆積(緑灰色極細砂・15層)も認められる。また、灰色シルト(28層)や緑灰色細砂(25層)は島畑の盛土の一部と考えられる。検出長4.6m、幅10.0m、深さ0.7m前後である。溝底の標高はおよそ13.4mである。遺物は出土せず、時期は不明である。ほかの溝状遺構と同じく、中世と推定される。

溝状遺構 S D10 (第12・

13図) 調査区の南半部、島畑54と島畑55の間で検出した(G4-r9区ほか)。東西方向の溝状遺構の一部の検出にとどまる。溝状遺構の土層断面の観察によると(第10図)、粘土やシルト、砂の層が交互に堆積しており、各層の厚さは5~15cmほどしかない。このため、崩落が起きやすい地質となっている。また、第10図のにおい黄褐色砂(30層)は第11図の灰オリーブ色微砂(6層)、灰黄色細砂(7層)の砂層に対応すると考えられる。検出長3.4m、幅11.7m、深さ0.8mである。溝底の標高はおよそ13.2mである。遺物は出土せず、時期は不明である。ほかの溝状遺構と同じく中世と推定される。なお、S D10の底面を断ち割り、標高12.7m付近で樹木等の有機物が厚く堆

積した層を検出した(第10図60層)。ただし、この層の時期は不明である。

溝状遺構 S D 11 (第12図) 調査区の南端部、島畑54の西側で検出した(G 4-v 12区ほか) 島畑54の西側を限る溝状遺構と考えられる。調査前の地割から南北方向に延びると推定される。検出長6.2m、検出幅3.0m、深さ0.3mである。溝底の標高はおよそ13.4mである。遺物は出土せず、時期は不明である。ほかの溝法遺構と同じく、中世と推定される。

(渡邊拓也・筒井崇史)

(3)出土遺物

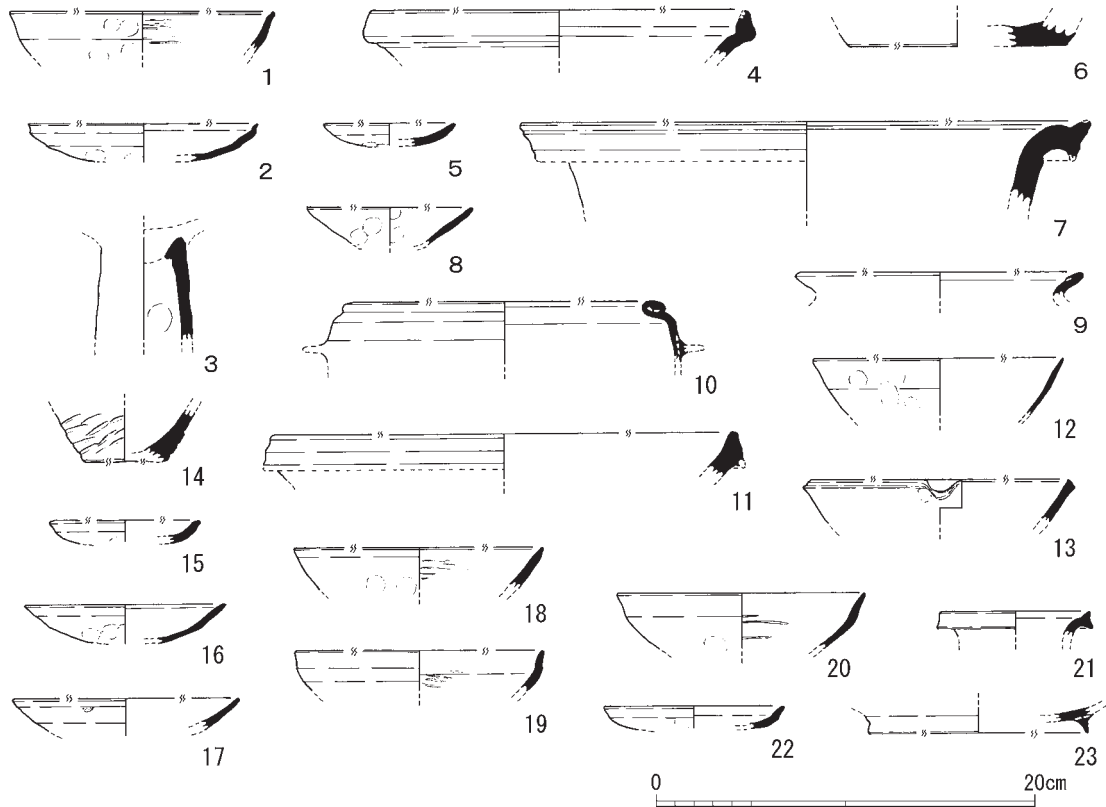
島畑56 1は瓦器椀である。口縁端部内面に沈線が1条めぐる。

島畑57 2は土師器皿である。口縁端部を外方につまみ出すように仕上げています。やや薄手のつくりである。3は高杯の脚柱部であるが、弥生時代後期ないし古墳時代前・中期のものと推定される。全体に摩滅が著しい。

島畑58 4は須恵器鉢である。口縁端部を欠損するが、口縁部の屈曲部付近が大きく肥厚する。5は土師器皿である。口縁部がわずかに外反する。

溝状遺構 S D 06 6は瓦質土器の鉢の底部である。照り部外面に粗いケズリを施す。7は陶器の甕の口縁部である。頸部が外反気味に立ち上がり、口縁部が大きく屈曲して口縁端部に至る。8は土師器皿である。

溝状遺構 S D 07 9は土師器羽釜の口縁部と推定される。口縁端部内面を内方に折り曲げる。



第15図 I 地区出土遺物実測図(1/4)

10は土師器羽釜である。口縁部直下の鏝を欠損する。口縁部は外に折り返して形成される。11は須恵器鉢ある。口縁部がわずかに垂下すると推定されるが欠損する。12は瓦器椀である。端部はやや鋭く納める。13は陶器の片口鉢である。全面に施釉する。14は弥生時代後期の甕の底部である。

溝状遺構 S D08 15・16は土師器皿である。15は小型のもので、口縁部を外反させる。16は15よりも薄手で、口縁部は外方へ向かって伸びる。17は白磁皿である。外面に他の個体の破片が融着している。18～20は瓦器椀である。いずれも口縁部の破片であるが、器形に若干の違いがあり、18は斜め上方に伸びる口縁部を呈するのに対して、19・20は口縁部の直下に屈曲がみられ、口縁部はやや外反気味となる。

遺物包含層 21は須恵器長頸壺の口縁部である。22は土師器皿である。口縁部を外反気味に納める。23は土師器杯Bである。

(筒井崇史)

3) J地区の調査

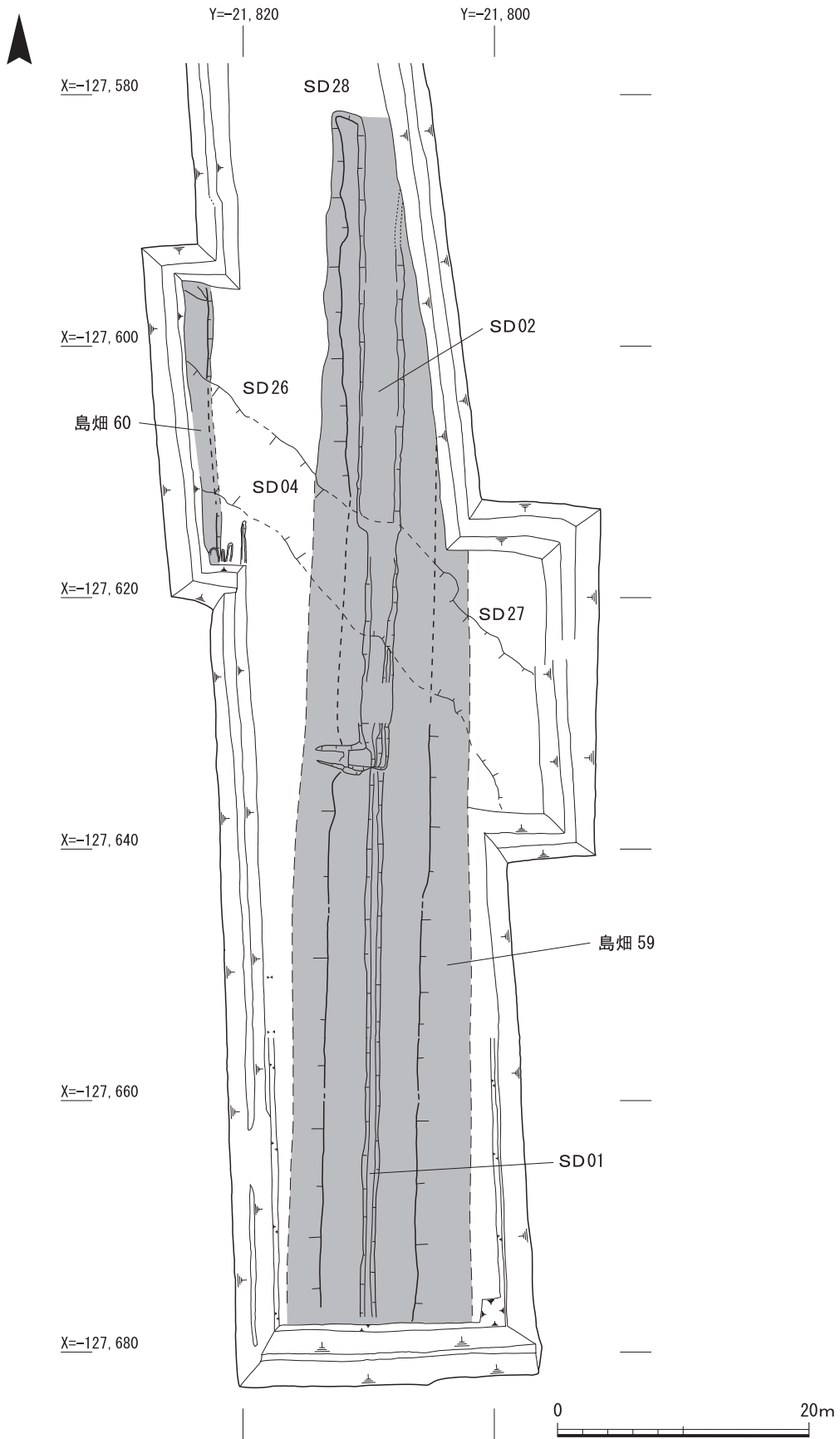
(1) 調査区の概要と基本的な層序

I地区の北側に設定した、全長107m、幅18～24mで、北ほどわずかに西に傾くような矩形を呈する調査区である(第16図)。また、下層遺構の検出に伴い、調査区の一部を盛土造成範囲まで拡張を行った。なお、掘削土の置き場を確保するため、2つの調査区(J1・J2区)に分けて調査を実施したが、ここではまとめて報告する。現地表面の標高は15.4～15.1mである。現地表下1.1mで島畑1基、溝状遺構3条などを検出した。また、J2区で溝状遺構S D26を検出した際に下層遺構として溝を確認した。この溝の全容を明らかにするため、対象地いっぱいまで拡張して下層遺構の調査を実施した。下層遺構として確認したのは溝が1条のみである。なお、この拡張時に上層遺構として新たに島畑1基を確認した。調査面積は2,590㎡である。出土した遺物は整理箱3箱のほか、下層遺構の溝S D04から出土した木製品や建築部材などがある。

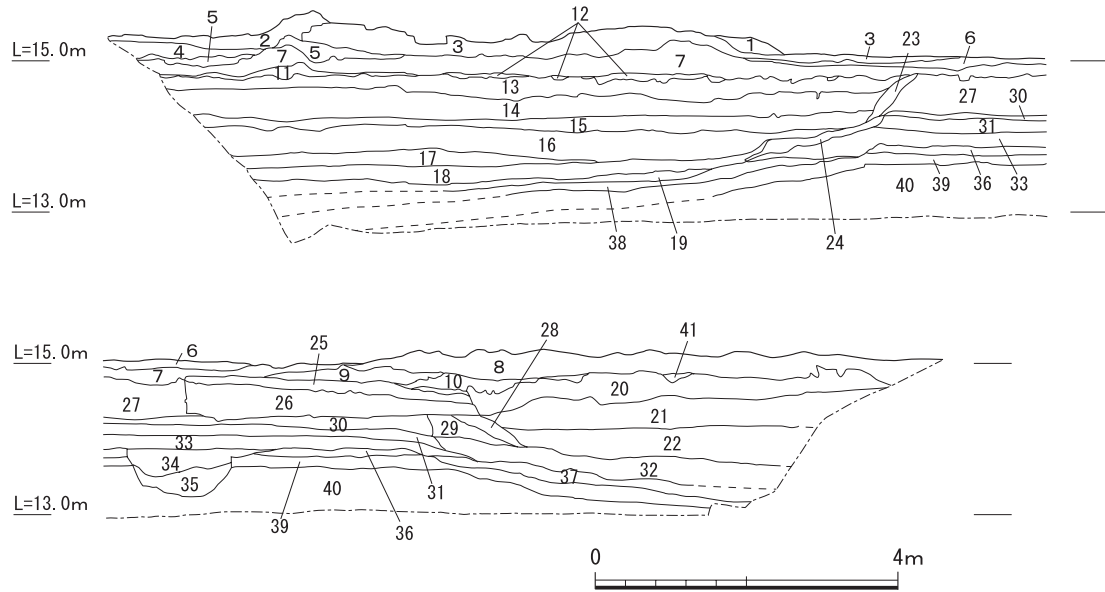
基本的な層序(第17図)は、耕作土を除去すると、厚さ0.4～0.6mほどの暗灰色ないし灰白色の砂ないし砂質土(3・7・8層)がある。7層を除去すると、最も新しい島畑の盛土(25・27層)とその両側に溝状遺構の堆積を確認した。島畑の基盤層であるにぶい黄色粘質土(39・40層)の上部に島畑の盛土と考えられる青灰色やオリーブ灰色・淡黄色などの粘質土(27・30・31・33・36層)がおおよそ水平に堆積している。なお、盛土25層の直下に位置する26層は、オリーブ灰色砂で、本来の島畑の盛土とは考えにくいことから、洪水等によって島畑の一画が削られた際の堆積と考えられる。溝状遺構は、上部に黄灰色やにぶい黄橙色などの砂層(13～16・20・21)が厚く堆積する。また、下部には、オリーブ灰色や青灰色の粘質土(17～19・22・32・37・38)が堆積する。これらはおおむね水平に堆積していた。なお、図には示していないが、基盤層である39・40層の下層に青灰色粘土が厚く堆積していること確認した。

(2) 検出遺構

① 上層遺構



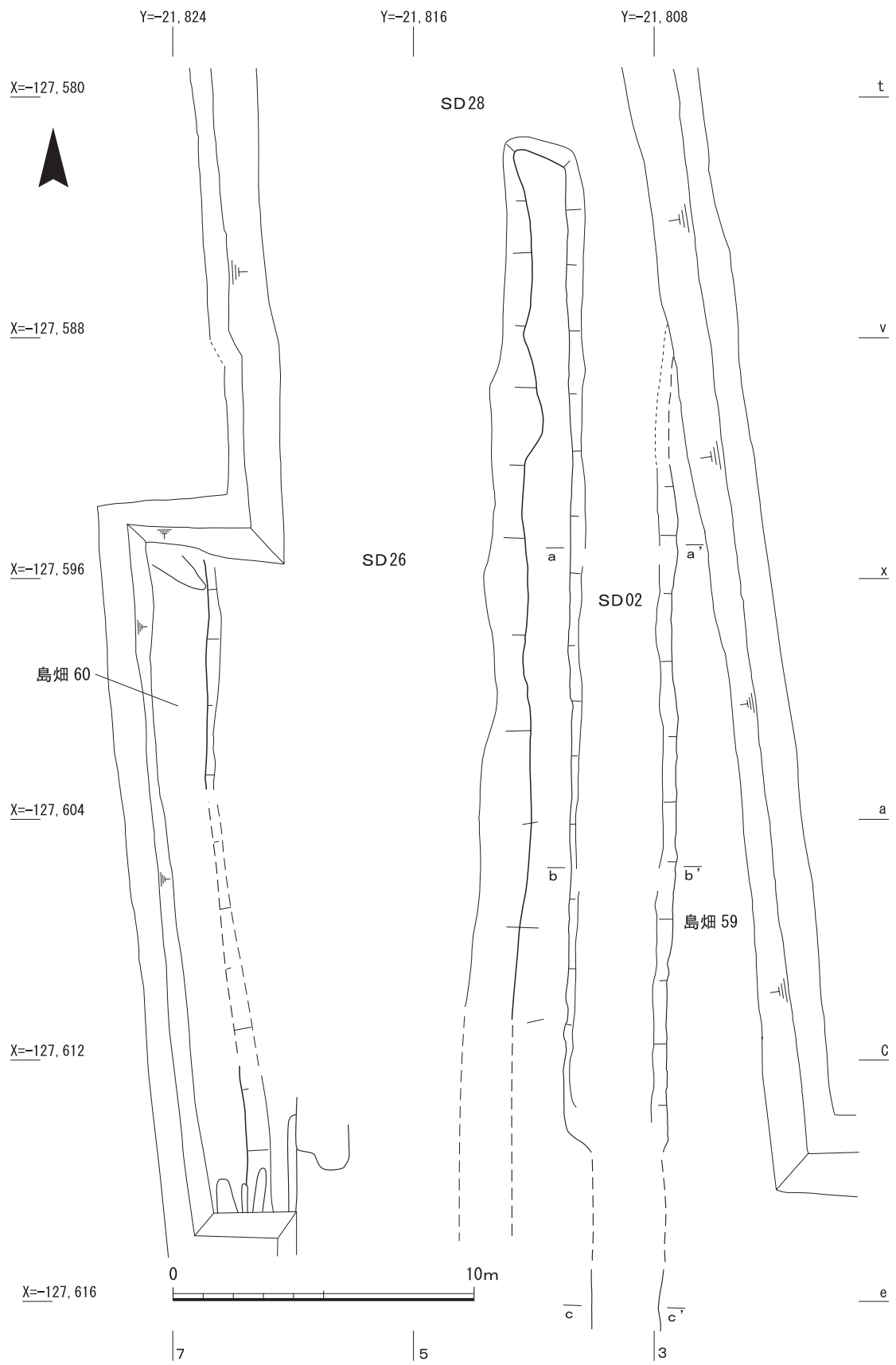
第16図 J地区遺構配置図(1/500)



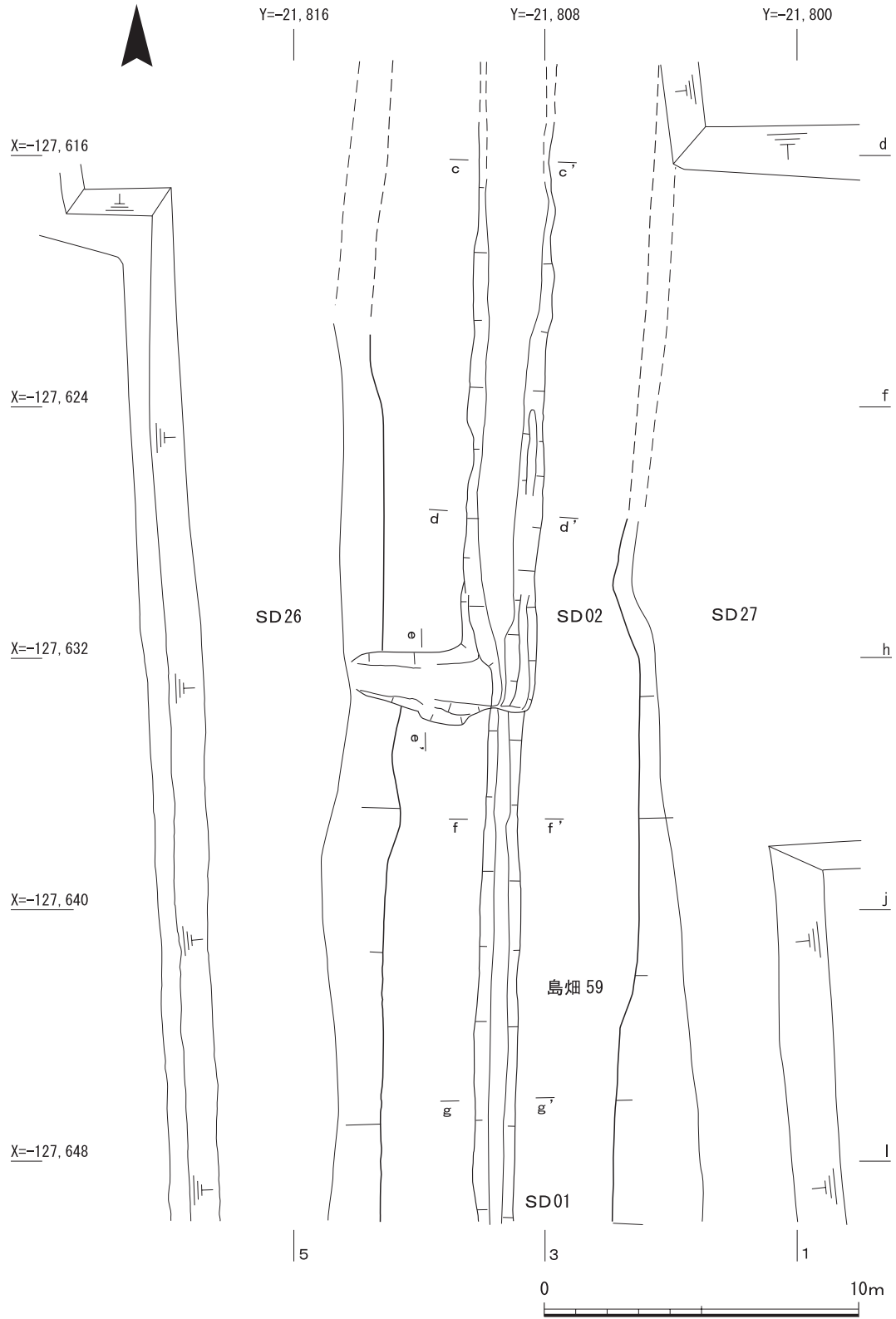
- | | | |
|--------------------------|---|--------------------------------------|
| 1. 灰色 (7.5Y4/1) 砂質土 | 16. 暗オリーブ色 (7.5Y4/3) 砂質土 | 30. 青灰色 (5BG5/1) 粘質土 |
| 2. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂 | 17. 灰色 (10Y4/1) 粘質土 | 31. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土 |
| 3. 灰白色 (7.5Y7/1) 砂質土 | 18. オリーブ灰色 (10Y4/2) 粘質土 | 32. 青灰色 (5BG6/1) 粘質土 |
| 4. 暗オリーブ色 (2.5Y3/3) 砂 | 19. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質土 | 33. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質土 |
| 5. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂 | 20. にぶい黄橙色 (10YR7/3) 砂 | 34. 灰色 (10Y4/1) 粘質土 (SD01 埋土) |
| 6. 灰色 (10Y5/1) 砂質土 | 21. にぶい黄橙色 (10YR7/3)～
灰黄褐色 (10YR6/2) 砂 | 35. オリーブ灰色 (10Y5/1) 粘質土
(SD01 埋土) |
| 7. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂 | 22. 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土 | 36. 淡黄色 (7.5Y7/3) 粘質土 |
| 8. 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 | 23. オリーブ灰色 (10Y6/2) 粘質土 | 37. オリーブ灰色 (10Y6/2) 粘質土 |
| 9. 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土 | 24. オリーブ灰色 (10Y5/2) 粘質土 | 38. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土 |
| 10. 褐灰色 (10YR6/2) 砂 | 25. 灰色 (10Y4/1) 粘質土 | 39. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘質土(基盤層) |
| 11. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂 | 26. 灰オリーブ色 (7.5Y6/3) 砂 | 40. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘質土(基盤層) |
| 12. 白灰色 (5Y8/2) 粗砂 | 27. 灰色 (10Y5/1) 粘質土 | 41. 浅黄色 (2.5Y7/3) 砂 |
| 13. 淡黄色 (5Y8/3) 砂 (やや粗砂) | 28. 明青灰色 (10BG7/1) 粘質土 | |
| 14. オリーブ黄色 (5Y6/3) 砂 | 29. 青灰色 (10BG6/1) 粘質土 | |
| 15. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 砂質土 | | |

第17図 J 地区南壁土層断面図(1/100)

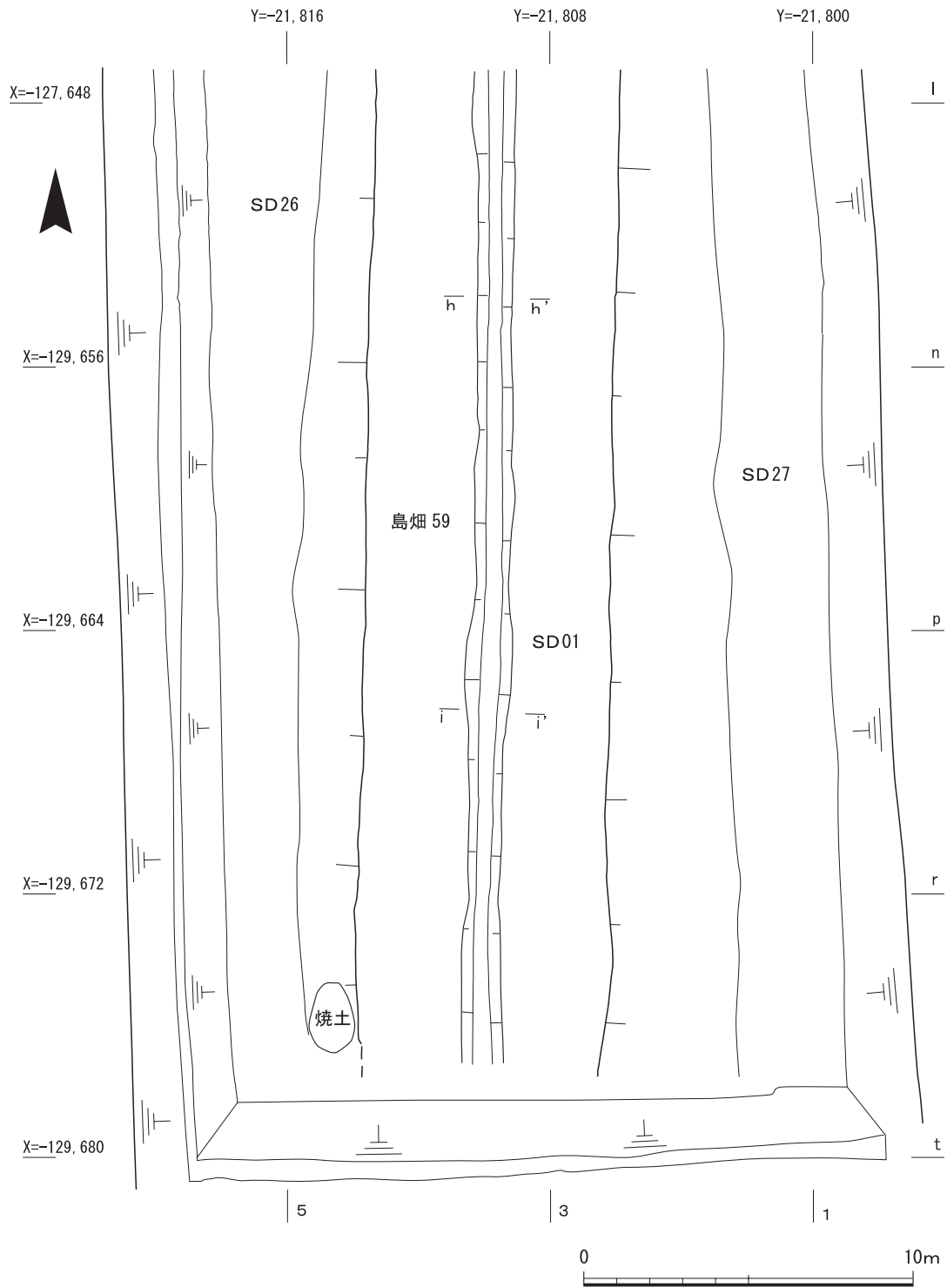
鳥畑59(第18～20図) 調査区のほぼ中央で検出した(F4-u3区ほか)。南北方向の鳥畑の北東角の一部が未検出であるが、鳥畑の大部分を検出した。鳥畑の断面観察によると、鳥畑の基盤層であるにぶい黄色粘質土(39・40層)の上部に、厚さ0.1～0.2m程度の青灰色や灰オリーブ色・淡黄色などの粘質土(30・31・33・36層)がおおよそ水平に堆積している。この上部に約0.5mと、やや厚さのある灰色粘質土(27層)の堆積が認められる。この27層は、上述したように洪水等により、鳥畑の一部が削平されており、その際に灰オリーブ色砂(26層)が堆積したと考えられる。この26層の上に灰色粘質土によって、耕作面を形成しているようである。また、オリーブ灰色や青灰色粘質土などが鳥畑の斜面部にも認められ、鳥畑に伴う盛土と考えられる。以上のような盛土の状況から、時期が新しくなるにしたがって鳥畑の規模が大きくなっているということが指摘できる。基盤層の上面で確認した鳥畑の検出規模は、検出長96.5m、基部幅13.2～14.6m、上面幅7.4～8.0m、高さ0.4m前後である。鳥畑上面の標高はおおよそ13.6～13.7mである。鳥畑の上面で鳥畑の長軸方向に平行する区画溝と推定される溝を2条検出した(S D01・02)。S D01は検出長43.5m、幅1.0～1.5m、



第18図 J地区島畑59(北半部)・60平面図(1/200)

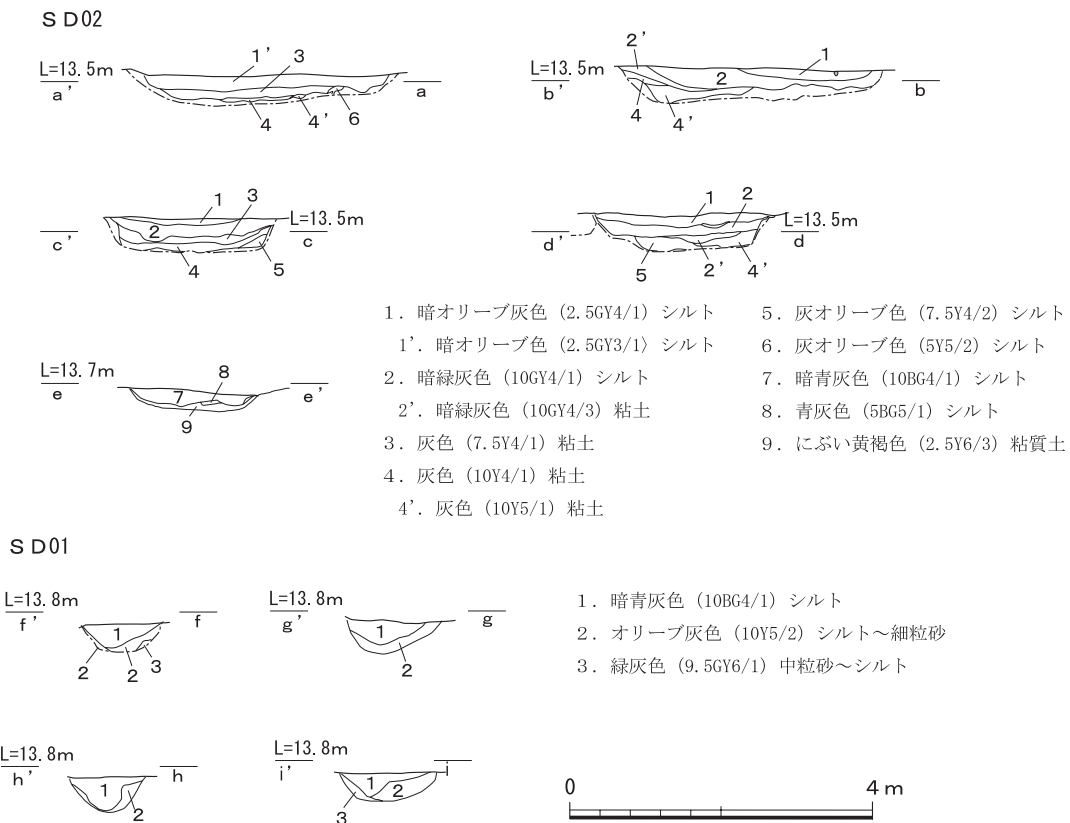


第19図 J 地区島畑59(中央部)平面図(1/200)



第20図 J地区島畑59(南半部)平面図(1/200)

深さ0.35~0.45mで、ほぼ南北に延びる。埋土は大きく2層に分かれ、上層が暗青灰色シルト、下層がオリーブ灰色シルト~細粒砂である。遺物は土師器や須恵器が少量出土したほか、弥生時代と推定される石鏃が出土した。また、SD02は検出長56.2m、幅2.4~3.6m、深さ0.4~0.5mで、南端で西に折れる。西に折れた部分の溝はSD02よりも東側には延びないので、SD02の平面形は逆「L」字状となる。また、北端から約33mのところSD02の西肩が1mほど東へ移動して



第21図 J 地区島畑59区画溝 S D01・02土層断面図(1/100)

溝の幅が狭くなる。埋土は大きく4層に分かれ、上から暗オリーブ灰色シルト、暗緑灰色シルト、灰色粘土、灰オリーブ色シルトである。ただし地点によって微妙な差異が認められる。遺物は土師器や須恵器、瓦器、陶器などが少量出土したほか、弥生時代と推定される石鏃が出土した。S D01とS D02は重複関係にあり、S D02の方が新しい。また、S D02の方が幅が広いことから、本来S D01は島畑59の区画溝として存在していたものを、より幅の広いS D02に掘り直したと考えられる。なお、島畑59に伴う素掘り溝は検出しなかった。島畑の上面の精査などで、土師器や瓦器などが少量出土した。時期はS D01・02の遺物から中世前半である。

島畑60(第18図) 後述する下層遺構の溝S D04の調査に伴い、調査区の西辺の一部を拡張した際に検出した(F4-y6区ほか)。南北方向の島畑の平坦面と斜面の一部を検出したにとどまる。検出長22.5m、基部検出幅1.5~2.5m、上面検出幅1.1~1.8m、高さ0.3m前後である。島畑上面の標高はおよそ13.6mである。島畑60に伴う素掘り溝は斜面部から溝状遺構S D26の底にかけて4条検出した。素掘り溝は検出長0.9~3.3m、幅0.2~0.7m、深さ0.1m前後である。遺物はほとんどないが、拡張時の精査などの際に青磁や土師器などが少量出土した。時期は島畑59と同じ中世前半と推定される。

溝状遺構S D26(第18~20図) 調査区の西半部、島畑59と60の間で検出した(E 4-u4区ほか)。南北方向の溝状遺構の大半を検出した。溝状遺構の土層断面の観察によると、基盤層であるにぶい黄色粘質土(39・40層)の上部にオリーブ灰色や暗オリーブ灰色、灰色などの粘質土の堆積(17

～19・38層)が認められる。これらは島畑59の盛土層に対応しており、島畑が高く盛られるとともに、溝状遺構も徐々に埋没していることが確認できる。その上部には暗オリーブ灰色などの砂質土の堆積(15・16層)がみられる。さらにその上部には淡黄色やオリーブ黄色の砂層の堆積(13・14層)がみられ、溝状遺構はほぼ埋没している。したがって、13・14層は詳細な時期は不明であるが、近世以降の洪水に由来する砂層と考えられ、島畑59はこの砂層によってほぼ埋没させられている。S D26の規模は、検出長98m、検出幅10.6m前後、深さ0.3～0.4mである。溝底の標高はおよそ13.1～13.2mである。遺物は掘削中や精査中に土師器などの細片が出土した。詳細な時期は不明であるが、中世前半と推定される。

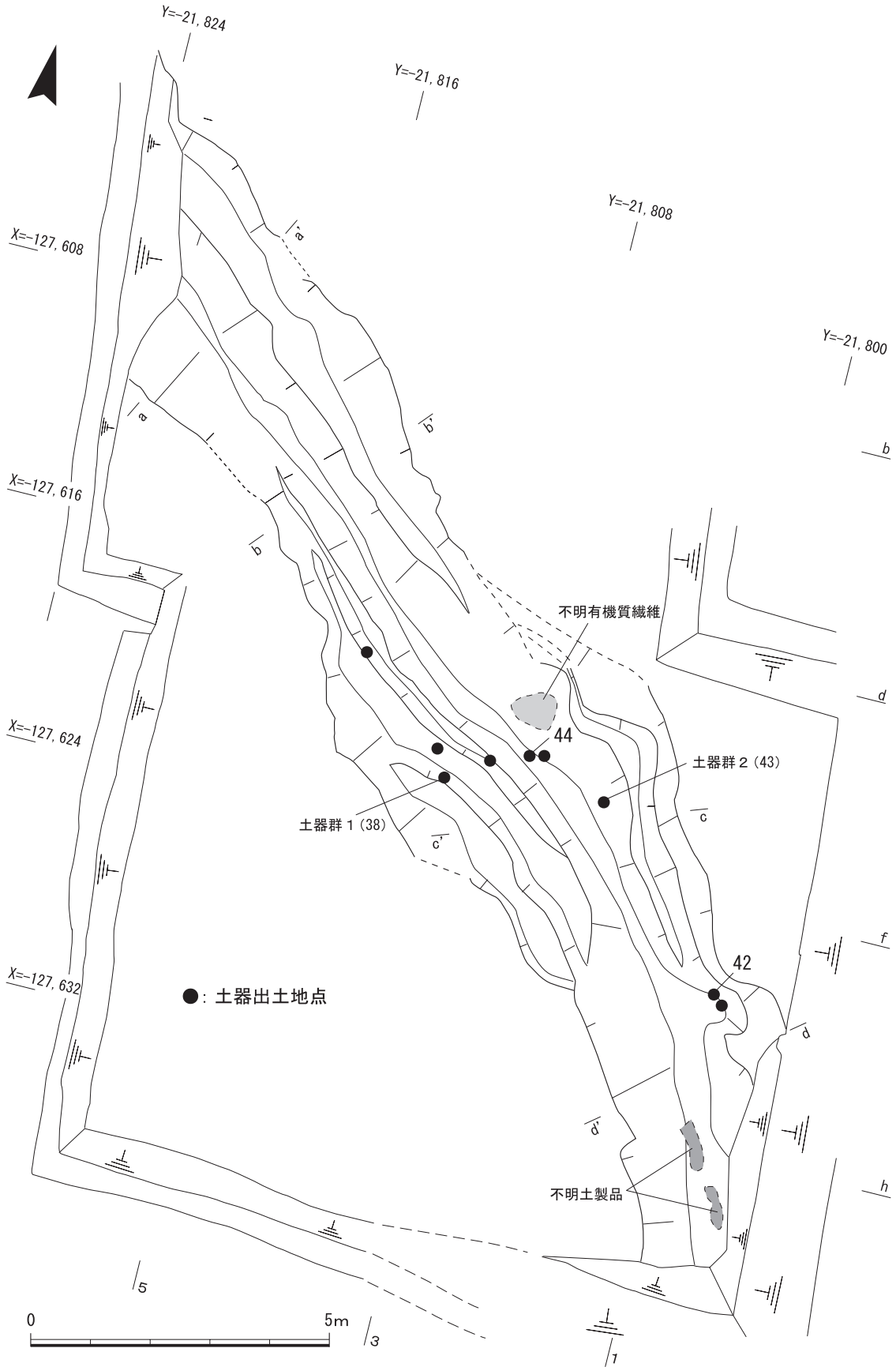
溝状遺構 S D27 (第19・20図) 調査区の東辺部、島畑59の東側で検出した(F3-e25区ほか)。南北方向の溝状遺構の一部の検出にとどまる。溝状遺構の土層の堆積状況は、溝状遺構 S D26とほぼ同じである。基盤層であるにぶい黄色粘質土(39・40層)の上部に灰色や青灰色の粘質土(22・32・37層)が、さらにその上部ににぶい黄橙色の砂層(20・21層)が堆積している。S D26と27の埋没過程はほぼ同じと判断される。S D27の規模は、検出長61.6m、検出幅9.3m、深さ0.4m前後である。溝底の標高はおよそ13.0～13.1mである。遺物は掘削中や精査中に土師器などの細片が出土した。詳細な時期は不明であるが、中世前半と推定される。

溝状遺構 S D28 (第18図) 調査区の北辺部で検出した(E 4-s区ほか)。東西方向の溝状遺構で、城陽市域における条里復元によると、条里の坪境に当たる。検出長12.6m、検出幅7.7m、深さ0.3m前後である。溝底の標高はおよそ13.1m前後である。遺物は出土しなかった。時期は他の溝状遺構と同じ中世前半と推定される。

②下層遺構

溝 S D04 (第22・23図) 調査区の北半部やや南寄りで検出した(F4-a6区ほか)。南東方向から北西方向へ延びる。検出後、一部の掘削を行ったところ建築部材と思われる木製品が出土したことから、調査区の一部を拡張して調査を実施した。S D04の規模は、検出長38m、幅6.5～8m、深さ1.4mである。溝底の標高が南東隅で12.1m、断面d-d'付近で12.0m、断面a-a'付近で11.8mであることから、南東方向から北西方向に流れていたと考えられる。なお、溝の断面形は緩やかな「V」字状を呈している。また、断面c-c'の土層断面を見るとS D04と切り合うような溝状ないし土坑状のものを確認した(31～33・35～42層)が、平面での検出作業では確認できず、遺構の性格は不明である。

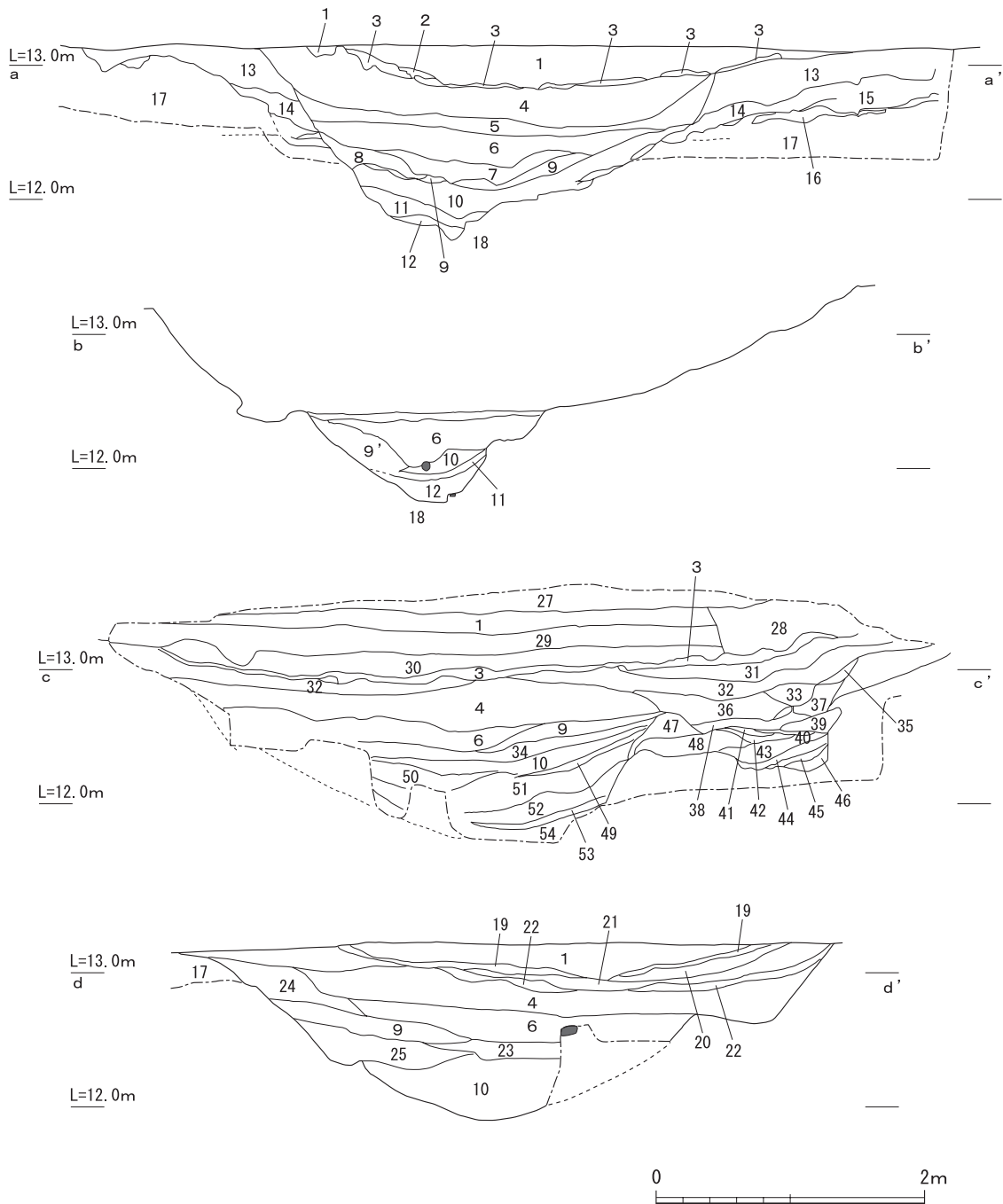
土層の堆積状況(第23図)は、最下層に灰色中粒砂(12層)や灰色細粒砂(11・53層)などの砂層や、暗灰黄色シルト(51層)や灰色シルト(52層)、暗オリーブ灰色シルト(54層)などのシルトの堆積する。砂層の堆積からある程度水が流れていたと考えられる。これらの上層はオリーブ黒色細粒砂(10層)や黒褐色粘土(7層)、オリーブ黒色粘土(4層)など、シルトないし粘土の堆積が続く。これらには自然木や木の葉などが多く含まれているため、常に一定の流れがあったと考えられる。4層の上部にオリーブ灰色極細砂層が薄く堆積するが、非常に細かな砂層である。H地区で検出した溝 S D25も同様の砂層を確認している(第117図18層)。その上部に暗灰黄色、あるいは灰色



第22図 J地区溝S D04平面図(1/100)

もしくは灰オリーブ色シルト(30・29・1層)の堆積がある。これらの層は、H地区の調査成果を参照すると、同地区の溝S D24の埋土に対応すると考えられる。ただし、J地区の調査時に別の溝があるという認識には至っていなかった。さらに1層の上部にある灰オリーブ色シルト(27層)は、島畑の盛土の1つと考えているが、この点もS D24の上部に島畑が形成されていたという、H地区の調査成果に合致する。

遺物としては建築部材や自然木、土師器などが出土した(第24図36～第27図65)。遺物の大半が木材で、土師器は少量出土したのみである。木材は何か所かにまとまって出土している。特に中



第23図 J地区溝S D04土層断面図(1/50)

- | | | |
|---|-----------------------------------|---|
| 1. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト | 18. 暗緑灰色 (10G4/1) 粘土〈基盤層〉 | 37. 灰黄色 (2.5Y6/2) 極細粒砂 |
| 2. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 極細粒砂ないしシルト | 19. 暗オリーブ色 (7.5Y4/3) 極細粒砂ないしシルト | 38. 灰色 (10Y4/1) 細粒砂 |
| 3. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 極細粒砂 | 20. オリーブ灰色 (5GY5/1) 極細粒砂ないしシルト | 39. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト |
| 4. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 粘土 | 21. 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト〈粘り気強い〉 | 40. 黄褐色 (10YR5/6) 中粒砂〈一部粗粒砂を含む〉 |
| 5. オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘土 | 22. 暗緑灰色 (5G4/1) 粘質土 | 41. 灰色 (10Y4/1) シルト〈炭や褐色粒が混じる〉 |
| 6. オリーブ黒色 (5Y2/2) 粘土 | 23. オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト | 42. 灰色 (10Y5/1) 細粒砂と明褐色 (7.5YR5/6) 中粒砂の互層 |
| 7. 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土〈自然木小片、木の葉などを含む〉 | 24. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 極細粒砂混じりシルト | 43. 灰色 (10Y5/1) シルトないし粘土 |
| 8. 黒褐色 (2.5Y3/1) 極細粒砂混じりシルト | 25. オリーブ黒色 (5Y3/1) 極細粒砂混じりシルト | 44. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 極細粒砂〈褐色粒を多く含む〉 |
| 9. オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト混じり極細粒砂〈木っ葉などを含む〉 | 26. 灰色 (5Y6/1) 中粒砂〈基盤層〉 | 45. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細粒砂混じりシルト〈褐色粒を多く含む〉 |
| 10. オリーブ黒色 (5Y2/2) 細粒砂混じりシルト〈自然木片、木の葉などを含む〉 | 27. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト | 46. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト〈褐色粒を多く含む〉 |
| 11. 灰色 (10Y4/1) 細粒砂〈自然木片、木っ葉などを含む〉 | 28. 灰色 (7.5Y5/1) 極細粒砂混じりシルト | 47. 灰色 (7.5Y4/1) 細粒砂 |
| 12. 灰色 (10Y4/1) 中粒砂 | 29. 灰色 (7.5Y4/1) シルト | 48. 灰色 (7.5Y4/1) 粘土 |
| 13. 灰色 (7.5Y4/1) 粘土 | 30. 暗灰黄色 (7.5Y5/2) シルト | 49. 灰色 (5Y4/1) 極細粒砂 |
| 14. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂 | 31. 灰色 (5Y5/1) 粘土 | 50. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘土と灰色 (7.5Y5/1) 中粒砂の互層 |
| 15. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 極細粒砂 | 32. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルトないし粘土 | 51. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト |
| 16. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 極細粒砂ないしシルト | 33. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細粒砂 | 52. 灰色 (10Y4/1) シルト |
| 17. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 極細粒砂〈基盤層〉 | 34. オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト | 53. 灰色 (10Y4/1) 極細粒砂〈自然木、木の葉などを含む、11層に類似〉 |
| | 35. 灰オリーブ色 (5Y5/3) シルトないし極細粒砂 | 54. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルトないし粘土〈木っ葉などを少し含む〉 |
| | 36. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト | |

央付近では建築部材などがまとまって出土した。また、中央よりも南東側で植物質を網代状に編んだものの広がりを確認した。残念ながら、どのような遺物か判断するには至らなかった。さらにその南東側では、粘土塊を握ったような焼き物が出土した。これについても詳細は明らかにできなかった。出土した土師器から溝の時期は古墳時代前期である。なお、平成27年度のH地区の調査で検出した溝S D25はS D04の南東側(上流側)に当たると考えられる。

(3) 出土遺物

① 土器

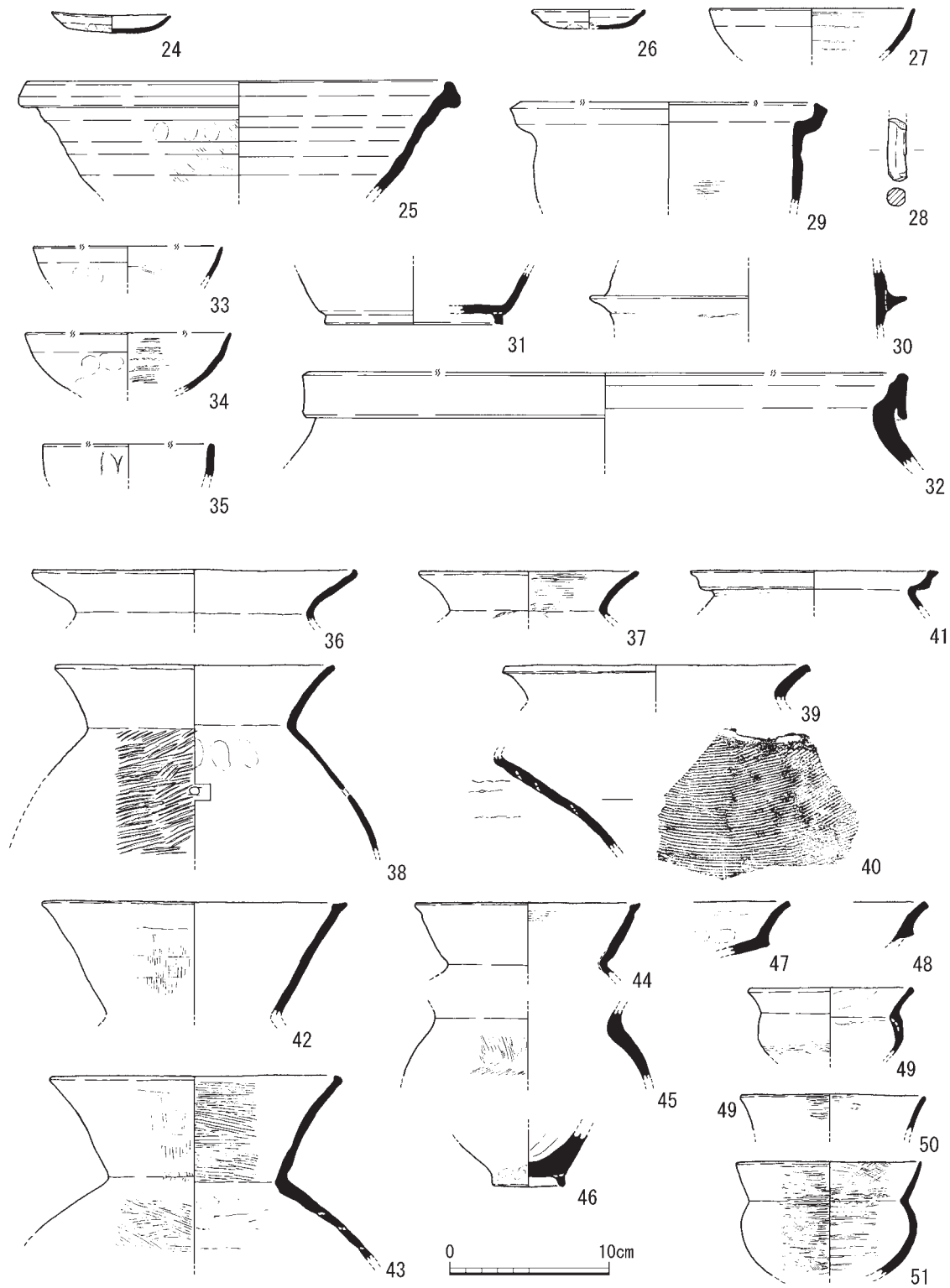
区画溝S D01(第24図24・25) 24は土師器皿である。25は須恵器鉢である。

区画溝S D02(第24図26～32・66～70) 26は土師器皿である。上述の24とほぼ同形同大のものである。27は瓦器椀である。内面のミガキはかなり粗く施されている。28は瓦質土器三足鍋などの脚部の破片と考えられる。29は土師器甕である。口縁端面がほぼ水平となり受け口状を呈する。30は土師器羽釜である。31は須恵器杯^(注11)Bである。奈良時代のものと考えられるが、周辺を含めて奈良時代の遺構は確認していない。32は陶器甕である。小破片であるが、かなり大型品に復元できる。

遺物包含層(第24図33～35) 33・34は瓦器椀の小破片である。34は内面のミガキは密に施されている。35は青磁椀の小破片である。(筒井崇史)

溝S D04(第24図36～51) 36～38・40は庄内形甕である。36は体部以下は欠損するが口縁端

部は僅かにつまみ上げて面を持たせるように整形する。37・38は口縁端部に面を持たないもので、体部は細筋のタタキで仕上げられる。38の体部上位には径0.5cmほどの焼成後穿孔が施されている。41は東海系のS字甕口縁部である。肩部にはヘラ状工具による沈線が巡っており、B類に分類されているものである。時期的にはほかの遺物よりもやや古相を示す。42・43は直口壺で、口



第24図 J地区出土遺物実測図1(1/4)

縁端部はやや外側に肥厚させるように整形するものと、上方へつまみ上げているものがある。43は口径17.0cmを測る。体部外面は横ハケで仕上げられ、口頸部には強い横ナデが施される。内面のケズリは頸部直下までは及んでおらず、稜はやや不明瞭である。44は布留形甕口縁部の可能性がある。45は広口壺の肩部であろうか。器壁はやや厚手であり、内面にはユビオサエや粘土接合痕を残す。47・48は細片ながら二重口縁壺の二次口縁部であろう。49～51は小型丸底壺である。49は体部外面をハケで仕上げるやや粗製のものである。50・51は精製された胎土で製作されており、外面には緻密なヨコミガキが施される。51は口径10.8cmを測る。

以上の土器群は溝から出土したものであり一括性には乏しいものの、^(注12) おおむね佐山Ⅲ式前半、布留式前半の年代が与えられよう。(桐井理揮)

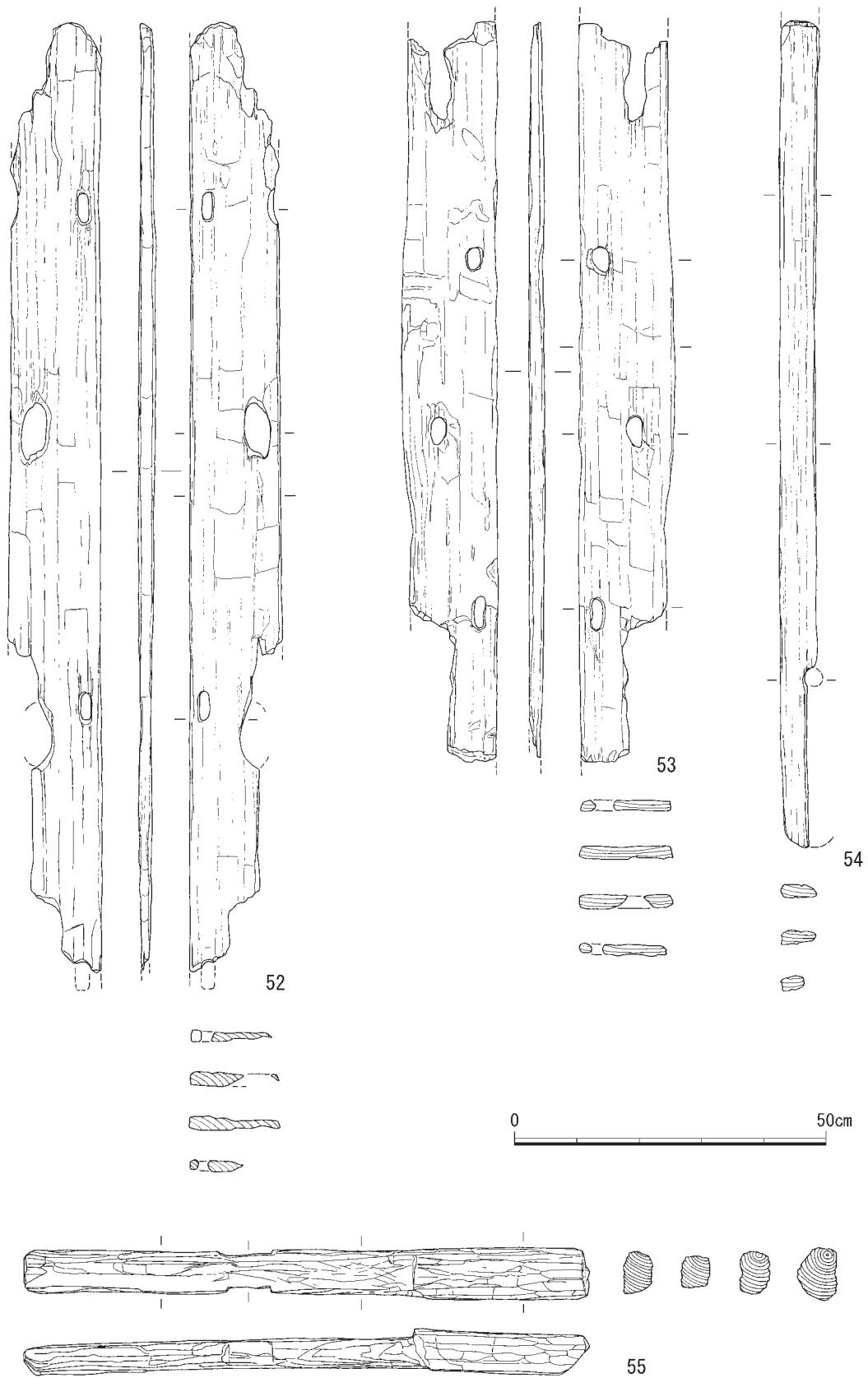
②木製品(第25図52～第27図65)

木製品はいずれも溝S D04から出土した。^(注13) 52～58・62・63は建築部材と推定される。52・53は幅15cmほどの板材に長軸5cm程度短軸2cm程度の長楕円状の穴を穿つものである。52は、2か所確認できるほか、折損部に同様の加工痕跡が認められる。全長152.0cm、厚さ2.6cmである。53も少なくとも2か所に穴が認められる。残存長119.2cm厚さ2.4cmである54は幅6.0cmの板材で、一方の端部を丸く加工して仕上げている。そこから約25cmのところ直径3cmほどの円孔を穿っている。反対側の端部は欠損する。55は全長90.6cm、一辺8cm程度の角材を加工している。角材の1面を長さ60cm、深さ1cmほどを切り取り、これに直交する2面に長さ7～9cm、深さ0.8cmほどに切り取っている。他の建築部材と組み合わせるための加工であろう。56は残存長195.6cm、幅6.0cm、厚さ1.6cmの、非常に細長い板材である。図の上部の側は工具で截断された痕跡が認められる。もう一方の端は折損する。57も56に類似した板材で、残存長167.6cm、幅8.0cm、厚さ2.4cmである。図の上部の側は工具で斜めに截断された痕跡が確認できる。もう一方の端は折損する。58は板材である。図の下部は欠損する。全長84.7cm、幅16.1cm、厚さ1.8cmである。62は55と同様に柱材の一部と推定されるが、図の左端は加工している。左端から約19cmのところを長さ8.5cm、深さ1cmほど削って加工している。55と同じく他の建築部材と組み合わせるための加工であろう。63も板材である。全体に劣化が認められ、両端部は残存しない。残存長50.2cm、幅13.0cm、厚さ1.7cmである。

59～61・64・65は杭である。59は先端が折損している。残存長80.2cm、直径9.4cmである。60も先端が折損している。残存長117.2cm、直径9cm前後である。61・64は先端の加工痕が明瞭に残る。61は全長92.5cm、直径7cm前後、64は残存長46.0cm、直径3.3cmである。65は先端のみの破片資料である。

③石器(第28図)

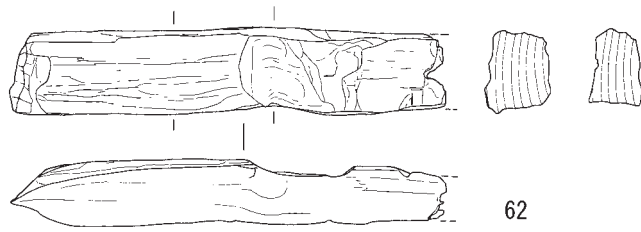
66は剥片である。島畑59の区画溝S D01で出土した。長さ3.8cm、幅1.95cm、重量2.5gである。67は凹基式の石鏃である。島畑59の上面精査中に出土した。残存長2.2cm、幅1.9cm、重量1.5gである。68～70は有茎式の石鏃である。いずれも溝S D04で出土した。68全長5.75cm、幅2.15cm、重量5.8gである。69は全長5.25cm、幅2.1cm、重量4.4gである。70は全長5.6cm、幅3.5cm、重量



第25図 J地区出土遺物実測図2(1/10)

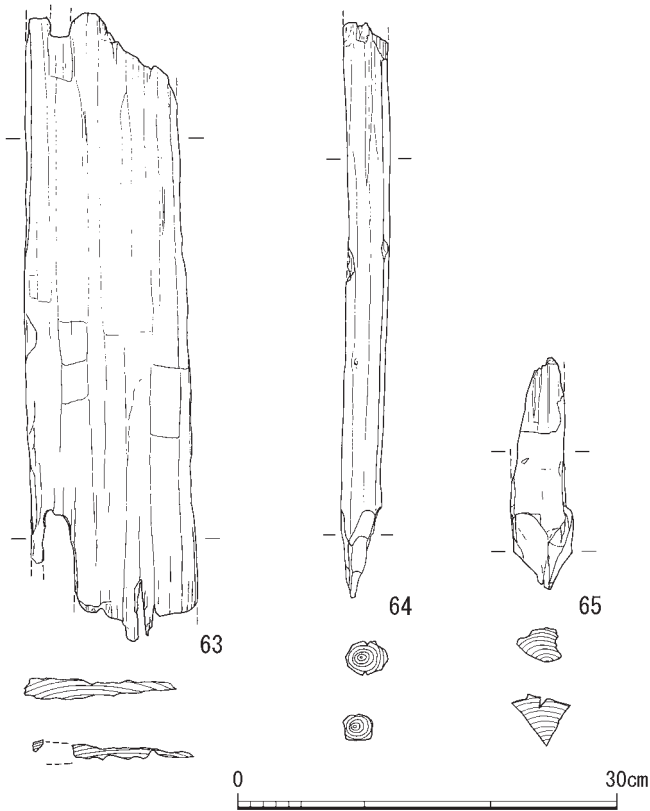


第26図 J地区出土遺物実測図3(1/10)

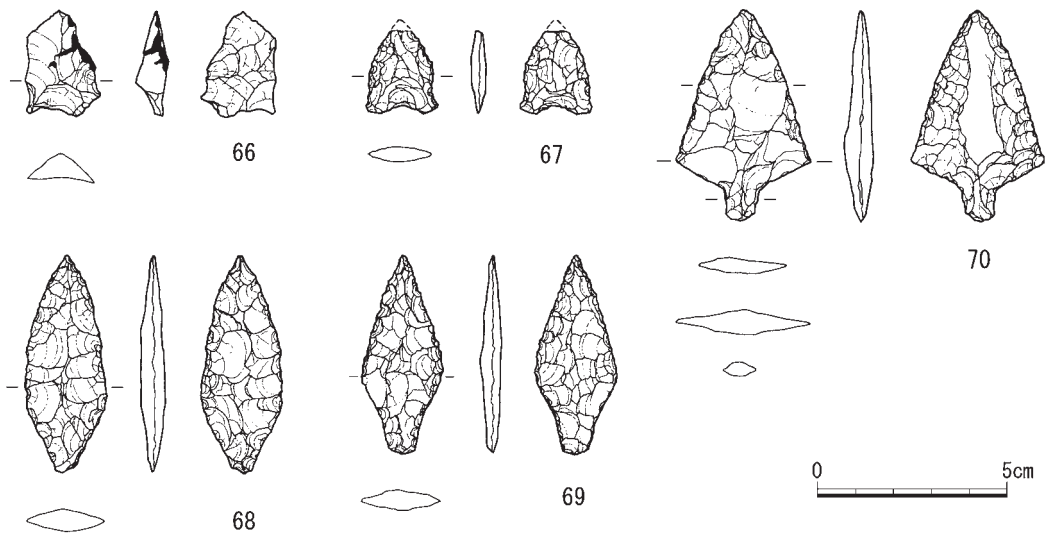


8.2gである。以上の石器はいずれも材質はサヌカイトである。

(筒井崇史)



第27図 J地区出土遺物実測図4(1/6) 木製品



第28図 J地区出土遺物実測図5(1/2) 石器

4) K地区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

J地区の北側に設定した調査区で、対象となる工事造成範囲が東西2か所あるため、2か所の調査区を設定した(K1・K2区)。K1区は全長106m、幅14.7～17.1mで、北でわずかに西に傾く矩形を呈する。K2区は全長100m、北辺の幅25mで、おおむね三角形を呈する。K2区では、鳥畑の状況を確認するためや下層遺構の延長部分を検出するため、調査区の一部を拡張した。ここでは両者を合わせて報告する(第29図)。K1・K2区の現地表面の標高はおよそ15.1mである。両調査区とも現地表下1.5m前後で、中世の鳥畑8基、溝状遺構8条を検出した。また、鳥畑上面を精査して下層遺構として弥生時代と推定される溝1条のほか、時期不明の焼土などを検出した。調査面積はK1区が1,660㎡、K2区が1,460㎡で、合計3,120㎡である。出土した遺物は広範囲を調査したにもかかわらず整理箱でわずか2箱である。

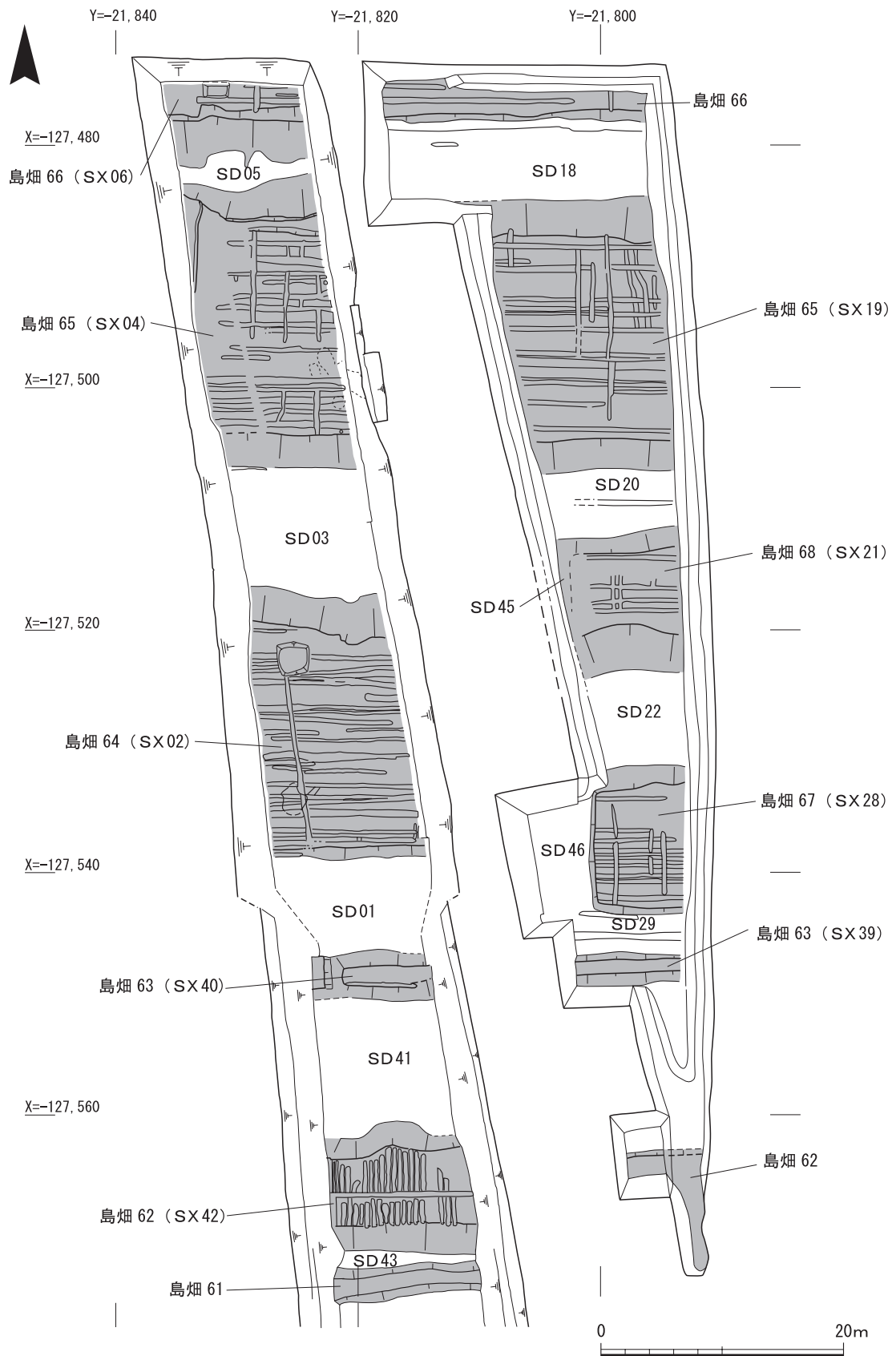
基本的な層序を第30図で説明すると、耕作土である暗緑灰色粗粒砂(2層)の下層には、厚さ30～50cmの明黄褐色細粒砂～中粒砂(22層)、またはオリーブ黒色細粒砂～粗粒砂(34層)が調査区の広い範囲に認められる。この下層に近世ないし近代の鳥畑と溝状遺構が確認できる。鳥畑の部分では厚さ20～50cmほど黄褐色ないし暗オリーブ褐色中粒砂(3～5層)がおおむね水平な層序となっており、鳥畑の盛土と推定される。これを除去して最初期の鳥畑を検出した。この下層では鳥畑の基盤層である緑灰色中粒砂やオリーブ灰色シルト(19・20層)が調査区全体で確認できる。これに対して溝状遺構では灰色や緑灰色、暗灰黄色などの細かな砂層ないしシルト層(15・16・31・32・40～42層など)の堆積が認められる。なお、溝状遺構の基盤層も19・20層である。

(2) 検出遺構

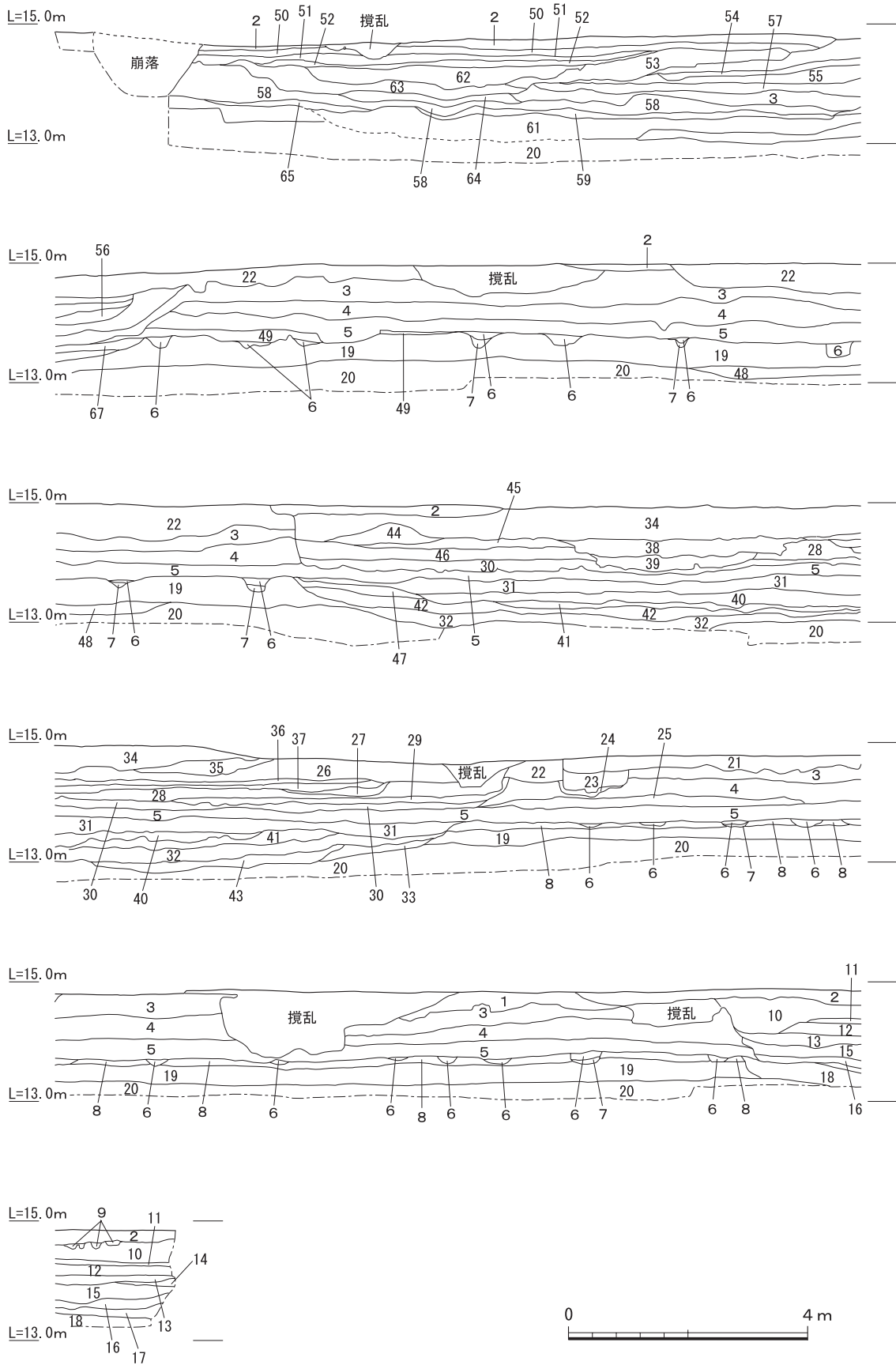
① 上層遺構

鳥畑61(第32図) K1区の南端で検出した(E4-r3区ほか)。東西方向の鳥畑の一部を検出した。基盤層であるオリーブ灰色シルト(第30図20層)を整形して形成されたと考えられる。検出長12.2m、基部幅2.2～2.9m、上面幅0.9～1.6m、高さ0.2m前後である。鳥畑上面の標高はおよそ13.3mである。非常に幅が狭いため鳥畑ではなく、里道等の可能性もある。なお、城陽市域における条里型地割りの復原によると、鳥畑61は坪境のすぐ北側に位置する。鳥畑に伴う素掘り溝は検出しなかった。また、遺物も出土しなかった。時期は周辺の鳥畑と同じく中世前半と推定される。

鳥畑62(SX42)(第32図) K1区の南半部とK2区の南端で検出した(E3-p24区ほか)。両調査区を東西方向にまたいで存在する鳥畑の一部を検出した。基盤層であるオリーブ灰色シルト(第30図20層)を整形して形成されたと考えられる。検出長28.7m(未検出分を含む)、基部幅10.8m、上面幅5.6～6.1m、高さ0.5m前後である。鳥畑上面の標高はおよそ13.7mである。鳥畑の上面では長軸方向に1条、短軸方向に37条の素掘り溝を検出した。短軸方向の素掘り溝は長軸方向の溝によって南北に分割されていることから、この溝は鳥畑を区画するための溝の可能性はある。長軸方向の溝は検出長11.9m、幅0.3～0.55m、深さ0.25mである。短軸方向の素掘り溝は検出長1.1～3.6m、幅0.3m前後、深さ0.1m前後である。溝の底には鍬ないし鋤の痕跡が認められた。遺物



第29図 K地区上層遺構配置図(1/500)



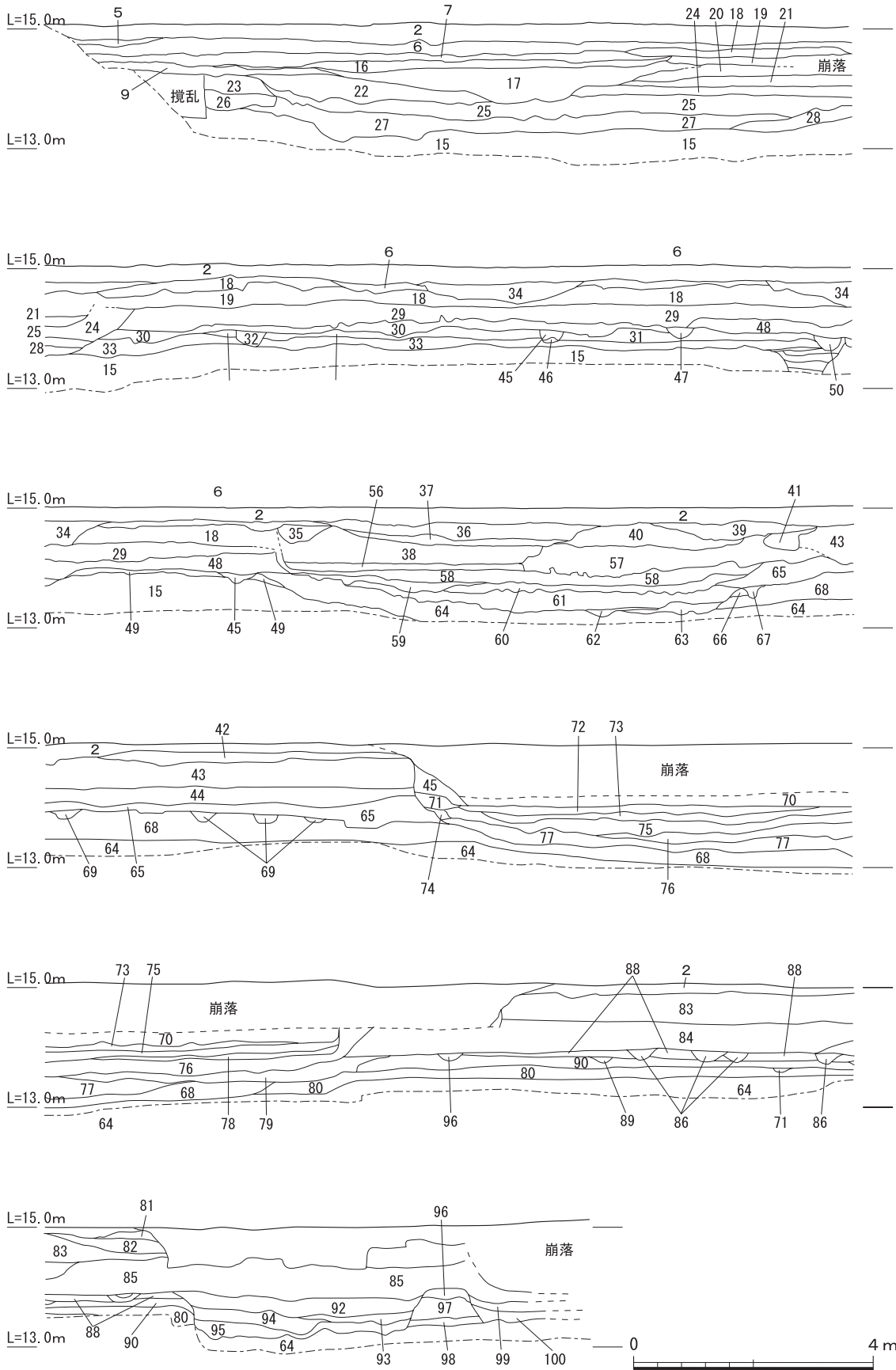
第30図 K 1 区東壁土層断面図(1/100)

- | | | |
|-------------------------------------|------------------------------------|---|
| 1. 黄褐色 (10YR5/8) 粗粒砂～細粒砂 | 22. 明黄褐色 (10YR6/6) 細粒砂～中粒砂 | 44. 灰白色 (10Y7/1) 中粒砂～粗粒砂 |
| 2. 暗緑灰色 (7.5GGY4/1) 粗粒砂～シルト | 23. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗粒砂 | 45. 青灰色 (5BG5/1) 細粒砂～中粒砂 |
| 3. 黄褐色 (2.5Y5/4) 中粒砂 | 24. オリーブ灰色 (5Y5/2) 中粒砂～シルト | 46. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 細粒砂 |
| 4. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中粒砂 | 25. オリーブ色 (5Y5/4) 中粒砂 | 47. 暗オリーブ色 (5Y4/4) 細粒砂～シルト |
| 5. 暗オリーブ褐色 (5Y4/4) 中粒砂～細粒砂 | 26. 黄褐色 (10YR5/8) 中粒砂～粗粒砂 | 48. 明黄褐色 (10YR6/8) 細粒砂～シルトに明褐色 (7.5YR5/8) シルトと炭化物が混じる |
| 6. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 中粒砂～シルト〈耕作溝埋土〉 | 27. 灰色 (10Y4/1) 細粒砂〈粘りやや強い〉 | 49. 灰色 (7.5Y4/1) 中粒砂 |
| 7. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 中粒砂～シルト〈耕作溝埋土〉 | 28. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細粒砂〈やや粘りあり〉 | 50. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 中粒砂～粗粒砂 |
| 8. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細粒砂～シルト | 29. 暗緑灰色 (7.5GY3/1) シルト | 51. オリーブ黒色 (5Y3/2) 中粒砂 |
| 9. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粗粒砂 | 30. 灰色 (10Y4/1) 細粒砂～シルト | 52. 灰色 (5Y5/1) 中粒砂～細粒砂 |
| 10. 浅黄色 (5Y8/3)～黄色 (5Y7/6) 中粒砂～極粗粒砂 | 31. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細粒砂～シルト | 53. 灰色 (10Y4/1) 中粒砂～シルト |
| 11. 灰色 (10Y5/1～4/1) 中粒砂～粗粒砂 | 32. 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) 細粒砂～シルト | 54. オリーブ黄色 (5Y6/3) 中粒砂～粗粒砂 |
| 12. 灰色 (7.5Y4/1) 中粒砂 | 33. 緑灰色 (7.5GY5/1) 粘質土〈細粒砂含む〉 | 55. 灰色 (10Y5/1) 中粒砂～シルト |
| 13. オリーブ黒色 (10Y3/2) シルト | 34. オリーブ黒色 (10Y3/1) 細粒砂～粗粒砂 | 56. 灰色 (7.5Y4/1) 細粒砂～中粒砂 |
| 14. 暗緑灰色 (7.5GY3/1) シルト | 35. 灰白色 (2.5Y8/2) 粗粒砂 | 57. 暗緑灰色 (10GY3/1) 粘質土〈細粒砂を含む〉 |
| 15. 灰色 (10Y4/1) 細粒砂～シルト | 36. オリーブ黒色 (10Y3/2) 細粒砂 | 58. オリーブ灰色 (10Y4/2) 中粒砂～シルト |
| 16. 暗緑灰色 (10GY4/1) 細粒砂～シルト | 37. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細粒砂 | 59. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト |
| 17. 緑灰色 (7.5GY5/1) シルト | 38. 暗緑灰色 (10GY4/1) 中粒砂～シルト | 60. 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) シルト |
| 18. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘質土〈粘り強い〉 | 39. 明褐色 (7.5YR5/8) 中粒砂～粗粒砂 | 61. 緑灰色 (10GY5/1) 中粒砂～シルト |
| 19. 緑灰色 (10GY5/1) 中粒砂 | 40. 灰色 (7.5Y5/1) 細粒砂～シルト | 62. 灰オリーブ色 (10Y4/2) 中粒砂～粗粒砂 |
| 20. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) シルト〈基盤層〉 | 41. 暗青灰色 (5BG4/1) 細粒砂～シルト | 63. 暗緑灰色 (7.5GY3/1) 粗粒砂～シルト |
| 21. 明黄褐色 (10YR7/4) 粗粒砂 | 42. 青灰色 (10BG5/1) 粘質土〈細粒砂を含む〉 | 64. 灰色 (10Y4/1) 細粒砂～シルト |
| | 43. 青灰色 (5BG5/1) 中粒砂～細粒砂 | 65. 灰色 (10Y5/1) 細粒砂～中粒砂 |

は出土しなかった。時期は周辺の島畑と同じく中世前半と推定される。

島畑63 (S X 39・40) (第32図) K1区とK2区の南半部で検出した(E3-I24区ほか)。両調査区を東西方向にまたいで存在する東西方向の島畑の一部を検出した。島畑の断面観察(第31図)によると、基盤層である灰色細粒砂(64層)の上部に、灰オリーブ色粘質土(98層)、オリーブ色細粒砂(97層)、灰色細粒砂(96層)の層序が認められた。これら3層は断定できないが、盛土によって形成されたと思われる。なお、最初期の島畑の上面は97層上面の可能性もある。検出長30.3m(未検出分を含む)、基部幅2.3～4.2m、上面幅1.1～1.7m、高さ0.5mである。島畑上面の標高はおよそ13.7mである。非常に幅が狭いため島畑ではなく、里道等の可能性もあるものの、城陽市域における条里型地割りの復原では坪境に一致しない。K1区で島畑に伴う素掘り溝を1条検出した。検出長5.9m、幅0.3m、深さ0.1mである。遺物は検出中に土師器の細片などが出土したが、確実に島畑63に伴うものである。時期は周辺の島畑と同じ中世前半と推定される。

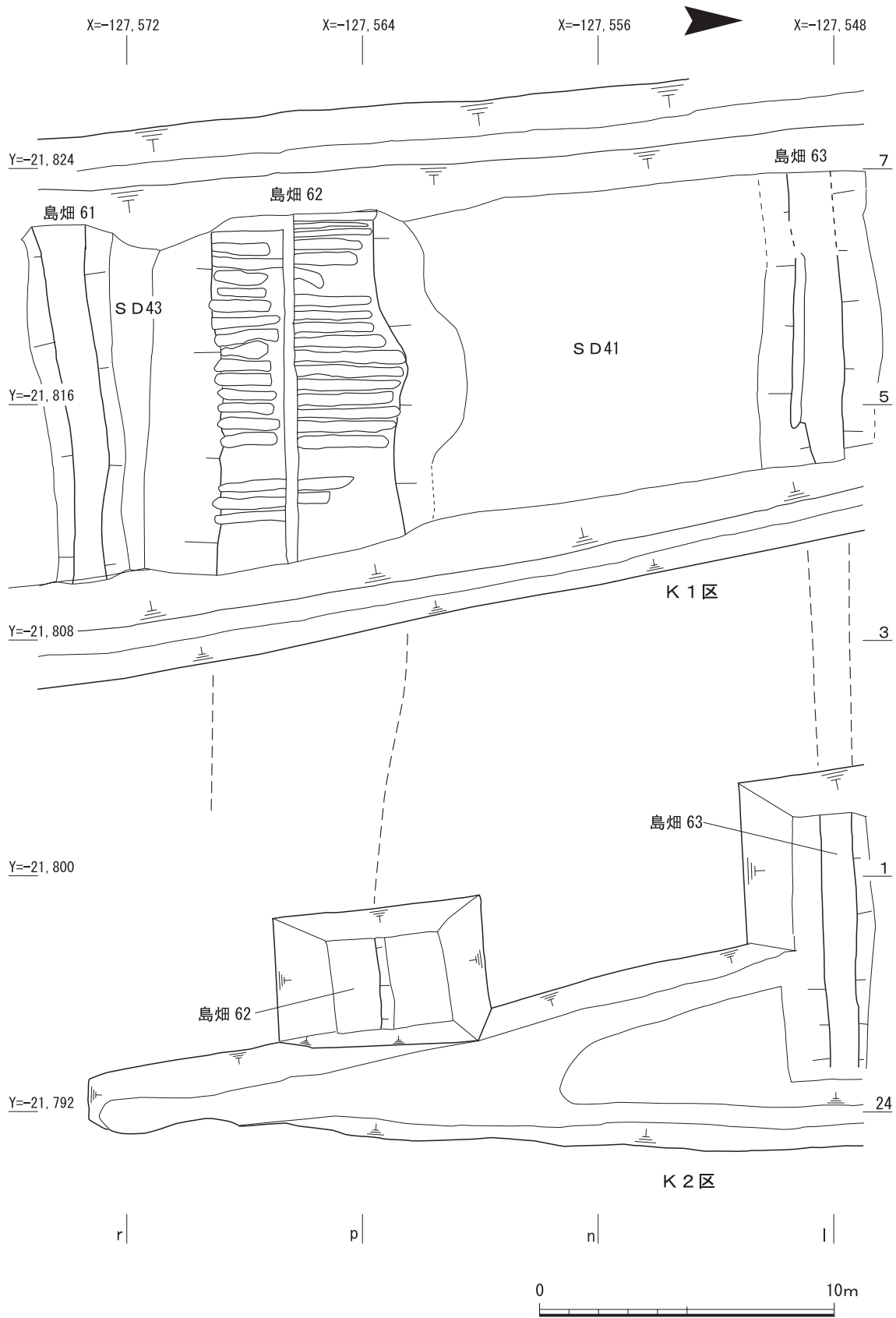
島畑64 (S X 02) (第33図) K1区のほぼ中央で検出した(E4-j4区ほか)。東西方向の島畑の一部を検出した。島畑の断面観察(第30図)によると、島畑の基盤層である緑灰色中粒砂やオリーブ灰色シルト(19・20層)の上部に厚さ15cmほどのオリーブ色細粒砂～シルト(8層)が島畑全体に認められる。これを基盤として暗灰黄色中粒砂～シルト(6層)などを埋土とする素掘り溝が多



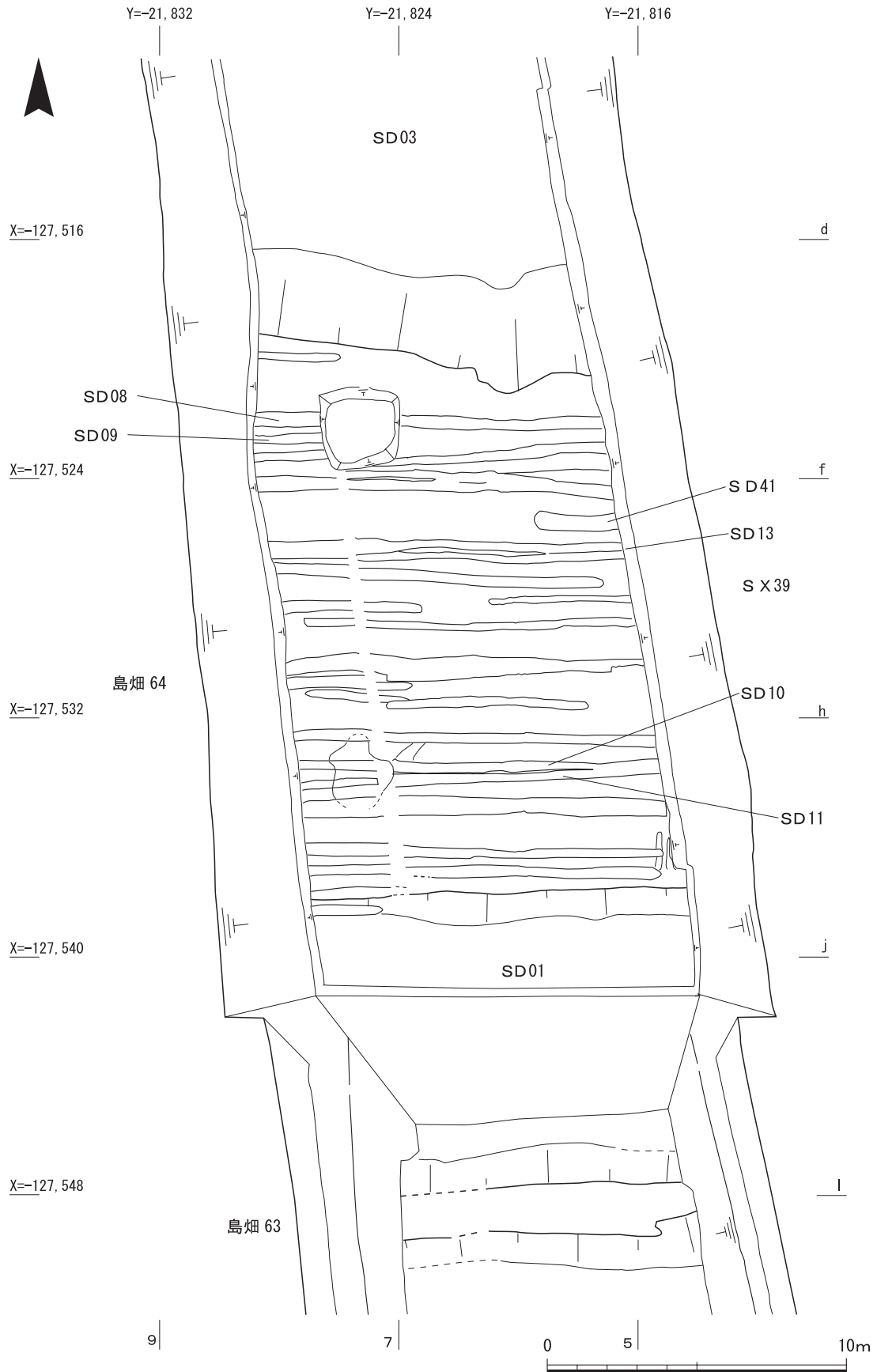
第31図 K 2 区東壁土層断面図(1/100)

- | | | |
|---|--|---|
| 1. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 細粒砂
～粗粒砂 | 33. 暗オリーブ色 (5Y4/4) 細粒砂～
粗粒砂 | 67. オリーブ灰色 (5GY6/1) シルト |
| 2. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗粒砂～
極粗粒砂 | 34. 黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂～粗粒砂 | 68. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 細粒砂～
粗粒砂 |
| 3. 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土
〈粗粒砂を含む〉 | 35. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細粒砂 | 69. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細粒砂 |
| 4. 黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂～粗粒砂 | 36. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粗粒砂 | 70. 暗灰黄色 (2.5Y4/2)～黒褐色
(2.5Y3/2) シルト |
| 5. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂～中粒砂 | 37. 灰色 (5Y5/1) 粗粒砂 | 71. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 細粒砂 |
| 6. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細粒砂
〈径1cm程度の小レキを含む〉 | 38. 灰色 (5Y5/1) 中粒砂～粗粒砂 | 72. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 細粒砂
～粗粒砂 |
| 7. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト～
粗粒砂 | 39. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗粒砂 | 73. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト～
粗粒砂 |
| 8. 灰色 (7.5Y4/4) 細粒砂 | 40. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細粒砂～粗粒砂 | 74. 暗灰色 (10G5/1) シルト～粗粒砂 |
| 9. 緑灰色 (7.5GY5/1) 細粒砂～シルト | 41. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中粒砂～
極粗粒砂 〈径5cm程度のレキを含む〉 | 75. 暗緑灰色 (10GY3/1) シルト |
| 10. 灰色 (10Y5/1) 細粒砂 | 42. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中粒砂～
極粗粒砂 | 76. 暗青灰色 (5GB5/1) シルト |
| 11. 暗オリーブ色 (5Y4/3) 細粒砂～
シルト | 43. 明褐色 (7.5YR5/8) 細粒砂 | 77. 青灰色 (5GB= /1) シルト |
| 12. オリーブ灰色 (10Y4/2) シルト | 44. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細粒砂 | 78. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 粘質土 |
| 13. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 細粒砂 | 45. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細粒砂 | 79. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト |
| 14. 暗オリーブ色 (5Y4/4) 細粒砂 | 46. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂～中粒砂 | 80. 黄褐色 (2.5Y5/6) シルト～粗粒砂 |
| 15. 黄褐色 (2.5Y5/6) 細粒砂～粗粒砂 | 47. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細粒砂 | 81. 明褐色 (7.5YR5/6) 細粒砂～粗粒砂 |
| 16. 灰色 (10Y4/1) シルト～粗粒砂 | 48. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細粒砂 | 82. 灰色 (5Y5/1) 細粒砂～粗粒砂 |
| 17. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト～
粗粒砂 | 49. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒砂 | 83. にぶい褐色 (10YR5/4) 細粒砂～
粗粒砂 |
| 18. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト
～細粒砂に明黄褐色 (2.5Y7/6)
粗粒砂が混じる | 50. 黄褐色 (2.5Y5/6) 細粒砂 | 84. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂 |
| 19. 灰色 (5Y4/1) 細粒砂～粗粒砂 | 51. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂～粗粒砂 | 85. 暗緑灰色 (10GY4/1) 細粒砂 |
| 20. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 細粒砂～
粗粒砂 | 52. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細粒砂～
シルト | 86. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細粒砂 |
| 21. 灰色 (10Y6/1) 細粒砂～中粒砂 | 53. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト
〈炭化物を少し含む〉 | 87. 灰色 (10Y4/1) シルト～細粒砂 |
| 22. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト | 54. 灰色 (7.5Y4/1) シルトに明褐色
(7.5YR5/8) シルトが混じる | 88. 黄褐色 (2.5Y8/6) シルト～細粒砂 |
| 23. 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト～細粒砂 | 55. 灰色 (7.5Y4/1) シルト | 89. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト～
細粒砂 |
| 24. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト | 56. 灰色 (10Y5/1) シルト～中粒砂 | 90. 黄褐色 (2.5Y5/4・5/6) シルト～
細粒砂 |
| 25. 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト | 57. オリーブ色 (5Y5/4) 細粒砂～粗粒砂 | 91. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト～細粒砂 |
| 26. 灰色 (10Y4/1) シルト
〈炭化物が少し混じる〉 | 58. 灰色 (10Y4/1) 細粒砂～中粒砂 | 92. オリーブ灰色 (10Y4/2) シルト～
細粒砂 |
| 27. 暗青灰色 (5BG4/1) シルト | 59. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト | 93. 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト |
| 28. 青灰色 (10BG5/1) シルト～粗粒砂 | 60. オリーブ灰色 (5GY5/1) シルト～
粗粒砂 | 94. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細粒砂 |
| 29. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細粒砂 | 61. 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘質土 | 95. 緑灰色 (10GY5/1) シルト |
| 30. 黄褐色 (2.5Y5/6) 細粒砂 | 62. 緑灰色 (10GY5/1) 粘質土
〈中粒砂を含む〉 | 96. 灰色 (10Y4/1) 細粒砂 |
| 31. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細粒砂 | 63. 緑灰色 (7.5GY5/1) シルト | 97. オリーブ色 (5Y5/4) 細粒砂 |
| 32. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト～細粒砂 | 64. 灰色 (10Y4/1) 細粒砂～粗粒砂 | 98. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘質土
〈粗砂を含む〉 |
| | 65. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 細粒砂 | 99. 緑灰色 (10GY5/1) シルト |
| | 66. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細粒砂～
粗粒砂 | 100. 緑灰色 (7.5GY5/1) シルト～細粒砂 |

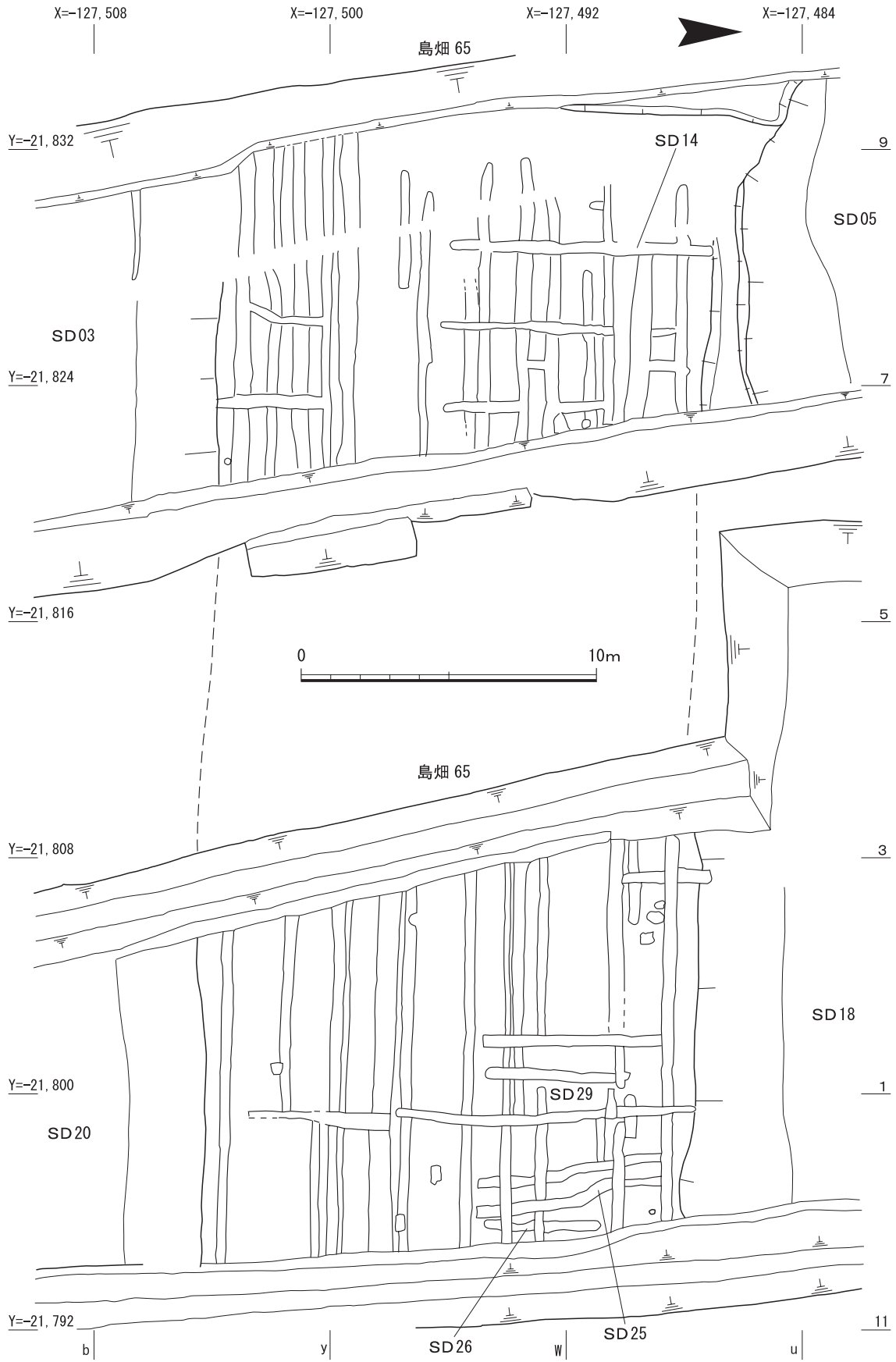
数掘削されている。8層は鳥畑の最初期の盛土もしくは耕作土と推定される。この上部に暗オリーブ褐色中粒砂～細粒砂(5層)、オリーブ褐色中粒砂(4層)、黄褐色中粒砂(3層)と、盛土を繰り返す、鳥畑が徐々に高くなっていったと考えられる。最も古い鳥畑の規模は、検出長11.9m、基部幅22.2m、上面幅18.2m、高さ0.7mである。鳥畑上面の標高はおよそ13.6mである。鳥畑の上面では28条前後の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長2.6～11.9m、幅0.2～0.5m、深さ0.1m前後である。東側に位置する鳥畑67・68は西端を検出したことから、両鳥畑と鳥畑64とは別個の鳥畑と考えられる。この点は、調査前の水田の区画も同様であることから、現在の水田の配置が



第32図 K地区島畑61～63平面図(1/200)



第33図 K地区島畑64平面図(1/200)



第34図 K地区島畑65平面図(1/200)

過去の島畑の配置を強く踏襲していることが指摘できる。遺物は島畑上面の精査や素掘り溝から瓦器、土師器、須恵器、平瓦などが出土した。時期は中世前半である。

島畑65 (S X04・19) (第34図) K1区とK2区の北半部で検出した(D3-y25区ほか)。両調査区を東西方向にまたいで存在する島畑の一部を検出した。島畑の断面観察(第30図)によると、島畑の基盤層である緑灰色中粒砂やオリーブ灰色シルト(19・20層)の上面に暗灰黄色や灰オリーブ色の中粒砂ないしシルト(6・7層)を埋土とする素掘り溝が掘られている。これら最初期の島畑の北半部には灰色中粒砂による薄い盛土ないし堆積が認められる。この上部には島畑64と同様に、オリーブ褐色中粒砂～細粒砂(5層)、オリーブ褐色中粒砂(4層)、黄褐色中粒砂(3層)と、盛土を繰り返し、島畑が徐々に高くなっていったと考えられる。最も古い島畑の規模は、検出長38.4m(未検出分を含む)、基部幅22.6～23.8m、上面幅16.5～17.4m、高さ0.7～0.8mである。島畑上面の標高は13.6～13.8mである。島畑の上面では40条前後の素掘り溝を検出した。これらは東西方向のものと南北方向のものがあり、交互に重複していることから、繰り返し掘り直されていたと推定される。素掘り溝は検出長2.8～13.2m、幅0.3～0.9m、深さ0.1m前後である。遺物は島畑上面の精査や素掘り溝から瓦器、土師器、須恵器、磁器などが出土した。時期は中世前半である。

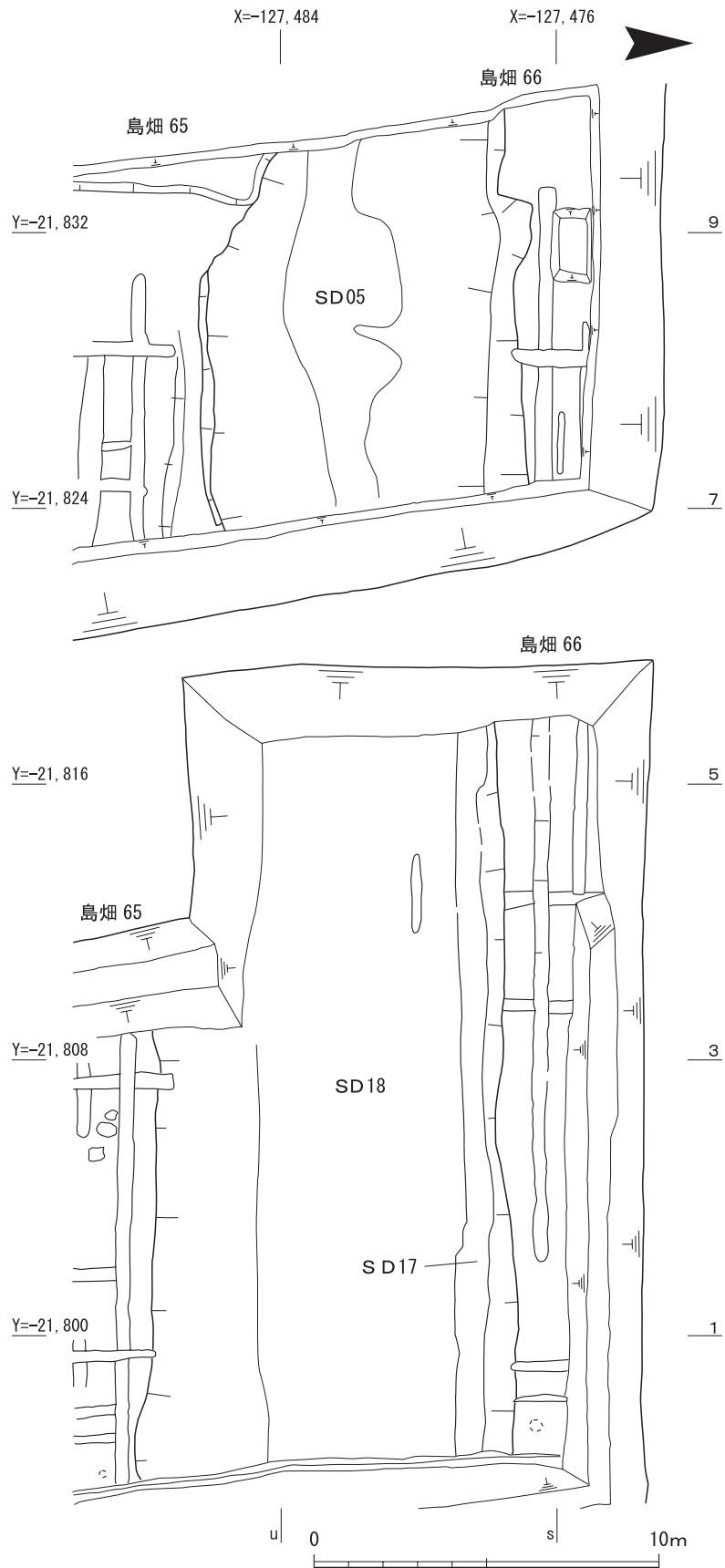
島畑66 (S X06・38) (第35図) K1区とK2区の北端で検出した(D4-t25区ほか)。両調査区を東西方向にまたいで存在する島畑の一部を検出した。島畑の断面観察(第30図)によると、基盤層であるオリーブ灰色シルト(20層)を整形して形成されたと考えられる。溝状遺構S D05・18の埋没に伴い、オリーブ灰色や緑灰色の中粒砂～シルトで盛土を行ったと考えられる。なお、島畑の北半部は現在の里道の下になるため調査に至っていない。検出長39.2m(未検出分を含む)、基部検出幅2.5～3.0m、上面検出幅1.5～2.4m、高さ0.5～0.8mである。島畑上面の標高は13.5～13.8mである。島畑の上面では5条の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長1.7～15.7m、幅0.1～0.5m、深さ0.1m前後である。遺物は島畑の精査中などに土師器や須恵器の細片が出土した。詳細な時期は不明であるが、中世前半と推定される。

島畑67 (S X28) (第36図) K2区のほぼ中央部で検出した(E3-z24区ほか)。島畑の断面観察(第31図)によると、基盤層である灰色細粒砂～粗粒砂(64層)や黄褐色シルト～粗粒砂(80層)の上部にそれぞれ厚さ15cmほどの黄褐色シルトないし細粒砂が2層確認できる(88・90層)。断面には、いずれの層からも素掘り溝が掘り込まれていることが確認できる。これらの上部には厚さ50～60cmの暗緑灰色細粒砂(85層)ないし褐色細粒砂(84層)が広がり、さらにその上部にはにぶい褐色細粒砂(83層)の層序が認められる。いずれも盛土と推定される。88層上面で検出した島畑の規模は、検出長7.7m、基部幅12.3m、上面幅9.9m、高さ0.8mである。島畑上面の標高はおおよそ13.9mである。調査区の一部を拡張して島畑の西端を確認した。島畑の上面では14条前後の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長2.1～7.4m、幅0.2～0.5m、深さ0.1～0.15mである。遺物は精査中や素掘り溝から瓦器や土師器などの細片が出土した。時期は中世前半である。

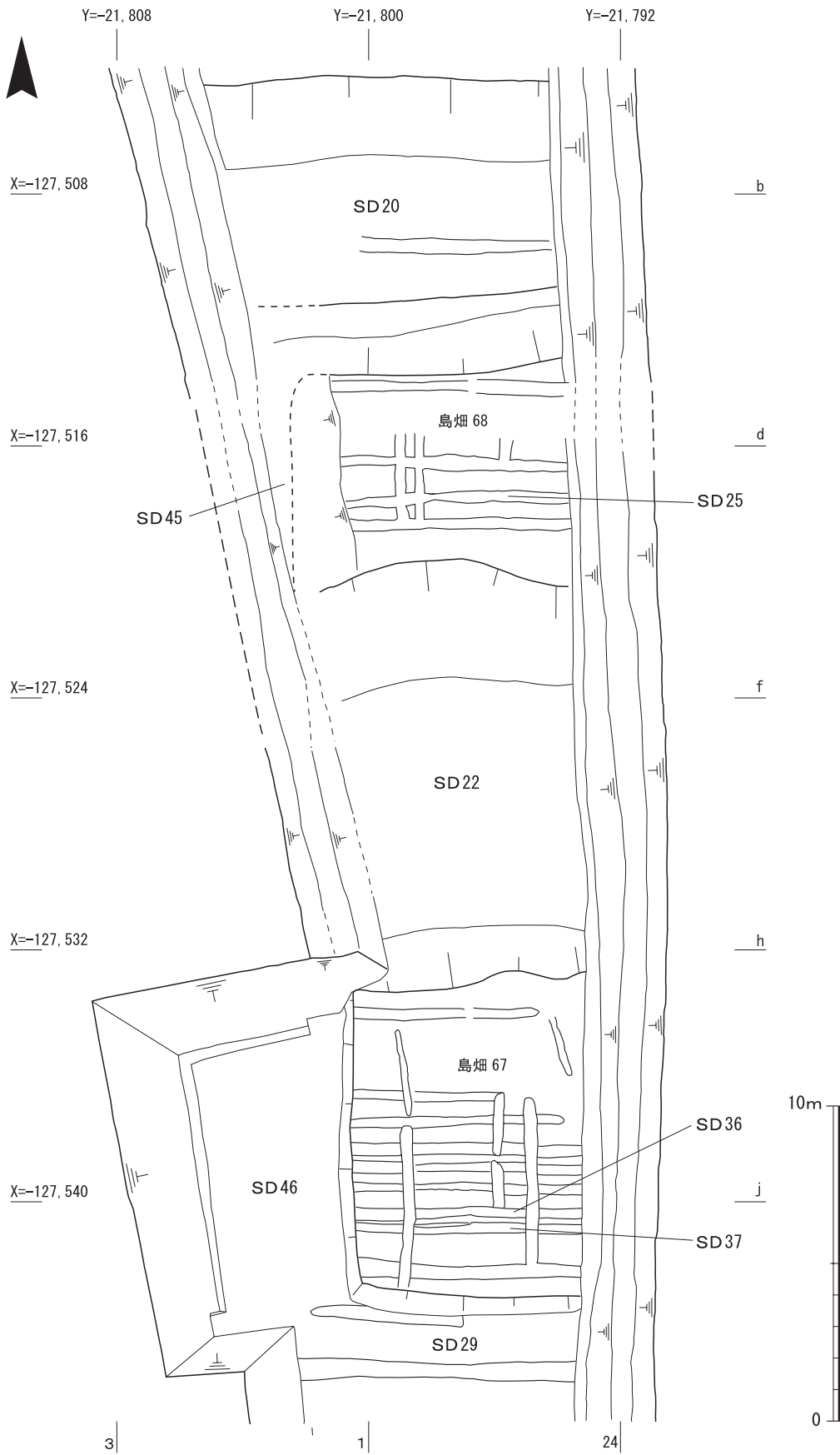
島畑68 (S X21) (第36図) K2区の南半部で検出した(E3-d24区ほか)。島畑の断面観察(第31図)によると、基盤層である灰色細粒砂～粗粒砂(64層)や灰オリーブ色細粒砂～粗粒砂(68層)を整

形して島畑を形成している。したがって、68層の上面が最も古い島畑である。その上部に厚さ20~40cmのオリーブ灰色細粒砂(65層)が島畑全体を覆い、さらにその上部には黄褐色ないし明褐色の細粒砂(43・44層)の層序が認められる。43・44層の上面に素掘り溝が掘り込まれていることは確認できなかった。さらにその上部にはオリーブ褐色中粒砂~極細粒砂(42層)の層序が認められる。いずれも盛土と推定される。68層の上面で確認した島畑の規模は、検出長8.0m、基部幅11.7、上面幅5.9~7.0m、高さ0.8mである。島畑上面の標高はおよそ13.9mである。調査区の西壁にほぼ接して島畑の西端を確認した。島畑の上面では6条の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長2.7~7.3m、幅0.3~0.5m、深さ0.1~0.15mである。遺物は素掘り溝などから土師器の細片などが出土した。詳しい時期は不明であるが、中世前半と推定される。

溝状遺構SD05・18(第35図) K1区とK2区の北端近く、島畑65と66の間で検出した(D3-t25区ほか)。



第35図 K地区島畑66平面図(1/200)



第36図 K地区島畑67・68平面図(1/200)

東西方向の溝状遺構の一部を検出した。溝状遺構の土層断面(第30図)の観察によると、下層には緑灰色中粒砂～シルト(61層)をはじめ、厚さ10～40cmのオリーブ灰色や暗緑灰色などのシルトが複数堆積している(58・59・62～64層)。これらの上部には灰オリーブ色などの中粒砂～粗粒砂の堆積がみられる(50～52・62層)。検出長38.5m(未検出分を含む)、幅8.9～10.6m、深さ0.5～0.8mである。溝底の標高はおよそ13.0mである。遺物は掘削中に瓦器や土師器の細片が出土した。時期は中世前半である。

溝状遺構 S D 03(第33・34図) K1区の北半部、島畑64と65の間で検出した(E4-b5区ほか)。東西方向の溝状遺構の一部を検出した。溝状遺構の土層断面(第30図)の観察によると、基盤層であるオリーブ灰色シルト(20層)の上部に暗灰黄色や灰色、青灰色などのシルト(30・32・40・41層)が堆積する。その上部に暗オリーブ褐色中粒砂～細粒砂(5層)を挟んで暗オリーブ灰色や灰色のシルトないし粘質土(27～30層)が堆積する。さらにこの上部にはオリーブ黒色や暗緑灰色の細粒砂(36～39層)が堆積し、その上部に広くオリーブ黒色細粒砂～粗粒砂など(26・34層)などが堆積する。K2区では延長部の溝状遺構としてS D 20を検出したが、幅が異なるため、厳密に同一の溝状遺構とは言えない。検出長11.4m、幅15～17m、深さ0.7～0.8mである。溝底の標高はおよそ12.9mである。遺物は掘削中に土師器、須恵器、陶器の細片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、中世前半と推定される。

溝状遺構 S D 20(第36図) K2区の中央、やや北寄り、島畑65と68の間で検出した(E3-b24区ほか)。東西方向の溝状遺構の一部を検出した。溝状遺構の土層断面の観察(第31図)によると、基盤層である緑灰色シルト(64層)の上部に暗オリーブ灰色や緑灰色のシルト(59・63層)などが堆積する。灰色細粒砂～中粒砂(58層)を挟んでその上部にオリーブ色粗粒砂や灰色中粒砂～粗粒砂などの砂層(2・36・37・40・56・57層)が厚く堆積する。K1区で検出した溝状遺構S D 03につながると思われるが、幅が異なるため厳密には同一の溝状遺構ではない。検出長11.1m、幅9.5m、深さ0.7mである。溝底の標高はおよそ13.1mである。遺物は掘削中に土師器の細片が出土した。詳細な時期は不明であるが、中世前半と推定される。

溝状遺構 S D 45(第36図) K2区の中央部から南半にかけての西辺沿い、島畑64と68・67の間で検出した(E4-d1ほか)。南北方向の溝状遺構の一部を検出した。ただし、溝状遺構S D 20・22の上部に堆積していたのと同じオリーブ色粗粒砂や灰色中粒砂～粗粒砂などが厚く堆積しており、S D 22と同様に調査区の西壁が大きく崩壊し、土層観察がほとんどできていない。また、島畑68の西端が調査区の西壁付近まで延びているため、溝底は確認していない。検出長7.5m、検出幅1.8mである。遺物は精査中に瓦器や土師器の細片が出土した。詳細な時期は不明であるが、中世前半と推定される。

溝状遺構 S D 22(第36図) K2区の南半部、島畑67と68の間で検出した(E3-f24区ほか)。東西方向の溝状遺構の一部を検出した。溝状遺構の土層断面の観察(第31図)によると、基盤層である灰オリーブ色細粒砂～粗粒砂(68層)の上部に青灰色や暗緑灰色のシルト(75～77層)が堆積する。その上部に暗オリーブ灰色の細粒砂ないし粗粒砂(72・73層)が堆積する。その上部には暗灰黄色

ないし黒褐色のシルト(70層)が堆積し、その上部は崩落により土層の観察が行えていないが、S D20の上部に堆積していたオリーブ色粗粒砂や灰色中粒砂～粗粒砂などの砂層が堆積していたと思われる。検出長8.1m、幅12.5～13.5m、深さ0.8mである。溝底の標高はおよそ13.1mである。遺物は掘削中に土師器の細片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、中世前半と推定される。

溝状遺構 S D01(第33図) K1区の南半部、島畑63と64の間で検出した(E4-4区ほか)。東西方向の溝状遺構の一部を検出した。溝状遺構の土層断面の観察(第30図)によると、基盤層であるオリーブ灰色シルト(20層)の上部に粘り気の強い暗緑灰色粘質土(18層)が堆積する。その上部にはオリーブ黒色や灰色のシルトなど(13・15・16層)が堆積し、その上部に灰色や浅黄色の中粒砂ないし極粗粒砂(10～12層)などの砂層が堆積する。なお、K2区で検出した溝状遺構 S D29は、S D01の延長と推定されるが、幅が異なるため、厳密には同一遺構とは言えない。検出長12.0m、幅8.3m、深さ0.25m前後である。溝底の標高はおよそ13.3mである。遺物は掘削中に須恵器や土師器などの破片が出土した。詳細な時期は不明であるが、中世前半と推定される。

溝状遺構 S D29(第36図) K2区の南半部、島畑63と67の間で検出した(E3-k24区ほか)。東西方向の溝状遺構の一部を検出した。溝状遺構の土層断面の観察(第31図)によると、基盤層である灰色細粒砂～粗粒砂(64層)の上部に厚さ20～30cmのオリーブ灰色や緑灰色のシルトないし細粒砂(92～95層)が堆積する。その上部に厚さ50cm前後の暗緑灰色細粒砂(85層)がS D29だけでなく、島畑63や島畑67の一部まで広く覆う。その上部には島畑67の最上部を覆うにぶい褐色細粒砂～粗粒砂(83層)と同様の砂層が堆積する。検出長9.0m、幅4.2m、深さ0.7mである。溝底の標高はおよそ13.2mである。遺物は出土していないが、他の溝状遺構と同じく中世前半と推定される。

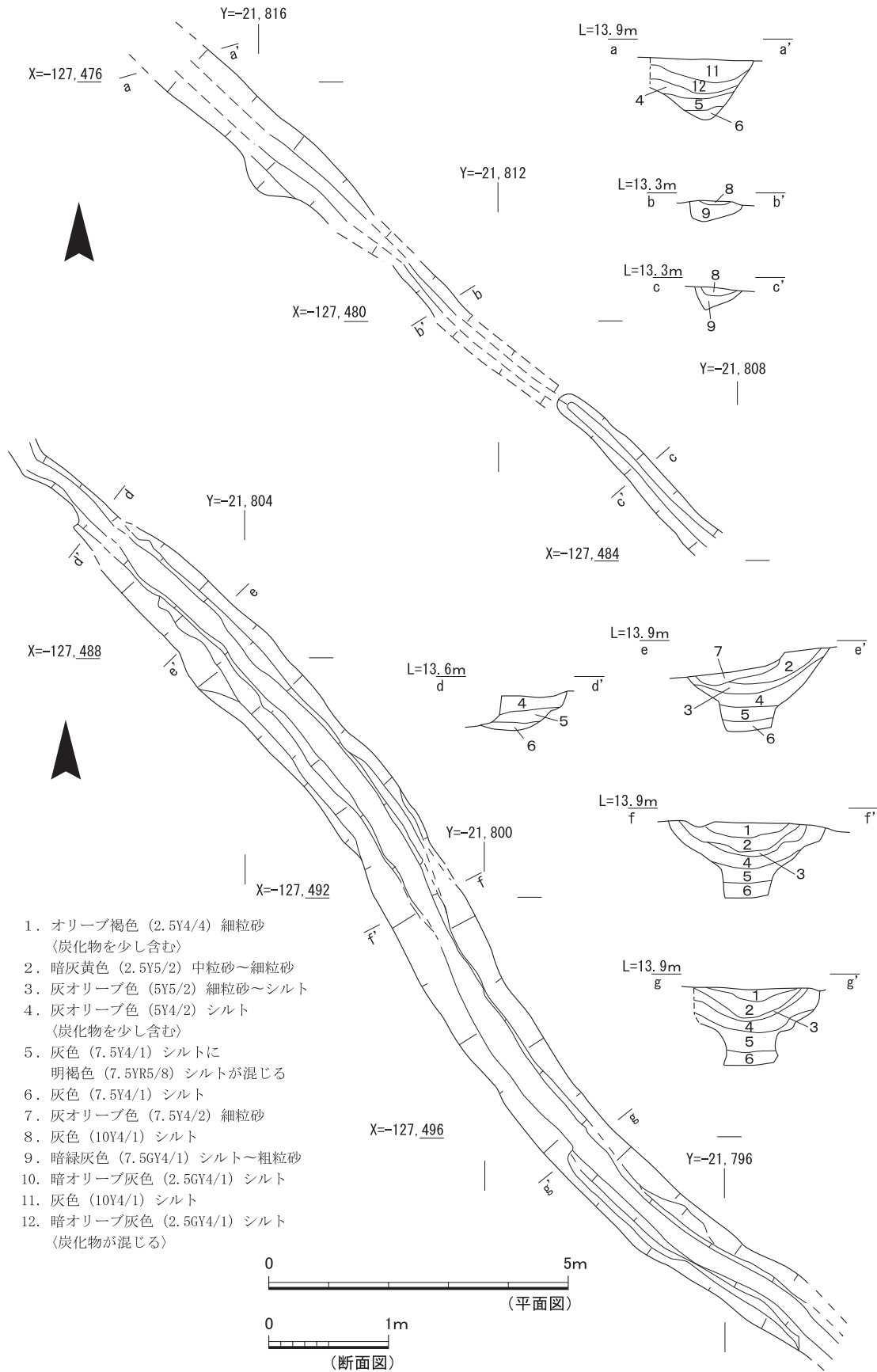
溝状遺構 S D46(第36図) K2区の南半部、島畑67の西側で検出した(E4-i1区ほか)。南北方向の溝状遺構の一部を検出した。基盤層は灰色細粒砂～粗粒砂(64層)である。検出長9.2m、幅5.5m、深さ0.8mである。溝底の標高はおよそ13.1mである。遺物は土師器片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、他の溝状遺構と同じく中世前半と推定される。

溝状遺構 S D41(第32図) K1区の南寄り、島畑62と63の間で検出した(E4-m4区ほか)。東西方向の溝状遺構の一部を検出した。基盤層はオリーブ灰色シルト(第30図20層)である。検出長30.7m(未検出分も含む)、幅13.4m、深さ0.4～0.5mである。溝底の標高はおよそ13.3mである。遺物は出土していないが、他の溝状遺構と同じく中世前半と推定される。

溝状遺構 S D43(第32図) K1区の南端近く、島畑61と62の間で検出した(E4-r3区ほか)。東西方向の溝状遺構の一部を検出した。基盤層はオリーブ灰色シルト(第30図20層)である。検出長11.8m、検出幅3.8～4.2m、深さ0.5m前後である。溝底の標高はおよそ13.2mである。遺物は出土していないが、他の溝状遺構と同じく中世前半と推定される。

②下層遺構

溝 S D16 島畑64の上面で検出した(E4-i6区)。規模は検出長2.1m、幅0.4m、深さ0.1mである。周辺削平が著しく、遺構の残存状況は良くない。溝の方位は北に対して45°東に振る。埋土は炭が混じる灰色粘質土である。溝から焼土片や瓦の破片などが出土した。詳細は不明であるが、



第37図 K地区溝SD35実測図(1/100・1/50)

古代の遺構と推定される。

土坑 S K 15 鳥畑64の上面、上記溝 S D 16の西側で検出した(E4-i7区)。平面形は不整形で、南北1.9m、東西2.1m、深さ0.1m前後である。埋土は溝 S D 16と同じく、炭混じり灰色粘質土である。埋土から土師器の細片が出土したが、詳細な時期は不明である。

焼土 S X 30~32 鳥畑65の下層で検出した(E3-a25区)。S X 30~32は鳥畑造成の際に削平されたようで、焼土の広がりとして3か所確認した。焼土は硬く焼け締まった硬化面を確認し、炉底と推定される。規模は、長軸0.3~0.6m、短軸0.2~0.4m、深さ0.05~0.25mである。また周辺では焼土や炭の塊を検出した。遺物は出土しなかったため、時期は不明である。

溝 S D 35(第37図) 鳥畑65・66や溝状遺構 S D 18の下層で検出した(D4-t4区ほか)。規模は、検出長33.4m、幅0.5~1.3m、深さ0.2~0.7mである。溝はやや蛇行し、北に対して32~48°西に振る。土層の堆積状況は大きく6層に分けることができ、上からオリーブ褐色細粒砂、暗灰黄色中粒砂~細粒砂、灰オリーブ色細粒砂~シルト、灰オリーブ色シルト、灰色シルト(明橙色シルト混じる)、灰色シルトである。ただし地点によって微妙に差異がある。遺物は暗灰黄色中粒砂~細粒砂、灰オリーブ色細粒砂~シルト、灰オリーブ色シルトの各層から弥生土器と思われる小片が出土したものの、溝の詳細な時期は不明である。しかし、隣接するL地区やN地区、あるいは水主神社東遺跡第5次調査のC地区などでも北に対して西や東に振る溝を検出しており、これらの検出例でも少量の遺物が出土している。時期のわかるものをみると、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物が出土しており、おおむね同時期の遺構と考えられる。

(山崎美輪・筒井崇史)

(3)出土遺物

鳥畑64(第38図71~74) 71は瓦器椀の破片である。口縁端部は丸く納める。72は土師器皿である。口縁部のみの破片である。73は土師器の羽釜である。口縁端部を丸く折り返す。体部には断面三角形を呈する鏝が巡る。74は平瓦の狭端面側と推定される破片である。狭端面と凹面側1.5cmほどに面取りを施す。凸面側には砂粒が付着しており、成形台から取りはずす際に使用した離れ砂の可能性はある。

鳥畑65(第38図75~78) 75・76は瓦器椀である。75は口縁部がわずかに外反する。76はやや厚手のものである。77は土師器皿である。78は甕の口縁部の破片である。鳥畑の時期のものではなく、より古い古墳時代のもものと推定される。

溝状遺構 S D 18(第38図79) 土師器甕または羽釜であろう。口縁端部を内方へ丸く折り返す。

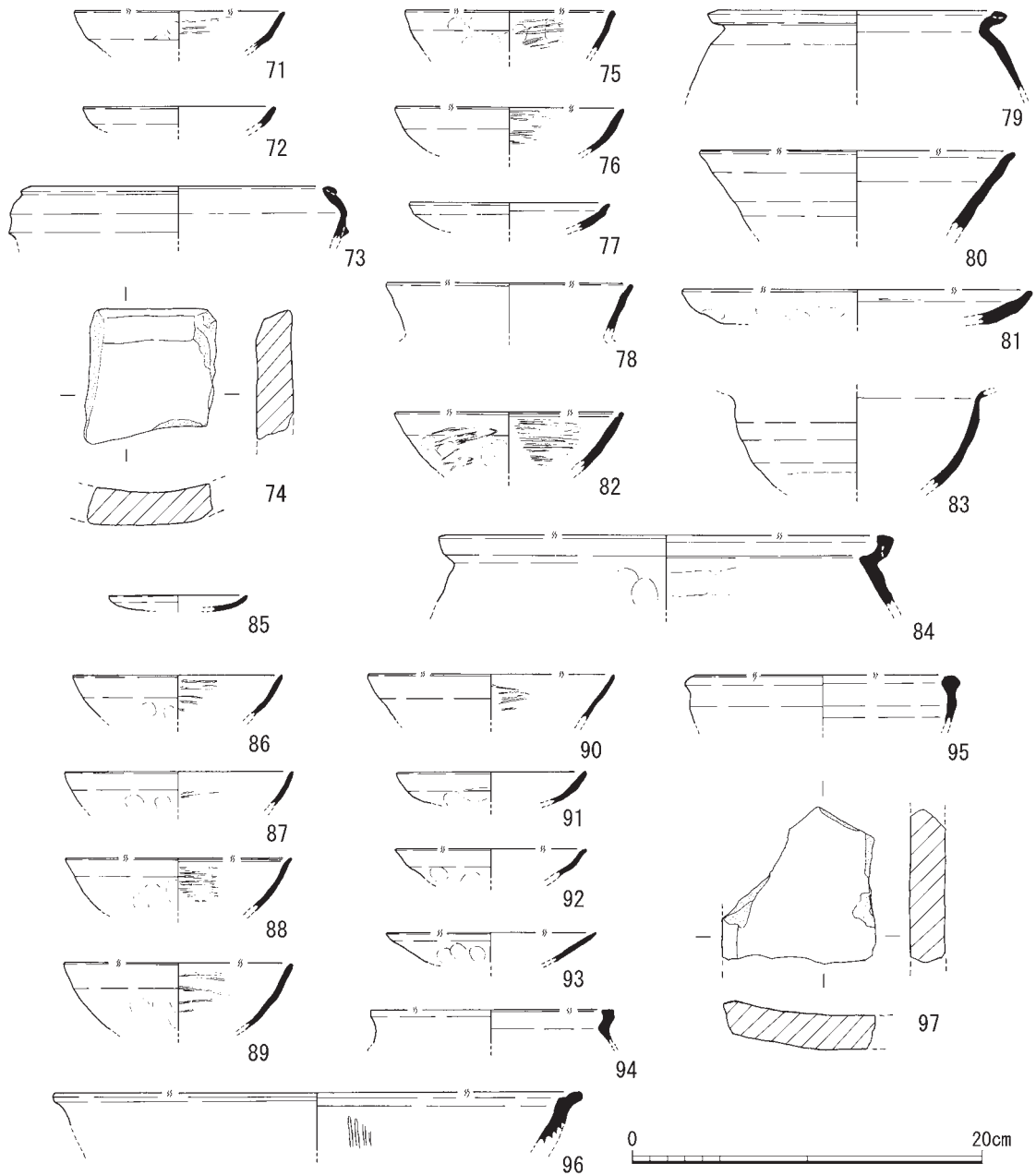
溝状遺構 S D 03(第38図80・81) 80は陶器鉢である。口縁端部をわずかに外反させる。81は土師器皿である。やや厚手で、口縁部内面にやや強めのナデを施す。口径も20cm前後に復元できる。

溝状遺構 S D 01(第38図82~84) 82は瓦器椀で、口縁端部内面に沈線を1条施す。内面には密にミガキを施し、外面にも若干のミガキが認められる。83は口縁端部と底部を欠損するものの白磁椀の破片である。口縁部は大きく外反する。84は瓦質土器鍋である。口縁端部はほぼ水平で

受け口状を呈する。

溝 S D 36(第38図85) 85は土師器皿である。

遺物包含層(第38図86~96) 86~90は瓦器椀である。基本的な製作方法等は同じであるが、口縁端部内面に沈線を施すもの(88)と施さないもの(86・87・89)がある。91~93は土師器皿である。口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部が外反気味もしくは外反するもの(91・92)と、ほぼ直線的に斜め上方に延びるもの(93)がある。94は瓦質土器鍋と推定される。小破片のため詳細は不明である。95は須恵器鉢である。口縁端部が丸く肥厚するので、籐窯跡で製作されたものと推定される。時期は10世紀代であろう。96は陶器播り鉢である。口縁端部内面を強くナデて端部を外方へ



第38図 K地区出土遺物実測図(1/4)

つまみ出すような形態である。内面に摺目が4条確認できる。97は平瓦の破片である。側縁がわずかに残る。側縁と凹面側8mmほどに面取りを施す。凸面側には砂粒が付着する。97の胎土や調整等は島畑64で出土した平瓦(74)に類似する。

(筒井崇史)

5) L地区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

K地区の北側に設定した調査区で、全長84.5m、北辺幅13.2m、南辺幅41.6mの、南東隅がわずかに突出するL字形を呈する調査区である。本来は全長108m、幅29～49mで、北でやや西に傾く矩形の調査区をL地区としていたが、西日本高速道路株式会社施工分と、国土交通省施工分に分かれることになり、今回の報告する調査地点を新名神高速道路整備事業として調査を実施した。なお、国土交通省施工分については平成27年度に下水主遺跡第8次調査として調査を実施し、すでに報告済である。なお、L地区のうち、平成26年度に調査を実施した地点をL1区、平成27年度に調査を実施した地点をL3区、先述の国交省事業地をL2区とした。

L地区(L1区)の現地表面の標高はおよそ14.6～14.8mである。現地表下1.0～1.2mで、上層遺構として島畑4基、溝状遺構3条を検出した(第39図)。また、ほぼ島畑の上面で中層遺構として弥生時代の溝2条、土器溜まり1基などを検出した(第45図)。さらに島畑や溝状遺構を断ち割ると、下層から縄文土器の出土が認められたため、調査区の南半部を掘り下げたところ、下層遺構として縄文時代晩期の氾濫流路や土器溜まりなどを検出した(第48図)。また、現用の農業用水路の西側についても調査対象地があったため、小規模な調査区を2か所設けて調査を実施したが、L1区北端で確認した不安定な土壌を確認したにとどまる。この2か所の小規模な調査区を合わせて、調査面積は2,620㎡である。出土した遺物は整理箱48箱に達し、大半が下層で出土した縄文土器である。

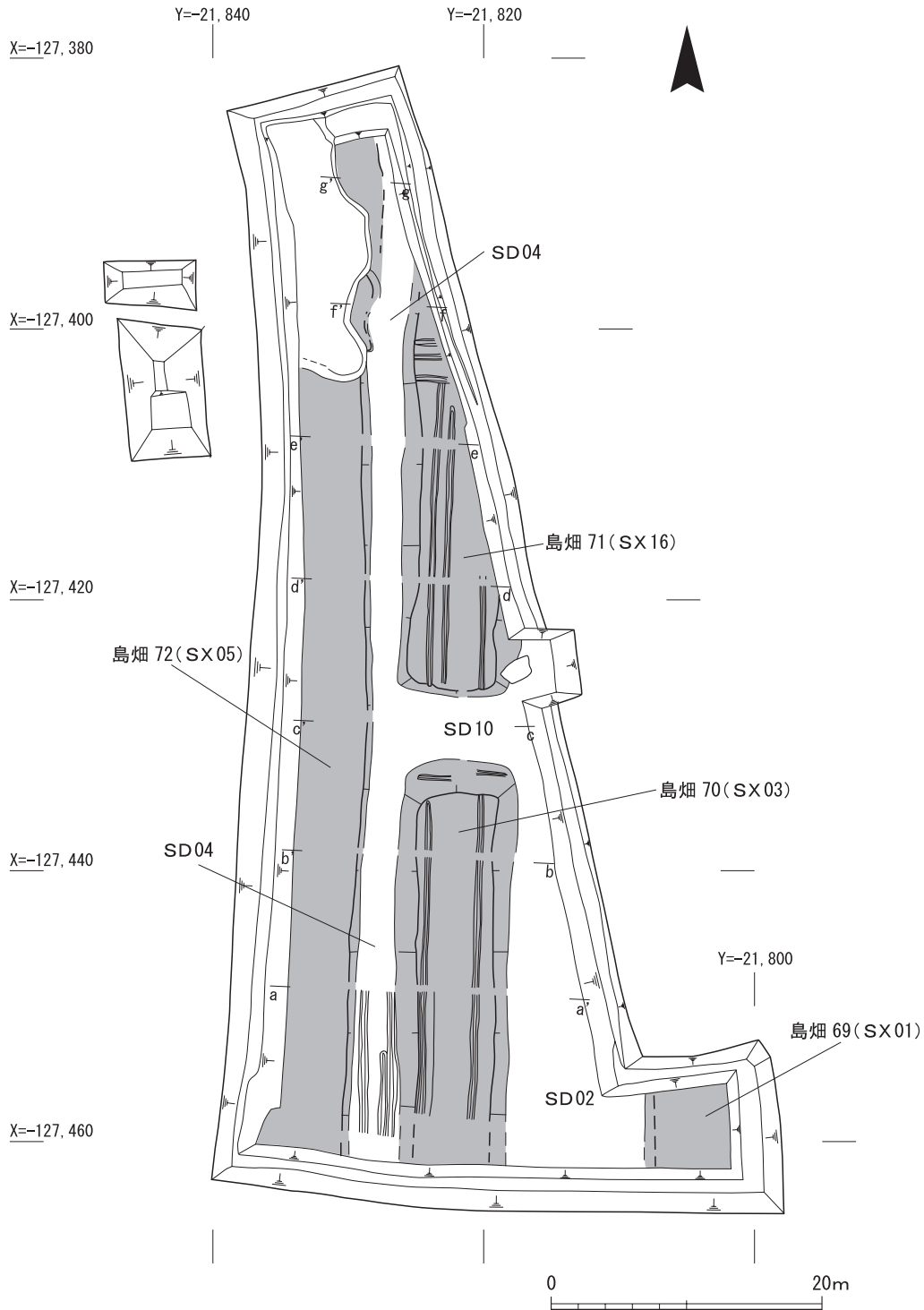
基本的な層序(第40図)は、耕作土と判断される灰色砂質土(1層)の下層に、それぞれ厚さ10～20cmの灰色ないし黄褐色の細粒砂ないし中粒砂(2・4・6～8層)などが調査区全体に広がる。これらを除去すると、近世段階の島畑や溝状遺構を検出した。島畑の部分では、灰白色細粒砂(22層)や青灰色粘質土(33層)などの島畑を構成する盛土を確認した。これらの盛土を除去して基盤層であるにぶい黄色粘質土(39層)の上面で調査を実施した。また、島畑に伴う溝状遺構の埋土として灰色や青灰色、緑灰色の極細粒砂ないし細粒砂(30・29・24・23・15～17・9層など)が堆積する。

(2) 検出遺構

① 上層遺構

島畑69(S X01)(第39図) 調査区の南東隅で検出した(D4-o1区ほか)。南北方向の島畑のごく一部を検出したにとどまるが、平成27年度に実施した下水主遺跡第8次調査の際に延長部分を検出している。島畑の断面観察(第40図)によると、基盤層であるにぶい黄色粘質土(39層)を整形

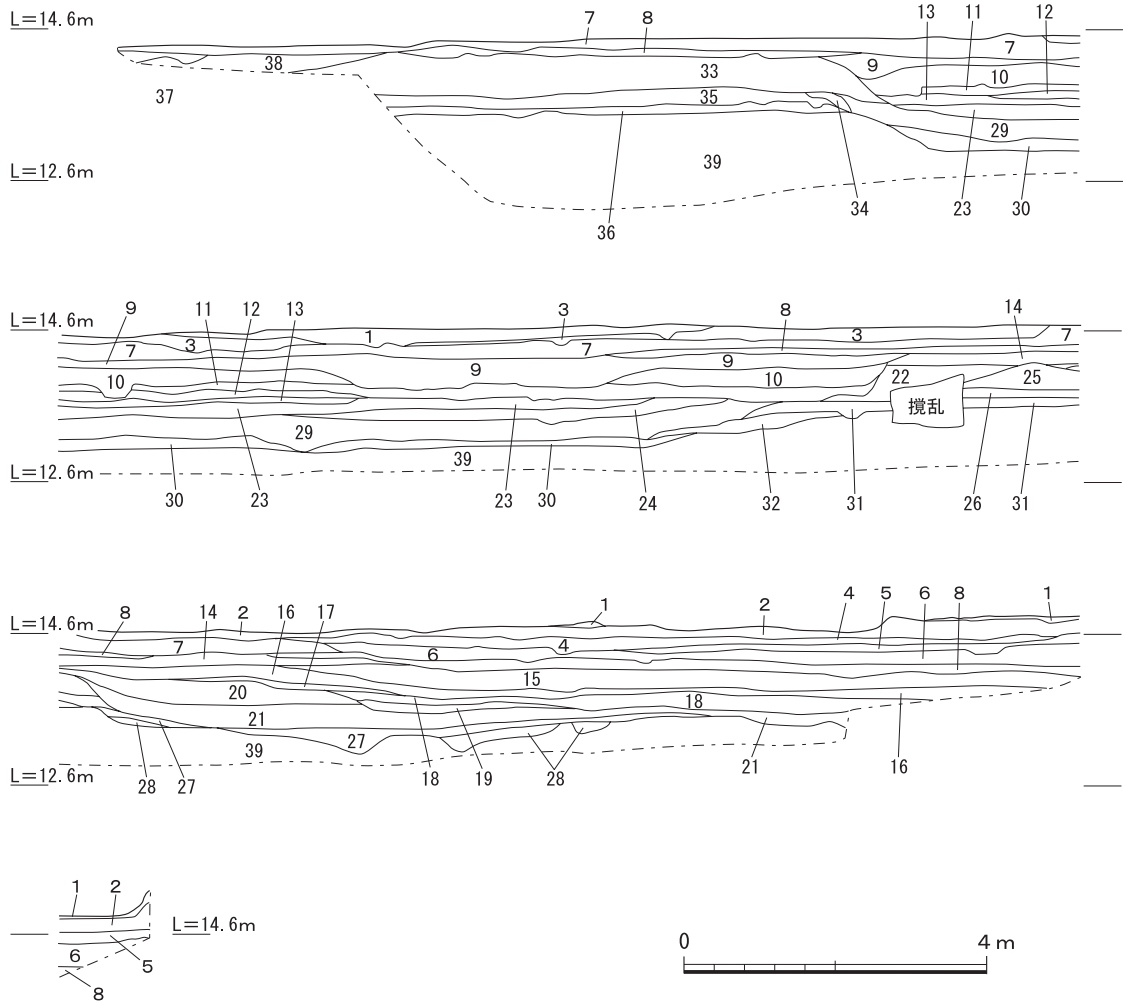
して島畑を形成している。その上部に島畑の耕作土と推定される灰黄色粘質土(36層)が広がり、灰色細粒砂(35層)を挟んで、島畑の盛土と推定される青灰色粘質土(33・34層)の層序が認められる。第6次調査では検出長6.2m、基部検出幅7.1m、上面検出幅6.0m、高さ0.5mを確認した。島畑上面の標高はおよそ13.7mである。島畑に伴う素掘り溝は検出しなかった。なお、第8次調査と合わせた総検出長は47.1mである。遺物は出土していないが、他の島畑と同じく中世前半と推



第39図 L地区上層遺構配置図(1/500)

定される。

島畑70(S X03) (第41図) 調査区の南半部中央で検出した(D4-b5区ほか)。南北方向の島畑で、南端は調査区外に延びる。島畑の断面観察(第40図)によると、基盤層であるにぶい黄色粘質



- | | | |
|--|-------------------------|--|
| 1. 灰色 (7.5Y4/1) 砂質土 | 15. 明緑灰色 (7.5GY6/1) 細粒砂 | 31. 青黒 (10BG2/1) 粘質土
〈島畑上部耕作土か〉 |
| 2. 灰色 (7.5Y5/1) 細粒砂 | 16. 青灰色 (5BG5/1) 粘質土 | 32. 青灰色 (10BG6/1) 粘質土 |
| 3. 灰色 (5Y6/1) 極細粒砂 | 17. 青灰色 (10BG6/1) 極細粒砂 | 33. 青灰色 (10BG5/1) 粘質土 |
| 4. 黄褐色 (2.5Y5/3) 細粒砂 | 18. 青灰色 (5BG5/1) 細粒砂 | 34. 青灰色 (5BG6/1) 粘質土
〈にぶい黄色 (2.5Y6/3) 混じり〉 |
| 5. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 細粒砂
〈暗褐色 (7.5YR5/6) 細粒砂混じる〉 | 19. 緑灰色 (10G5/1) 細粒砂 | 35. 灰色 (N5/0) 細粒砂 |
| 6. 灰色 (7.5Y5/1) 細粒砂 | 20. 緑灰色 (10G5/1) 極細粒砂 | 36. 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質土
〈島畑上部耕作土か〉 |
| 7. 灰色 (N6/0) 細粒砂 | 21. 緑灰色 (5G5/1) 細粒砂 | 37. 青灰色 (10BG5/1) 中粒砂 |
| 8. 灰色 (N6/0) 中粒砂 | 22. 灰白色 (10Y7/1) 極細粒砂 | 38. 明青灰色 (10BG7/1) 細粒砂 |
| 9. 灰色 (10Y6/1) 細粒砂 | 23. 緑灰色 (10G5/1) 極細粒砂 | 39. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘質土
〈やや砂質、黄褐色 (2.5Y5/6) 粘質土混じる〉 |
| 10. 灰色 (N5/0) 極細粒砂 | 24. 青灰色 (10BG5/1) 極細粒砂 | |
| 11. 青灰色 (10BG5/1) 細粒砂 | 25. 灰白色 (7.5Y5/2) 細粒砂 | |
| 12. 灰色 (N5/0) 細粒砂 | 26. 灰色 (N5/0) 細粒砂 | |
| 13. 青黒 (10BG2/1) 粘質土
〈島畑上部耕作土か〉 | 27. 青灰色 (10BG6/1) 粘質土 | |
| 14. 緑灰色 (10G5/1) 中粒砂 | 28. 明緑灰色 (5G7/1) 極細粒砂 | |
| | 29. 緑灰色 (5G5/1) 細粒砂 | |
| | 30. 明緑灰色 (5G7/1) 極細粒砂 | |

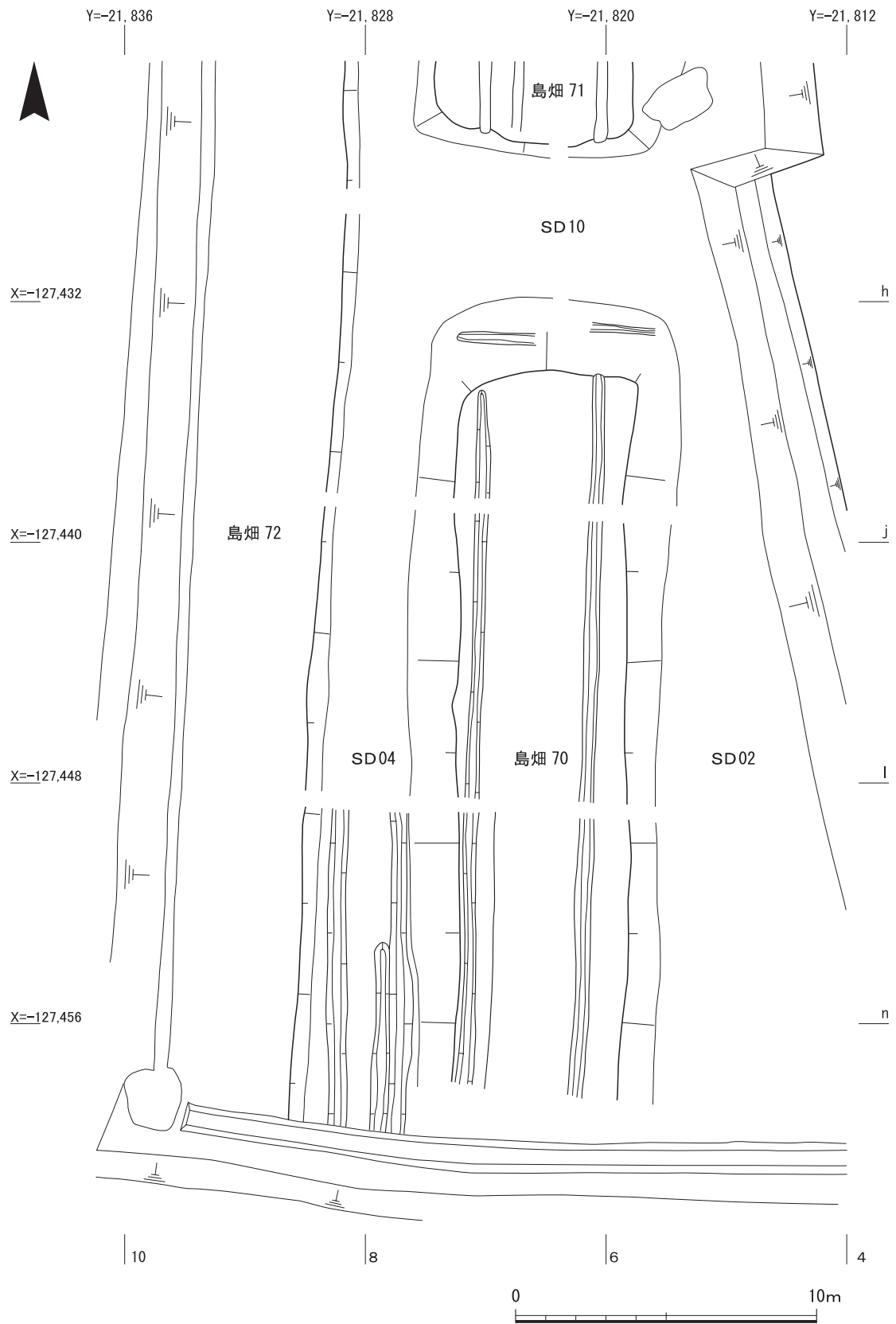
第40図 L地区南壁土層断面図(1/100)

土(39層)を整形し、盛土と推定される青灰色粘質土(32層)がおかれた上部に耕作土と推定される青黒粘質土(31層)が広がる。その上部に灰色ないし灰白色の細粒砂(22・25・26層)の層序が広がり、島畑の盛土と考えられる。その上部には中粒砂が堆積するが、特に7層は島畑69から溝状遺構SD02を経て島畑70、さらに溝状遺構SD04にかけて、ほぼ全面に認められることから洪水等による砂層の可能性が指摘できる。検出長28.0m、基部幅8.5m、上面幅5.9m、高さ0.3~0.4mである。島畑上面の標高はおよそ13.5mである。島畑の上面では4条の素掘り溝を検出した。うち2条は島畑北端の斜面で検出した短いものである。素掘り溝は検出長2.7~24.1m、幅0.5m前後、深さ0.1m前後である。遺物は島畑上面の精査中や素掘り溝から土師器や須恵器、瓦器などが出土した。時期は中世前半である。

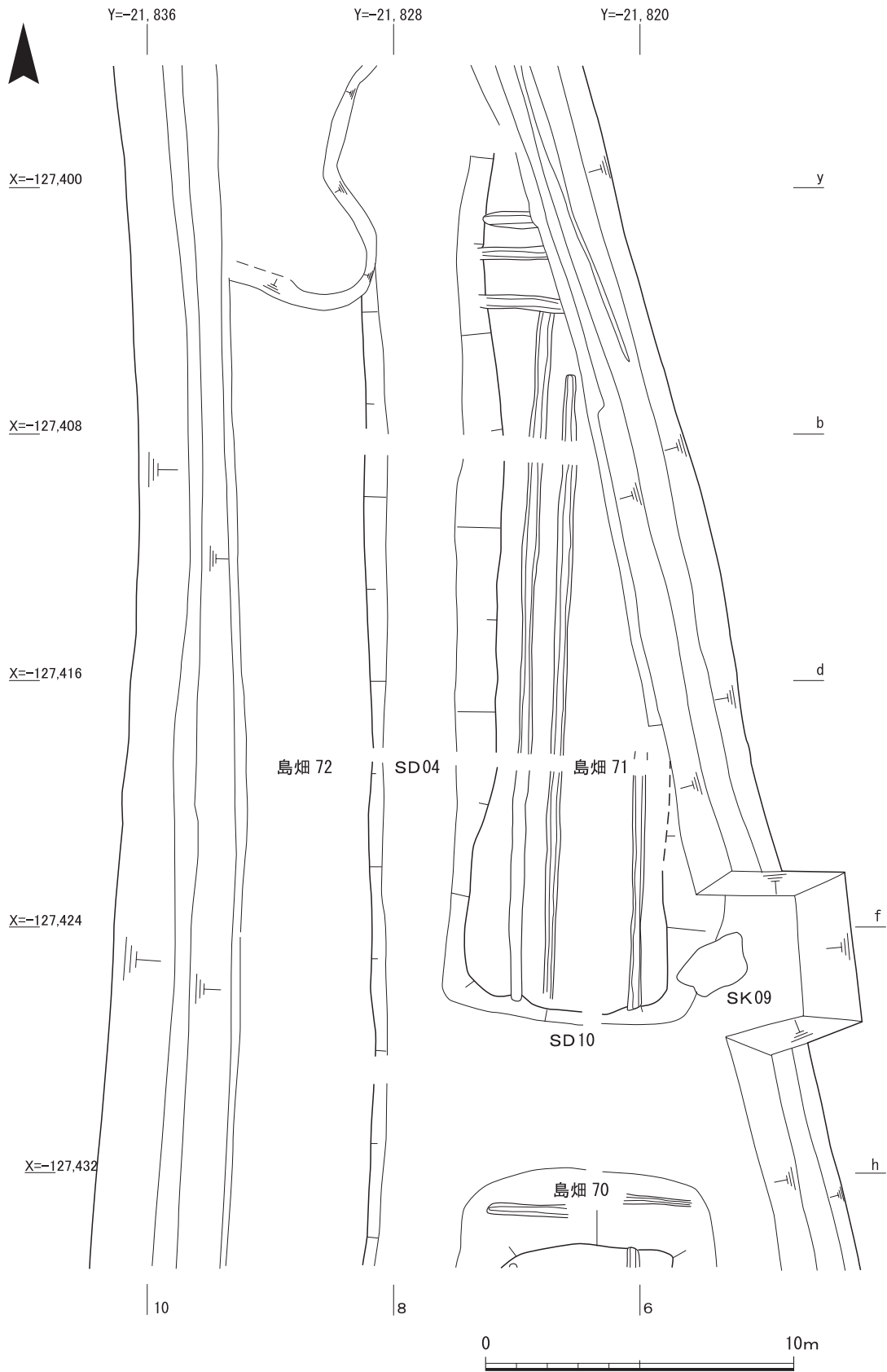
島畑71(S X16)(第42図) 調査区の北半部中央で検出した(C4-y7区ほか)。南北方向の島畑で、平成27年度の下水主遺跡第8次調査の際に延長部分を検出している。島畑の断面観察(第44図断面d-d')によると、島畑の基盤層と考えられるのは淡黄色や灰黄色の極細粒砂ないしシルト(4・5層)で、その上部に薄くにぶい黄色粘質土(3層)が広がる。3層が島畑盛土かどうか不明であるが、その上部に盛土と推定される灰オリーブ色極細粒砂~シルト(2層)の層序が確認できる。この層から素掘り溝が掘り込まれている。2層については、断面e-e'、断面f-f'のそれぞれ2層に対応する。検出長29.7m、基部幅8.9m、上面幅6.8m、高さ0.5mである。島畑上面の標高はおよそ13.6mである。島畑の上面では6条の素掘り溝を検出した。東西方向のものと南北方向のものがそれぞれ3条ずつである。素掘り溝は検出長1.9~22.2m、幅0.3~0.5m、深さ0.1~0.2mである。島畑71は下水主遺跡第8次調査の調査成果を合わせると、検出長は67.5mである。遺物は島畑の精査中や素掘り溝から土師器や須恵器、瓦器が出土した。時期は中世前半である。

島畑72(S X05)(第41・42図) 調査区の西辺で検出した(C4-v8区ほか)。南北方向の島畑であるが、西半部は調査区外となる。また、北半部では当初、安定した島畑を検出することができなかったため、後世の攪乱等のため島畑が遺存していないと考えていた。しかし、平成27年度の第8次調査に伴うL2区の島畑72の調査成果によると、軟弱な地山の上に形成された島畑であることが確認できたため、島畑の痕跡が不明瞭となっていた範囲についても、こうした軟弱な地盤に島畑が形成されていたと判断した。なお、基部については部分的に確認することができた。島畑の断面観察(第40図)によると、基盤層であるにぶい黄色粘質土(39層)の上部には青灰色や緑灰色の細粒砂あるいは粘質土(15・16・18・21層など)が島畑72から溝状遺構SD04にかけて堆積している。このことから島畑72は、他の島畑にくらべて早くに耕作を停止し、細粒砂等によって埋没したと考えられる。検出長75.0m、基部検出幅4.8m、上面検出幅4.4m、高さ0.4mである。島畑の上面の標高はおよそ13.4mである。島畑の上面で素掘り溝は検出しなかった。島畑72は平成27年度に実施した下水主遺跡第8次調査の際に延長部分を検出しており、両調査成果を合わせると、検出長は102mに達する。遺物は島畑の掘削中や精査中に土師器や須恵器、瓦器などが出土した。時期は中世前半である。

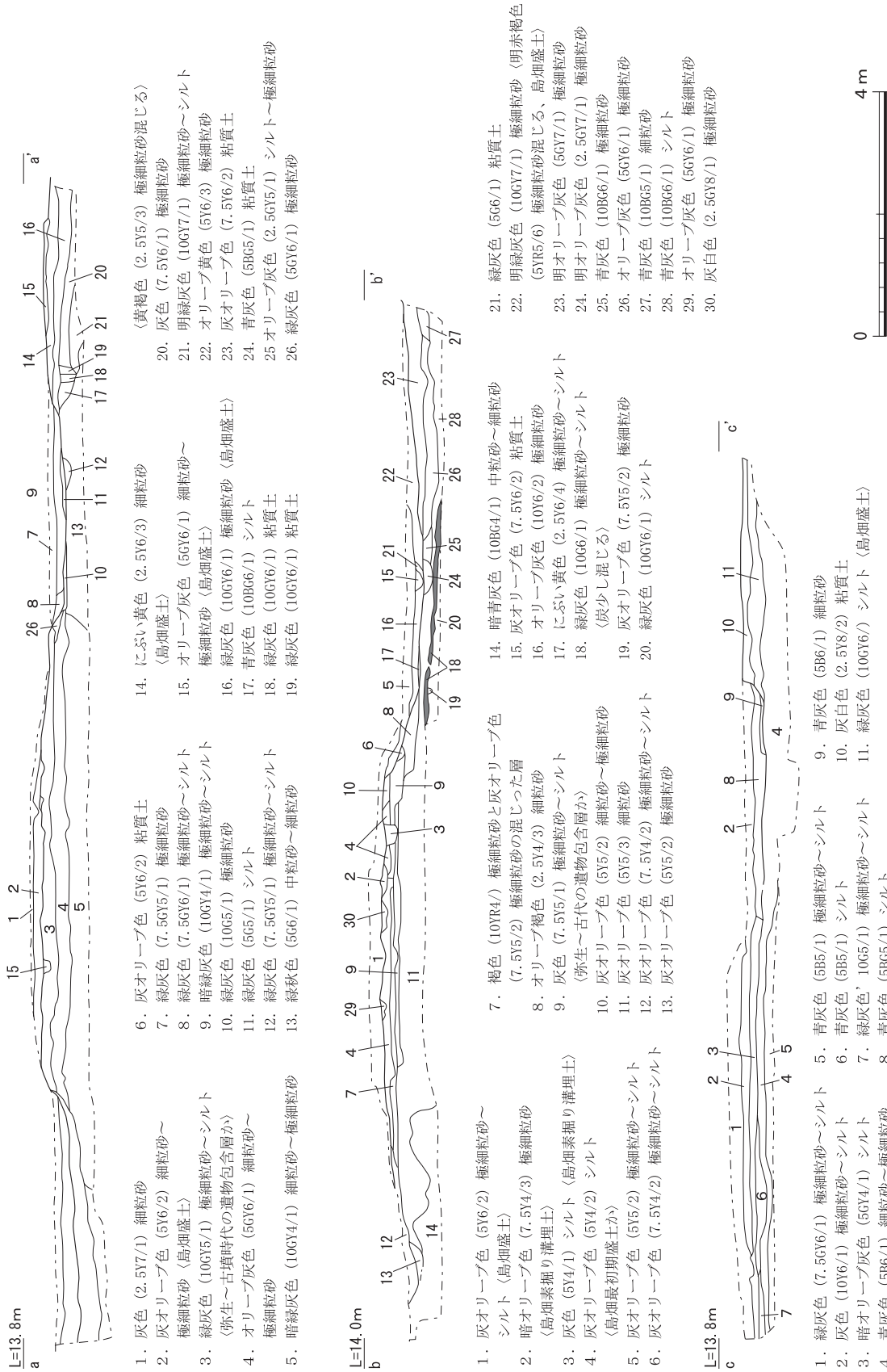
溝状遺構SD02(第41図) 調査区の東半部、島畑69と70の間で検出した(D4-f4区ほか)。南



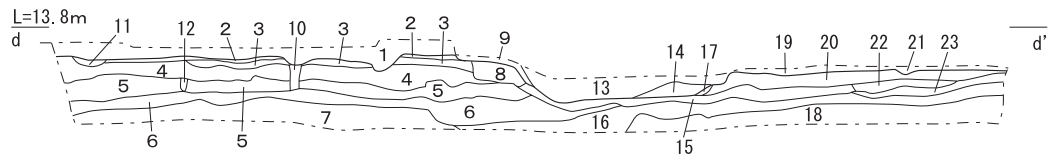
第41図 L地区島畑70・72(南半部)平面図(1/200)



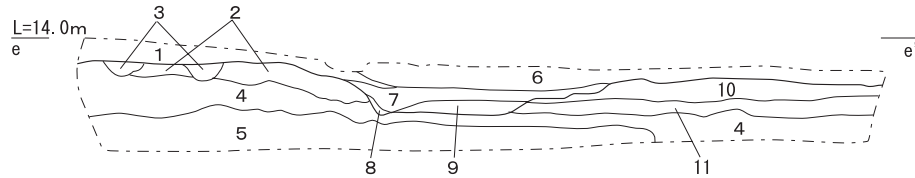
第42図 L地区島畑70・72(北半部)平面図(1/200)



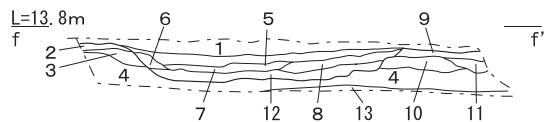
- | | | |
|---|---|---|
| <p>1. 灰色 (2.5Y7/1) 細粒砂</p> <p>2. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 細粒砂～極細粒砂 (島畑盛土)</p> <p>3. 緑灰色 (10GY5/1) 極細粒砂～シルト (弥生～古墳時代の遺物包含層か)</p> <p>4. オリーブ灰色 (5GY6/1) 細粒砂～極細粒砂</p> <p>5. 暗緑灰色 (10GY4/1) 細粒砂～極細粒砂</p> <p>6. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 粘質土</p> <p>7. 緑灰色 (7.5GY5/1) 極細粒砂</p> <p>8. 緑灰色 (7.5GY6/1) 極細粒砂～シルト</p> <p>9. 暗緑灰色 (10GY4/1) 極細粒砂～シルト</p> <p>10. 緑灰色 (10GY5/1) 極細粒砂</p> <p>11. 緑灰色 (5G5/1) シルト</p> <p>12. 緑灰色 (7.5GY5/1) 極細粒砂～シルト</p> <p>13. 緑灰色 (5G6/1) 中粒砂～細粒砂</p> <p>14. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 細粒砂 (島畑盛土)</p> <p>15. オリーブ灰色 (5GY6/1) 細粒砂～極細粒砂 (島畑盛土)</p> <p>16. 緑灰色 (10GY6/1) 極細粒砂 (島畑盛土)</p> <p>17. 青灰色 (10BG6/1) シルト</p> <p>18. 緑灰色 (10GY6/1) 粘質土</p> <p>19. 緑灰色 (10GY6/1) 粘質土</p> <p>20. 黄褐色 (2.5Y5/3) 極細粒砂混じる</p> <p>21. 明緑灰色 (10GY7/1) 極細粒砂～シルト</p> <p>22. オリーブ黄色 (5Y6/3) 極細粒砂</p> <p>23. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 粘質土</p> <p>24. 青灰色 (5BG5/1) 粘質土</p> <p>25. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) シルト～極細粒砂</p> <p>26. 緑灰色 (5GY6/1) 極細粒砂</p> | <p>7. 褐色 (10YR4/) 極細粒砂と灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 極細粒砂の混じった層</p> <p>8. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細粒砂</p> <p>9. 灰色 (7.5Y5/1) 極細粒砂～シルト (弥生～古代の遺物包含層か)</p> <p>10. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細粒砂～極細粒砂</p> <p>11. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細粒砂</p> <p>12. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 極細粒砂～シルト</p> <p>13. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 極細粒砂</p> <p>14. 暗青灰色 (10BG4/1) 中粒砂～細粒砂</p> <p>15. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 粘質土</p> <p>16. オリーブ灰色 (10Y6/2) 極細粒砂</p> <p>17. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細粒砂～シルト</p> <p>18. 緑灰色 (10G6/1) 極細粒砂～シルト (炭少し混じる)</p> <p>19. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 極細粒砂</p> <p>20. 緑灰色 (10GY6/1) シルト</p> <p>21. 緑灰色 (5G6/1) 粘質土</p> <p>22. 明緑灰色 (10GY7/1) 極細粒砂 (明赤褐色 (5YR5/6) 極細粒砂混じる、島畑盛土)</p> <p>23. 明オリーブ灰色 (5GY7/1) 極細粒砂</p> <p>24. 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 極細粒砂</p> <p>25. 青灰色 (10BG6/1) 極細粒砂</p> <p>26. オリーブ灰色 (5GY6/1) 極細粒砂</p> <p>27. 青灰色 (10BG5/1) 細粒砂</p> <p>28. 青灰色 (10BG6/1) シルト</p> <p>29. オリーブ灰色 (5GY6/1) 極細粒砂</p> <p>30. 灰白色 (2.5GY8/1) 極細粒砂</p> | <p>5. 青灰色 (5B5/1) 極細粒砂～シルト</p> <p>6. 青灰色 (5B5/1) シルト</p> <p>7. 緑灰色 (10GY4/1) 極細粒砂～シルト</p> <p>8. 青灰色 (5B6/1) 細粒砂～極細粒砂</p> <p>9. 青灰色 (5B6/1) 細粒砂</p> <p>10. 灰白色 (2.5Y8/2) 粘質土</p> <p>11. 緑灰色 (10GY6/1) シルト (島畑盛土)</p> |
|---|---|---|



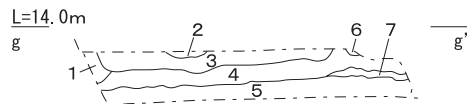
- | | | |
|-----------------------------------|-----------------------------|-------------------------------|
| 1. 灰白色 (5Y7/2) 極細粒砂 | 9. 灰白色 (5Y7/2) 細粒砂 | 18. 青灰色 (5BG6/1) 極細粒砂～シルト |
| 2. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 極細粒砂～シルト (島畑盛土) | 10. 緑灰色 (10G6/1) 極細粒砂～シルト | 19. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂 |
| 3. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘質土 | 11. 灰色 (7.5Y6/1) シルト | 20. 青灰色 (5BG6/1) 粘質土 (島畑盛土) |
| 4. 淡黄色 (2.5Y7/3) 極細粒砂～シルト | 12. 灰白色 (7.5Y7/1) シルト | 21. 明オリーブ灰色 (5GY6/1) 極細粒砂～シルト |
| 5. 灰黄色 (2.5Y6/2) 極細粒砂～シルト | 13. 緑灰色 (10G6/1) 極細粒砂 | 22. 緑灰色 (7.5GY6/1) 極細粒砂～シルト |
| 6. 灰白色 (5Y7/1) 細粒砂～極細粒砂 | 14. 緑灰色 (7.5GY5/1) 極細粒砂～シルト | 23. 緑灰色 (10GY5/1) 極細粒砂～シルト |
| 7. 明緑灰色 (10G7/1) 極細粒砂～シルト | 15. 緑灰色 (7.5GY6/1) 極細粒砂 | |
| 8. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂～シルト | 16. 明青灰色 (10G7/1) 極細粒砂～シルト | |
| | 17. 青灰色 (5B6/1) 粘質土 | |



- | | | |
|----------------------------------|----------------------------|----------------------------------|
| 1. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 極細粒砂～シルト | 4. 浅黄色 (2.5Y7/3) 極細粒砂～シルト | 9. 緑灰色 (10GY6/1) 極細粒砂～シルト (島畑盛土) |
| 2. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 極細粒砂～シルト | 5. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 極細粒砂～シルト | 10. 浅黄色 (2.5Y7/4) 極細粒砂～シルト |
| 3. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 粘質土 (素掘り溝埋土) | 6. 緑灰色 (10GY5/1) 粘質土 | 11. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細粒砂～シルト |
| | 7. 緑灰色 (10GY5/1) 極細粒砂～シルト | |
| | 8. 緑灰色 (7.5GY6/1) 極細粒砂～シルト | |



- | | | |
|-------------------------------------|------------------------------|-----------------------------|
| 1. 灰白色 (7.5Y7/1) 極細粒砂 | 5. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土 | 10. 青灰色 (10BG6/1) 極細粒砂～シルト |
| 2. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 極細粒砂～シルト (島畑盛土) | 6. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 粘質土 | 11. 青灰色 (5BG6/1) 極細粒砂 |
| 3. 青灰色 (5BG6/1) 極細粒砂～シルト | 7. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 細粒砂～極細粒砂 | 12. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 極細粒砂～シルト |
| 4. 緑灰色 (10GY5/1) 極細粒砂～シルト | 8. 青灰色 (5BG6/1) 極細粒砂～シルト | 13. 緑灰色 (10G6/1) シルト |
| | 9. 灰色 (5Y5/2) 粘質土 (島畑盛土) | |



- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| 1. 青灰色 (10BG6/1) 粘質土 | 4. 緑灰色 (5G6/1) 極細粒砂～シルト |
| 2. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 粗粒砂～中粒砂 | 5. 緑灰色 (5G6/1) シルト |
| 3. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘質土 | 6. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 中粒砂 |
| | 7. 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト |



第44図 L地区島畑ほか断ち割り土層断面図(1/100)

北方向の溝状遺構の一部を検出した。平成27年度に実施した下水主遺跡第8次調査の際にその延長部である溝状遺構SD45を検出した。溝状遺構の土層断面の観察(第40図)によると、基盤層であるにぶい黄色粘質土(39層)を掘り込んで溝状遺構を形成している。この上部に緑灰色や青灰色の極細粒砂(23・24・29・30層など)が堆積する。この上部に若干の層を挟んで灰色細粒砂や中粒砂(7～10層)が広くSD02を覆うように堆積する。検出長39.2m、検出幅12.6m、深さ0.4m前後である。溝底の標高はおよそ13.2mである。第8次調査と合わせた検出長は約87mである。遺物は埋土の掘削中や精査中に土師器や須恵器、瓦器、陶磁器などが出土した。時期は中世前半である。

溝状遺構SD04(第41・42図) 調査区の中央、やや西寄り、島畑70・71と72の間で検出した(C4-x7区ほか)。南北方向の溝状遺構の一部を検出した。平成27年度に実施した下水主遺跡第8次調査の際にその延長部である溝状遺構SD43を検出した。溝状遺構の土層断面の観察(第40図)によると、基盤層であるにぶい黄色粘質土(39層)を掘り込んで溝状遺構を形成している。この上部に緑灰色や青灰色の極細粒砂(20・21・27層など)が堆積する。この上部から島畑72にかけて青灰色や明緑灰色の細粒砂や粘質土(15・16・18層など)が広く堆積する。この上部の堆積層は下層の20・21層を切り込んで堆積している。検出長75.8m、検出幅4.1～5.1m、深さ0.3～0.5mである。溝底の標高はおよそ13.1mである。第8次調査と合わせた検出長は約102mで、島畑72と同じ長さである。遺物は埋土の掘削中や精査中に土師器や須恵器、瓦器、陶器などのほか軒丸瓦などが出土した。時期は中世前半である。

溝状遺構SD10(第42図) 調査区のほぼ中央、島畑70と71の間で検出した(D4-g5区ほか)。東西方向の溝状遺構で、島畑70と71を分ける。SD10の埋土はオリーブ灰色ないし緑灰色の細粒砂である。検出長8.3m、検出幅7.6m、深さ0.5mである。溝底の標高はおよそ13.1mである。遺物は埋土の掘削中に土師器や須恵器のほか、弥生時代の磨製石斧などが出土した。時期は中世前半である。

②中層遺構

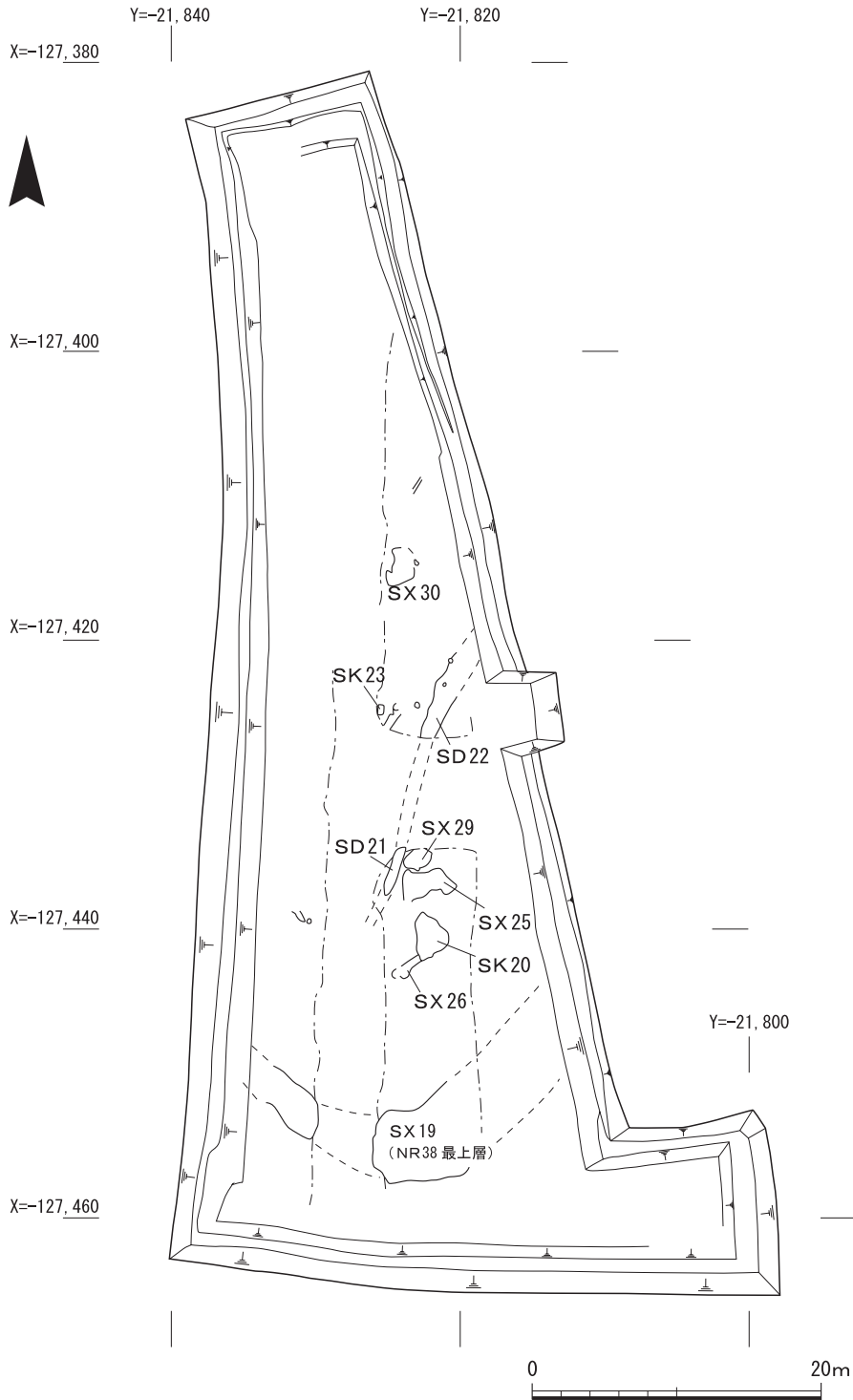
溝SD21(第46図) 調査区のほぼ中央、島畑70の北端部で検出した(D4-i7・j7区)。検出長3.5m、幅0.7～0.8m、深さ約0.1mである。埋土は灰オリーブ色細粒砂～極細粒砂の1層である。北に対して20°東へ振る。後述する溝SD22と同一のものと考えられるが、溝状遺構SD10によって大きく削平されて分断されている。弥生土器や古式土師器の破片が出土した。時期は古墳時代初頭であろう。

溝SD22(第46図) 調査区のほぼ中央、島畑71の南半部で検出した(D4-f5・f6・g6区)。検出長約7m、幅1.2～1.5m、深さ0.2mである。埋土は大きく2層に分かれ、上層が灰黄色細粒砂～極細粒砂、下層が灰色シルトである。北に対して26°東へ振る。上述の溝SD21と同一のものであろう。古式土師器の甕や高杯、器台などが出土した(第57図169～172)。時期は古墳時代初頭である。

土坑SK20(第47図) 調査区の南半部で検出した(D4-j6・k6区)。平面形は三角形に近い不

整形な形状を呈し、長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.1mである。埋土は灰色極細粒砂～シルトである。遺物は古式土師器の甕や高杯が出土した(第57図173～175)。時期は古墳時代初頭である。

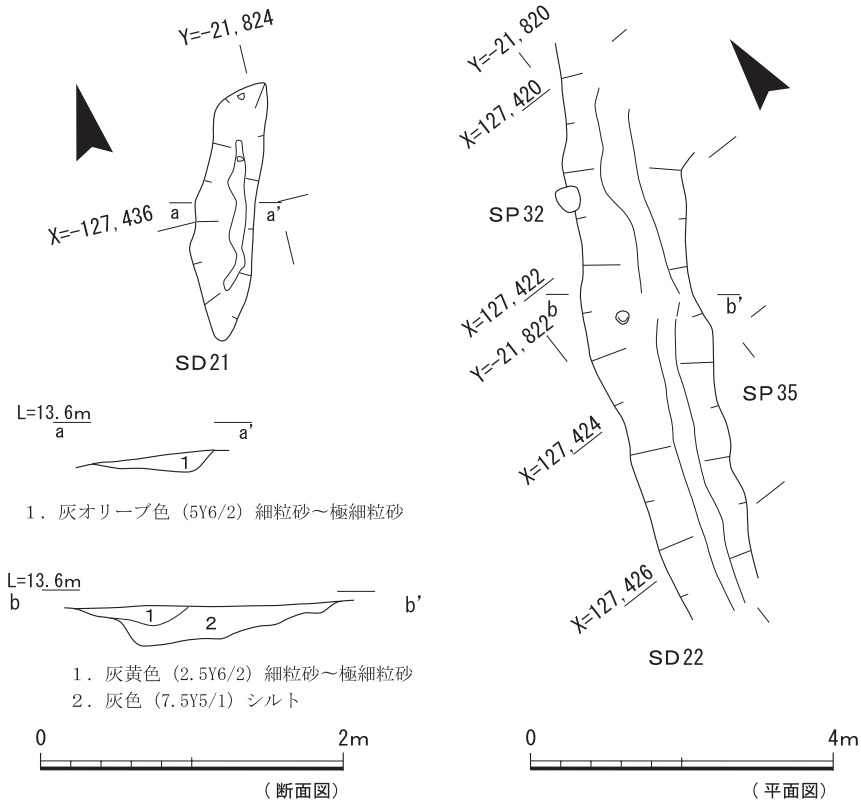
土坑SK23(第45図) 島畑71の南西部で検出した(D4-g8区)。平面形は隅丸方形を呈し、全長0.7m、幅0.4m、深さ0.05mである。埋土は黄褐色細粒砂である。遺物は土師器の細片が出土したものの、詳しい時期は不明である。周辺の遺構と同時期の古墳時代初頭のものであろう。



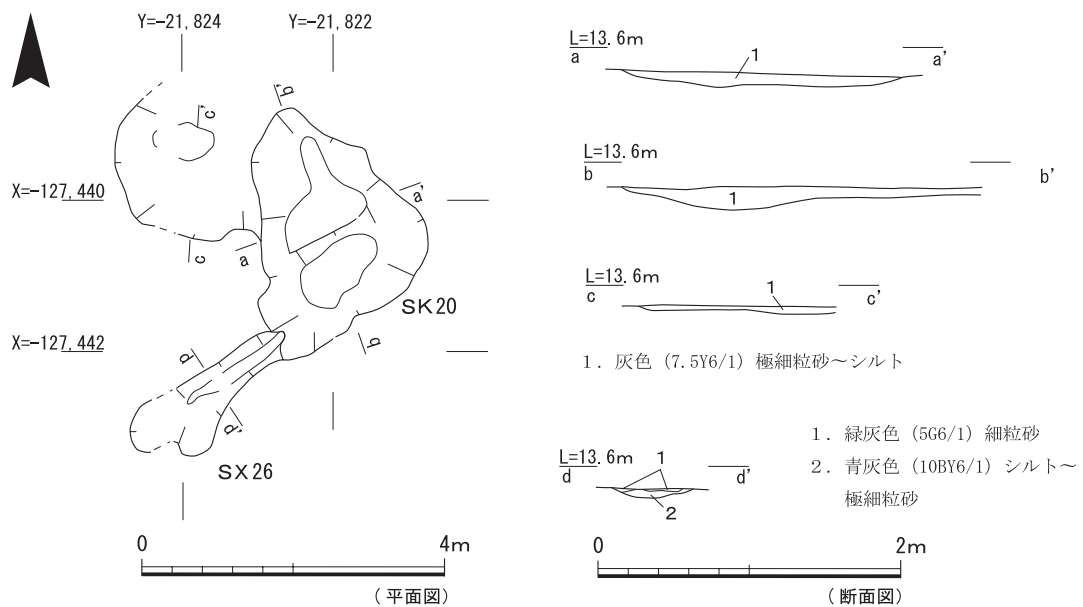
第45図 L地区中層遺構配置図(1/500)

不明遺構 S X 25・26・29・30(第45図) 調査区の各所で検出した不整形な形状の落ち込みである。いずれも自然地形に由来すると推測される。遺物は土師器片などが出土したものの、量的には少ない。時期は中世よりも古く、弥生時代よりも新しいと推定されるが、詳しい時期は不明である。

③下層遺構



第46図 L地区溝SD21・22実測図(1/100・1/50)

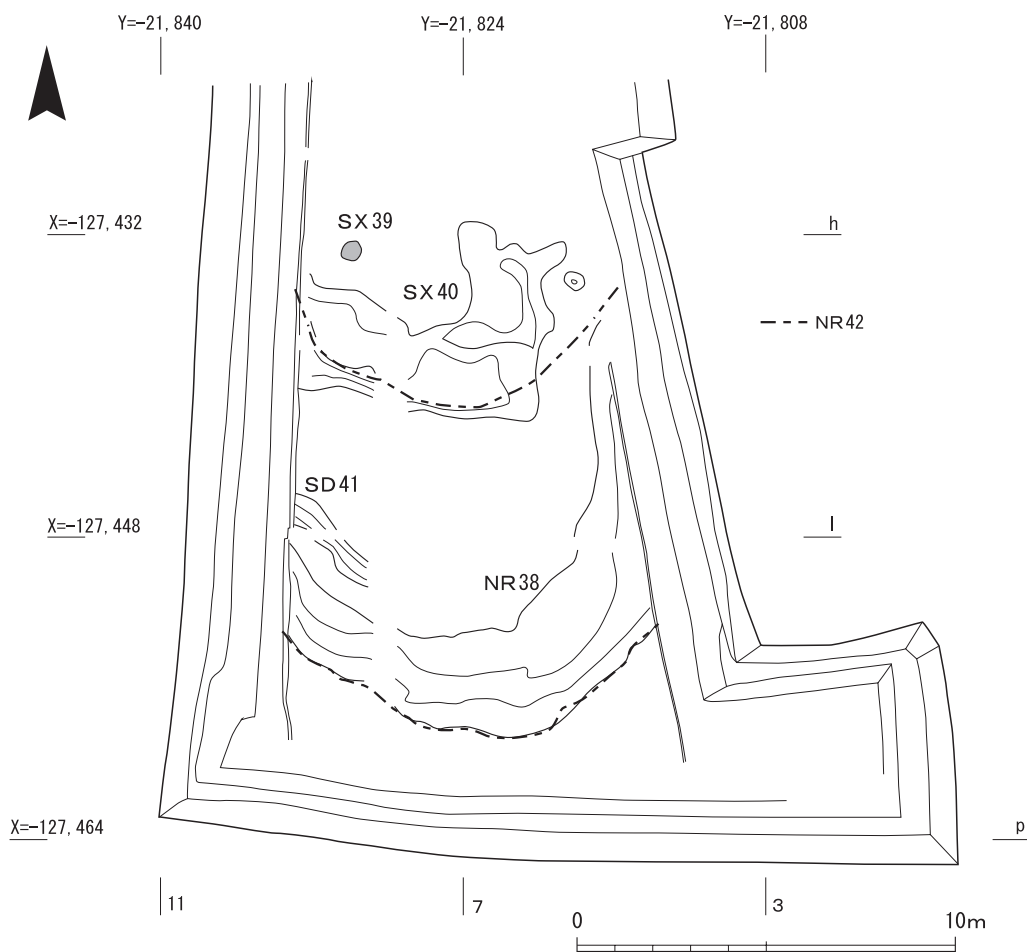


第47図 L地区土坑SK20・不明遺構SX26実測図(1/100・1/50)

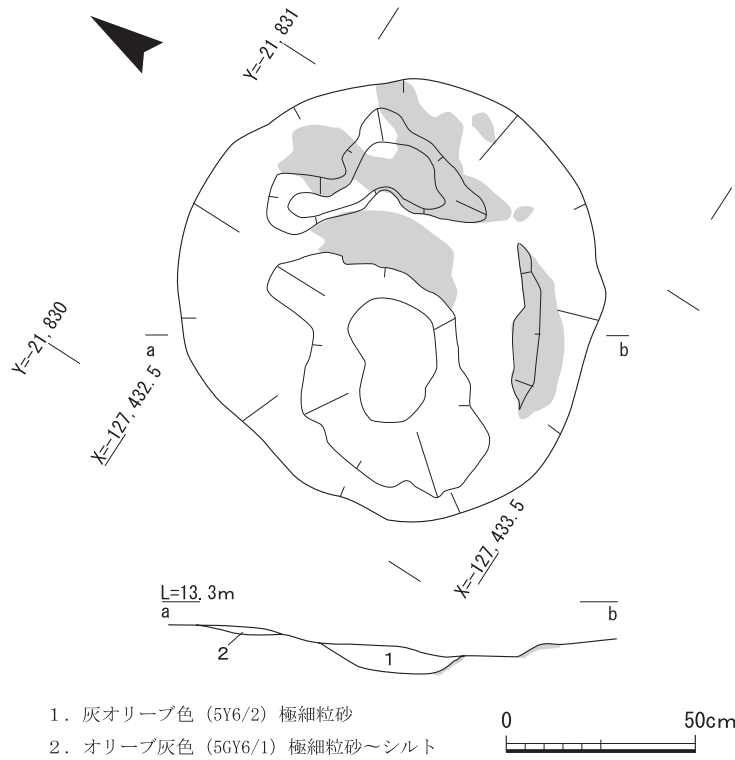
焼土坑 S X 39(第49図) 調査区の南半部、西辺寄りで、落ち込み S X 40の北側で検出した(D4-i8区)。平面形はやや楕円形を呈し、長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.1mである。土坑の東半部の底面が赤変する。埋土は灰オリーブ色ないしオリーブ灰色の極細粒砂である。埋土から少量の縄文土器片が出土した。時期は縄文時代晩期である。

落ち込み S X 40(第48・50図) 調査区の南半部、氾濫流路 N R 38の北側で検出した(D4-i6区ほか)。平面形は不整形な形状で、逆L字形に凹んだ微地形を呈しており、自然地形に由来するものと考えられる。検出した範囲は東西13.7m、南北10.5m、深さは地点によって差異があり、0.1~0.9mである。埋土は、最も深い例では5層ほどある(第50図断面a-a')が、浅い事例では1~2層である。a-a'断面では、上から灰オリーブ色極細粒砂(1層)、浅黄色極細粒砂~シルト(2層)、明黄褐色極細粒砂~シルト(3層)、灰黄色シルト(4層)、にぶい黄橙色細粒砂(5層)となっている。一方、c-c'断面では、浅黄色粘土(2層)、灰黄色シルト(3層)の2層がある。遺物はこれらの凹みから多数の縄文土器が出土した(第68図261~第69図274)。時期は縄文時代晩期である。

自然流路 N R 38(第48・51図) 調査区の南端で検出した(D4-j5区ほか)。後述する氾濫流路 N R 42の上層に位置する。平面形は弧状を呈する。検出総延長33.8m、幅3.5~5.5m、深さ0.5~



第48図 L地区下層遺構配置図(1/400)



第49図 L地区焼土坑S X39実測図(1/20)

0.6mである。埋土は大きく3層に分かれ、a-a'断面の堆積をみると、明緑灰色シルト～淡黄色シルト(1層)、灰黄褐色シルト(2層)、明緑灰色極細粒砂～シルト(3層)である。なお、中層遺構面検出時に調査区の南半部で弧状呈する土色の変化を確認していたが、検出位置から見てNR38の最上層に相当すると考えられる。遺物は3層を中心とする堆積土から多数の縄文土器が出土した(第67図248～260)。時期は縄文時代晩期である

溝SD41(第48図) 調査区の南半部西寄りの、氾濫流路NR38の北側で検出した(D4-19区ほか)。検出長5.5m、幅0.9～1.3m、深さ0.3mである。溝の埋土は暗オリブ灰色ごく細粒砂ないしシルトである。人為的な溝かどうか判断できなかったが、NR38と並行していることから後述する氾濫流路NR42の埋没過程で生じた自然流路の1つかもかもしれない。

氾濫流路NR42(第53・54図) 調査区の南端、氾濫流路NR38の下層で検出した(D4-j5区ほか)。木津川の氾濫によって形成された谷状地形である。この谷状地形は木津川の氾濫によって生じた洪水が、当時の地表面を抉って形成されたもので、このように形成された流路のことを「氾濫流路」とよぶ。^(注14)この氾濫流路は、洪水の性格上、蛇行していると推定されるが、調査ではその一部を確認したもので、谷状地形の平面形は弧状を呈する。NR42は平成27年度の第8次調査の際に延長部を検出した。NR42の堆積状況について、第54図上段の調査区東壁で概要を述べると、木津川の氾濫等で形成された緩い「U」字状の地形の最下層には南側を主体として灰白色の中粒砂や極細粒砂(28・31層)が堆積する。その上層は直径20cm内外の流木が灰白色中粒砂と灰黄色シルトの互層(19層)に堆積している。これより上部も、褐灰色シルトと灰白色中粒砂の互層(16層)や灰白色中粒砂と灰黄褐色シルト(18層)、灰褐色シルトと灰白色中粒砂の互層(20層)などのようにシルトと中粒砂の互層がラミナを形成しながら厚く堆積している。NR42は、ほぼこうした堆積で埋没していることから、洪水等を原因とする水の流入によって徐々に埋没していったと考えられる。第6次調査での総検出長16.4m、幅17.0m、深さ1.7～2.0mである。

遺物等の出土状況では、まず下層を中心に大量の自然木が出土した。出土した自然木の多くは、先端を流れの方向に向けており、洪水によって流されたものであることがうかがえた。こうした

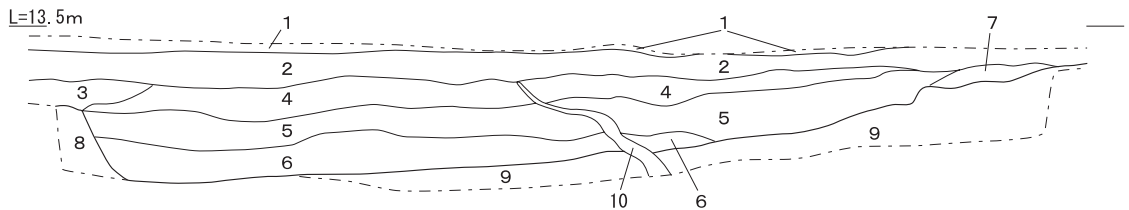
自然木の堆積は東側に当たる下水主遺跡第8次調査L2区の調査でも確認している。また、堆積層からは縄文時代晩期の土器が多数出土した。これらの大半は谷状地形の南側斜面に集中しているようすがうかがえた(第53図)。第53図の上部の一群はNR38で出土した一群である(第67図248～260)。同じく下部で出土した一群は、NR42の底面に接して出土したものが大半を占める(第61図187～第66図247)。当初、これらの遺物については、洪水等によって西側から流されてきたものと考えていたが、遺物の多くで摩耗が認められないことや、出土状況が南側斜面に集中することなどから、調査地の南側から投棄された可能性が高いと考えられる。また、木の実などの有機物のほか、櫛状木製品の未製品が出土した(第74図309・310)。なお、第6・8次両調査区で検出したNR42の規模は、総検出長約50m(未調査区を含む)、幅9.8～17.1m、深さ1.8m前後である。

(戸原和人・渡邊拓也・筒井崇史)

(3) 出土遺物

① 上層遺構出土遺物

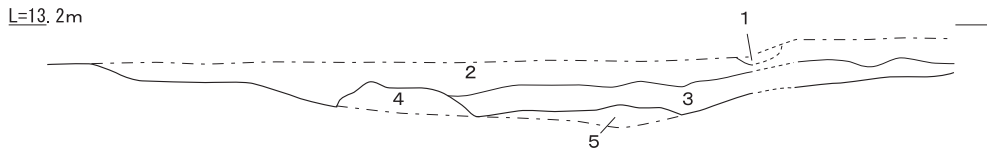
鳥畑70(第55図98～127) 98～103は土師器皿である。口縁部にヨコナデを施して外反気味となるもので、底部の形状が丸みを帯びるもの(98・101)と、平底のもの(99・100・102・103)とがある。104～111は瓦器碗である。口縁部の破片を多く提示したが、口縁端部に沈線を施すもの(104・



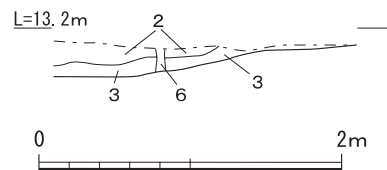
- | | | |
|----------------------------|--------------------------------|---|
| 1. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 極細粒砂 | 5. にぶい黄橙色 (10YR7/2) 細粒砂 | 9. 緑灰色 (10G6/1) 粘土 |
| 2. 浅黄色 (2.5Y7/4) 極細粒砂～シルト | 6. 青灰色 (10BG6/1) シルト | 10. 浅黄色 (2.5Y7/3) 中粒砂(灰色 (Y6/1) 中粒砂、にぶい黄褐色 (10YR7/2) 中粒砂が混じる、噴砂の痕か) |
| 3. 明黄褐色 (10YR7/6) 極細粒砂～シルト | 7. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルト(4層よりも粘土質) | |
| 4. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルト | 8. 青灰色 (5B6/1) 極細粒砂～シルト | |



- | |
|---|
| 1. にぶい黄褐色 (10YR7/4) 極細粒砂と褐灰色 (5BG6/1) 粘土混じる |
| 2. にぶい黄褐色 (10YR7/3) 極細粒砂～シルト |



- | |
|---|
| 1. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 粘土 |
| 2. 浅黄色 (2.5Y7/3) 粘土(褐色 (7.5YR4/3) シルト混じる) |
| 3. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルト(褐色 (7.5YR6/6) 極細粒砂混じる) |
| 4. 明青灰色 (5B7/1) シルト |
| 5. 青灰色 (10BG6/1) シルト |
| 6. 灰白色 (2.5Y8/1) 細粒砂(噴砂の痕か) |



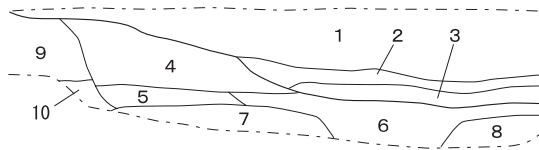
第50図 L地区落ち込みS X40土層断面図(1/50)

L=13.2m



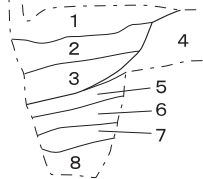
- | | | |
|---|---------------------------|------------------------------------|
| 1. 明緑灰色 (10GY7/1) シルト〈炭混じり〉
～浅黄色 (2.5Y7/4) シルト | 3. 明緑灰色 (10G7/1) 極細粒砂～シルト | 6. 灰褐色 (7.5YR5/2) 極細粒砂
〈有機物を含む〉 |
| 2. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト | 4. 灰色 (10Y6/1) 極細粒砂 | |
| | 5. 灰褐色 (7.5YR6/2) シルト | |

L=13.2m



- | | | |
|---|--------------------------------------|--|
| 1. 淡黄色 (2.5Y8/3) 粘質土～明緑灰色
(10GY7/1) 粘質土 〈炭を含む〉 | 4. 青灰色 (10BG6/1) 粘質土 〈炭混じる〉 | 7. 褐灰色 (10YR5/1) 細粒砂
〈灰黄色 (2.5Y7/2) 中粒砂混じる〉 |
| 2. 灰白色 (10YR7/1) シルト 〈一部に
灰黄褐色 (10YR5/2) シルト混じる〉 | 5. 灰白色 (2.5Y7/1) 極細粒砂
〈炭混じる〉 | 8. 灰白色 (2.5Y7/1) 中粒砂～細粒砂 |
| 3. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂～
シルト | 6. 灰色 (7.5Y6/1) 細粒砂～後細粒砂
〈有機物を含む〉 | 9. 明青灰色 (5B7/1) 細粒砂 |
| | | 10. 灰白色 (7.5Y7/2) 細粒砂と淡黄色
(5Y8/4) 細粒砂の互層 |

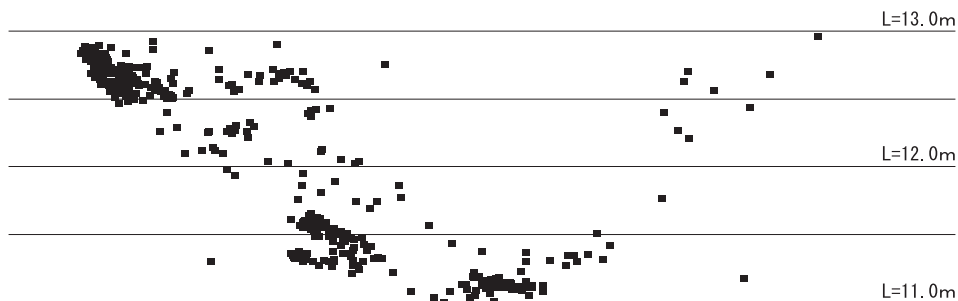
L=13.2m



- | |
|---|
| 1. 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘土 |
| 2. 青灰色 (5BG6/1) 極細粒砂 |
| 3. 青灰色 (5BG6/1) 極細粒砂～シルト |
| 4. 明緑灰色 (10G7/1) 極細粒砂 〈浅黄色 (2.5Y7/4) 極細粒砂混じる〉 |
| 5. 緑灰色 (5G5/1) 極細粒砂～シルト 〈有機物を含む〉 |
| 6. オリーブ灰色 (7.5Y5/1) 極細粒砂～シルト 〈有機物を含む〉 |
| 7. 灰色 (7.5Y5/1) 極細粒砂～シルト |
| 8. オリーブ灰色 (5G6/1) シルト 〈有機物を含む〉 |

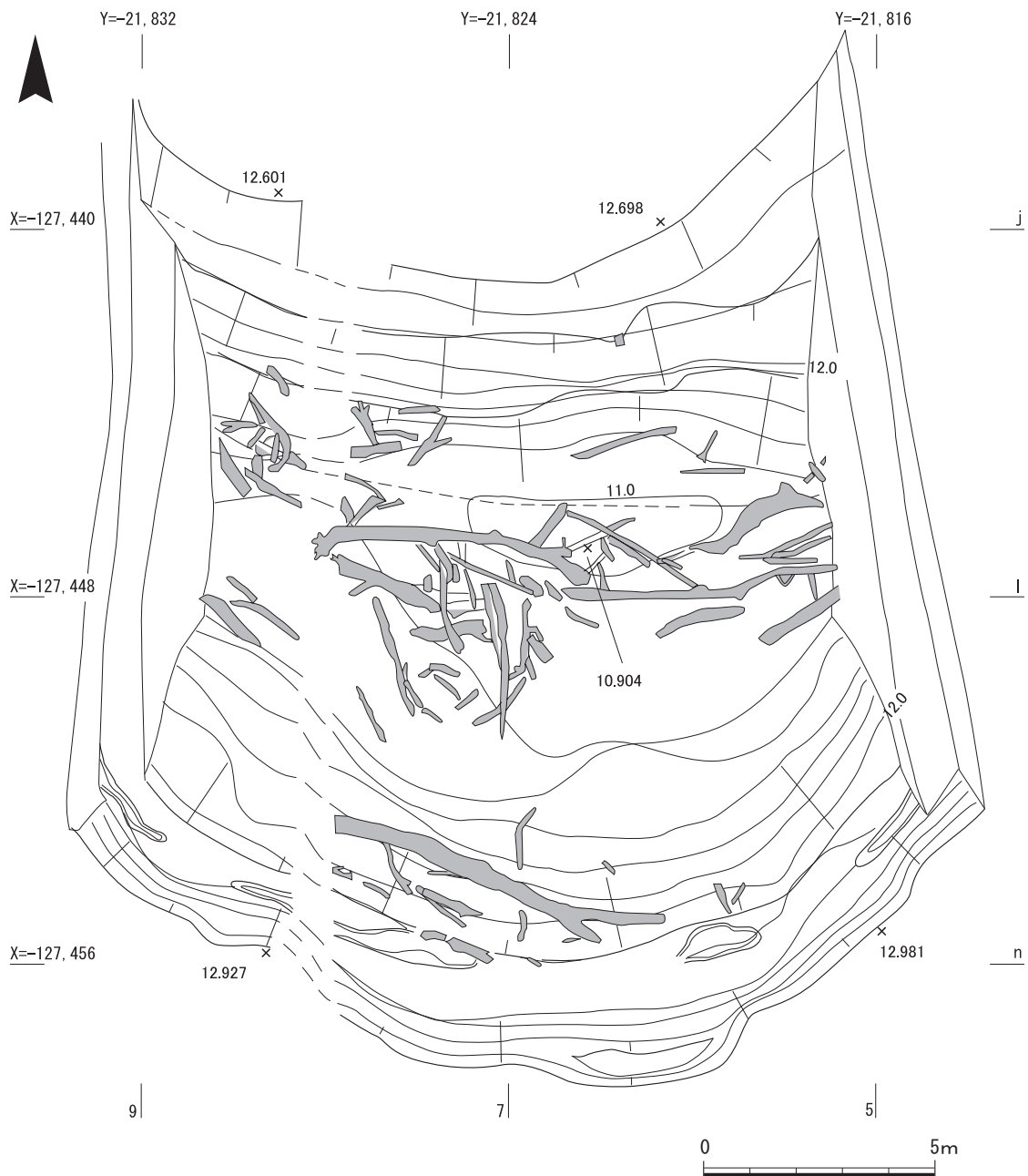


第51図 L地区自然流路N R38土層断面図(1/50)



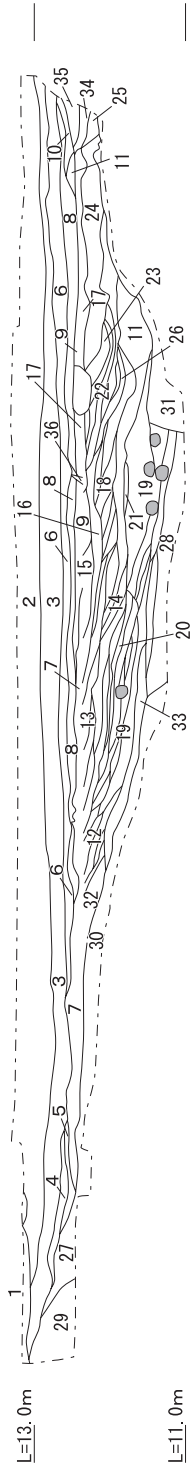
第52図 L地区自然流路N R38・氾濫流路N R42縄文土器出土状況投影図

105・108・109)と、施さないもの(106・107)とが確認できる。調整は摩滅のため不明なものが多いが内面にミガキをやや粗く施すものがある。110・111は底部で、断面三角形の高台を貼り付ける。内面にミガキや暗文が確認できる。112は器種不明の土師器である。口縁部外面に断面三角形の突帯状のものが巡る。113・114は須恵器鉢の口縁部の小破片である。ともに口縁端面が回転ナデにより少し凹むものである。115は白磁碗である。口縁部が強く外反するものでⅧ類^(注15)である。116は土師器の盤や皿のような器形と推定されるが、詳細は不明である。117は奈良時代の土師器杯Aである。口縁部が大きく外反し、口縁端部がつまみみ上げ気味に肥厚するものである。調整は内外面ともヨコナデで、暗文等は確認できない。118は須恵器杯B蓋の小破片である。117・118は奈良時代のものと推定される。119・120は須恵器杯蓋の小破片である。形態から古墳時代

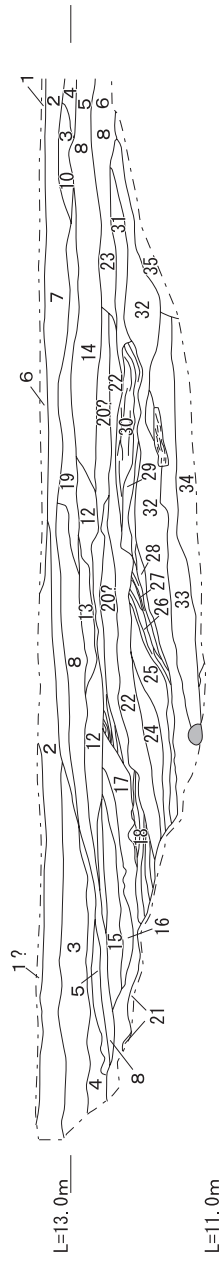


第53図 L地区氾濫流路N R42平面図(1/150)

〔NR42 東壁土層断面〕



〔NR42 西壁土層断面〕



第54図 L地区氾濫流路NR42土層断面図(1/100)

L地区NR42 東壁土層断面土色

1. 浅黄色 (2.5Y7/3) 極細粒砂
2. 灰白色 (7.5Y7/2) 極細粒砂
3. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 極細粒砂
4. 緑灰色 (10GY6/1) 極細粒砂～シルト
5. 青灰色 (10BG6/1) 極細粒砂～シルト
6. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 細粒砂
7. 黄灰色 (2.5Y5/1)
8. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂
9. 灰黄色 (2.5Y6/2) 中粒砂～細粒砂
10. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂 粘質
11. 灰色 (10Y6/1) 極細粒砂
12. 褐灰色 (10Y6/1) 極細粒砂と
灰白色 (10YR8/1) 極細粒砂混じる
13. 灰白色 (5Y7/1) 中粒砂と
黄灰色 (2.5Y6/1) シルト混じる
14. 灰白色 (2.5Y8/1) 中粒砂と
黄灰色 (2.5Y5/1) シルト混じる
腐食土
15. 青灰色 (10BG6/1) 細粒砂と
灰黄褐色 (10YR5/2) シルト混じる
16. 褐灰色 (10YR5/1) シルトと
灰白色 (10YR8/2) 中粒砂混じる
17. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト
18. 灰白色 (2.5Y7/1) 中粒砂と
灰黄褐色 (10YR5/2) シルト混じる
19. 灰白色 (10Y8/1) 中粒砂と
灰黄色 (2.5Y6/2) シルト混じる
20. 灰褐色 (2.5YR6/2) シルトと
灰白色 (10YR7/1) 中粒砂
21. 青灰色 (10G6/1) 細粒砂と
灰黄褐色 (10YR5/4) シルト混じる
22. にぶい褐色 (7.5YR5/3) シルトと
灰白色 (7.5YR8/1) 中粒砂混じる
23. 明褐色 (6YR7/1) 中粒砂
24. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒砂と
褐灰色 (10YR5/1) シルト混じる

25. 灰白色 (2.5Y8/1) 中粒砂と
灰黄色 (2.5Y6/2) シルト混じる
26. 灰色 (5Y6/1) 中粒砂
27. 明褐色 (5G7/1) 極細粒砂～シルト
28. 灰白色 (5Y7/1) 極細粒砂と
褐灰色 (7.5Y5/1) シルト混じる
29. 青灰色 (5BG6/1) 粘土
30. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト粘質
31. 灰白色 (5Y7/1) 中粒砂
32. 青灰色 (5BG5/1) シルト
33. 灰色 (7.5Y5/1) 細粒砂
34. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 極細粒砂
35. 灰白色 (7.5Y7/2) 細粒砂～極細粒砂
36. 灰色 (5Y5/1) 粘土

17. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト
18. 灰白色 (2.5Y7/1) 中粒砂
19. 灰白色 (5Y7/1) 細粒砂と
浅黄色 (2.5Y8/3) 細粒砂混じる
20. 灰白色 (5Y7/1) 中粒砂と
褐灰色 (7.5YR5/1) シルト混じる
21. 青灰色 (5B6/1) 粘土
22. 明青灰色 (5B7/1) 極細粒砂
23. 青灰色 (10BG6/1) 細粒砂
24. 灰白色 (5Y7/1) 細粒砂と
灰白色 (5Y7/2) 混じる
25. 灰白色 (5Y7/1) 細粒砂と
灰白色 (10YR7/1) 細粒砂混じる
26. 灰白色 (2.5Y8/1) 細粒砂と
灰白色 (2.5Y7/1) 細粒砂混じる

L地区NR42 西壁土層断面土色

1. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂
2. 明青灰色 (5BG7/1) 極細粒砂
3. 明緑灰色 (2.5GY7/1) 粘土
4. 明青灰色 (5BG7/1) シルト
(腐食土混じる)
5. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂～
シルト (腐食土)
6. 浅黄色 (2.5Y7/3) 極細粒砂
7. 明緑灰色 (7.5GY8/1) 極細粒砂
8. 明緑灰色 (7.5GY8/1) 細粒砂
9. 青灰色 (5B6/1) 粘土
10. 明緑灰色 (7.5GY7/1) 極細粒砂
11. 褐灰色 (7.5YR4/1) シルト (腐食土)
12. 明青灰色 (10BG7/1) 極細粒砂
13. 青灰色 (10BG6/1) シルト
14. 暗緑灰色 (5G7/1) 極細粒砂～シルト
15. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂～シルト
16. 灰黄色 (2.5Y6/2) 中粒砂と
浅黄色 (2.5Y8/3) 中粒砂混じる
(有機物含む)

27. 灰白色 (5Y7/1) 細粒砂と
灰色 (5Y5/1) シルト混じる
28. 灰白色 (5Y7/1) 極細粒砂と
灰色 (5Y5/1) シルト混じる
29. 灰白色 (N8/0) 細粒砂と
灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂
30. 灰白色 (10YR7/1) 細粒砂と
灰黄褐色 (10YR5/2) シルト
31. 青灰色 (5B6/1) 細粒砂
32. 青灰色 (5B6/1) シルト
33. 灰黄褐色 (10YR6/2) シルトに
灰白色 (2.5Y7/1) (炭含む) が
少し混じる
34. 灰白色 (2.5Y7/1) 細粒砂～極細粒砂と
灰黄褐色 (10YR6/2) シルト (腐食土)
混じる (有機物含む)
35. 青灰色 (5B6/1) 粘土
36. 34層と同じ、粘質が強い

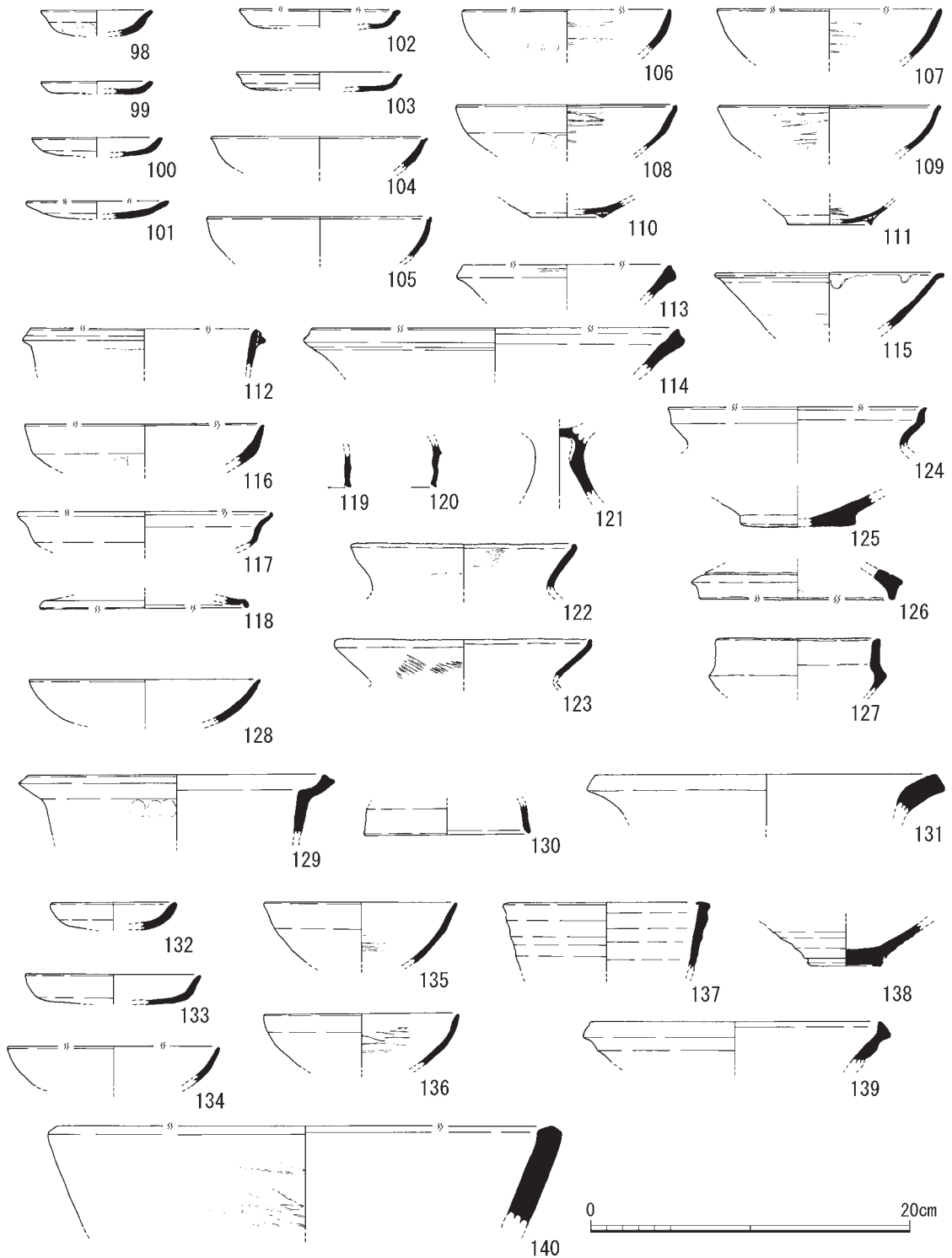
(注16)
 中期末頃の陶器編年TK47型式前後のものではないかと考える。121は須恵器高杯の脚部の破片である。外面に自然が付着する。122・123は庄内式の甕の口縁部である。ともに口縁端部をつまみ上げ、123は外面にタタキが見られる。124～126は弥生土器である。124は受け口状を呈する甕または壺で、後期のものであろう。125は壺の底部の破片である。後期のものであろうか。126は中期の高杯の脚裾部であろう。外面に沈線を1条確認できる他、直径0.3cm程度の小円孔が確認できる。127は縄文土器浅鉢である。口縁部が逆「く」字状を呈し、口縁部の内外面にミガキを施す。体部外面にはケズリを施す。116～127は島畑の造営前の遺物で、他の調査区にくらべ島畑造成以前の弥生時代から古代にかけての遺物が多く出土している。この点は北側のN地区においても同様の傾向がうかがえ、下水主遺跡のD・E・G～K地区にくらべて出土点数が多い点で注目される。

島畑71 (第55図128～130) 128は土師器の椀と推定される。内外面ともナデで仕上げる。129

は瓦質土器の鍋であろう。口縁部は緩やかな受け口状を呈する。130は119・120と同じく須恵器杯蓋の小破片である。時期もおおむね先のものと同じと推定される。

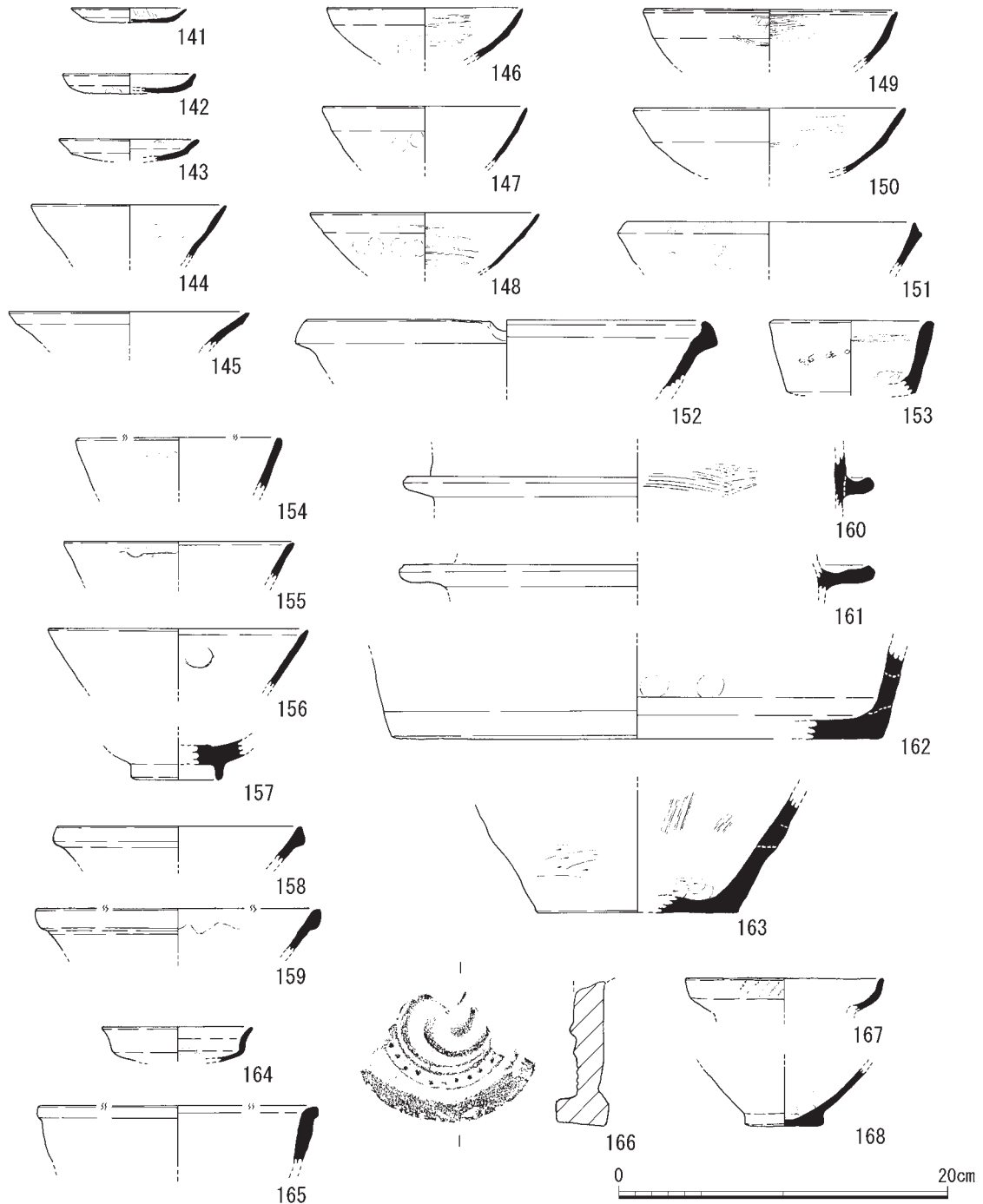
島畑72(第55図131) 131は土師器または弥生土器の壺の口縁部の破片と思われる。

溝状遺構SD02(第55図132~140) 132・133は土師器皿である。ともに平底気味で、132はや



第55図 L地区出土遺物実測図1(1/4)

や厚手のものである。134～136は瓦器碗である。135は沈線を有する。135・136は内面に粗いミガキを確認できる。137は陶器壺であろう。外面の上半部だけに釉薬を施す。138は陶器碗の底部である。内面には釉薬を施す。底部は削り出し高台である。139は須恵器鉢である。口縁部は内傾するようにつまみ上げたような形状で、外側の端面は面をなす。口縁部外面に回転ナデの凹凸が明瞭に認められる。140は瓦質土器火鉢で、詳細は不明であるが、厚手であることから火鉢などと考えられる。

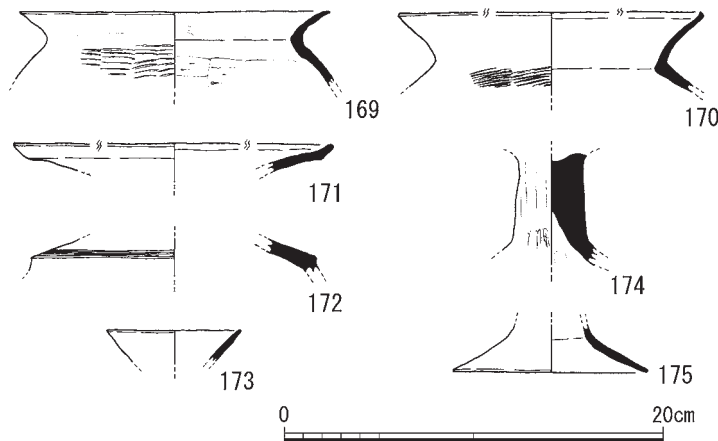


第56図 L地区出土遺物実測図2(1/4)

溝状遺構 S D04 (第56図) 141~143は土師器皿である。141・142は平底気味、143がやや丸みのある底部である。144は土師器杯または碗の口縁部と思われる。145は土師器であるが詳細な器種は不明である。口縁部は緩やかに外反した後にわずかに内湾気味となる。146~150は瓦器碗である。149は口縁端部内面に沈線をもつが、ほかは端部を丸く納める。また、149は内面に密にミガキを施すが、ほかは粗いミガキを施す。151は瓦質土器の鉢である。口縁端部がつまみ上げ気味となり、外端面はヨコナデによりわずかに凹む。152は須恵器の片口鉢である。口縁端部内面に強い回転ナデによって、わずかな段が形成され、受け口状となる。内外面とも回転ナデを施す。153は瓦質土器の香炉である。復元口径9.5c m程度の小型品で、底部を欠損する。外面に花文と推定される押印が認められる。154~157は青磁碗である。154~156は、いずれもほぼ直線的に延びる口縁部の破片である。157は底部の破片で、高台は削り出しである。158・159は白磁碗の口縁部である。どちらも外面が玉縁状を呈するⅣ類である。160・161は土師器羽釜である。いずれも鏝のみの資料である。162は瓦質土器火鉢などの底部であろう。163は陶器の播り鉢である。内面には4条前後を一組とする摺目が認められる。164は土師器杯である。口縁部はやや大きく外反する。165は土師器鉢である。口縁部外面をわずかに屈曲させ、突帯状を呈する。166は軒丸瓦である。瓦当は、外区が幅1.5c m、高さ1.5c m程度の直立縁の内側に殊文が巡り、内区は巴文である。中世以降のものであろう。164は弥生土器壺または甕である。緩やかに受け口状を呈し、口縁部外面に刺突文を施す。168は弥生土器壺または甕の底部である。突出底である。調整は内外面とも、ユビオサエやナデを施す。

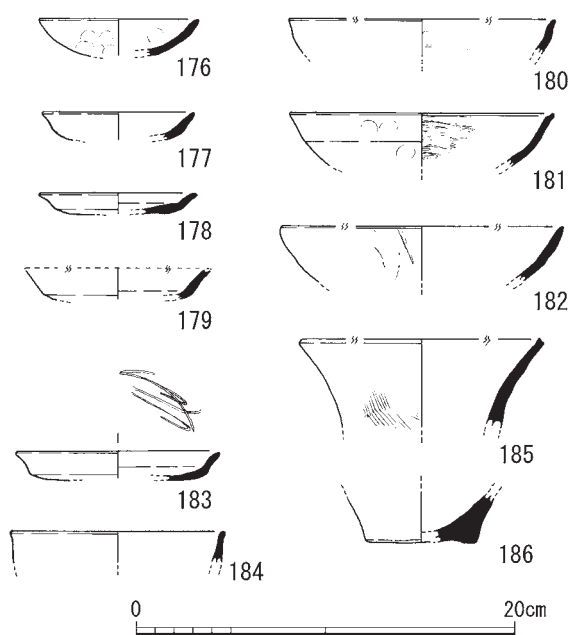
②中層遺構出土遺物

溝 S D22 (第57図169~172) 169は甕である。口縁端部はつまみ上げない点や体部内面のケズリが頸部まで達しない点など、一般的な庄内式甕とは異なるものの、細筋のタタキやケズリを施している点から庄内式甕の範疇で捉えることができよう。170は器台の口縁部と思われる。大きく開く頸部から、やや内方よりに口縁部が短く延びるものである。171は装飾高杯の脚部の破片と思われる。端部を欠損するが、脚柱部下端から大きく開き、再び屈曲して端部に至る器形を呈するが、脚端部と脚柱部は欠損する。上辺側に擬凹線が4条施される。172は小型の壺の口縁部である。まっすぐ斜め上方に延び、小型丸底土器の口縁部かもしれない。



第57図 L地区出土遺物実測図3 (1/4)

土坑 S K20 (第57図173~175) 173は典型的な庄内式甕である。口縁端部をわずかにつまみ上げ、体部外面に細筋のタタキを施す。また内面のケズリ



第58図 L地区出土遺物実測図4(1/4)

は頸部まで達する。174は土師器高杯の脚柱部である。175は高杯ないし器台の脚裾部である、柱状を呈する上半部から大きく八字状に開く形態となる。

③遺物包含層出土遺物(第58図)

上層ないし中層遺構に伴う遺物包含層から出土した遺物をまとめた。176～179は土師器皿である。176はやや丸底気味の小型の皿である。177は口縁端部内面がわずかに凹むものである。178・179は口縁部がやや大きく外反する。177～179は欠損するものの、おおむね平底と推定される。180～182は瓦器椀である。180は口縁部がわずかに外反し、端部は丸く納める。181は口縁端部内面に沈線を施し、内面に密にミガキを施す。182はやや厚手のつくりで、口縁端部を丸く納める。183は瓦器皿である。平底気味の底部から大きく外反する口縁部が立ち上がる。底部内面にジグザグ暗文を施す。184は天目茶碗の端部の破片と推定される。185は弥生土器長頸壺の口縁部と推定される。186は弥生土器壺もしくは甕の底部の破片である。底部外面の中央がわずかに凹む。

(筒井崇史)

④下層・最下層出土遺物

縄文時代の遺物は整理箱28箱分出土している。その多くは氾濫流路N R42およびその周辺の遺構から出土した。壺の口縁部片の可能性のあるものが数点含まれるほかは、基本的には深鉢と浅鉢から構成される。以下では、まず今回出土した土器の基本的な型式について分類を行った後、個別の遺物について出土地点ごとに概観する。^(注17)個別の土器の詳細な情報については遺物観察表(付表5)を参照いただきたい。

a) 土器の分類

深鉢形土器の分類(第59図) 深鉢形土器(以下、深鉢)には口頸部に凸帯が貼付されているものといないものの2種があり、前者をⅠ類、後者をⅡ類とする。また、凸帯や口縁端部の刻目の有無に関わらず、主に全体の器形によってA～F類の6大別を行う(第59図)。凸帯の有無と器形の組合せによって、ⅠA類、ⅡC類といったように深鉢の型式分類を設定する。

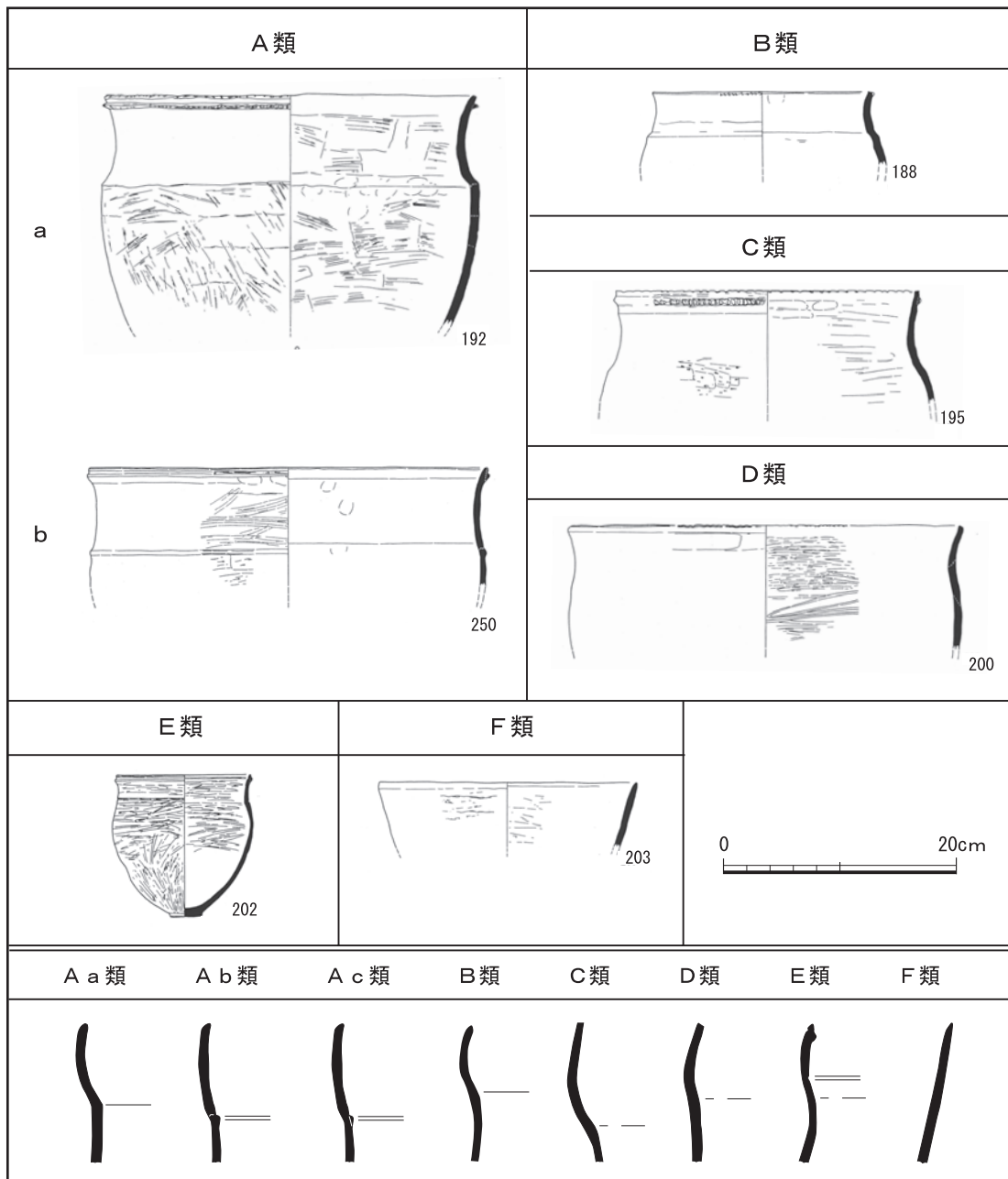
器形の分類

A類：外反する口頸部をもち、胴部の膨らみが顕著ではないもの。胴部最大径は胴部上位にある。胴部と口頸部の境目の形状によって細分する。

A a類：口頸部と胴部の境に明瞭な稜をもつもの。

A b類：口頸部と胴部の境を凸帯状に作り出すもの。

A c類：口頸部と胴部の境に貼付凸帯をもつ二条凸帯文深鉢。
 B類：短く立ち上がる口頸部を持ち、胴部と口頸部の境界が明瞭なもの。胴部最大径は胴部中位にある。
 C類：内傾気味に長く立ち上がる口頸部をもち、胴部最大径が胴部中位にあるもの。口頸部と胴部の境に明瞭な稜をもつものと、境が緩いS字状を呈するものがある。
 D類：外反気味に立ち上がる口頸部をもち、ほぼ直線的に口頸部と胴部がつながるもの。口頸部と胴部の境は不明瞭で、胴部のケズリが口頸部まで及ぶものもある。大形品に多い。
 E類：外反する口頸部をもち、口頸部と胴部の境に1条の沈線をもつもの。小形で半精製品に限られる。



第59図 L地区出土縄文土器深鉢の主要型式

F類：逆円錐形を呈する粗製のもの。

浅鉢形土器の分類(第60図) 浅鉢形土器(以下、浅鉢)は、主に口縁部の形態・形状による分類を行う。

A類：逆くの字状口縁部をもつもの。口縁部の内外面は黒色研磨される。屈曲部からの立ち上がりの高さによって細分する。

A a類：屈曲部からの立ち上がりの高さが4.0c m未満のもの。

A b類：屈曲部からの立ち上がりの高さが4.0c m以上のもの。

B類：口縁部が外側に長く外反し、平口縁をもつもの。

C類：外側に外反する口縁部をもち、口縁端部の内外面に凸帯ないし沈線をもつもの。凸帯や沈線を消失したものもあるが、波状口縁浅鉢はこの分類に含む。口縁部の形態によって細分する。

C a類 平口縁をもつもの。

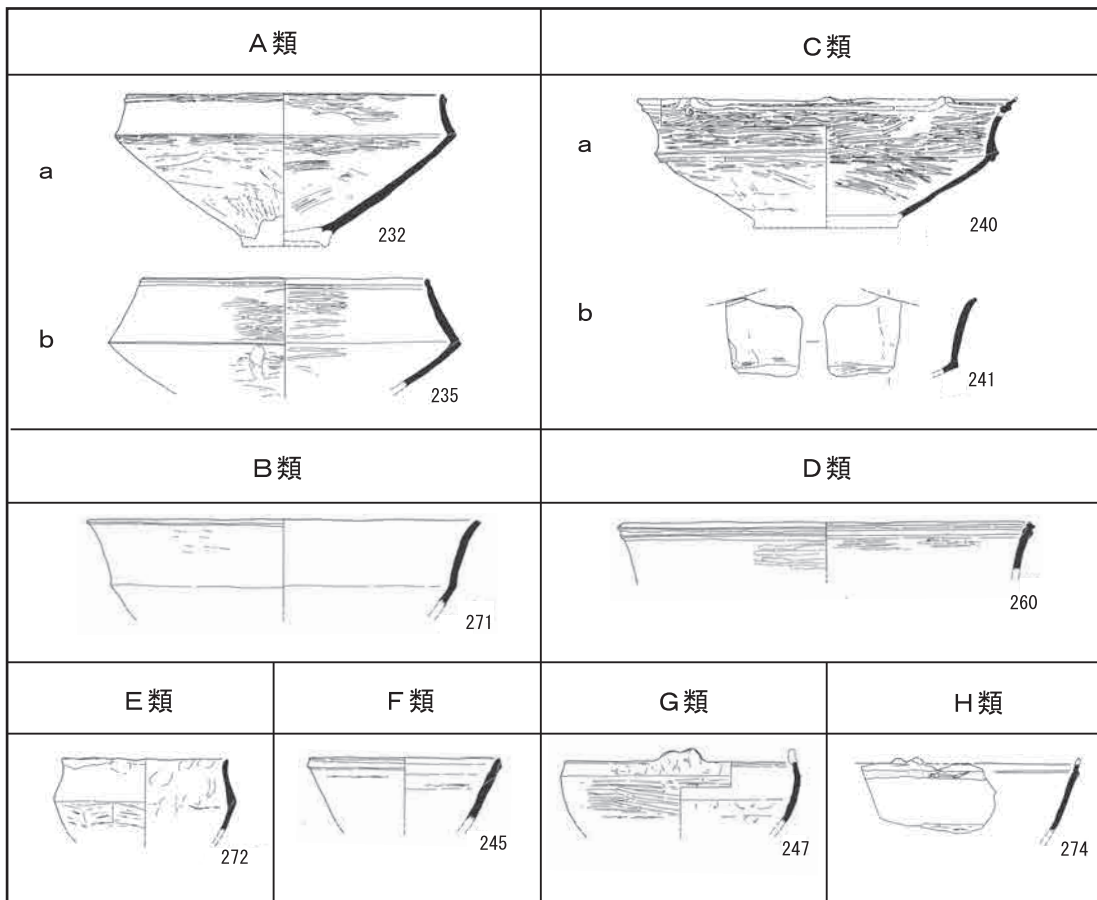
C b類 波状口縁をもつもの。

D類：口縁部が外側に直線的に開き、内外面に凸帯をもつもの。半精製の胎土をもつ。

E類：外反気味に立ち上がる口頸部をもつもの。製作技術は深鉢A類と共通する。

F類：逆円錐形を呈するもの。厚手で粗製のものである。

G類：砲弾形を呈するもの。



第60図 L地区出土縄文土器浅鉢の主要型式

H類：単純な椀形を呈するもの。

b) 出土遺物

氾濫流路NR42(第61図187～第66図247) 今回の調査の中で、最もまとまって縄文土器が出土した。総じて表面の荒れは少なく、周辺で使用された土器が氾濫流路の中に投棄されていたものと考えられる。深鉢と浅鉢の比率は口縁部のカウントで71:29であり、近畿地域における晩期中葉の遺跡としては一般的な値である。壺と考えられるものは認められなかった。

深鉢ではI類とII類の比率は58:42で、口頸部に凸帯を持つI類の比率がやや上回る。口頸部と胴部の境に凸帯を持つ二条凸帯文深鉢Ac類は存在しない。192～197・199は凸帯をもつ深鉢I類である。器形にはAa類、C類、D類があるが、IB類に該当するものは認められなかった。

187～189は深鉢IIB類である。187はほぼ全形をうかがうことができるものであり、口径12.7cmを測る。外面には不定方向のケズリ、内面には指頭圧痕を残す小形のものである。188・189はやや内傾気味に立ちあがる短い口頸部をもつ。それぞれ口縁端部にハケ状工具(188)、ないし指オサエ(189)による刻目が施される。

190～192は器形Aa類である。190はIIAa類で、口縁端部は面取りされる。内外面とも粘土の輪積み痕跡を明瞭に残し、外面には吹きこぼれによると考えられるコゲが認められる。192は口頸部に凸帯をもつIAa類である。口縁端部から0.5cm程度下がった位置に小さなD字の刻目凸帯が取り付け、口径が30cm以上に復元できる大形品である。内面はハケで仕上げられる。

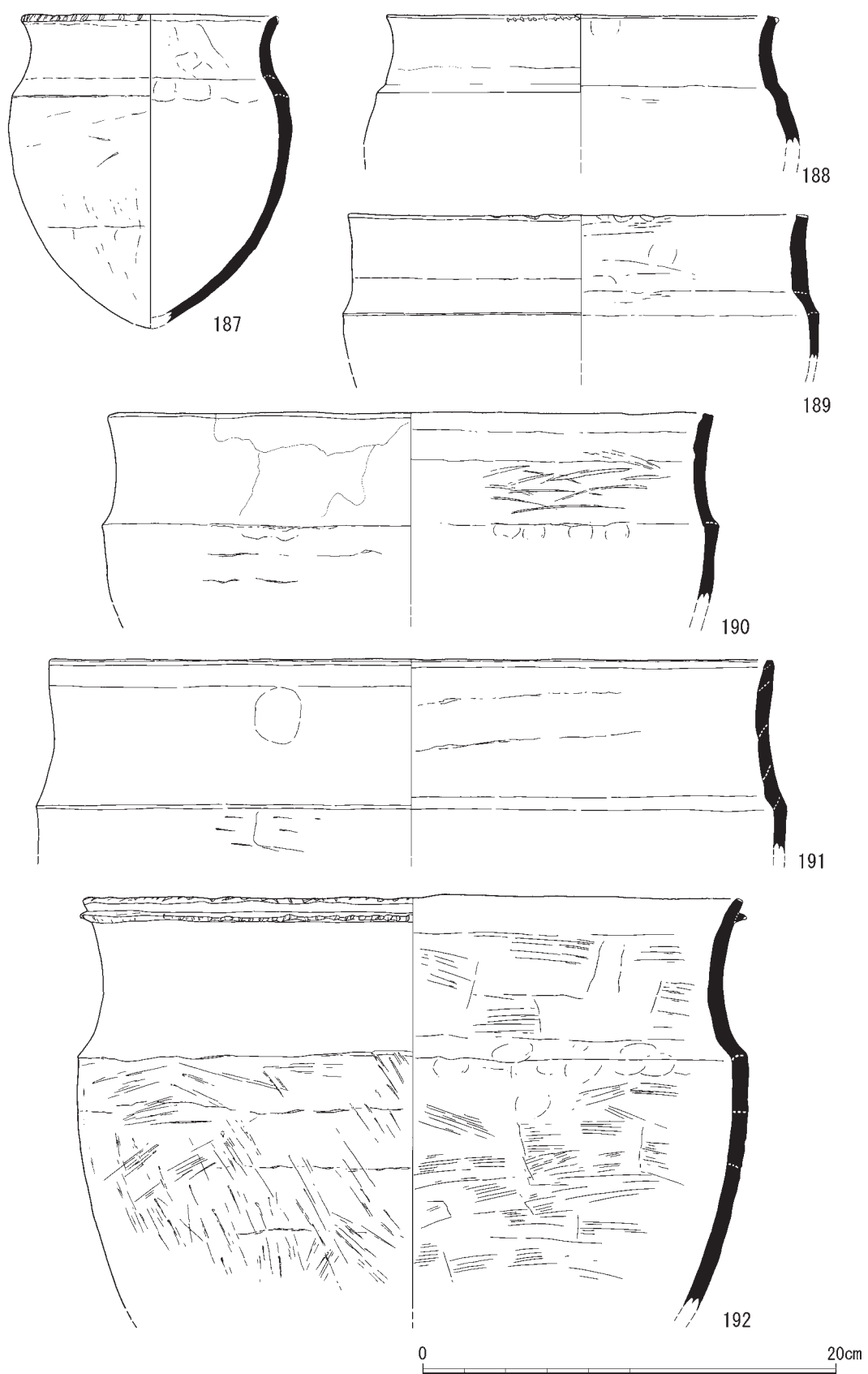
193～197は器形C類の深鉢である。凸帯を持たないIIC類の比率は低く、多くは口頸部に凸帯を持つIC類に分類される。また、比較的大形のものが多い。194は口縁端部、凸帯ともD字形の刻目が施される。体部外面はケズリが施され、内面はハケ状工具の痕跡が残る。196は口径39.4cmに復元することができる大形のものである。口頸部と胴部の境には緩い稜をもち、胴部は大きく開く。

198～200は器形D類である。C類同様大形に復元できるものが多く、口縁端部にはいずれもD字状の刻目が施される。199はID類である。凸帯上には長いD字状の刻目を持つ。200はIID類で、口径34.2cmに復元することができる。外面には凸帯を持たず、強いナデがめぐっており内面にはミガキが認められる。

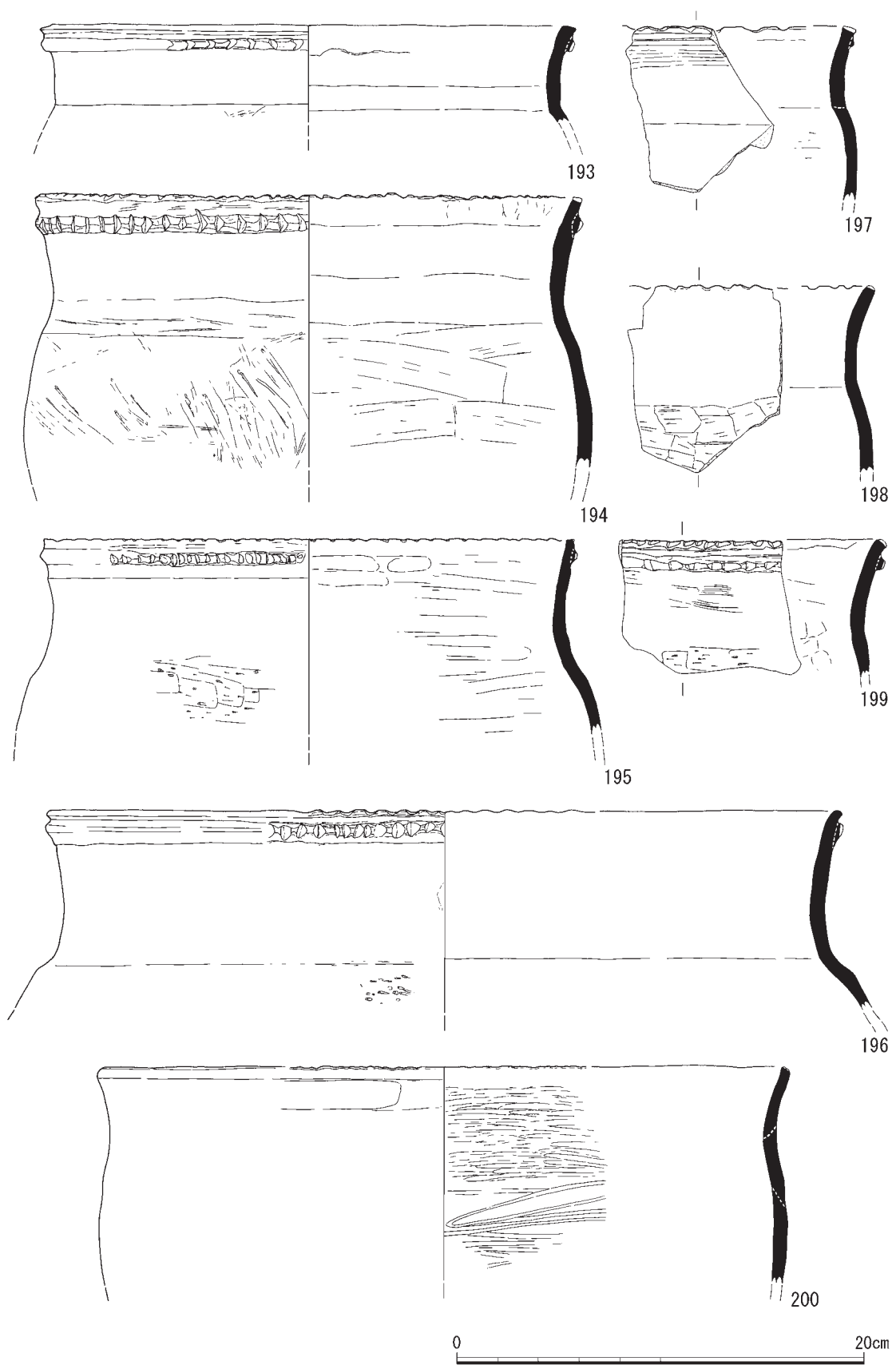
201は完形に復元することができた厚手で粗製の深鉢であり、口径7.4cm、器高19.7cmを測る。外面には胴部から底部まで粗いケズリが施されており、口頸部は強いナデで成形される。作りは歪で口頸部の境目が比較的明瞭な部分と、稜の作りが甘く側面観が逆円錐状を呈する部分がある。外面にはススが著しく付着している。

202はIE類である。半精製の胎土で製作されており、内外面とも黒色磨研される。口縁端部直下に無刻凸帯をもち、内面には断面三角形の沈線がめぐる。なお、今回確認できたE類の深鉢はこの1点のみであり、全体の中の比率は極めて低い。

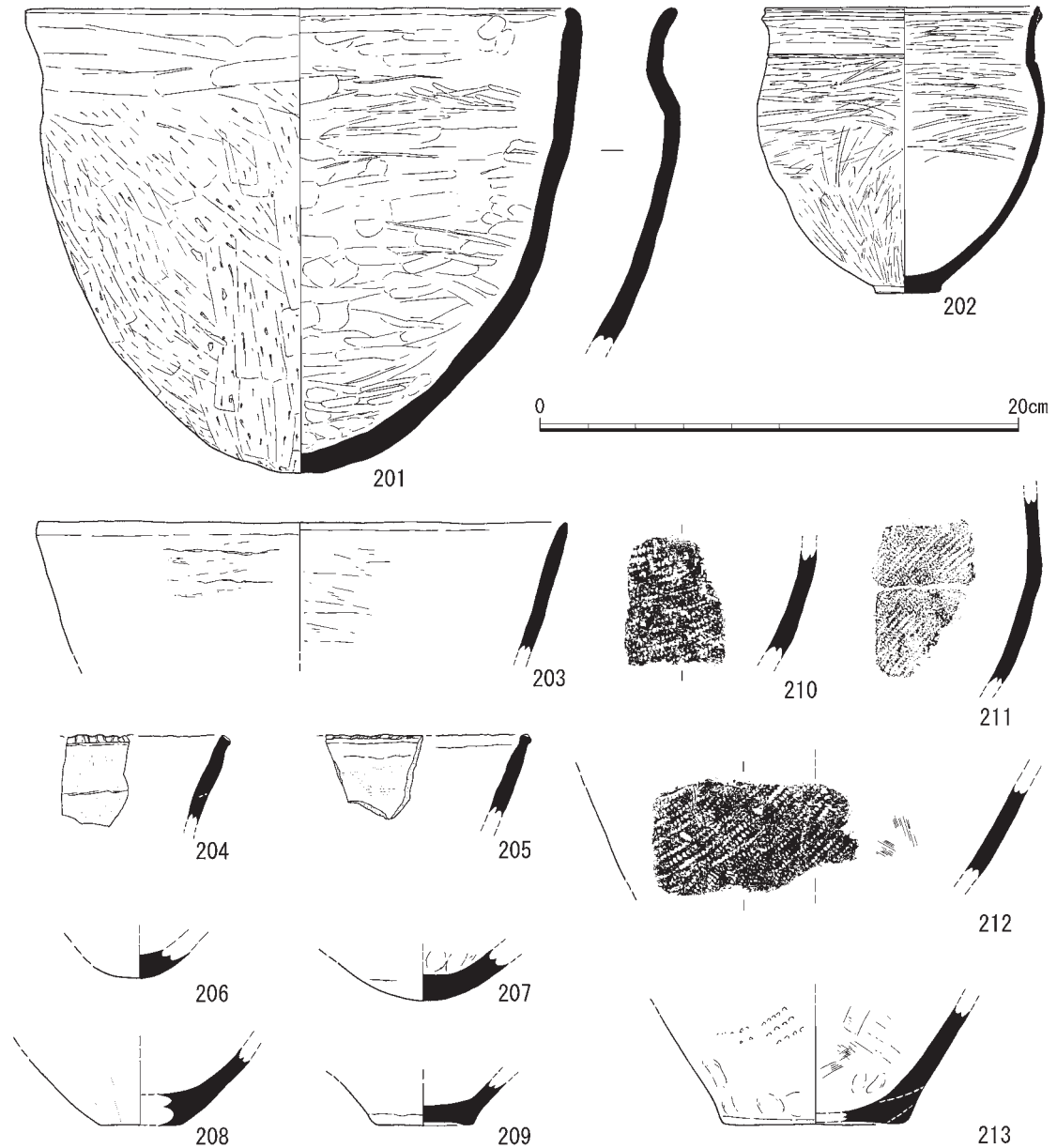
203～205は逆円錐形の器形を持つと考えられる深鉢F類である。今回の調査では全形をうかがうことができるものは出土していないが、同じ南山城地域の佐山尼垣外遺跡で出土したものなど



第61図 L地区出土遺物実測図5(1/3) NR42①



第62図 L地区出土遺物実測図6(1/3) NR42②

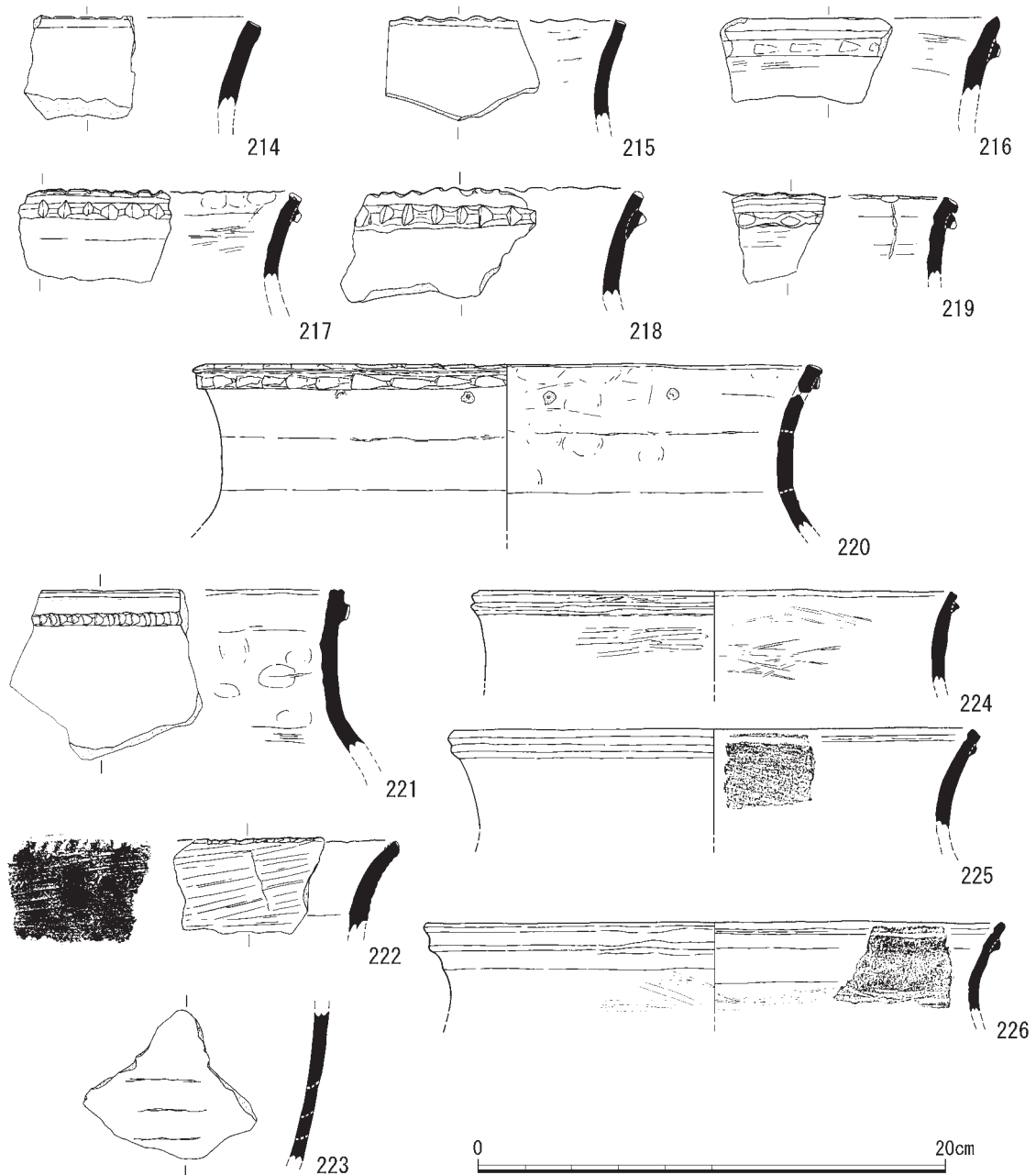


第63図 L地区出土遺物実測図7(1/3) NR42③

を参考にすると、尖底をもつ逆円錐形に復元することができる。203は復元口径22.3cmを測る。外面には粘土接合痕が顕著に認められる。204・205はA類ないしC類の可能性もあるが、外反が弱く、また、203のように粗雑な調整であることからF類とした。いずれも口縁端部は面取りしたのち、刻目を施す。

206～209は深鉢底部を図化した。底部は破片となっているものがほとんどであるが、尖底ないし丸底のものがやや多い傾向にあり、平底のものは208・209などで、やや少ない。

210～213は体部外面に縄文を持つ深鉢である。213以外は体部片のみであり、すべてで8破片出土した。いずれの破片も浅黄褐色を呈し、施文原体も類似していることから、同一個体の可能性が高い。213は平底の底部であり、復元底部径8.0cmを測る。底面近くはナデ痕跡が残り、縄文による施文は及ばない。後期の北白川上層式に属するものの混入であろうか。



第64図 L地区出土遺物実測図8(1/3) NR42④

第64図には、器形はわからないものの特徴的なものを図化した。214は外反する口頸部をもつ深鉢である。口縁端部は面取りしたのち、板状工具のようなもので押しえつけるように浅い刻目が施される。ほかの深鉢よりも器壁はやや厚手であり、胎土も異なっていることから外来系、もしくは混入品の可能性が高いと考えられる。215～221は深鉢A類ないしC類の口頸部である。凸帯の刻目には平面形状がD字形のもの(216・220・221)、V字形のもの(217・218)、O字形(219)のものなどバリエーションがある。D字形のものは幅1cm程を1cmほどの間隔で刻むものが多いが、216のように工具を横から押し当てることによって、横長で浅いD字形となるものや、半裁竹管のような工具を用いて狭い間隔で施文するもの(221)もわずかながら存在する。219はユビオサエによる刻目を口縁端部および凸帯に施す。凸帯は高く、しっかりとしたものを上下からナ

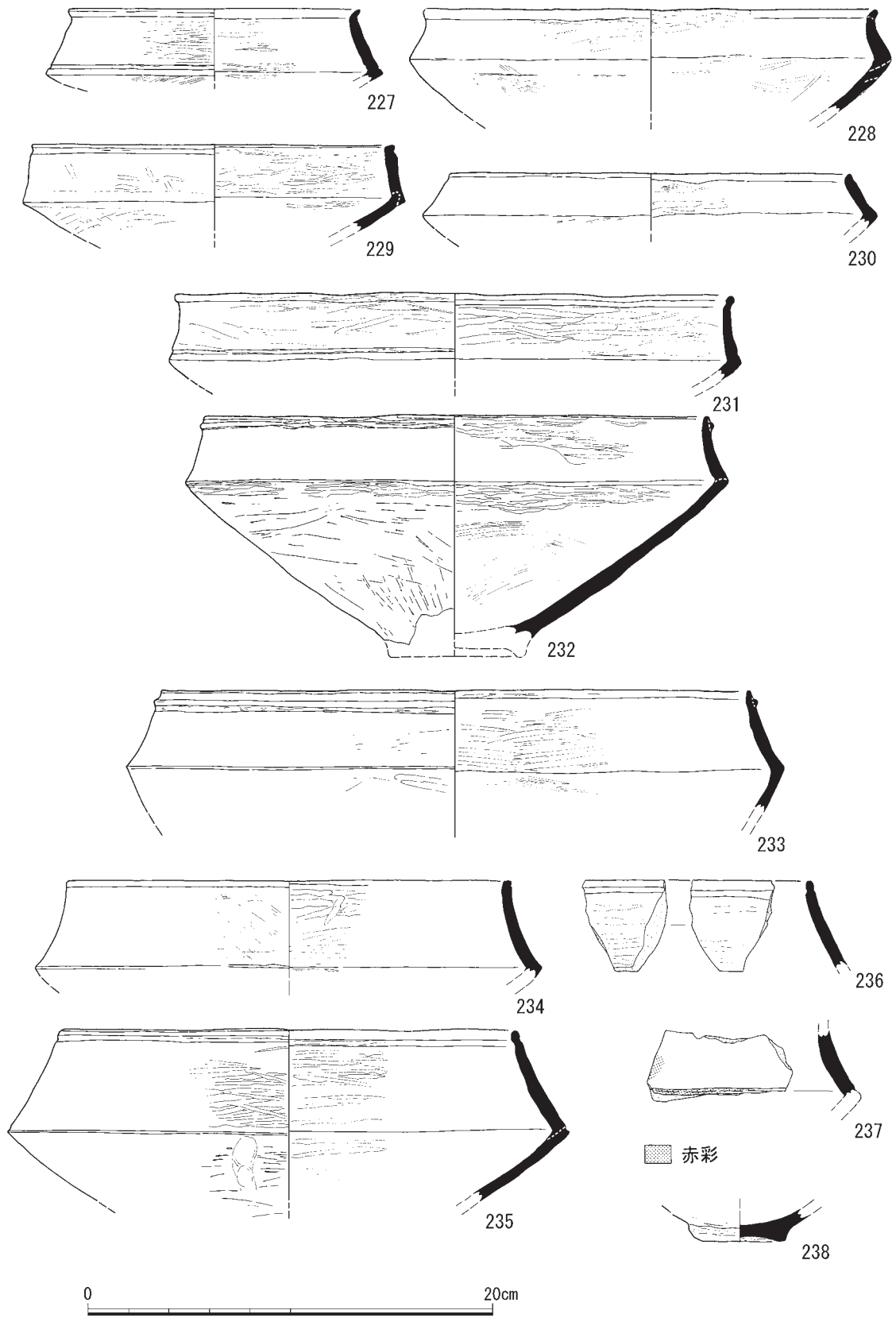
デることによって貼り付ける。O字状の刻目をもつものは少なく、この1点のみである。内面には工具によるタテ方向の線刻状の痕跡が認められる。220は凸帯直下に2孔の補修孔をもつものである。孔の内部にはスス・コゲが認められ、穿孔後も続けて使用されたことをうかがうことができる。222は外面に条痕を残す深鉢の口頸部である。口縁端部にはI字状の刻目が施される。225・226は内面に沈線をもつ深鉢である。いずれも胴部以下は欠損しており、器形は明らかではない。224はやや薄手のものであり、外面はミガキで仕上げる。

浅鉢は口縁部のカウントで45破片認められる。主体となるのは内外面黒色研磨された逆くの字状口縁をもつ浅鉢A類であり、13点を図化した(第65図)。227～232はA a類である。口縁端部の形状は外折させるものが最も多く(227・228・231)、やや外側に肥厚させるもの(229・230)、丸く単純におさめるもの(232)などバリエーションがある。口縁端部の形状にかかわらず、内面ないし外面に沈線を施すものが多い。また、口縁部と体部の間の外面に沈線を持つものもある(227・231)。228は内傾しながら端部を強く外折させるものであり、やや厚手ながらもほかのものとは比べて内外面とも入念なミガキで仕上げられている。232はほぼ完形に復元することができるものであり、口径25.4cm、器高は約12cmに復元することができる。口縁部外面には凸帯が貼り付けられ、体部上位以上が内外面とも入念なミガキで仕上げられる。体部下半にはケズリが施される。233～237は浅鉢A b類である。A a類と比較すると口縁部が伸長しており、体部には黒化処理が行われていないものもある。また、A a類と比較して口頸部のミガキもやや粗くなるなど、やや粗雑なものが多い。233は口縁部に凸帯をもつものである。凸帯は上下からナデつけるようにして貼り付けられている。体部上位は横方向のミガキが施され、体部中位以下はケズリが認められる。234は復元口径22.3cmを測る。外面のミガキはやや粗く、一次調整の横ナデの痕跡が観察される。235は復元口径23.1cmを測る。口縁端部には内外面とも1条の沈線がめぐり、237は屈曲部の破片であり1条の沈線が巡る。また、わずかに赤彩が塗布されていた痕跡が観察される。238は内外面にミガキを施す突出気味の底部であり、浅鉢A類の底部と考えられる。

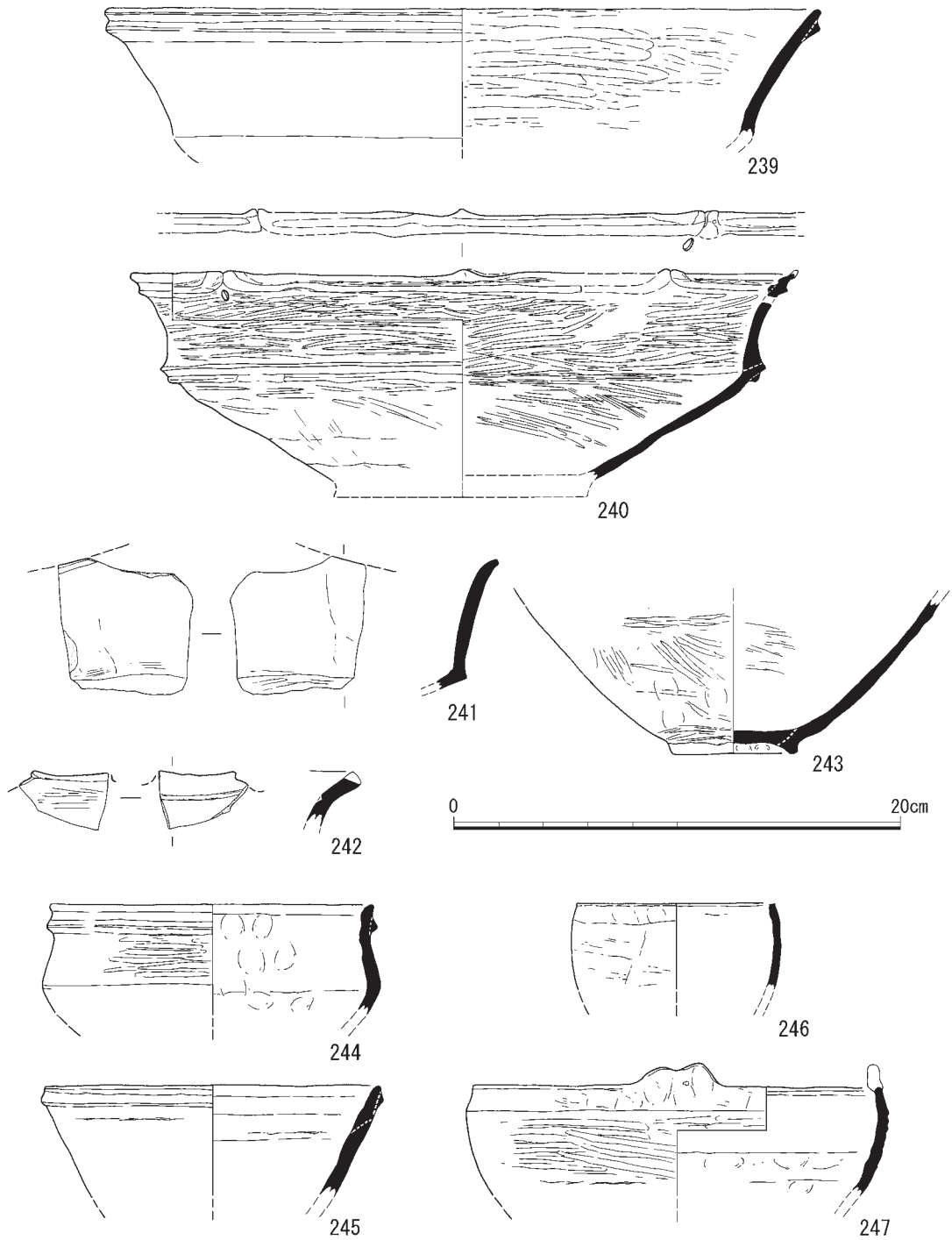
239は口縁部が大きく外反する浅鉢B類である。復元口径32.3cmを測り、外面には断面三角形の無刻凸帯が貼り付けられる。内面には太筋のミガキが施されている。

240～242は浅鉢C類である。240は大きく外反する平口縁を持つものである。口縁部の内外面には幅0.5cmほどの凸帯が貼り付けられ、内面には凸帯と口縁端部の間に部分的に沈線がめぐるか所がある。凸帯は2か所で口縁端部を内外にまたぐように貼り付けられ、その間の頂部には小さな山形の突起を貼り付ける。口縁部は内外面ともに緻密なミガキで仕上げられており、口縁部と胴部の境界部分には凸帯が貼付けられる。241は破片ながら、波状口縁方形浅鉢であると考えられる。口縁端部の沈線や凸帯などの施文は消失しており、内外面ともミガキは認められないなど、やや粗雑なつくりである。242は内面に沈線をもつ浅鉢C類の突起部分であろう。243は浅鉢の底部である。底部径5.8cmを測り、外面にはミガキが施される。胎土中に雲母・角閃石を多量に含む。

244は浅鉢E類である。外反気味に立ち上がる口頸部を持ち、製作技法は深鉢B類と共通する。口頸部外面には無刻の凸帯が貼付けられており、内面には指頭圧痕を顕著に残す。245は逆円錐



第65図 L地区出土遺物実測図9(1/3) NR42⑤



第66図 L地区出土遺物実測図10(1/3) NR42⑥

形を呈する浅鉢F類である。内外面に粘土接合痕を残す粗雑な作りである。246・247は浅鉢G類である。口径が小さいものと、口径が大きくやや扁平なもの2種がある。247は口縁部にリボン状の突起をもつ。口縁端部はユビオサエによって整形されており、体部外面はハケ状工具の痕跡が認められる。

NR42出土の土器はおおむね晩期中葉に属するものであるが、深鉢の中に二条の凸帯を持つものを含まず、浅鉢も逆くの字状口縁A a類を主体としていることから、その中心は凸帯文2期前

半にあるものと考えられる。

自然流路N R 38(第67図248~260) N R 42の上層で検出した自然流路N R 38からも多くの縄文土器が出土した。深鉢と浅鉢の比率は76:24であり、深鉢の割合がやや高い。

248~257は深鉢である。N R 38から出土した深鉢の中で口縁部に凸帯を持たないⅡ類の深鉢は1点のみであり、口頸部が確認できたものはほぼすべてⅠ類から構成される。器形にはA類が多く、屈曲部に貼付凸帯はもたないものの、やや凸に作り出すA b類が3点、二条凸帯文深鉢A c類の胴部片の可能性のあるものが1点存在する。

248は外面に二枚貝による条痕が残る。断面形状が三角形を呈する無刻の凸帯が、下方からのナデによって貼り付けられる。249は口径25.5cmを測る深鉢ⅠA a類である。凸帯の貼り付けは歪であり、刻目も不規則にみられる。口縁端部には浅いV字状の刻目が施される。250は口径34.4cmを測る深鉢ⅠA b類である。口頸外面の凸帯は上退しているが、口縁端部を成形したのちに凸帯を上下からナデつけることによって貼付けており、凸帯文3期以降に時期が下るものではない。また、口頸部と胴部の境界は凸帯状に隆起するが、別作りの凸帯を貼り付けたものではなく、接合時に屈曲部に強いナデを施すことによって稜を作り出している。256も口縁端部は欠損しているが、口頸部の作り方は類似しており、境界部分をやや凸状に作り出すA b類である。255は胴部に貼付け凸帯を持つ二条凸帯文深鉢の可能性のあるA c類である。胎土中には角閃石を多量に含有しており、搬入品の可能性もある。なお、今回L地区で出土した土器の中で二条凸帯文深鉢の可能性のあるのはこの1点のみである。254は口頸部と胴部の境界部分に竹管による刺突をもつ。257は精良な胎土で製作されており、内外面は黒色研磨されるE類の可能性のある。剝離しているものの、凸帯は口縁端部直下に貼り付けられていたようだ。

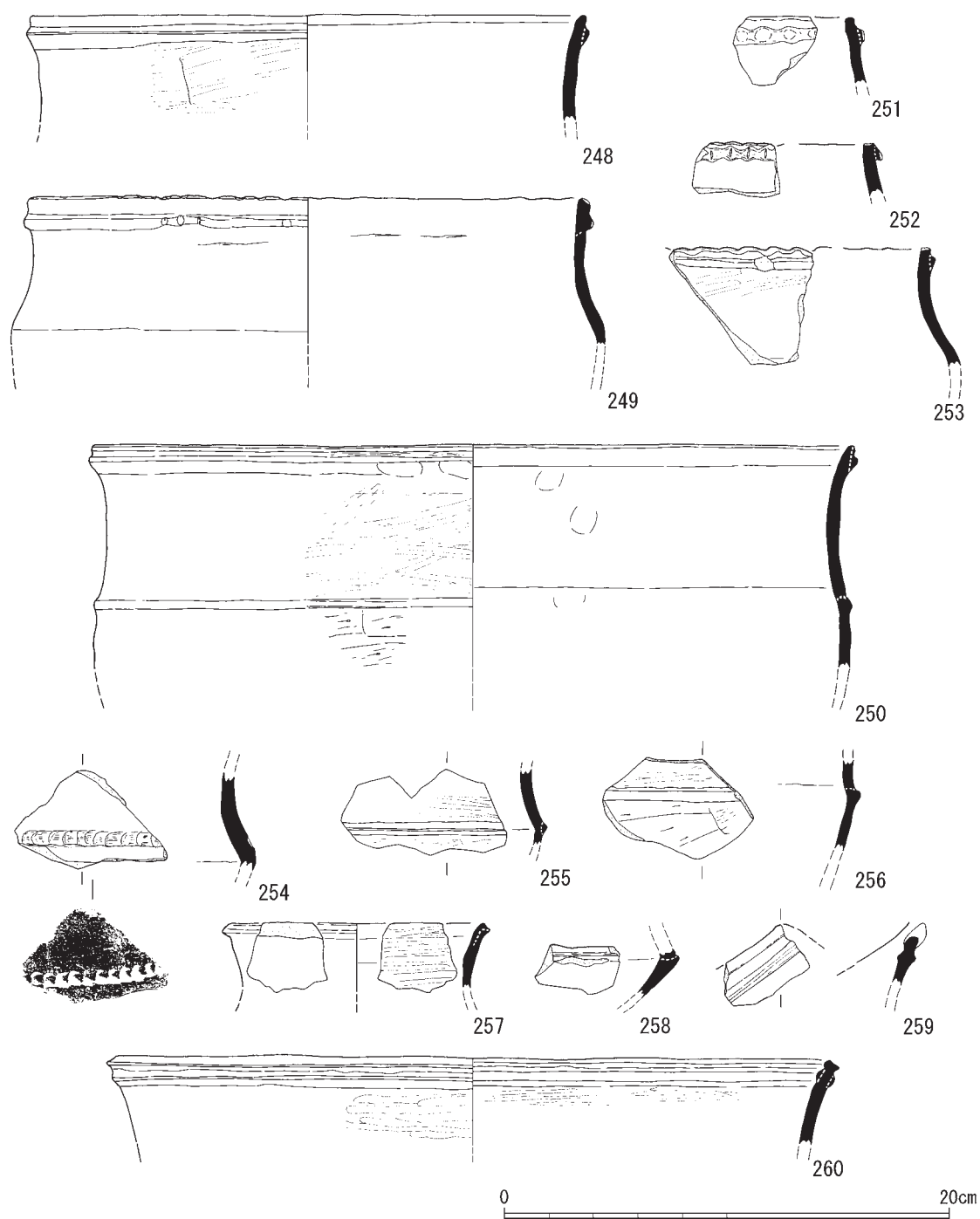
258~260は浅鉢である。259は波状口縁浅鉢の口縁部である。内外面に凸帯をもち、内面には沈線がめぐる。260は内外に凸帯を貼り付ける平口縁の浅鉢D類である。いずれも小粒の角閃石を含む胎土で製作されている。258は小片ながら逆くの字状口縁部をもつ浅鉢A類であろうか。外面には1条の沈線が巡る。

N R 38は二条凸帯文深鉢A c類や胴部と口頸部の境目に凸帯状の隆起をもつ深鉢A b類が認められたことから、先述のN R 42よりも型式学的に後出する要素を備えているといえる。これらの土器は凸帯文2期後半に位置付けておきたい。

落ち込みS X 40(第68図261~第69図274) 深鉢と浅鉢の比率は77:23であり、深鉢の割合がやや高い。Ⅰ類とⅡ類の比率は72:28である。器形にはC類は少なく、A a類、D類が多い。また、外面ないし内面に二枚貝によるものと考えられる条痕をもつものがやや目立つ。

263は口縁端部直下に凸帯を貼り付けるⅠA a類である。凸帯上にはハケ状工具によるものと考えられる小さな刻目をもつ。胴部の張りは弱く、口頸部と胴部の境界の稜は緩い。261・267はⅠD類である。267は口径46.0cmをはかる大形のものである。口頸・胴部間の稜は緩く、外面のケズリは口頸部までおよぶ。

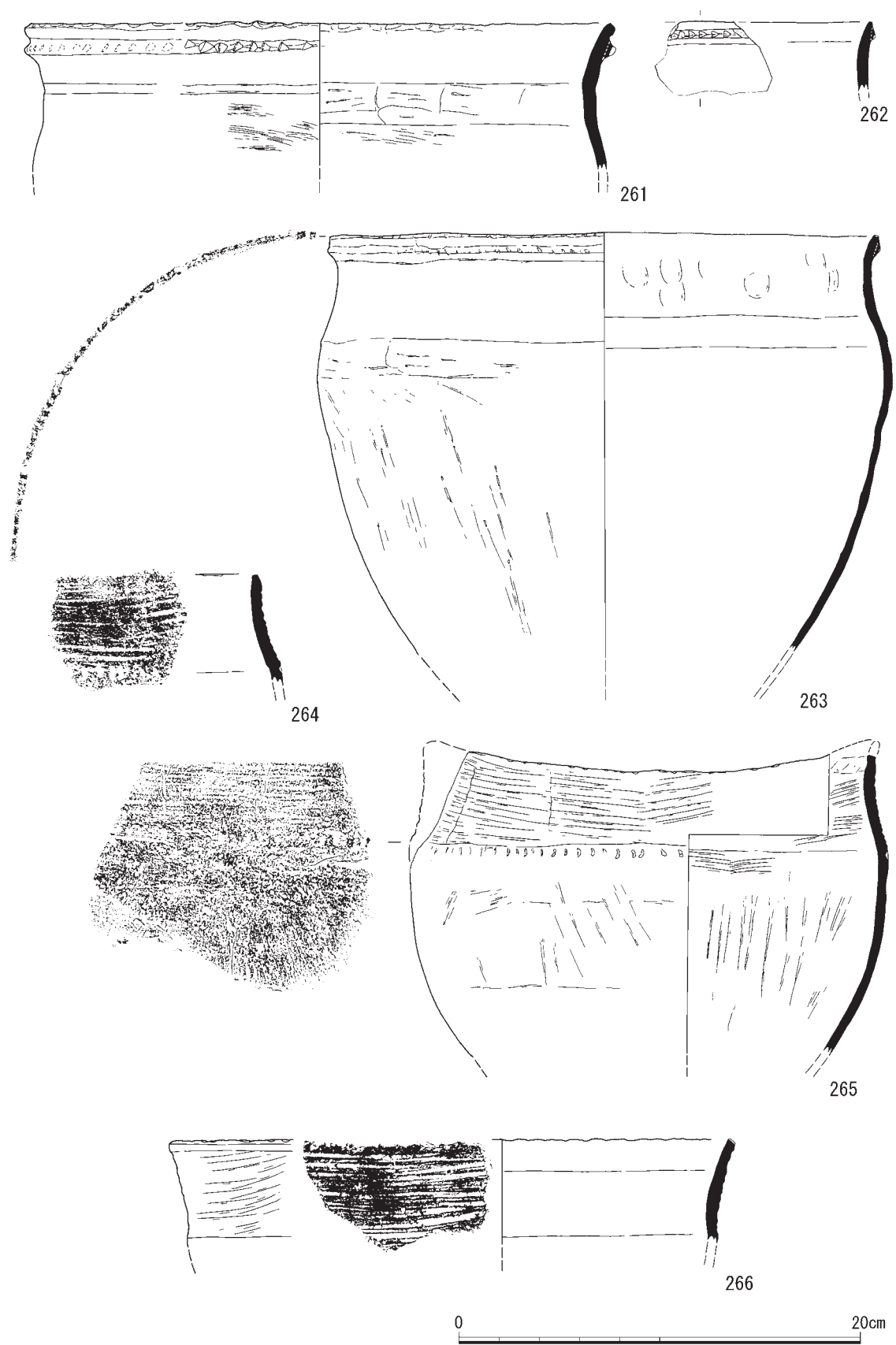
264~266は口頸部外面に貝殻条痕をもつものである。いずれも口縁端部には小さい刻目を施し、



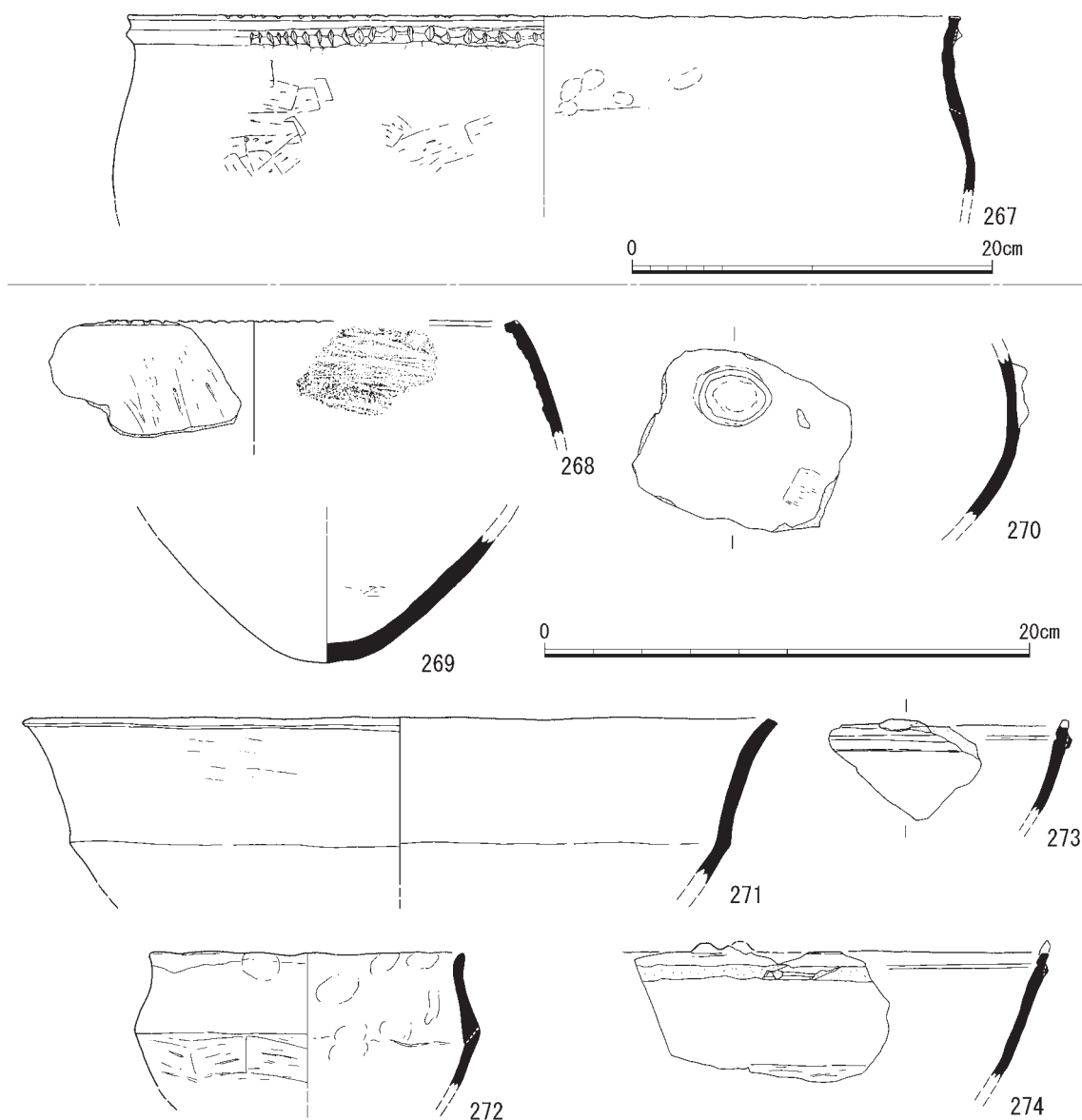
第67図 L地区出土遺物実測図11(1/3) NR38

胎土には角閃石を多量に含有する。265は口径24.5cmを測り、口頸部と胴部の境目には二枚貝の頂部で施されたと考えられる刻目がめぐる。口縁部は歪であり、波状口縁をもつ深鉢となる可能性がある。266は外反気味の口頸部をもつ。

268は内湾する口頸部をもつ深鉢であろうか。内面にはケズリのような痕跡が認められるが、全形をうかがうことはできない。269は尖底の深鉢底部である。深鉢では、ほかにも小片のため図化できなかったが、粗製のE類の口縁部などが認められた。



第68図 L地区出土遺物実測図12(1/3) S X40①

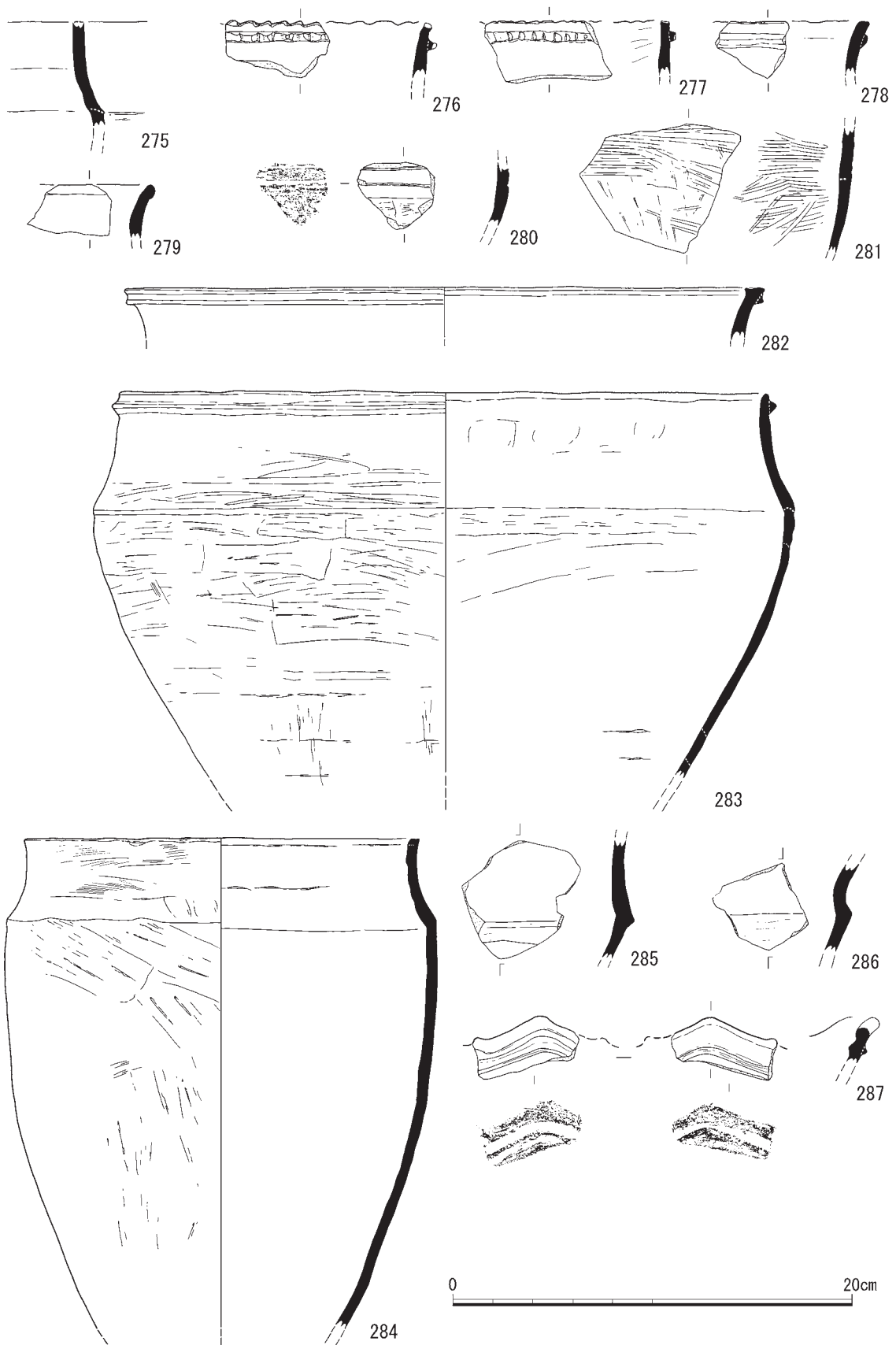


第69図 L地区出土遺物実測図13(1/3) S X40②

270はボタン状の浮文をもつ胴部の破片である。壺の可能性が高いが、器種は不明である。残存高は約7cmをはかる。浮文は長径3.2cm、短径2.6cmをはかり、中央部はユビオサエにより凹状となる。外面にはわずかにケズリないしハケが施される。

浅鉢にはB類(271)のほか平口縁で突起をもつH類(273・274)などがある。272は浅鉢E類とした粗製のものである。口径13.3cmを測り、胴部付近で緩く屈曲する。器形は深鉢B類に類似するが、内外面に指頭圧痕を顕著に残す。角閃石を多量に含む胎土で製作されている。273・274はいずれも外面に凸帯、口縁端部に突起状の貼付けをもつ浅鉢H類である。単純な椀形ないし鉢形に復元できる可能性があるが、全形は不明である。いずれも外面には凸帯を貼り付け、内面には1条の沈線がめぐる。

S X40は器種が少なく時期を決めがたいが、深鉢の凸帯の貼り付け技法や浅鉢の構成から考える



第70図 L地区出土遺物実測図14(1/3)

とSD38と大きな隔たりはないものとする。凸帯文2期のなかでも後半に位置付けておきたい。

土器溜まりSX43(第70図275~282) 出土遺物は少なく土器も細片が多い。深鉢が組成の86%を占め、このほかに浅鉢やわずかながら壺の可能性のある破片などがある。

深鉢は全形がわかる資料はないが、口頸部に凸帯を持つI類の割合は86%である。胴部に凸帯が取り付くような破片は認められなかった。口頸部に凸帯を持つものは276や277のように小さなD字刻目のものが多い。280は深鉢の体部と考えられる。二枚貝の押圧によると考えられる施文が2条観察される。279は端部をやや外側に肥厚させる口縁部であり、壺の口縁部の可能性がある。281は浅鉢の体部であろうか。内外面は黒色磨研されており、外面下半にはケズリが認められる。282は平口縁で内外面に凸帯をもつ浅鉢D類である。

遺物包含層(第70図283~287) 283は深鉢IAa類である。口径32.8cmを測る。口縁端部から0.3cm下がった位置に無刻の凸帯が貼り付けられる。胴部外面には粘土接合痕が顕著に残り、その上からケズリが施されている。284は深鉢IIAa類である。口径19.8cmを測り、器壁は薄く仕上げられている。胎土が浅黄褐色を呈するものであり、搬入品である可能性がある。

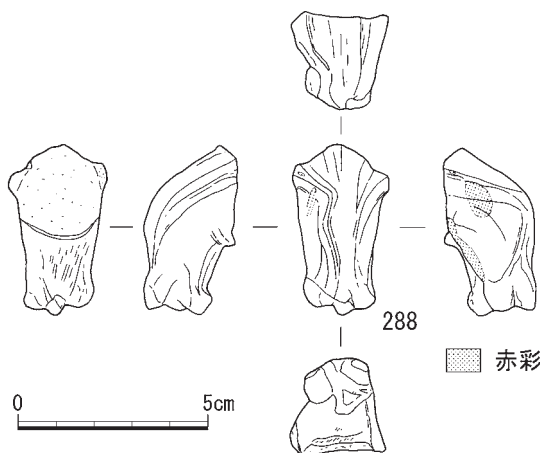
287は波状口縁浅鉢C類である。内外面には凸帯を持ち、内面口縁端部直下に沈線がめぐり、頂部には、一部欠損するが山形の突起が貼り付けられる。

c) 土偶(第71図・288)

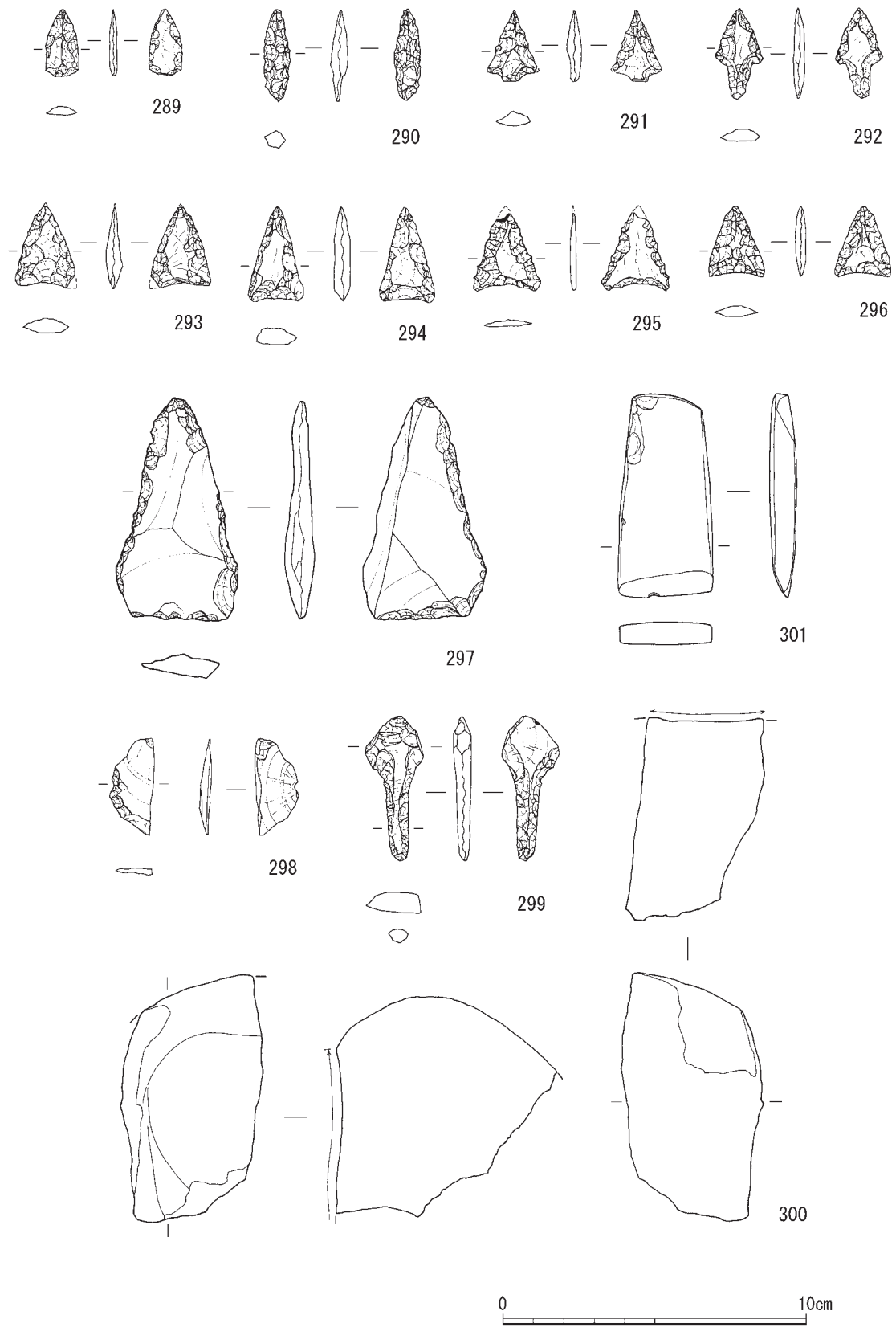
288はNR42から出土した中実の土製品である。形状から考えて土偶の腕(左腕か)の可能性が高いと考える。^(注18)残存していたのは逆L字状を呈するもので、片側は体部と接合されていた剥離面であり、もう片側は3分割され突起状に作り出されている。側面には幅0.5cm程の凸帯が2条貼り付けられており、一方の凸帯は先端部で2又に分岐する。器壁にはミガキが施されている。また、側面には一部赤彩と考えられる暗赤褐色の塗布が認められる。

腕の先端部が3つ又に分かれる突起をもつ土偶は、遮光器系土偶にみられる特徴であり、西日本でも晩期中葉までのものに散見する。よって、現状では中実の遮光器系土偶の腕部と考えておきたい。ただし、遮光器系土偶の腕の表現としては、沈線や縄文等で施文するものが一般的であり、側面に凸帯による隆起帯をもつものは管見にない。また、肉眼観察による所見ではあるが、胎土からは搬入品であるか地元で製作されたものなのかは判断しがたく、製作地や系譜は不明である。

なお、遮光器系土偶は近畿地域では篠原中町遺跡、檀原遺跡、滋賀里遺跡、川辺遺跡などで類例はあるものの、府内では初見である。これらは主に晩期前葉ないし中葉でも古い段階にかけての資料であり、本例も同じような時期に属する可能性がある。



第71図 L地区出土遺物実測図15(1/3) 土偶



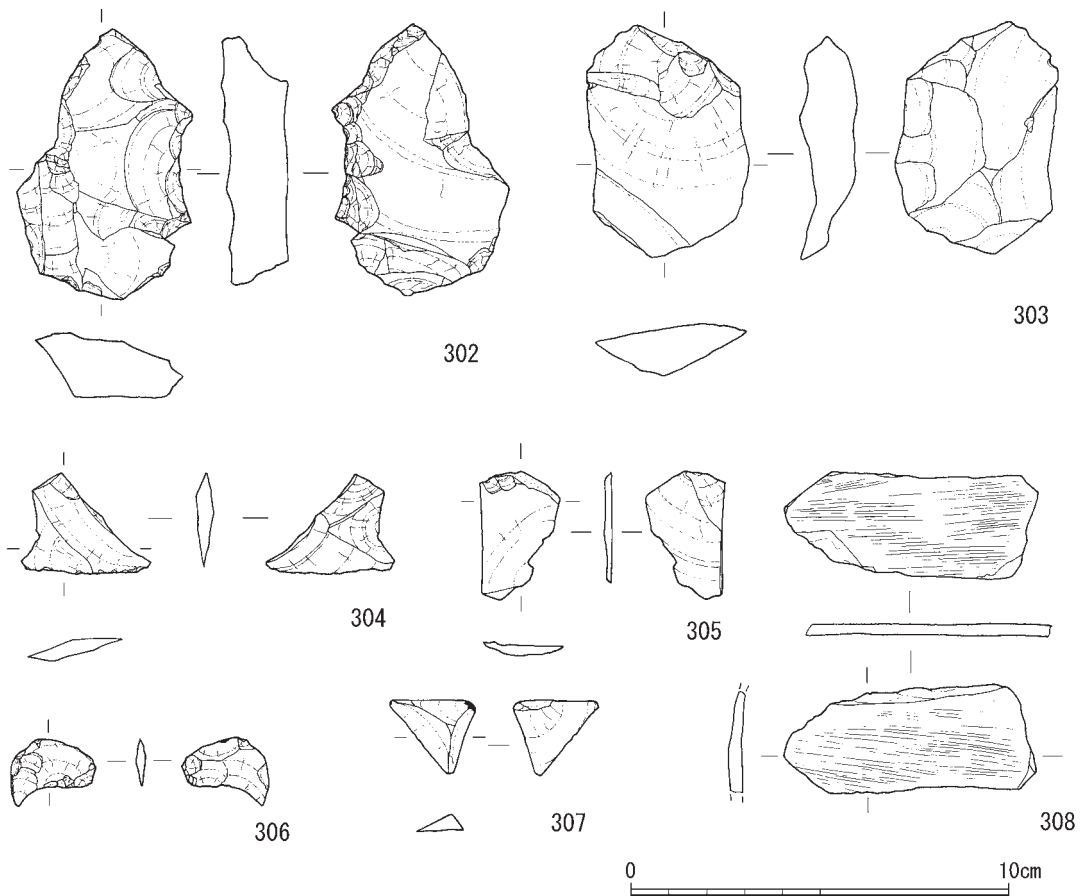
第72図 L地区出土遺物実測図16(1/2) 石器

d) 石器

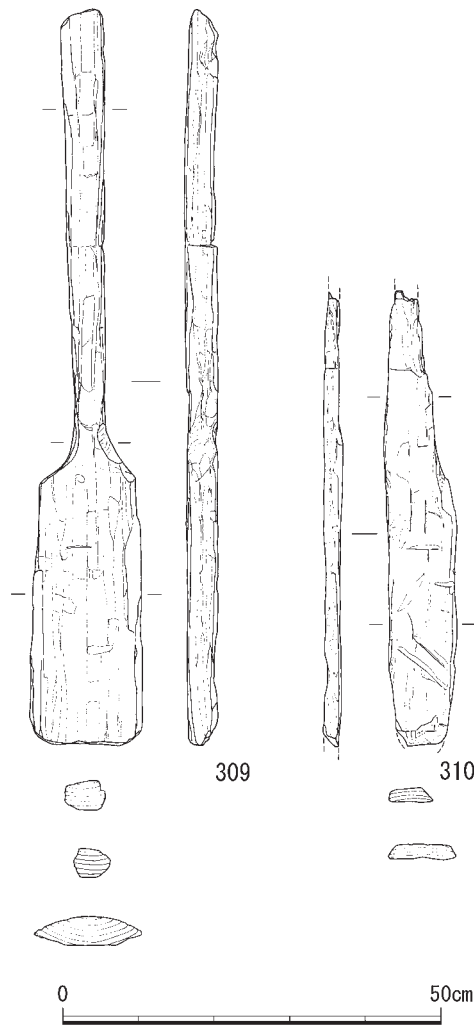
石器には石鏃、尖頭器などの打製石器類、磨石と思われる破片などの製品のほか、石核、剥片類が多く出土した。

289・291～296は打製石鏃であり、自然流路N R38などの縄文時代の遺構のほか、遺物包含層等から出土した。289は先端近くに肩をもち、断面形状や緩い凸形を呈する。291・292は有茎鏃である。292は長さ1.1c mの茎部を作り出しており、刃部には素材面を多く残す。293～296は凹基式の三角鏃である。295は残存長2.6cm、幅2.2cmを測る。両側とも刃部の加工がされているが造りは薄く、片面には素材面を多く残す。297はN R38から出土したもので、長さ7.4cm、幅4.1cmを測る。剥片の縁辺に刃部の加工を行ったもので、尖頭器ないし削器であろうか。298はスクレイパーであろうか。剥片の一部に刃部の加工がされているが、未成品の可能性も考えられる。299は石錐である。軸部を丸く作り出し、握り部は薄く扁平となる。290も石鏃として図化しているが、小型の石錐の可能性もある。300は欠損が大きく全形をうかがうことはできないが磨石であろう。301は溝状遺構S D10から出土した両刃の磨製石斧である。全長6.7c m、幅3.1c mを測る。弥生時代に属するものであろう。

302～308は石核、剥片類として図化したものである。剥片は各遺構および包含層中より多く得られており、304～307のように比較的薄手で扁平のものが多し。302は石核として図化したものが、



第73図 L地区出土遺物実測図17(1/2) 石器



第74図 L地区出土遺物実測図(1/10)

6) N地区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

L地区(L1区)から北約40mのところに設定した調査区である。全長77.8m、北辺幅38.7m、南辺幅22.6mの矩形を呈する調査区である。ただし、調査にあたっては、工事に伴う土砂の仮置き場となっていたため、調査区を2つに分けて実施した(N1・N2区)。報告にあたっては両調査区をまとめて報告する。現地表面の標高は14.7mである。現地表下1.2mで、鳥畑4基、溝状遺構3条などを検出した(第75図)。また、鳥畑の上面からわずかに掘り下げて下層遺構として、弥生時代の溝2条、土坑5基のほか、時期不明の柱穴5基、溝1条などを検出した(第81図)。調査面積は2,420㎡である。出土遺物は整理箱で13箱である。

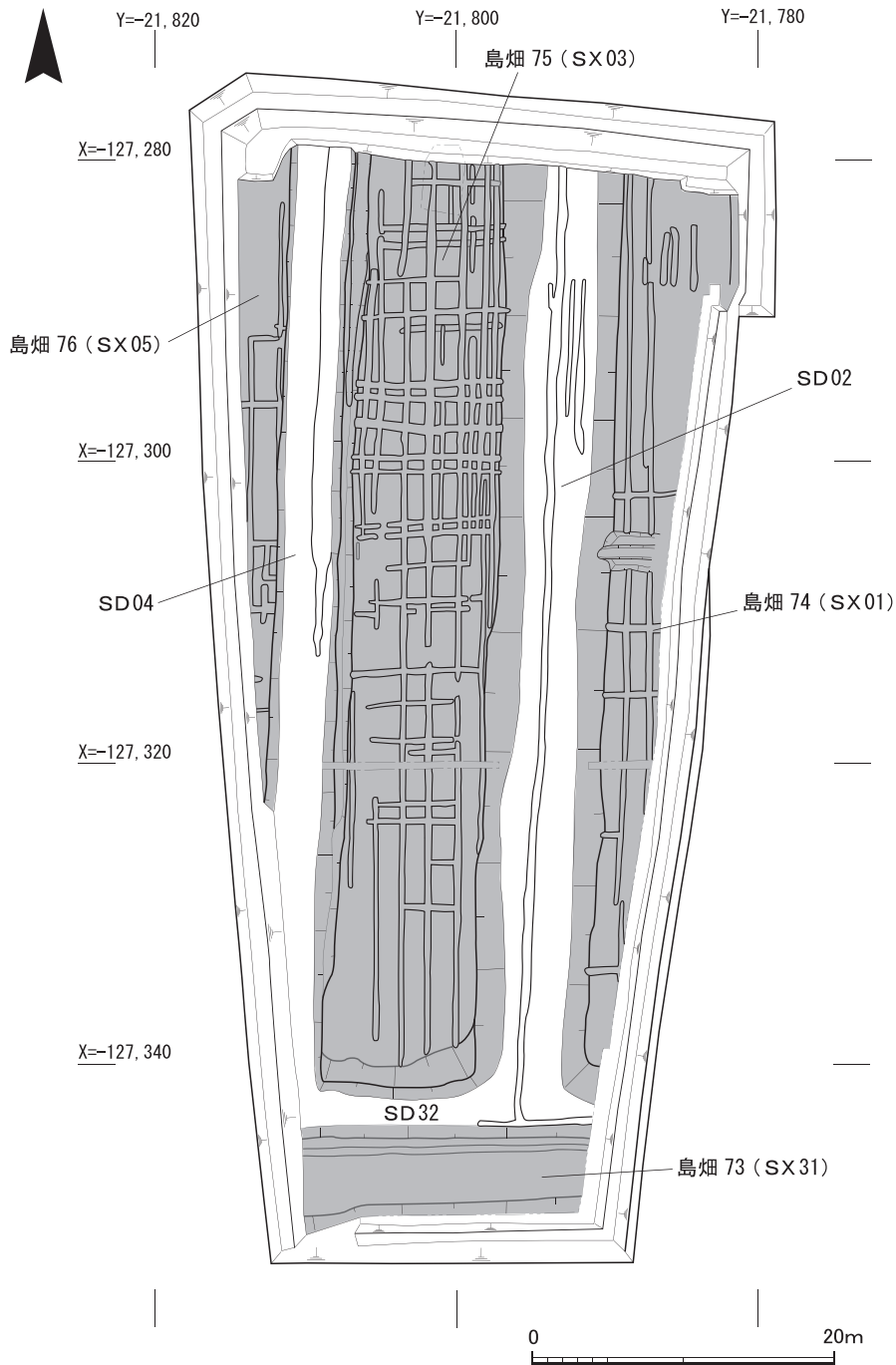
基本的な層序(第76図)は、耕作土である暗灰黄色砂質土(1層)や床土である灰色砂質土(2層)の下層に、それぞれ厚さ10~20cmほどの灰色ないし灰オリーブ色などの細粒砂(3・6・11・12層)がある。12層やその下層の薄い層を除去すると、鳥畑を確認した。鳥畑や溝状遺構の上部に広がる11・12層などの堆積時期は不明である。鳥畑の部分は、灰白色または灰色の粘質土なし

部分的に刃部のような加工がされている可能性もあり、削器として使用された可能性もある。308は片岩の原石である。搬入品であろうが、加工痕或使用痕は認められない。(桐井理揮)

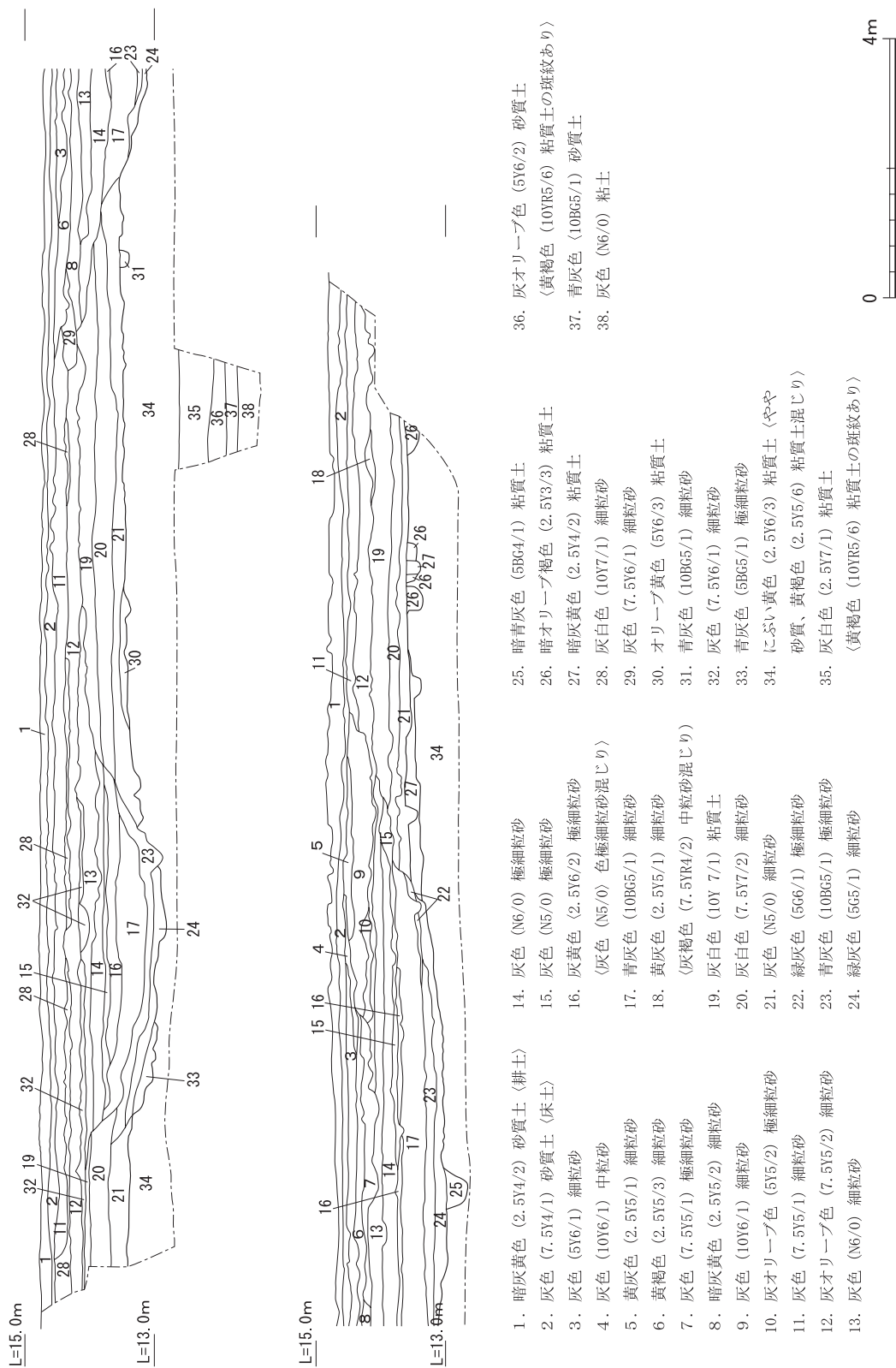
e) 木製品

N R42を中心に大量の木材が出土したが、大半は木津川の氾濫によって生じた洪水によって流された自然木である。こうした自然木や縄文土器に混じって、櫂状木製品2点が出土した。309は欠損部がほとんど認められないが、厚手品であることから櫂の製作途中のものである可能性とともに、土掘り具などの可能性も考えられる。全長97.3cm、身(水かき)の幅14.9cm、柄の幅3.8~5.8cm、厚さ1.8~4.3cmである。310は309より薄手のつくりである。柄の部分と身(水かき)の1/3ほどが欠損する。こちらについても櫂とともに土掘り具の可能性もある。残存長60.0cm、身(水かき)の残存幅9.0cm、厚さ2.0cmである。なお、樹種同定の結果、309はブナ科コナラ属アカガシ亜属、310はクスノキ科クスノキ属クスノキであることが判明した。(筒井崇史)

細粒砂(19~21層)がおおむね水平の層序で成り立っている。これらは島畑の盛土と判断されるが、詳細な時期は不明である。21層を除去すると、最も初期の島畑を検出したが、これらは基盤層であるにふい黄色粘質土(34層)を整形して形成されている。この上面を若干掘り下げて下層遺構検出した。なお、調査区北端の一部を断ち割ったところ、標高12.6m以下で、灰色粘土、灰オリーブ色砂質土、青灰色砂質土など(35~38層)を確認した。また、島畑に伴う溝状遺構の埋土として青灰色や緑灰色、灰色などの細粒砂ないし極細粒砂(13・14・17・23・24層ほか)が堆積する。



第75図 N地区上層遺構配置図(1/500)



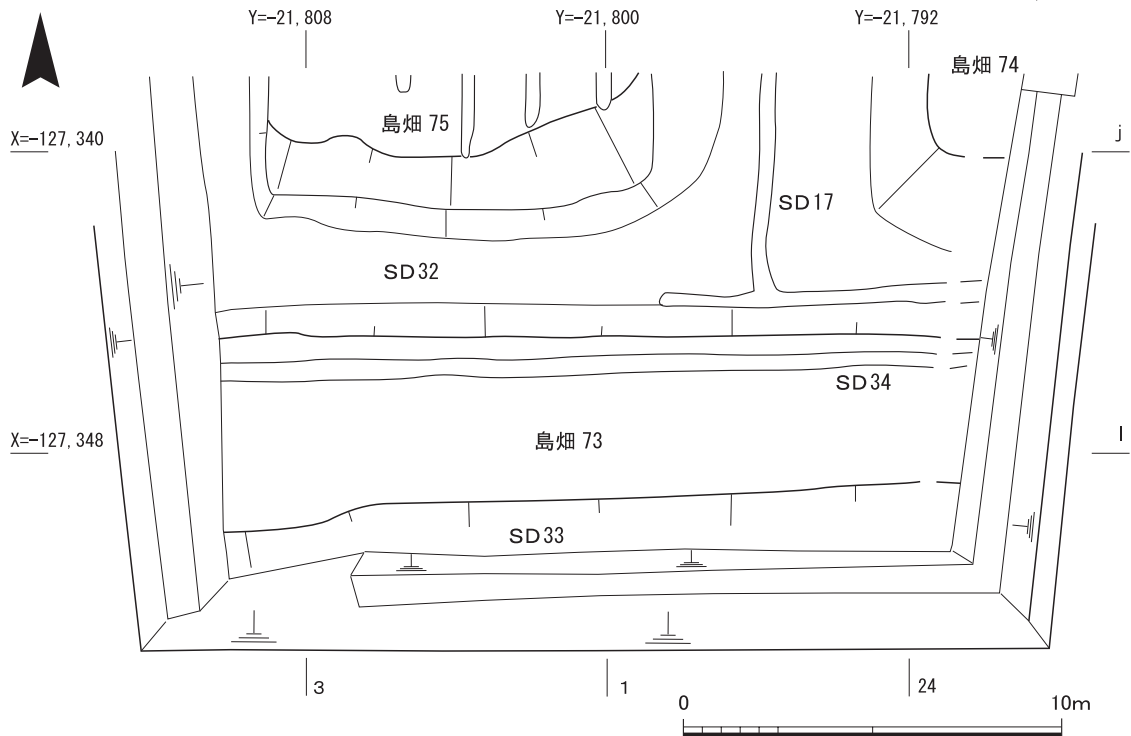
第76図 N地区北壁土層断面図(1/100)

(2) 検出遺構

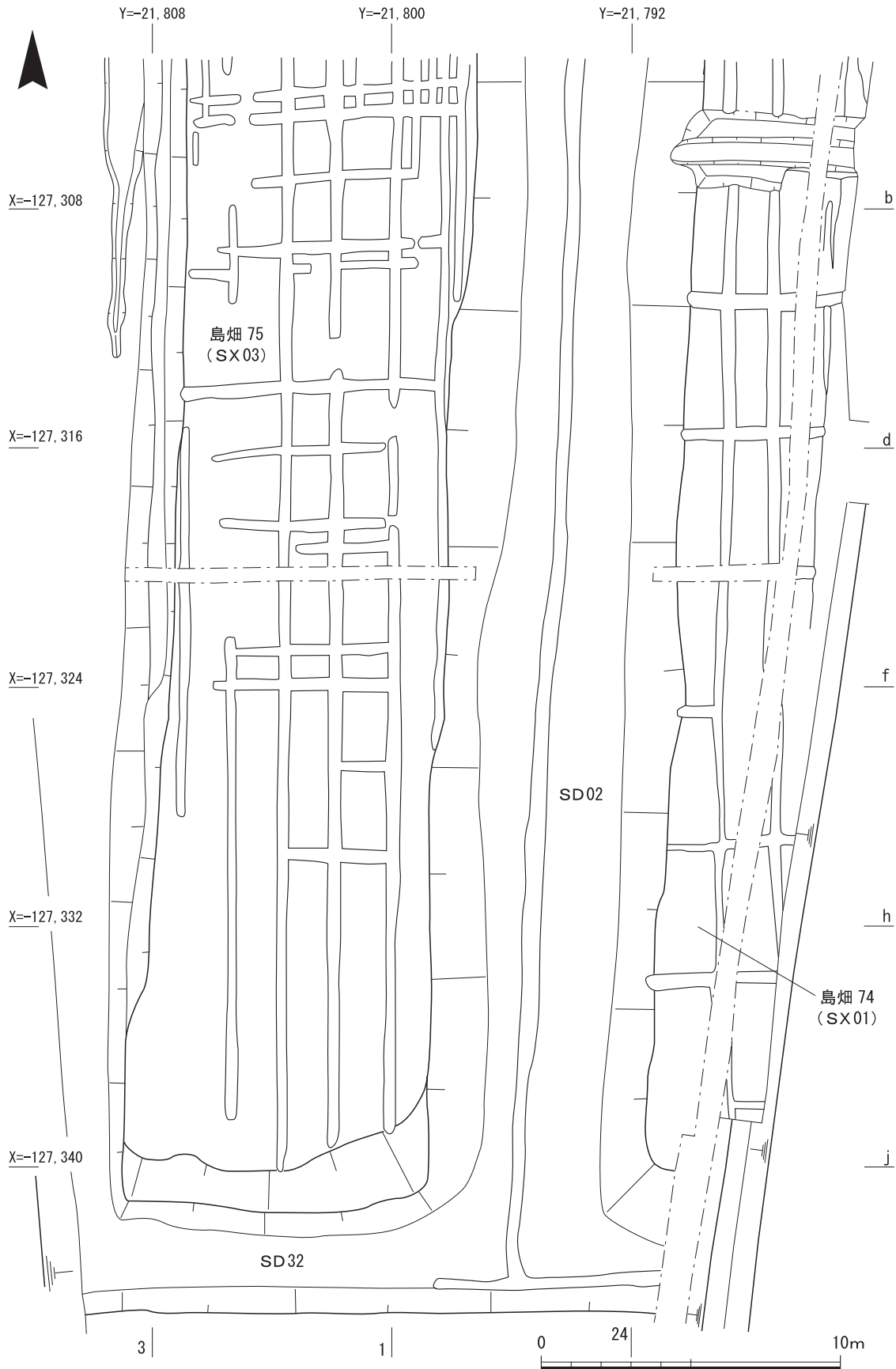
① 上層遺構

島畑73(S X31)(第77図) 調査区の南端で検出した(C3-124区ほか)。東西方向の島畑で、東西両端および南辺は調査区外となる。ただ、平成27年度に実施した下水主遺跡第8次調査のM2区で同一島畑の延長部を検出した。島畑は基盤層であるにぶい黄色粘質土を整形し、その上部に明青灰色や明緑灰色の粘質土を置いて初期の島畑を形成している。N地区での検出長18.9m、基部検出幅6.6m、上面検出幅5.6m、高さ0.5mである。島畑上面の標高はおよそ13.3mである。島畑の上面では1条の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長18.9m、幅0.3~0.5m、深さ0.05m前後である。なお、M2区の調査成果と合わせると、検出長は45.6mである(未調査区分を含む)。遺物は盛土や精査中に須恵器杯Aや土師器、瓦器などが出土した(第87図332~334)。詳細な時期は不明であるが、中世前半であろう。

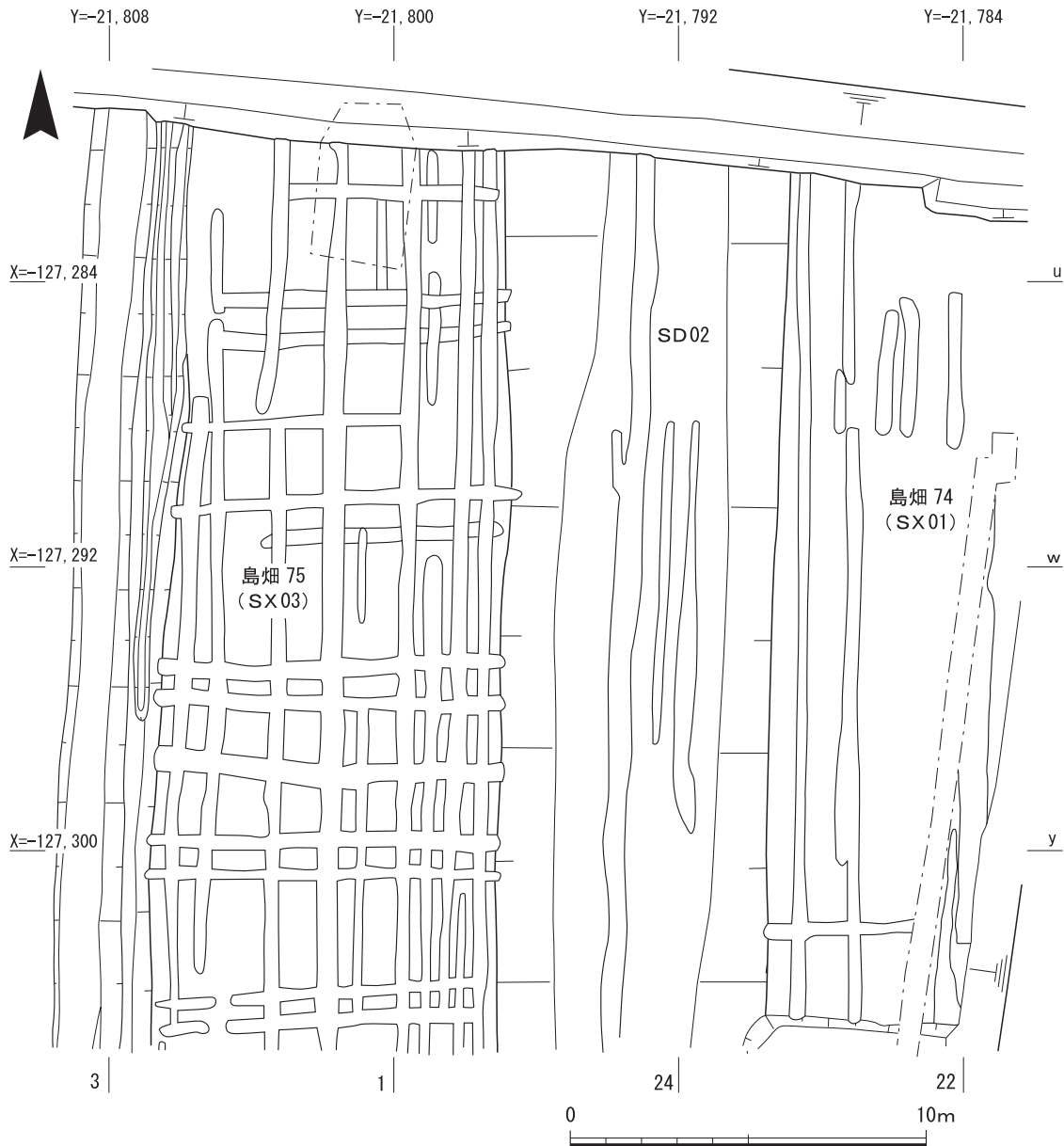
島畑74(S X01)(第78・79図) 調査区の東辺で検出した(B3-u21区ほか)。南北方向の島畑で、北端と東辺は調査区外となる。島畑の断面観察(第76図)によると、基盤層であるにぶい黄色粘質土を部分的に整形し、島畑の西肩に暗灰黄色粘質土(27層)を盛り上げて最初期の島畑を形成している。この27層ないし34層の上面で素掘り溝を検出した。これらの上部には灰白色なし灰色の細粒砂ないし粘質土がおおむね水平となった層序が確認できる。いずれも島畑の盛土であろう。これより上部には灰色細粒砂や灰オリーブ色細粒砂(11・12層)の層序が認められるが、これらは島畑の上面から溝状遺構SD02にかけて広がる。最初期の島畑の規模は、検出長62.2m、基部検出幅9.0m、上面検出幅8.0m、高さ0.7m前後である。島畑上面の標高はおよそ13.6~13.7mである。



第77図 N地区島畑73平面図(1/200)



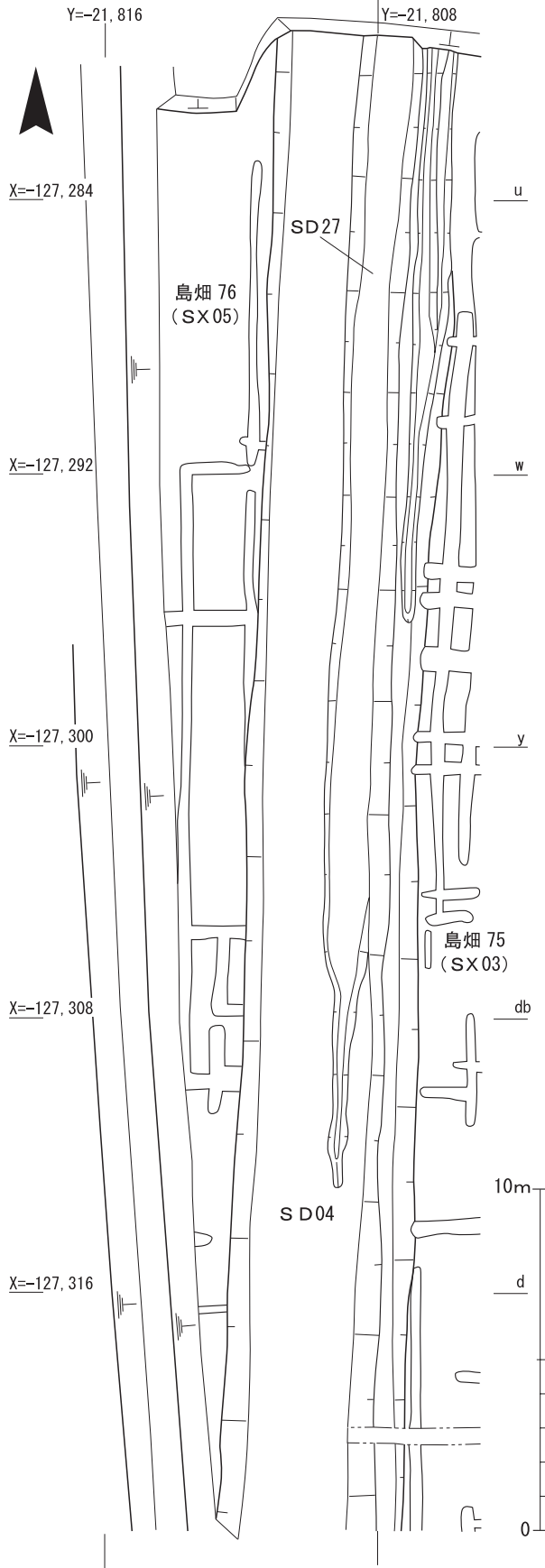
第78図 N地区島畑74・75(南半部)平面図(1/200)



第79図 N地区島畑74・75(北半部)平面図(1/200)

島畑の上面では16条前後の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長3.7～52.4m、幅0.1～0.7m、深さ0.1m前後である。遺物は島畑上面の精査中や素掘り溝から土師器・須恵器・瓦器などのほか、下層に由来する弥生土器などが出土した(第87図311～317)。時期は中世前半である。

島畑75 (S X03) (第78・79図) 調査区のほぼ中央部で検出した(B3-u25区ほか)。南北方向の島畑で、北端は調査区外となる。島畑の断面観察(第76図)によると、基盤層であるにおい黄色粘質土(34層)を整形し、西半部の一部にオリブ灰色粘質土(30層)を置いて最初期の島畑を形成している。34層の上面で素掘り溝等を検出した。これよりも上部の層序や堆積状況は、基本的に島畑74と同じである。最初期の島畑の規模は、検出長62.2m、基部幅11.9～12.9m、上面幅9.2m前後、高さ0.6～0.7mである。島畑上面の標高はおよそ13.6mである。島畑の上面では38条前後の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長1.8～52.0m、幅0.2～0.5m、深さ0.05～0.15mである。



第80図 N地区島畑76平面図(1/200)

遺物は島畑上面の精査中や素掘り溝から土師器・須恵器・瓦器・青磁・瓦質土器などのほか、下層に由来する弥生土器などが出土した(第87図318~330)。時期は中世前半である。

島畑76 (S X05) (第80図) 調査区の西辺で検出した(B4-u3区ほか)。南北方向の島畑であるが、東辺の一部を検出したにとどまる。島畑の断面観察(第76図)によると、おおむね島畑74・75と同様の層序を呈している。ただし、20層と21層の間に溝状遺構SD04の堆積層である青灰色極細粒砂(23層)が入り込んでいることから、島畑の盛土と溝状遺構の埋没には関連性が指摘できる。最初期の島畑の規模は、検出長44.0m、基部検出幅3.8m、上面検出幅3.4m、高さ0.7mである。島畑上面の標高はおおよそ13.5mである。島畑の上面では11条前後の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長2.0~18.5m、幅0.2~0.4m、深さ0.05~0.1mである。遺物は須恵器鉢などが出土した(第87図331)。時期は中世前半である。

溝状遺構SD02 (第78・79図) 調査区のほぼ中央、やや東寄り、島畑74と75の間で検出した(B3-u23区ほか)。南北方向の溝状遺構の一部を検出した。溝状遺構の土層断面観察(第76図)によると、基盤層であるにぶい黄色粘質土(34層)がわずかに掘り窪められた様相が認められ、その上部に青灰色や緑灰色、灰色の細粒砂もしくは極細粒砂(13・14・17・23・24層など)が堆積する。これらの上部は、やや土層が乱れるものの、灰色細粒砂(9層)や黄褐色細粒砂(6層)などのSD02の上面にとどまらず、島畑74や島畑75の上面まで広がる層序が認め

られる。最初期の溝状遺構の規模は、検出長61.8m、検出幅7.7m、深さ0.7m前後である。溝底の標高はおよそ13.0mである。溝状遺構の底面では3条の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長9.0～63.4m、幅0.25～0.75m、深さ0.05～0.2mである。このうちS D17は、S D02のほぼ中央に掘削され、かつ北端から南端まで延びることから、耕作等に伴うものではなく、排水等の溝であると考えられる。このような溝は、下水主遺跡の北半部の調査区で多く認められ、N地区のほか、M地区やO地区でも類例がある。しかし、L地区よりも南の調査区では、こうした長大な素掘り溝は確認していない。遺物は掘削時や素掘り溝から土師器や須恵器、瓦器などが出土した(第87図335～352)。時期は中世前半である。

溝状遺構S D04(第76・80図) 調査区の西半部、島畑75と76の間で検出した(B4-u2区ほか)。南北方向の溝状遺構の一部を検出した。溝状遺構の土層断面観察(第76図)によると、基盤層であるにぶい黄色粘質土(34層)を若干掘りくぼめられている状況が確認でき、その上部にはS D02と同様、青灰色や緑灰色、灰色の細粒砂もしくは極細粒砂(13・14・16・17・23・24層など)が堆積する。これらの上部には灰色や灰オーリーブ色の細粒砂(11・12層など)が島畑76からS D04、さらに島畑75の上面全体を覆うように堆積している。検出長63.0m、検出幅5.5m、深さ0.6～0.7mである。溝底の標高はおよそ12.9mである。島畑75に接した溝状遺構の底面で溝S D27を検出した。幅が広いので、耕作に伴うものではなく、別の用途の溝と考えられる。溝は検出長33.7m、幅0.4～1.6m、深さ0.1～0.25mである。溝底は北に向かって深くなる。遺物は埋土の掘削中や精査中、素掘り溝などから土師器や須恵器、瓦器、陶器などが出土した(第88図353～386)。時期は中世前半である。

溝状遺構S D32(第77図) 調査区の南端近く、島畑73と74・75の間で検出した(C3-k24区ほか)。東西方向の溝状遺構の一部を検出した。S D32は基盤層であるにぶい黄色粘質土を掘りくぼめて形成している。検出長20.0m、検出幅5.2m、深さ0.5～0.7mである。溝底の標高はおよそ12.8mである。溝状遺構の底面、島畑73の基部に接して1条の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長7.7m、幅0.35m、深さ0.1m前後である。この素掘り溝は溝状遺構S D02の底で検出した素掘り溝S D17と合流している。遺物は掘削中や精査中に土師器や須恵器、瓦器、陶器などが出土した(第88図387～393)。時期は中世前半である。

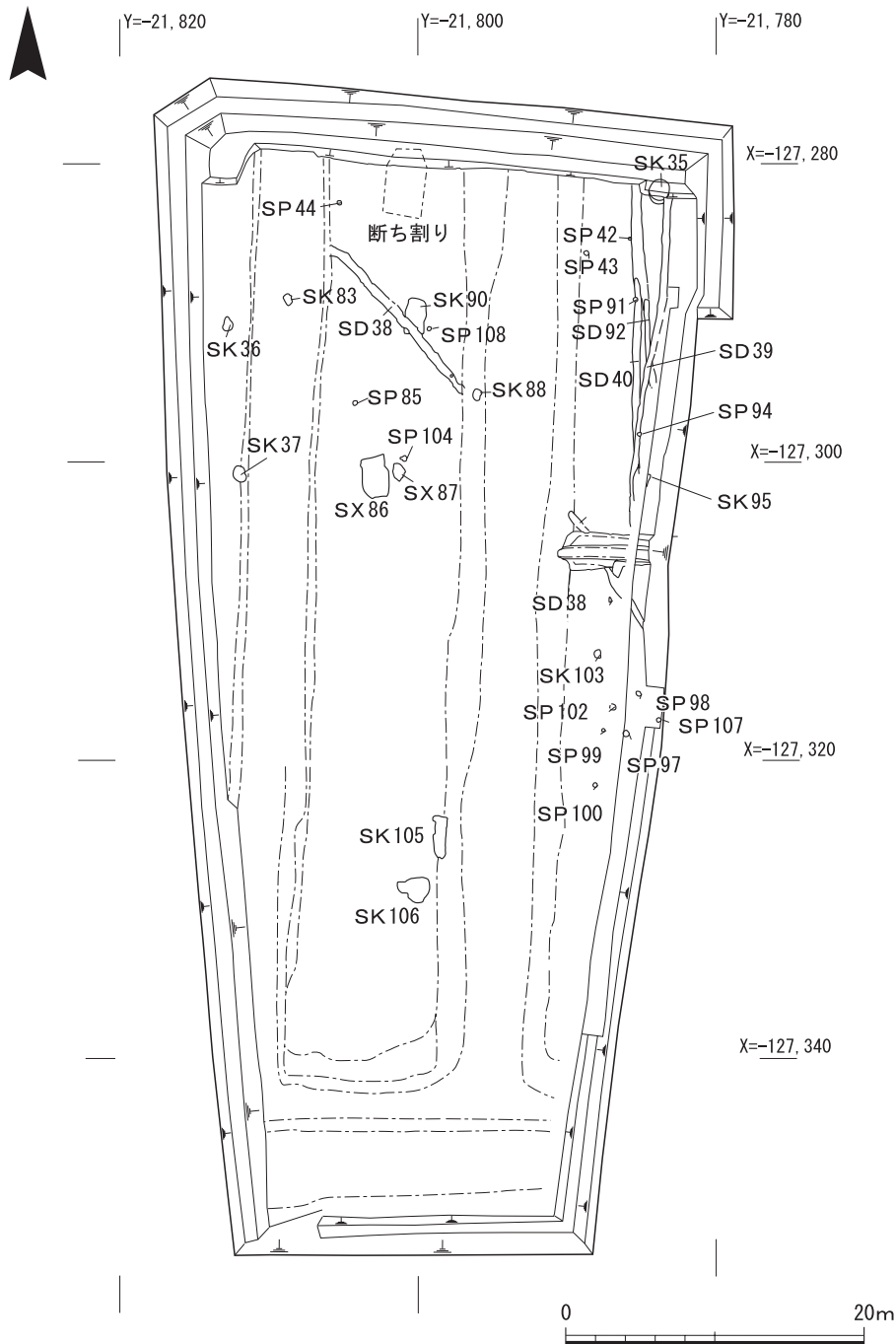
②下層遺構

ピットS P97～100・102・107(第81図) 調査区の東半部のほぼ中央で検出した(C3-e22区ほか)。径0.2～0.4m、深さ0.2～0.4mを測る。建物としては復元できなかった。いずれのピットからも遺物は出土しておらず、時期は不明である。

溝S D38(第82図) 調査区の北半部を北西から南東に向かって検出した(B4-v2区ほか)。北に対して42°程度西に振る。検出長は島畑75上で13.4m、島畑74上で9.1m分である。S D38は溝状遺構S D02による削平のため連続しないが、平面的に両者が連続することは明らかで、復元長は34mに達する。幅0.4～0.6m、深さ0.1～0.2mである。また、S D38の北西端は、溝状遺構S D04によって削平されているため、延長部は不明であるが、北西端がわずかに西よりに主軸を変え

るようである。ただし、島畑76の上面ではこの延長部に相当する溝等は確認していない。遺物はごく少量の弥生土器ないし土師器の小片が出土した程度である。溝そのものは非常に浅いが、水主神社東遺跡第5次調査のC地区や本報告のK地区などで検出されている弥生時代後期から古墳時代前期にかけての溝群と同じ性格のものと判断される。

溝SD39(第83図) 調査区の東辺で検出した(B3-u21区ほか)。おおむね南北方向に延びるが、北端から6.7m南で少し西(南に対して12°西)へ振ったのち、そのまま再び南へ延びる。検出長26.4m(削平分を含む)、幅0.4~0.6m、深さ0.1m前後である。後述する溝SD40と重複関係にあり、

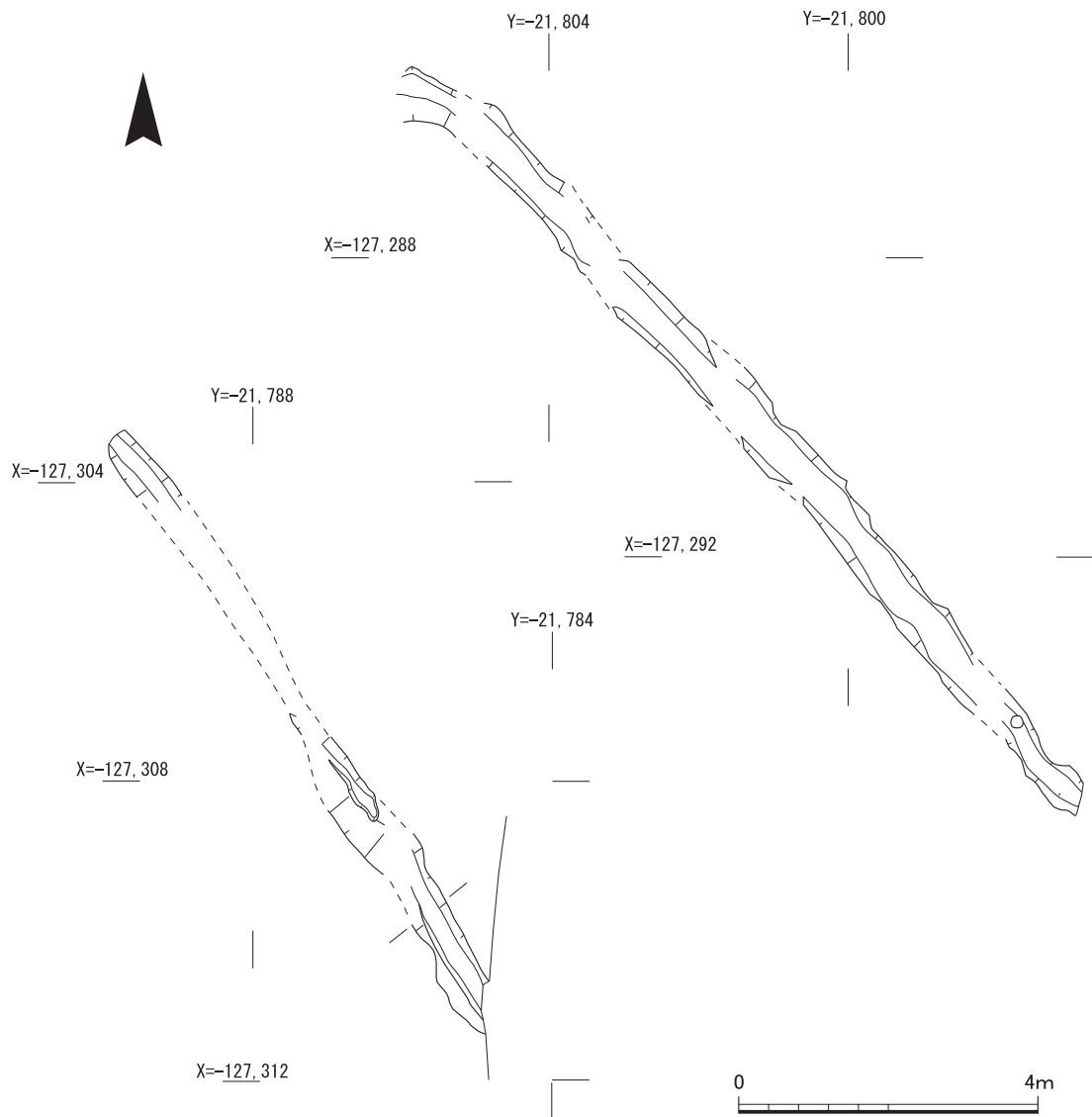


第81図 N地区下層遺構配置図(1/500)

やや不明瞭な点もあるが、S D40の方が新しい。遺物は弥生土器ないし土師器の細片が出土した。詳しい時期は不明であるが、溝S D38・40との重複関係から古墳時代前期以前であろう。

溝S D40 (第83図) 調査区の北東部で検出した(B3-u22区ほか)。おおむね南北方向に延び、南へ向かうほど、幅が狭くなる。検出長29.2m(削平分を含む)、幅0.2~0.95m、深さ0.1m前後である。溝S D39とS D40は重複関係にあり、不明瞭な点もあるが、S D39が古く、S D40が新しい。また、S D40と先述の溝S D38も重複関係にあり、S D38が新しい。遺物は弥生土器または土師器の細片が出土したものの、詳細な時期は不明である。先述のようにS D38よりも古いことから古墳時代以前であろう。

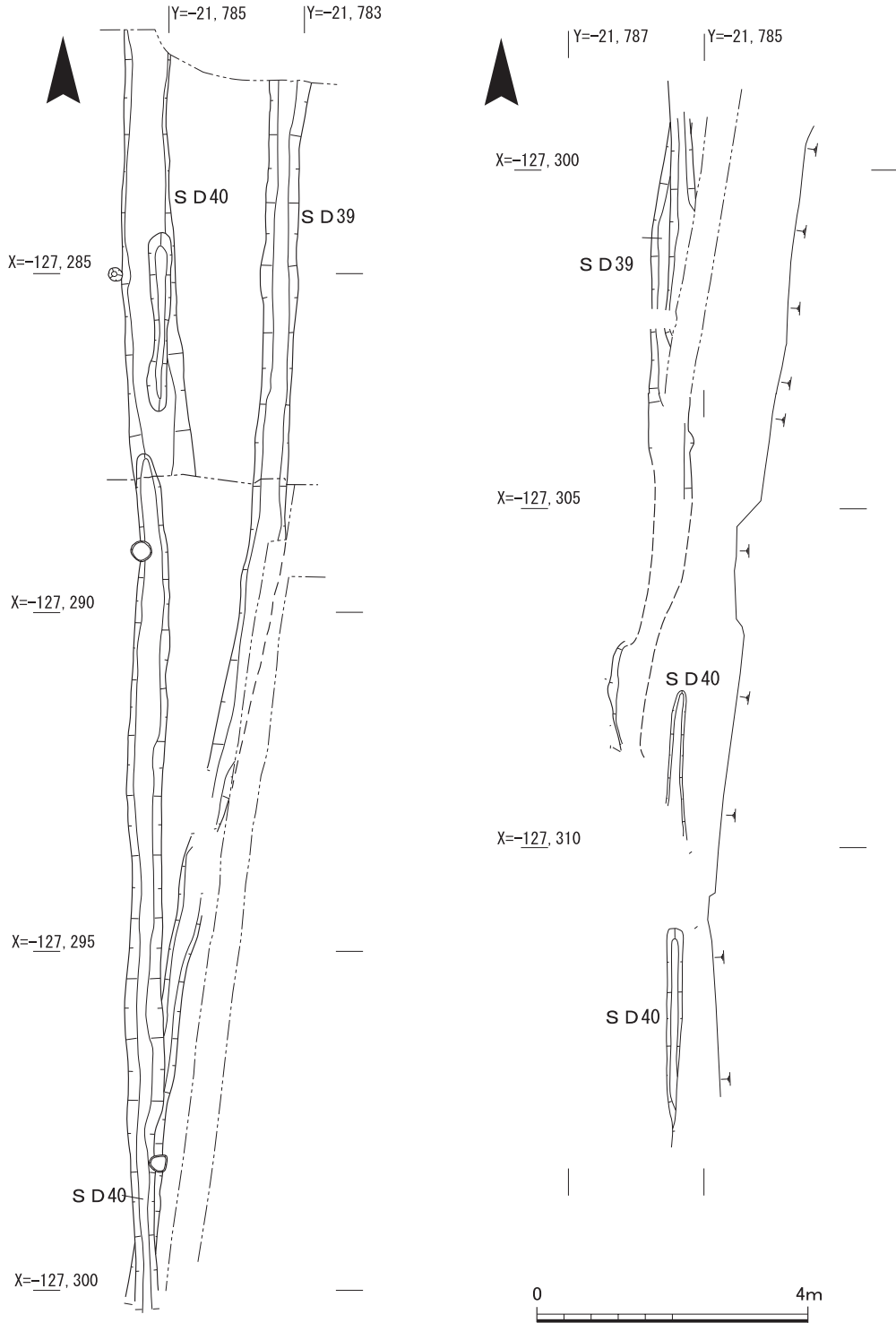
土坑S K35 (第84図) 調査区の北端で検出した(B3-u22・u23区)。平面形は円形を呈し、直径1.3m前後、深さ約1.6mである。埋土は大きく7層に分かれ、上から黄褐色砂質土(1層)、暗灰黄色粘質土(2層)、灰色砂質土(3層)、暗灰黄色砂質土(4層)、灰色粘質土(5層)、暗灰黄色



第82図 N地区溝S D38実測図(1/100)

砂(7層)、灰色ないし青灰色砂質土(8・9層)である。4層よりも下層は自然堆積と推定されるが、上の2層についてはおおむね水平に堆積していることから、人為的に埋められた可能性がある。遺物は8・9層を中心に弥生土器甕などが出土した(第89図395)。時期は弥生時代中期後半である。

土坑 S K 36 (第85図) 調査区の西端で検出した(B4-w4区)。平面形は不整形な長楕円形を呈



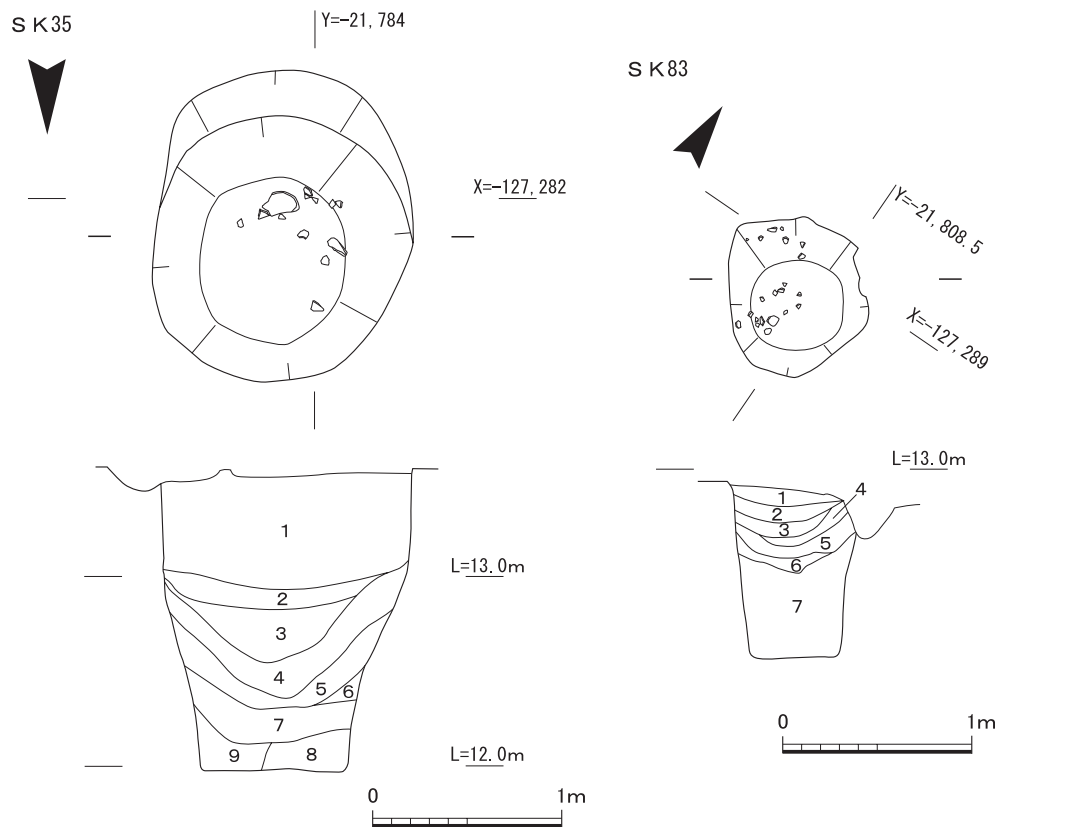
第83図 N地区溝 S D 39・40実測図(1/100)

する。長軸0.95m、短軸0.65m、深さ約0.15mである。埋土は炭が若干混じる灰色粘質土である。遺物は細片化していたものの、弥生土器広口壺や甕などが出土した(第89図396～398)。時期は弥生時代中期後半である。

土坑S K 37(第85図) 調査区の西端で検出した(C4-a3・a4区)。平面形は不整形な円形を呈するが、東辺は溝状遺構S D04によって削平されている。直径1.1m、深さ0.45mである。埋土は炭が混入する灰オリーブ粘質土である。遺物は弥生土器甕・壺・高杯などが出土した(第89図399～401)。時期は弥生時代中期後半である。

土坑S K 83(第84図) 調査区の北西部で検出した(B4-w3区)。平面形はやや不整形な円形である。上部が溝状遺構によって削平されているが、直径0.85m、深さ0.95mである。埋土は大きく上下2層に分かれ、上層はさらに6層に細分できる。遺物は弥生土器広口壺や甕の破片などが出土した(第89図403・404)。時期は弥生時代中期後半である。

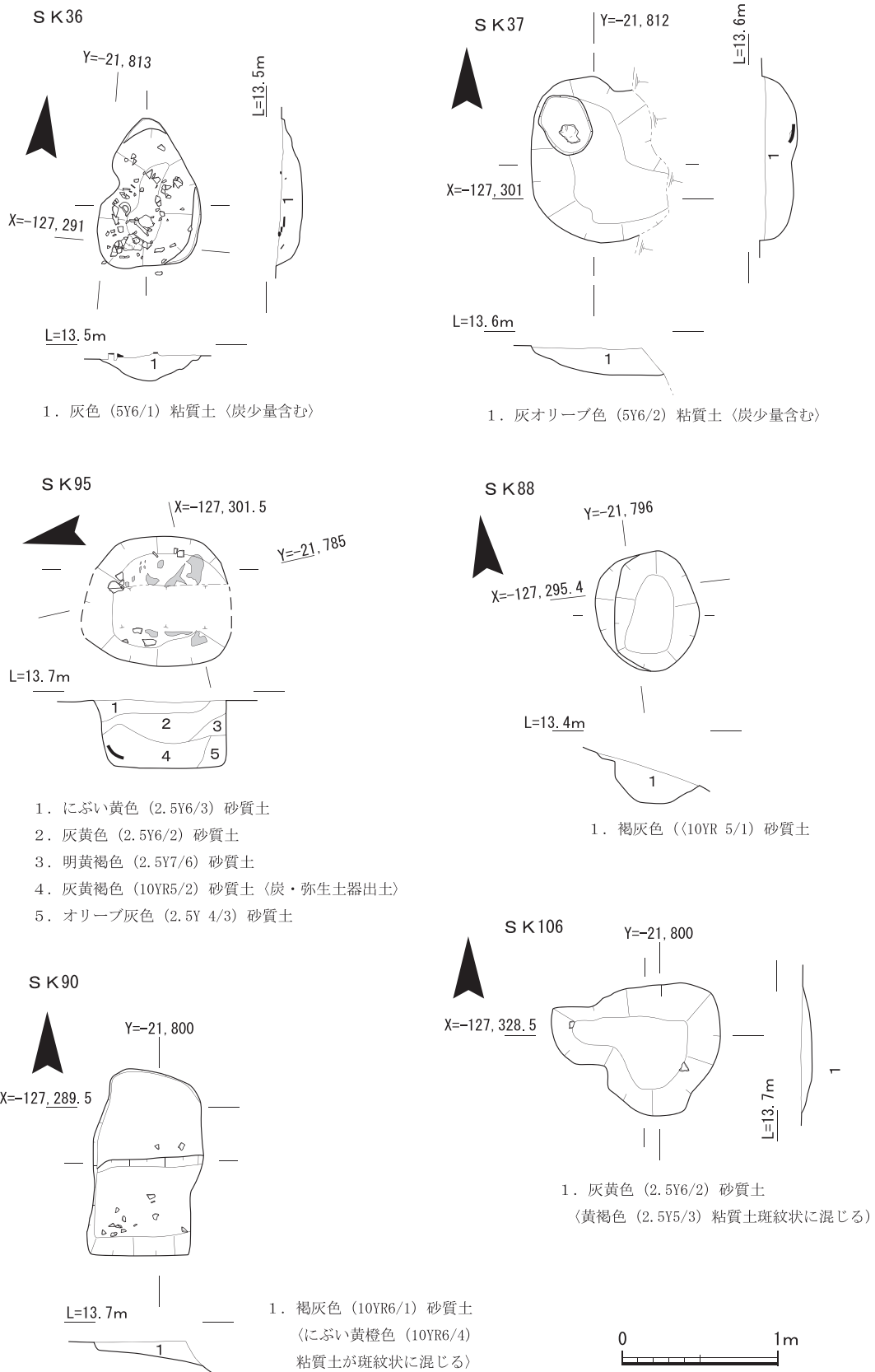
土坑S K 95(第85図) 調査区の東辺で検出した(C3-a22区)。平面形は隅丸方形を呈する長



1. 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土 (炭少量混じる)
2. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土 (炭少量混じる)
3. 灰色 (7.5Y6/1) 砂質土
4. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土
5. 灰色 (7.5Y6/1) 粘質土 (炭少量混じる)
6. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土
7. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂 (粘性あり)
8. 青灰色 (10BG6/1) 砂質土
9. 灰色 (N6/0) 砂質土

1. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 砂 (粘性あり)
2. 灰色 (10Y6/1) 砂
3. 灰色 (5Y6/1) 砂 (粘性あり)
4. 灰白色 (7.5Y7/1) 砂 (粘性あり、炭少量混じる)
5. 灰色 (10Y6/1) 砂 (粘性あり、炭・土器片混じる)
6. 灰白色 (10Y7/1) 砂 (粘性あり)
7. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘質土 (炭少量混じる)

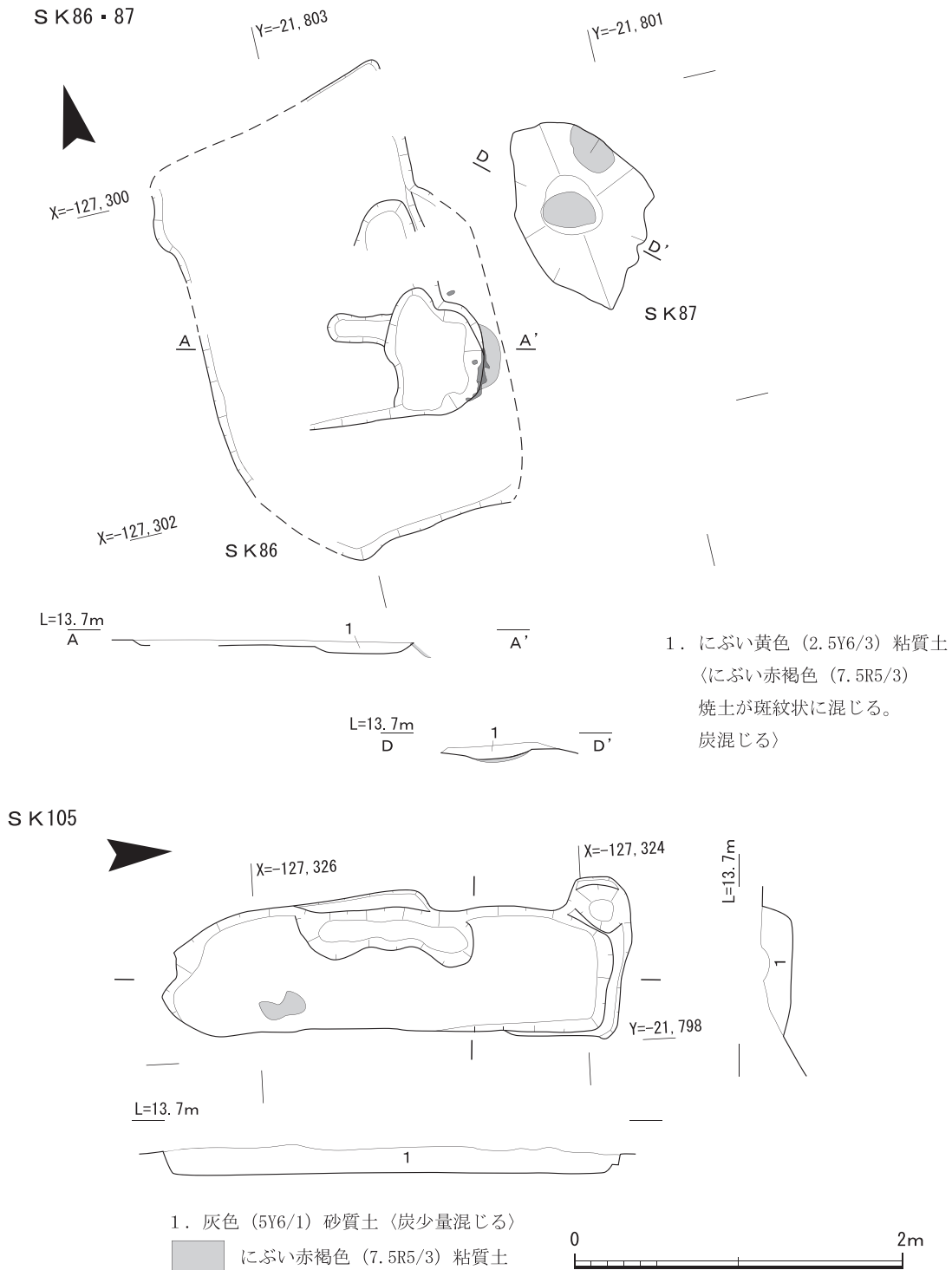
第84図 N地区土坑S K 35・83実測図(1/40)



第85図 N地区土坑S K 36・37・88・90・95・106実測図(1/40)

辺0.95m、短辺0.85m、深さ0.45mである。埋土は3層に分かれ、上からにぶい黄色砂質土(1層)、灰黄色砂質土(2層)、灰黄褐色砂質土(4層)である。遺物はおもに4層から弥生土器甕の破片などのほか、炭化物なども出土した(第89図406・407)。時期は弥生時代中期後半である。

土坑S K 86(第86図) 調査区の北半部で検出した(B4-y1区ほか)。平面形はやや不整形な長方形を呈する。上部が素掘り溝等によって削平されているため、遺存状況は良くないが、長軸



第86図 N地区土坑S K 86・87・105実測図(1/40)

2.7m、短軸1.7m、深さ0.05mである。また、中央やや東よりに不整形な落ち込みが認められる。埋土は焼土や炭化物が混じるにぶい黄色粘質土である。遺物は少量の土器片が出土したものの、詳しい時期は不明である。

土坑S K 87(第86図) 調査区の北半部、土坑S K 86の東側にほぼ接して検出した(C 4-a1区)。平面形はやや不整形な楕円形を呈する。土坑の底面には焼土が広がる。上部は削平されていると推測されるが、長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.1mである。埋土はS K 86と同じく、焼土や炭化物が混じるにぶい黄色粘質土である。遺物は出土しなかったが、埋土等の状況がS K 86と同じであることから同時期の遺構と考えられるが、詳しい時期は不明である。

土坑S K 88(第85図) 調査区の北半部、島畑75の東側斜面上で検出した(B 3-x24・x25区)。平面形は楕円形を呈する。上部は溝状遺構によって削平されているが、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.25mである。埋土は褐灰色砂質土である。遺物は少量の土器片が出土したものの、詳しい時期は不明である。

土坑S K 90(第85図) 調査区の北半部で検出した(B3-w25区ほか)。平面形はやや不整形な長方形である。溝S D 38や素掘り溝によって若干削平されているものの、長軸1.3m、短軸0.7m、深さ0.05~0.1mである。埋土は、にぶい黄橙色粘質土のブロックが混じる褐灰色砂質土である。遺物は弥生土器甕などの破片が出土した(第89図405)。時期は弥生時代中期後半である。

土坑S K 105(第86図) 調査区の南半部で検出した(C3-f25区)。平面形はやや不整形な長方形で、南東部の一部が溝状遺構S D 02によって削平されている。長軸2.8m、短軸0.8m、深さ0.2mである。埋土は炭が若干混じる灰色砂質土である。土坑の底面にはごく一部であるが、焼土が確認できる。北西部の隅に接してピット状の遺構が認められるが、S K 105との関連性は不明である。遺物は少量の土器片が出土したものの、詳しい時期は不明である。

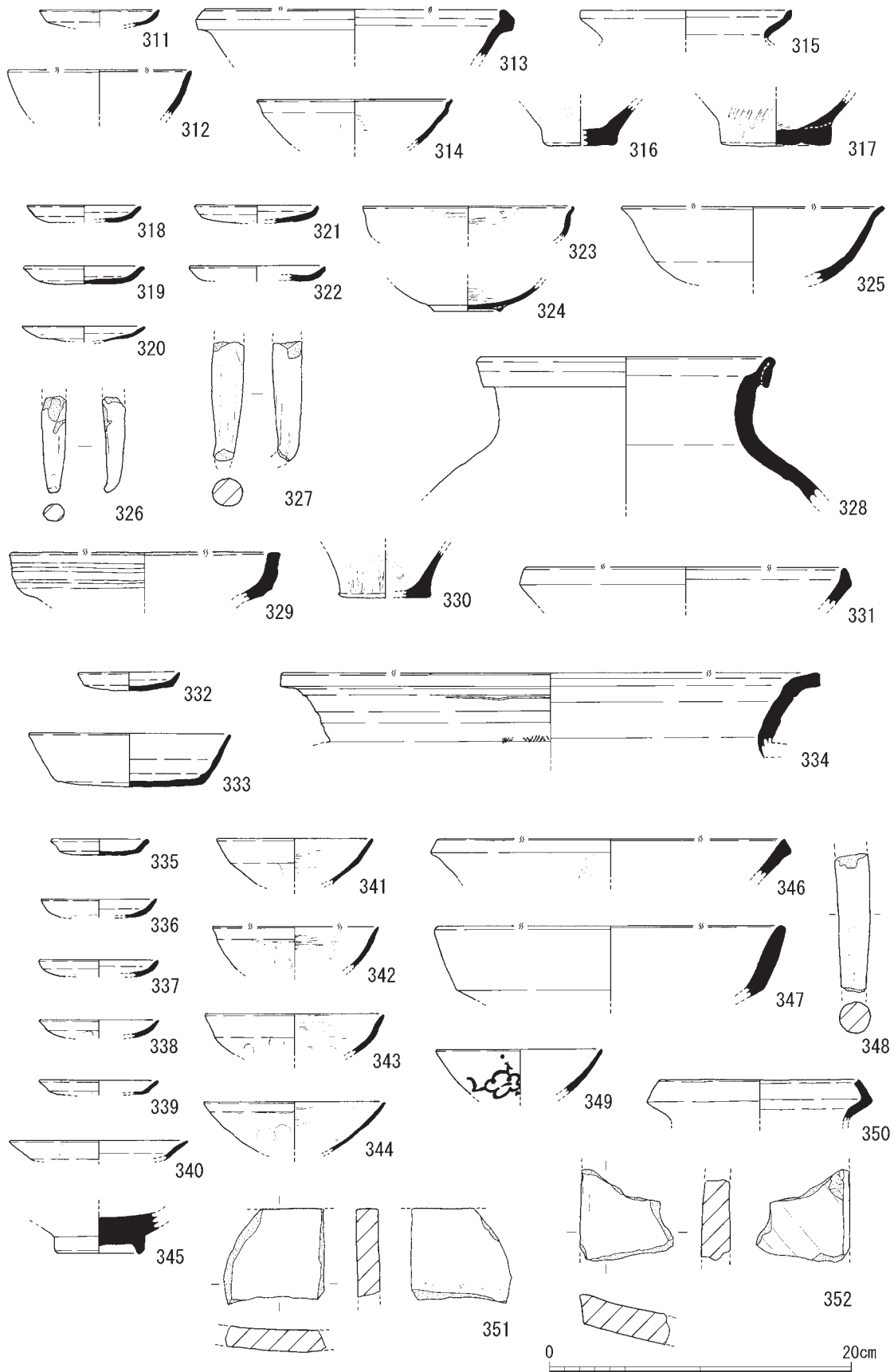
土坑S K 106(第85図) 調査区の南半部で検出した(C3-h1区ほか)。平面形は不整形な形状を呈する。上部は削平されていると推測されるが、長軸1.1m、短軸0.85m、深さ0.05mである。埋土は灰色砂質土である。遺物は縄文土器と推定される土器片が出土したものの、詳しい時期は不明である。
(岡崎研一・筒井崇史)

(3)出土遺物

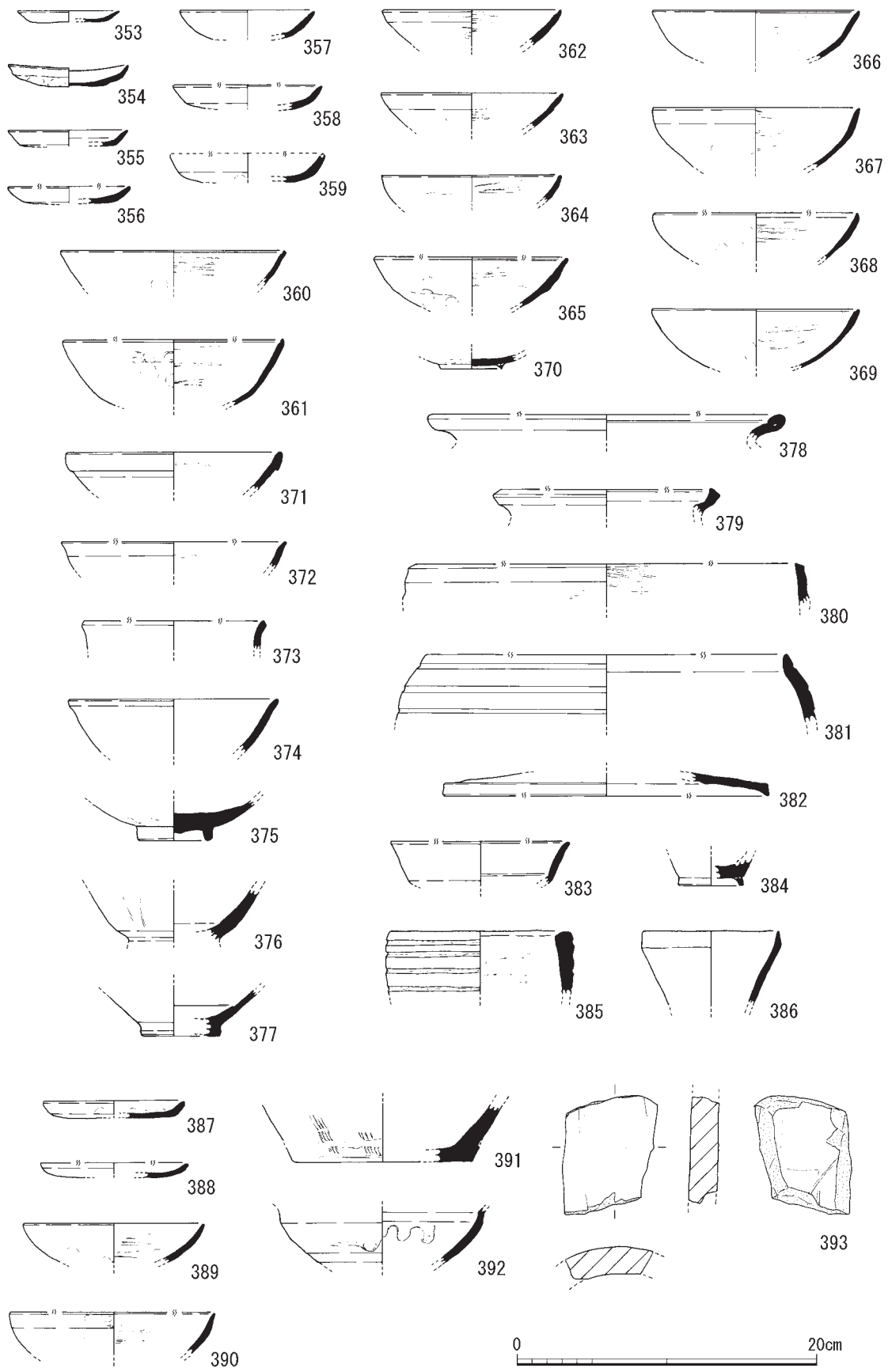
①上層遺構出土遺物

島畑74(第87図311~317) 311は土師器皿である。口縁端部がわずかに外反する。312は土師器碗である。313は須恵器鉢である。口縁部外面が玉縁状を呈するとともに、内面に浅い段状となる。314は瓦器碗である。口縁部上半がやや強く外反する。口縁端部内面には沈線を1条施す。315~317は弥生土器である。315は甕の口縁部であろう。わずかに内湾気味となり、端部外面には明瞭な面をもつ。316・317は甕または壺の底部である。315~317はいずれも弥生時代後期と考えられる。

島畑75(第87図318~330) 318~322は土師器皿である。ほぼ同形同大のもので、口縁部にヨコナデ、底部内外面にナデを施す。323・324は瓦器碗である。323は、314と同じく、口縁部上半



第87図 N地区出土遺物実測図1(1/4)



第88図 N地区出土遺物実測図2(1/4)

がやや強く外反し、端部内面には沈線を1条施す。324は断面面三角形の高台を貼り付ける。ともに内面に密なミガキを施す。325は青磁椀である。口縁部は内湾気味に立ち上がったのちに、大きく外反する。326・327は瓦質土器三足鍋の脚部である。端部は内方に向かって屈曲気味となる。328は陶器甕である。口縁端部は折り返して口縁帯を作る。口縁端部内面は強い回転ナデにより凹状となる。329・330は弥生土器である。329は広口壺の口縁部である。口縁部外面に2条の凹線を施す。330は甕の底部である。329・330は弥生時代中期と考えられる。

島畑76(第87図331) 331は須恵器鉢である。口縁端部はほぼ上方に立ち上がり、断面三角形に近い形状を呈する。

島畑73(第87図332～334) 332は土師器皿である。やや法量は小さい。333は須恵器杯Aである。遺存状態は良好で、口径13.3cm、器高3.6cmである。底部外面にはヘラキリ痕が明瞭に残る。奈良時代のものであるが、調査地周辺で当該期の遺構等は未確認である。334は須恵器甕の口縁部である。古墳時代から奈良時代にかけてのものであろう。

溝状遺構 S D02(第87図335～352) 335～340は土師器皿である。口縁部が外反気味となるものや、やや内湾気味に立ち上がるものなどがある。335～339は小型品、340は中型品である。341～344は瓦器椀である。図示した瓦器椀は、口縁端部内面に沈線を施さないものであるが、口縁部の形状には個体差が認められる。345は青磁椀の底部である。底部は削り出し高台である。346は須恵器鉢の口縁部である。口縁端部はほぼ上方に立ち上がるものの、331ほど断面三角形とはならず、やや方形に近い形状を呈する。347は須恵器鉢であろうか。厚手の口縁部を持つものの、頸部以下の形状は明らかでない。348は瓦質土器三足鍋の脚部である。349は染付椀である。350は弥生土器壺の口縁部であろう。中期のものと考えられる。351・352はともに平瓦の破片である。ともにナデで整形されている。

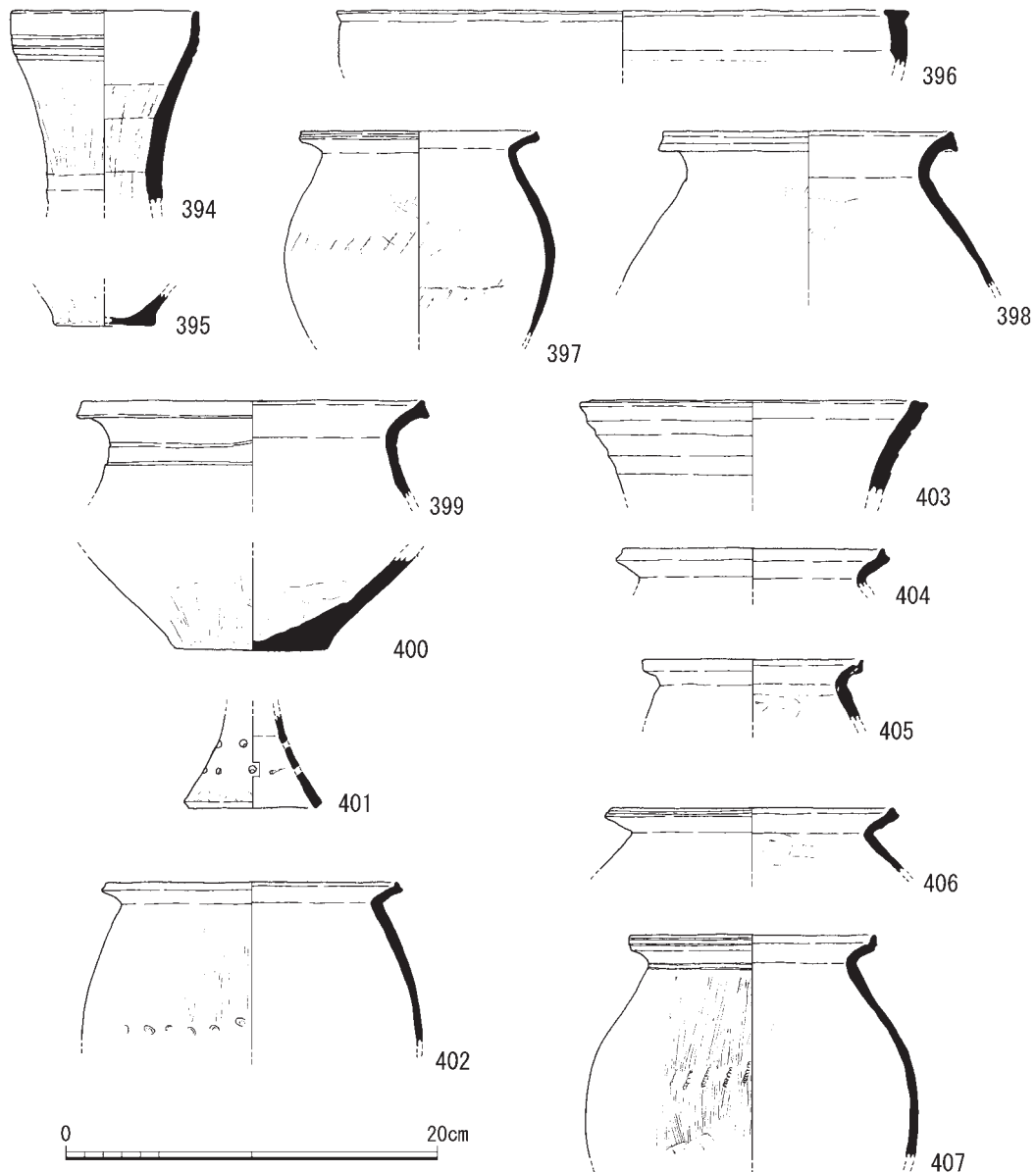
溝状遺構 S D04(第88図353～386) 353～359は土師器皿である。353～356は小型品、357～359は中型品である。小型品はいずれも深さが浅い扁平なものであるのに対して、中型品は口縁部が内湾気味に立ち上がるものである。360～370は瓦器椀である。口縁端部には沈線のあるもの(360・361・365・366・369)と、ないもの(362～364・367・368)がある。いずれの個体内面にミガキを施すが、密なものは見られず、全般にまばらである。371・372は白磁椀の口縁部である。371は口縁部外面が玉縁状を呈し、いわゆるIV類である。373～375は青磁椀である。373は口縁部の小破片である。374は口縁部が斜め上方に延びるものである。375は底部である。高台は削り出し高台である。376・377は陶器椀である。378は土師器羽釜などの口縁部と思われる。口縁端部を内方に折り返して肥厚させる。379は瓦質土器鍋などの口縁部の破片である。受け口状となる。380は瓦質土器鉢である。381も瓦質土器鉢と推定される。外面に沈線が3条確認できる。382は須恵器杯B蓋である。やや扁平な器形であるが、口縁部は屈曲しない。383は須恵器杯である。底部を欠損しするため、高台の有無は不明である。384は須恵器の小型の壺の底部と推定される。貼り付け高台が巡る。382～384は奈良時代前後のものと考えられる。385は弥生土器長頸壺の口縁部である。外面に凹線が4条巡る。弥生時代中期のものであろう。386も弥生土器長頸壺の口

縁部である。口縁部外面は端部付近で屈曲し、やや内傾するが、内面はやや緩やかである。弥生時代後期のものと考えられる。

溝状遺構 S D 32 (第88図387~393) 387・388はほぼ同形同大の土師器皿である。平底気味の底部から斜め上方に向かって短く口縁部が立ち上がる。389・390は瓦器椀である。ともに口縁端部を丸く納める。内面のミガキはやや粗く施す。391は須恵器鉢である。内面には摺目は認められない。392は陶器の破片である。393は丸瓦の破片である。凸面はナデで仕上げている。

②下層遺構出土遺物

土坑 S K 34 (第89図394) 394は弥生土器長頸壺である。外反気味に延びる頸部からやや内方に向かって内湾気味延びて口縁端部に至る。口縁部の外面には凹線が3条巡る。頸部内面にはシボリ痕が明瞭に見られる。



第89図 N地区出土遺物実測図3(1/4)

土坑 S K 35 (第89図395) 395は弥生土器甕の底部である。内面にケズリを施す。

土坑 S K 36 (第89図396～398) 396は弥生土器広口壺の口縁部である。口縁部の下半以下を欠損するが、端部付近が遺存する。端部は、内方、外方ともにつまみ出したように端面を形成する。397・398は弥生土器甕である。397は単純く字状の口縁部で、端部はわずかに上方へつまみ上げ、外端面に擬凹線が1条巡る。体部はいわゆる倒卵形を呈すると考えられるが、下半以下を欠損する。体部最大径付近にヘラ状工具による刺突文を施す。398は口縁部が体部から緩やかに外反するもので、端部は上下に拡張して広い面をなす。摩滅気味であるが、端面に擬凹線を2条施すようである。体部中位以下を欠損する。

土坑 S K 37 (第89図399～401) 399は弥生土器甕である。398と同じく口縁部が体部から緩やかに外反するもので、端部を上下にわずかに拡張して面をなす。頸部付近にヘラ描きによる沈線を2条施す。400は弥生土器壺底部と考えられる。径の大きな底部から斜め上方にはほぼまっすぐに体部が立ち上がる。外面にはミガキを施す。底部付近の内面にはユビオサエを強く施し、段が生じている。401は高杯の脚部である。上下2段に1.5～2.0cm程度の間隔で直径0.5cm程度の小孔を穿っている。

土坑 S K 103 (第89図402) 402は弥生土器甕である。単純く字状を呈する口縁部で、端部は断面三角形となるようにつまみ上げる。体部はいわゆる倒卵形を呈すると考えられ、最大径付近に棒状工具による刺突文を施す。

土坑 S K 83 (第89図403・404) 403は弥生土器広口壺である。口縁部外面に4条の凹線文を施す。端面はやや下方向かって外傾し、わずかに凹む面をなす。404は弥生土器甕である。単純く字状の口縁部に、402と同じように端部が断面三角形となるようにつまみ上げる。外側端面はつまみ上げに伴うヨコナデによって凹んだ形状となっている。

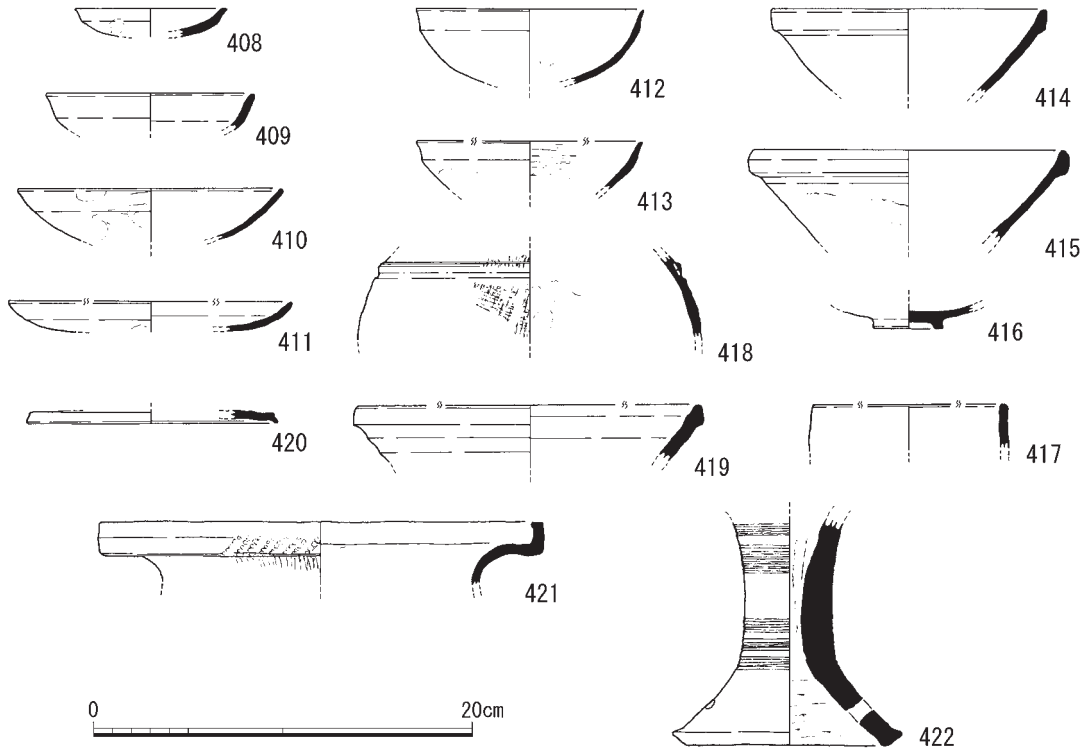
土坑 S K 90 (第89図405) 405は弥生土器甕である。外反気味の頸部に上方につまみ上げた口縁部がつくもので、口縁部は受け口状を呈する。

土坑 S K 95 (第89図406・407) 406・407は弥生土器甕である。406は404に類似した特徴を持つものであるが、端部のつまみ上げはやや弱く丸く納められている。407は単純く字状の頸部に上方につまみ上げた口縁部がつくもので、口縁部は受け口状を呈する。口縁部外面には擬凹線を2条施す。また、頸部には沈線を2条施す。体部はいわゆる倒卵形を呈するが最大径付近以下を欠損する。体部最大径付近よりもやや上に、櫛状工具による刺突文を施す。

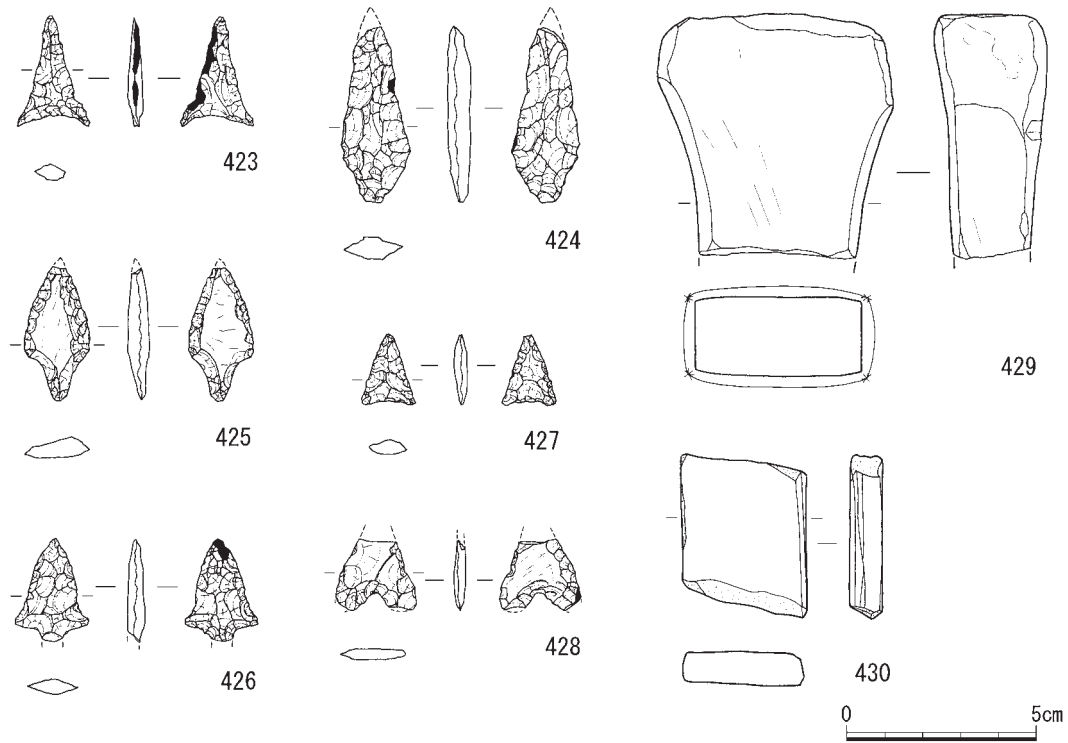
③遺物包含層出土土器(第90図)

408は土師器皿である。やや丸底気味の底部に、外反気味の口縁部からなる。409は土師器杯である。底部を欠損するが平底を呈すると考えられる。410は土師器椀である。口縁端部をわずかにつまみ上げる。外面はナデやユビオサエを施す。411は土師器皿である。平底気味の底部から緩やかな口縁部が立ち上がる。409～411は奈良時代ないし平安時代のものであろう。412・413は瓦器椀である。類似した器形を呈し、口縁部がわずかに外反するものである。ともに端部は丸く納める。414～416は白磁椀である。414・415は、ともに底部を欠損するが、口縁部外面が玉縁状

を呈するIV類である。416は底部の破片である。417は青磁碗の口縁部の小破片である。418は土師器甕であろうか。肩部に突帯状のものが巡る。419は須恵器鉢である。口縁部外面が玉縁状を呈する。420は須恵器杯B蓋の口縁部の破片である。やや扁平であるが、奈良時代前半のもので



第90図 N地区出土遺物実測図4 (1/4)



第91図 N地区出土遺物実測図5 (1/2)

あろう。421は弥生土器広口壺の口縁部である。口縁部は緩やかに外反した後、ほぼ垂直立ち上がる、受け口状となる。受け口の内面にやや強いヨコナデを施し、口縁端部が内側上方に向かってわずかにつまみ上げの形状となる。口縁部外面には櫛状工具による刺突文を施す。422は弥生土器高杯脚部である。脚柱部にヘラ描き沈線を大きく上下2段に施しており、上段は少なくとも9条確認できる。下段は3条ずつが3セット施す。各裾部はあまり開かない。脚裾部に直径1cmほどの円孔が5か所確認できる。脚内面にヘラケズリを施す。

④石器(第91図)

423は平気式の石鏃である。鳥畑75の精査中に出土した。長さ2.92cm、幅1.92cm、重量1.2gである。424～426は有茎式の石鏃である。423と同じく鳥畑75の精査中に出土した。残存長4.67cm、幅1.8cm、重量5.2gである。425は鳥畑75の素掘り溝SD48で出土した。残存長3.53cm、幅1.72cm、重量3.4gである。426は溝状遺構SD04で出土した。残存長2.72cm、幅1.94cm、重量1.9gである。427は平基式の石鏃である。溝状遺構SD02で出土した。全長1.85cm、幅1.42cm、重量0.8gである。428は凹基式の石鏃である。溝状遺構SD02で出土した。残存長1.9cm、幅2.1cm、重量1.4gである。以上の石器はいずれも材質はサヌカイトである。

429・430は砥石である。429は溝状遺構SD02で出土した。図の下半部を折損するが、上下、左右の4面で使用痕が確認できる。残存長6.5cm、最大幅6.25cm、最大厚さ3.0cmである。430は重機掘削中に出土した。非常に扁平な砥石で、図の上下を欠損する。上下の2面で使用痕が確認できる。残存長3.5cm、幅3.3cm、厚さ0.5cmである。材質はどちらも砂岩である。

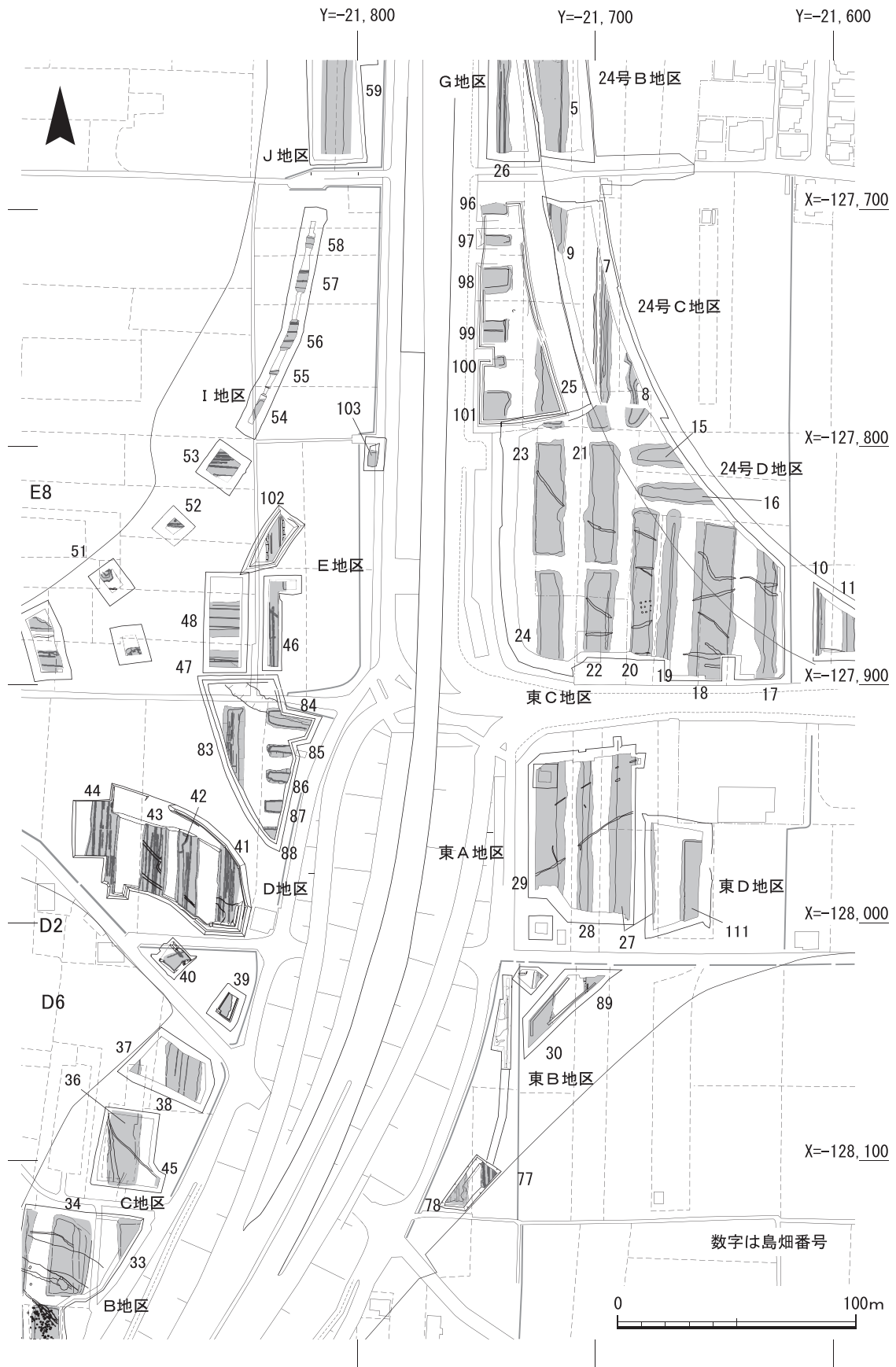
(筒井崇史)

7) D3区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

D3区は、平成24年度に調査を実施したE1・E2区の南側、平成25年度に調査を実施したD2区の北東側に位置する(第92図)。調査区は、全長74.8m、北辺幅34.0mの三角形に近い形状を呈する。調査直前の状況は、平成24・25年度に行ったE地区やD地区における橋脚工事に伴う資材置き場等として改良剤を混ぜた土砂が0.3～0.9mほど盛られている状態であった。工事前の現地表面の標高はおよそ15.5～15.8mである。現地表下1.1～1.5mで、鳥畑6基、溝状遺構6条などを検出した(第93図)。また、下層遺構として、古代の溝1条、古墳時代の溝1条を検出した(第101図)。調査面積は2,050㎡である。出土した遺物は整理箱にして9箱である。

基本的な層序を調査区東壁土葬図(第94図)で説明すると、耕作土と思われるオリーブ褐色粗粒砂～極粗粒砂(2・13層)やオリーブ黒色粗粒砂(20層)の下層に、厚さ10～25cmの黄灰色ないしオリーブ灰色、オリーブ褐色などの砂層(3・4・13・14・21・24層など)がある。これらを除去すると、最も新しい鳥畑と溝状遺構を確認した。鳥畑の部分ではオリーブ黒色、灰色、暗緑灰色、緑灰色などのシルトないし細粒砂による鳥畑の盛土が確認できる。一方、溝状遺構の部分では厚



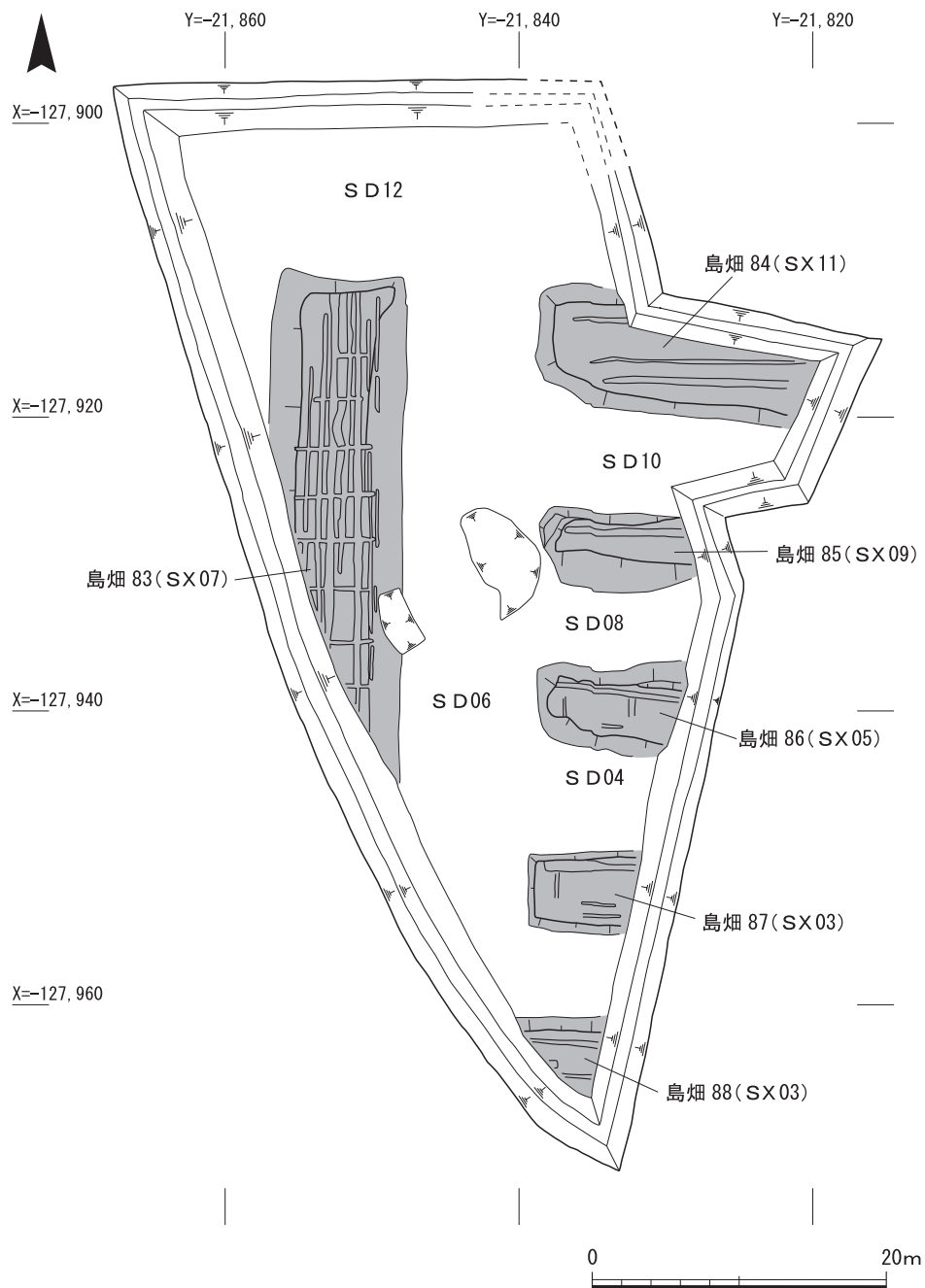
第92図 下水主遺跡第1～9次・水主神社東遺跡第1～7次調査遺構配置図(1/2,500)

さ5～15cmのオリーブ黒色、黒緑灰色、暗オリーブ灰色、オリーブ灰色、灰色、緑灰色などのシルト主体とする堆積層(43～46層・61～64層・71～74層など)が確認できる。これらの下層に基盤層である黄褐色シルト(39層)がみられる。

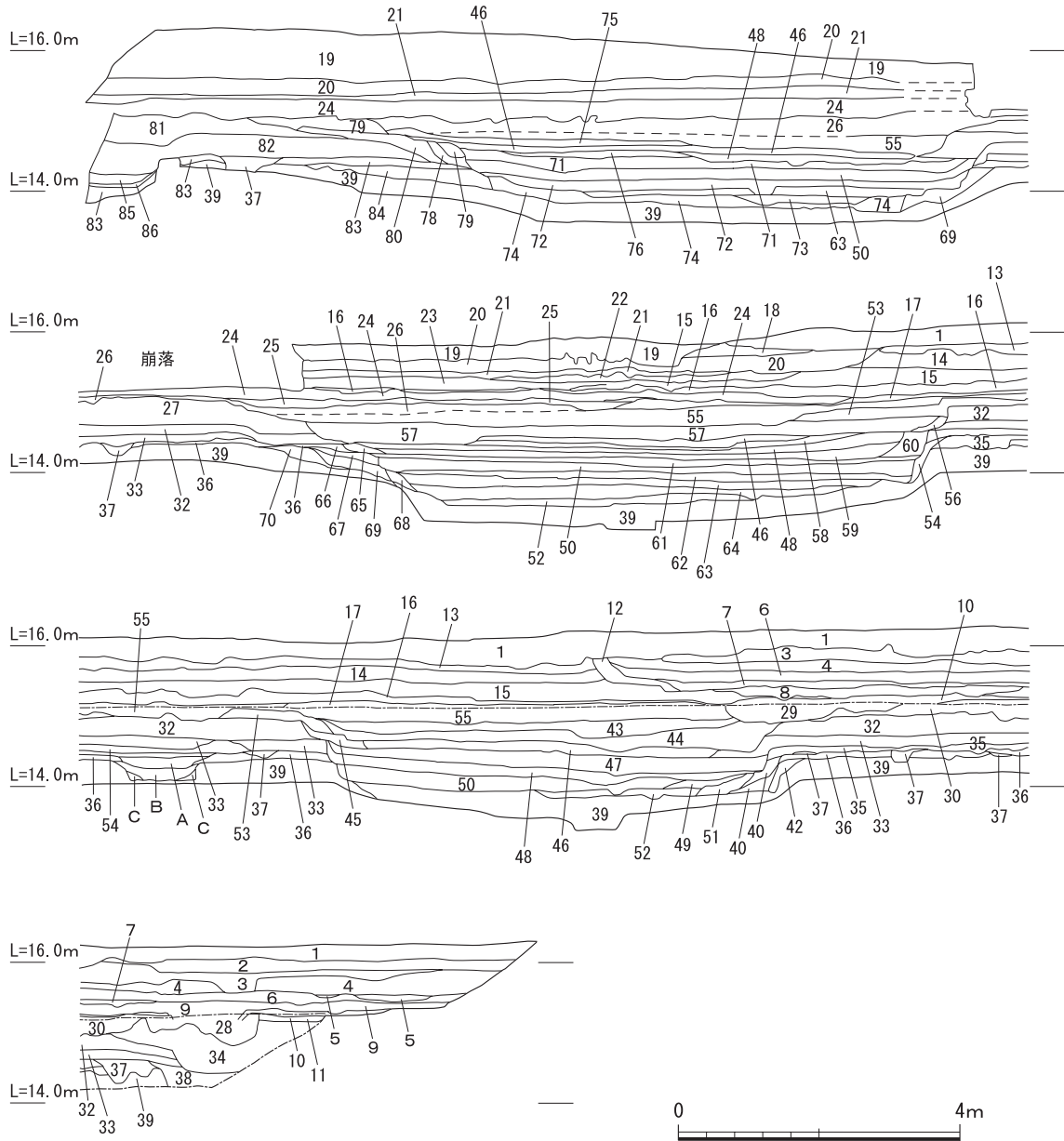
(2) 検出遺構

① 上層遺構

島畑83(SX07)(第96図) 調査区の最も西で検出した(I 4-c 13区ほか)南北方向の島畑であるが、南西部から南端部にかけては調査区外となる。島畑は、基盤層である黄褐色シルトを整形



第93図 D3区上層遺構配置図(1/500)



第94図 D3区東壁土層断面図(1/100)

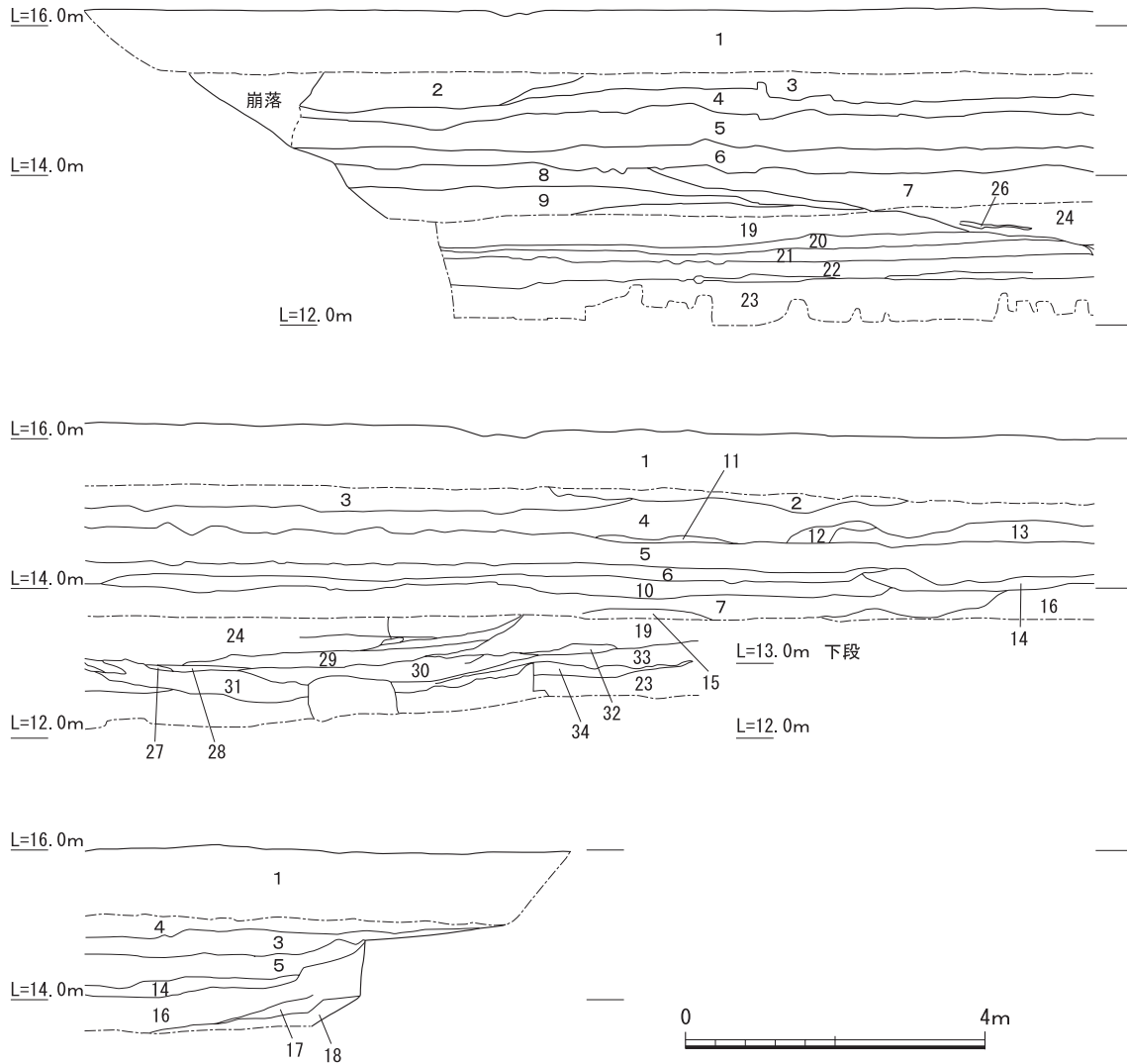
して形成されている。最初期の島畑の規模は、検出長34.6m、基部幅9.3m、上面幅5.1~6.1m、高さ0.6mである。島畑上面の標高はおよそ14.3mである。島畑に伴う素掘り溝を17条前後検出した。素掘り溝は検出長2.6~28.3m、幅0.05~0.5m、深さ0.1~0.3mである。遺物は島畑の精査中や素掘り溝から土師器や須恵器、瓦器、陶器などが出土した(第105図431~438)。また、釘と思われる鉄製品も出土した(第105図439)。時期は中世前半である。

島畑84(S X 11)(第98図) 調査区の北東部で検出した(I4-d8区ほか)。東西方向の島畑で、拡張区で島畑の南辺の一部を確認したが、北辺と東端は調査区外となる。島畑は、基盤層である灰オリーブ色シルトないし黄褐色シルトを整形して形成されている。最初期の島畑の規模は、検出長19.5m、基部幅8.2m、上面幅6.0m、高さ0.5mである。島畑上面の標高はおよそ14.2mである。島畑に伴う素掘り溝を3条検出した。素掘り溝は検出長3.8~14.8m、幅0.15~0.6m、深さ0.05~

- | | | |
|---|--|--|
| 1. 攪乱もしくは置き土 | 29. 灰色 (7.5Y5/1) 粗粒砂～極粗粒砂 | 62. 灰色 (7.5Y4/1) ～灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト |
| 2. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粗粒砂～極粗粒砂 | 30. オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト～細粒砂 | 63. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) シルト |
| 3. 黄灰色 (2.5Y4/1) ～暗黄灰色 (2.5Y4/2) 中粒砂～粗粒砂 | 31. 灰色 (7.5Y4/1) シルト | 64. 緑灰色 (10GY6/1) シルト |
| 4. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 中粒砂～粗粒砂 | 32. 灰色 (10Y4/1) シルト | 65. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 中粒砂～粗粒砂 |
| 5. オリーブ黒色 (10Y3/1) 中粒砂～粗粒砂 (やや粘り気あり) | 33. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト | 66. 灰色 (10Y4/1) シルト |
| 6. オリーブ黒色 (10GY3/1) 中粒砂～粗粒砂 | 34. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト～中粒砂 | 67. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト |
| 7. 暗緑灰色 (10GY4/1) 粗粒砂～粗粒砂 | 35. 灰色 (7.5Y4/1) ～灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト～細粒砂 | 68. 暗緑灰色 (10GY3/1) シルト |
| 8. 灰色 (10Y5/1) 粗粒砂～極粗粒砂 | 36. 黄灰色 (2.5Y4/1) に暗灰黄 (2.5Y4/2) が混じるシルト | 69. オリーブ灰色 (10Y4/2) 細粒砂～シルト |
| 9. 暗オリーブ褐色 (2.5Y6/3) 粗粒砂～極粗粒砂 | 37. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト | 70. オリーブ灰色 (10Y5/2) シルト |
| 10. オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細粒砂～極細粒砂 | 38. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 粘質土 | 71. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 細粒砂～中粒砂 |
| 11. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) シルト | 39. 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト | 72. 黒緑灰色 (7.5GY4/1) シルト |
| 12. 黄褐色 (2.5Y5/4) 中粒砂～極粗粒砂 | 40. 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト～細粒砂 | 73. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト～細粒砂 |
| 13. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粗粒砂～極粗粒砂 | 41. 緑灰色 (7.5GY5/1) シルト | 74. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト |
| 14. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂～極粗粒砂 | 42. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト | 75. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト～細粒砂 |
| 15. オリーブ色 (5Y5/4) 粗粒砂～極粗粒砂 | 43. オリーブ黒色 (10Y3/2) シルト～中粒砂 | 76. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質土 |
| 16. 暗黄灰色 (2.5Y4/3) ～オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細粒砂～極細粒砂 | 44. 灰色 (7.5Y4/1) シルト～細粒砂 | 77. 灰色 (7.5Y4/1) シルト～細粒砂 |
| 18. 置き土 | 45. 灰色 (7.5Y5/1) 細粒砂～極細粒砂 | 78. オリーブ灰色 (10Y4/2) ～オリーブ黒色 (10Y3/2) シルト |
| 19. 攪乱/改良剤入りの砂礫層 | 46. 灰色 (10Y4/1) 細粒砂 | 79. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) シルト～中粒砂 |
| 20. オリーブ黒色 (10Y3/1) 粗粒砂 | 47. 灰色 (10Y5/1) シルト | 80. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト～細粒砂 |
| 21. 灰色 (5Y4/1) 粗粒砂 | 48. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト | 81. 緑灰色 (7.5GY5/1) シルト～細粒砂 |
| 22. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粗粒砂～極粗粒砂 | 49. オリーブ灰色 (5GY5/1) シルト | 82. 緑灰色 (10GY5/1) 細粒砂 |
| 23. 灰色 (5Y6/1) 砂質土、中粒砂～粗粒砂 | 50. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト | 83. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト |
| 24. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト～細粒砂 | 51. 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) シルト～細粒砂 | 84. 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト |
| 25. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) シルト | 52. 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト | 85. 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト～細粒砂 |
| 26. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 細粒砂 | 53. 緑灰色 (7.5GY5/1) 細粒砂 | 86. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 細粒砂～極細粒砂 |
| 27. 暗緑灰色 (7.5GY3/1) 細粒砂～シルト (径3cm程度の円礫を僅かに含む) | 54. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト | 87. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト |
| 28. 灰色 (10Y4/1) 粗粒砂～極粗粒砂 | 55. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) シルト～中粒砂 | A. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂～極細粒砂 |
| | 56. 緑灰色 (10GY5/1) 細粒砂～シルト | B. にぶい黄褐色 (10YR4/3) ～暗褐色 (10YR3/3) シルト～細粒砂 |
| | 57. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト | C. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト |
| | 58. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 細粒砂～中粒砂 | |
| | 59. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) シルト | |
| | 60. 灰色 (10Y4/1) 砂粒砂 | |
| | 61. 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) シルト | |

0.1mである。遺物は須恵器や陶器片などが出土した(第105図440・441)。時期は中世前半であろう。

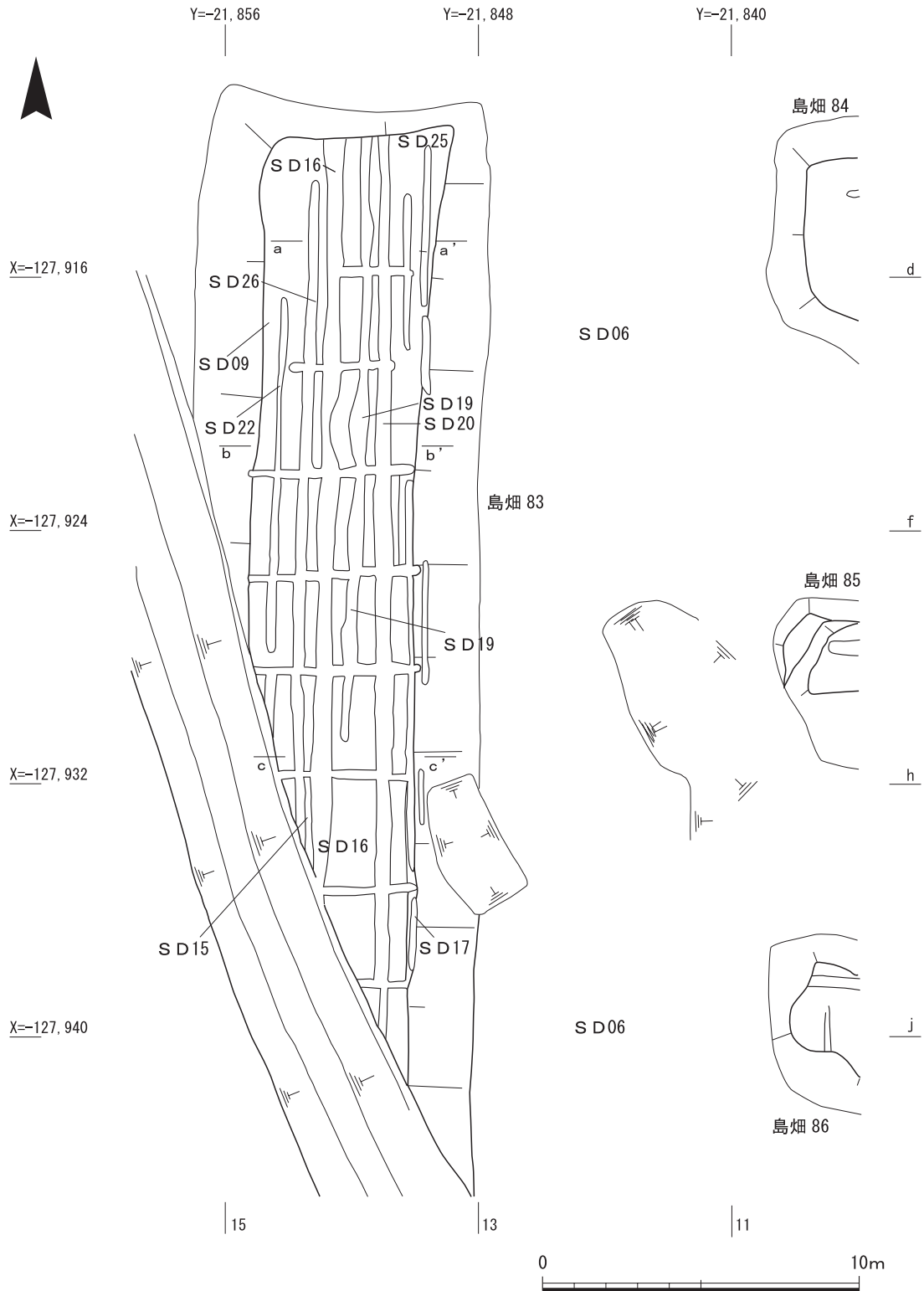
島畑85(S X09)(第99図) 調査区の東辺、中央部で検出した(I4-g8区ほか)。東西方向の島畑であるが、大半は調査区外にのびる。島畑の断面観察(第94図)によると、基盤層である黄褐色シルト(39層)の上部に暗緑灰色ないし緑灰色のシルト(83・84層)を置いて島畑を形成している。この上面から素掘り溝が掘られている(埋土は暗緑灰色シルト)。その上部には緑灰色やオリーブ灰色などの細粒砂もしくはシルトの層序(78～82層)が確認できる。これらは島畑の盛土と考えられる。さらにこの上部にオリーブ黒色粗砂(20層)や灰オリーブ色シルト～細粒砂(24層)などが島畑85のみならず、溝状遺構S D08や島畑86まで広がる。最初期の島畑の規模は、検出長10.7m、



- | | | |
|--|---|--|
| 1. 盛土及び改良剤の入った土 | 12. 灰色 (10Y5/1) 細粒砂～中粒砂 | 25. 灰オリーブ色 (5Y5/3) シルト |
| 2. 橙色 (7.5YR6/8) と黄灰色
(2.5Y6/1) 細粒砂～極細粒砂の瓦層 | 13. 灰色 (7.5Y4/1) 細粒砂～極細粒砂 | 26. 灰色 (10Y4/1) シルト |
| 3. 明黄褐色 (2.5Y6/6) と黄灰色
(2.5Y4/1) 中粒砂～粗粒砂の瓦層 | 14. 緑灰色 (7.5GY5/1) シルト | 27. 緑灰色 (10GY5/1) シルト |
| 4. 灰色 (5Y4/1) シルト～中粒砂 | 15. 青灰色 (5BG5/1) シルト | 28. 暗オリーブ灰色 (2.5Y4/1) 極細粒砂 |
| 5. 灰色 (5Y5/1) 極細粒砂 | 16. 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) シルト | 29. 灰褐色 (10YR5/1) シルト～細粒砂
(木葉や枝を含む) |
| 6. オリーブ黒色 (10Y3/1) 細粒砂 | 17. 緑灰色 (10GY5/1) シルト | 30. 灰色 (7.5Y5/1) シルト～極細粒砂 |
| 7. 灰色 (10Y5/1) ～オリーブ灰色
(10Y5/2) シルト | 18. 緑灰色 (10GY5/1) に明赤褐色
(5YR5/8) が粒状に多く混じる | 31. 灰色 (10Y4/1) シルトに灰色
(10Y6/1) の細粒砂が混じる
(木葉や枝などを含む) |
| 8. 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト | 19. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト | 32. 緑灰色 (10GY4/1) シルト～細粒砂 |
| 9. 緑灰色 (10GY5/1) に明赤褐色
(5YR5/8) が粒状に多く混じる | 20. 灰色 (5Y5/1) シルト～細粒砂 | 33. 灰色 (10Y7/1) 細粒砂～極細粒砂 |
| 10. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト | 21. 灰色 (10Y5/1) 細粒砂 | 34. 灰色 (10Y5/1) 細粒砂～極細粒砂 |
| 11. 暗オリーブ色 (5Y4/3) 細粒砂～
極細粒砂 | 22. 灰色 (7.5Y6/1) シルト～細粒砂 | |
| | 23. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 腐植土
(木や葉などを含む) | |
| | 24. 灰色 (5Y5/1) ～灰オリーブ色
(5Y5/2) シルト | |

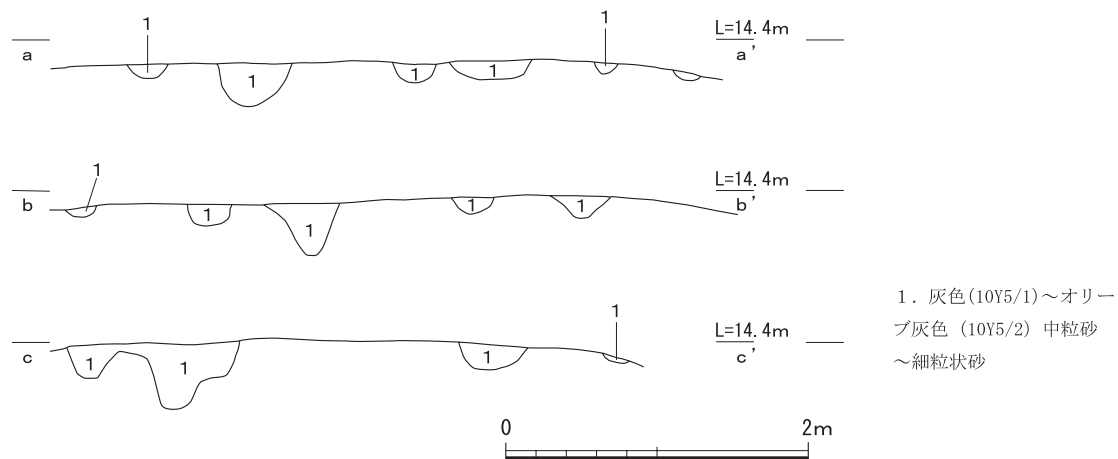
第95図 D3区北壁土層断面図(1/100)

基部幅5.4m、上面幅2.0~3.1m、高さ0.7mである。島畑上面の標高はおよそ14.3mである。島畑に伴う素掘り溝を1条検出した。素掘り溝は検出長8.4m、幅0.4m前後、深さ0.1~0.2mである。遺物は土器片が少量出土したのみである。詳細な時期は不明であるが、周辺の調査成果から中世前半と推定される。

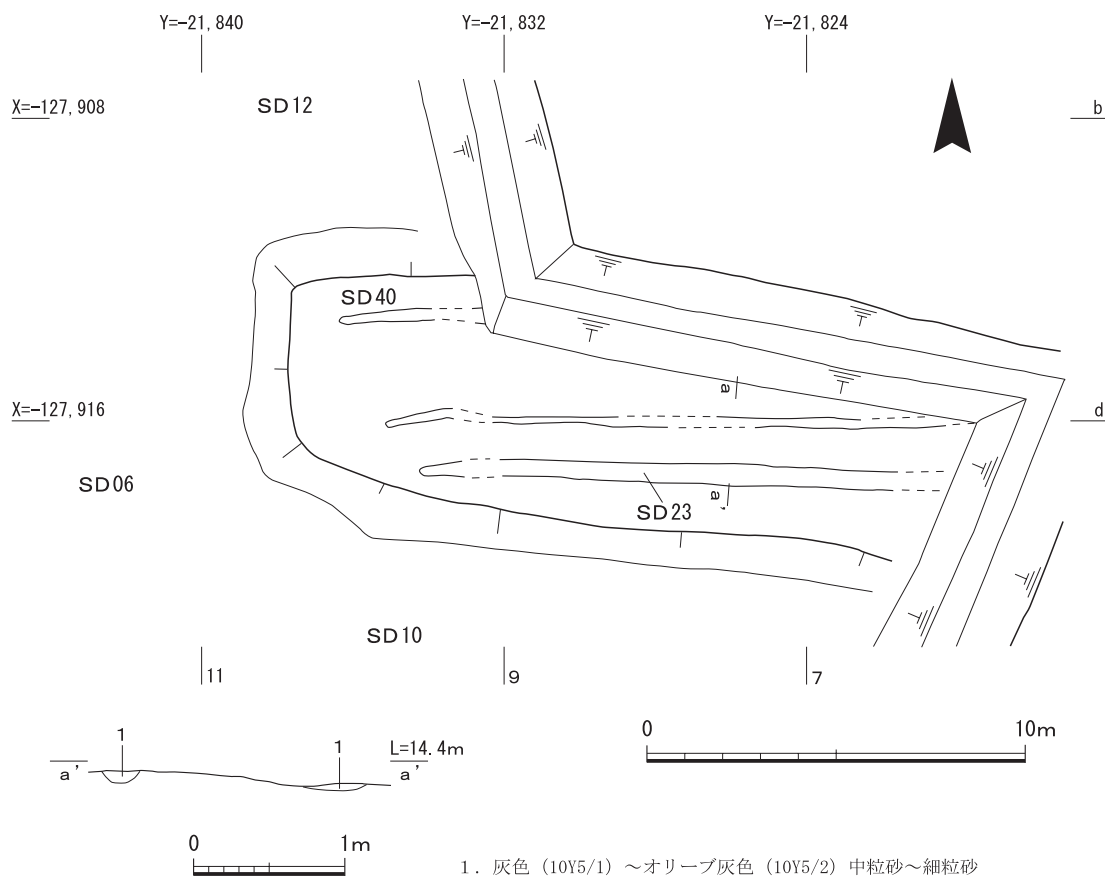


第96図 D3区島畑83平面図(1/200)

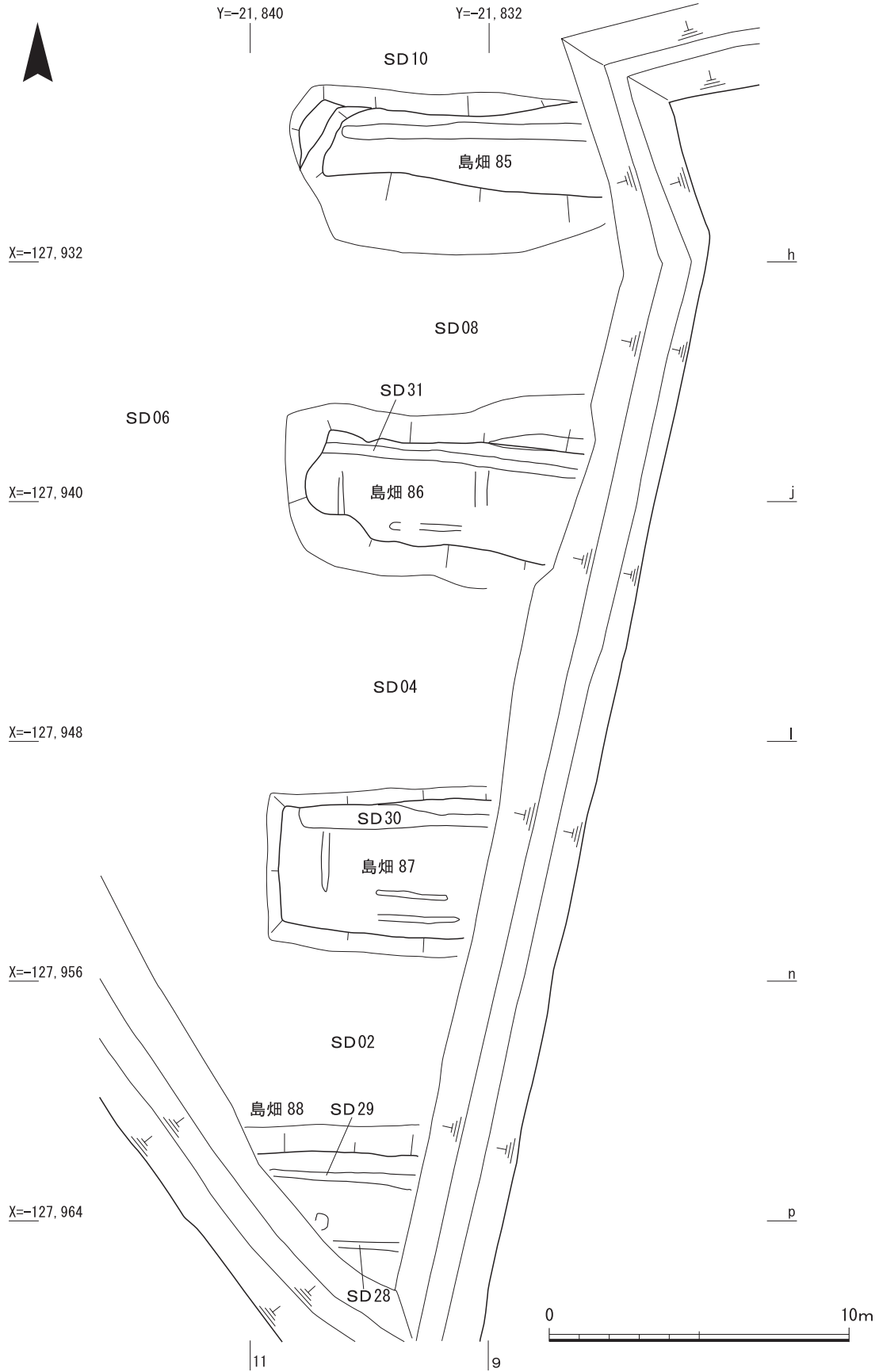
鳥畑86(S X05) (第99図) 調査区の東辺、中央部で検出した(I4-j8区ほか)。東西方向の鳥畑であるが、大半は調査区外にのびる。鳥畑の断面観察(第94図)によると、基盤層である黄褐色シルト(39層)の上部に黄灰色シルト(36層)を置いて鳥畑を形成している。この上面から素掘り溝が掘られている(埋土は暗緑灰色シルト)。その上部には灰色や暗オリーブ灰色、暗緑灰色などの細粒砂もしくはシルトの層序(27・32・33層)が確認できる。これらは鳥畑の盛土と考えられる。さ



第97図 D3区鳥畑83検出素掘り溝土層断面図(1/50)



第98図 D3区鳥畑84平面図(1/200)・素掘り溝土層断面図(1/50)



第99図 D 3 区島畑85～88平面図(1/200)

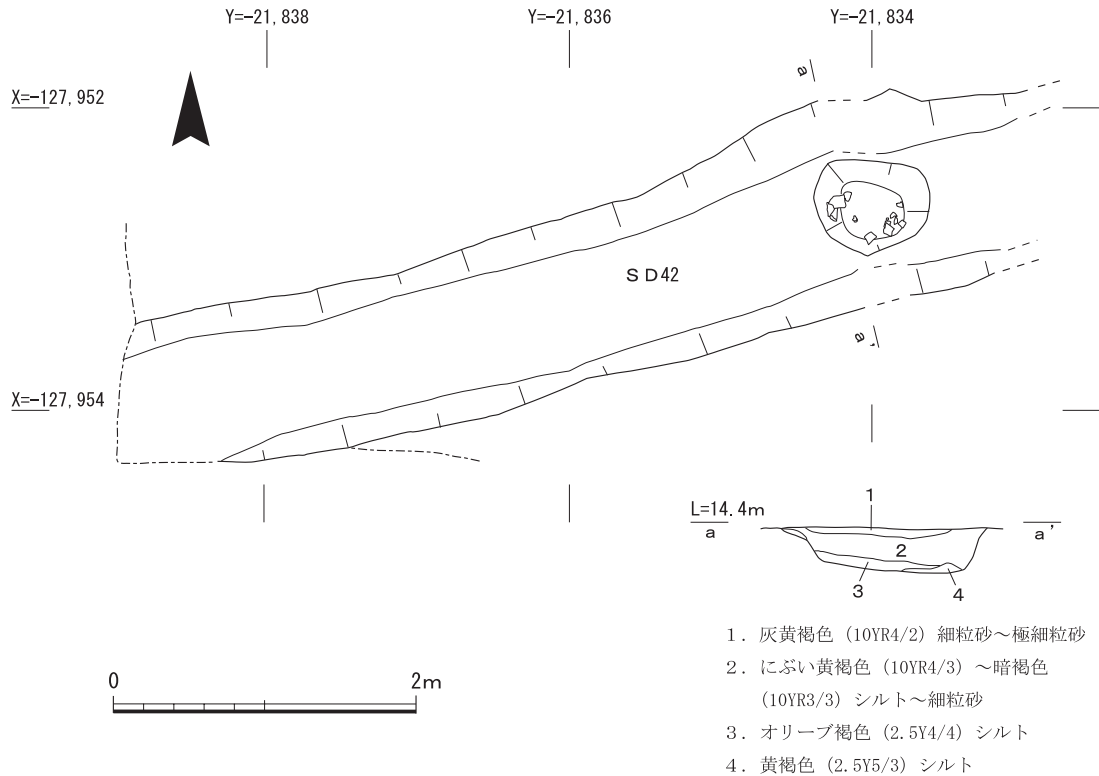
らにこの上部に灰オリーブ色シルト～細粒砂(24層)などが島畑86だけでなく、両側の溝状遺構 S D04・08や島畑85まで広がる。検出長10.0m、基部幅5.4～6.3m、上面幅3.5～3.9m、高さ0.6～0.7mである。島畑上面の標高はおよそ14.3mである。島畑に伴う素掘り溝を4条検出した。素掘り溝は検出長1.2～8.7m、幅0.2～0.4m、深さ0.05～0.2mである。遺物は少量の土器片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺の島畑と同じく中世前半と推定される。

島畑87(S X03)(第99図) 調査区の東辺、南半部で検出した(I 4-m9区ほか)東西方向の島畑であるが、大半は調査区外にのびる。島畑の断面観察(第94図)によると、基盤層である黄褐色シルト(39層)の上部に黄灰色シルト(36層)を置いて島畑を形成している。この上面から素掘り溝が掘られている(埋土は暗緑灰色シルト)。その上部には灰オリーブ色や暗オリーブ灰色、灰色などのシルトもしくは細粒砂の層序(32・33・53・54層)が確認できる。これらは島畑の盛土と考えられる。さらにこの上部に暗緑灰色細粒砂(16層)やオリーブ色粗粒砂(15層)などが島畑87のほか、両側の溝状遺構 S D02・04まで広がる。検出長7.7m、基部幅5.6m、上面幅4.6m、高さ0.6mである。島畑上面の標高はおよそ14.3mである。島畑に伴う素掘り溝を4条検出した。素掘り溝は検出長2.3～6.6m、幅0.1～0.6m、深さ0.05～0.15mである。遺物は少量の土器片などが出土したのみである。詳細な時期は不明であるが、周辺の島畑と同じく中世前半と推定される。

島畑88(S X01)(第99図) 調査区の南端で検出した(I4-p9区ほか)。東西方向の島畑であるが、北辺の一部を検出したのみで、南・東・西の3方向の端部はいずれも確認していない。島畑の断面観察(第94図)によると、島畑86・87と同じく、基盤層である黄褐色シルト(39層)の上部に黄灰色シルト(36層)を置いて島畑を形成している。この上面から素掘り溝が掘られている(埋土は暗緑灰色シルト)。その上部には灰色や暗オリーブ灰色などのシルトの層序(32・33・35層)が確認できる。検出長5.7m、基部検出幅5.5m、上面検出幅4.5m、高さ0.6mである。島畑上面の標高はおよそ14.4mである。島畑に伴う素掘り溝を2条検出した。素掘り溝は検出長2.6～5.0m、幅0.25～0.45m、深さ0.1mである。遺物は少量の土器片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺の島畑と同じく中世前半と推定される。

溝状遺構 S D06(第96図) 調査区の中央部で検出した(I4-c10区ほか)。南北方向に延びる。溝状遺構の土層断面によると、基盤層である黄褐色シルト(39層)を整形して形成している。検出長50.7m、幅12.4m、深さ0.6mである。溝底の標高はおよそ13.7mである。この溝状遺構を境に島畑の配置が変わっており、条里地割りの境界に該当すると考えられる。遺物は青白磁や青磁、瓦器、須恵器、平瓦などが出土した(第105図442～450)。時期は中世前半である。

溝状遺構 S D02(第99図) 調査区の東半部、南端付近で検出した(I4-o9区ほか)。東西方向に延びる。溝状遺構の土層断面によると、基盤層である黄褐色シルト(39層)の上部に暗緑灰色や灰色、暗オリーブ灰色などのシルトないし細粒砂(43・44・48～46・50層など)が堆積している。その上部には暗黄灰色やオリーブ色などの中粒砂もしくは粗粒砂などの層序(14～16層など)が確認できる。これらは溝状遺構だけでなく島畑の上部にも広がっており、これらが堆積した時期には島畑を利用した耕作は停止していたと考えられる。検出長6.7m、幅7.4m、深さ0.8mである。



第100図 D3区SD42実測図(1/50)

溝底の標高はおよそ13.6mである。遺物は少量の土器片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺の島畑と同じく中世前半と推定される。

溝状遺構SD04(第99図) 調査区の東半部、南寄りで検出した(I4-k8区ほか)。東西方向に延びる。溝状遺構の土層断面によると、堆積状況は上記のSD02に類似しており、基盤層である黄褐色シルト(39層)の上部に暗オリーブ灰色ないしオリーブ灰色のシルトをはじめ、SD02の上部にみられた各層が堆積している。その上部には上述の15・16層のほか、オリーブ色シルト(24層)等の層序が確認できる。これらはSD04のほか、島畑の上部にも広がっており、島畑を利用した耕作は停止していたと考えられる。検出長8.2m、幅8.3m前後、深さ0.7mである。溝底の標高はおよそ13.6mである。遺物は少量の土器片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺の島畑と同じく中世前半と推定される。

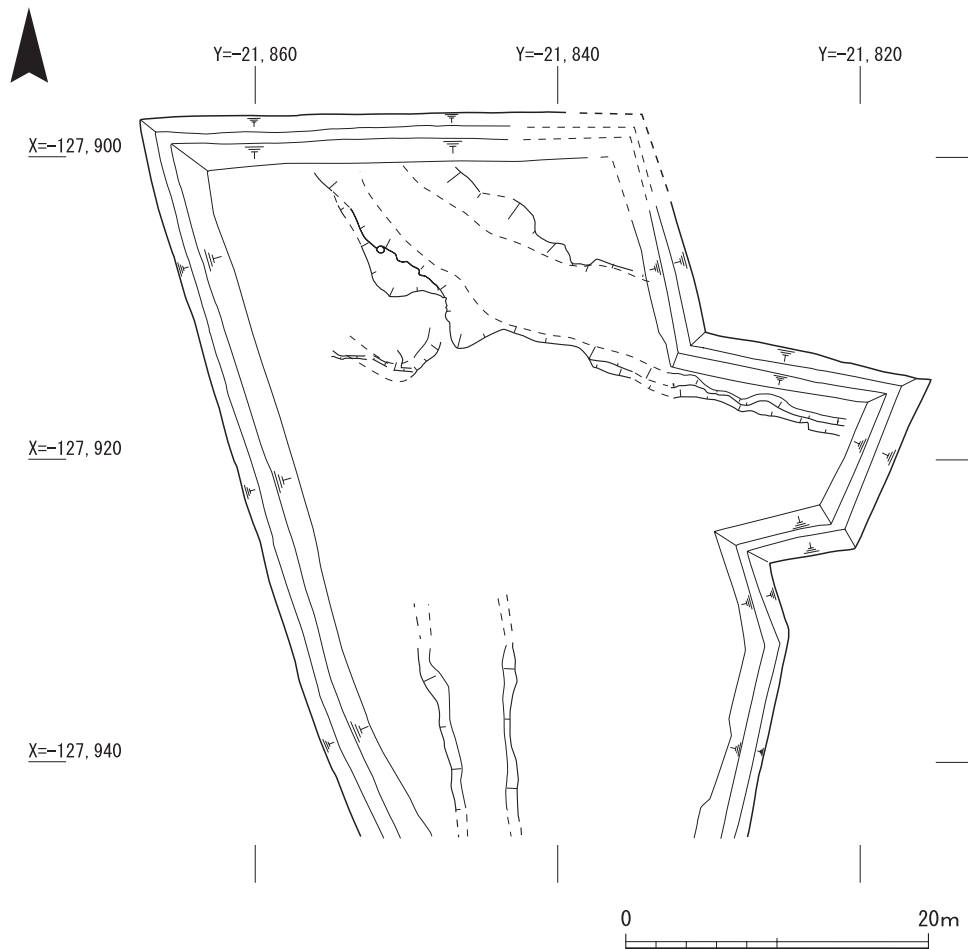
溝状遺構SD08(第99図) 調査区の東半部、ほぼ中央付近で検出した(I4-h8区ほか)。東西方向に延びる。溝状遺構の土層断面(第94図)によると、基盤層である黄褐色シルト(39層)の上部に暗オリーブ灰色や黒緑灰色のシルト(72～74層)が堆積している。その上部にはオリーブ黒色細粒砂～中粒砂(71層)が堆積している。これらの上部には厚さ10cm程度の灰色細粒砂など46・48層などが堆積している。この上部にオリーブ黒色粗砂(20層)や灰オリーブ色シルト～細粒砂(24層)などが堆積する。検出長11.0m、幅8.2m前後、深さ0.6mである。溝底の標高はおよそ13.7mである。遺物は少量の土器片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺の島畑と同じく中世前半と推定される。

溝状遺構SD10(第98・99図) 調査区の東半部中央、やや北寄りで検出した(I4-f6区ほか)。

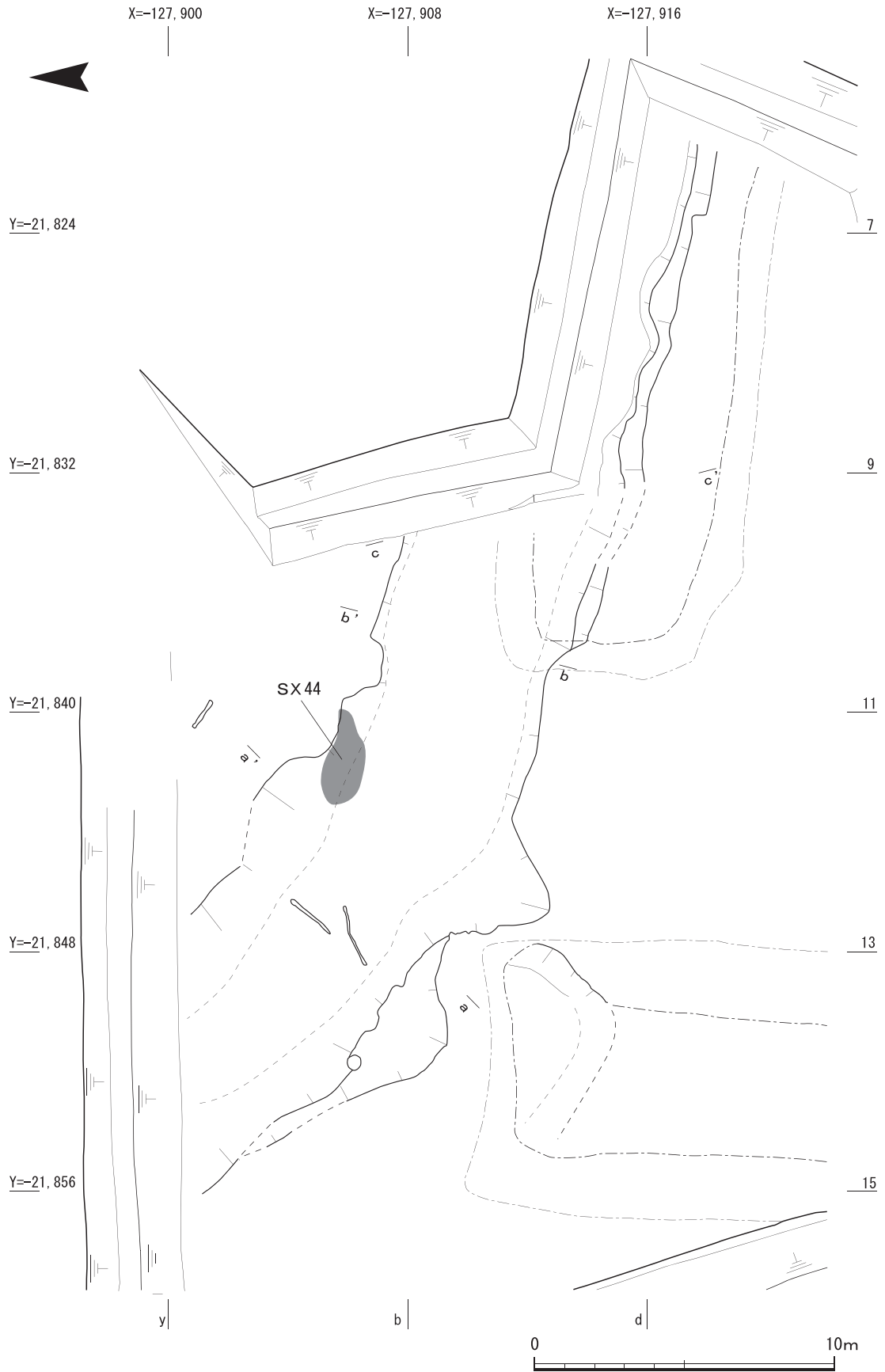
東西方向に延びる。溝状遺構の土層断面(第94図)によると、基盤層である黄褐色シルト(39層)の上部に暗緑灰色ないし暗オリーブ灰色のシルトまたは細粒砂(83・85・86層)などが堆積している。その上部には緑灰色細粒砂もしくはシルトの層序(81・82層)が確認できる。これらは島畑の盛土と同じであるため、島畑を拡張した可能性もある。さらにこの上部にオリーブ黒色粗砂(20層)や灰オリーブ色シルト～細粒砂(24層)などが広く堆積する。検出長16.9m、幅8.7m前後、深さ0.5～0.6mである。溝底の標高はおよそ13.7mである。遺物は少量の土器片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺の島畑と同じく中世前半と推定される。

溝状遺構 S D 12 (第93図) 調査区の北辺に沿って検出した(I4-a10区ほか)。東西方向に延びる。溝状遺構の土層断面(第95図)によると、基盤層である緑灰色ないし暗オリーブ灰色シルト(816層)の上部にオリーブ黒色細粒砂(6層)や灰色極細粒砂(5層)が堆積している。この上部に灰色シルト～中粒砂(4層)が堆積するが、これは第94図の灰オリーブ色シルト～細粒砂(24層)に対応すると考えられる。検出長28.0m、検出幅10.6m、深さ0.5mである。溝底の標高はおよそ13.6mである。遺物は瓦器や土師器、須恵器などが出土した(第105図451～455)。時期は中世前半である。

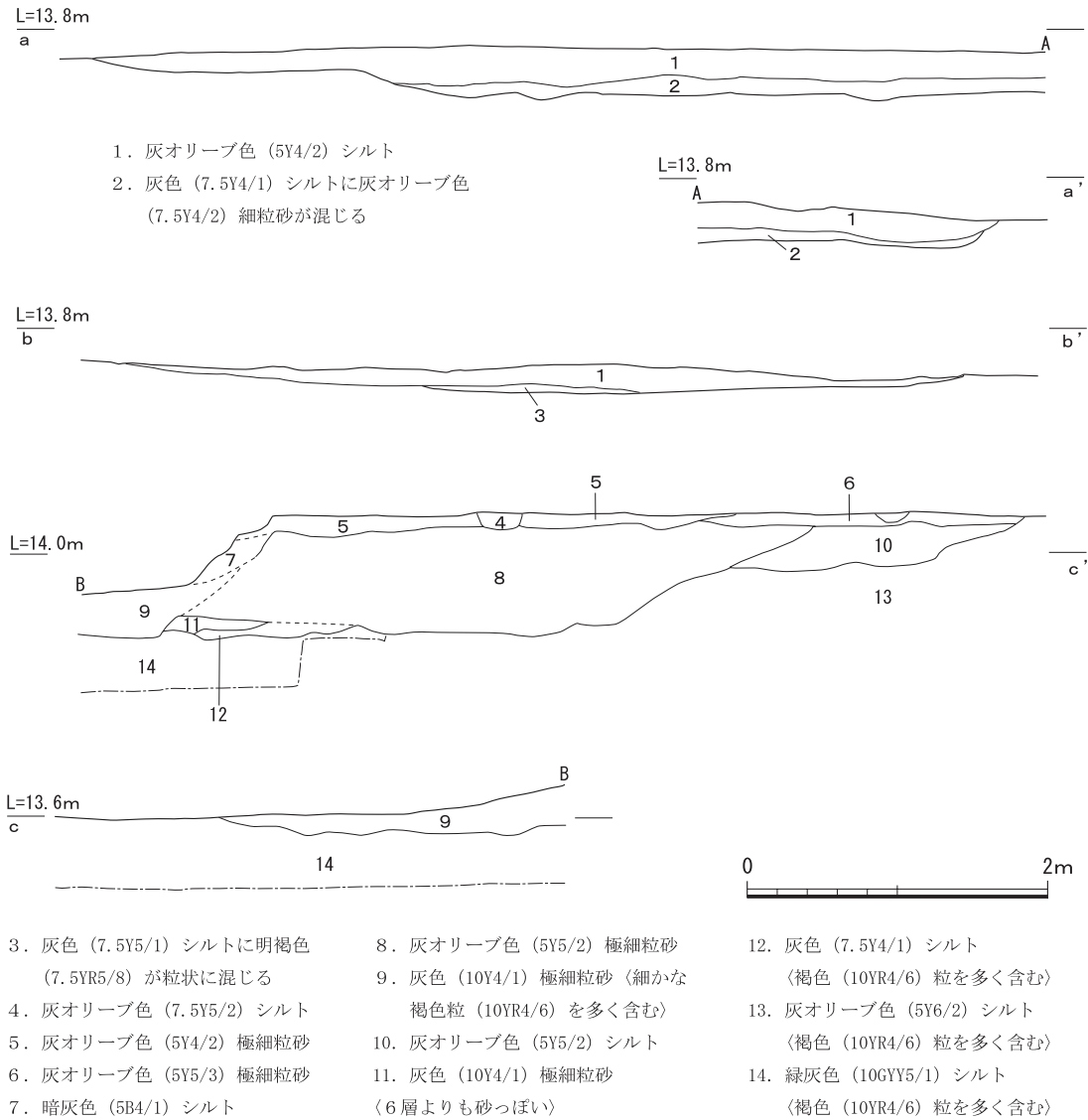
不明遺構 S X 44 (第102図) 溝状遺構 S D 12の最下層、後述する溝 S D 40の上面で検出した



第101図 D3区下層遺構配置図(1/500)



第102図 D3区溝S D40平面図(1/200)



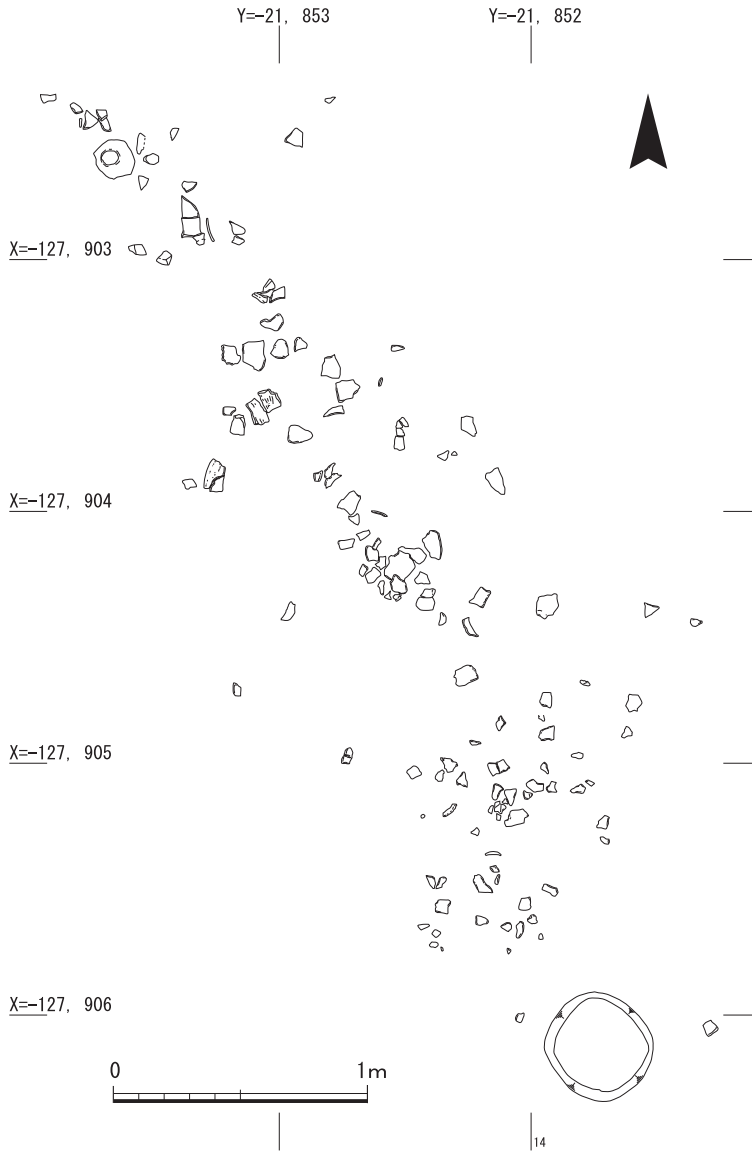
第103図 D3区溝SD40土層断面図(1/50)

(I 4 b11区ほか)。長径10~20cm、短径8~15cmほどの亜角礫ないし亜円礫40個以上が、南北1.5m、東西2mほどの範囲に集中していた。遺構の性格は不明であるが、これ以外に礫が集中している範囲は認められなかった。礫の周囲からは瓦器碗や須恵器甕などが出土した(第105図456・457)。時期はSD12が機能していた中世のものと推定される。

②下層遺構

溝SD42(第100図) 島畑87の上面で、島畑に対してわずかに斜行する溝を検出した(I 4 n9・n10区)。検出長6.2m、幅1.2m、深さ0.35mである。東に対して16°北に振る。溝の断面形は逆台形状を呈する。埋土は大きく3層に分かれ、灰黄褐色細粒砂~極細粒砂、にぶい黄褐色ないし暗褐色シルト~細粒砂、オリーブ褐色シルトである。溝底で浅い土坑を検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.1mである。埋土は灰オリーブ色シルトである。土坑内から土師器甕が出土した。時期は古代と推定されるが詳細な時期は不明ある。

溝SD40(第102~104図) 調査区の北半部で検出した(I4-a12区ほか)。島畑の造成によって



第104図 D 3区溝S D 40遺物出土状況図(1/30)

大きく削平されているが、調査地の東辺から北辺に向かって緩やかに弧状を描く。東部は島畑84と重複する。溝底の標高は、東辺付近が13.5m、北辺付近が13.0mと、東部の方が高く、北西に向かって低くなる。検出長約40m、幅7.5m前後、深さ0.3~1.0mを測る。S D 40の北端部の西肩付近でややまとまって土器が出土した(第104図)。後期の弥生土器や庄内式の土師器などが出土した。これらの遺物からS D 40は古墳時代前期でもやや古い段階の溝と考えられる。なお、古墳時代の遺構あるいは遺物はS D 40以外に検出しなかった。

(山崎美輪・筒井崇史)

(3) 出土遺物

島畑83 (第105図431~439)

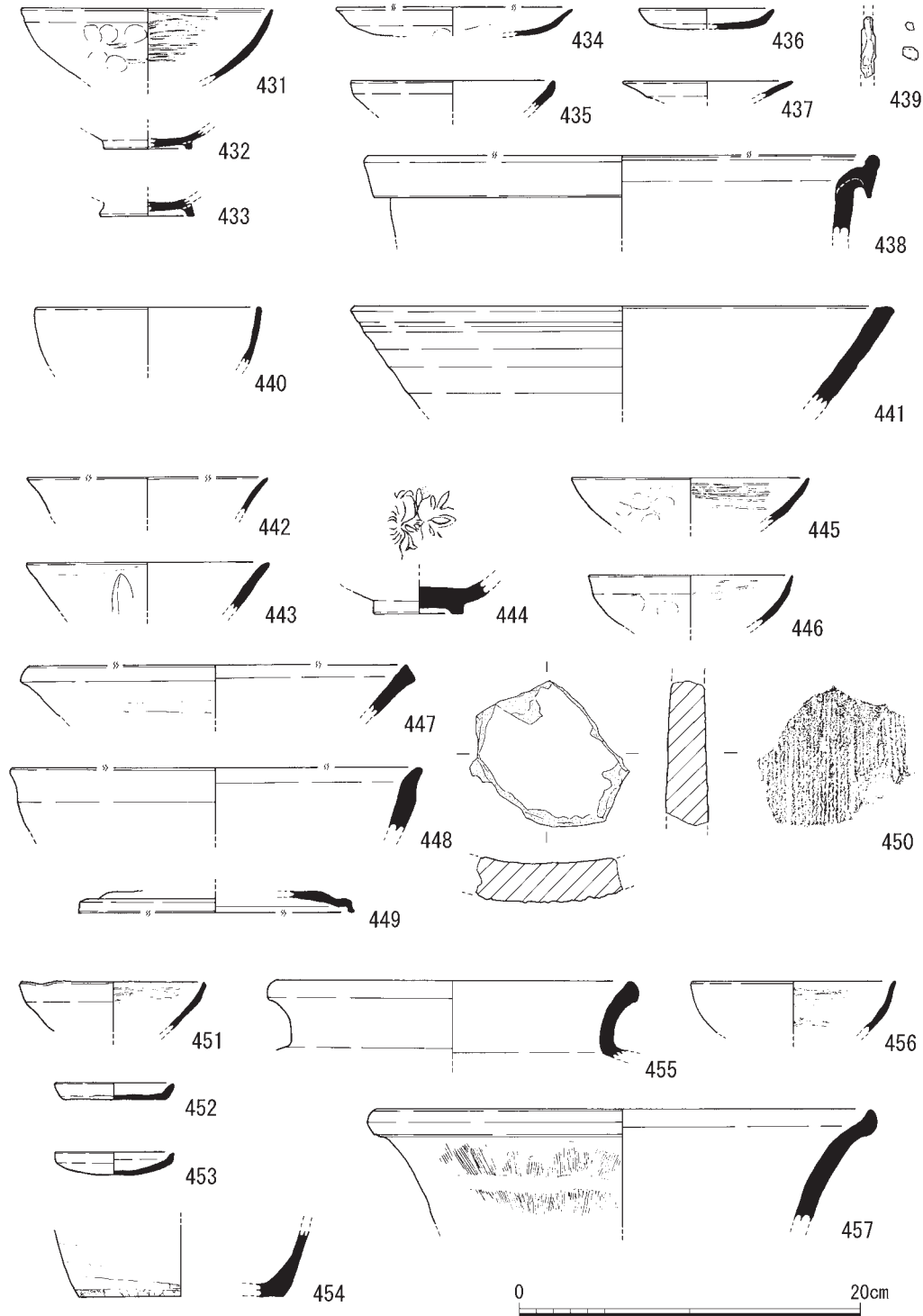
431~433は瓦器碗である。

431は口縁端部は丸く納め、内面に密にミガキを施す。432・433は底部であるが、どちらも高台の断面形が方形を呈する。434~437は土師器皿である。434は小破片であるが、口縁部にヨコナデを施してわずかに外反する。口径がやや大きく復元できることから古代の遺物の可能性がある。435は口縁部のみの破片である。やや厚手のもので、口縁端部もほぼ真上に延びる。口縁部にヨコナデを施し、端部を丸く仕上げる。438は信楽焼の甕の口縁部である。ほぼ直に立ち上がる頸部に大きく外反して上下に拡張した口縁部が付く。口縁端部は丸く仕上げる。439は鉄製品である、断面が方形であることから鉄釘と考えられる。

島畑84 (第105図440・441) 440は陶器碗である。口縁端部は面をなし、断面形が方形に近い。441は須恵器鉢である。口縁部は斜め上方にまっすぐ延びる。口縁端部はほぼ水平な面となる。

溝状遺構 S D 06 (第105図442~450) 442は青磁碗の口縁部の小破片である。非常に薄いつくりで、口縁部がわずかに外反する。明緑灰色を呈する。443・444は青磁碗である。443は口縁部

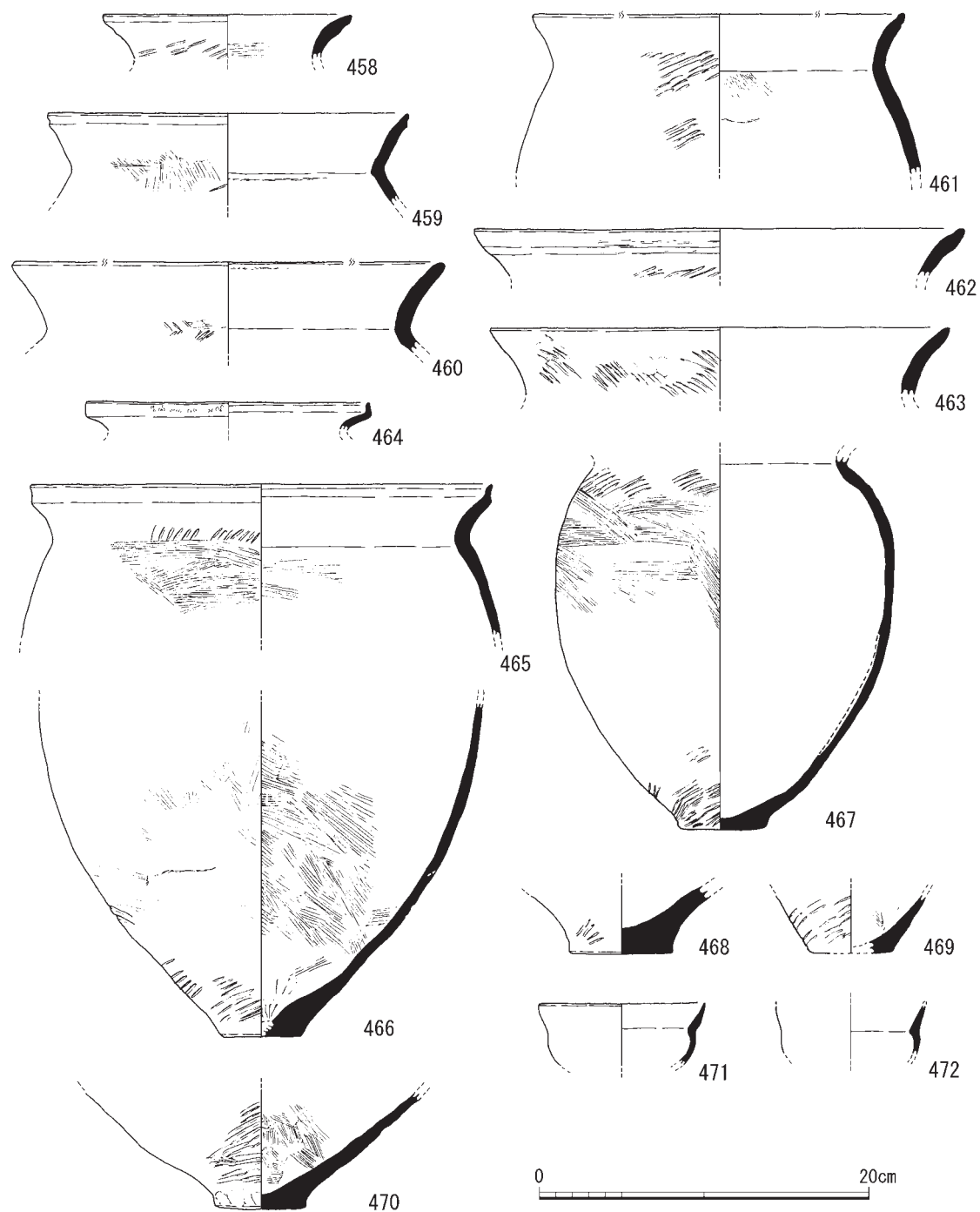
の破片で、外面に鎬を有する蓮弁文が確認できる。444は底部で、見込みに花文様が認められる。底部は削り出し高台である。445・446は瓦器碗である。ともに口縁部の破片で、端部を丸く納める。447は須恵器鉢の口縁部である。口縁端部は外下方に向かって面をなし口縁部外面側がわずかに肥厚する。448は土師器鉢の口縁部であろう。口縁端部の外面朝刊に強いヨコナデを施して、口縁端部をわずかに外反させる。449は須恵器杯B蓋である。全体に扁平な器形を呈し、口縁部



第105図 D3区出土遺物実測図1 (1/4)

が屈曲するタイプである。奈良時代のものである。450は平瓦の破片である。四周を欠損するため、大きさ等は不明である。凹面に布目痕跡、凸面に縄目タタキ痕が認められる。

溝状遺構SD12(第105図451~455) 451は瓦器碗である。口縁端部を丸く納める。452・453は土師器皿である。452は平底に斜め上方に直に立ち上がる短い口縁部を有する。453はやや丸底気味の底部にはほぼ上方に立ち上がる短い口縁部を有する。454は陶器鉢の底部の破片である。455は須恵器甕である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部の外面が肥厚するものである。古代のも



第106図 D3区出土遺物実測図2(1/4)

のであろう。

不明遺構 S X 44 (第105図456・457) 456は瓦器椀である。口縁端部を丸く納める。内面には粗いミガキを施す。457は須恵器甕の口縁部である。上述の455と同様に、口縁部は緩やかに外反し、口縁端部の外面が肥厚するものである。ただ、455よりも口縁端部をつまみ上げ気味である。455と同じく古代のものであろう。

溝 S D 40 (第106図458～472) 458～470は弥生土器、471・472は古式土師器に分類できるが、異なる時期のものではなく、同一時期に収まる可能性が高い。458～463は単純く字状を呈する甕である。459・460は頸部が明瞭なく字状を呈するが、他の個体は461のように緩やかに字状を呈すると考えられる。いずれも頸部の上までタタキ調整が認められることから、口縁部付近までタタキを施した後に頸部の形成を行っていると考えられる。459や461では口縁端部の内外面に強いヨコナデを施して凹線状のものを形成している。また、460はやや均一な器厚であるが、458・462・463は口縁部形成時のヨコナデにより器厚が一定しない。464・465は口縁部が受け口状を呈する甕である。464は口縁部外面に刺突文を施す。口縁端部が内傾しながら丸く納める。口径から中型の甕であろうか。これに対して465は大型の甕で、461と同様、緩やかに外反する口縁部が受け口状を呈している。受け口状口縁部の立ち上がりはヨコナデを施してわずかに外反させる。体部内面は摩滅が著しく、調整は不明瞭であるが、ハケと推定される。466・467は甕の体部から底部かけての資料である。466は大型の、467は中型の甕と推定される。どちらも外面にタタキを施したのち、ハケを施す。内面は466がハケであるが、467は摩滅のため不明である。ただ、467も内面調整はハケと推定される。468・469は甕の底部の資料である。466・467と同じく外面にタタキ、内面にハケを施す。以上の資料は全体の形状は明らかでないものの、大半の資料はタタキののちにハケを施すもので、いずれも弥生時代後期の土器の特徴が強く認められる。

470は壺の底部と思われる。体部が底部から大きく開く形状を呈することから壺と判断した。調整は上述の甕とほぼ同じであるが、底部外面にユビオサエによる調整が認められる。底部外面にもタタキの痕跡が残っている。

471・472は小型丸底土器である。471は口縁部から体部中位にかけての破片である。内外面とも摩滅等により不明瞭である。472もほぼ同様の器形を呈していると思われ、調整も摩滅等により不明である。

(筒井崇史)

6. 下水主遺跡第9次調査

1) はじめに

本節では、平成27年度に調査を実施した下水主遺跡第9次調査の成果について報告する。第9次調査は、これまで調査に着手できていなかった地点について調査を実施し、城陽JCT・ICにおける下水主遺跡の最終調査となった。調査の結果、中世に形成された島畑を9基検出した。また、弥生時代終末期の溝や、縄文土器などの遺物を検出した。

2) H地区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

H地区は南北長約96m、北辺約20m、南辺約40mの台形状を呈する調査区である。北側に下水主遺跡第4次調査のG地区が、東側には下水主遺跡第2次調査のC地区が、南側には水主神社東遺跡第5次調査のC地区が位置する。調査前には工事に伴う盛土が厚く認められた。工事前の現地表面の標高はおよそ15.6mである。現地表下約1mで、中世の島畑7基や溝状遺構6条などを検出した(第107図)。また、島畑を0.3~0.5mほど下げると古墳時代の溝1条を検出したほか、縄文土器などが出土した(第114図)。調査面積は2,670㎡である。出土遺物は整理箱で20箱である。

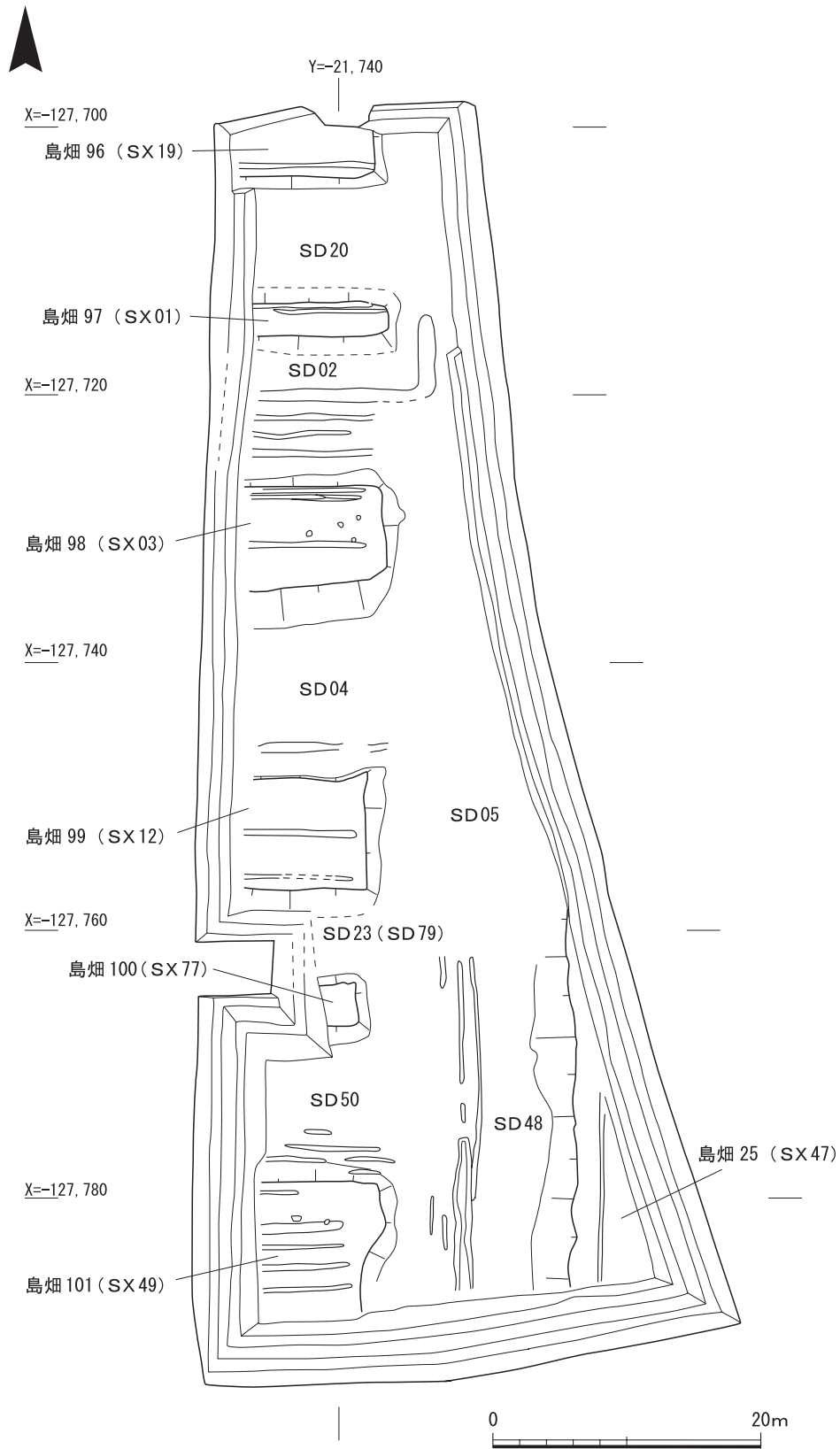
基本的な層序を南壁土層断面(第108図)で説明すると、工事用の盛土等を除去し、表土ないし床土と判断される黄灰色シルト(3層)や灰褐色極細粒砂(4層)などが堆積する。これらを除去すると、最上層の島畑と溝状遺構を確認した。島畑部分では、灰黄色や灰白色、オリーブ灰色、青灰色などの細粒砂もしくはシルト(11~14・17~21・40~44層など)を主体に繰り返し盛土が行われていたことを確認した。一方、溝状遺構の部分では明オリーブ灰色や明緑灰色、黄灰色などのシルトを主体とし、まれに中粒砂などを挟んだ堆積状況を確認した(23~27層)。これらの基盤層として明緑灰色極細粒砂~シルト(16層)を確認した。16層にはにぶい橙色シルトが混じる。

(2) 検出遺構

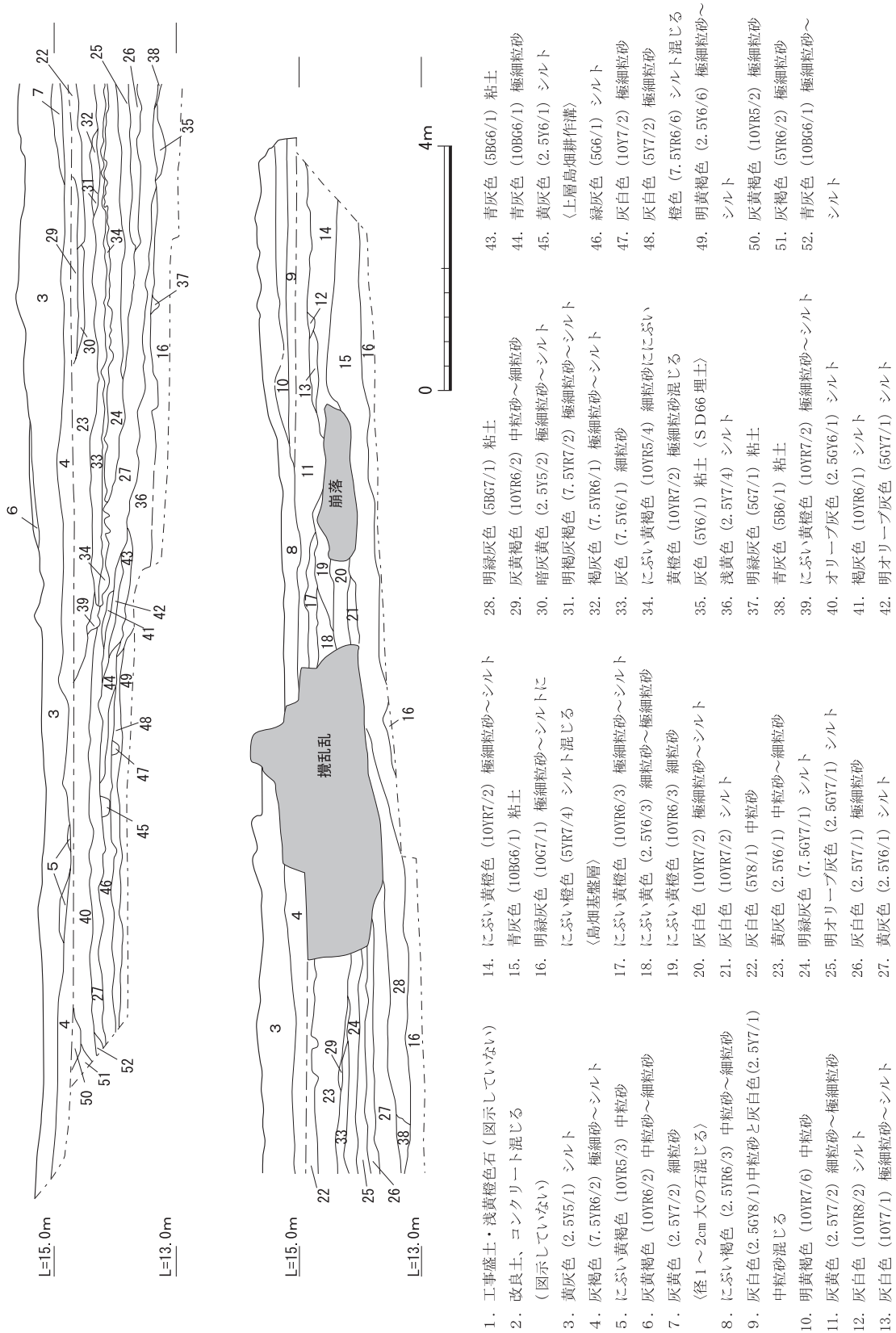
① 上層遺構

島畑96(S X 19)(第109図) 調査区の北端で検出した(G 3-a10区ほか)。東西方向の島畑の東半部を検出した。島畑は基盤層である灰オリーブ色極細粒砂などを整形して島畑を形成している。検出長11.2m、基部検出幅5.6m、上面検出幅4.8m、高さ0.6mである。島畑上面の標高はおよそ13.9mである。島畑の上面では1条の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長10.3m、幅0.25~0.5m、深さ0.05mである。遺物は少量の土器片が出土したが出土した。詳細な時期は不明であるが、中世前半と推定される。

島畑97(S X 01)(第109図) 調査区の北半部で検出した(G 3-d10区ほか)。東西方向の島畑の東半部を検出した。島畑は基盤層である灰オリーブ色極細粒砂などを整形して島畑を形成している。検出長11.2m、基部検出幅5.6m、上面検出幅4.8m、高さ0.6mである。島畑上面の標高はおよそ13.9mである。島畑の上面では1条の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長8.3~8.9m、幅0.2~0.35m、深さ0.05~0.15mである。遺物は少量の土器片が出土したものの、詳細な時期は不



第107図 H地区上層遺構配置図(1/500)

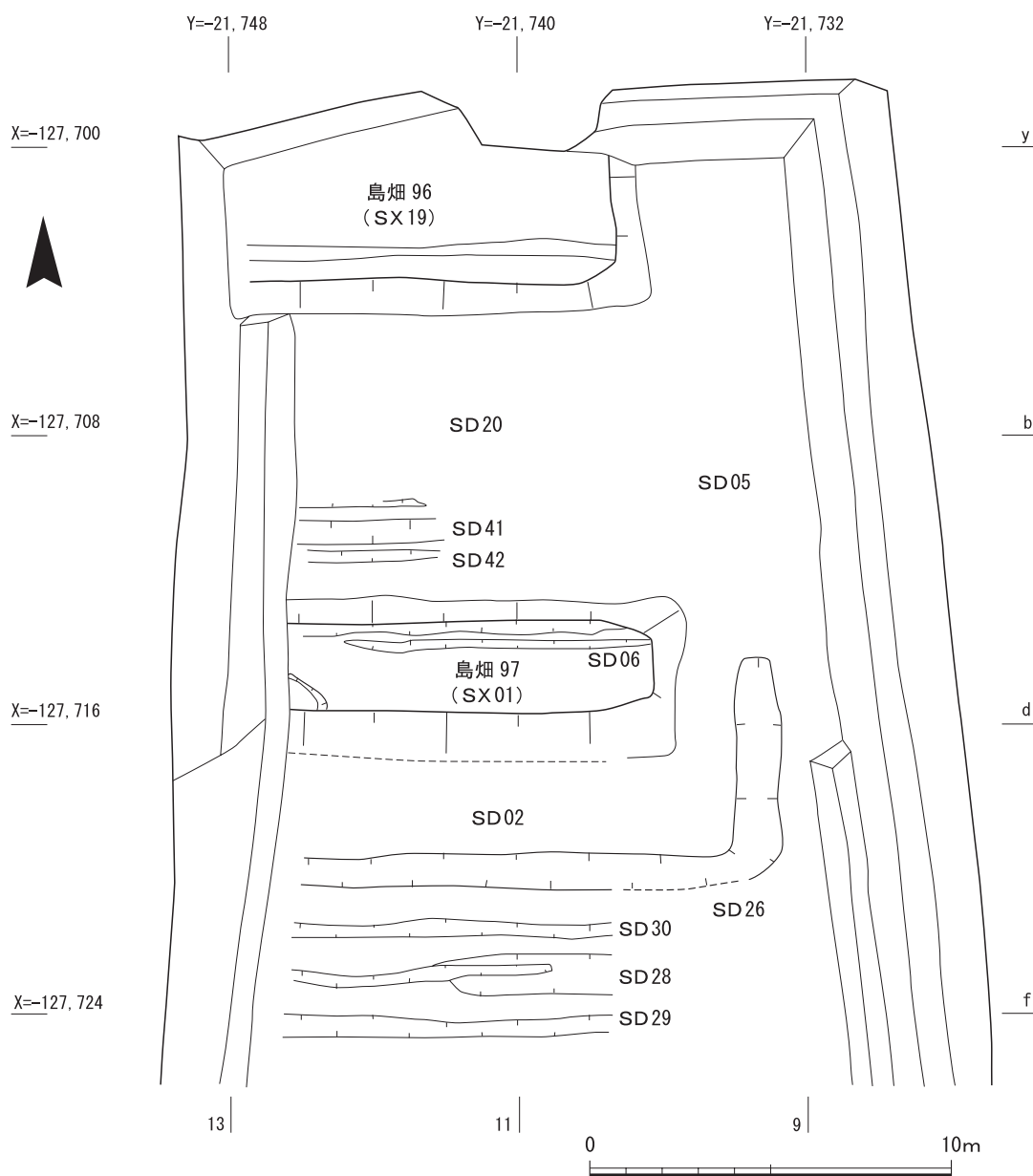


第108図 H地区南壁土層断面図(1/100)

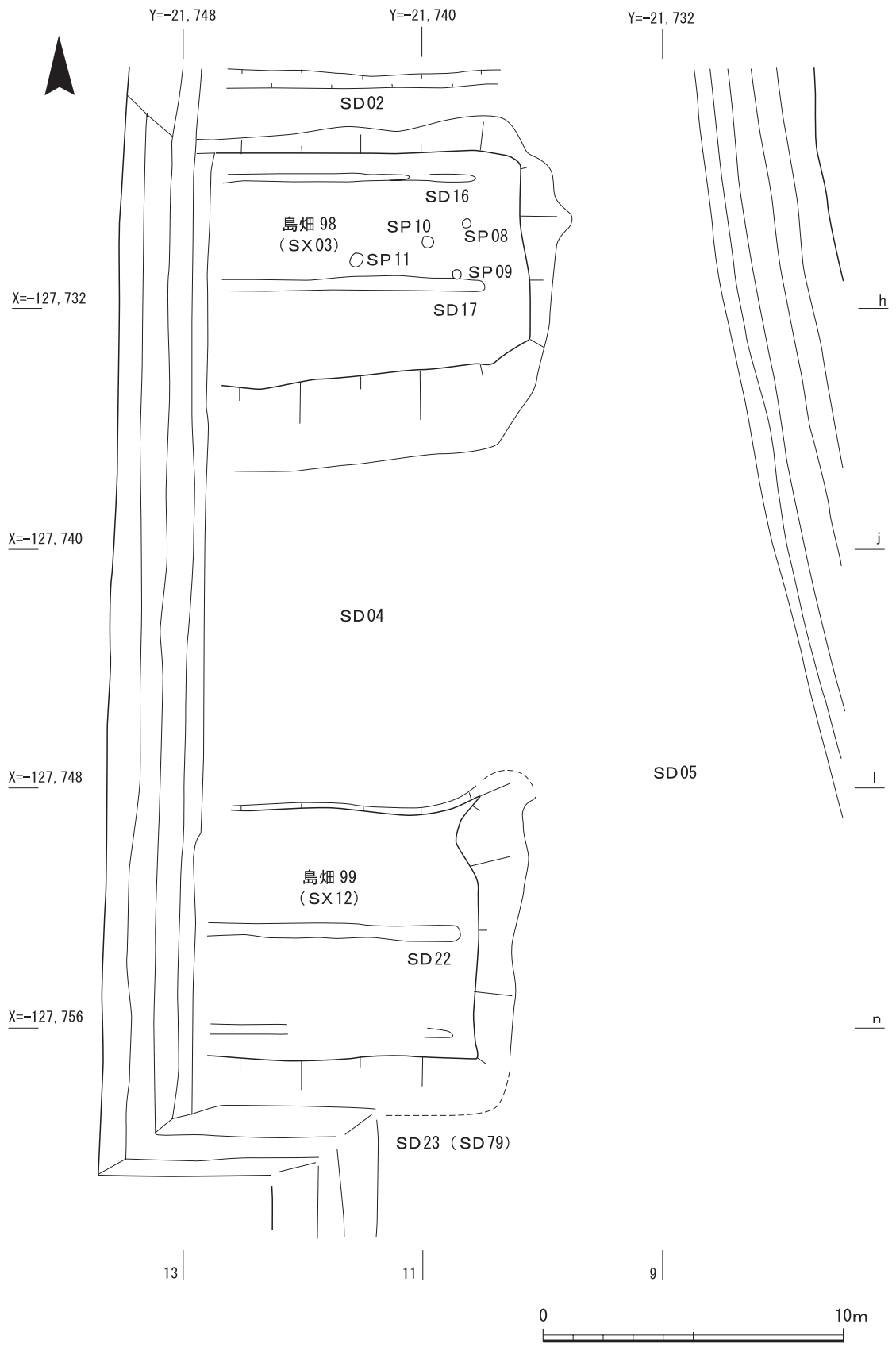
明である。周辺の調査成果と同じく中世前半と推定される。

島畑98 (S X03) (第110図) 調査区の北半部で検出した(G3-g10区ほか)。東西方向の島畑の東半部を検出した。島畑は基盤層である暗オリーブ色極細粒砂などを整形して島畑を形成している。検出長12.1m、基部幅10.8m、上面幅7.5m、高さ0.6mである。島畑上面の標高はおよそ14.1mである。島畑の上面では5条の素掘り溝を検出し、このうち3条は重複していた。素掘り溝は検出長7.9~8.5m、幅0.25~0.45m、深さ0.1m前後である。また、直径40cm前後、深さ20cm前後の柱穴を4基検出した。ただし、これらを建物や柵として復元することはできなかった。遺物は少量の土師器や瓦質土器の破片などが出土した(第124図473~475)。時期は中世前半であろう。

島畑99 (S X12) (第110図) 調査区の西半部中央で検出した(G3-m10区ほか)。東西方向の島畑の東半部を検出した。島畑は基盤層であるオリーブ灰色シルトないし極細粒砂を整形して島



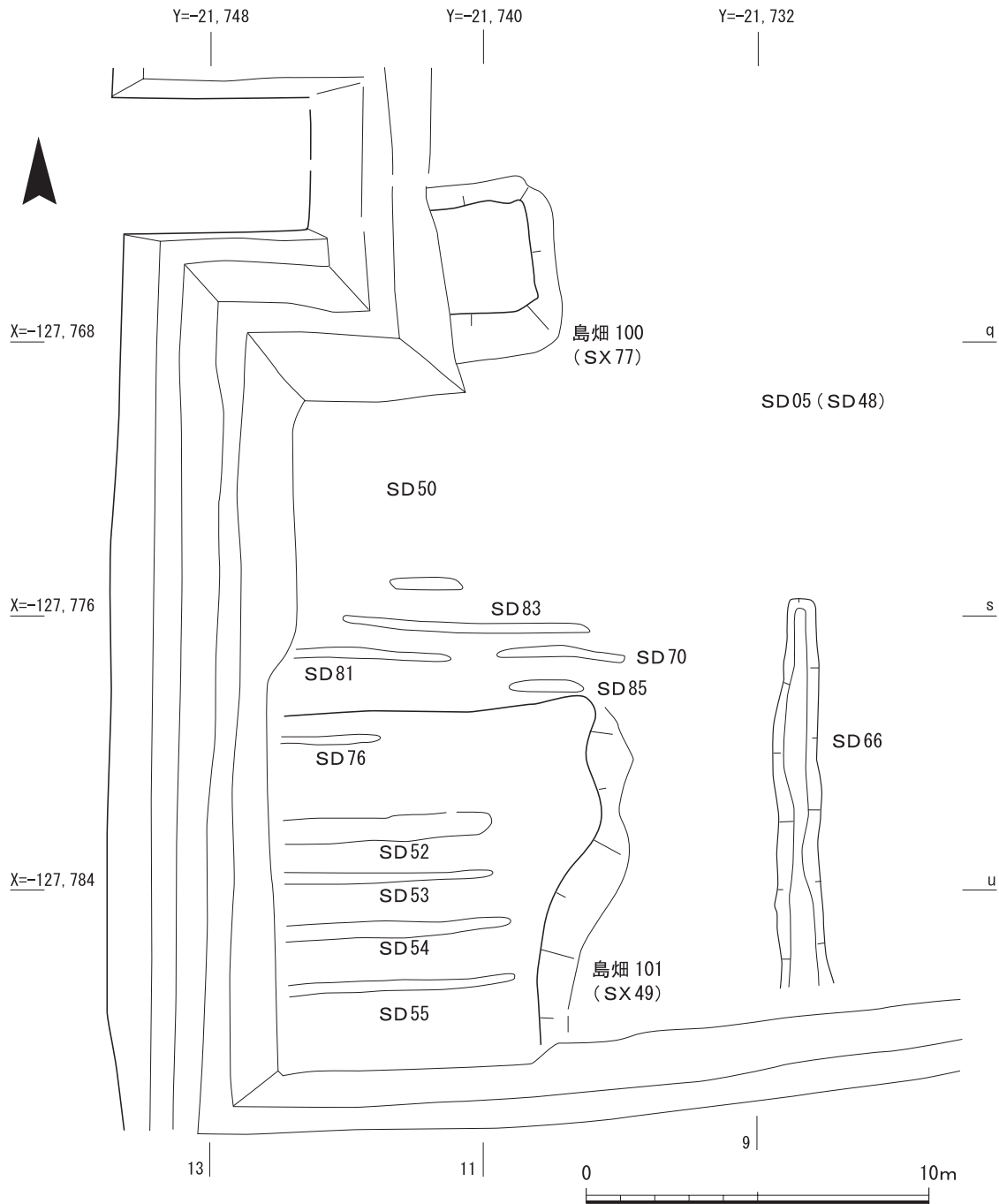
第109図 H地区島畑96・97平面図(1/200)



第110図 H地区島畑98・99平面図(1/200)

畑を形成している。検出長10.9m、基部幅10.8m、上面幅8.3m、高さ0.6mである。島畑上面の標高はおよそ14.1mである。島畑の上面では2条の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長8.0m前後、幅0.25~0.4m、深さ0.1m前後である。遺物は少量の土器片が出土した。詳細な時期は不明であるが、中世前半と推定される。

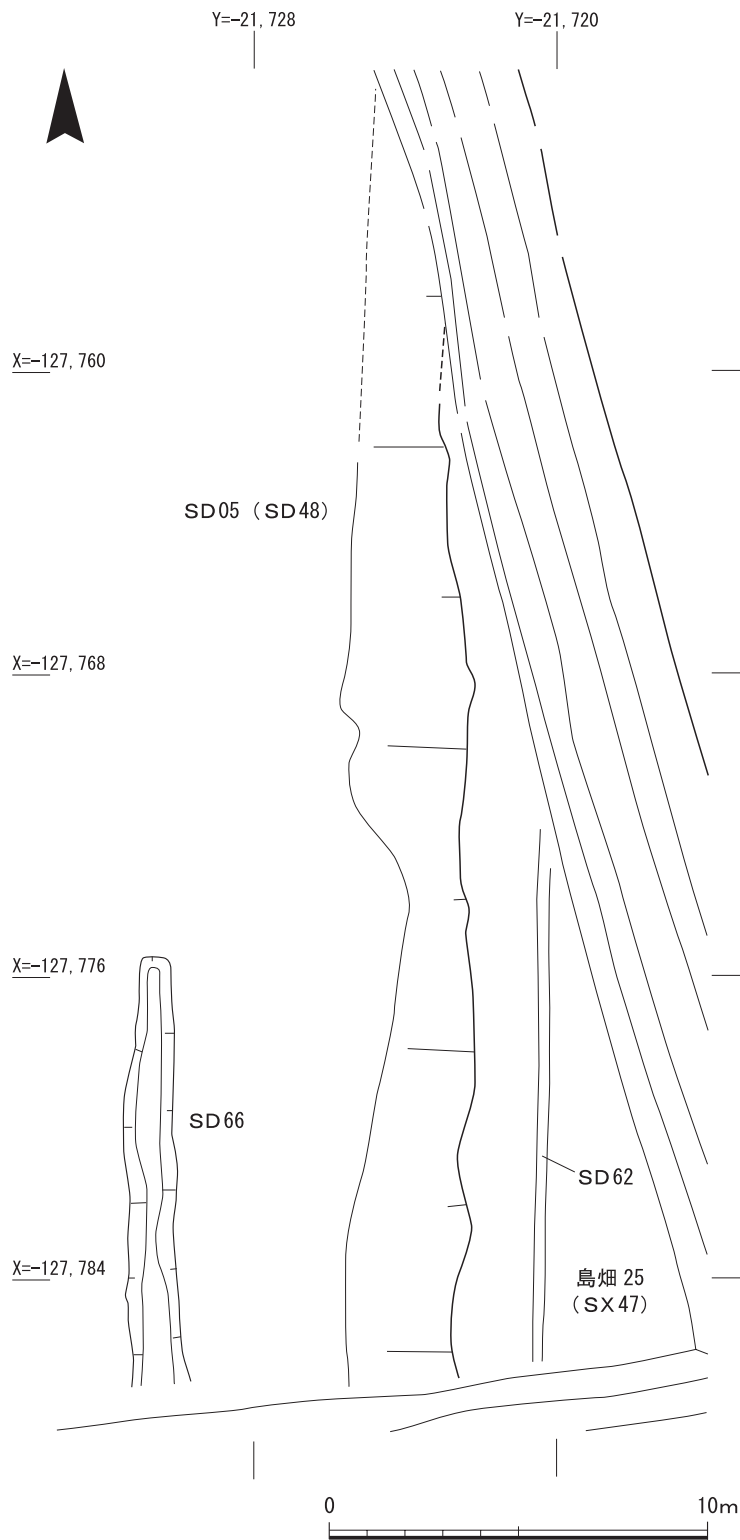
島畑100 (SX77) (第111図) 調査区の西半部南寄りで見出した (G3-p10区ほか)。東西方向の島畑の東半部を見出した。島畑は基盤層である橙色極細粒砂などを整形して島畑を形成している。小規模な島畑で、検出長3.7m、基部幅5.2m、上面幅3.4m、高さ0.6mである。島畑上面の標



第111図 H地区島畑100・101平面図(1/200)

高はおよそ14.0mである。島畑の上面では素掘り溝を検出しなかった。遺物は少量の土器片が出土した。詳細な時期は不明であるが、中世前半と推定される。

島畑101 (S X99) (第111図) 調査区の南西部で検出した(G3-t10区ほか)。東西方向の島畑の東半部を検出した。島畑は基盤層である黄橙色極細粒砂の上部に灰黄色やにぶい黄橙色の極細



第112図 H地区島畑25平面図(1/200)

粒砂を置いて島畑を形成している。検出長10.3m、基部検出幅12.0m、上面検出幅10.0m、高さ0.7mである。島畑上面の標高はおよそ14.1mである。島畑の上面では5条の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長2.9～6.6m、幅0.2～0.8m、深さ0.1m前後である。遺物は須恵器鉢など少量の土器が出土した(第124図476)。詳細な時期は不明であるが、中世前半と推定される。

島畑25(第112図) 調査区の南東部で検出した(G3-p6区ほか)。南北方向の島畑で、平成25年度の水主神社東跡第5次調査で、一部を確認していた島畑の延長部にあたる。今回の調査でも北端と東辺については調査区外となる。島畑の断面観察(第108図)によると、基盤層である明黄褐色極細粒砂～シルト(49層)の上部に灰白色や緑灰色の極細粒砂ないしシルト(46・48層)を置いて島畑を形成している。これらの各層から素掘り溝が掘られている(45・47層)。その上部には黄灰色やオリーブ灰色などのシルトの層序(27・40層)などが確認できる。これらも島畑の盛土と考えられる。検

出長28.4m、基部検出幅8.9m、上面検出幅5.9m、高さ0.6mである。鳥畑上面の標高は14.1mである。鳥畑の上面では1条の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長14.3m、幅0.3m、深さ0.1m前後である。遺物は瓦器椀などが出土した(第124図477)。時期は中世前半である。

溝状遺構SD05(SD48)(第109～111図) 調査区の東半部で検出した(G3-a9区ほか)。南北方向に延びる。土層断面(第108図)の観察によると、基盤層である明緑灰色極細粒砂～シルト(16層)の上部に認められる明緑灰色粘土や浅黄色暗シルト(28・36層)を基盤として溝状遺構を形成していると考えられる。その上部には明緑灰色シルトや明オリーブ灰色シルト、灰白色極細粒砂などの層序(23～27層など)が堆積している。検出長87.8m、幅14.0m、深さ0.7m前後である。溝底の標高はおよそ13.2～13.4mで、北に向かってわずかに低くなる。調査区南部では、溝底で排水を目的としたと考えられる溝SD66を検出した。SD66は検出長11.7m、幅1.4m、深さ0.2mである。そのほか、浅い素掘り溝を3～4条検出した。遺物は瓦器や土師器、瓦質土器、須恵器などが出土した(第124図480～485、490・491)。時期は中世前半であろう。

溝状遺構SD20(第109図) 調査区の北半部で検出した(G3-b10区ほか)。東西方向に延びる。溝状遺構は基盤層である灰オリーブ色極細粒砂を掘削して形成している。検出長10.1m、幅9.4m、深さ0.7mである。溝底の標高はおよそ13.2mである。遺物は瓦器椀や白磁椀などが出土した(第124図486～488)。時期は中世前半であろう。

溝状遺構SD02(第109図) 調査区の北半部で検出した(G3-e10区ほか)。東西方向に延びる。溝状遺構は基盤層である灰オリーブ色ないし暗オリーブ色極細粒砂を掘削して形成している。検出長11.7m、幅11.2m、深さ0.7mである。溝底の標高はおよそ13.3mである。溝底で素掘り溝を4～5条検出した。その1つSD26からは古墳時代の須恵器杯蓋の小破片が出土した(第124図489)。また、SD02全体からは少量の土器片が出土した。時期は中世前半と推定される。

溝状遺構SD04(第110図) 調査区の中央、やや北寄りで検出した(G3-i10区ほか)。東西方向に延びる。溝状遺構は基盤層である暗オリーブ灰色ないしオリーブ灰色の極細粒砂またはシルトを掘削して形成している。暗緑灰色ないし緑灰色のシルトなどが堆積していた。検出長10.5m、幅14.7m、深さ0.6mである。溝底の標高はおよそ13.5mである。遺物は少量の土器片などが出土したのみで、時期は中世前半と推定される。

溝状遺構SD23(SD79)(第110図) 調査区の中央、やや南寄りで検出した(G3-o10区ほか)が、大半はH1区とH2区の調査区境に当たるため、詳細な調査成果を得られていない。東西方向に延びる。他の溝状遺構と同じく、基盤層であるオリーブ灰色ないし橙色のシルトまたは極細粒砂を掘削して形成していると考えられる。検出長10.6m、幅7.1m、深さは不明である。溝底の標高はおよそ13.4mと推定される。遺物はほとんど出土しなかったが、周辺の調査成果を踏まえると中世前半と推定される。

溝状遺構SD50(第111図) 調査区の南半部で検出した(G3-q10区ほか)東西方向に延びる。溝状遺構は基盤層である橙色ないし黄橙色極細粒砂を掘削して形成している。検出長9.5m、幅11.6m、深さ0.7mである。溝底の標高はおよそ13.4mである。遺物は少量の土器片が出土したの

みで、時期は中世前半と推定される。

(筒井崇史)

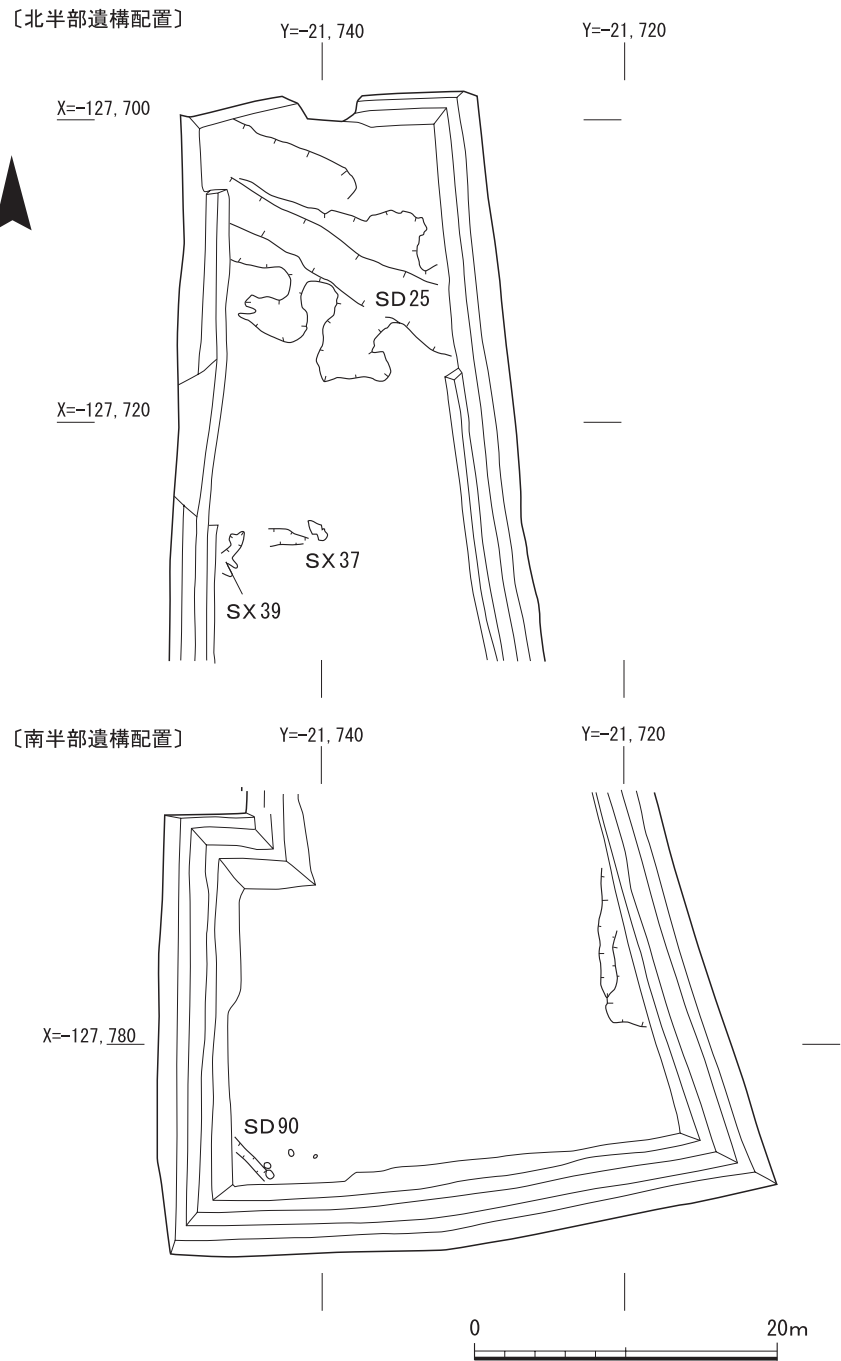
溝SD24(第113図) 調査区北半部で検出した。南東から北西方向に掘削された溝である。北に対して60°前後西に振っている。島畑の造成に伴って上部は失われているため、機能時の規模は明らかではないが、検出時には幅2.4~3.0m、深さ0.4~0.5mを測る。溝の断面形は緩やかな弧状を呈す。後述する溝SD25とほぼ重なって掘削されていることから、SD25に由来する地形の窪みを利用して掘削された溝であろう。溝底の標高は、南東から北西方向へ向けて低くなり、木津川へ向かって流れていたと考えられる。溝底から土師器皿や瓦器碗の小片が出土しており、中世



第113図 H地区溝SD24平面図(1/100)

前半には機能していたものと考えられる。鳥畑形成の年代の上限の1点を示しており、当地域に鳥畑が形成される以前の土地利用の様子をうかがうことができる。

土坑SK07 鳥畑97の上面で検出した方形を呈する土坑である。検出面からの深さは0.4mを測る。西半は調査区外であったため正確な深さは知りえないが、一辺およそ1.8m程度であったと推測される。上層からオリーブ灰色極細砂、灰色粘土、オリーブ黄色細砂などが堆積し、下層では湧水がみられる。出土遺物は細片が多く図化しえなかったが、埋土中より瓦器碗の破片が出土しているため、おおよそ中世の遺構と考えられる。



第114図 H地区下層遺構配置図(1/500)

②下層遺構

H地区では、鳥畑や溝状遺構を検出した時点で、下層遺構として2条の溝や縄文時代のものと考えられる不整形な土坑等を確認していた。鳥畑の調査を終了したのち下層遺構の調査を行った。北半部では、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての溝SD25とその付属施設である土坑等を検出した。また、SD25の南側で縄文時代晩期の遺構を検出した。さらに南端部では詳細な時期は不明ながら溝を1条検出した。

溝SD25(第115～119図) 先述の溝SD24とほぼ同じ位置で重複して検出した。検出幅は最大約6m、残存する深さは最大で1.3mを測り、断面形状は緩い台形状を呈する。北岸から1.5m程度は、検出面から0.3m程度の浅い部分となっており、傾斜変換点を境に急激に深度が深くなる。第117図のように3か所の土層断面観察用のアゼを残しながら溝の掘削を行い、南東から1区、2区、3区、4区と呼称した。また、掘削時に出土した遺物は全て位置と標高を記録して取り上げており、その詳細は第118図に示した通りである。

土層断面の観察によって、溝の埋没過程は大きく以下の5層に区分されることが判明した。以下、大別の層位名はローマ数字で記し、詳細な個別の層位名アラビア数字で記す。

I層：溝に由来する窪みに自然堆積がみられる段階。

II層：SD25の北側に重複するように、浅い溝が再掘削される段階。平面的に検出することはできなかったが、断面の観察により認識することができた。庄内形甕の体部片が含まれるが、下層からの混入の可能性も残され、明確な時期は不明である。

III層：ある程度埋没が進んだ溝が人為的に埋め戻される段階。埋土にはブロック状のシルトが含まれる。残存率の高い甕は多くがこの層から出土した。

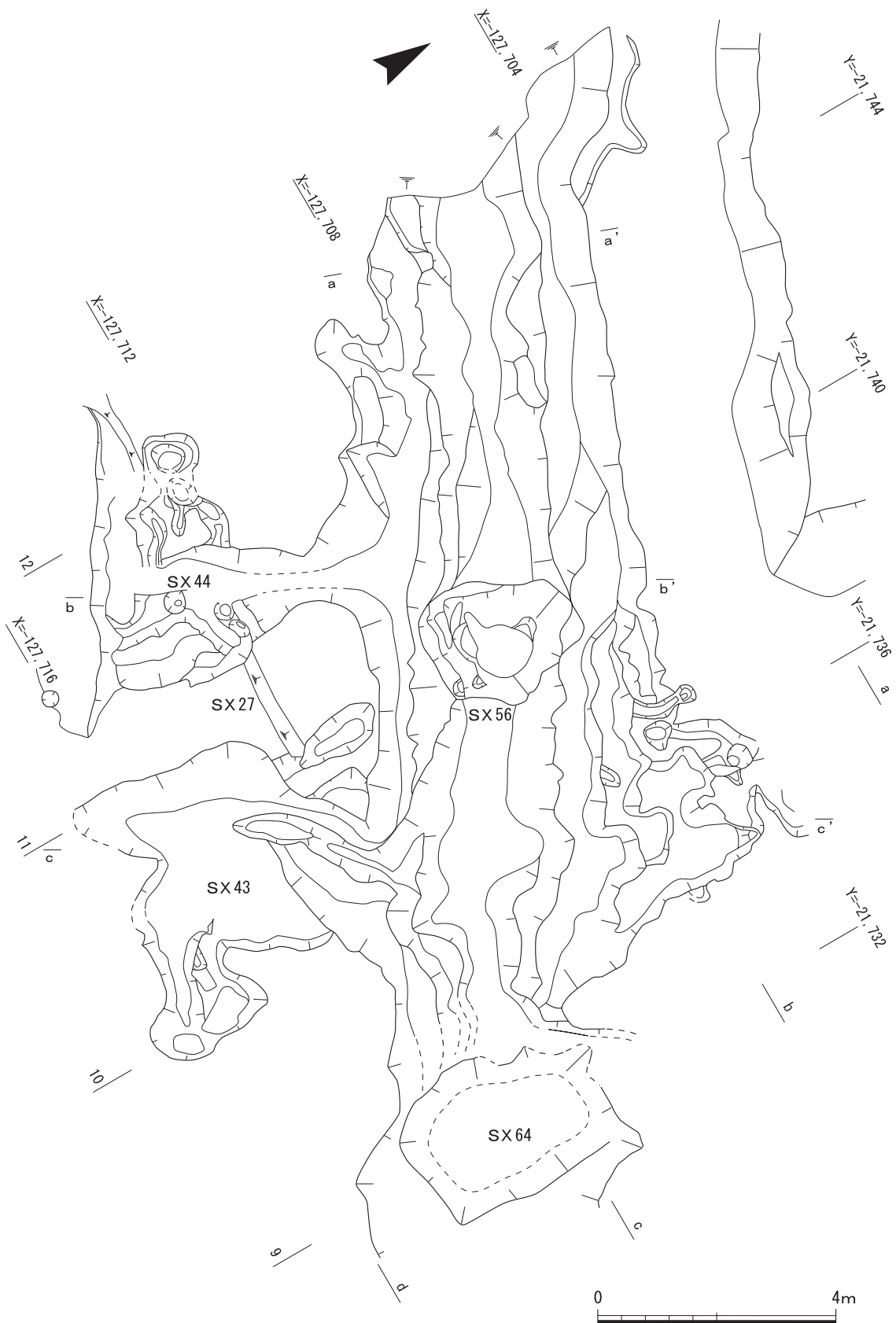
IV層：溝の機能している段階。シルトと砂の互層状の堆積を呈する。多くの自然木、木製品が出土した。また、出土した土器は細片が多い。

V層：溝の機能している段階。溝底に暗い灰色を呈する粘土・粗砂が堆積する。遺物や有機物はほとんど含まれない。

I層の上層は先述の中世前半の溝SD24の埋土が堆積している。

II層は土層断面の観察によって確認したSD25の再掘削と考えられる溝である。幅1.3mを測る。平面的に検出することができなかったため不明な点も多いが、ほぼ当初のSD25の北岸に接するようにして掘削されたと考えられる。

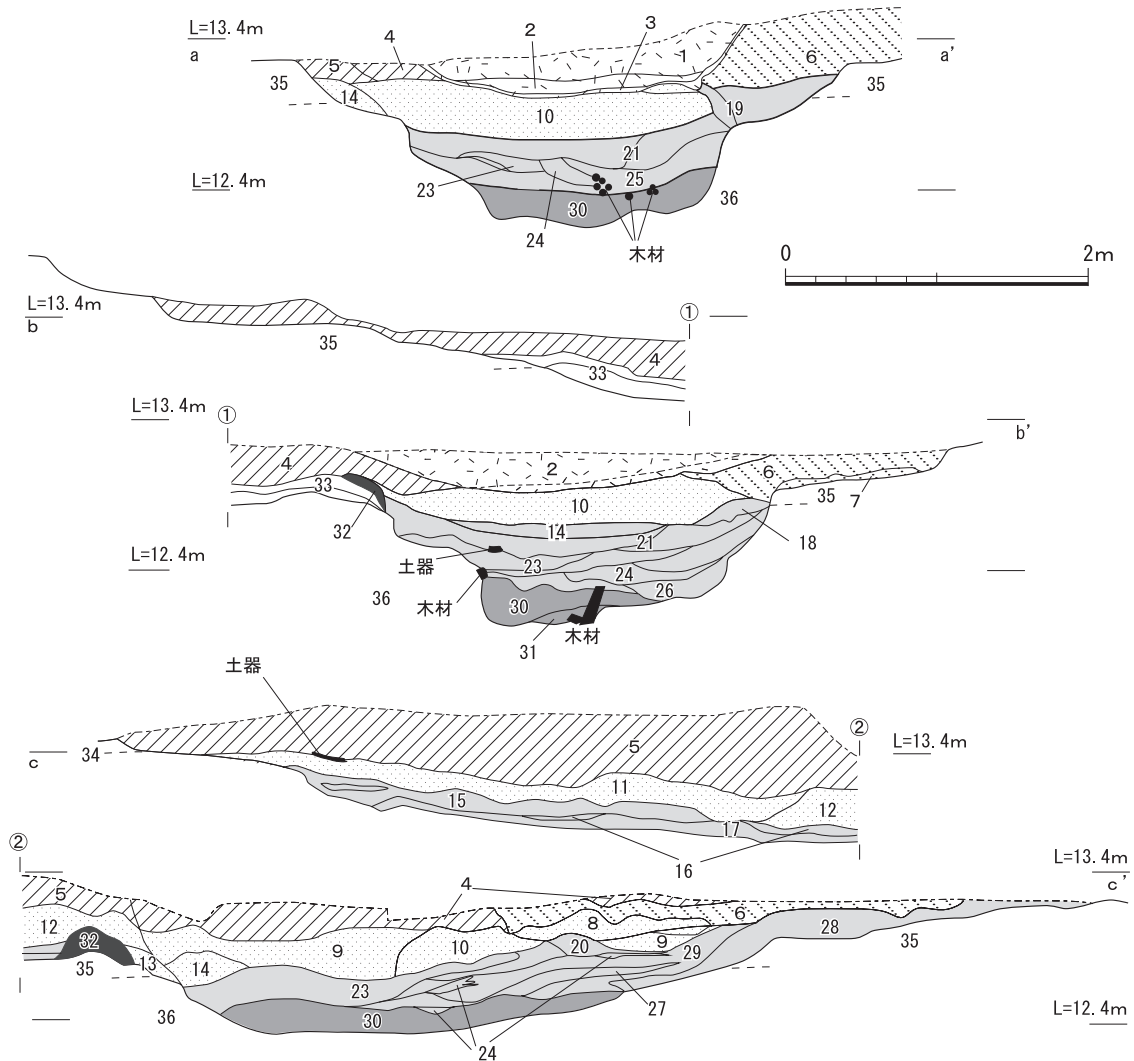
III層はブロック状のシルトが多く含まれており、水流に伴う砂層の堆積も見られないことから、溝の機能停止に際して人為的に埋め戻された堆積層と考えている。この層からは完形に近い庄内形甕が数点出土した(第125図496・497・499～501)。これらの庄内形甕はSD25の本流部分を挟み、北岸付近の浅くなっている部分と後述するSX43でそれぞれ3、4点ずつ並んで出土しており、溝の機能停止の際に何らかの行為を伴って据え置かれたものと想定される。なお、下層のIV・V層から出土した土器片は、多くが細片となった庄内形甕であることから、III層出土土器群とIV層出土土器群とは性格を異にすると考えられる。



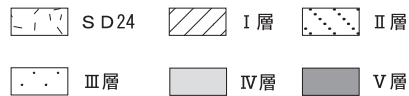
第115図 H地区溝S D25平面図(1/100)



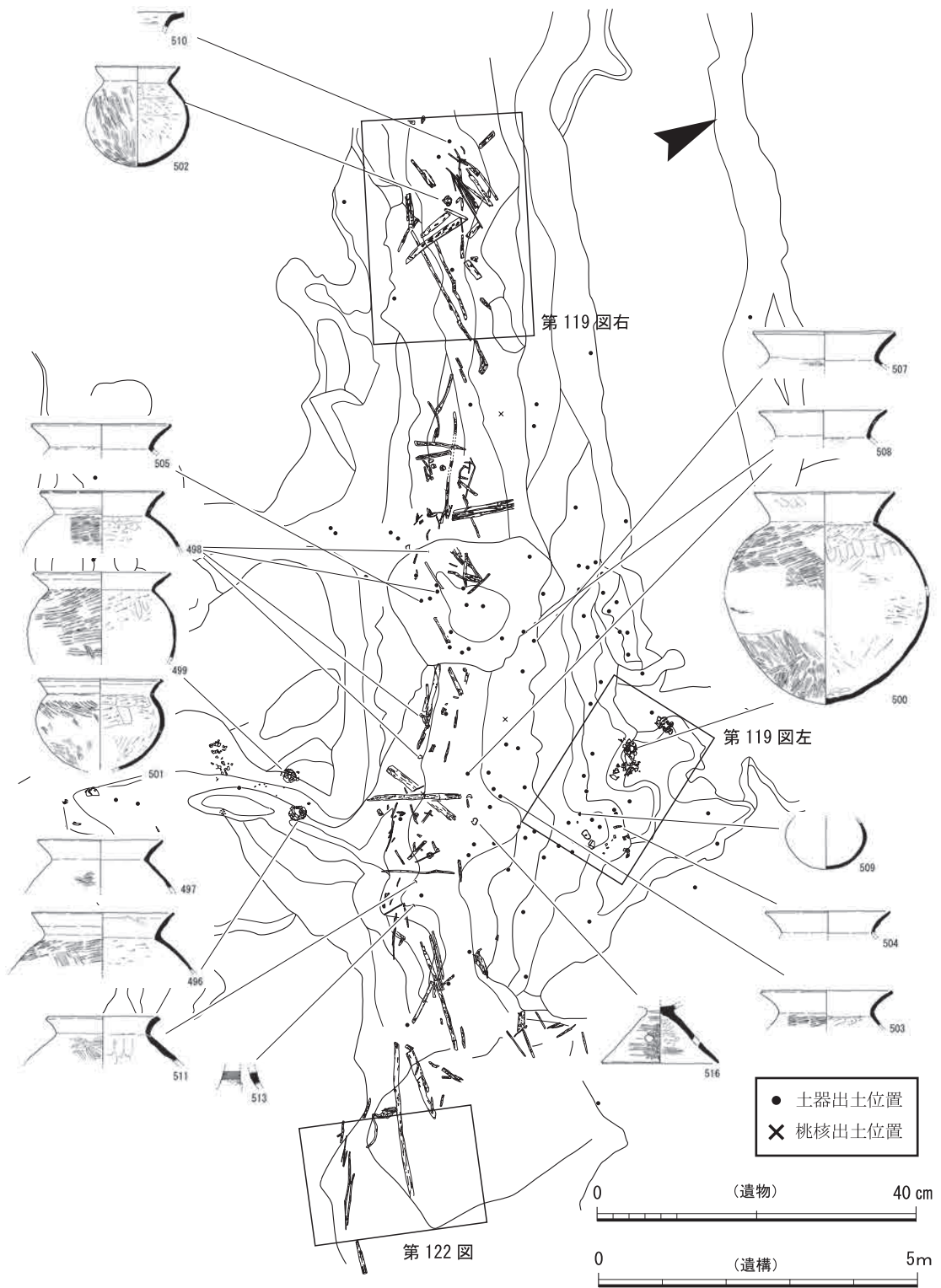
第116図 溝 S D 25地形測量図(1/100)



- | | |
|---|---|
| <p>1. 灰～オリーブ黒色 (5Y4～3/2) 細砂混じりシルト～極細砂</p> <p>2. 灰色 (7.5Y3/1) 粘土～シルト、マンガン粒を多量に含む</p> <p>3. 暗オリーブ色 (7.5Y4/3) 細砂混じり極細砂～シルト</p> <p>4. 青灰色 (5B5/1) シルト、しまり強い、マンガン粒を多量に含む</p> <p>5. オリーブ黄～灰オリーブ色 (5Y6～5/3) シルト、しまり強い</p> <p>6. 青灰色 (5GB5/1) シルト、マンガン粒・ブロック状に8層含む</p> <p>7. 暗オリーブ色 (7.5Y4/3) 細砂～中砂、しまり弱い</p> <p>8. 暗青灰色 (5BG5～4/1) 粘土、しまり強い、庄内形壺を含む</p> <p>9. 暗青灰色 (10BG3/1) 粘土、しまり強い、ブロック状に10層含む</p> <p>10. 青灰～暗青灰色 (10BG5～4/1) 粘土、しまり強い</p> <p>11. 灰～オリーブ黒色 (7.5Y4～3/1) 粘土～シルト</p> <p>12. 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 極細砂～細砂混じり粘土</p> <p>13. 青灰～暗青灰色 (5BG3/1) 極細砂～細砂、わずかに炭を含む</p> <p>14. 暗青灰色 (10BG3/1) 粘土、ブロック状に13層含む</p> <p>15. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘土、層状に砂を含む</p> <p>16. 暗青灰色 (5BG4～3/1) 細砂～中砂混じり粘土</p> <p>17. 暗緑灰色 (5～10G4/1) 中砂～粗砂混じり粘土</p> <p>18. 暗オリーブ灰色 (2.5～5GY3/1) 極細砂～細砂</p> <p>19. 暗緑灰色 (10GY3/1) シルト～極細砂、マンガン粒と炭を含む</p> <p>20. 青灰～暗青灰色 (10BG4～5/1) 粘土、しまり強い</p> <p>21. 暗緑灰色 (2.5GY3/1) シルト～粘土、極細砂～細砂と互層状、木葉を多く含む、粘性・しまり強い</p> | <p>22. オリーブ黒色 (10Y3/2) 極細砂混じり粘土、しまり強い</p> <p>23. 暗緑灰色 (2.5GY3/1) 極細砂混じり粘土、木葉を多く含む</p> <p>24. 灰色 (N5～4/1) 極細砂～細砂、粘性・しまりなし</p> <p>25. オリーブ黒色 (10Y3/1) 細砂～粗砂混じり極細砂、層状に砂を含む、棒材・葦等含む</p> <p>26. 青黒色 (5BG1.7/1) 細砂～中砂、層状に青灰色粘土含む</p> <p>27. オリーブ黒色 (5GY2/1) 粘土、地山ブロック含む</p> <p>28. 暗青灰色 (5B4/1) 極細砂混じり粘土</p> <p>29. 暗青灰～青黒色 (10BG3～2/1) 極細砂混じり粘土、</p> <p>30. 青灰色 (5BGY4/1) 粘土、互層状に砂層を含む</p> <p>31. 黒色 (2.5GY2/1) シルト～粘土、有機質を含む</p> <p>32. 黒色 (2.5GY2/1) 極細砂混じり粘土～細砂</p> <p>33. 青灰色 (10BG5/1) 粘土、マンガン粒を多量に含む</p> <p>34. 基盤層 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 極細砂</p> <p>35. 基盤層 暗オリーブ灰色 (5GY4～3/1) 細砂～中砂</p> <p>36. 基盤層 青灰色 (10BG5/1) 粘土</p> |
|---|---|



第117図 H地区溝S D 25土層断面図(1/50)

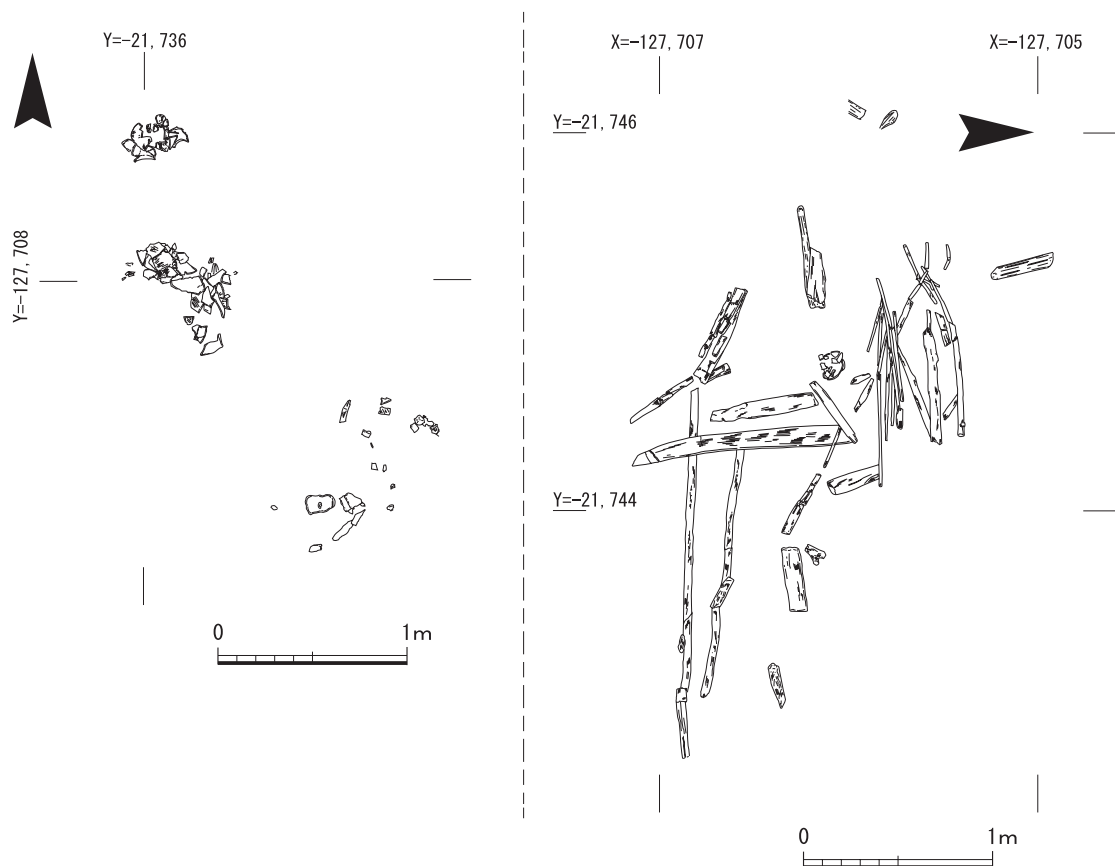


第118図 溝S D25遺物出土状況図(1/100・1/8)

IV層はシルトと砂の互層状の堆積が見られ、多くの土器片や木材が出土した。また、桃核も4点出土している。土器片は整理箱2箱分が出土したものの、III層に見られたような完形品等はなく、ほとんどすべてが庄内形甕の細片である。498のように離れた地点のものが接合することも多いことから、少数の土器が水流によって細片化したものであろう。したがって、S D25の機能時に廃棄された土器の量はごくわずかにすぎないと考えられる。木材は出土状況を記録して取り上げ、加工痕跡の有無を確認した。その結果、多くは自然木であり、明確な加工痕跡を持つものは全体の1割ほどに過ぎないことが判明した。孔をもつものや先端に杭状の加工がなされているもの等は、S D25の北西部分(第119図右)と南東部分(第122図付近)に集中している。北西部分で出土した遺物は図化できなかったものの、葦状の有機質がまとまって出土しており、本来的には木材と緊縛し、一体のなんらかの構築物、もしくは組合せの部材が存在した可能性がある。ここでは溝底に接するように完形の甕(第125図502)が出土した。

V層は遺物や有機物をほとんど含まない粗砂と粘土の堆積である。溝底は平坦ではなく凹凸が顕著であったが、溝底の深い部分にのみ見られる。

土坑状遺構 S X56・64 (第120～122図) S D25の中央部と南東部分の2か所では土坑状の落ち込みを検出した。S X56はS D25中央部で検出した。平面形は直径2 m前後の楕円形を呈し、S D25の底面からは1.2m掘り込まれている。埋土は粘土層と砂層が互層状に堆積する。遺構内



第119図 溝 S D25遺物出土状況拡大図(1/40)

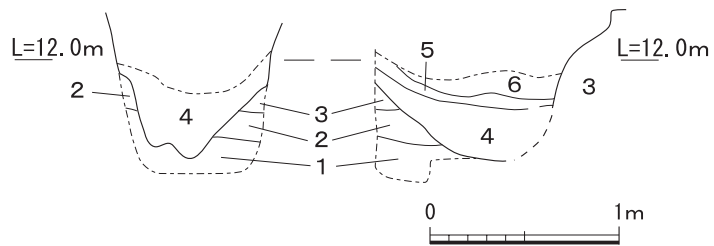
にはS D25の第Ⅳ層で見られたような木材が落ち込んでいたほか、建築部材の一部(第131図539)が出土した。ただし、出土遺物の量は少ない。S X56のすぐ北西側には杭が溝に対して直交するような状態で3本出土しており、簡易な井堰のような機能をもつ構造物が存在した可能性も考えられる。

S X64は、S D25の溝底で出土したやや大型の材や加工部材を取り上げたところ、溝底で検出した土坑状遺構である。東半部は調査区外となるため正確な平面形や規模は不明であるが、調査終了時に部分的に拡張確認を行った結果、一辺3m程度の方形の掘形を持っていたことが判明した。遺構の底までの深さは、S D25の溝底から約1mである。S X64の周辺では加工された木材がやや集中して見られたほか、溝底に打ち込まれた状態の木杭を4本検出した(第121図)。S X64に伴う堰や護岸等に伴う施設が存在した可能性も考えられる。S X64の埋土中からは方形の木製品が組み合った状態で出土した(巻頭図版2-(2)、第129図)。方形組合せ木製品はS X64の南壁に接するように出土しており、何らかの要因で組み合ったまま投棄されたものと思われる。埋土中からは他の出土遺物は少なく、この木製品と関連すると考えられる部材も出土しなかった。

S X56・64から土器は出土しなかったが、埋土の堆積の状況からS D25と同時期に機能していたことは確実である。S X64は大部分が調査区外であったため、詳しい土層の堆積状況は明らかでないが、S X56は下層に粗砂や湧水のため泥状となったシルトが堆積していた。断定することはできないが、砂泥を沈殿させるために掘削された遺構の可能性も考えられる。

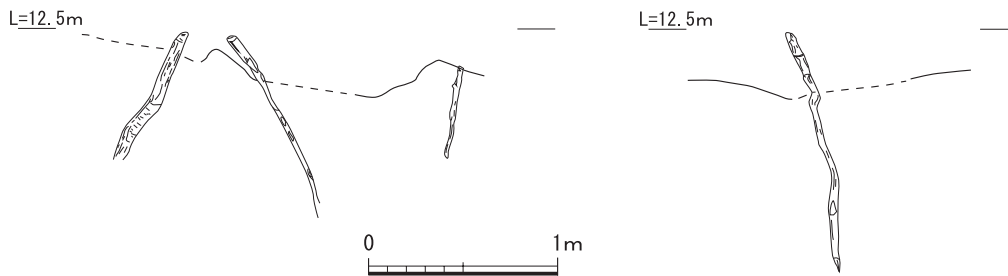
不明遺構 S X27・43・44 (第116・117・123図) 本流であるS D25の南側には溝の附属施設と考えられるS X43・44がとりつき、その中間にはS X27が舌状に張り出している。

S X27は地山の舌状の掘り残しであり、幅1.1~1.4mを測る。断面形状は緩やかな凸状を呈する。S X43と44はS X27をはさんでほぼ線対称の平面形を持つ土坑

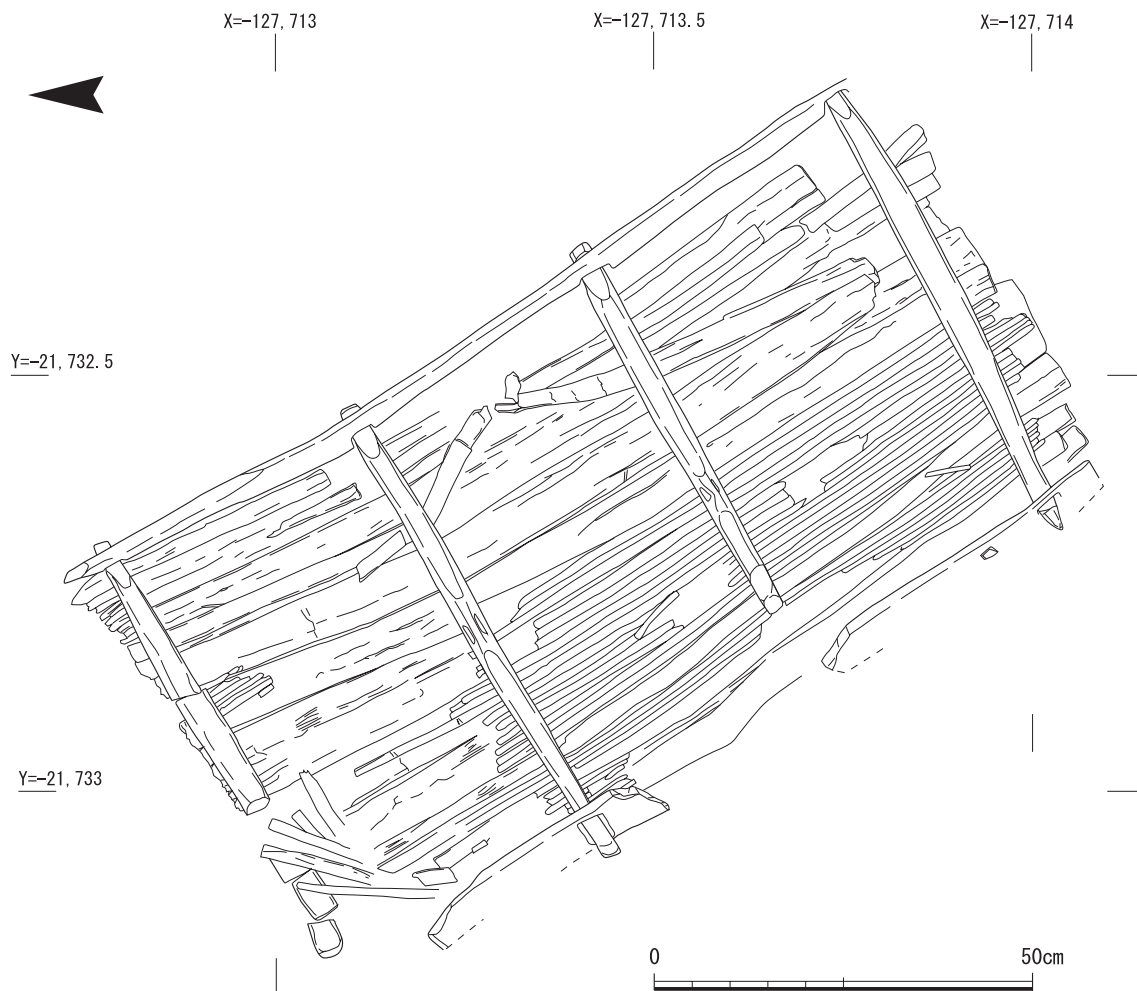


1. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4 ~ 3/1) 細砂混じりシルト
2. 暗青灰色 (5 ~ 10BG3/1) 極細砂~細砂混じり粘土
3. 青灰色 (10BG5/1) 粘土
4. 暗オリーブ灰色 (5GY4 ~ 3/1) 極細砂~細砂混じり粘土
5. 暗青灰~青黒色 (10BG3 ~ 2/1) 細砂~粗砂
6. 青灰色 (5BG6/1) 中砂混じり粘土

第120図 土坑状遺構 S X56土層断面図(1/40)



第121図 S X64周辺杭検出状況図(1/40)

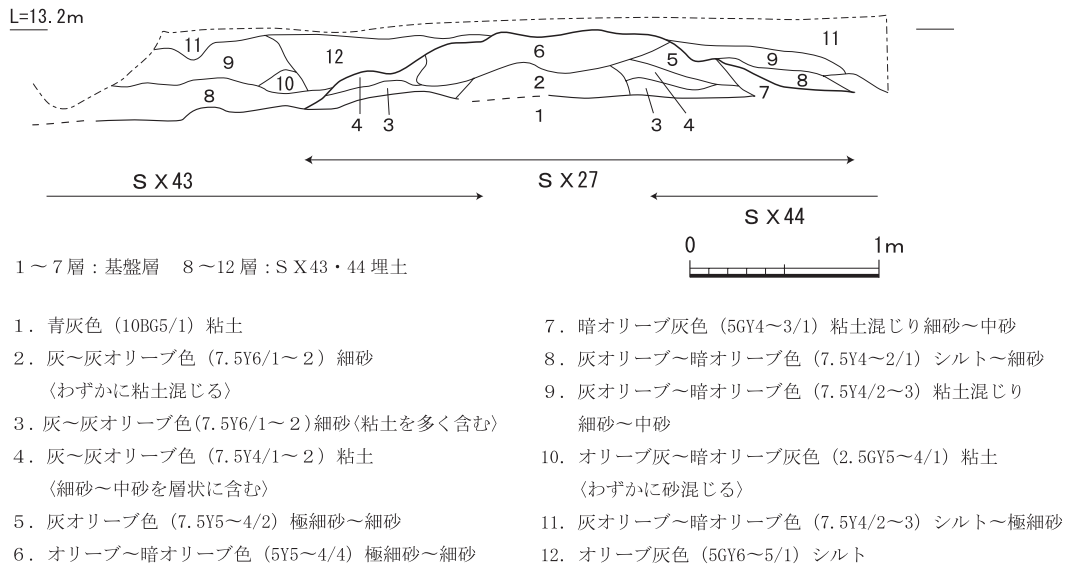


第122図 方形組合せ木製品出土状況図(1/10)

である。ただし、S X43は島畑97に重複していたため、残存状況が良好であったのに対し、S X44の大部分は溝状遺構S D20にあたっていたため削平が著しく、底面の状況しか明らかでない。

S X43は袋状の平面形態を持つ。検出面からの深さは0.6m前後、長軸5.3m、短軸3.5mを測る。底面は平坦ではなく凹凸が著しく、水流があったことをうかがわせる。南東部にはさらに袋状に張り出した部分があり、やや深く掘りこまれている。堆積土は基本的にはS D25と共通しており、最下層から砂層と粘土の互層状の堆積(15~17層)、シルトブロック混じりのⅢ層(11、12層)が堆積している(第117図下段)。Ⅲ層は廃絶時の埋め戻し土であり、S D25の廃絶時にS X43も埋め戻されたようだ。なお、このⅢ層には完形率の高い庄内形甕が配置されていた。S X43とS D25の接続部の幅は0.5mで、断面観察によって、土手状に掘り残されていることが判明した(第117図下段32層)。

S X44はS X27をはさんでS X43と対になるように掘られた不整形の土坑である。先述のように大部分は溝状遺構の造成によって削平を受けている。検出面からの深さは0.4m、長辺4.0m、短辺3.5mを測る。北端には、S X43の南端で見られたような袋状の掘り込みが見られ、同じような構造と考えられる。S D25との接続部は一段狭くなっており、幅は0.8mである。S X43で



第123図 不明遺構 S X 27・43・44断面図(1/40)

は土手状の掘り残しが明確に確認されたが、S X 44ではそれほど明瞭に確認することはできず、溝の傾斜変換点から掘りこまれていた。

埋土の状況から S X 43・44はIV層が堆積する段階には少なくとも掘削されており、S D 25の本流に対する付随的な施設であることは確実である。II層の埋土もみられることから、S D 25の機能が停止した際に同じように機能を停止したと考えられる。

③最下層遺構

土器溜まり S X 37 鳥畑98の上部で検出した不整形の落ち込みである。検出時には炭化した有機質や焼土が楕円形状にみられたため土坑であると判断し掘削を行ったが、明確なプランをもつ遺構であるかは不明瞭であった。落ち込みの東側を中心に細片となった縄文土器がややまとまって出土した。

土器溜まり S X 39 S X 37のすぐ西で検出された溝状の落ち込みである。断面は浅い逆台形状を呈し、深さは0.15～0.2mほどとごく浅い。埋土中より縄文土器がわずかに出土した。

(桐井理揮)

(3)出土遺物

①上層遺構出土遺物

鳥畑98(S X 03)(第124図473～475) 473は土師器皿である。口縁部がわずかに外反する。474は瓦質土器三足鍋である。鍋本体との接合部分に当たる脚部の上半部の破片である。475は須恵器鉢である。口縁端部はやや丸みを帯びている。

鳥畑101(S X 49)(第124図476) 476は須恵器鉢である。475とは異なり、端部は屈曲して上方のびる。

鳥畑25(S X 47)(第124図477) 477は瓦器碗である。口縁端部は丸く納め、内面のミガキも粗く施す。

素掘り溝SD06(第124図478) 478は白磁碗である。口縁部は底部からゆるやかに立ち上がった後、大きく外反するV類である。

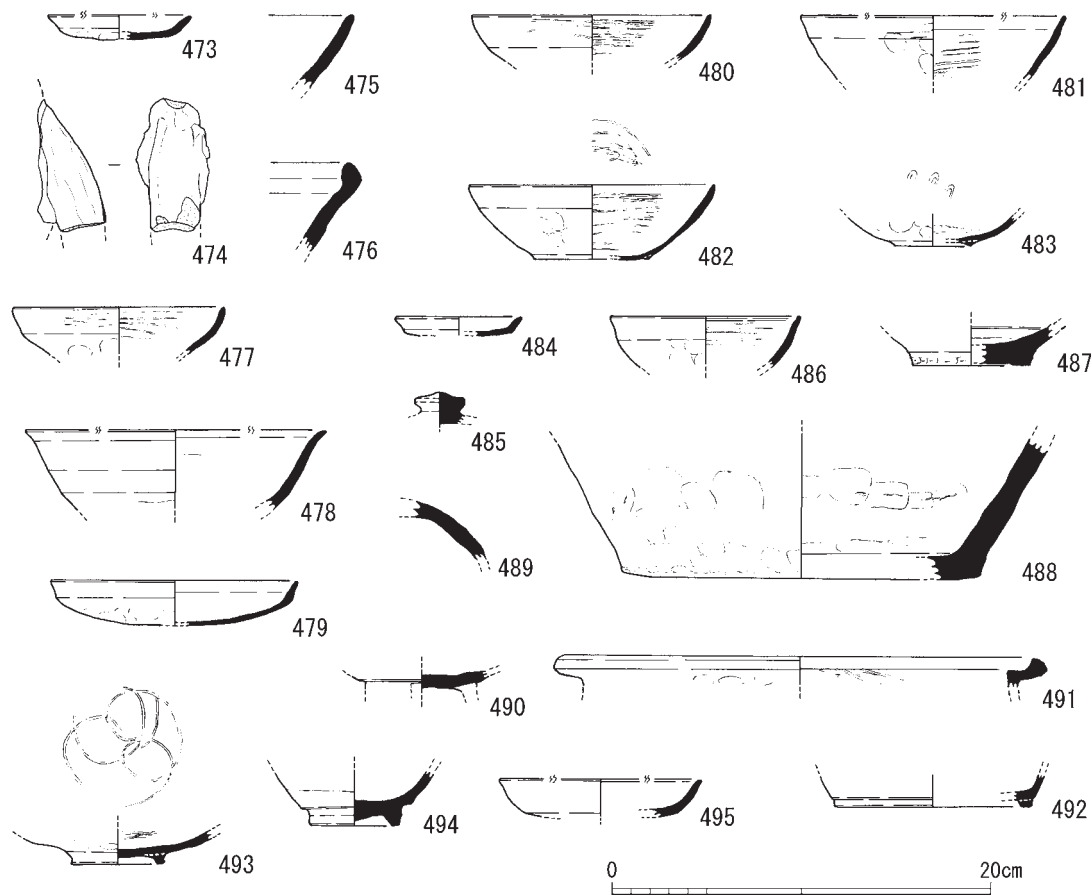
溝SD29(第124図479) 479は土師器皿である。やや丸底気味の底部に、わずかに外反気味となる口縁部がつくものである。底部外面にユビオサエを施す。器形から古代のものであろう。

溝状遺構SD05(第124図480~485) 480~482は瓦器碗である。480~482は口縁端部を丸く納め、内面のミガキもややまばらである。482・483は小さな断面三角形の高台が貼り付けられる。どちらも高さがほとんど認められないものである。484は小型の土師器皿である。平底の底部に、わずかに外反する口縁部とからなる。485は須恵器杯B蓋のつまみである。法量や形態から飛鳥時代後半ないし末頃のものと考えられる。

溝状遺構SD20(第124図486~488) 486は瓦器碗である。口縁部内面に沈線が1条巡る。内面のミガキはややまばらである。487は白磁碗の底部である。削り出し高台で、底部外面にも粗いケズリを施す。488は大型の陶器鉢である。内外面にナデ等による調整が見られる。

溝SD26(第124図489) 須恵器杯蓋の小破片であろう。頂部に回転ヘラケズリが明瞭に認められ、想定される復元口径などから、古墳時代中期末ごろのものと推定される。

溝状遺構SD48(第124図490・491) 490は須恵器高杯の杯部と脚部の結合付近の破片である。下面側にスカシ穴を開けるための切り取り痕が認められることから高杯と判断した。古墳時代後



第124図 H地区出土遺物実測図1(1/4)

期のものであろう。491は瓦質土器鍋の口縁部である。

土坑S K07(第124図492) 492は須恵器杯Bである。高台付近のみの破片で、底部や口縁部については不明である。

遺物包含層(第124図493～495) 493は瓦器碗の底部である。断面方形の高台が巡る。内面には密にミガキを施す。494は天目茶碗の底部である。495は土師器皿である。口縁端部はわずかに外反する。
(筒井崇史)

②下層遺構出土遺物

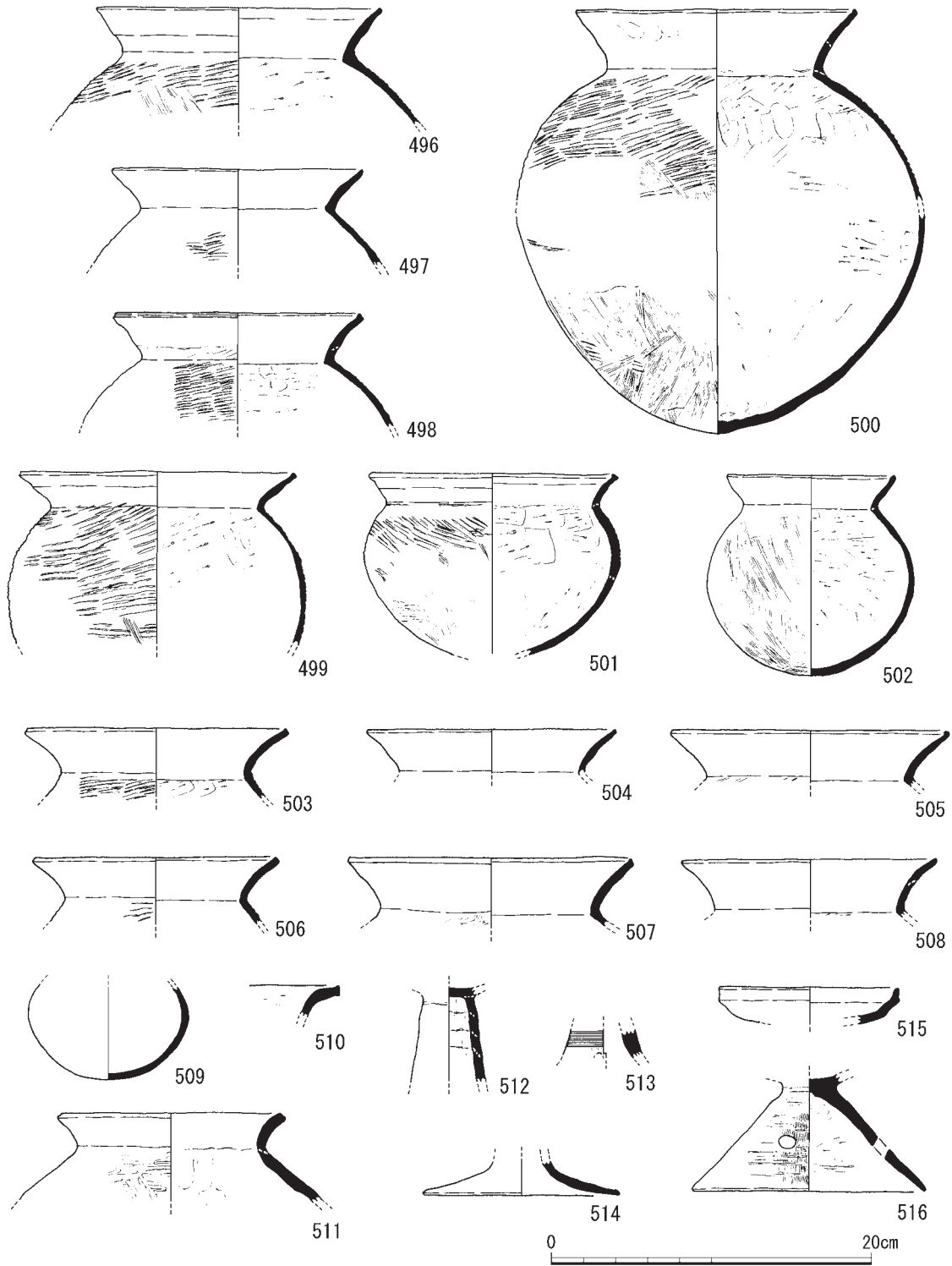
S D25を中心に弥生時代終末期の土器が出土した。出土総量は整理箱5箱ほどと多くなく、器種にも偏りがみられる。ここでは『京都府遺跡調査報告書』第173冊で報告した下水主遺跡B地区溝S D22出土の土器分類にしたがって記述を進める。

遺構の項で述べたように、溝の機能時に伴う遺物と、廃絶時に配置された遺物の2者が存在する。496・497・499～501は溝の廃絶時に伴う土器群であり、S D25・S X43上層から出土した。器種は甕Bとした庄内形甕に限られる。496～499は、細片となっているために完形に復元することができなかったものの、同一個体と考えてよい破片が同一地点から出土しており、廃棄時は完形に近い状態であったと考えられる。いずれも口縁部途中までタタキ出しによって成形され、その後粘土帯を継ぎ足すことによって口縁部を作り出すものである。口径は16～18cmと、法量にもまとまりがみられる。端部の形状は面を持つb手法(496・497・499・500)と面を持たせた後に一条の沈線を施すa手法(498)によるものがある。500は唯一完形に復元することができたものである。口径17.8cm、器高26.4cmを測る。体部は右上がりの細筋タタキで成形され、体部下半のタタキはハケで消されている。501はやや小形の甕である。体部は庄内形甕としては扁平で、口縁部径に対して器高が低い。体部上面には左上がりのタタキが認められ、口縁部の成形技法もタタキ出しによらないなど、496～500とはやや異なるものである。内面は頸部直下までケズリが施されているため、いわゆる大和型庄内形甕とも異なる系統のものであり、山城地域で製作されたものと考えておきたい。

498・502～514・516は、S D25埋土から出土したものである。502はほぼ完形に復元することができるものの、それ以外のものは破片が多く、特に細筋のタタキをもつ庄内形甕の体部片が目立つ。出土地点はそれぞれ第118図に示すとおりである。502はS D25の北西部の木材等が集中して出土する地点の最下層から出土した。やや下ぶくれの体部に、内湾する口縁部が付く。外面はハケ、内面はケズリで仕上げられている。外面にタタキの痕跡を残さず胴部の球体化が進んでいるが、器壁は厚く、口縁部の整形も定型的な布留形甕とは異なっており、古墳時代に時期が下がるものではない。503～508は庄内形甕である。503・508は内面のケズリは頸部直下まで及ぶのに対して、504～507のように内面のケズリが頸部直下まで及ばず、屈曲部の稜が甘くなるものもある。口縁端部の整形手法にはa手法によるものが1点(503)あるほかはb手法による。

509はS D25の溝底に接して出土した小形丸底鉢の体部である。器壁はやや厚手であり、胎土も精製されたものは使用されていない。510は広口壺の口縁部である。短く外反する口縁部をもち、

端部は面を持つように仕上げている。511も広口壺であり、外面は粗いハケで仕上げる。512～514は高杯の脚部である。513は6条の櫛描沈線文をもつ近江・東海系の高杯で、精製された胎土で作られている。肉眼観察ではあるが他の土器とは胎土が明らかに異なっており、搬入品の可能性が高い。515・516は皿状の杯部を持つ小形器台である。515は上層の遺物包含層から出土した



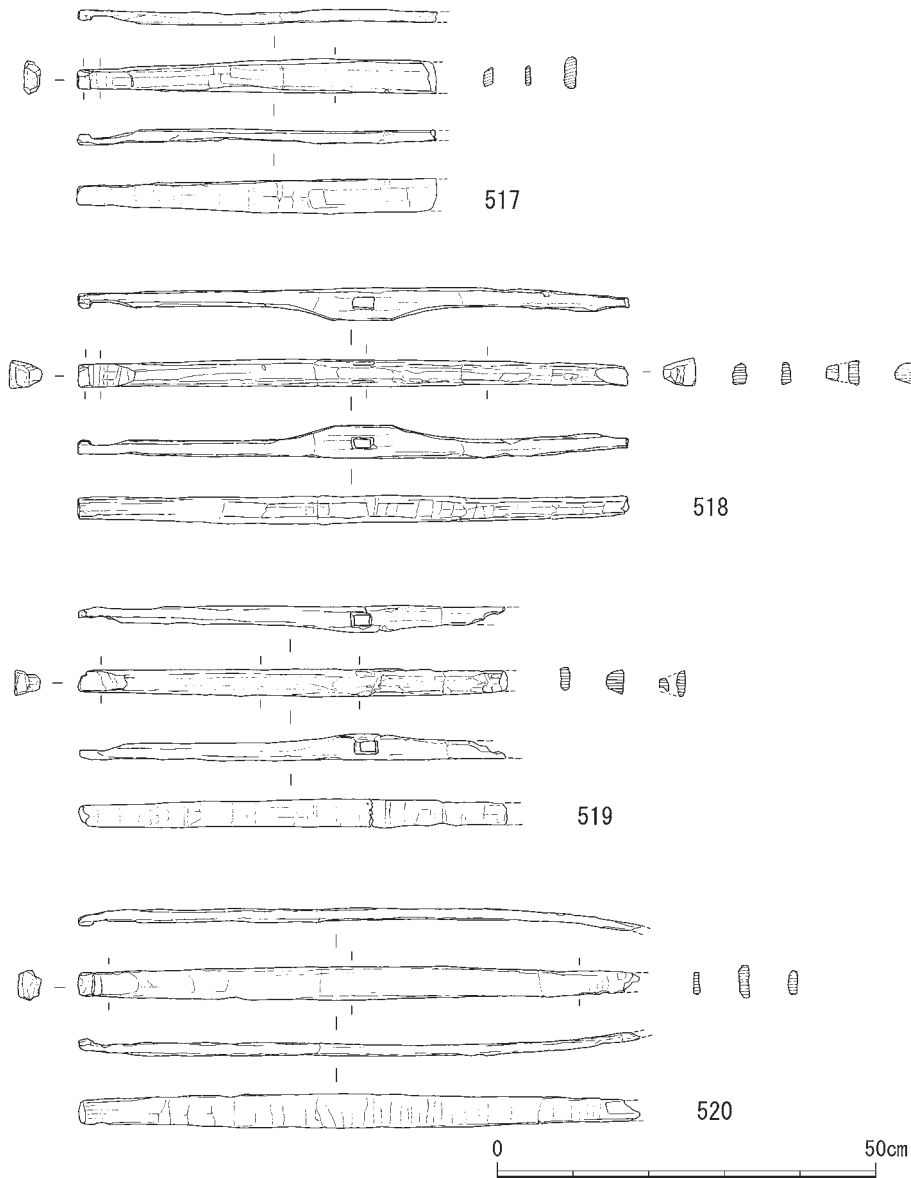
第125図 H地区出土遺物実測図2 (1/4)

ものであるが、本来的にはS D25に伴う遺物であろう。内外面とも緻密なミガキが施される。516は小形器台の脚部である。3方向から透孔が穿たれており、外面は緻密なヨコミガキが施される。

これらの土器はのなかには布留系の器種が含まれておらず、佐山Ⅱ-2～3式、庄内式中段階から新段階の年代が与えられよう。

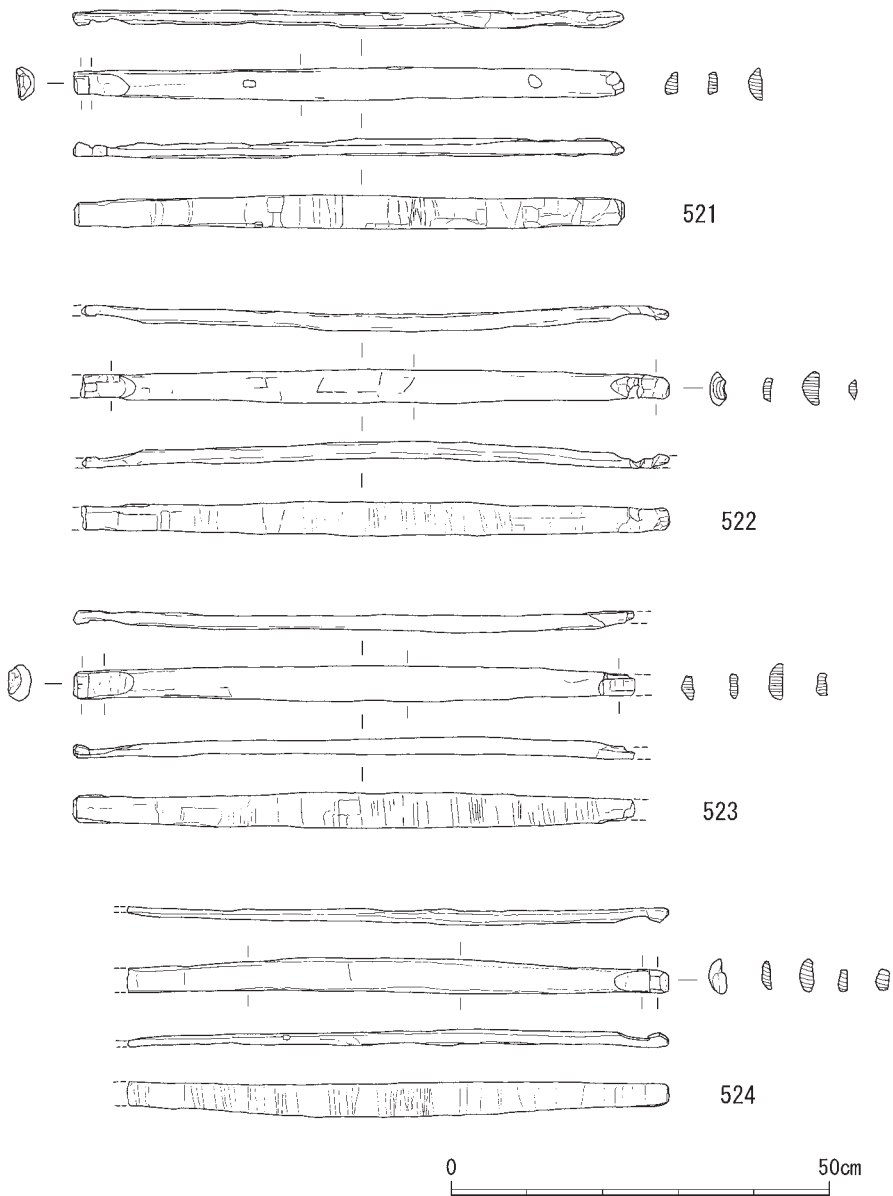
③木製品

H地区S D25を中心に多くの木材、木製品が出土した。逐一出土状況図を作成しながら取り上げ、それぞれ加工の有無等を調べたが、製品まで加工されたものは少なく、出土総量の1割ほどに過ぎない。本報告では加工痕跡をもつものを中心に図化し、多数を占める自然木の一部に加工痕跡を持つものについては、原則、図化していない。

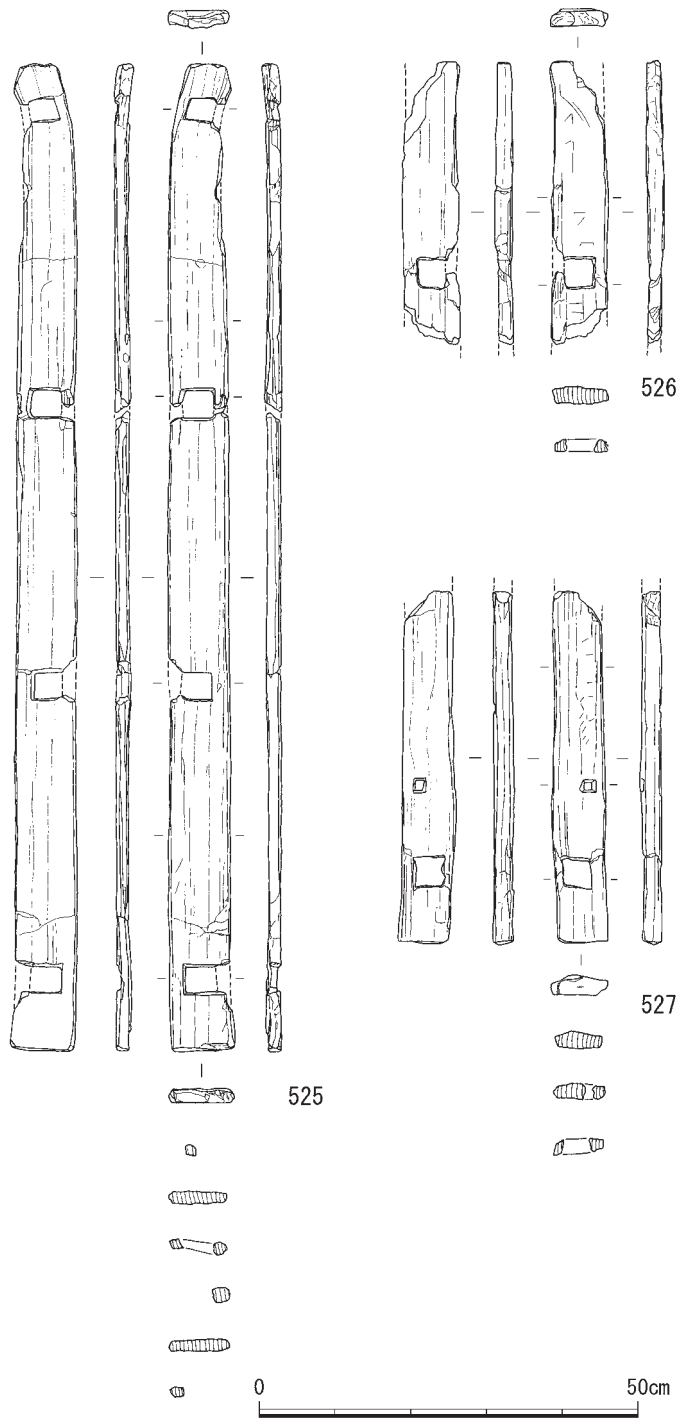


第126図 H地区出土遺物実測図3(1/10)

517～527は方形組合せ木製品の部材である。^(注19)この木製品は側板2枚と横木8本、横木に挟み込まれるへぎ板の部材から構成される。樹種はすべてブナ科シイ属である。類似したものは古殿遺跡での出土例が知られていたものの、中央のへぎ板まで組み合せて出土した例は管見にない。517～524が横木であり、525と526・527が側板となる。それぞれの部材の位置は第129図を参照していただきたい。柱目材で作られる横木は2本で一对をなし、すべてで8本から構成されているが、中央2本の表側部材(横木a:518・519)と他の6本(横木b:517・520～524)では構造に違いがみられる。横木aは平面形状は横木bよりもやや細身であり、側面観は中央部が凸状を呈する。中央の凸部には長辺2.7～2.9、短辺1.8～2.1cmの長方形の貫孔が穿たれている。貫孔の周辺は丁寧に加工されており、本来的には2つの貫孔に通すような別の部材も存在した可能性はあるが残存していなかった。両端は掛り状に加工されている。横木bは、中央部が幅広で先端にかけ



第127図 H地区出土遺物実測図4(1/10)



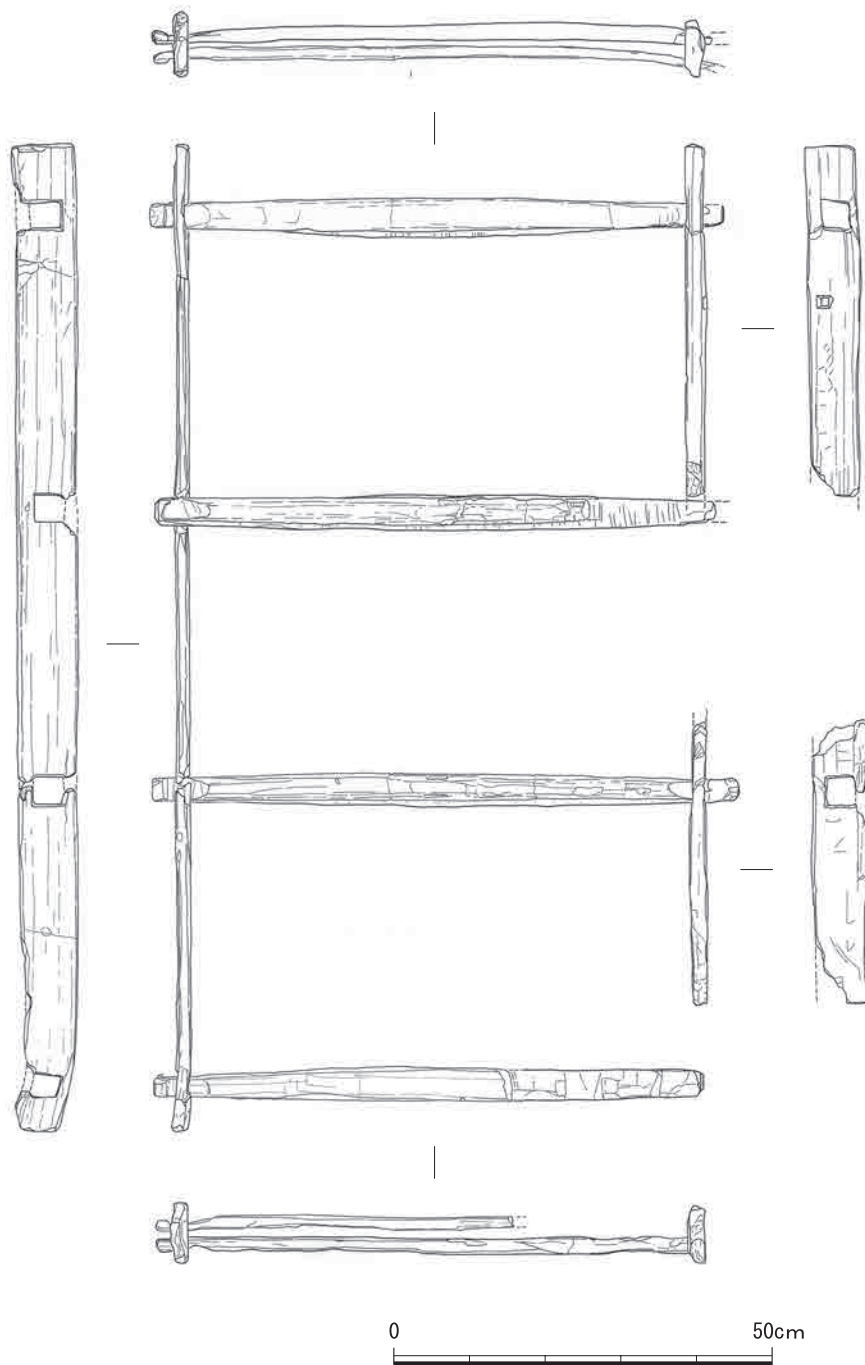
てやや細くなるエンタシス状の平面形状を呈するものであり、断面形状は扁平な蒲鋒状をなす。2本の間にはへぎ板が挟み込まれるが、それに接する裏側は平らに加工されており、へぎ板を挟み込んだときに安定するようになっている。また、両端は横木aと同じように掛り状に加工されており、側板の貫孔に2本一対で通して安定するようになっている。

525～527は側板である。525は完存していたものの、526・527は中央部および片側の端部を欠き、全体の半分ほどしか残存していなかった。525は完存していた側板aである。長さ124cm、幅8cm、厚さ1～2cmを測る。端から8cmをあげ、ほぼ4cm四方の貫孔が4孔穿たれている。出土した時にはこの貫孔に横木が2本ずつ通されており、組み合った状態であった。もう一方の側板bは全体の半分ほどは失われているが、側板aと同じような法量であった

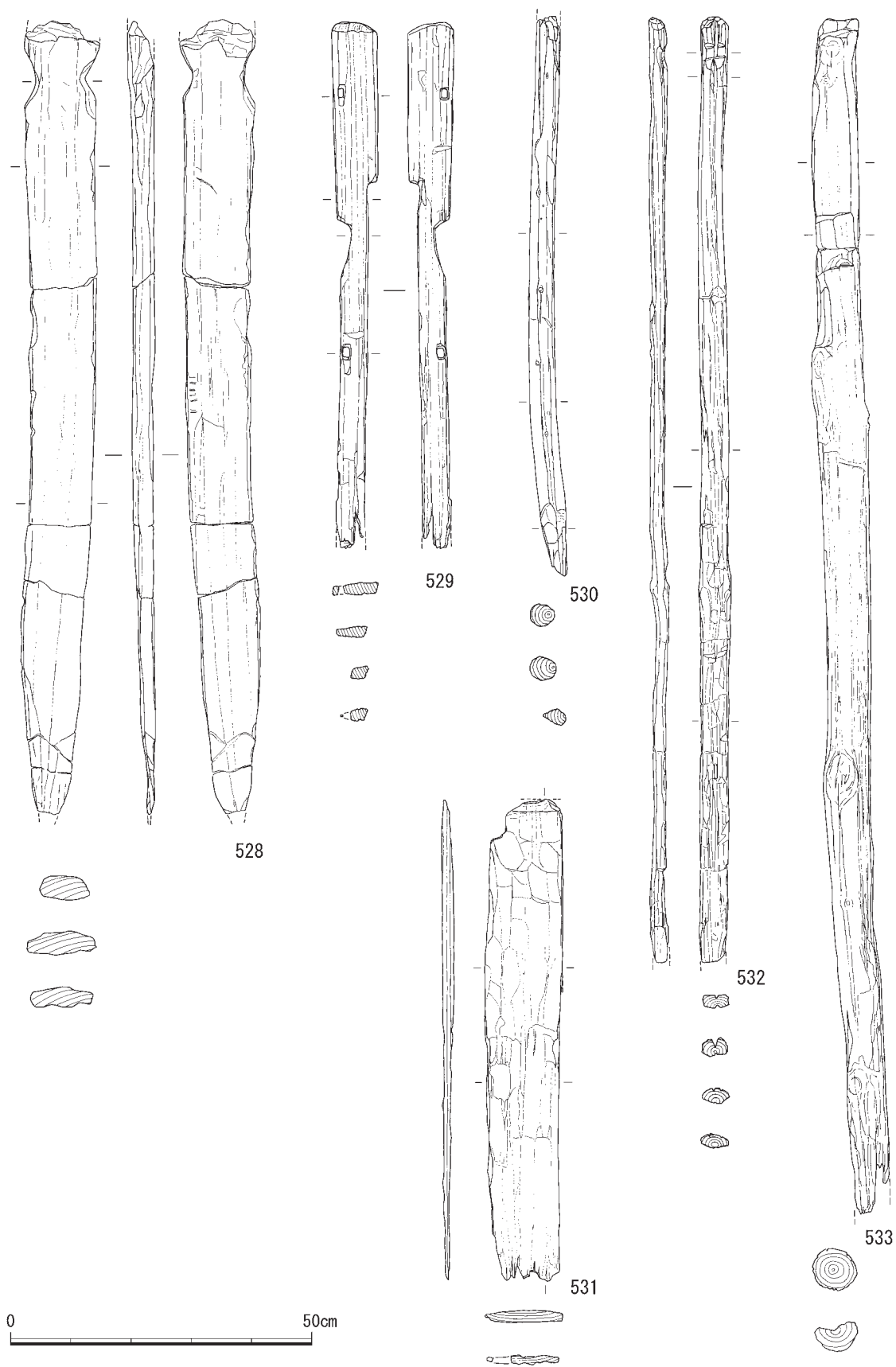
第128図 H地区出土遺物実測図5 (1/10)

と考えられる。異なっているのは、板端と最も外側の貫孔の間に1辺1.5cmの正方形の小孔が穿たれていることである。この小孔は側板2の片側のみに認められるが、先述の古殿遺跡の例を参考にすると、本来は両側にあったものと考えられる。小孔は内側のすり減りが顕著であり、一方から何らかの部材を通すような用途であった可能性が高い。小孔の周辺には有機質や漆等の付着物は認められなかった。横木の間には挟み込まれていたのはへぎ板の部材である。1枚1枚の厚さは厚くても1cm以下と薄く、幅は約5cm前後にまとまっており、部分的には2、3枚重なった

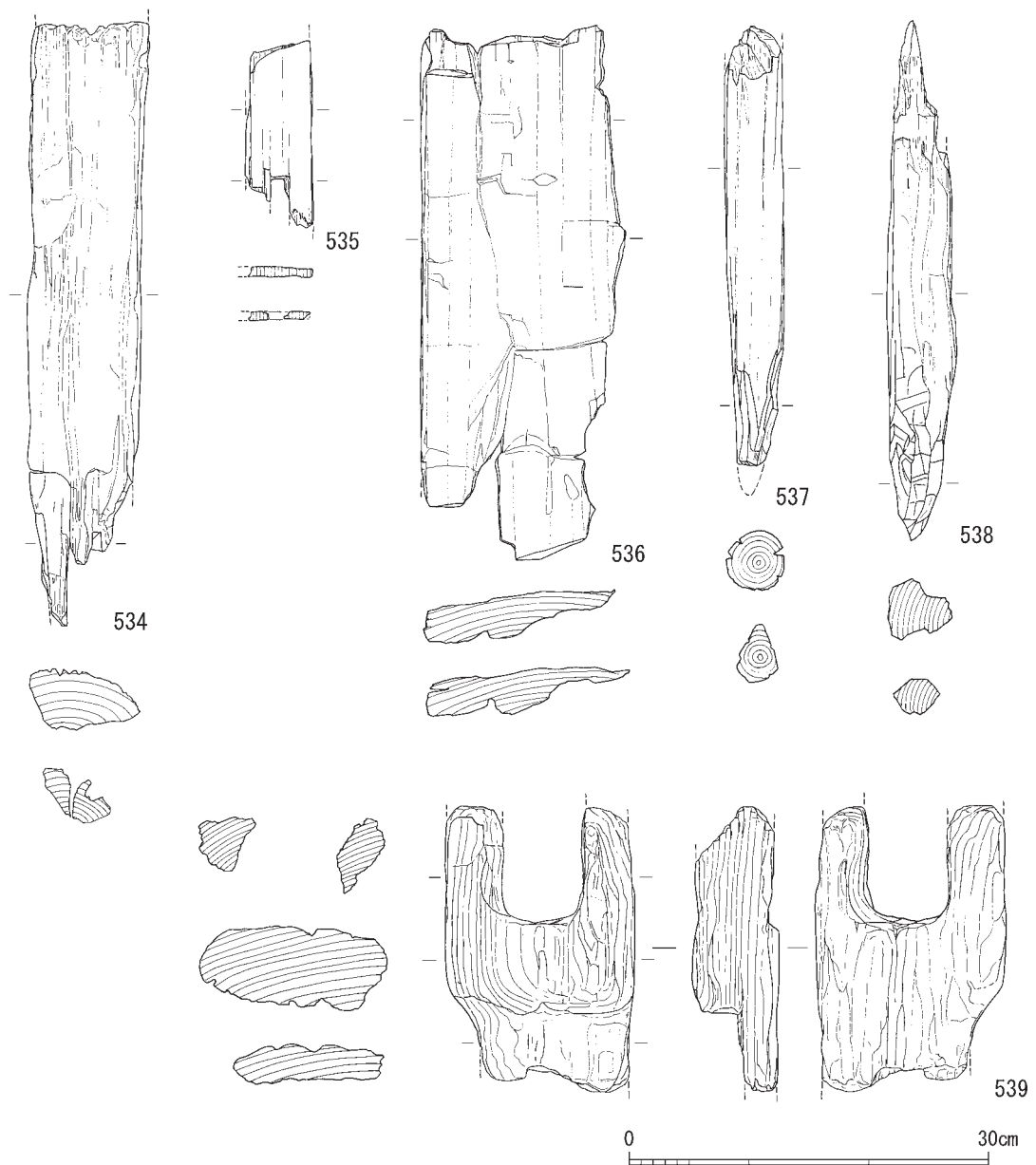
状態であった。一部のものは樹皮に近い材が使用されているため檜皮状をなす。長さは130cmほどあり、長辺方向には継がれていない。また、残存状態の良い側ではへぎ板の端部が切りそろえられていることがわかり、規格性がある部材であったことがうかがわれる。以上のようにこの木製品は側板2枚と横木8本、間に挟み込まれるへぎ板から構成される。これほど残存状況に恵まれた例は管見にない。



第129図 H地区方形組合せ木製品復元図(1/10)
(へぎ板は図示していない)



第130図 H地区出土遺物実測図6(1/10)



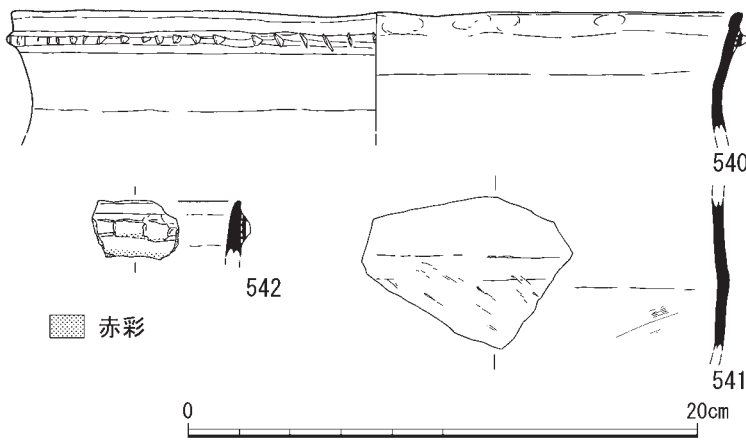
第131図 H地区出土遺物実測図7 (1/6)

528・529・531・535は板状の部材である。528は残存長131.6cmをはかる板目材の製品である。上端は欠損している。先端にかけて杭状になるように徐々に薄くなり、最も厚い部分で4cm、先端部は厚さ0.3cmほどであり、非常に薄く加工されている。上部はくびれ状に細くなっており、幅10cmほどである。用途は不明であるが、建築部材の一部であろうか。529も残存長約59cmの板材である。端には2つの小孔が穿たれ、中央部にはへ字状の抉りがある。534は断面形状が蒲鉾状を呈する板目材である。先端が杭状に加工されているようだが、欠損が大きく判然としない。535は厚さ0.6~0.9cmほどの板目材である。方形の貫孔が一か所に認められる。536は厚さ3.0~3.5cmほどの板目材である。反りが大きく、接合することが困難であったため図化できなかったが、ほかにも同一個体と考えられる材が存在している。

530・532・533は棒状の部材を図化した。530は芯持ち丸木の棒材である。節は除去されており、部分的に面取りを行ったような加工痕跡をうかがうことができる。532は残存長137.1cmを測る芯持ちの部材である。径4cm程の材を縦に削ることによって使用している。端部には柄状の加工が認められる。単独の建築部材としては強度を欠くため、何らかの部材の構成要素の一部、もしくは建築部材以外の木製品の可能性も考えられる。533は残存長170cmを超える長い材である。節は除去されているものの、顕著な加工は見られず、部分的に抉りが認められる。539は板目の不明木製品である。基部以下は欠損しているため全形は分からないが、平面形状は凹状を呈する。建築部材の一部であろうか。S X56の埋土から出土した。

S D25からはこのほかに桃核が4点出土している。

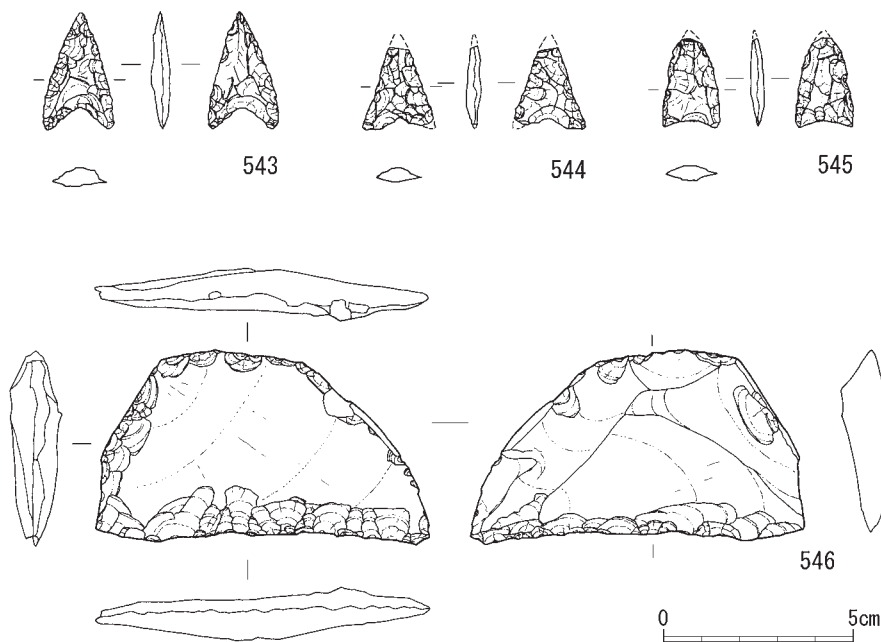
539はH2区から出土した杭状の製品である。帰属時期はわからないが、島畑に伴うものである可能性が高い。



④縄文土器(第132図)

S X37・S X39でややまとまって破片が出土した。S X37・39からはチョコレート色の胎土に角閃石、雲母を多量に含む胎土で製作されたものが2点含まれる。ただし、図化することができたのは2点に過ぎない。540はS X37か

第132図 H地区出土遺物実測図8(1/3)



第133図 H地区出土遺物実測図9(1/2)

ら出土した深鉢口頸部である。凸帯は端部から0.6cm下がった位置に貼り付けられ、上下からナデつけることによって接合する。刻目は小さいD字形を呈する部分と、D字が傾き、I字状を呈する部分がある。541もS X37から出土した深鉢の口頸部から胴部にかけての破片である。接点はないが、540と同一個体である可能性が高い。屈曲部の稜は不明瞭で、下半にはケズリが認められる。

542はS D25から出土した深鉢口頸部である。凸帯の貼付けと口縁端部の調整は一度のナデつけで行われている。凸帯には長いD字形の刻目が施される。S D25から出土した縄文土器はこの1点のみであり、混入であろう。540・541が凸帯文2期後半、542は凸帯文3期に位置づけられる。

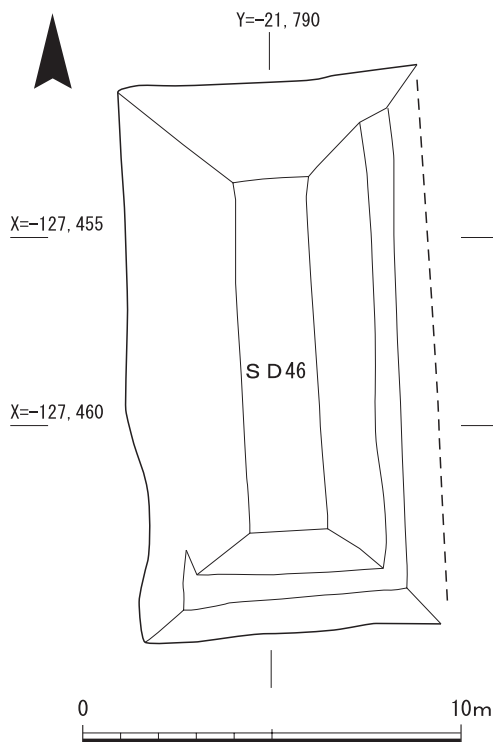
⑤石器(第133図)

石器はS D25の埋土中から凹基式の鏃が3点出土した。543は長辺3.09cm、幅1.86cm、重量2.1gを測る。544は基部の作り出しが顕著ではないものであり、先端をわずかに欠く。残存長2.3cm、幅1.52cm、重量1.4gを測る。545もわずかに先端を欠損する。残存長2.17cm、幅1.88cm、重量1.2gを測る。546は溝状遺構S D48の底に掘削された溝S D66から出土したサヌカイト製のスクレイパーである。長辺8.8cm、短辺8.8cm、重量57.5gを測る。

(桐井理揮)

2) L3区の調査

L3区は平成26年度に調査を実施したL1区の南東端に接し、長辺14.6m、幅8mで、ほぼ矩形の狭小な調査区である(第134図)。平成27年度に実施した下水主遺跡第8次調査L2区の調査で検出した溝状遺構S D46の底面の延長部分を検出した。調査面積は110㎡である。



調査前は工事に伴う盛土が若干認められたものの、本来の地表面の標高は15.0mである。現地表下1.8mで、溝状遺構の底面を検出した。溝底は基盤層である緑灰色シルトに達している。なお、出土遺物は小規模な調査のため、細片化した土師器等がごくわずかしか出土していない。

(筒井崇史)

第134図 L3区遺構配置図(1/200)

3) E地区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

平成24・25年度に調査を実施したE地区で、新た

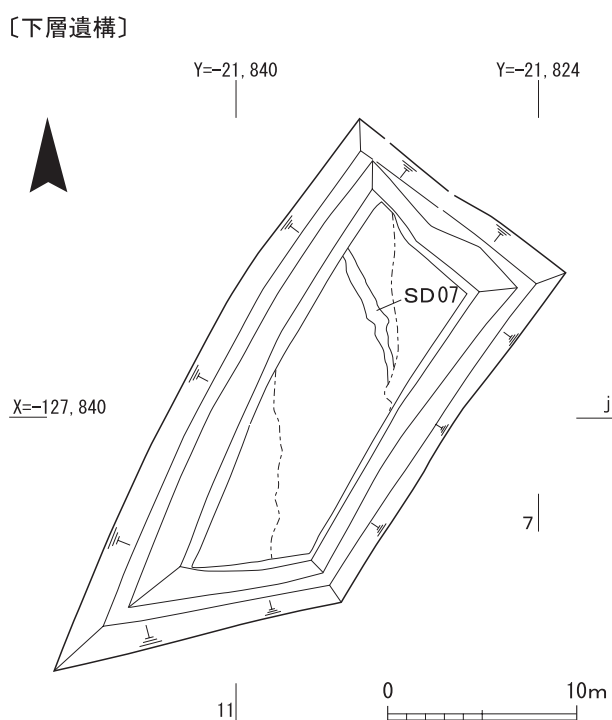
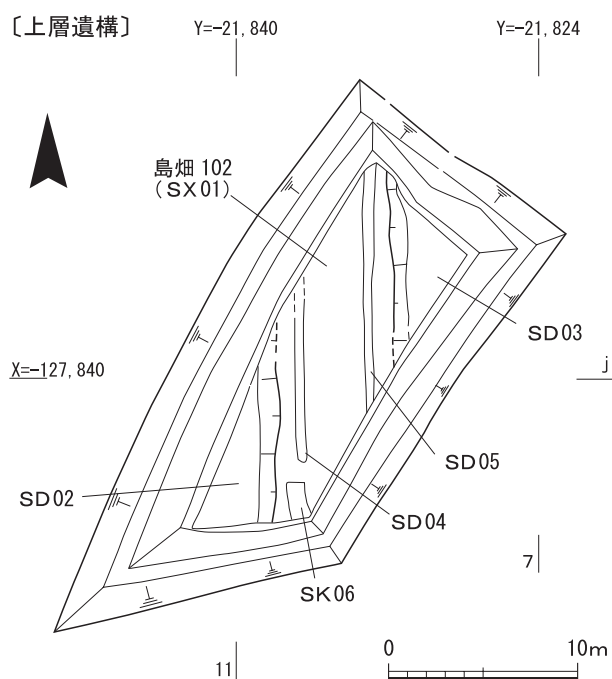
にE9・E10区の2か所の調査区を設けて調査を実施した(第92図)。E9区は、北西辺33.5m、南東辺21.0m、幅13.5mの矩形を呈する。調査区はおおむね北東から南東方向に延びるが、南西部はやや南に広がる。調査前には、工事に伴う盛土が厚く盛られていたが、本来の地表面の標高は15.0~15.2mである。現地表下0.9mで、上層遺構として島畑1基とそれに伴う溝状遺構2条を検出した(第135図上段)。また、島畑の上面から約5cm下げて、下層遺構として溝1条を検出した(第135図下段)。さらに約0.5m下げて下層遺構以前の溝状を呈する落ち込み等を確認したが、これらについては遺物の出土もなく、遺構と断定できなかった。調査面積は365㎡である。出土遺物は整理箱にしてわずかに1箱である。

E10区は、長辺14m、幅8.5mで、ほぼ矩形の狭小な調査区である。E9区と同様、工事に伴う盛土が認められたが、本来の地表面の標高は15.4mである。現地表下1.2mで、島畑1基とそれに伴うと推定される溝状遺構1条を検出した(第136図)。調査面積は115㎡である。出土遺物は認められなかった。

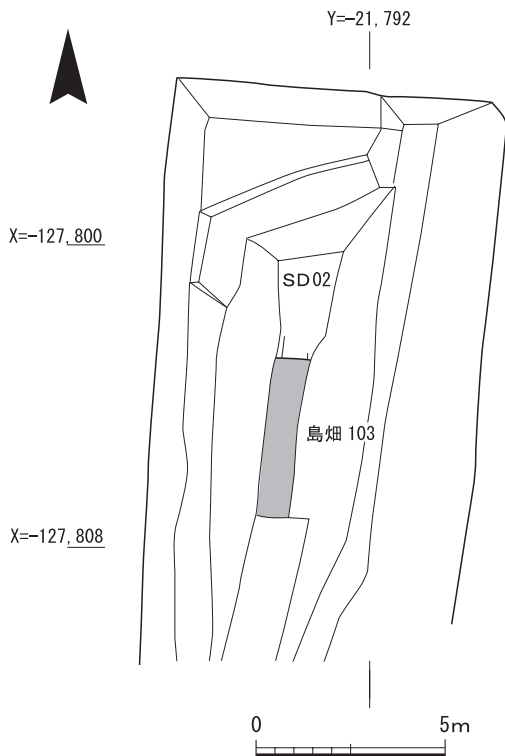
(2) 検出遺構

① E9区

島畑102(第135図) 調査区のほぼ中央で検出したH4-h9区ほか。南北方向の島畑であるが、南北両端は調査区外となる。検出長19.0m、基部幅8.0m、上面幅6.1m、高さ0.6mである。島畑上面の標高は14.1mである。島畑の上面では2条の素掘り溝を検出した(SD04・05)。素掘り溝は検出長8.5~13.1m、幅0.5m前後、深さ0.15mである。遺物は土器片が少量出土したのみで、詳



第135図 E9区遺構配置図(1/400)



第136図 E10区遺構配置図(1/200)

は灰色シルトである。遺物は土師器の皿ないし杯の破片が出土したが、小破片のため時期は不明である。

②E10区

島畑103(第136図) 狭小な調査区のほぼ全域で検出した(H3-a24区ほか)。調査区が狭いため全容は不明である。検出規模は南北4.2m、東西0.9mである。

溝状遺構SD02(第136図) 調査区の北端部で検出した(H3-a24区)。調査範囲が狭く、落ち込みを確認したのみで規模等は不明である。

(3)出土遺物

E9・E10区ともに遺物の出土は非常に少なく、整理箱にして1箱にも満たない。出土した遺物としては土師器や須恵器などの細片が少量出土した過ぎないため、図化には至らなかった。

(筒井崇史)

細な時期は不明である。

溝状遺構SD02(第135図) 島畑102の西側で検出した(H4-j10区ほか)。検出長10.7m、検出幅4.3m、深さ0.6mである。溝底の標高は13.5mである。遺物は土器片が少量出土したのみで、詳細な時期は不明である。

溝状遺構SD03(第135図) 島畑102の東側で検出した(H4-g9区ほか)。検出長10.3m、検出幅3.9m、深さ0.5mである。溝底の標高は13.5mである。遺物は土器片が少量出土したのみで、詳細な時期は不明である。

溝SD07(第135図) 島畑102の上面から約5cm下層で検出した(H4-h10区ほか)。北に対して22°西に振る。検出長7.3m、幅0.4~0.7m、深さ0.15m前後である。埋土

7. 水主神社東遺跡第6次

1) はじめに

本節では、平成26年度に調査を実施した水主神社東遺跡第6次調査の成果について報告する。調査地点はB4区の1か所のみである。調査の結果、中世に形成された鳥畑を2基検出した。また、下層で縄文土器などが出土する谷地形を検出した。

2) B4区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

B4区は、北西辺27m、南東辺56m、幅13～16mの台形状を呈する調査区である。調査区の北側には平成24・25年度に調査を実施したA3区が、西側にB1～B3区が位置する。調査前には工事に伴う盛土や地盤改良が認められた。工事前の現地表面の標高はおよそ15.6mである。現地表下約1.7mで、中世の鳥畑2基や溝状遺構1条などを検出した(第137図上段)。また、鳥畑を0.6mほど下げると弥生時代の溝や縄文土器などが出土する谷地形などを検出した(第137図下段)。調査面積は590㎡である。出土遺物は整理箱で4箱である。

基本的な層序を北西壁土層断面(第138図)で説明すると、工事前の盛土を取り除くと耕作土ないし床土と思われる灰白色粗粒砂やオリーブ褐色中粒砂、灰オリーブ色極細粒砂など(2～4・16～20層など)が堆積する。これらを除去すると鳥畑と溝状遺構を確認した。鳥畑部分では暗緑灰色ないし暗青灰色シルト(22・23層)の厚い堆積があり、鳥畑の盛土と思われる。これらを除去して最初期の鳥畑を確認した。また、溝状遺構の部分ではオリーブ黒色や灰色、オリーブ灰色を呈する極細粒砂、シルト、粘土の各層(5～13層)が堆積する。13層の下層で基盤層であるオリーブ灰色粘土(15層)を確認した。さらに鳥畑部分の下層では、後述する谷状地形に由来する、暗灰黄色や黒褐色、灰色などのシルトないし粘土の層(26～39層)などの層序が堆積する。

(2) 検出遺構

① 上層遺構

鳥畑30(S X03)(第139図) 調査区の西半部で検出した(J3-e10区ほか)。鳥畑30は平成25年度のB3区で検出した鳥畑と同一の鳥畑と推定される。鳥畑の一部を検出したにとどまり、検出長21.2m、基部検出幅13.4m、上面検出幅12.4m、高さ0.5mである。鳥畑上面の標高は14.3mである。鳥畑の上面で素掘り溝等は検出しなかった。遺物は少量の土器片が出土した。詳細な時期は不明であるが、中世前半であろう。

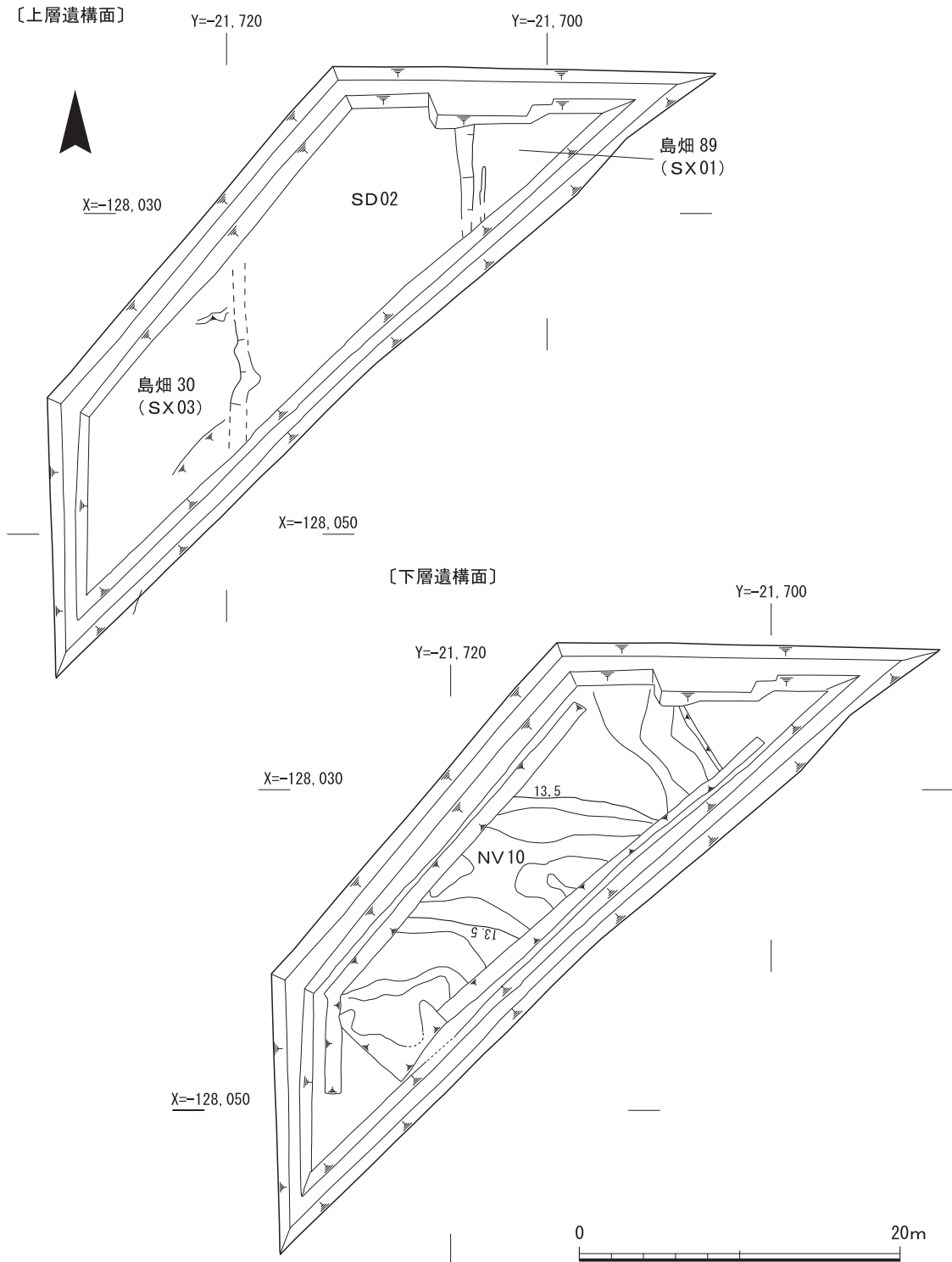
鳥畑89(S X01)(第140図) 調査区の東半部で検出した(J2-g25区ほか)。鳥畑の一部を検出したにとどまり、検出長8.9m、基部検出幅11.1m、上面検出幅9.8m、高さ0.4mである。鳥畑上面の標高は14.4mである。鳥畑の上面で素掘り溝を1条検出した。素掘り溝は検出長4.3m、幅0.3m前後、深さ0.1mである。遺物は少量の土器片が出土した。時期は不明であるが、中世前半と推定される。

溝状遺構SD02(第137図上段) 調査区の中央で検出した(J3-h2区ほか)。南北方向に延びる。

検出長20.3m、幅14.7m、深さ0.5m前後である。溝底の標高はおよそ13.9mである。遺物は土師器や瓦器などの小破片が出土した。時期は中世であろうである。

②下層遺構

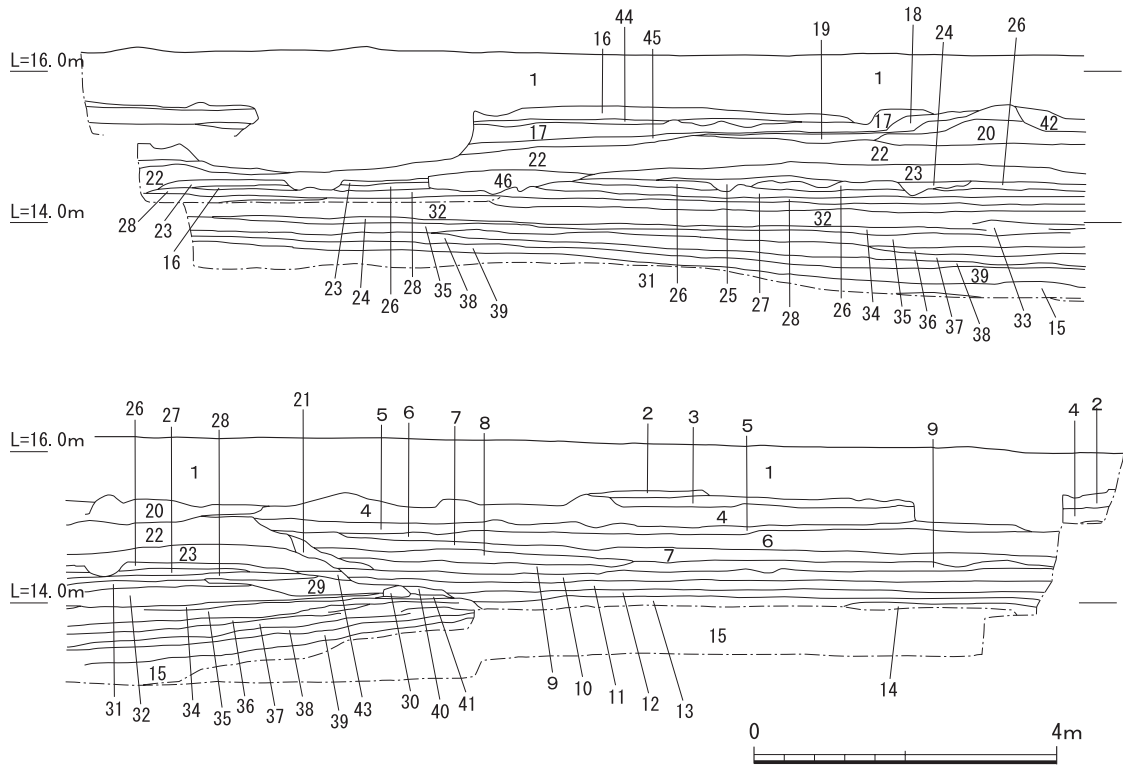
溝SD04(第141図) 島畑89の下層で検出した(J3-g1・g2区)。検出長4.2m、幅0.65m、深さ0.05mを測り、埋土から弥生土器の小破片が出土した。北側に位置するA3区の調査で検出した



第137図 B4区遺構配置図(1/400)

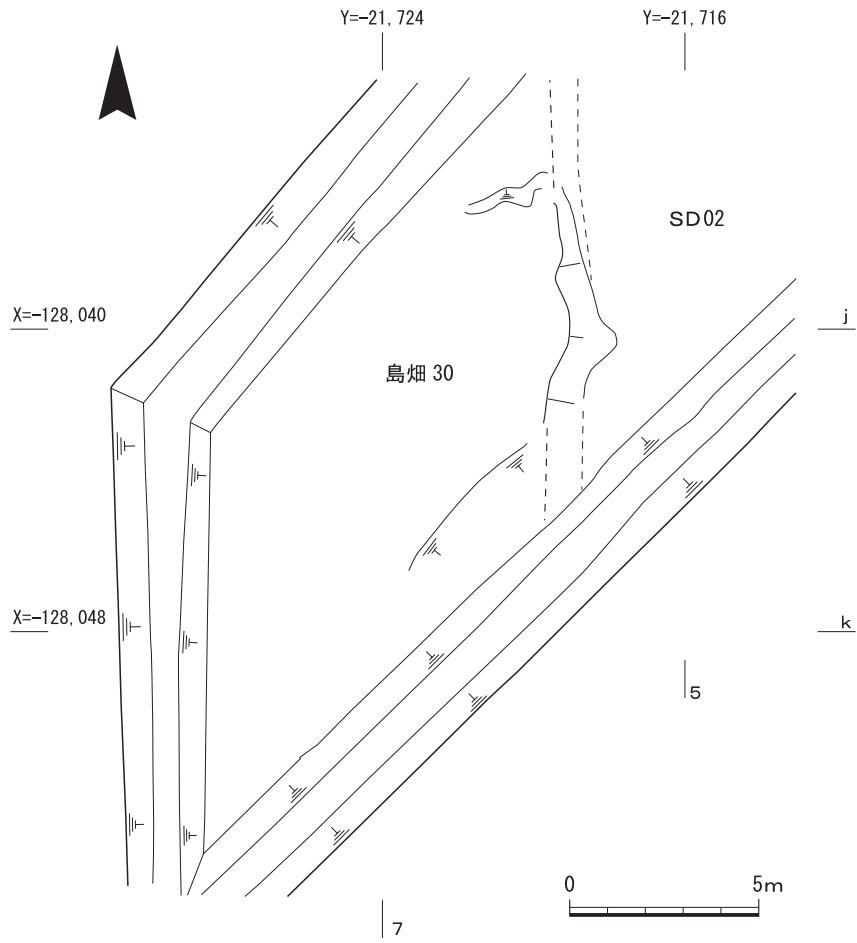
弥生時代の溝の延長部に当たるとされる。

谷状地形NV10(第137図下段) NV10は調査区の南半部で検出した(J3-i3区ほか)。NV10は、北東から南西に延びる浅い谷状を呈しており、検出長16.4m、幅11.8m、深さ0.6m前後である。この谷状地形の北肩で縄文時代晩期の土器片が出土した。これらは遺構に伴うものではなく、自

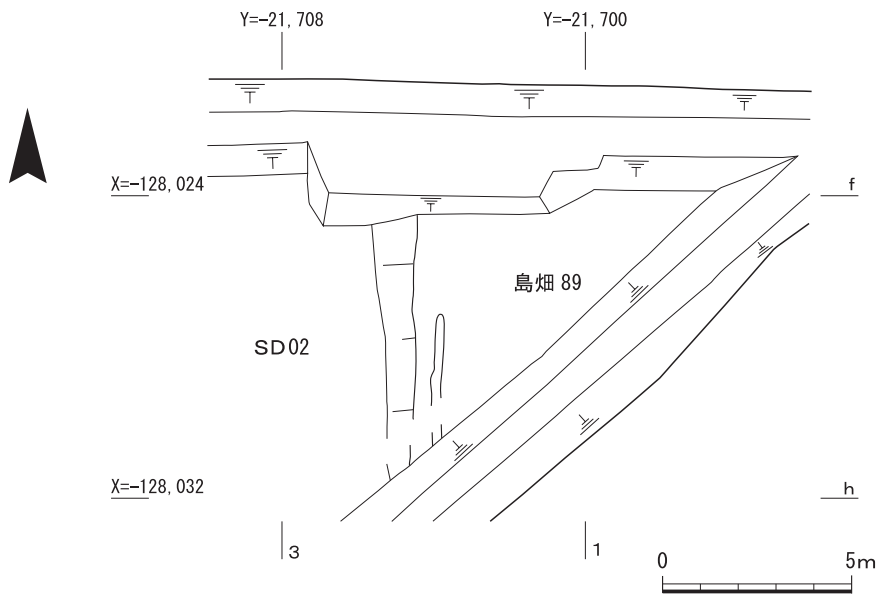


- | | |
|---|---|
| 1. 盛土ないし改良土 | 24. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト |
| 2. 灰白色 (7.5Y7/2) 粗粒砂 (3層混じる) | 25. 暗オリーブ灰色 (2.5Y4/1) シルト |
| 3. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粗粒砂混じりシルト | 26. オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト |
| 4. 灰白色 (2.5Y7/1) 粗粒砂ないし極粗粒砂 | 27. 灰色 (7.5Y4/1) シルト |
| 5. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 極細粒砂 | 28. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) シルト～粘土 |
| 6. 灰色 (10Y4/1) シルト | 29. オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘土 |
| 7. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細粒砂 | 30. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 細粒砂～極細粒砂 |
| 8. 灰色 (10Y4/1) 極細粒砂 | 31. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト |
| 9. 灰色 (10Y4/1) 極細粒砂
〈暗オリーブ色 (5Y4/4) 中粒砂を層状に含む〉 | 32. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト |
| 10. 暗オリーブ色 (2.5GY4/1) シルト～極細粒砂 | 33. 灰色 (10Y4/1) 極細粒砂 |
| 11. 灰色 (10Y4/1) 細粒砂～極細粒砂 | 34. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト
〈オリーブ黄色 (5Y6/4) 細粒砂が層状に混じる〉 |
| 12. オリーブ黒色 (10Y3/1) シルトないし粘土 | 35. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト |
| 13. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘土 | 36. 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト |
| 14. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘土
〈縄文土器を含む〉 | 37. 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト |
| 15. オリーブ灰色 (5GY6/1) 粘土 (基盤層) | 38. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト～極細粒砂 |
| 16. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂～細粒砂 | 39. 灰色 (5Y4/1) 粘土 (谷状地形の最下層) |
| 17. 灰オリーブ色 (7.5Y9/2) 細粒砂 (42層が層状に混じる) | 40. 灰色 (10Y4/1) 極細粒砂 |
| 18. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 極細粒砂 | 41. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) シルト |
| 19. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 極細粒砂 | 42. 灰色 (7.5Y6/1) 極粗粒砂 |
| 20. 灰色 (10Y4/1) 極細粒砂 | 43. 灰色 (10Y4/1) シルト |
| 21. 暗オリーブ色 (5GY4/1) 極細粒砂 | 44. オリーブ灰色 (10Y6/2) 極細粒砂 |
| 22. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト | 45. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 極細粒砂 (灰白色 (5Y7/2) 細粒砂～中粒砂を含む) |
| 23. 暗青灰色 (10BG4/1) シルト | 46. 暗青灰色 (10BG3/1) シルト～極細粒砂 |

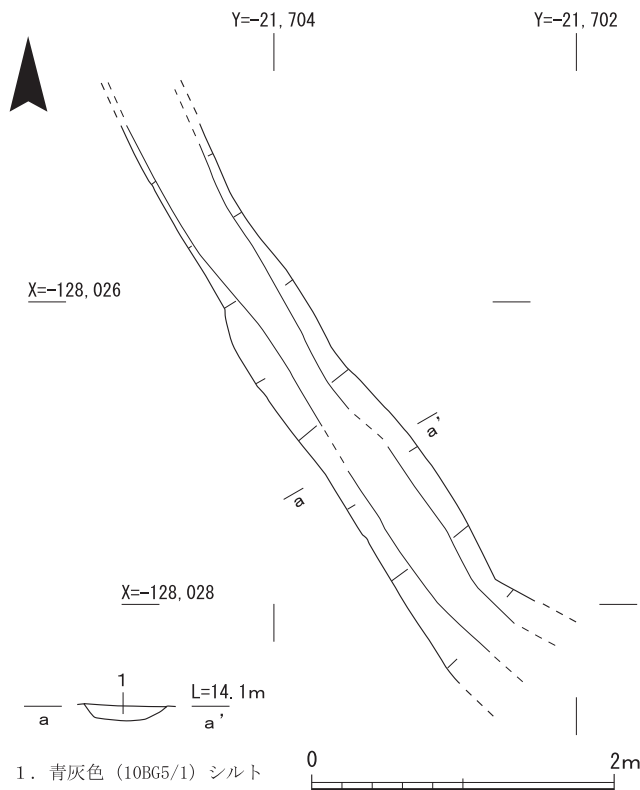
第138図 B4区北西壁土層断面図(1/100)



第139図 B4区島畑30平面図(1/200)



第140図 B4区島畑89平面図(1/200)



第141図 B4区溝S D04実測図(1/50)

然地形の傾斜面に堆積した遺物と推定される。

(岡崎研一・筒井崇史)

(3) 出土遺物

B4区では、鳥畑の検出や溝状遺構の掘削などで土師器や須恵器、瓦器などの細片が出土した。また、溝S D04では弥生土器の小破片が出土したが、詳細な時期は不明である。さらに谷状地形NV10の周辺で出土した縄文土器は、いずれも、これまで下水主遺跡や水主神社東遺跡で出土している縄文時代晩期の凸帯文土器である。時期的には晩期後葉と推定される。いずれの土器は細片のため、図示するには至らなかった。

(筒井崇史)

8. 水主神社東遺跡第7次

1) はじめに

本節では、平成27年度に調査を実施した水主神社東遺跡第7次調査の成果について報告する。調査地点はD地区の1か所のみである。調査の結果、中世に形成された鳥畑を2基検出した。また、詳細な時期は不明であるが、中層遺構として溝1条ほか検出した。さらに、下層遺構として溝1条と不明遺構1か所を検出した(第142図下段)。

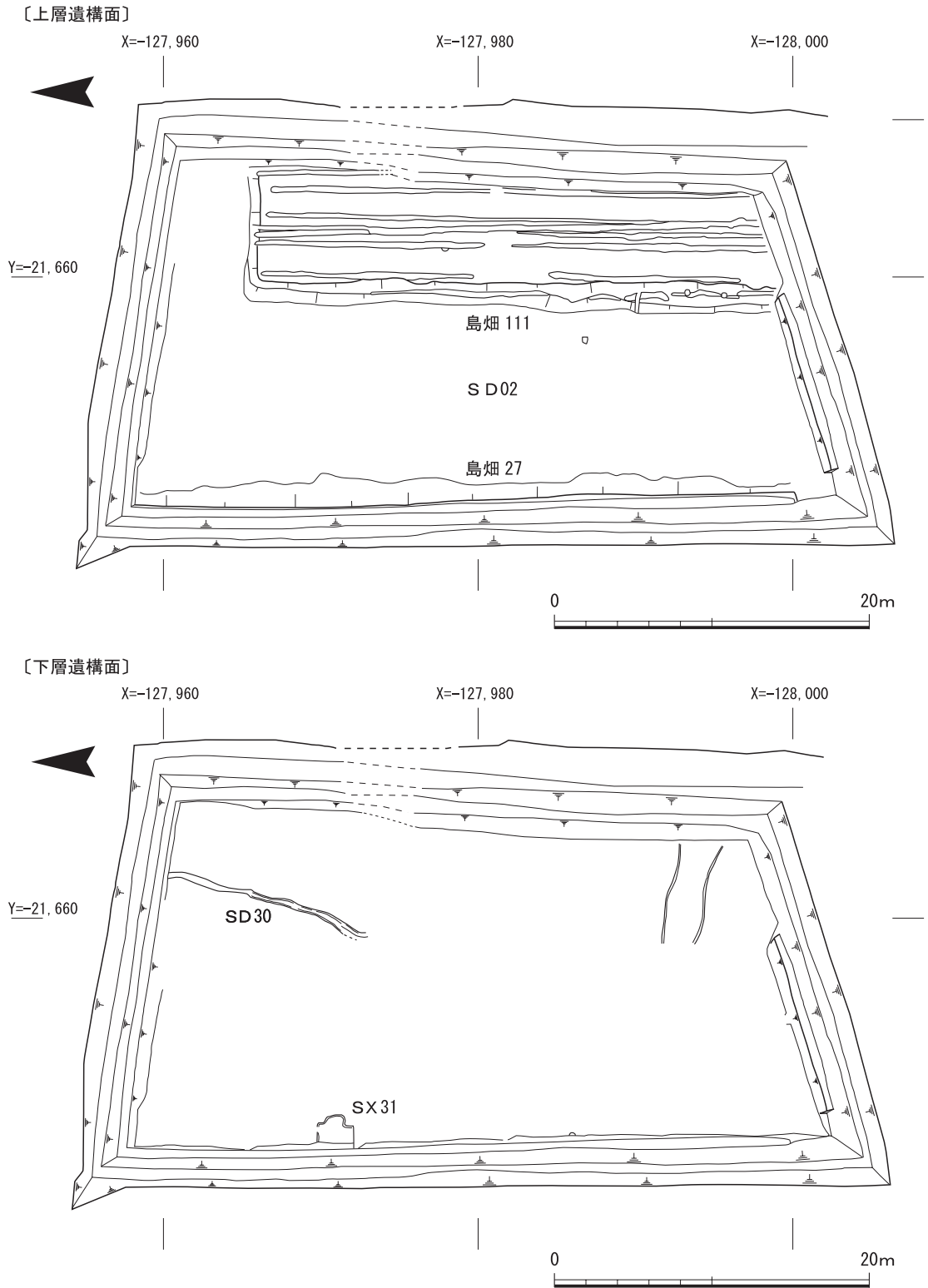
2) D地区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

D地区は、南北長51m、東西幅28mの矩形を呈する調査区である。調査区の東側には平成25年度に調査を実施したA3区が位置する。新名神高速道路整備事業が始まる以前から本来の水田面の上に2.5m程度の盛土が行われており、資材置き場や駐車場として利用されていた。盛土以前の水田面の標高はおよそ15.5mである。旧水田面下約0.7mで、中世の鳥畑2基や溝状遺構1条などを検出した(第142図上段)。また、鳥畑を0.2mほど下げると中層遺構として時期不明の溝を1条と土坑状遺構5基を検出した(第147図)。さらに0.2mほど下げるとやはり時期不明の溝1条を

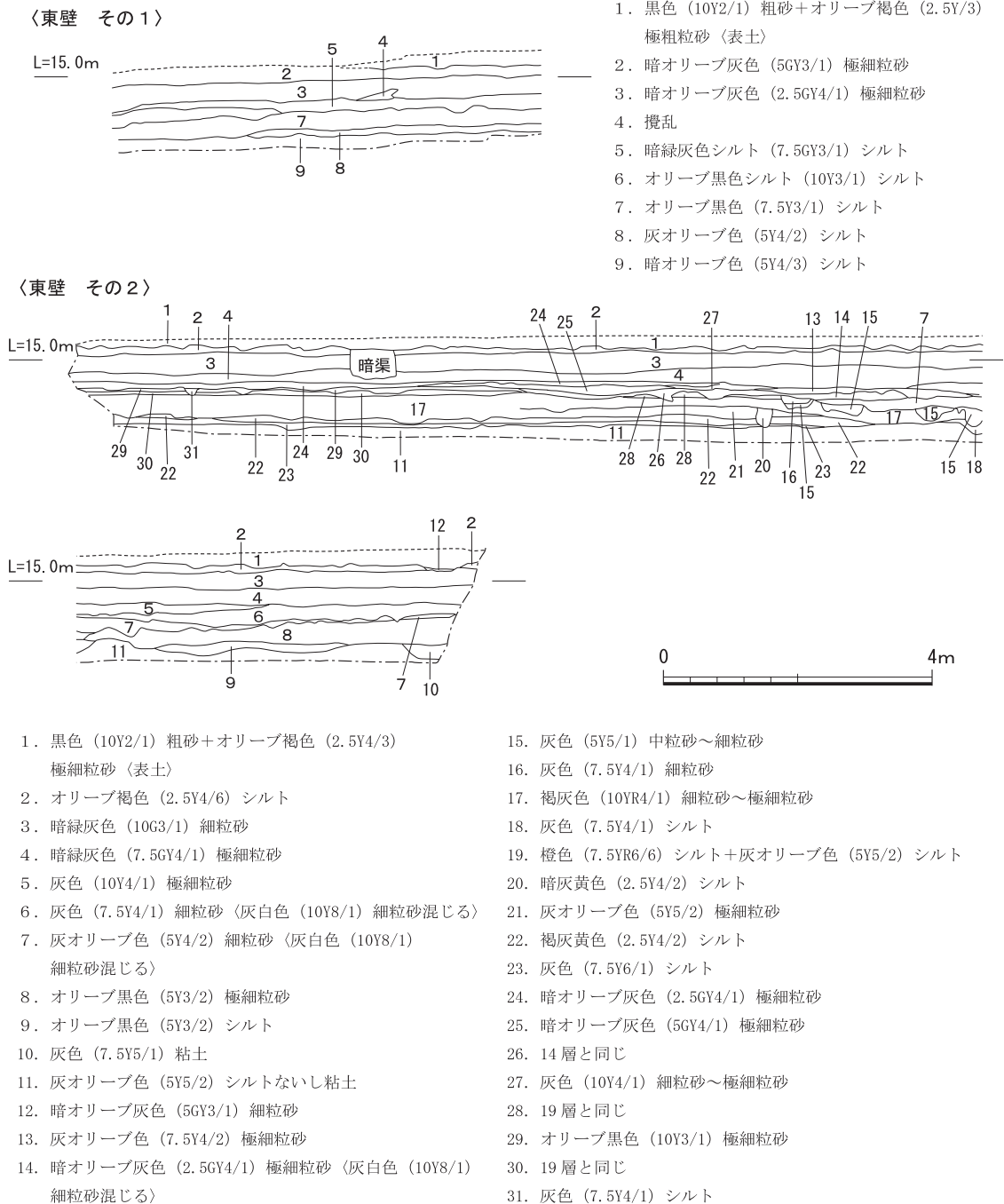
検出した。なお、これまでの周辺の調査で確認されていた縄文時代の遺物は確認されなかった。調査面積は1,280㎡である。出土遺物は整理箱で1箱である。

基本的な層序(第144図)は、調査前に置かれていた盛土を除去すると、耕作土または床土と判断されるにぶい黄褐色細粒砂(2層)が確認できる。これらを除去すると、東側で島畑を、西側で



第142図 D地区遺構配置図(1/400)

溝状遺構をそれぞれ確認した。島畑は盛土である灰色や明黄褐色のシルト(6・7層)を除去すると、最も古い島畑をにぶい褐色極細粒砂(8層)上面で検出した。8層を除去すると、中層遺構面であるにぶい褐色極細粒砂(12層)を確認した。これを除去すると灰オリーブ色極細粒砂～シルト(20層)ないし灰褐色極細粒砂(14層)の下層遺構面となる。一方、溝状遺構では暗灰黄色極細粒砂(4層)や灰色シルト(5・6層)などが堆積している。これらを除去した溝状遺構の底は明黄褐色極細粒砂(15層)となり、おおむね島畑側の下層遺構面に対応している。これらを除去すると、基盤層である褐灰色シルト(16層)や灰白色シルト(17・18層)が確認できる。



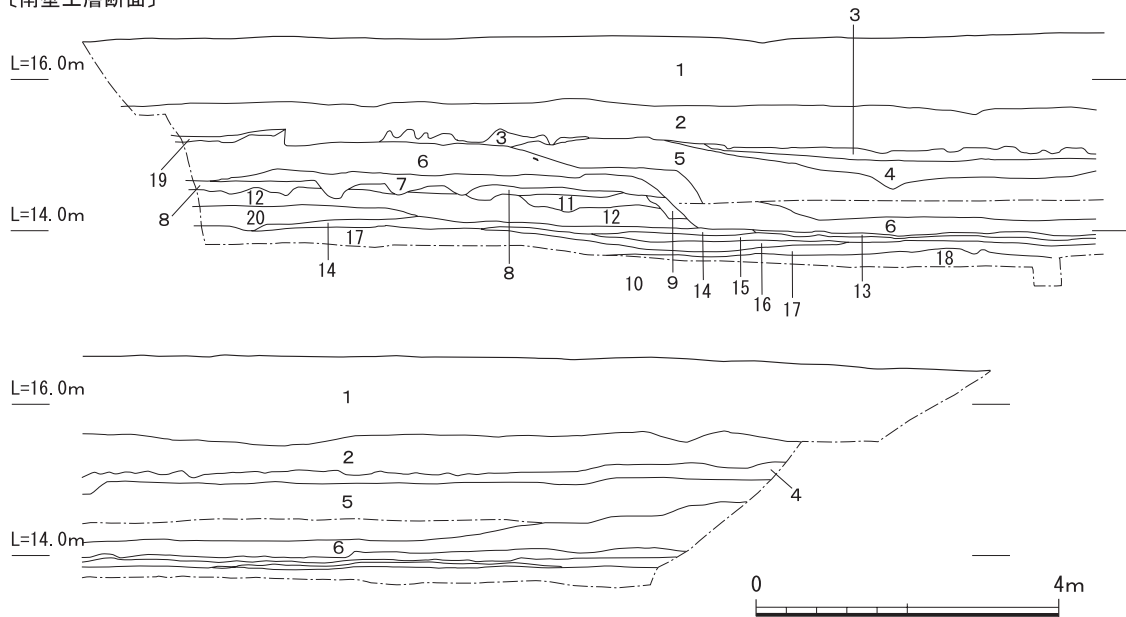
第143図 D地区東壁土層断面図(1/100)

(2) 検出遺構

① 上層遺構

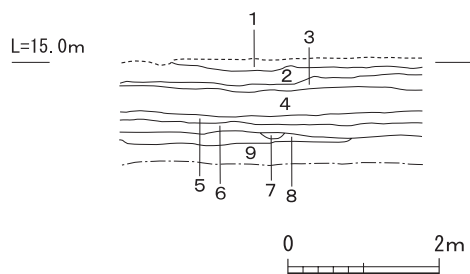
島畑111 (第148図) 調査区の東半部で検出した(I2-q14区ほか)。南北方向の島畑であるが、南端および東端が調査区外となる。島畑の断面の状況は、基本層序で述べたとおりである。検出長33.2m、基部検出幅8.6m、上面検出幅5.8~7.2m、高さ0.5mである。島畑上面の標高はおおよそ14.6mである。島畑の上面では10条前後の素掘り溝を検出した。素掘り溝は検出長12.2~32.0m、幅0.25~0.55m、深さ0.1~0.2mである。島畑の時期を示す遺物はほとんどないが、溝状遺構など

〔南壁土層断面〕



- | | |
|---|---|
| 1. 盛土 | 11. 灰白色 (2.5Y7/1) 極細粒砂 (浅黄色 (2.5Y7/4) シルト混じる) |
| 2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂 (径1~2cm 礫少量混じる) | 12. にぶい褐色 (7.5YR5/3) 極細粒砂 |
| 3. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂 | 13. 褐灰色 (5YR5/1) シルト (溝の堆積層) |
| 4. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 極細粒砂 | 14. 灰褐色 (7.5Y5/2) 極細粒砂 |
| 5. 灰色 (7.5Y6/1) シルト (礫なし) | 15. 明黄褐色 (10YR7/6) 極細粒砂 |
| 6. 灰色 (7.5Y6/1) シルト | 16. 褐灰色 (10YR6/1) シルト (褐色斑点あり) |
| 7. 明黄褐色 (10YR7/1) シルト (礫なし、島畑盛土) | 17. 灰白色 (10YR7/1) シルト (褐色斑点あり) |
| 8. にぶい褐色 (7.5YR5/3) 極細粒砂 (島畑一番古い上面) | 18. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト (褐色斑点あり) |
| 9. 明黄褐色 (10YR7/6) 極細粒砂 | 19. 灰白色 (2.5Y8/1) 細粒砂 |
| 10. 灰白色 (10YR7/1) 極細粒砂 (まだらに褐色砂混じる、土坑状遺構埋土) | 20. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 極細粒砂~シルト |

〔北壁土層断面〕



- | |
|--------------------------------|
| 1. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 極細粒砂 |
| 2. オリーブ黒色 (10Y3/2) 極細粒砂 |
| 3. 灰色 (10Y4/1) 極細粒砂 |
| 4. 灰色 (7.5Y4/1) 細粒砂 |
| 5. 灰色 (7.5Y4/1) 極細粒砂 |
| 6. 灰色 (10Y4/1) 極細粒砂 |
| 7. オリーブ黒色 (5Y3/1) 極細粒砂~シルト |
| 8. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細粒砂~極細粒砂 |
| 9. 灰色 (10Y4/1) 粘土ないシルト |

第144図 D地区南壁・北壁土層断面図(1/100)

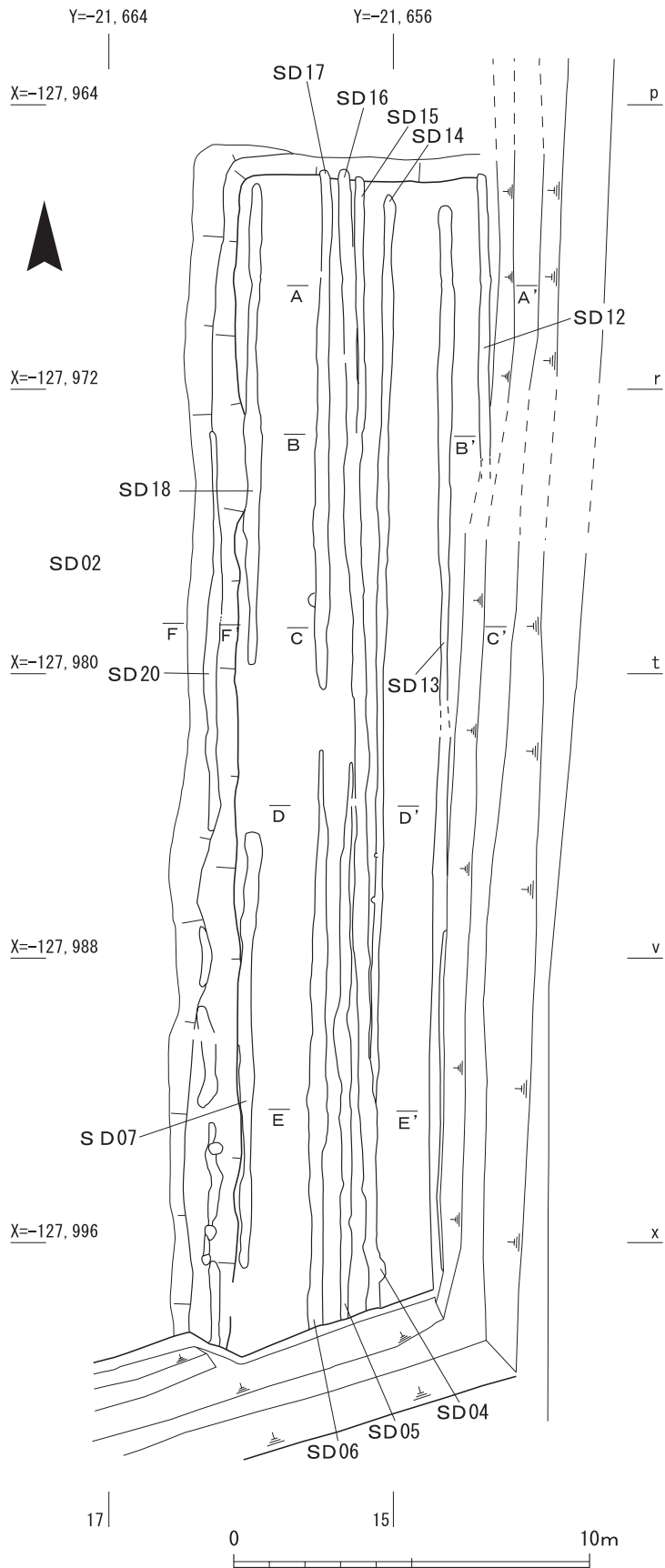
から瓦器碗の破片などが出土していることから中世前半のものであろう。

島畑27 (図版第117) A3区
の調査で検出していた島畑で、その東裾部を確認した (I2-o19区)。裾部に断ち割りを4か所設けて、断面観察を行った結果、島畑の盛土等を確認することができた。島畑27を確認した範囲は、検出長42.2m、検出幅1.6m、高さ0.3mである。島畑上面や素掘り溝は検出していない。

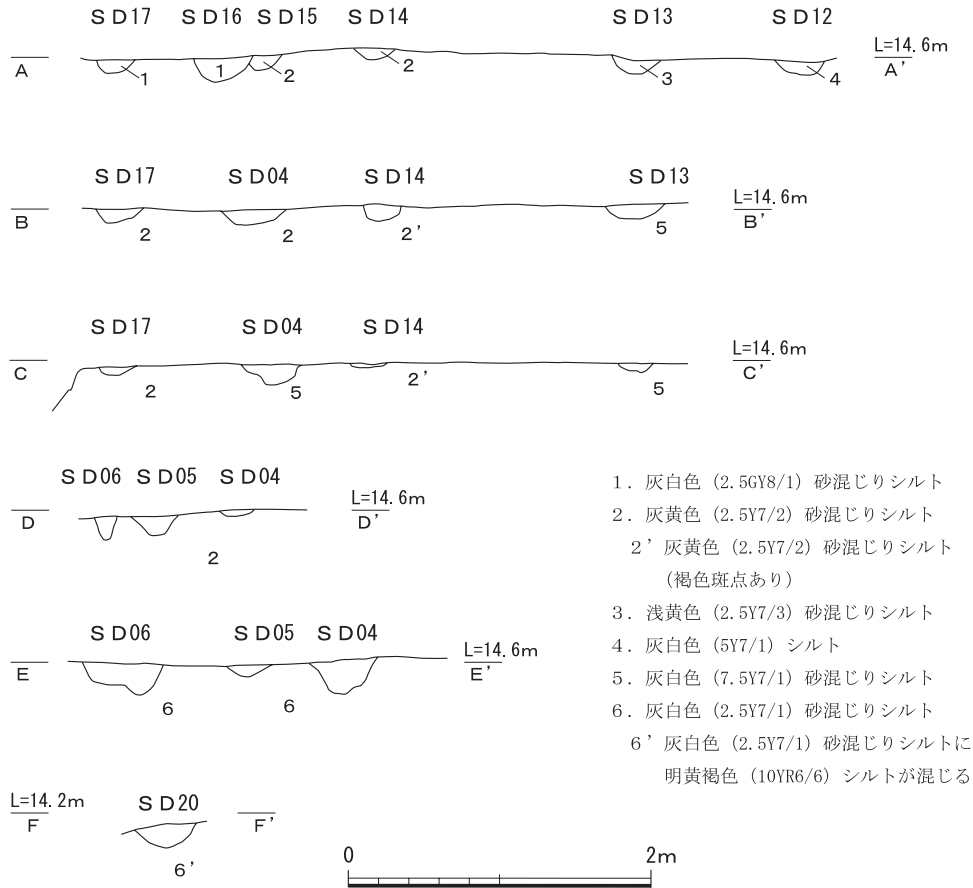
溝状遺構 S D02 (第142図)
調査区の西半部で検出した (I 2 p16区ほか)。南北方向に延びる。土層の堆積状況は、基本層序で述べたとおりである。検出長43.6m、幅13.6m、深さ0.6m前後である。溝底の標高はおよそ14.0mで、北に向かってわずかに低くなる。遺物は土師器等の小破片が出土した。詳細な時期は不明であるが、他の調査区を同じく中世前半と推定される。

②中層遺構

溝 S D23 (第147図) 島畑111の下層で検出した (I2-u15区ほか)。検出長6.6m、幅0.7~1.0m、深さ0.1mである。北に対して28°前後東に振る。埋土は灰白色極細粒砂ないしシルトである。溝底は北西に向かって傾斜している。遺物が出土してい



第145図 D地区島畑111平面図 (1/200)



第146図 D地区島畑111上面検出素掘り溝土層断面図(1/50)

ないため詳細な時期は不明である。又、周辺の調査でも同じような埋土の遺構は確認していない。S D23は後述するS D30よりも上層で、島畑以前に位置づけられる遺構である。

土坑状遺構S K24~28 (第147図) 島畑111の下層、上述の溝S D23の南側で検出した(I2-v14区ほか)。当初は、溝状の遺構と考えたが、明瞭に溝状を呈するものは少なく、土質の違いの広がりとして把握できたことから、土坑状遺構として報告する。土坑状遺構は不整形な形状を呈し、灰白色細粒砂ないしシルトを埋土としている。島畑111の南半部に限って認められることから、島畑造成時の整地や盛土の一部である可能性が高い。若干の遺物が出土したが、詳細な時期は不明である。

③下層遺構

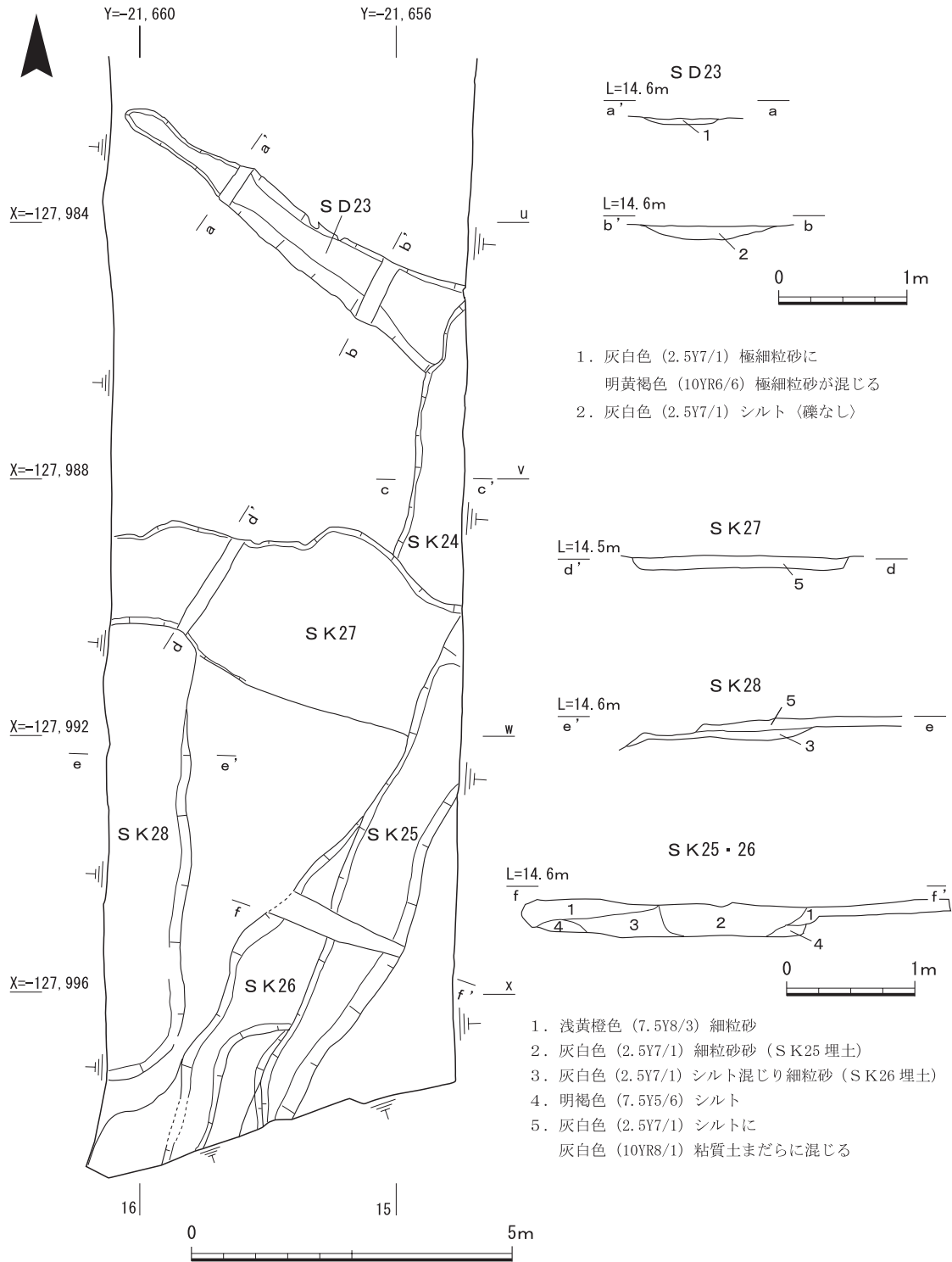
溝S D30 (第149図) 調査区北端から島畑111の北西隅かけて検出した(I2-p15区ほか)。検出長13.3m、幅0.4~0.5m、深さ0.2m前後である。埋土はオリーブ黒色シルトである。北に対して55°東に降っており、S D30そのものはわずかに、蛇行しながら伸びている。遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。しかし、S D30は、これまで周辺の調査で検出した弥生時代後期から古墳時代前期にかけての溝群に類似しており、この時期の可能性が高い。

不明遺構S X31 (第142・148図) 調査区の西辺、島畑27の裾部に重複して検出した(I2-r19区ほか)。南北4.5m、東西2.0mの土坑状の落ち込みである。土色の変化が認められたものの遺構

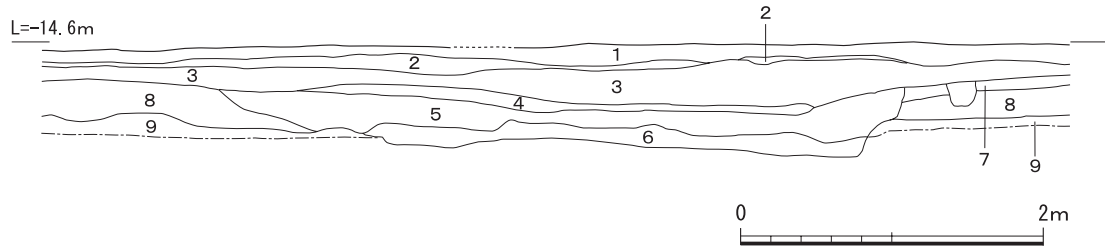
の性格や時期等は明らかにできなかった。

(3) 出土遺物

D地区では、1,200㎡と広範囲に調査を行ったものの、重機の掘削中や島畑の検出、素掘り溝の掘削、溝状遺構の掘削などごく少量の土師器や須恵器、瓦器、陶器などの細片が出土したにとどまり、図示するまでには至らなかった。中層遺構や下層遺構でも、ほとんど遺物が出土せず、

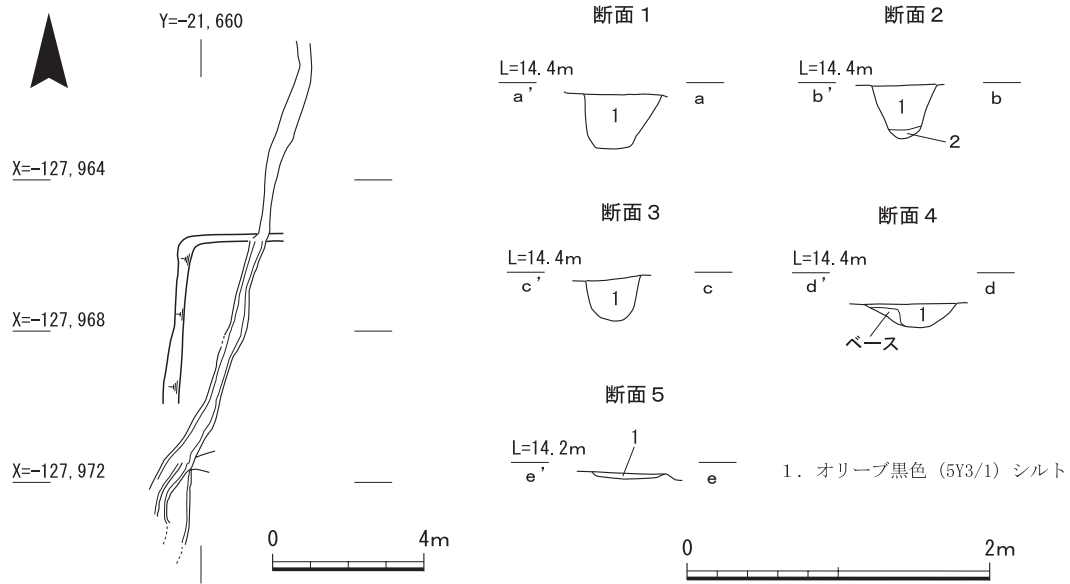


第147図 D地区中層遺構配置図(1/100)、検出遺構土層断面図(1/50)



- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 細粒砂 | 6. 5層+9層の混じった土層) } S X31 埋土 |
| 2. オリーブ灰色 (5GY5/1) 細粒砂~極細粒砂 | 7. オリーブ灰色 (7.5Y4/2) シルト |
| 3. 灰色 (10Y5/1) 極細粒砂~シルト | 8. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 極細粒砂~シルト |
| 4. 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト | 9. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト (基盤層) |
| 5. 灰色 (5Y4/1) 極細粒砂 | |

第148図 D地区不明遺構 S X31実測図(1/50)



第149図 D地区溝 S D30実測図(1/200・1/50)

詳細な時期を明らかにすることはできなかった。

(筒井崇史)

9. 総括

新名神高速道路整備事業の城陽JCT・ICの建設に伴う下水主遺跡・水主神社東遺跡の発掘調査は、平成23年度に着手し、平成27年度に現地での調査を終了した。その後、整理作業を継続して実施し順次報告書を刊行してきたところである。平成29年度に2冊の報告書の刊行をもって同JCT・ICの建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業はすべて完了する。

本書は、城陽JCT・ICの建設に伴う下水主遺跡・水主神社東遺跡の発掘調査の報告書としては4冊目に当たり、城陽JCT・ICの建設に伴う発掘調査の報告書としては最終の報告書である。本報告書では、調査対象地の中央部から北部にかけて設定した下水主遺跡D・H～L・N地区と、西部に設定した水主神社東遺跡B・D地区を対象とする。今回報告する調査区の面積を合計するとおよそ2万㎡に達するものの、検出した遺構の数や出土した遺物の量は決して多くない。しかし、そのような状況にあっても、本書で報告したように、重要な成果を上げることができた。以下では、総括として今回の調査で、特筆すべき成果のあった縄文時代ならびに弥生時代終末期の遺構・遺物について若干の検討を加えることとしたい。また、一連の調査において対象となった2遺跡の時期別変遷について、『京都府遺跡調査報告集』（以下、『報告集』と略する）第173冊でも述べたところであるが、本書での調査成果を加えて、改めて報告することにしたい。^(注20)なお、新名神高速道路整備事業に伴う下水主遺跡・水主神社東遺跡の発掘調査は今後本線部分を対象とした調査に移行する予定である。(筒井崇史)

1) 山城地域における下水主遺跡・水主神社東遺跡の縄文時代集落の位置づけ

(1) 縄文時代における遺跡の様相

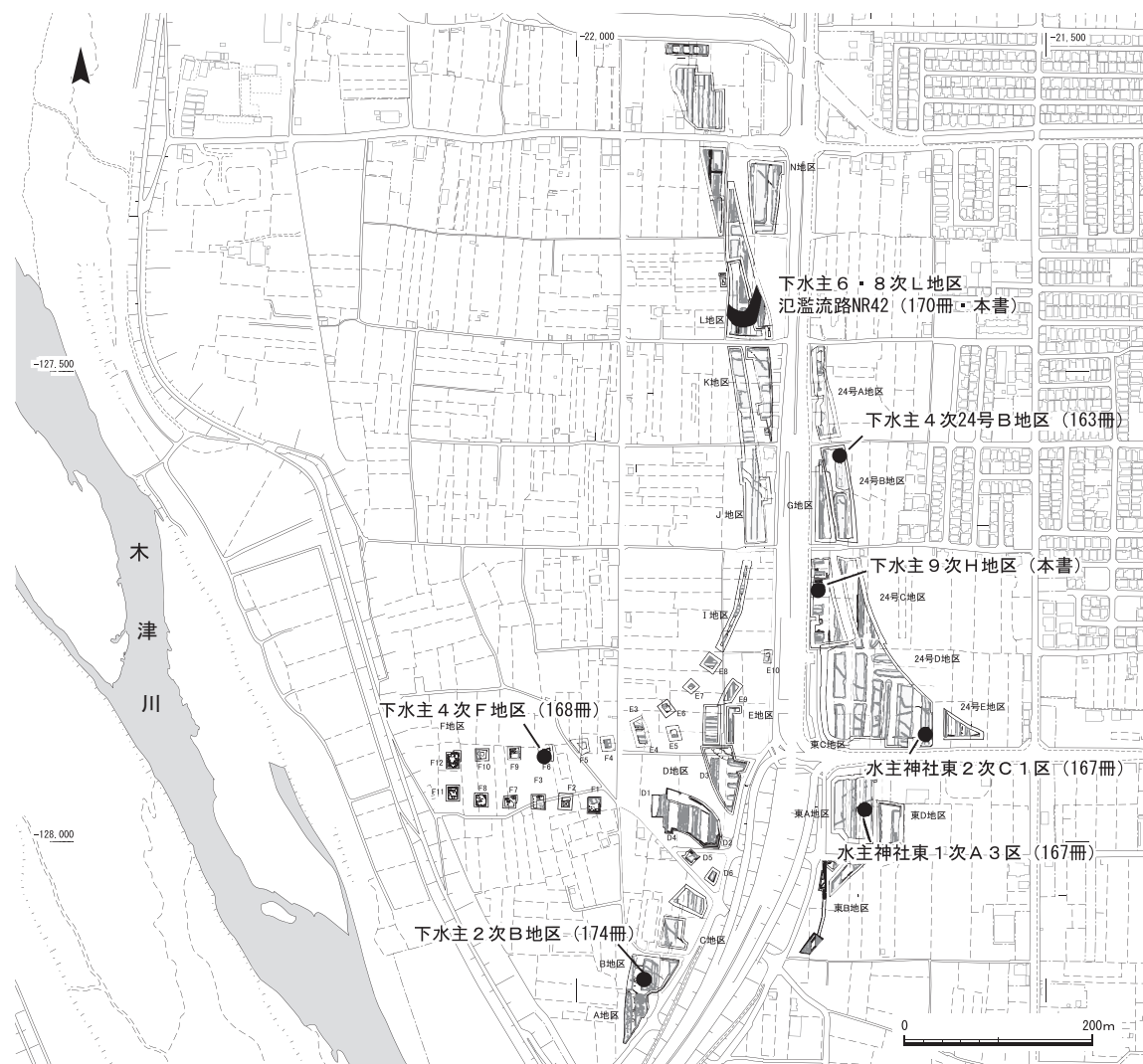
新名神高速道路整備事業に伴う一連の調査では、下水主遺跡L地区の氾濫流路で大量の縄文晩期中葉の土器が出土したのをはじめ、多くの調査区で縄文時代の遺物が確認されており、下水主遺跡や水主神社東遺跡の縄文時代の様相が明らかとなりつつある。ここでは出土遺物の評価を行い、これまでの調査で得られた情報をもとに南山城地域における縄文時代の下水主遺跡・水主神社東遺跡の位置づけを行っておきたい。

これまで出土した遺物の中で最も古いのは下水主遺跡L地区で検出した氾濫流路から出土した土器群である。L地区で検出した流路は木津川から氾濫原に向かう氾濫流の浸食によって形成されたいわゆる氾濫流路であることが指摘されている。すでに報告したL2区で検出した氾濫流路NR60と今回報告した氾濫流路NR42は間欠的に発生する洪水による浸食と土砂の充填を幾度も受けながら埋積が進行したものであるとされる。NR42は、L2区では幅10m前後で、多量の木材化石や植物遺体が堆積しており、中には直径60cmを上回るような大木もみられた。今回報告した氾濫流路はこの流路の延長にあたる部分であり、流路中からは投棄されたと考えられる土器が大量に出土した。ただし、今回の調査で検出した遺構は氾濫流路とその周辺の落ち込みのみで、居住域は検出されなかった。しかし、出土土器は器壁の摩滅が少なく、スス・コゲ等の使用痕跡も顕著に残ること、石器組成から見ても石核や剥片が多く認められること等から、居住域が付近

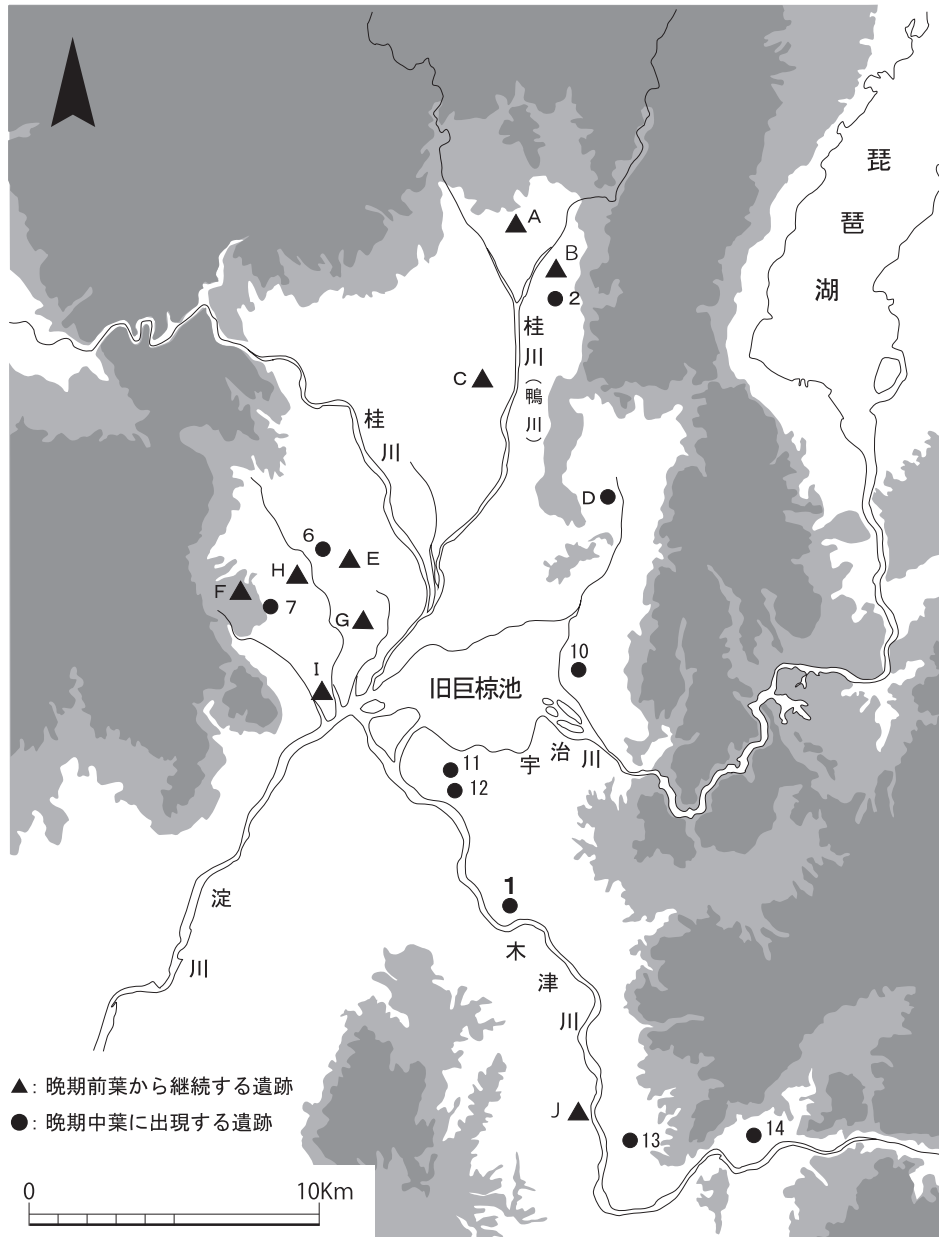
に存在した可能性は高いと考えられる。

今回出土した土器は遺物報告の項ですでに述べたように、おおむね晩期中葉～後葉に属するものである。また、出土層位もよくまとまっており、流路からの出土とはいえ、ある程度限られた時間内に投棄された資料であるといえる。最下層のNR42からは最も多く遺物が得られているが、深鉢の中に二条凸帯文を持つものを含まず、浅鉢では逆くの字状口縁をもつA類を主体としていることから、その中心は凸帯文2期前半と考えられる。しかしながら、深鉢の中にはⅡ類とした口頸部の凸帯をもたずに、口縁端部の刻目も欠く滋賀里Ⅲb式的な様相を残した一群も認められる。浅鉢の中でも、口縁部の内外面に凸帯を持つ浅鉢C a類などは凸帯文1期とされた東大阪市鬼塚遺跡H地点中・上層などで認められる、やや古相の属性をもつものとしてとらえることができる。したがって、NR42出土土器は凸帯文2期前半を中心としつつも、その前段階の凸帯文出現期の様相を残す土器も少量含む土器群としてとらえておきたい。

なお、NR42からは土器だけでなく遮光器系土偶の腕部も出土した。関西における遮光器系土偶の類例は滋賀里遺跡や篠原中町遺跡などについて5例目であるが、今回出土した土偶は隆起帯



第150図 縄文土器出土地点分布図(1/8000)



- | | | | | |
|---------------|-----------|----------|-----------|---------|
| A. 植物園北 | B. 北白川追分町 | C. 烏丸御池 | D. 戌亥 | E. 中臣 |
| F. 大原野石見 | G. 鶏冠井 | H. 上里 | I. 松田・下植野 | J. 棕ノ木 |
| 1. 下水主 | 2. 京大構内 | 3. 戌亥 | 4. 大原野石見 | 5. 烏丸御池 |
| 6. 澁川 | 7. 井ノ内 | 8. 開田城ノ内 | 9. 伊賀寺・友岡 | 10. 寺界道 |
| 11. 佐山 | 12. 佐山尼垣外 | 13. 堂ノ上 | 14. 釜ヶ谷 | |

第151図 山城地域における縄文時代晩期中葉の主要遺跡分布図(1/250,000)

を貼り付けることによって装飾を施しており、これまでのところ西日本で類例は認められない。したがって、時期を判別する積極的な根拠を欠くが、上述のいずれの遺跡も後期中葉以前に位置づけられることから、土偶の年代もNR42出土土器の前半部分との接点を考えておきたい。

NR42の上層では自然流路NR38を検出しており、その埋土中からもまとめて縄文土器が出土した。NR38から出土した深鉢はほぼすべてがI類であり、凸帯の断面形状が三角形で貼り付け位置も口縁端部へ上退したものが多く含まれる。凸帯の貼り付け位置が上退したものは山城地域のなかでは凸帯文1期にも含まれることがある要素であり、時期を新しくする根拠とはならないが、わずかながら胴部と口頸部の境目に凸帯状の隆起ないし貼付凸帯をもつ二条凸帯文深鉢の可能性のある破片も出土しており、先述のNR42よりも型式学的に後出する要素を備えているとみてよからう。このことは先述のとおり、遺構の重複関係からも支持される。したがって、NR38の土器は凸帯文2期後半に位置付けておきたい。SX40はNR42よりも上層で検出されており、NR42とは一部併存しつつも後出するものである。二条凸帯文深鉢を含まず、外面に条痕を残す深鉢が多いなど、NR38とは深鉢の組成には違いが認められるが、浅鉢の構成はほぼ共通する。宇治市寺界道遺跡など南山城地域のほかの資料を参考にすると、二条凸帯文深鉢の定着の度合いなど深鉢の様相には遺跡毎の違いが大きい。このことから、NR38とは大きく年代差のある資料ではないと考え、同様に凸帯文2期でも後半部分に位置付けておきたい。

凸帯文1～2期前半の土器が出土しているのは現在までのところL地区のみであり、この時期が下水主遺跡周辺で居住域が形成され始めた時期と考えられる。それに続く凸帯文2期後半から3期の土器は遺跡地内の広い範囲で出土するようになり、晩期中葉以降にこの地域で継続的に広く土地利用が行われたことをうかがうことができる。

旧巨椋池以南の木津川流域では、晩期以前は城陽市森山遺跡で居住域が検出されているなどの事例はあるものの、晩期前半までは向日丘陵周辺や京都盆地北東部と比べて遺跡数の多寡は明白であった。いっぽう晩期中葉以降になると、佐山遺跡、佐山尼垣外遺跡等新たな集落の出現をうかがうことができ、この時期に巨椋池南岸を中心に木津川流域低地部への志向が強まったということ想定することができる(第151図)。このような傾向は木津川流域に限ったことではなく、山城地域全域でうかがうことのできる傾向であり、下水主遺跡もそのような背景のもと登場した新たな低地部の集落のひとつであると評価することができるだろう。

(2)角閃石を多量に含有する土器について

今回出土した土器のなかには胎土中に角閃石を多量に含有し、暗褐色の色調を呈する土器、いわゆる生駒西麓産とされる土器が一定数含まれていた。この種の角閃石を多量に含む土器は、縄文時代には限られた時期に広域に分布するようになる現象が指摘されており、特に早期末から前期初頭や後期の北白川上層式、晩期末の長原式などではその比率が著しく高率(注21)になるという。千葉豊は京都盆地の縄文遺跡の分析を行う中で、角閃石を多量に含む土器の存在にも触れ、晩期については、遺跡ごとで著しくその比率が異なることから、先進地域であった河内との交流度合いの粗密の反映であると説く(注22)。矢野健一は角閃石多量含有土器が縄文時代の特定の時期に非常に高

い割合で出現することを指摘し、弥生時代以降のように河内地域からの一元的な土器の搬入は想定しがたいことを論じた。そして、これまで角閃石を多量に含む土器が出土した場合、それは無検証に河内の生駒西麓地域からの搬入品であったと判断されてきたが、それとは異なり、粘土の素地や混和剤といった原料自体が移動した可能性があることを示し、その産地についても河内だけでなくほかの地域も想定する必要があることを指摘した。矢野の指摘は早期の土器を中心になされたものであり、晩期の土器に対しても同じような背景を想定することができるのかどうかは、自身で述べているように別の議論が必要になろう。しかし、これまで考えられてきたように河内との一元的な関係を想定することに再考を迫る可能性を示したという点で重要な問題である。

今回出土した土器のなかにもこのような角閃石を多量に含み、胎土が暗褐色を呈する土器が全体の半数ほど存在した。上述のように、縄文時代の特定の時期にこの種の土器が多出する遺跡が出現することはすでに指摘されてきたことであるが、晩期の中でも凸帯文3期、長原式の土器の中に角閃石多量含有土器が高い比率で出現することが指摘されてきた程度で、凸帯文出現期に関しては詳細に検討されてこなかった。したがって、本論ではまず、様相を把握するための足掛かりとして数量的なデータの提示に主眼をおくこととしたい。なお、胎土分析の結果から、近畿地方の各地域にみられるこのような胎土を持つ土器は肉眼で角閃石であると認定した鉱物の在り方が異なる場合があることが指摘されているが、本論で提示するのは、肉眼観察による所見である。また、数量の算出においては破片数を数え上げる方法を採用したが、多量の土器が出土したNR42では口縁部が残存する破片の数を、その他の遺構では資料数を担保するため、口縁部が欠損していても口頸部と胴部の境の屈曲部など部位がわかるものに関してカウントした。厳密な接合関係の検討ないし個体の同定は行っていないため、今回の数量は参考値であることは記しておく^(注24)たい。

まず、もっともまとまって土器が出土したNR42での比率をみておくと、口縁部が確認できた153点のうち25点、比率にすると16%が角閃石を多量に含有する土器であった。その内訳は深鉢で20%、浅鉢で7%であり、深鉢の方が高い比率を示すものの、突出した比率とはなっていない。次に、NR42の上層の遺構であるNR38および周辺の落ち込みSX40、SX43出土土器における比率を見てみよう。それぞれ全体に占める比率は

- NR38 52% (深鉢47%、浅鉢67%)
- SX40 67% (深鉢43%、浅鉢75%)
- SX43 26% (深鉢17%、浅鉢80%)

である。この中で目を引くのはNR38、SX

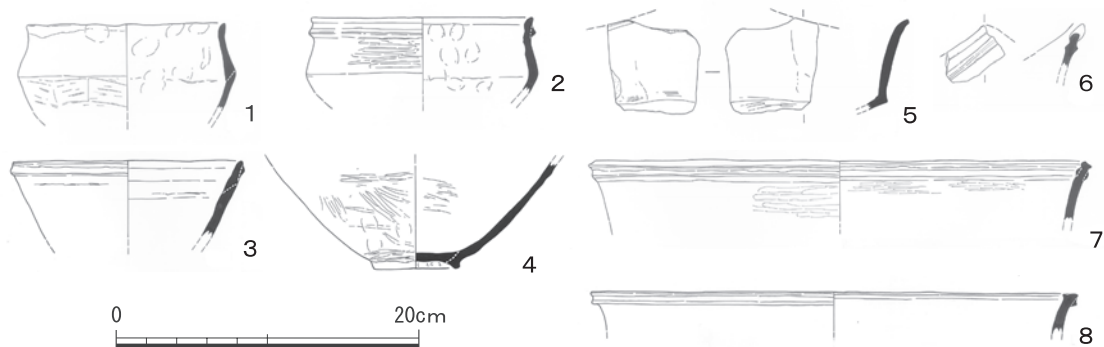
遺構	器種	角閃石多量含有		比率
		○	×	
NR42	深鉢	22	86	20%
	浅鉢	3	42	7%
	計	25	128	16%
NR38	深鉢	9	10	47%
	浅鉢	4	2	67%
	計	13	12	52%
SX40	深鉢	17	23	43%
	浅鉢	9	3	75%
	計	26	13	67%
SX43	深鉢	5	25	17%
	浅鉢	4	1	80%
	計	9	26	26%
計	深鉢	52	142	27%
	浅鉢	31	48	39%
	計	83	190	48%

第152図 遺構ごとの角閃石含有土器の比率

40の比率の高さであり、特に浅鉢は各遺構ともに60%以上と異常な高率を示している。なお、S X43の浅鉢の比率が高く表れているのは、第153図7に示した浅鉢が4破片から構成されているからであり、実際の個体数としては比率は突出した値は示さないものと考えられる。したがって、遺構全体の比率からみると、組成の半数以上を占めるNR38およびS X40と、相対的に比率の低いNR42とS X43の2者が存在し、さらに前者では浅鉢の中で角閃石多量含有土器の占める割合が極端に高いといえる。この差異が遺構毎の土器様相の違いに起因するものなのか、もしくは前節で述べたような若干の時期差によるものなのかについてはなお検討が必要となろう。

そこで、角閃石を含有する土器についてやや詳細に検討していくことにしたい。まず、比率の高かった浅鉢についてみてみよう。それぞれの遺構における角閃石を含む浅鉢を示したのが第153図である。量的に安定したNR42でその比率を見てみると、浅鉢A・B類が組成の71%を占めるが、その中で角閃石多量含有土器は存在しない。他方、組成の中では少数であるC類やD類、E類は角閃石を含有する胎土で製作されたものが75%であり、全体量の多寡を問わなければその違いは明確となる。この浅鉢C・D類と角閃石含有土器との親和性はNR42以外の遺構においても同様に看取される。精良な胎土をもつC類では径3mmを越すような大粒の角閃石は含まないものの、小粒の角閃石を含有する比率が著しく高い。これは器面のミガキ調整の際に大粒の角閃石は除去されているものの、本来的には、角閃石を多量に含んだ胎土で製作されていたのか、もしくは角閃石多量含有土器とは異なった背景のもとに製作されたのかという点に関しては検討の余地が残るが、浅鉢については角閃石の含有率と型式の間に一定の相関が認められると考えてよいだろう。深鉢については、浅鉢のように、本書における器形の分類との間に明確な相関関係は認められない。ただし、器面に二枚貝による条痕を外面に残すものに関しては角閃石を多量に含有する胎土で製作されている比率が高いということは付言しておこう。

次に、京都府内のほかの遺跡の様相を見ていきたい。まず、同じ木津川水系に位置する久御山町佐山尼垣外遺跡ではS D229から凸帯文1期に属する土器群が多量に出土しているが、報告書の記述に依拠するならば、角閃石を含む土器は118点中2点に過ぎず、^(注25)比率にすると2%にも満たない。2基の土坑から凸帯文2～3期の過渡期に位置付けられる土器がまとまって出土した宇



第153図 角閃石を含有する浅鉢
2～5：NR42 1：S X40 6・8：NR38 7：S X43

治市寺界道遺跡でも角閃石を含む土器の量はごくわずかであることが指摘されて^(注26)おり、同じ南山城地域では同じような傾向を示す遺跡はこれまでのところ見当たらない。やや範囲を広げ、京都府内の状況を見ると、京大構内S K33など、角閃石多量含有土器がほとんど存在しない遺跡^(注27)がある一方で、鶏冠井遺跡ではその比率は6割近いことが報告されており、今回の下水主遺跡と同じような比率を示す。また、南丹波地域においても、凸帯文3期に下の資料ではあるが北金岐遺跡^(注28)S D01では58%と下水主遺跡と同じように高率を示す遺跡が存在する。このように、同時期の同一地域内の資料であってもその比率には大きな違いを認めることができる。網羅的に類例を検索することができたわけではないが、角閃石の採取地と考えられる地域からの距離に比例してその比率が漸移的に推移するわけではなく、点的にそのような遺跡が分布する状況である。下水主遺跡の様相を見ると、特定の型式、もしくは調整の特徴をもつものと角閃石含有土器との間に緩やかな相関関係が認められ、それらの土器について故地からの搬入であると考えられることも可能であろう。しかし、量的には前後の時期の土器の搬入率と比べても明らかに異質であり、さらに広域にこの種の土器がみられるということに鑑みると、その背景を単に土器を携えた人間の移動と考えることも必ずしも適当ではないように思われる。

本来ならば近畿地方における様相を整理した上で当遺跡の位置づけを行うべきであろうが、本報告では当遺跡における角閃石多量含有土器の比率のデータの提示のみを行うことにしておき、今後の問題提起としておきたい。

2) 弥生時代終末期の下水主遺跡について

(1) 弥生時代終末期の遺構について

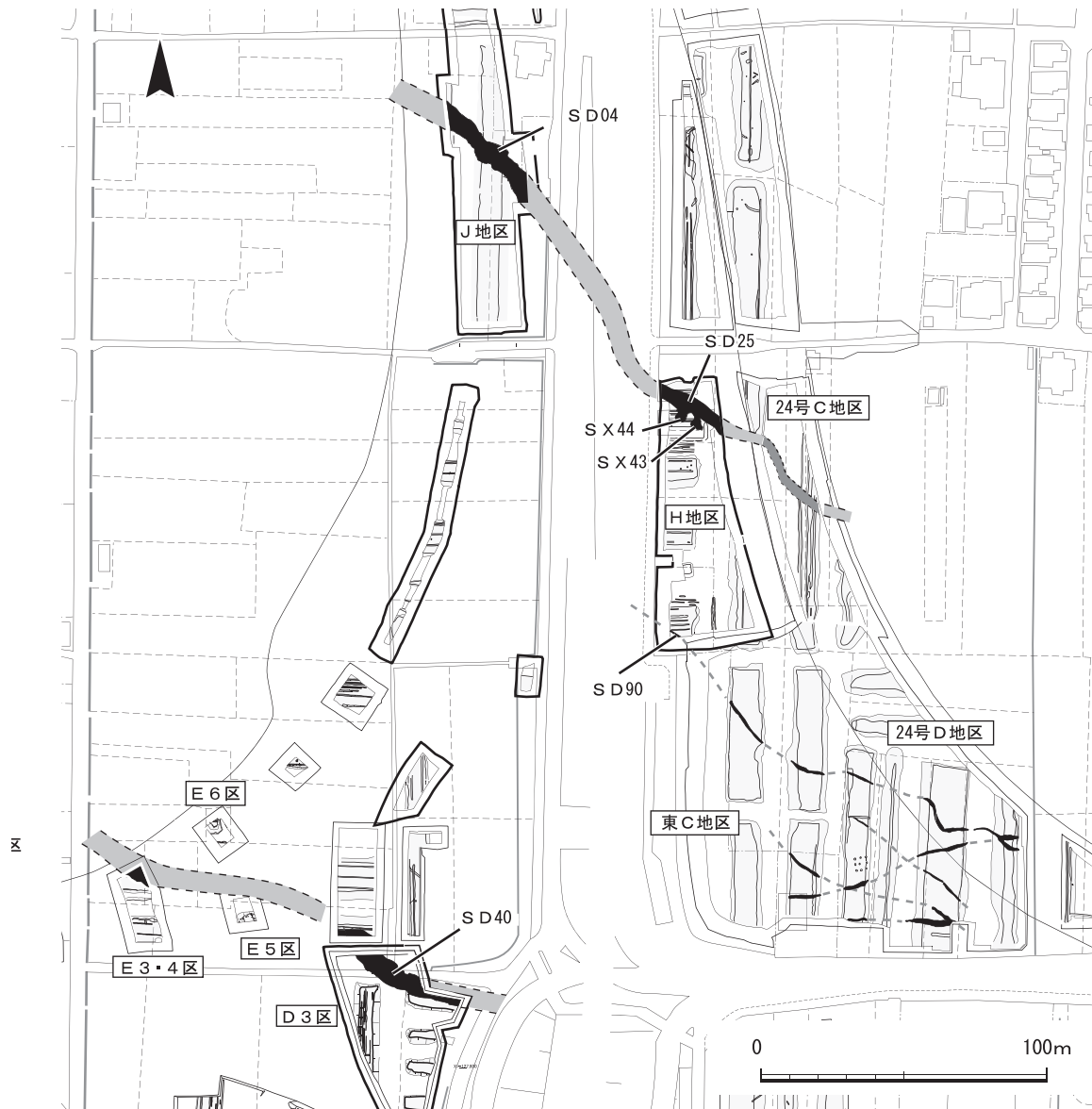
弥生時代の下水主遺跡では、前期の土器はこれまで出土していないものの、中期中葉に遺物が散見するようになり、中期後半から終末期には広い範囲にわたって高密度で遺構、遺物が分布するようになる。とくに、B地区では護岸された溝から当該期の土器、木器が多量に出土しており、その位置付けと評価は『京都府遺跡調査報告集』第173冊ですで行ったところである。弥生時代の下水主遺跡の総括的な評価に関しては第173冊に譲ることとし、本書では今回報告した地区およびその周辺の遺構について、他地域の事例等に導かれつつその位置づけを考えることでまとめにかえたい。

本書掲載のなかで弥生時代の遺構と考えられるのはJ地区のS D04、H地区のS D25とその関連遺構、H地区南端から東C地区にかけて多くみられる斜行溝群、D地区のS D41等があり、島畑の造成が及んでいない、もしくは島畑の上面で検出された深度の深い遺構が中心となる。帰属時期は弥生時代後期から一部古墳時代前期におよんでおり、その概要は第154図に示したとおりである。

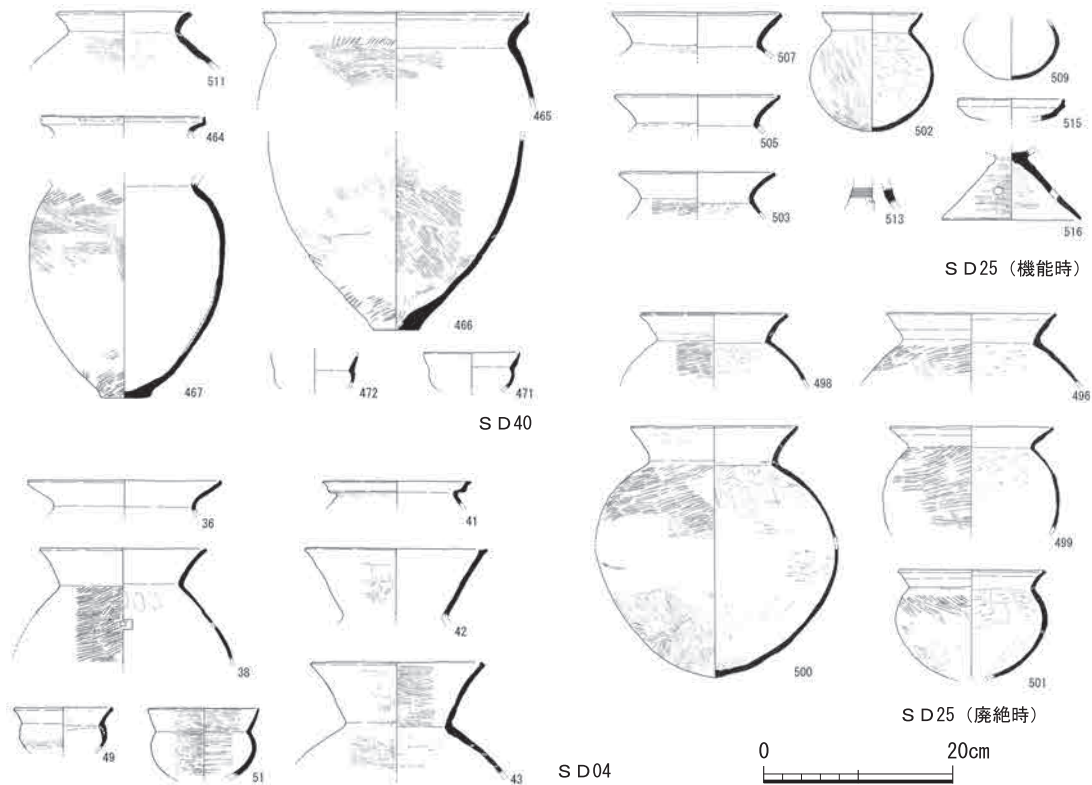
H地区のS D25、D地区のS D04からは、機能時の土器の量が僅少であったが、ともに多量の木材が出土した。その組成は類似しており、両遺構とも、製品は建築部材が主体を占め、全体的に加工痕跡に乏しい木材が多い。ともに南東から北西に木津川に向かって掘削されていることや、

周辺の調査区では同じような大きい規模をもつ溝が未検出であることなどを勘案すると、両者は一体の遺構であった可能性が高い。なお、今回の調査成果を受けてこれまでの周辺地区での調査成果を再検討した結果、H地区の南東の調査区である24号C地区では、島畑の上面に幅3mほどの溝状の土色変化が見られることが判明した。調査中の断ち割りでも顕著な遺物は出土しておらず、自然流路であったと報告したが、これまでの調査成果から総合的に判断すると、この自然流路状の土色変化がSD25の南東の延長部分に相当する可能性が高い。したがって、この一連の溝は第154図に示したようにJ地区のSD04、H地区のSD25に接続し、そのまま直線的に南東方向に延伸していたのであろう。その幅は最大でも4mほど、深さも1.5mほどとそれほど大きな規模ではないが、直線的に掘られており、断面形状も逆台形を呈するなど、自然流路ではなく、人工的に掘削された遺構と考える。

D3区では幅7.5mを測るSD40が検出された。SD40も、検出した地区では先述のSD04・



第154図 弥生時代終末期の下水主遺跡(1/2500)



	佐山Ⅱ式前半	佐山Ⅱ式後半	佐山Ⅲ式前半
J 地区 S D 04			■■■■■
H 地区 S D 25		■■■■■	
H・東C地区 斜行溝			■■■■■
D 地区 S D 40	■■■■■		■■■■■

第155図 各遺構の帰属時期

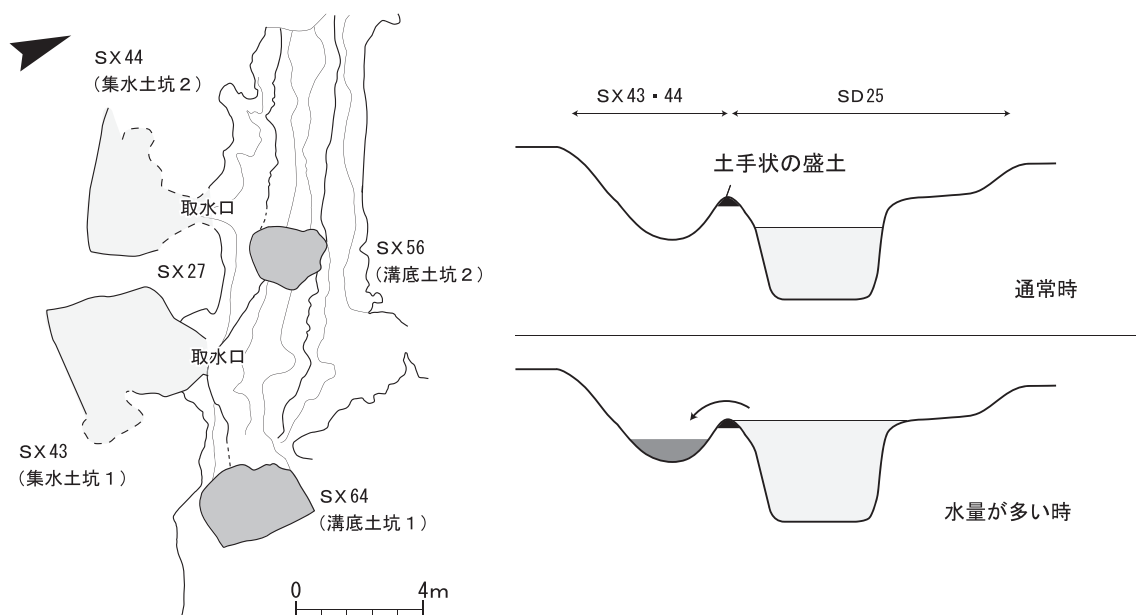
25とほぼ並行して掘削されており、その延長はE地区を通り、西流したものと考えられる。E地区では小規模な調査区が多く、調査時には明確に島畑の下層に遺構の存在を認識することができなかったが、E3地区で検出した島畑50の北東隅で検出した落ち込みが、S D 40の延長の溝の南肩にあたるものと考えて大過ないだろう。また、E5・6区ではそのような遺構は見られず、S D 40はE5区とE6区の間を通過してE3・4区に接続していたものと考えられる。

上述の2本の幅4m以上の規模をもつ溝のほかに、小規模な溝群を多く検出した。K地区のS D 35やH地区のS D 90、それに接続すると考えられる東C地区の小規模な溝群も基本的には北に対して西に40~60°振った主軸を持っており、S D 25やS D 04と方位をほぼ同じくする。これらは遺跡の南東側の微高地から、木津川へ向かって流れるような溝であったと考えられよう。

これらの溝群の帰属時期をいま一度、出土土器から整理しておこう。最も古相を示す遺物が含まれるのはD3区のS D 40である。甕は弥生形甕の系統を残しながらも口縁部の形態には庄内形甕に影響を受けた甕が含まれており、佐山Ⅱ式前半に中心があると考えられるが、小形丸底鉢なども含まれているため、下限は佐山Ⅲ式前半までの時間幅を考えておく必要があるだろう。佐山

Ⅲ式前半は今回報告する地区の中心となる時期であり、S D04は佐山Ⅱ式後半から佐山Ⅲ式前半、小規模な溝群は出土遺物が少ないが佐山Ⅲ式前半の年代が与えられよう。一方、H地区のS D25は機能時の遺物は佐山Ⅱ式に属するものであるが、廃絶時の遺物は佐山Ⅱ式後半に比定され、この時期にはいったん埋め戻されたと考えられる。先に述べたように、S D04とS D25は出土遺物の内容、流れの方向などから一連の遺構であったと考えられるが、S D25の方が先行して廃絶されたこととなる。したがって、これまでの調査成果のみでは明らかにすることはできないが、S D04が24号C地区の方向へより直線的に延伸しており、S D25はやや蛇行するように掘られた支流的な性格であった可能性も残されているということを付言しておきたい。

今回検出した中で、H地区で検出したS D25を中心とする遺構は、その構造や出土遺物、廃絶の状況からみて特徴的であった。繰り返しになるが、その出土遺構の概要について簡単に述べておこう。S D25の本流は、幅5～6m、深さ約1.5mをはかる、断面が緩やかな逆台形状を呈する溝である。ただし、これは検出面からの計測であり、機能時には、これよりも幅、深さともに大きかったことは想像に難くない。溝の本流の南岸には、溝状遺構に取り付く付属の遺構を検出した。溝よりも浅く掘られた袋状の平面形状をもつ2個1対の土坑(S X43・44)はS X27を挟んでほぼ線対称に構築する意図をうかがうことができる。多量の木材等が底に堆積していた溝の本流とは異なり、この土坑からは詳しい使用状況を示すような遺物は出土していないが、堆積土の状況から、土坑内部には滞水、流水があったことが判断される。また、S D25と2基の土坑の接続部は幅が狭くなっており、S D25とS X43の接続部には盛土、あるいは地山を掘り残すことによって土手が作り出されていた。この構造は、第156図のように、S D25に流れる水が少ないときには機能しないものの、水量が多いときには本流からオーバーフローした水が一定溜まるような構造となっている。すなわち、S D25の南岸に掘られたS X43・44の2基の土坑は、残存してい



第156図 溝 S D25の機能模式図

た下部構造からの推測になるが、S D25から取水した水を溜めておくための施設であったと考えられる。この2基の土坑を、S D25の溝底で検出した土坑と区別して「集水土坑」と仮称しておこう。

溝と土坑状の構築物を利用することによって水を得る施設は弥生時代後期以降の近江南部地域で事例が報告されており、浄水施設として機能していたことが指摘されている^(注29)。例えば、伊勢遺跡では自然流路に取り付いた土坑に水を溜め、そこからオーバーフローした水をさらに別の土坑に溜めて浄水を得るといった構造の遺構が報告されている。同じような機能を発展させた構造の遺構は近江南部では柳遺跡や下鉤遺跡でも見つかっており、この空間で浄水を使用した祭祀が行われた可能性が指摘されている。今回検出した遺構は残存状況には恵まれないものの、上述のような類例から、一定量の水を得る目的や、溝の水位を調節することによって水流を調整する役割、あるいは浄水施設としての役割等も想定することができるだろう。

また、溝底には土坑が掘り込まれていたが、上述のように考えたとき、その存在は示唆的である。溝底に掘られた素掘りの土坑は溝底からの深さが1 m以上にもおよび、水流によって削りこまれた凹みのようなものではなく、意図的に掘り込まれた遺構である。この「溝底土坑」の類例を検索すると、砂泥等を沈殿させるような、いわゆる砂泥沈殿マスが想起される。例えば、先に浄水遺構の類例として提示した滋賀県の柳遺跡では溝底に掘られた2基の大型土坑が検出されており、流木やゴミを沈下させる機能があったと報告されている。同時期の纏向遺跡でも同じように溝底に掘られた「集水マス」と報告される遺構が検出されている^(注30)。纏向遺跡で検出された集水マスには矢板がうちこまれており、堅牢さや構造の複雑さからすると今回検出したものと異なっているものの、構造としては類似しており参考にはなろう。

いまいちど、H地区のそれぞれの遺構の位置関係を確認しておくと、溝底の土坑は、溝と集水土坑の接続部、すなわち取水口に当たる部分のわずかに上流側に掘削されている。S X43・44に集水の目的があったという仮定に一定の蓋然性が得られるならば、溝底土坑には先述の遺跡で想定されているように、浄水のために砂泥等を沈殿させる機能が求められたと考えることも可能である。なお、下水主遺跡の溝底土坑は厚さ1 mにもなる青灰色粘土層を越えて砂質層まで掘り抜いており、調査時から湧水が認められた。溝底土坑には上流から流れてきた砂泥を沈殿させるだけでなく、湧水による水を得ることを意識していたということも十分考えられる。

以上のことから、下水主遺跡では溝の付属施設である「集水土坑」と「溝底土坑」の2者のセットが一体となって構築されていたと考えられる。上部の構造は後世の島畑の造成によって大きく削平されており、その性格や目的について必ずしも確言することはできないが、溝からオーバーフローした水を土坑に溜め、水を得ることを目的とした構築物であったと解釈しておきたい。

また、溝および土坑の廃絶時には、遺構を人為的に埋め戻したのちに、完形の庄内形甕が配置されていた。これらの甕は遺構廃絶の時期を直接的に知りうる資料であるとともに、その土器の廃棄状況がたんに投棄されたのではなく、庄内形甕を溝の浅い部分に並べて配置していた状況を復元することが可能である。遺構の特異性に鑑みても、遺構の廃絶に際してなんらかの儀礼的な

行為が行われたと考えておきたい。

以上、H地区を中心に今回検出された弥生時代終末期から古墳時代前期の遺構の位置づけを考えた。繰り返しになるが、島畑造成により、遺構の平面プランから推測しなければならなかったことも多く、遺構の性格について今回の調査成果から得た情報のみで復元することは難しい。特にH地区周辺ではこれまでのところ当該期の明確な居住域は検出されておらず、遺跡の南側のB地区などと比べて遺構・遺物の密度が高いとは言い難い。現段階では積極的な評価をすることは難しいものの、使用状況および特異な廃絶時の状況からは、この空間そのものが居住以外のなんらかの目的を意図して利用されていたことは十分に考えられることである。いずれにせよ今回の調査区だけではこれらの遺構の全容は明らかにしがたい。今後周辺の調査が行われる際には土地利用の方法も含め、注意して検討されるべきであろう。

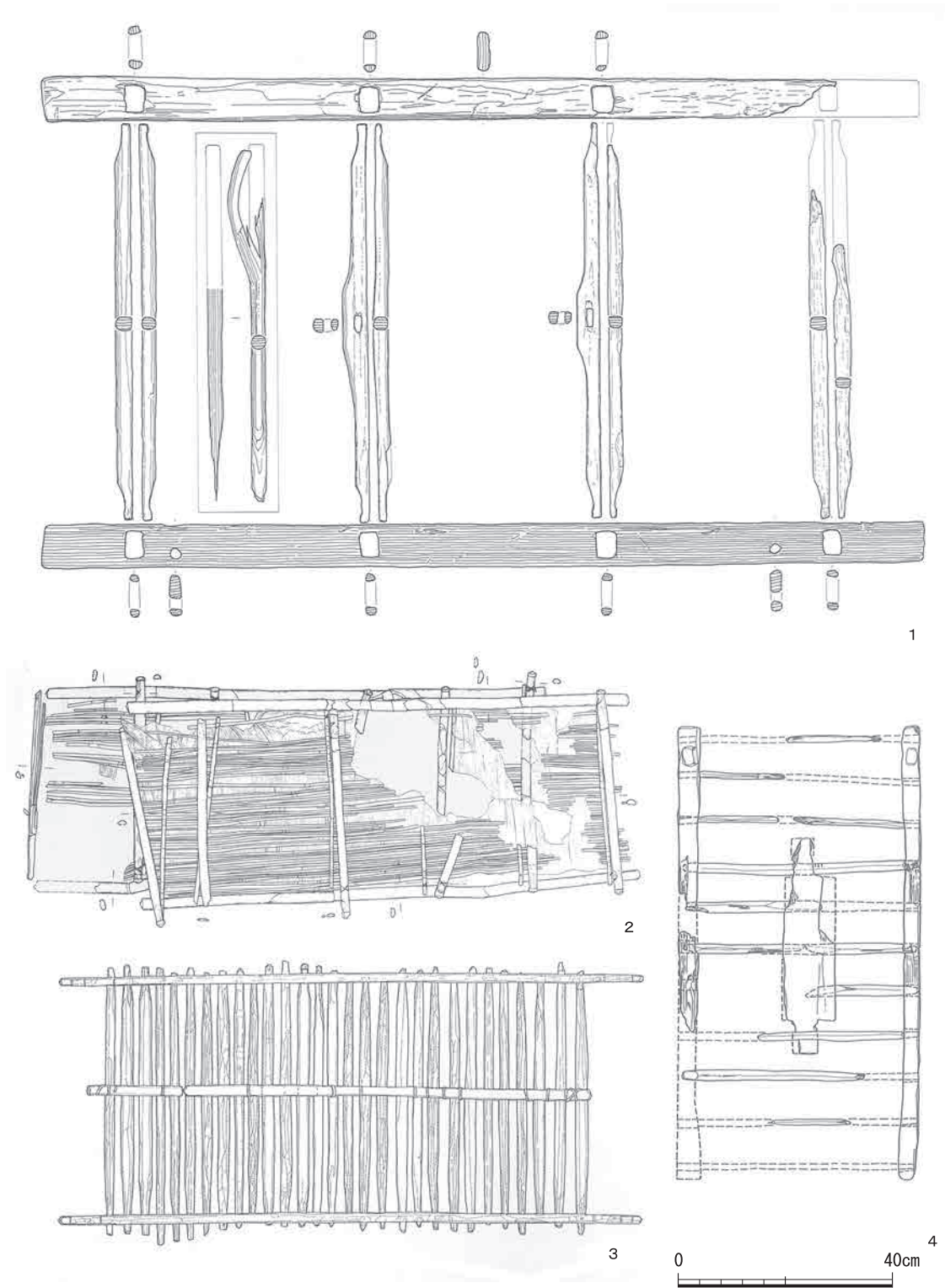
(2) 方形組合せ木製品をめぐって

今回の調査ではD地区、H地区から多くの木材が出土した。そのなかには建築部材を中心に少なからず製品が含まれていたが、そのなかでも方形の木製品が組み合ったまま出土したことは特筆すべき成果である。この木製品は、ある部材の本来の原形をほぼ残していると考えられ、同様の木製品がここまで良好な状態で残存しているものはこれまでほとんど知られてこなかった。本論では、同じような構造を持つ木製品の類例を提示し、下水主例との共通点・相違点を抽出することによって、本木製品のもつ意味について考える足掛かりとしたい。

この木製品の細部の特徴は遺物報告の項に記した通りであるが、基礎的な情報のみ整理しておこう。側板には長さ8cm程度の間隔で、4cm四方の、横木を通すための孔を4か所に持つ。片側の側板にはおよそ2cm四方の小孔をもつ。また、横木のうち中央の2本は側面観が凸状を呈し、そこに長辺3cm弱、短辺2cm程度の長方形の貫孔を持つ。本来は何らかの部材が装填され、把手状になっていた可能性も考えるが、出土時にはすでに失われており、不明である。また、横木の間には長さ130cmほどに切りそろえられたへぎ板が挟み込まれている。材にはすべてブナ科シイ属の木材が使用されている。

下水主例に形状、構造とも類似している例として唯一挙げることができるのは、古殿遺跡の3次調査で出土した梯子状木製品と報告されているものである(第157図1)^(注31)。板材の大きさは古殿例がわずかに長い。横木を2本一対で組み合わせる構造や、中央2本の横木のみ凸状を呈し方形の貫孔をもつといった基本的な形状も共通する。また、片側の側板のみに小孔が認められるなど細部の構造まで類似点を見出せる。先述したように、今回出土した木製品の類例はこの古殿遺跡で出土した梯子状木製品しか知られていない。完形品の部材の一部のみが残存していても製品として認識することができないため、本来的には他の遺跡においても存在した可能性はあるものの、両製品の製作にあたっては、背景に近畿地域と日本海地域の間で技術交流が存在したことをうかがわせる。^(注32)

秋山浩三は大足の分類を行うなかで方形枠付き形式の一群を設定し、本例を大足の可能性がある木製品として評価している。^(注33) 民俗例や絵巻等の資料を参考にすると、中世段階では方形枠をも



第157図 類似した構造を持つ弥生・古墳時代の木製品

1. 京都府京丹後市古殿遺跡 2. 奈良県田原本町唐古・鍵遺跡
 3. 鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡 4. 大阪府東大阪市友井東遺跡

つ大足の存在は確実に認められ、形状も今回出土した木製品に近い。また、考古資料のなかにも大阪府友井東遺跡出土木製品(第157図4)など、大足と考えられる製品の存在も知られている。

しかし、以下の2点から、下水主遺跡および古殿遺跡出土の木製品が大足であることは否定しうると考える。第一は強度の問題である。大足であるならば踏み込んだ時の圧に耐えるために横木を多く使用することによって強度を担保する必要があるが、下水主例では横木は4組のみであり、その間に挟み込まれていたのもへぎ板という薄い軽量の材であるため、強度が優れているとはいいがたい。また、大足として使用するためには友井東遺跡出土木製品にみられるような、手綱を繋ぐための孔が進行方向、すなわち短辺側に一对必要となるが、今回出土した木製品の側板には小孔が長辺側にのみに見られることから、大足として使用するのには適さない構造であろう。したがって、これらの木製品を大足であると積極的に評価する根拠は今のところ乏しいと考えられる。なお、側板と横木、間に挟み込む部材という構造は漁労具であるヤナにもみられる構造であるが、へぎ板^(注34)という材の特質を考えると、本木製品がヤナ等の漁具であるということも否定しうるだろう。

次に、木製品の中央に挟み込まれていたへぎ板という部材に着目して、本木製品が建築部材の一部である可能性を考えてみたい。へぎ板は薄く軽量の板材であり、柔軟性、通気性に優れることから、現存する古建築等でも壁材や屋根材として使用される部材である。青谷上寺地遺跡では複数枚のへぎ板が平行しておかれた状態で出土しており、緊縛方法は不明ながらシート状にされ、壁ないし天井板等として使用されたことが想定^(注35)されている。

今回出土した木製品を建築部材の一部と考えた場合、単独の完結した部材として存在することから、壁材の一部というよりも、窓・扉等の閉口部材、もしくは衝立等の単独の遮蔽部材として使用された可能性が考えられる。中央2本の横木に見られた凸状の加工は、板扉では一般的に認められる形であるということ^(注36)を考慮すると、形状的には閉口部材との類似点が多いといえるだろう。弥生時代における閉口部材については宮本長二郎がまとめているが、確実に窓や扉が形状を保ったまま出土することは、板扉等を除くと非常に僅少であるとされる。宮本氏は扉材、窓材をその軸に着目して分類を行っているが、下水主例には扉として使用するための軸はなく、ほかの部材と緊縛するためには側板、ないし横木の端の部分を何らかの部材で緊縛することによって吊り下げる必要がある。具体的な使用状況を復元する材料は得られていないが、以下に類例を提示しておきたい。

板扉以外の窓・扉類を、部材の一部のみで断定することができる木製品はほとんど見当たらないが、その可能性を指摘することができるものは散見する。第一は、いわゆる連子窓もしくは格子窓と呼ばれる型式のものである。これまで青谷上寺地遺跡では窓状木製品と報告されている、方形の枠をもつ木製品が弥生時代中期後半を中心に10点ほど知ら^(注37)れている(第157図3)。これらは側板と多数の横木から構成される構造をもつが、これらが窓であるならば、建物自体にはめ込むようにして使用する、取り外しができないものである。第二は蔀とされるものであるが、先述のようにこれまで知られていた板蔀は軸をもつ形式が一般的である。ここでは軸を持たない蔀窓

の可能性のあるものとして、唐古・鍵遺跡で出土した用途不明の木製品^(注38)を挙げておきたい(第157図2)。唐古・鍵遺跡出土の木製品は棒材で杵をつくり、その内側に葉や竹ひごを充填し、その上から横木として棒材が使用される。共伴した土器の型式から中期前葉の年代が与えられているため直接的な接点は見出しがたいが、今回出土した木製品と構造的には類似しているといえる。

以上のように、出土遺物の形状から下水主遺跡出土の方形組み合わせ木製品との類似点を考えてみたが、現状では古殿例以外には直接的につながるような事例は見当たらない。また、その機能に関しては、同じような組み合った状態で出土した各種の木製品をあげ、漁猟具や大足の可能性についても検討したが、様々な面で隔たりは大きく、現時点では建築部材の一部として考えておくのが妥当であろう。したがって、現状では方形組合せ木製品の機能としては、建築部材の一部、具体的には、葦や扉といった閉口部材を推測しておきたい。軸や他の構成部材がないため、使用状況の復元は難しいが、片側の側板にのみ約2cm四方の小孔が見られることに着目すると、ひも状の有機質で緊縛することによって、材から吊り下げるということを想定することができる。もしくは、小孔は板の内側の方が数mm程度ながら大きくなっており、この大きさの違いが使用時のすり減りによるものであるとするならば、孔の片側から何らかの部材が、例えば栓のような部材を使用することによって接合したと考えることも可能であろう。すなわち、長辺側の側板に他の部材と固定するための機能があったと考え、葦窓として使用されたという想定である。

今回の調査では一連のものと考えられることができるような、ほかの部材は出土していない。そのため、推論を重ねることとなったが、今後は単独で出土した木製品を含め、検討していくことが必要であろう。

(桐井理揮)

3) 下水主遺跡・水主神社東遺跡の時期別変遷

一連の発掘調査では、縄文時代晩期から中・近世にかけての遺構・遺物を検出した。これらの検出地点は、調査対象地で広く検出された島畑を除くと、時代ごとに遺構や遺物が集中する地点には偏りがみられる。また、出土遺物も時期別にみると偏りがあり、いずれの調査地点においても時代を超えて、長期にわたって遺構が営まれたことを示す例はほとんどない。したがって各遺構群は、断続的に形成されたといえる。ここでは時期ごとの遺構・遺物の変遷とその評価についてを述べる。

(1) 縄文時代晩期(第150図)

この時期の遺構・遺物は調査対象地内に散見されるが、特に、L地区では氾濫流路や落ち込みなどの自然地形、あるいは遺物包含層から大量の土器が出土した(本報告書79～85頁、89～105頁)。L地区では、焼土を1基確認したのみで、顕著な遺構は確認していない。しかし、出土した遺物点数が多く、本節191～197頁で検討を加えように、大量の土器の存在から木津川周辺の低地部に当該期の集落が存在した可能性は高いといえる。

また、下水主遺跡H地区や水主神社東遺跡B・C地区などで、遺物包含層や落ち込みからも同

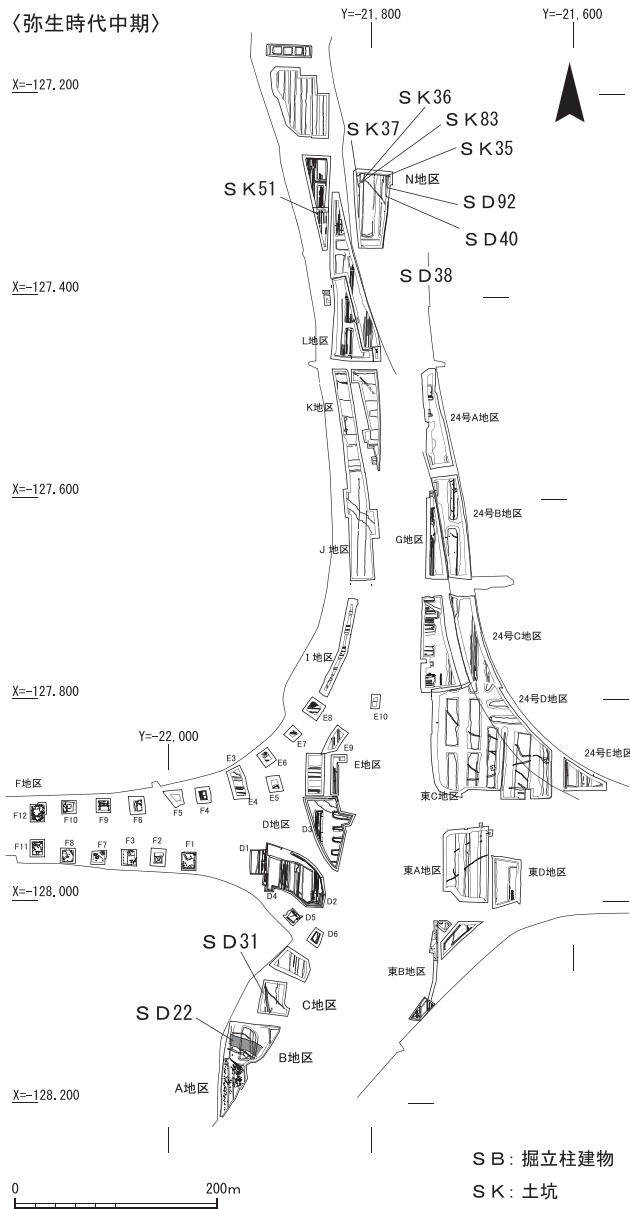
時期の縄文土器が少量ずつではあるが出土している(『報告集』第163冊・第167冊、本報告書)。遺物の分布が広範囲に及んでおり、下水主遺跡周辺に存在した集落の活動範囲を示していると考えられる。

(2) 弥生時代前期

この時期の遺構は確認していないものの、水主神社東遺跡A地区(A3区)出土遺物の中にこの時期のものと推定される破片資料がある(『報告集』第167冊所収第22図21)。周辺ではこの時期の遺構・遺物は出土していないため、その存在には注意する必要がある。

(3) 弥生時代中期後半～後期初め(第159図)

この時期の遺構は対象地の北部と南部に大きく別れて検出した。いずれにしても前期から中期前半にかけて資料は未確認である。



北部では下水主遺跡L・M・N地区で検出した。当該期の遺構はほとんどが土坑で、多数の遺物が出土した。出土した弥生土器は中期後半から後期初めにかけてのものである(『報告集』170冊、本報告書)。当該調査区では竪穴建物は検出していないが、多数の土坑の存在や出土遺物の量、これまで明らかになっている地形的な点などを加味すると、L地区で検出した縄文時代晩期の氾濫流路の付近を南限とし、その北側に当該期の集落が広がっていた可能性が高い。その北限は、これまでの調査では明らかになっておらず、下水主遺跡の北端部からさらにその北側に広がっていた可能性も考えられる。

一方、南部では、下水主遺跡B・C地区で土坑2基、溝2条のほか、護岸を施した自然流路1条を検出した(『報告集』第173冊)。当該期の遺構・遺物は古墳時代前期の遺構との重複が顕著であるため、検出数は少ない。その中でも流路SD22は、一部に護岸を行い、弥生時代中期後半の集落における基幹水路としての役割を果たしたのではな

第158図 下水主遺跡遺構変遷図1 弥生時代中期(1/7,500)

いかと想定されている。さらに確認した盛土遺構については舟の接岸も可能となっていることから船着き場としての性格も想定できる。護岸や盛土遺構の構造、その構築方法、さらに類例等の検討については『報告集』第173冊で詳細に検討しているので参照されたい。

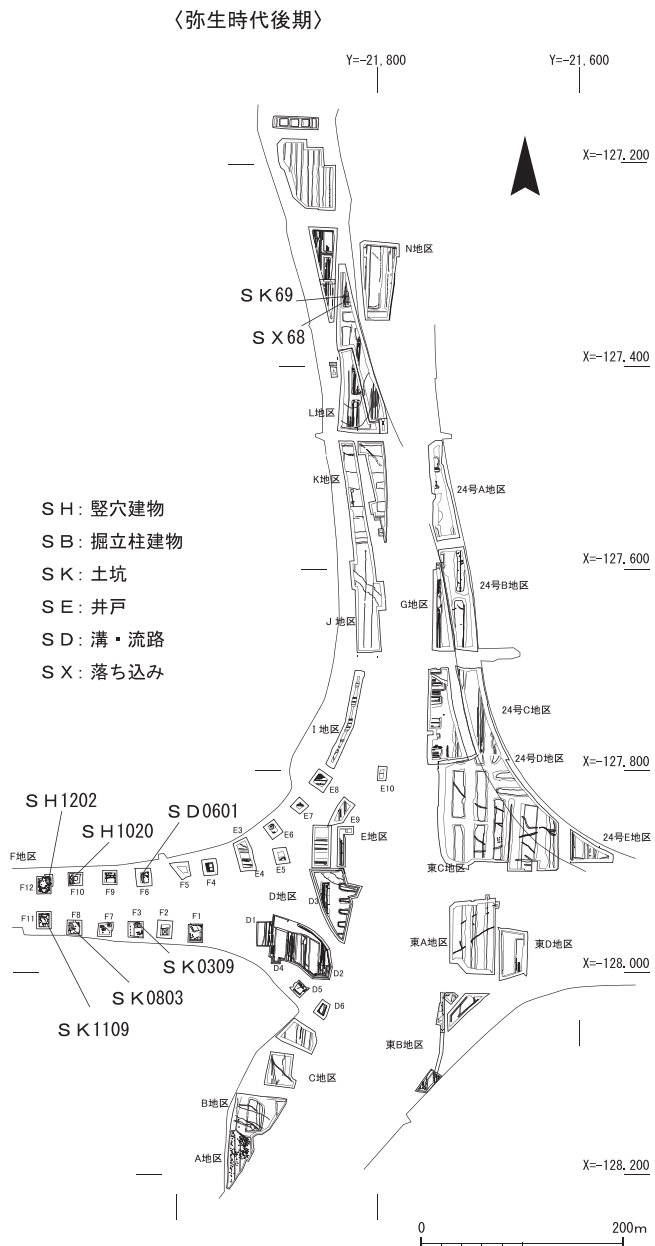
ところで、下水主遺跡の北部と南部でそれぞれ検出した遺構群の間には、この時期の遺構や遺物がまったくみられない。このことから、弥生時代中期後半から後期初頭にかけては、下水主遺跡の北部と南部で別々の集落が形成されていた可能性が指摘できる。ここで想定される集落の実態は不明であるが、出土遺物の様相から、両集落とも中期末ないし後期初頭には廃絶していると考えられる。

(4) 弥生時代後期(第159図)

この時期の遺構は、調査地の南部を中心に散見されるが、後期前半に属するものはほとんどなく、いずれも後半から末にかけてのものである。したがって、後期初頭から後期後半までの集落が営まれた場所は、調査対象地外と想定される。この段階の遺構として下水主遺跡F地区で竪穴建物2棟のほか、土坑や土器だまりなど検出した(『報告集』第168冊)。これらの遺構の立地は、木津川に沿った微高地上に展開していると考えられることから、F地区周辺が弥生時代後期の集落の一面であったことが予想される。ただ、F地区の遺構群も、古墳時代前期の庄内式～布留式段階までは存続しないことから、弥生時代後期末には廃絶していると考えられる。このほか、F地区に隣接するD地区やI地区で同時期の遺物の出土がわずかであるが確認でき、当該期の遺構が東に広がる可能性もある。

(5) 弥生時代終末期～古墳時代前期(第160図)

この時期になると、下水主遺跡B地区を中心に広く遺構の形成と遺物の出



第159図 下水主遺跡遺構変遷図2 弥生時代後期(1/7,500)

土が確認できる(『報告集』第173冊)。まず、B地区では大規模な溝SD22を検出した。SD22は弥生時代中期の流路を庄内式古段階に再掘削して利用したもので、幅が10m以上にも達する大規模なものである。吉備系や東海系など遠隔地から持ち込まれた土器が出土することや溝の規模などから、物資の流通などの中核的な集落が存在したと考えられ、調査地点付近は大規模な溝の存在から川津としての性格を有していたと考えられる。SD22からは埋没過程で廃棄や投棄された大量の遺物も出土した。その詳細については『報告集』第173冊で述べたとおりである。

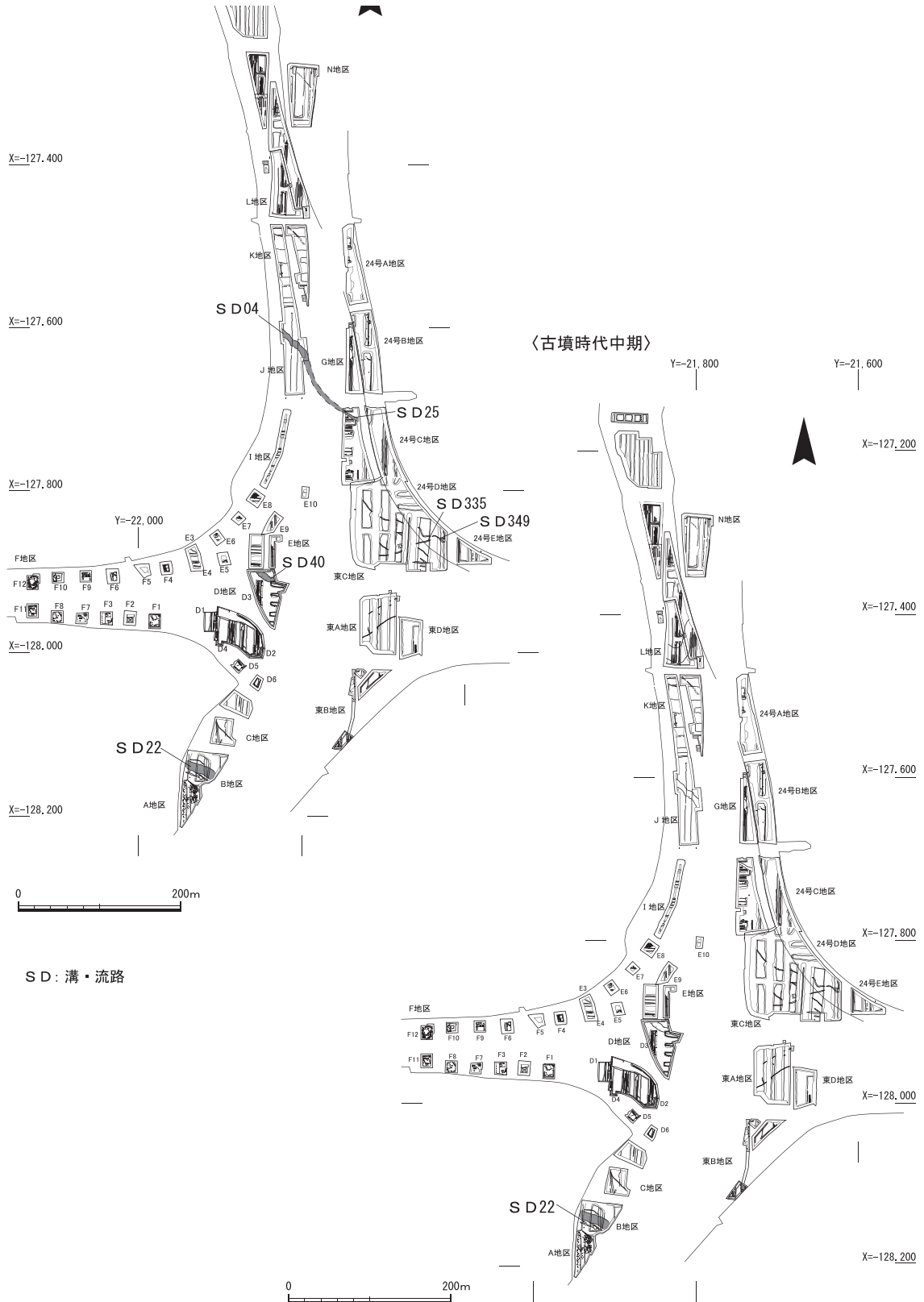
SD22と同時期の遺構が、隣接する下水主遺跡A地区をはじめ、D・H・J・L地区、あるいは水主神社東遺跡C地区などで確認している。このうち、H地区で検出した溝SD25と、同一の溝と推定されるJ地区で検出した溝SD04は、建築部材と推定される木製品が多く出土するとともに、溝の一部を塞ぎ止めるなどして水を溜めたと思われる遺構を確認している(本報告書42～50、156～165、167～176頁)。また、その機能等については本節197～202頁で検討したが、明確にすることはできなかった。今後、周辺の調査事例や類例の増加が期待される場所ではあるものの、「居住以外の何らかの目的」という評価は妥当と考える。なお、J地区では建築部材と考えられる木製品がややまとまって出土しており、H地区とJ地区の間にも若干の機能差が存在した可能性もある。

このほか、水主神社東遺跡のC地区や下水主遺跡L地区など、弥生時代終末期～古墳時代前期の土器を伴う性格不明の溝を確認している(『報告集』第168冊、本報告書)。やや深さのある溝で、遺物が少ないため詳細は不明であるが、正方位に対して斜行しているのが一般的である。これらの溝は弥生時代後期に遡るものも含まれるかもしれないが、水主神社東遺跡A地区付から下水主遺跡N地区までの広い範囲に多数確認できる。その性格は不明であるが、調査地周辺では西側よりも東側の方が低いため、そこに滞水した水を西側に抜くために掘削されたのではないかと考えられる。なお、溝の多くがH地区のSD25と同一方位であることは留意される。これらの溝群にくらべSD25は規模の点では大きく異なることから基幹水路的な性格も考えられる。

このように古墳時代前期の遺構・遺物は、調査対象地内で多く確認できる。ただし、集落の実態を示す遺構が確認できていないため、集落本体の所在地は不明である。ただ、調査地最南端のA・B地区で多数の土器が出土していることから、A・B地区よりも南ないし南東側、特に水主神社の所在するあたりに集落の中心部分を想定することができるのではないかと考える。

(6)古墳時代中・後期(第160図)

当該期の遺構は明瞭ではないが、下水主遺跡B地区で検出した溝SD22の上層溝や土坑SK19などが該当する(『報告集』第173冊)。また、SD22上層溝の埋土を中心に古墳時代中・後期の遺物が多数出土している。このほか、下水主遺跡F2区出土罎(『報告集』第168冊第13図13)やL地区中層遺物包含層出土の須恵器杯蓋の破片(本報告書第55図119・120)など、ごく少量が調査地各所で散見される。このような状況から、古墳時代中・後期に恒常的に集落が営まれた可能性は低いと考えられる。一方、少量の土器片が調査対象地内に散見されるということは、当該期にさまざまな活動が行われていたことを示しているともいえる。



第160図 下水主遺跡遺構変遷図3 古墳時代(1/7,500)

(7)飛鳥時代(第163図)

当該期の遺構は、おもにA・B地区で検出した。その概要は『報告集』第173冊で報告したとおりである。

まず、A地区では井戸1基はじめ、土坑や多数の柱穴などの遺構を検出した。土坑は整地に伴う単位の一部である可能性もあると考えられる。柱穴は列状をなすものが多数確認できたが、掘立柱建物として復元することができるものはなかった。この点について柱穴列の多くが北に対して35°前後西に振るものが大半を占めることや、柱穴列が四方に認められ、一定の空間領域を圍繞している可能性が考えられることから、中心的な施設は確認できないものの、閉鎖的な空間を設けるため、こうした柱穴列が設けられたと考えられる。そして、閉鎖的な空間という点を重視し、中心的な施設は未確認であるものの、宗教的な空間であった可能性を指摘した(『報告集』第173冊235～237頁)。また、井戸S E 112は方形掘形と井戸枠を持つもので、特に井戸枠の部材として扉材などを再利用しており、上記柱穴列群に囲まれた中心的な施設で使用されていたものが転用されたのかもしれない。なお、これらの遺構から出土した土器の大半が7世紀代に限られ、8世紀まで下るものは極くまれにしかない。したがって、ほぼ7世紀代のおよそ100年ほどの限定してA地区の遺構群は形成されたものと考えられる。

B地区では溝や土坑などの遺構のほか、上述の溝S D 22の最上層部分で多数の遺物を含む層序を確認した。これらはS D 22を最終的に埋めて、周辺一帯を平坦にした、整地層と考えられる。この整地層についてはA地区の遺構が形成される過程で、北側に存在したS D 22の最上層部分を埋め立てたものではないかと想定される。これによってA地区の遺構群に対して北側に広い空間を確保していると考えたい。

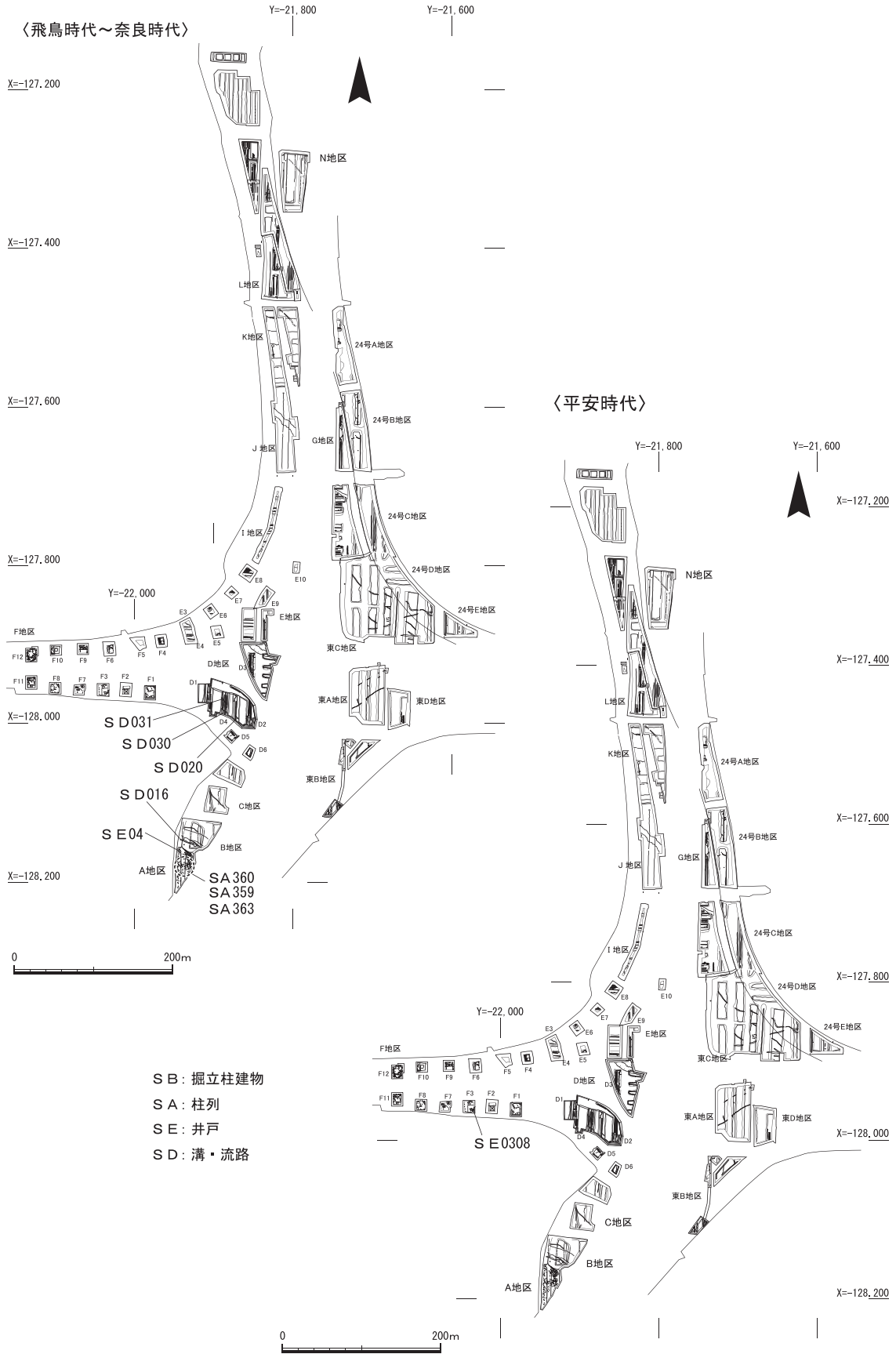
以上のほか、当該期で注意される遺物として、下水主遺跡F 7区で検出した井戸S E 0704の掘形から出土した川原寺式もしくは藤原宮式の軒丸瓦がある(『報告集』第168冊第45図244)。遺構そのものは平安時代中期のものであるが、この軒丸瓦が、奈良県飛鳥地域へ運搬される途中であったのか、あるいは調査地近隣にこうした軒丸瓦を使用した施設が存在したのか、現段階では検討するための材料が少なく、今後の検討課題である。

また、同じく下水主遺跡F 1区では、掘立柱建物2棟を検出した(『報告集』第168冊)。出土した土師器片から古代の可能性が高いものの、詳細な時期は不明である。ただ、A地区の柱穴列とは一致しないが、建物の主軸が北に対して25°前後西に振るので、当該期の可能性も考えられる。

(8)奈良時代～平安時代中期(第163図)

奈良時代になると、遺構はまったく確認できない状況となるが、奈良時代の遺物と推定されるものが少量出土している。こうした状況から下水主遺跡では奈良時代の遺構は存在しなかった可能性が高い。この状況は引き続き平安時代前期においても同様である。しかし、平安時代中期(10世紀代)になると、少量であるが、遺構や遺物を確認することができる(『報告集』第168冊・第17冊)。

まず、下水主遺跡F 7区では井戸1基(S E 0704)を検出した。出土遺物に黒色土器碗が含まれ



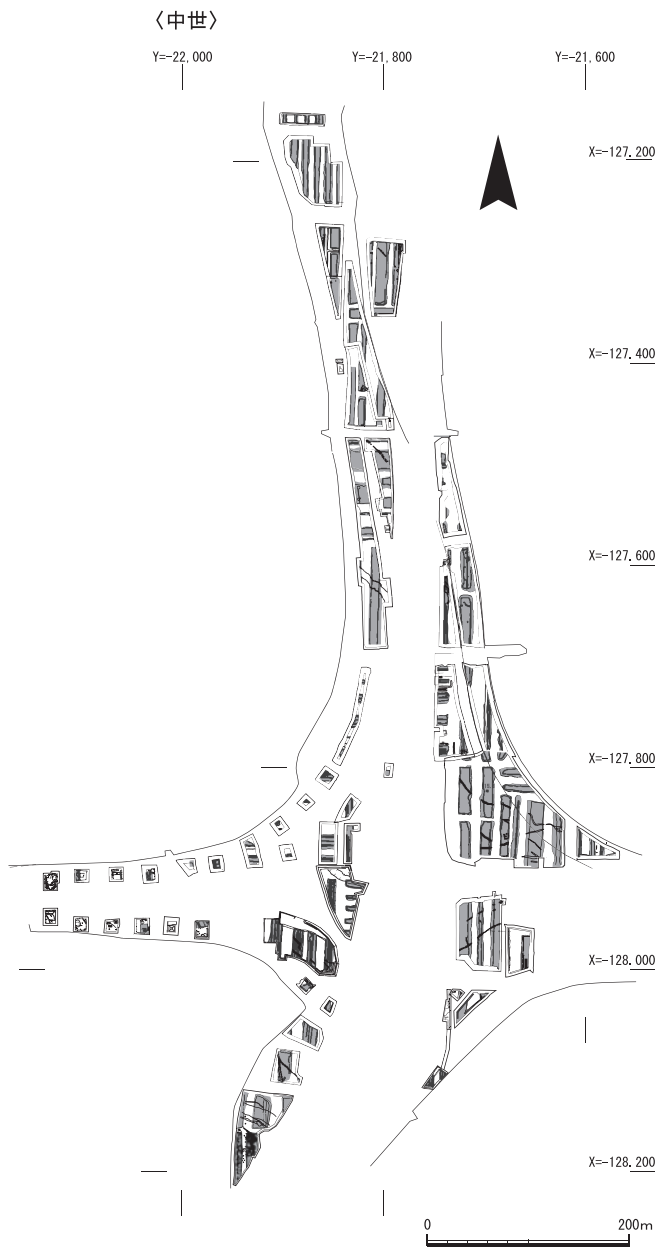
第161図 下水主遺跡遺構変遷図4 飛鳥～平安時代(1/7,500)

るため、当該期の遺構であることが明らかであるが、上述のように掘形から7世紀末頃の軒丸瓦が出土している。また、B地区の土坑SK15からも黒色土器碗が出土しており、当該期の遺構と考えられる。このほか、緑釉陶器や灰釉陶器の破片などの出土もB地区などで確認できる。ただ、遺構の検出数は少なく、平安時代の土地利用は不明な点が多い。ややまとまった遺構が確認できたF地区やB地区は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構分布と重複するところがあることから、木津川沿いの微高地上に集落が展開していた可能性を考えることができる。

さらに下水主遺跡の北半部に当たるL地区やN地区では、平安時代の可能性がある軒瓦が出土しており、この付近に当該期の遺構群が広がっていた可能性が予想される。

(9) 中世(第164図)

中世になると、調査対象地一帯には島畑が形成された。島畑の形成時期については、中世前半



にあたる12～13世紀の土器が島畑の素掘り溝や溝状遺構から出土することから、このころまで遡ると考えられる。新名神高速道路整備事業や国道24号改良事業に伴う一連の調査の結果、各調査地点合わせて112基の島畑を検出した(同一の島畑と思われるものは重複して数えていない)。一部の例外を除き、島畑の大半は安定した基盤層を整形して最初期の島畑を形成していることが確認できた。すなわち、畑地とすべき場所の周囲を溝状に掘り下げ、その掘削土を畑地部分に盛り上げるという方法で島畑を形成していることが明らかになった。その後、溝状遺構の埋没と再掘削、島畑への盛り土等が繰り返し行われている。こうした島畑の形成がいつまで続くのか、発掘調査の結果から明確に断言できないが少なくとも近世のある段階まで継続していた可能性もある。

発掘調査の結果からみると、多くの島畑で、長期にわたって同一か所で島畑の造営が営まれていることが

第162図 下水主遺跡遺構変遷図5 中世(1/7,500)

明らかになった。この点は土層断面の観察から導き出せた結論であるが、島畑が水平方向にわずかに拡大するものの、原則垂直方向への盛土によって上方へ拡大している。この点を島畑と溝状遺構の境界付近の土層を観察すると、島畑の盛土と溝状遺構の堆積土が交互に上位側となっており、水平方向への拡大を読み取ることはほとんどできず、ほぼ同じ場所で島畑を営み続けていることが明瞭に読み取れる。

一方、溝状遺構については水田として利用されていた可能性も指摘されている。しかし、発掘調査で溝状遺構を掘削している際には、用排水に必要とされる水路や堰状の遺構、あるいは畦畔などを確認することはできなかった。これらを必要とせず水田耕作が可能なのかどうかかわからないが、広範囲に調査しても、これらの遺構は全く確認されなかった。この点を踏まえれば、水田耕作を行っていたと積極的に評価することはできないのではないだろうか。

また、多くの調査区で、溝状遺構が砂層の堆積によって埋没し、合わせて島畑もこうした砂層に覆われている例を確認することができた。この砂層は木津川の氾濫等による洪水砂の可能性が高く、また、洪水の回数も一度に限らず複数回、発生したと考えられる。こうした洪水に対する対処も行いつつ、やがて島畑から水田を主体とする作付けの変化に至ったものと考えられる。

さらに注目される点として、現在の水田を区画する畦畔と島畑の分布を重ねあわせてみると、水田の中央に島畑が形成されており、畦畔の位置に溝状遺構が存在していることが明らかになった。この点は、島畑や溝状遺構の土層断面観察からも、両遺構がほぼ同一地点で長期にわたって維持されていたことと一致しており、両遺構が時間の経過とともに垂直方向への展開を見せるものの、水平方向への変化がほとんどなかったことを示している。このように、現在の水田景観が、中世段階の島畑の形成にまで遡って規定されていた事実が確認された。この点において、多数の島畑を調査し、現在とのつながりを明らかにできた意義は大きい。

(筒井崇史)

注1 平成20年度以降に調査に着手した新名神高速道路整備事業に伴い刊行した発掘調査報告書は以下の通りである。

- ①村田和弘・松尾史子「女谷横穴群第10・11次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第137冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010
- ②引原茂治・松尾史子「女谷横穴群第11・12次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第142冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2011
- ③古川 匠「美濃山廃寺下層遺跡第8次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第148冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2012
- ④石井清司・伊野近富・筒井崇史・村田和弘・関広尚世・大高義寛「美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第154冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2013
- ⑤奈良康正・筒井崇史・村田和弘・山崎美輪「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成23・24年度発掘調査報告 (1)女谷・荒坂横穴群第13次調査 (2) 荒坂遺跡第5次」(『京都府遺跡調査報告集』

第157冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2014

⑥伊野近富・筒井崇史・村田和弘・大高義寛「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成23～25年度発掘調査報告 (1)門田遺跡第3～5次 (2)西村遺跡第2・3次」(3)向谷遺跡第3・4次」(『京都府遺跡調査報告集』第161冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2015

⑦戸原和人・岡崎研一・筒井崇史・関広尚世・福山博章・深澤麻衣「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成23～25年度発掘調査報告 (1)水主神社東遺跡第1・2・5次 (2)下水主遺跡第1・4次」(『京都府遺跡調査報告集』第167冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2016

⑧筒井崇史・高野陽子・岡田健吾「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成25・27・28年度発掘調査報告 下水主遺跡第4次(F地区)」(『京都府遺跡調査報告集』第168冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2017

⑨高野陽子・筒井崇史・福山博章・桐井理揮ほか「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成24～26年度発掘調査報告 下水主遺跡第1・4・6次」(『京都府遺跡調査報告集』第173冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2018

注2 下水主遺跡の範囲については、京都府教育委員会が試掘調査を実施され、遺跡の広がりを確認された。福島孝行「下水主遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査報告 平成25年度』京都府教育委員会) 2014
福島孝行「下水主遺跡第7次調査」(『埋蔵文化財発掘調査報告 平成26年度』京都府教育委員会) 2015

注3 水主神社東遺跡の範囲については、京都府教育委員会が試掘調査を実施され、遺跡の広がりを確認された。

注4 地理的環境の執筆にあたっては下記文献を参照した。

①平凡社編『日本歴史地名体系 26 京都府の地名』(平凡社 1981)

②「角川地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典 京都府』(角川書店 1982)

③城陽市史編さん委員会編『城陽市史』第1巻(城陽市 2002)

注5 歴史的環境の執筆にあたっては下記文献を参照した。

①城陽市史編さん委員会編『城陽市史』第1巻(城陽市 2002)

②城陽市史編さん委員会編『城陽市史』第3巻(城陽市 2002)

注6 石井清司・筒井崇史・渡邊拓也・橋本稔・田原葉月「一般国道24号城陽IC関連寺田地区改良事業関係遺跡 下水主遺跡第6・8次」(『京都府遺跡調査報告集』第170冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2017

注7 注1文献⑨参照

注8 注6文献参照

注9 増田孝彦・岡崎研一・黒坪一樹・引原茂治・酒井健治「一般国道24号金尾交差点改良事業関係遺跡 下水主遺跡第2・3次 水主神社東遺跡第3・4次」(『京都府遺跡調査報告集』第163冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2015

注10 鳥畑の周囲には鳥畑よりも低く掘り込まれた部分は滞水するものの、流れがあるわけではないので「溝」という表現は適切ではない。しかし、形態的には溝に類似することから、本報告では「溝状遺構」という名称を使用する。また、溝状遺構の幅は鳥畑の斜面の落ち込みが始まる部分の間の長さとする。

注11 おもに古代(飛鳥・奈良・平安時代)の土器の器種名には、奈良文化財研究所ものを使用する。安田龍太郎・巽淳一郎・沢田正昭「土器」(奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告XI-第1次大極殿地域の調査-』(『奈良国立文化財研究所学報』第40冊))1981

- 神野恵「土器類」(奈良文化財研究所編『平城宮発掘調査報告XVI-兵部省地区の調査-』(『奈良文化財研究所学報』第70冊))2005
- 注12 高野陽子「弥生時代後期～古墳時代の土器様相」(『佐山遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第33冊)財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 注13 出土した建築部材の記述に当たっては下記文献を参照した。
奈良国立文化財研究所編『木器集成図録 - 近畿原始篇 -』(『奈良国立文化財研究所史料』第36冊 奈良国立文化財研究所) 1993
- 注14 「氾濫流路」については当調査研究センター増田富士雄理事(京都大学名誉教授)よりご教示いただいた。
- 注15 白磁碗の分類については下記文献を参照した。
横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館) 1978
大宰府市教育委員会『大宰府条坊跡Ⅱ』(『大宰府市の文化財』第7集) 1983
中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』(中世土器研究会) 1995
- 注16 古墳時代の須恵器については下記の文献を参照した。
田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(平安学園考古学クラブ)1966
田辺昭三『須恵器大成』(角川書店)1981
- 注17 縄文土器の記述にあたっては以下の参考文献を参照した
泉拓良「西日本凸帯文土器の編年」(『文化財学報』第8集 奈良大学文学部文化財学科) 1990
大野薫「西日本における縄文土器の変遷」(『西日本縄文文化の特色』第1回西日本縄文文化研究会 関西縄文文化研究会・中四国縄文研究会・九州縄文研究会) 2005
柴 暁彦ほか編『佐山尼垣外遺跡』(『京都府遺跡発掘調査報告書』第31冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
近藤奈央・矢野健一「京都府の突帯文土器の概要・集成」(『関西の突帯文土器』第8回関西縄文文化研究会資料集 関西縄文文化研究会) 2010
中塚良・矢野健一ほか「縄文土器の材質的研究～自然資源利用と文化動き～」(『第17回京都府埋蔵文化財研究集会』資料集 京都府埋蔵文化財研究会) 2010
松田真一ほか編『重要文化財橿原遺跡出土品の研究』(『橿原考古学研究所研究成果』第11冊 奈良県立橿原考古学研究所) 2011
家根祥多「近畿地方の土器」(『縄文文化の研究』4 縄文土器Ⅱ 雄山閣) 1981
- 注18 土器の記述に当たっては大野薫氏よりご教示いただいた。
- 注19 方形組合せ木製品の観察に当たっては京都府教育庁指導部文化財保護課森田卓郎氏よりご教示いただいた。
- 注20 時期別変遷については、城陽JCT・ICの発掘調査と並行して実施された国道24号に関する改良事業に伴う発掘調査の成果も参照している。
- 注21 矢野健一「角閃石多量含有土器」(『縄文時代の考古学』7 土器を読み取る 同成社) 2010
- 注22 千葉 豊「京都盆地の縄文時代遺跡」(『京都大学構内遺跡調査研究年報1992年度』京都大学埋蔵文化財研究センター) 1993
- 注23 清水芳裕「角閃石を中心とした胎土の特徴」(『縄文～古墳時代における土器の特徴的分布に関する

- 定量分析的研究』平成15・16年度科学研究費補助金(基盤研究(c)1)研究成果報告書) 2006
中塚良・矢野健一ほか「縄文土器の材質的研究～自然資源利用と文化動き～」(『第17回京都府埋蔵文化財研究集』資料集 京都府埋蔵文化財研究会) 2010
- 注24 縄文土器の観察、数量のカウントに当たっては柴田将幹氏(田原本町教育委員会)、西浦熙氏(大阪大学文学部学部生)の協力を得た。
- 注25 注17柴ほか編文献に同じ
- 注26 杉本 宏ほか「寺界道遺跡発掘調査概要」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 宇治市教育委員会) 1987
- 注27 注22文献に同じ
- 注28 石井清司編『北金岐遺跡』(『京都府遺跡発掘調査報告書』第5冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注29 高野陽子「導水祭祀の原形—近江南部にみる弥生時代の導水遺構—」(『遠古登攀』遠山昭登君追悼考古学論集 『遠古登攀』刊行会) 2010
伴野幸一2006「まとめ—伊勢遺跡の南側の空間利用と導水施設—」(『伊勢遺跡確認調査報告書』IV 守山市教育委員会) 2006
平井美典ほか編『柳遺跡』IV(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会) 2008
- 注30 石野博信・関川尚功『纏向』(奈良県立橿原考古学研究所) 1976
- 注31 鍋田 勇編『古殿遺跡』(『京都府遺跡発掘調査報告書』第9冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注32 ただし、各部材を詳細に観察すると、下水主例では横木の間へぎ板状のものを挟み込こむため、横木の内側は丁寧に面取りされていたのに対し、古殿遺跡で出土した木製品は横木の断面形状が楕円形をなしており、間に部材を挟み込んだ際の安定感にやや欠ける。また、貫孔の加工をみても、古殿遺跡のものはやや粗雑な加工を施しているのに対し、下水主例では研磨することによってより丁寧なつくりとなっている。
- 注33 秋山浩三「田下駄・大足」と関連木製品」(『季刊考古学第104号 弥生・古墳時代の木製農具』雄山閣) 2008
- 注34 田中禎子「愛知県朝日遺跡のヤナ」『季刊考古学第24号 縄文・弥生の漁撈文化』雄山閣) 1988
- 注35 茶谷 満・家塚英詞編『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告3 建築部材(資料編)』(鳥取県埋蔵文化財センター調査報告24 鳥取県埋蔵文化財センター)2008
- 注36 宮本長二郎『出土建築部材が解く古代建築』(日本の美術490 至文堂) 2007
- 注37 注35文献に同じ
- 注38 石川ゆずは「2. 木製品」(『唐古・鍵遺跡I』遺構・主要遺物編 田原本町教育委員会) 2009

付表5 出土土器観察表(縄文土器)

報告番号	出土遺構	器種	分類	口径 (c m)	残存率	部位	口縁端部の形状	口縁端部の刻目	凸帯の刻目	色調	胎土	技法上の特徴等
187	N R 42	深鉢	II B	12.3	7/12	口頸～底部	丸	米粒状	-	(外) 暗灰黄 2.5Y4/2 (内) 暗灰黄 2.5Y5/2	径1mm程度の石英、長石を5%程含む、雲母片含む	
188	N R 42	深鉢	II B	19.1	1.5/12	口頸～胴部	面	米粒状	-	(外) オリーブ褐 2.5Y4/3 (内) 黒褐 2.5Y3/1	径1mm程度の石英、長石を5%程含む、雲母片含む	
189	N R 42	深鉢	II B	22.4	1/12	口頸～胴部	面	O字	-	(内・外) 黒褐 10YR 3/1	径1～4mm程度の長石を5%程含む。	
190	N R 42	深鉢	II A a	28.4	3.5/12	口頸～胴部	面	なし	-	(内・外) 黒褐 2.5Y3/1	径1～3mm程度の角閃石、長石を10%程含む、雲母片多数量	粘土接合痕が顕著に残る
191	N R 42	深鉢	II A a	35.0	1/12	口頸～胴部	面	なし	-	(外) にぶい黄褐 10YR 5/3 (内) 暗灰黄 2.5Y5/2	径1～4mm程度の角閃石、石英を25%程含む、雲母多量	内外面に粘土接合痕を残す
192	N R 42	深鉢	I A a	32.1	3.5/12	口頸～胴部	丸	小D字	小D字	(外) にぶい黄褐 10YR 4/3 (内) 黒 5Y2/1	径1～7mm程度の石英、長石を10%程含む	
193	N R 42	深鉢	I C か	25.4	2/12	口頸部	面	なし	D字	(内・外) 暗灰黄 2.5Y5/2	径1～3mm程度の石英、長石を10%程含む、長石が多い	
194	N R 42	深鉢	I C	26.2	3/12	口頸～胴部	面	D字	D字	(外) 灰黄 2.5Y6/2 (内) 黄灰 2.5Y5/1"	径1～3mm程度の石英、長石、金雲母、クサリ礫を10%程含む	
195	N R 42	深鉢	I C	26.2	5/12	口頸～胴部	面	D字	D字	(内・外) 灰黄 2.5Y7/2	径1mm程度の石英、長石を5%程含む	
196	N R 42	深鉢	I C	39.0	1/12以下	口頸～胴部	丸	V字	V字	(内・外) 黄灰 2.5Y5/1	径1～2mm程度の石英、長石を10%程含む	
197	N R 42	深鉢	I C	-	1/12	口頸～胴部	面	逆D字	なし	(外) 黒褐 2.5Y3/1 (内) にぶい黄 2.5Y6/3	径1～4mm程度の石英、長石を10%程含む、雲母片含む	
198	N R 42	深鉢	II D	-	1/12	口頸～胴部	丸	O字	-	(内・外) にぶい黄橙 10YR 7/3	径1～2mm程度の石英、長石、くさり礫を15%程含む、雲母片含む	
199	N R 42	深鉢	I D	-	1/12	口頸部	丸	D字	長D字	(外) 暗灰黄 2.5Y4/2 (内) 暗灰黄 2.5Y5/2	径1～3mm程度の角閃石、長石を7%程含む、雲母片多量	
200	N R 42	深鉢	II D	33.5	1.5/12	口頸～胴部	面	C字	-	(外) 黒褐 10YR 3/1 (内) にぶい黄橙 10YR 6/3	径1～2mm程度の石英、長石を5%程含む	内外面ミガキ
201	N R 42	深鉢	II B	22.6	12/12	完形	丸	なし	-	(外) 黒褐 10YR 3/1 (内) にぶい黄橙 10YR 7/3	径1～2mmの石英、長石を5%程含む	いびつな作り
202	N R 42	深鉢	I E	11.3		完形	丸	なし	なし	(内・外) 黒褐 10YR 3/1	半精製	黒色磨研、内面に沈線
203	N R 42	深鉢	II F	(22.1)	1/12	口縁部	丸	なし	-	(外) 黒褐 2.5Y3/2 (内) 暗灰黄 10Y4/2	径1～4mmの石英、長石を5%程含む、黒雲母、角閃石をわずかに含む	外面に粘土接合痕を残す
204	N R 42	深鉢	II F	-	1/12以下	口縁部	面	爪	-	(内・外) 浅黄 2.5Y7/4	径1～2mm程の石英-長石、金雲母10%程含む	
205	N R 42	深鉢	II F	-	1/12以下	口縁部	面	O字	-	(外) 褐灰 10YR 5/1 (内) 黒 10YR 1.7/1	径1～3mm程度の石英、長石、チャート、黒色粒を3%程含む	
206	N R 42	深鉢	-	-	12/12	底部	-	-	-	(外) 褐灰 10YR 5/1 (内) 褐灰 10YR 4/1	径1～3mm程度の石英、長石を10%程含む、雲母片含む	尖底、被熱痕跡顕著
207	N R 42	深鉢	-	-	12/12	底部	-	-	-	(外) 褐 10YR 4/4(内) 黒褐 2.5Y3/1	径1～3mm程度の石英、長石を10%程含む、雲母片-角閃石をわずかに含む	丸底
208	N R 42	深鉢	-	底 3.2	底 4/12	底部	-	-	-	(外) 灰黄 2.5Y6/2 (内) 黒 2.5Y2/1	径1～5mm程度の角閃石を3%程含む	平底
209	N R 42	深鉢	-	底 4.2	6/12	底部	-	-	-	(外) 暗灰黄 2.5Y4/1 (内) 黄灰 2.5Y5/1	径1～2mm程度の角閃石、長石を10%程含む、雲母片含む	やや上げ底気味
210	N R 42	深鉢	-	-	-	体部	-	-	-	(内・外) 灰黄 2.5Y6/2	径1～3mm程度の石英、長石、チャートを20%程含む	縄文で施文 北白川上層式か

報告番号	出土遺構	器種	分類	口径 (c m)	残存率	部位	口縁端部の形状	口縁端部の刻目	凸帯の刻目	色調	胎土	技法上の特徴等
211	N R 42	深鉢	-	-	-	体部	-	-	-	(内・外) 灰黄 2.5Y6/2	径1～3mm程度の石英、長石、チャートを20%程含む	縄文で施文 北白川上層式か
212	N R 42	深鉢	-	-	-	体部	-	-	-	(内・外) 灰黄 2.5Y6/2	径1～3mm程度の石英、長石、チャートを20%程含む	縄文で施文 北白川上層式か
213	N R 42	深鉢	-	底7.8	底3/12	底部	-	-	-	(内・外) 灰黄 2.5Y6/2	径1～3mm程度の石英、長石、チャートを20%程含む	縄文で施文、 北白川上層式か
214	N R 42	深鉢	II	-	1/12	口頸部	面	逆D字	-	(外) 浅黄橙 7.5YR 8/4 (内) 灰白 7.5YR 8/2	径1mm程度の石英、長石多量、金雲母、シャモット微量	外来系か
215	N R 42	深鉢	II	-	1/12以下	口頸部	面	O字	-	(内・外) 黒褐 10YR 3/2	径1～2mm程度の角閃石、長石を15%程含む、雲母片多量	
216	N R 42	深鉢	I	-	1/12	口頸部	丸	なし	長D字	(内・外) 暗灰黄 2.5Y2/1	径1～2mm程度の石英、長石、雲母を3%程含む	
217	N R 42	深鉢	I	-	1/12	口頸部	面	V字	V字	(内・外) 暗灰黄 2.5Y5/2	径1～4mmの角閃石、長石を5%程含む雲母片多量	
218	N R 42	深鉢	I	-	1/12	口頸部	面	D字	D字	(内・外) 灰黄 2.5Y7/2	径1～4mm程の石英、長石、チャートを20%程含む	口縁端部直下までケズリ
219	N R 42	深鉢	I	-	1/12以下	口頸部	面	D字	O字	(外) にぶい黄橙 10YR 7/3 (内) 黒 10YR 2/1	径1～2mmの石英、長石を5%程含む	
220	N R 42	深鉢	I C か	25.8	3/12	口頸部	面	長D字	長D字	(外) 暗灰黄 2.5Y5/2 (内) 黒 7.5Y2/1	径1～6mmの石英、長石を5%程含む	2か所に補修孔あり
221	N R 42	深鉢	I C	-	1.5/12	口頸部～胴部	面	なし	小D字	(内・外) 黒褐 10YR 3/1	径1～5mm程度の石英、長石を10%程含む。雲母片含む	スス・コゲが顕著に残る
222	S X 40	深鉢	-	-	1/12	口頸部	丸	I字	-	(内・外) 黄灰 2.5Y5/1	径1～3mm程度の石英、長石、雲母、角閃石を5%程含む	外面に条痕
223	N R 42	深鉢	-	-	1/12以下	胴部	-	-	-			内面に顕著に粘土接合痕跡残る
224	N R 42	深鉢	I	22.2	2/12	口頸部	面	なし	なし	(外) 黄灰 2.5Y4/1 (内) 暗灰黄 2.5Y5/2	径1～2mm程度の石英、長石を10%程含む	
225	N R 42	深鉢	I	-	1.5/12	口頸部	面	なし	なし	(内・外) 黒 10YR 2/1	径1～2mm程度の長石を10%程含む	内面に沈線をもつ
226	N R 42	深鉢	I	24.7	1.5/12	口頸部	丸	なし	なし	(外) 暗灰黄 2.5Y5/2 (内) 灰黄 2.5Y6/2	径1～2mmの石英、長石を3%程含む	内面に沈線をもつ
227	N R 42	浅鉢	A a	(14.4)	1/12以下	口縁部	外折	なし	-	(外) 黒褐 2.5Y3/ (内) 黒 2.5Y2/1	径1～2mmの石英、長石を3%程含む	黒色磨研、外面屈曲部に沈線
228	N R 42	浅鉢	A a	17.8	1/12	口縁部～体部	外折	なし	-	(外) 黄灰 2.5Y5/1 (内) 暗灰黄 2.5Y5/2	径1mm程の石英、長石、黒色粒を3%程含む	黒色磨研
229	N R 42	浅鉢	A a	22.4	3/12	口縁部～体部	面	なし	-	(外) 黒褐 2.5Y3/1 (内) 黄灰 2.5Y4/1	径1mm程度の石英、長石、金雲母を3%程含む	黒色磨研。口縁部外面に沈線
230	N R 42	浅鉢	A a	19.9	1/12	口縁部	外折	なし	-	(外) 黒褐 2.5Y3/1 (内) 黄灰 2.5Y4/1	径1～5mm程度の石英、長石、金雲母を10%程含む	黒色磨研
231	N R 42	浅鉢	A a	27.9	5/12	口縁部	外折	なし	-	(外) 黒褐 2.5Y3/1 (内) 黄灰 2.5Y4/1	径1mm程度の石英、長石を3%程含む	黒色磨研、口縁部内面・外面屈曲部に沈線。
232	N R 42	浅鉢	A a	24.9	底部以外完存	口縁部～底部	外折	なし	なし	(内・外) 黄灰 2.5Y4/1	径1mm程度の石英、長石を3%程含む	黒色磨研、口縁部外面に貼付凸帯
233	N R 42	浅鉢	A b	28.4	1/12	口縁部～体部	丸	なし	なし	(内・外) 黄灰 2.5Y5/1	径1mm程度の石英、長石を3%程含む	口縁部外面に貼付凸帯
234	N R 42	浅鉢	A b	22.1	1/12	口縁部	面	なし	-	(内・外) 黄灰 2.5Y4/1、(屈曲部以下外面) 浅黄 2.5Y8/4	径1mm程度の石英、長石、雲母等を3%程含む	口縁部黒色磨研
235	N R 42	浅鉢	A b	22.5	1/12	口縁部～体部	丸	なし	-	(内・外) 黄灰 2.5Y5/1	半精製。径1mm以下の鉱物をわずかに含む	口縁部黒色磨研、口縁部内外面に沈線
236	N R 42	浅鉢	A b	-	1/12以下	口縁部	丸	なし	-	(内・外) 黄灰 2.5Y5/1	径1mm程度の石英、長石、雲母等を3%程含む	黒色磨研、口縁部内外面に沈線

新名神高速道路整備事業関係遺跡平成26・27年度発掘調査報告

報告番号	出土遺構	器種	分類	口径 (c m)	残存率	部位	口縁端部の形状	口縁端部の刻目	凸帯の刻目	色調	胎土	技法上の特徴等
237	N R 42	浅鉢	A b	-	1/12	口縁部	-	-	-	(内・外) 黒褐 2.5Y3/1	半精製、径1mm以下の鉱物をわずかに含む	屈曲部に沈線赤彩残る
238	N R 42	浅鉢	A か	底 4.1	12/12	底部	-	-	-	(外) 灰白 2.5Y7/1 (内) 黄灰 2.5Y4/1	径1～3mm程度の石英、長石を10%程含む	内外面ミガキ
239	N R 42	浅鉢	B	31.8	2/12	口縁部	面	なし	なし	(内・外) 黒褐 2.5Y3/1	径1～2mmの石英、長石を含む、雲母片含む	外面にスス付着、深鉢か
240	N R 42	浅鉢	C a	30.2	6/12	口縁～底部	丸、突起付	なし	なし	(外) 褐灰 10YR 4/1 (内) 黒 10YR 1.7/1	雲母片多量に含む、角閃石を少量含む	口縁部内外面に貼付凸帯、内面に沈線、山形の突起を口縁部に貼付、外面に焼成後穿孔あり
241	N R 42	浅鉢	C b	-	1/12以下	口縁部	外折	なし	-	(外) 黄灰 2.5Y4/1 (内) 黒褐 2.5Y3/1	径0.5～1mm程度の白色粒、石英、1mm程度の黒色粒(角閃石か)含む	波状口縁方形浅鉢か
242	N R 42	浅鉢	C か	-	-	口縁部	リボン状突起	なし	-	(内・外) 黒褐 2.5Y4/1	径1～3mm程度の石英・長石・雲母等を20%以上程含む	リボン状の突起を口縁部に貼付口縁部内面沈線
243	N R 42	浅鉢	C か	底 5.5	底 7/12 体 下半 4/12	体～底部	-	-	-	(外) 暗灰黄 2.5Y4/2 (内) 褐灰 10YR 4/1	径1～2mm程度の角閃石、長石を5%程含む	
244	N R 42	浅鉢	E	14.4	2/12	口頸～胴部	丸	なし	なし	(外・内) 黒褐 2.5Y3/1	やや粗、径1mm程度の角閃石、雲母を多量に含む	内面に指頭圧痕顕著
245	N R 42	浅鉢	F	(14.9)	2/12	口頸～胴部	丸	なし	なし	(外・内) 黒褐 2.5Y3/1	やや粗、径1mm程度の角閃石、雲母を多量に含む	
246	N R 42	浅鉢	G	9.2	1.5/12	口頸～胴部	面	なし	-	(外) 灰黄 2.5Y7/2 (内) 黒褐 2.5Y3/1	径1～5mmの石英・長石、くさり礫を5%程含む	
247	N R 42	浅鉢	G	8.9	4/12	口頸～胴部	丸、突起付	なし	-	(外) にぶい黄橙 10YR 6/3 (内) にぶい黄橙 10YR 7/3	径1～3mmの長石、くさり礫を5%程含む	口縁部にリボン状の突起貼付
248	S D 38	深鉢	I	24.8	1.5/12	口頸部	丸	なし	なし	(内・外) オリーブ褐 2.5Y4/4	やや密、径0.5mm程度の角閃石、雲母多量	外面に条痕
249	S D 38	深鉢	I A a	24.8	2/12	口頸～胴部	丸	D字	小D字	(外) オリーブ褐 2.5Y4/4 (内) 黄褐 2.5Y5/3	径1～8mm程度の角閃石を10%程含む	
250	S D 38	深鉢	I A b	34.2	1.5/12	口頸～胴部	丸	なし	なし	(外) 黄褐 2.5Y5/3 (内) オリーブ褐 2.5Y4/3	径1～3mm程度の角閃石を3%程含む	
251	S D 38	深鉢	I	-	1/12以下	口頸部	面	なし	O字	(内・外) 黄褐 2.5Y5/3	径1～5mm程度の石英、長石を10%程含む、雲母片僅かにみられる	
252	S D 38	深鉢	I	-	1/12以下	口頸部	面	O字	V字	(内・外) 浅黄 2.5Y7/3	径1～3mm程度の石英、長石を5%程含む	
253	S D 38	深鉢	I A	-	1/12	口頸～胴部	面	V字	なし	(外) 灰黄 2.5Y6/2(内) にぶい黄 2.5Y6/3	径1～5mmの石英、長石を7%程含む、雲母片やや含む	
254	S D 38	深鉢	A a	-	1/12	口頸部	-	-	-	(内・外) オリーブ褐 2.5Y4/3	径1mm程度の角閃石・黒雲母、1～3mm程度の長石を10%程含む	屈曲部に竹管刺突
255	S D 38	深鉢	A c	-	1/12	口頸～胴部	-	-	-	(外) にぶい黄褐 10YR 4/3 (内) 暗褐 10YR 3/3	径1～5mm程度の角閃石を10%程含む、雲母片多数	二条凸帯文深鉢
256	S D 38	深鉢	A b	-	1/12	口頸～胴部	-	-	-	(外) にぶい黄褐 10YR 4/3 (内) 暗褐 10YR 3/3	径1～5mm程度の角閃石を10%程含む、雲母片多数	
257	S D 38	深鉢	I E か	11.4	1/12	口頸部	丸	なし	不明	(外) 浅黄 2.5Y7/3 (内) 黒褐 2.5Y3/1	径1mm程度の石英、長石、シャモットをわずかに含む	半精製
258	S D 38	浅鉢	A b か	-	1/12以下	体部	-	-	-	(外) にぶい黄 2.5Y6/3 (内) 灰黄 2.5Y6/2	径1～3mm程度の石英、長石、雲母を10%程含む	屈曲部外面に沈線

報告番号	出土遺構	器種	分類	口径 (c m)	残存率	部位	口縁端部の形状	口縁端部の刻目	凸帯の刻目	色調	胎土	技法上の特徴等
259	S D 38	浅鉢	C b	-	1/12以下	口縁部	丸	なし	なし	(内・外) 黒褐 2.5Y3/1	黒雲母片を多量に含む、僅かに角閃石含む	突起状の貼付、内面沈線・凸帯
260	S D 38	浅鉢	D	(32.2)	3/12	口縁部	面	なし	なし	(内・外) 黒褐 2.5Y3/1	黒雲母片を多量に含む、僅かに角閃石含む	内外面貼付凸帯
261	S X 40	深鉢	I D	28.9	2/12	口頸～胴部	面	O字	D字	(外) におい黄 2.5Y6/3 (内) 灰黄 2.5Y6/2	径1～4mm程度の石英、長石、チャート15%程度含む、長石が多い	口頸部内面までケズりあげる
262	S X 40	深鉢	I	-	1/12以下	口頸部	丸	なし	C字	(外) におい黄橙 10YR 7/3 (内) 浅黄 2.5Y7/3	径1～5mm程度の石英、長石を15%程度含む、不透明の鉱物多数	
263	S X 40	深鉢	I A a	29.0	"口6/12底12/12体6/12"	口頸～胴部	丸	なし	小D字	(外) におい黄橙 10YR 7/4 (内) におい黄橙 10Y7/2	やや粗、径1～5mm程度の角閃石、石英・長石を多量に含む	
264	S X 40	深鉢	II A a	-	1/12	口頸部	面	V字	-	(内・外) 灰黄 10YR 4/2	粗、径1～3mm程度の雲母、角閃石、長石を20%程度含む	口頸部条痕、屈曲部にD字刻目
265	S X 40	深鉢	II A a	22.7	5/12	口頸～胴部	面	V字	-	(内・外) 灰黄 10YR 4/2	粗、径1～3mm程度の雲母、角閃石、長石を20%程度含む	口頸部条痕。屈曲部にD字刻目 口縁部いびつ
266	S X 40	深鉢	II	-	2/12	口頸部	面	V字	-	(外) 灰黄褐 10YR 4/2 (内) 黄褐 2.5Y5/3	径1～5mm程度の角閃石、長石を20%程度含む	口頸部条痕
267	S X 40	深鉢	I D	46.0	3/12	口頸～胴部	面	V字	V字	(外) 灰黄 2.5Y7/2 (内) 浅黄 2.5Y7/3	径1～5mm程度の石英・長石、チャート類を20%程度含む	
268	S X 40	深鉢か	-	-	1/12以下	口頸部?	面	V字	-	(外) 黒褐 2.5Y3/1 (内) 黒褐 2.5Y3/2	径1～2mm程度の角閃石を3%程度含む、雲母片多量	内面ケズリか
269	S X 40	深鉢	-	-	"底12/12体6/12"	底部	-	-	-	(外) 褐 7.5YR 4/6 (内) 褐灰 YR 4/1	径1～5mm程度の石英、長石を15%程度含む、少ないが角閃石含む	
270	S X 40	壺か	-	-	不明	胴部?	-	-	-	(内・外) におい黄橙 10YR 6/4	径1mm程度の角閃石、長石を5%程度含む	円形の浮文貼付
271	S X 40	浅鉢	B	(34.0)	2/12	口縁～体部	面	なし	-	(外) 黒褐 2.5Y3/2 (内) におい黄橙 10YR 6/3	径1mm程度の石英、長石を多量に含む	
272	S X 40	浅鉢	E	12.9	5.5/12	口頸～胴部	丸	なし	-	(外) 黒褐 2.5Y3/2 (内) 黒褐 2.5Y3/1	やや粗、角閃石が多い	内面に指頭圧痕顕著
273	S X 40	浅鉢	H	-	1/12	口縁部	丸、突起付	なし	なし	(外) 褐 10YR 4/4 (内) におい黄橙 10YR 5/4	径1～5mm程度の角閃石、長石を15%程度含む	口縁部に突起貼付
274	S X 40	浅鉢	H	-	1.5/12	口縁部	面、突起付	なし	なし	(外) 褐 10YR 4/4 (内) におい黄橙 10YR 5/4	径1～5mm程度の角閃石、長石を15%程度含む	口縁部にリボン状の突起貼付
275	S X 43	深鉢	II A a	-	1/12以下	口頸～胴部	-	-	-	(外) におい黄 2.5Y6/3 (内) 黄灰 2.5Y4/1	径1mm程度の石英、長石を2%程度含む	
276	S X 43	深鉢	I	-	1/12以下	口頸部	面	D字	D字	(外) 暗灰黄 2.5Y5/2 (内) 黄灰 2.5Y4/1	径1～3mm程度の石英、長石を10%程度含む、長石が多い	
277	S X 43	深鉢	I	-	1/12	口頸部	面	D字	D字	(外) 灰黄 2.5Y6/2 (内) 灰黄 2.5Y7/2	径1～3mm程度の石英、長石を5%程度含む雲母片含む	
278	S X 43	深鉢	I	-	1/12以下	口頸部	面	逆D字	なし	(外) 灰黄褐 10YR 6/2 (内) 褐灰 10YR 4/1	径1mm程度の石英、長石、くさり礫を5%程度含む、雲母片含む	
279	S X 43	壺か	-	-	1/12以下	口縁部	丸	-	-	(内・外) 褐灰 10YR 5/1	径1～3mm程度の石英、長石を15%程度含む、僅かに雲母片含む	
280	S X 43	深鉢か	-	-	1/12以下	胴部	-	-	-	(内・外) におい黄 2.5Y6/3	径1～5mm程度の石英、長石を15%程度含む、雲母片含む	二枚貝押圧による施文か
281	S X 43	浅鉢か	-	-	不明	体部	-	-	-	(内・外) 黒 10YR 1.7/1	半精製、径1mm以下の黒色粒をわずかにふくむ	黒色磨研

新名神高速道路整備事業関係遺跡平成 26・27 年度発掘調査報告

報告 番号	出土 遺構	器種	分類	口径 (c m)	残存 率	部位	口縁端部 の形状	口縁端部 の刻目	凸帯の 刻目	色調	胎土	技法上の特徴等
282	S X 43	浅鉢	D	(37.0)	1/12	口縁部	面	なし	なし	(外) 黒褐 2.5Y3/2 (内) 暗灰黄 2.5Y4/2	雲母片多量に含む、 わずかに角閃石を含 む	半精製
283	包含 層	深鉢	I A a	32.5	7/12	口頸～ 胴部	丸	なし	なし	(外) 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 (内) 灰黄 2.5Y7/2	0.5～2mm の白色粒、 1mm 程度の雲母も多 く含む	
284	包含 層	深鉢	II A a	18.7	3/12	口頸～ 胴部	丸	なし	-	(内・外) 灰白 2.5Y8/2	径 1～5mm の石英、 長石を 15% 程含む	
285	包含 層	深鉢	A a	-	1/12 以下	口頸～ 胴部	-	-	-		径 1～3mm 程度の石 英、長石を 10% 程含 む	
286	包含 層	深鉢	A a	-	1/12 以下	口頸～ 胴部	-	-	-	(外) 灰黄褐 10YR 6/2 (内) 灰白 2.5Y8/2	径 1～3mm 程度の石 英、長石を 10% 程含 む	
287	包含 層	浅鉢	C b	-	1/12	口縁部	丸、突起 付	なし	なし	(内・外) 黒褐 2.5Y3/1	やや密、角閃石-雲 母を多く含む	
288	N R 42	土偶	-	-	-	左腕か	-	-	-	(内・外) にぶい黄 橙 10YR 7/2	径 1～3mm 程度の石 英、長石を 10% 程含 む	

圖 版

図版第 1 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第 6 次



(1) I 地区全景(西から)



(2) I 地区全景(北東から)

図版第2 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第6次



(1) I 地区全景(南から)



(2) I 地区島畑54全景(北東から)



(3) I 地区島畑54土層断面
(北西から)

図版第3 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第6次



(1) I 地区島畑55全景(北西から)



(2) I 地区島畑55土層断面(東から)



(3) I 地区島畑56全景(北西から)

図版第4 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第6次



(1) I 地区島畑56土層断面(西から)



(2) I 地区島畑57全景(南西から)



(3) I 地区島畑57土層断面(西から)

図版第5 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第6次



(1) I 地区島畑58全景(南西から)



(2) I 地区島畑58土層断面(西から)



(3) I 地区溝状遺構 S D06全景
(北西から)

図版第6 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第6次



(1) I 地区溝状遺構 S D07全景
(南西から)



(2) I 地区溝状遺構 S D08全景
(南西から)



(3) I 地区溝状遺構 S D09全景
(北西から)

図版第7 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第6次



(1) J 地区(南半部) 島畑59全景(西から)



(2) J 地区(南半部) 島畑59全景(北から)

図版第 8 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第 6 次



(1) J 地区(北半部) 島畑59全景(南西から)



(2) J 地区(北半部) 島畑59全景(南から)

図版第9 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第6次



(1) J地区(南半部) 島畑59全景
(南東から)



(2) J地区(北半部) 島畑59全景
(北から)



(3) J地区(北半部) 島畑59全景
(北東から)



(1) J 地区南壁土層断面(北から)



(2) J 地区島畑59(西半部)土層断面
(北から)



(3) J 地区溝 S D01g-g' 土層断面
(北から)

下水主遺跡第 6 次



(1) J 地区溝 S D01f-f' 土層断面
(北から)



(2) J 地区溝 S D02 土層断面
(南から)



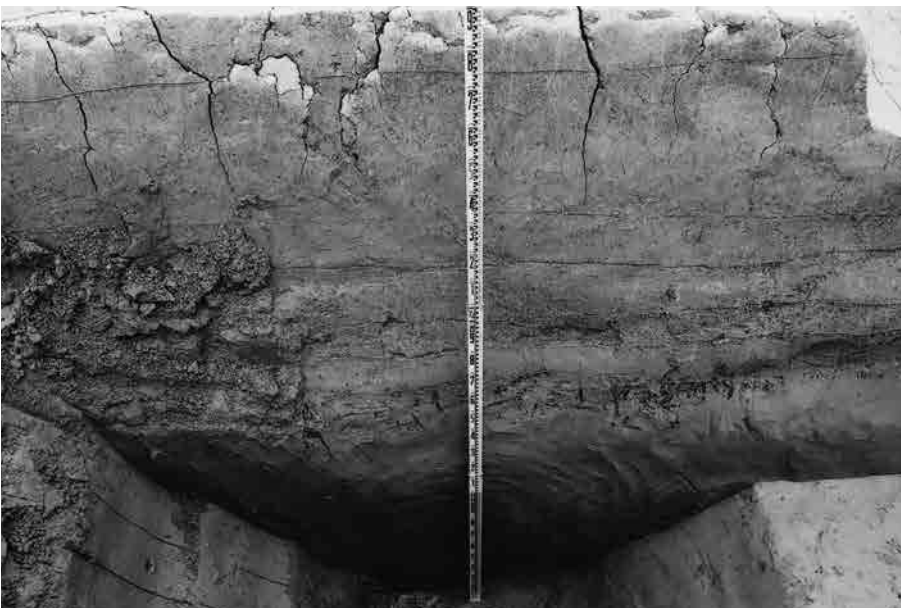
(3) J 地区溝 S D02b-b' 土層断面
(北から)



(1) J 地区島畑断ち割り状況
(南東から)



(2) J 地区島畑59断ち割り土層断面
(南から)



(3) J 地区下層断ち割り状況
(南から)

図版第 13 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第 6 次



(1) J 地区溝 S D04 全景 (南から)



(2) J 地区溝 S D04 全景 (上が西)



(1) J 地区溝 S D04 全景 (北西から)



(2) J 地区溝 S D04 全景 (南東から)

図版第 15 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第 6 次



(1) J 地区溝 S D04 全景 (北西から)



(2) J 地区溝 S D04 建築部材出土状況 (北東から)



(1) J 地区溝 S D04 検出状況
(南から)



(2) J 地区溝 S D04a-a' 土層断面
(南東から)



(3) J 地区溝 S D04b-b' 土層断面
(南から)

下水主遺跡第 6 次

(1) J 地区溝 S D04 土器群 1 出土
状況(北東から)



(2) J 地区溝 S D04 土器群 1 出土
状況(北西から)



(3) J 地区溝 S D04 土器群 2 出土
状況(南から)





(1) J 地区溝 S D04不明有機質製品
出土状況(北から)



(2) J 地区溝 S D04不明有機質製品
出土状況(北東から)



(3) J 地区溝 S D04不明土製品出土
状況(北東から)

下水主遺跡第 6 次



(1) J 地区溝 S D04 建築部材出土
状況(北西から)



(2) J 地区溝 S D04 建築部材出土
状況(南西から)



(3) J 地区溝 S D04 杭出土状況
(北西から)



(1) J 地区溝 S D04完掘状況
(南東から)



(2) J 地区溝 S D04杭検出状況
(北西から)



(3) J 地区溝 S D04作業風景
(北西から)

図版第 21 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第 6 次



(1) K 1 区全景(北から)



(2) K 1 区島畑62・63全景(北から)



(1) K 1 区島畑63全景(東から)



(2) K 1 区島畑63全景(東から)

図版第 23 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第 6 次



(1) K 1 区島畑64・65全景(南から)



(2) K 1 区島畑66、溝状遺構 S D05全景(南から)



(1) K 1 区島畑61土層断面(西から)



(2) K 1 区島畑64全景(東から)



(3) K 1 区島畑65、溝状遺構 S D03
全景(南東から)

下水主遺跡第 6 次



(1) K 1 区島畑65全景(東から)



(2) K 1 区溝状遺構 S D03全景
(東から)



(3) K 1 区溝状遺構 S D03土層断面
(西から)

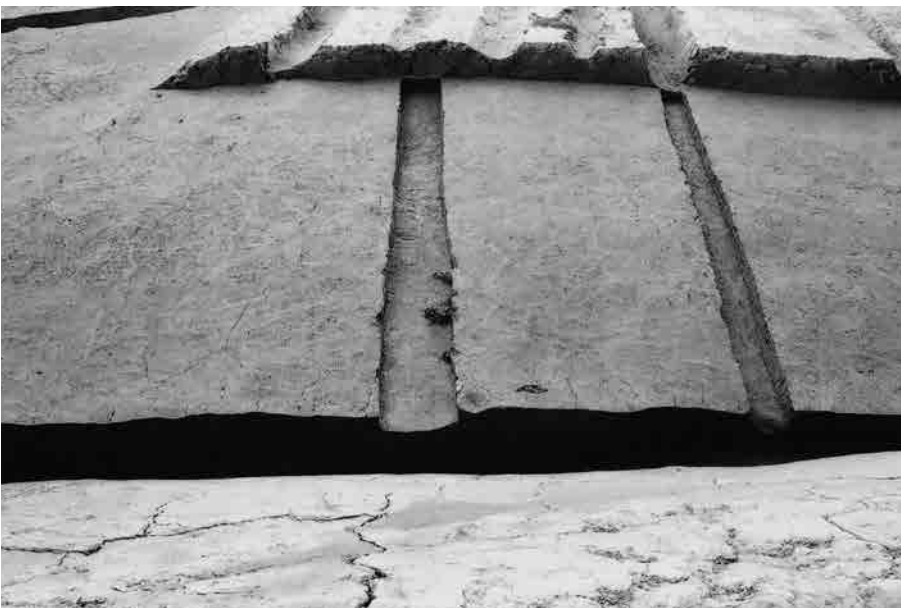
下水主遺跡第 6 次



(1) K 1 区土坑 S K 15 完掘状況
(東から)



(2) K 1 区溝 S D 16 完掘状況
(南東から)



(3) K 1 区下層遺構確認状況
(東から)



(1) K 2 区全景 (北から)



(2) K 2 区全景 (南から)



(1) K 2 区島畑65・68、溝状遺構 S D 20 全景(南西から)



(2) K 2 区島畑67、溝状遺構 S D 22 全景(北西から)



(1) K 2 区島畑65全景(西から)



(2) K 2 区島畑68全景(西から)



(1) K 2 区島畑67全景(西から)



(2) K 2 区島畑63・67全景(南から)

下水主遺跡第 6 次



(1) K 2 区島畑63全景(西から)



(2) K 2 区島畑67、溝状遺構 S D 46
全景(南西から)



(3) K 2 区島畑68、溝状遺構 S D 20
全景(北西から)



(1) K 2 区島畑65全景(南西から)



(2) K 2 区島畑66、溝状遺構 S D18
全景(南西から)

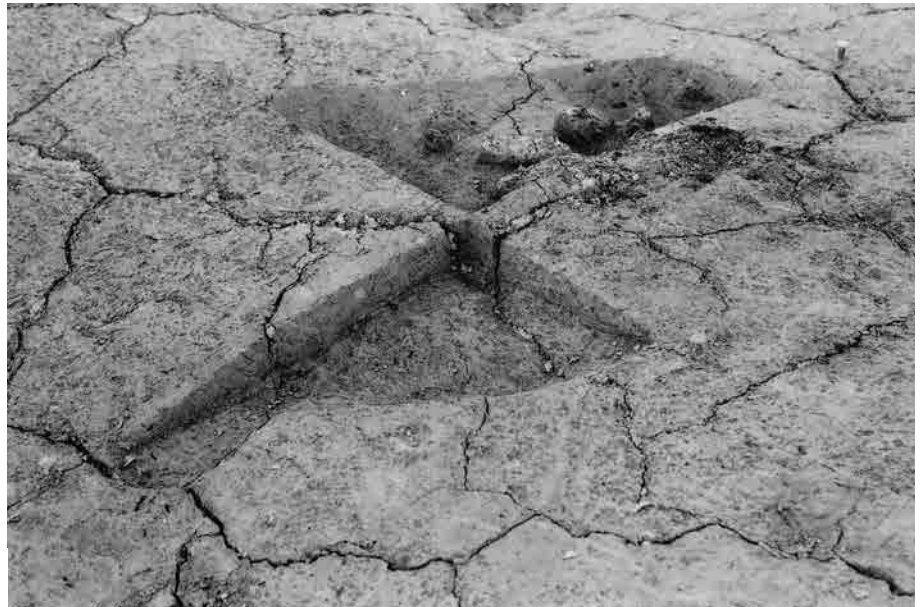


(3) K 2 区島畑66全景(南西から)

下水主遺跡第 6 次



(1) K 2 区焼土坑 S X30~32検出
状況(西から)



(2) K 2 区焼土坑 S X30土層断面
(南西から)



(3) K 2 区焼土坑 S X30断ち割り
状況(西から)



(1) K 2 区溝 S D35 全景 (北西から)



(2) K 2 区溝 S D35 (拡張区) 全景 (北西から)

下水主遺跡第 6 次



(1) K 2 区溝 S D35a - a' 土層断面
(南東から)



(2) K 2 区溝 S D35e - e' 土層断面
(北西から)



(3) K 2 区溝 S D35d - d' 土層断面
(北西から)



(1) L 地区全景(北東から)



(2) L 地区全景(北から)



(1) L地区島畑70全景(北から)



(2) L地区島畑71全景(南から)



(1) L 地区上層遺構全景(南東から)



(2) L 地区南壁土層断面(北西から)



(3) L 地区島畑72土層断面(北から)

下水主遺跡第 6 次



(1) L 地区島畑70・72全景
(北西から)



(2) L 地区溝状遺構 S D 10 全景
(西から)



(3) L 地区溝状遺構 S D 10 磨製石斧
出土状況(北から)



(1) L 地区溝状遺構 S D04土層断面
(北から)



(2) L 地区溝状遺構 S D10土層断面
(北西から)



(3) L 地区北西部確認調査区全景
(南西から)

下水主遺跡第 6 次



(1) L 地区土坑 S K09 遠景 (南から)



(2) L 地区溝 S D22 全景 (南から)



(3) L 地区作業風景 (西から)



(1) L 地区落ち込み S X 40 完掘後全景 (東から)



(2) L 地区氾濫流路 N R 42 全景 (西から)

図版第 43 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第 6 次



(1) L 地区氾濫流路NR42完掘後全景(西から)



(2) L 地区氾濫流路NR42完掘後全景(東から)



(1) L 地区下層断ち割り作業風景
(北西から)



(2) L 地区中央断ち割り土層断面
(東から)



(3) L 地区島畑72下層縄文土器出土
状況(東から)

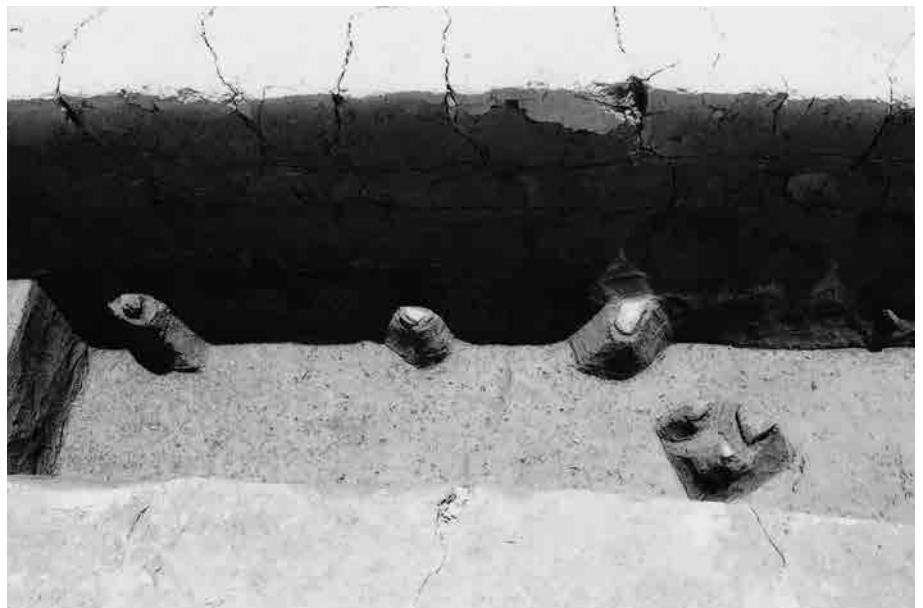
下水主遺跡第 6 次



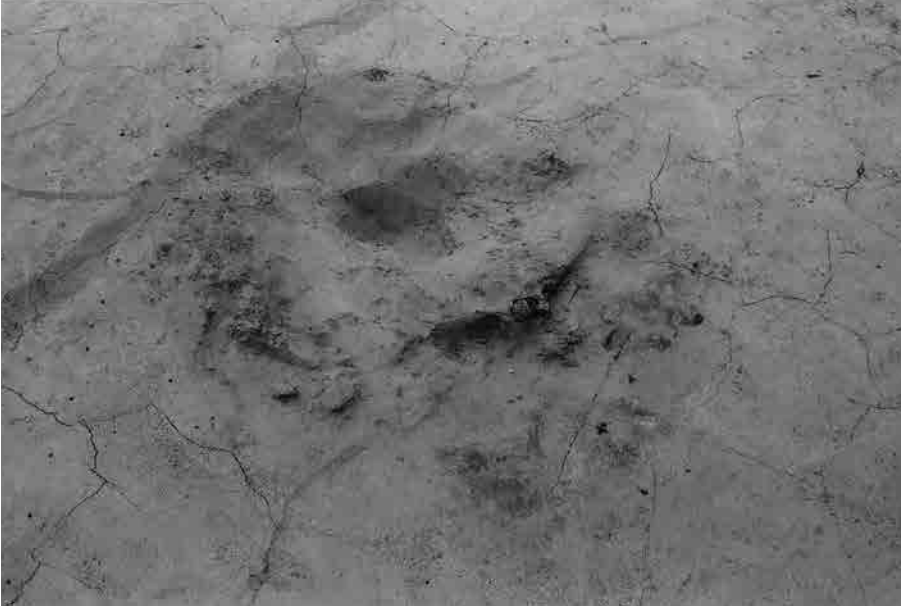
(1) L 地区断ち割り a-a' 縄文土器
出土状況(東から)



(2) L 地区断ち割り b-b' 縄文土器
出土状況(北西から)



(3) L 地区断ち割り b-b' 縄文土器
出土状況(北から)



(1) L 地区焼土坑 S X39 全景
(東から)



(2) L 地区落ち込み S X40 全景
(東から)



(3) L 地区落ち込み S X40 全景
(西から)

下水主遺跡第 6 次



(1) L 地区落ち込み S X 40完掘後
全景(北西から)



(2) L 地区落ち込み S X 40遺物出土
状況(南西から)



(3) L 地区落ち込み S X 40遺物出土
状況(南から)

下水主遺跡第 6 次



(1) L 地区落ち込み S X 40 遺物出土
状況(東から)



(2) L 地区落ち込み S X 40 遺物出土
状況(南西から)



(3) L 地区落ち込み S X 40 遺物出土
状況(南東から)

下水主遺跡第 6 次



(1) L 地区自然流路 N R 38、落ち込み S X 40 全景 (北西から)



(2) L 地区自然流路 N R 38 全景 (西から)



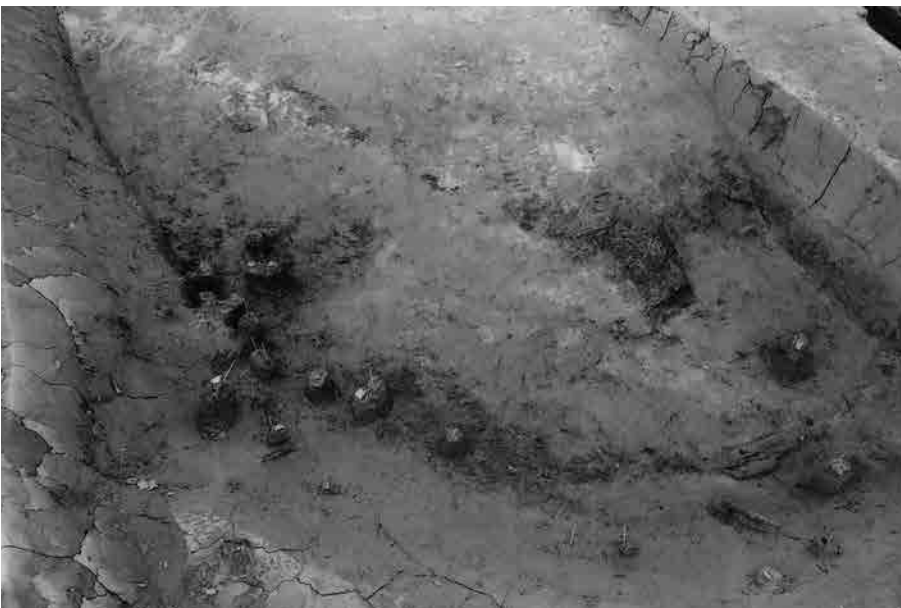
(3) L 地区自然流路 N R 38a - a' 土層断面 (南西から)



(1) L 地区自然流路 N R 38 中央土層
断面(西から)



(2) L 地区自然流路 N R 38 土層断面
(西から)



(3) L 地区自然流路 N R 38 縄文土器
出土状況(南から)

下水主遺跡第 6 次



(1) L 地区氾濫流路NR42全景
(東から)



(2) L 地区氾濫流路NR42全景
(北から)



(3) L 地区氾濫流路NR42完掘後
全景(西から)



(1) L 地区 N R 42 完掘後全景
(北西から)



(2) L 地区 N R 42 東壁土層断面
(西から)



(3) L 地区 N R 42 東壁土層断面
(西から)

下水主遺跡第 6 次



(1) L 地区NR42縄文土器出土状況
(北から)



(2) L 地区NR42縄文土器出土状況
(南から)



(3) L 地区NR42縄文土器出土状況
(南から)



(1) L 地区 N R 42 縄文土器出土状況
(南から)



(2) L 地区 N R 42 縄文土器出土状況
(北から)



(3) L 地区 N R 42 縄文土器出土状況
(南から)

下水主遺跡第 6 次



(1) L 地区NR42縄文土器出土状況
(南から)



(2) L 地区NR42櫛状木製品出土
状況(北から)



(3) L 地区NR42縄文土器・櫛状
木製品出土状況(南から)



(1) L 地区NR42縄文土器・櫛状木製品出土状況(北から)



(2) L 地区石鏃出土状況(南から)



(3) L 地区石鏃出土状況(北から)



(1) N地区全景(北から)



(2) N地区島畑74~76全景(北西から)



(1) N 地区全景 (北から)



(2) N 地区全景 (北西から)

図版第 59 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第 6 次



(1) N 地区島畑73全景(北西から)



(2) N 地区島畑74、溝状遺構 S D02全景(北西から)



(1) N地区島畑75全景(北から)



(2) N地区島畑76全景(北西から)

下水主遺跡第 6 次



(1) N地区北壁土層断面(南東から)



(2) N地区島畑74~76、溝状遺構 S D02・04全景(東から)



(3) N地区溝状遺構 S D04遺物出土状況(東から)



(1) N 地区島畑73～75全景
(南西から)



(2) N 地区島畑73全景(南西から)



(3) N 地区溝状遺構 S D 32全景
(北西から)

下水主遺跡第 6 次



(1) N 地区島畑74・75全景(南から)



(2) N 地区島畑74北半部全景
(南から)



(3) N 地区作業風景(北から)

下水主遺跡第 6 次



(1) N 地区島畑75素掘り溝土層断面
(南から)



(2) N 地区島畑75素掘り溝土層断面
(南から)



(3) N 地区島畑75素掘り溝土層断面
(南から)



(1) N地区土坑 S K35全景(北から)



(2) N地区土坑 S K35遺物出土状況(北から)

下水主遺跡第 6 次



(1) N地区柱穴 S P97土層断面
(北東から)

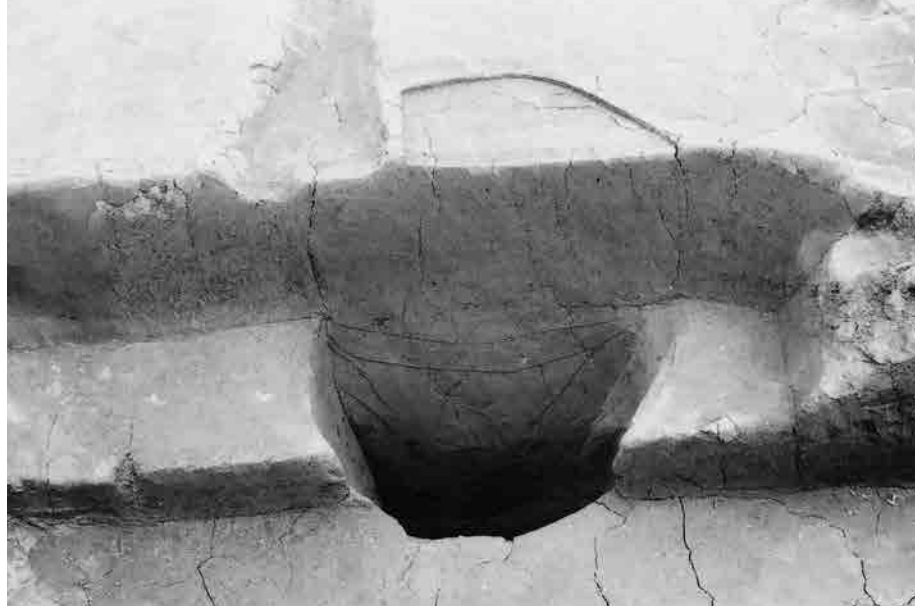


(2) N地区柱穴 S P98土層断面
(北から)

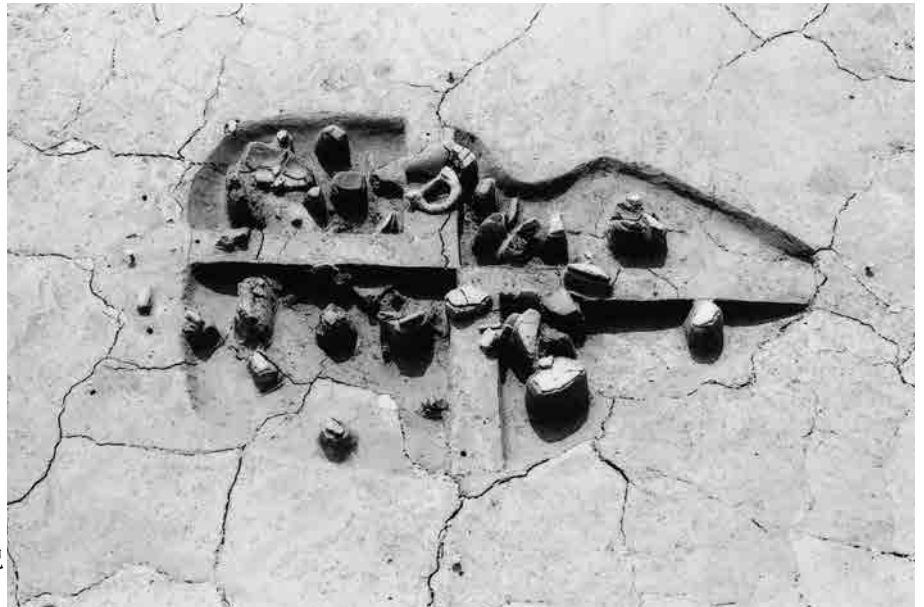


(3) N地区溝 S D38全景(北西から)

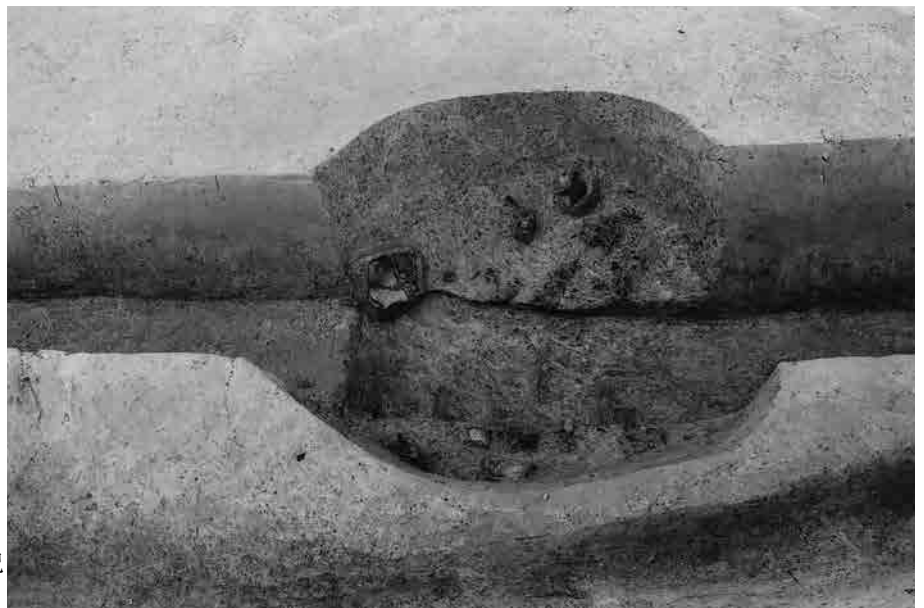
下水主遺跡第 6 次



(1) N 地区土坑 S K 35 土層断面
(北から)



(2) N 地区土坑 S K 36 遺物出土状況
(北西から)

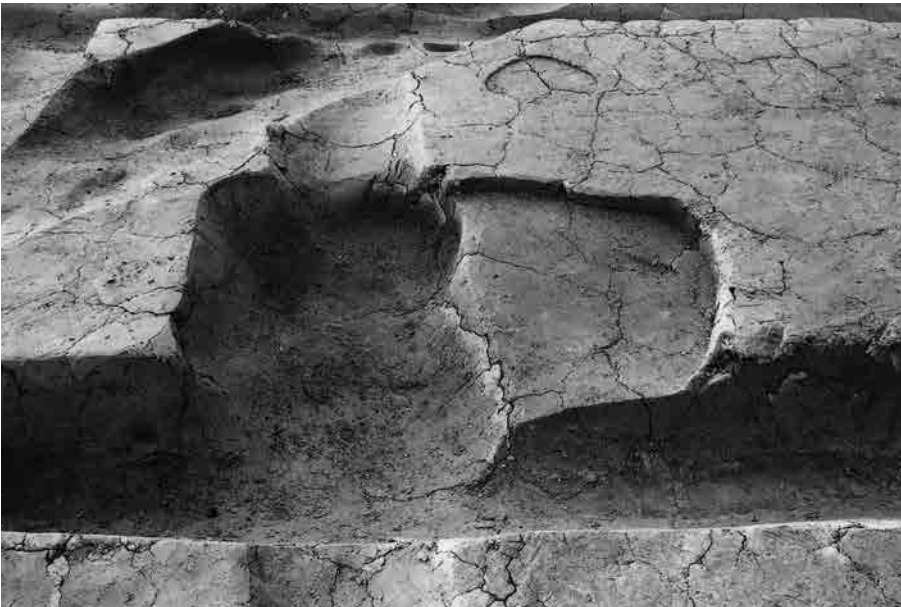


(3) N 地区土坑 S K 95 遺物出土状況
(西から)

下水主遺跡第 6 次



(1) N 地区土坑 S K 90 遺物出土状況
(東から)



(2) N 地区土坑 S K 90 完掘状況
(東から)



(3) N 地区土坑 S K 105 完掘状況
(南から)

下水主遺跡第 6 次



(1) N 地区土坑 S K 83 遺物出土状況
(南から)



(2) N 地区土坑 S K 83 完掘状況
(東から)



(3) N 地区北端部下層断ち割り状況
(南から)



(1) D 3 区全景(北から)



(2) D 3 区全景(南から)



(1) D 3 区島畑84全景(西から)



(2) D 3 区島畑85全景(西から)



(1) D 3 区島畑86~88全景(北から)



(2) D 3 区島畑86全景(西から)



(1) D 3 区島畑87全景(西から)



(2) D 3 区島畑88全景(北から)



(1) D 3 区北壁土層断面(南から)



(2) D 3 区島畑83全景(北から)



(3) D 3 区島畑83全景(南から)

下水主遺跡第 6 次



(1) D 3 区島畑85土層断面(西から)



(2) D 3 区島畑86土層断面(西から)



(3) D 3 区島畑87土層断面(西から)

下水主遺跡第 6 次



(1) D 3 区島畑88・溝状遺構 S D02
土層断面(西から)



(2) D 3 区溝状遺構 S D04土層断面
(西から)



(3) D 3 区溝状遺構 S D08土層断面
(西から)

下水主遺跡第 6 次



(1) D 3 区溝 S D42 全景 (東から)



(2) D 3 区溝 S D42 土層断面
(西から)



(3) D 3 区溝 S D42 遺物出土状況
(南東から)



(1) D 3 区溝 S D 40 全景 (北西から)



(2) D 3 区溝 S D 40 遺物出土状況 (南東から)

下水主遺跡第 6 次



(1) D 3 区溝 S D40土層断面
(南から)



(2) D 3 区溝 S D40土層断面
(南東から)



(3) D 3 区溝 S D40北壁遺物出土状
況(南から)

下水主遺跡第 6 次



(1) D 3 区溝 S D40 遺物出土状況
(東から)



(2) D 3 区溝 S D40 遺物出土状況
(西から)



(3) D 3 区溝 S D40 (東半部) 全景
(東から)

下水主遺跡第 6 次



(1) D 3 区溝 S D 40(東半部) 遺物
出土状況(北から)



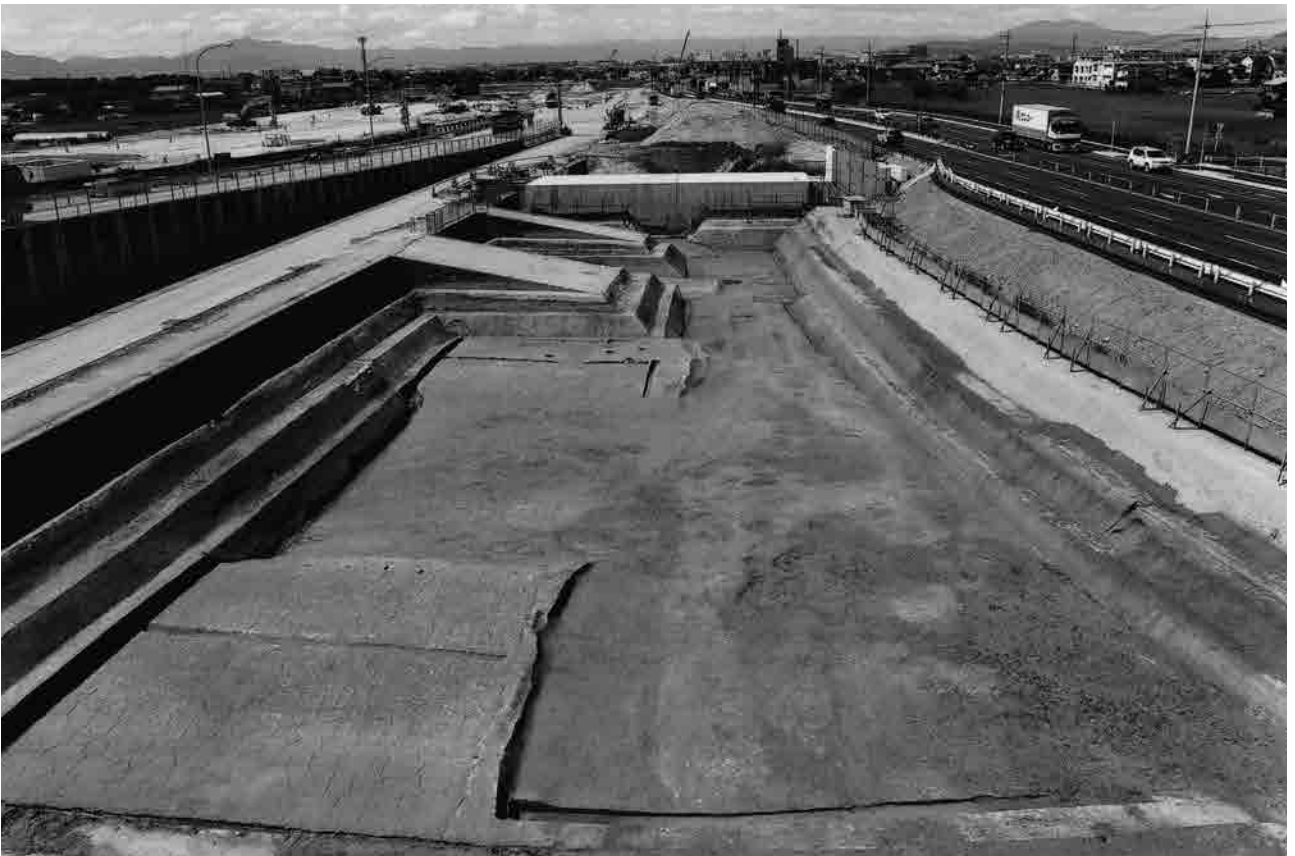
(2) D 3 区下層断ち割り状況
(南東から)



(3) D 3 区下層断ち割り状況
(南から)



(1) H地区北半部全景(南東から)



(2) H地区北半部全景(南から)



(1) H地区島畑96全景(東から)



(2) H地区島畑97全景(東から)



(1) H地区島畑98全景(東から)



(2) H地区島畑99全景(東から)



(1) H地区南半部全景(西から)



(2) H地区南半部全景(上が東)



(1) H地区南半部全景(北から)



(2) H地区島畑100全景(東から)



(1) H地区島畑101全景(東から)



(2) H地区島畑25全景(南から)



(1) H 地区北半部全景(南東から)



(2) H 地区北半部全景(北東から)



(3) H 地区島畑96土層断面(東から)

下水主遺跡第 9 次



(1) H地区島畑97土層断面(東から)



(2) H地区島畑98土層断面(東から)



(3) H地区島畑98上面検出ピット群
全景(南東から)

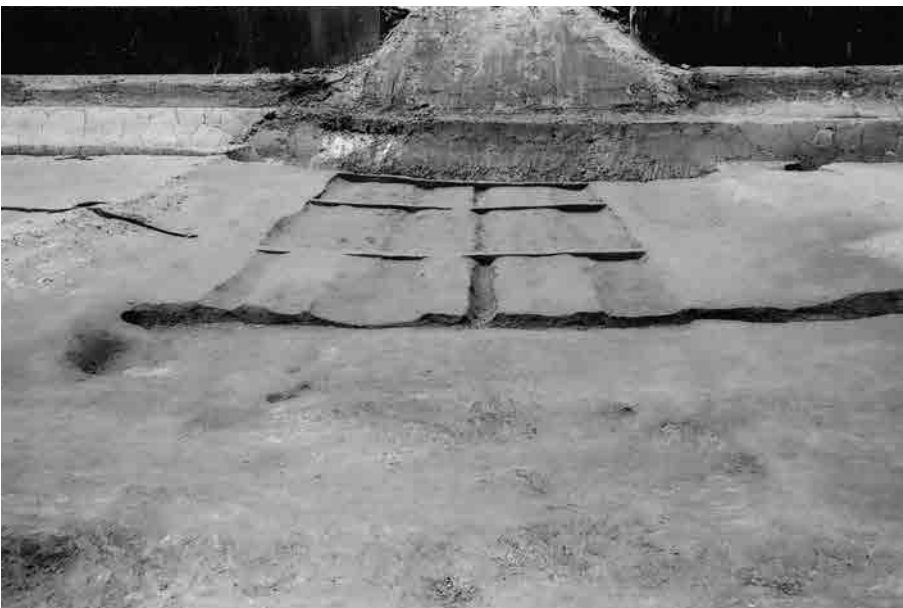
下水主遺跡第 9 次



(1) H地区島畑99土層断面(東から)



(2) H地区溝状遺構 S D02土層断面
(東から)



(3) H地区溝状遺構 S D02上面
素掘り溝群全景(東から)



(1) H地区溝状遺構 S D04土層断面
(東から)



(2) H地区北壁東半部土層断面
(南から)



(3) H地区南壁土層断面(北から)



(1) H地区南半部全景(南東から)



(2) H地区島畑101全景(北西から)



(3) H地区溝状遺構 S D50上面
素掘り溝群全景(東から)



(1) H 地区溝 S D25 全景 (西から)



(2) H 地区溝 S D25 全景 (北から)



(1) H地区溝 S D25木材出土状況(北西から)



(2) H地区溝 S D25木材出土状況(北西から)



(1) H地区溝 S D25完掘後全景(北西から)



(2) H地区溝 S D25完掘後全景(北西から)

下水主遺跡第 9 次



(1) H地区溝 S D25木材出土状況
(北西から)



(2) H地区溝 S D25木材出土状況
(南東から)



(3) H地区溝 S D25完掘状況
(南から)

下水主遺跡第 9 次



(1) H 地区溝 S D25a - a' 土層断面
(南東から)



(2) H 地区溝 S D25b - b' 土層断面
(南東から)



(3) H 地区 S X43a - a' 土層断面
(南東から)



(1) H地区溝 S D25付属土坑状遺構 S X44内小土坑土層断面(北から)



(2) H地区溝 S D25付属土坑状遺構 S X43全景(東から)



(3) H地区溝 S D25付属土坑状遺構 S X43遺物出土状況(北から)

下水主遺跡第 9 次



(1) H地区溝 S D25遺物出土状況
(北から)



(2) H地区溝 S D25遺物出土状況
(北から)



(3) H地区溝 S D25遺物出土状況
(北から)



(1) H地区溝 S D25方形組み合わせ木製品出土状況(北東から)



(2) H地区溝 S D25方形組み合わせ木製品出土状況(北西から)

下水主遺跡第 9 次



(1) H地区溝 S D25方形組み合わせ
木製品出土状況(東から)



(2) H地区溝 S D25方形組み合わせ
木製品出土状況(北西から)



(3) H地区溝 S D25方形組み合わせ
木製品出土状況(北東から)

下水主遺跡第 9 次



(1) H地区溝 S D25 方形組み合わせ
木製品部分拡大(南東から)



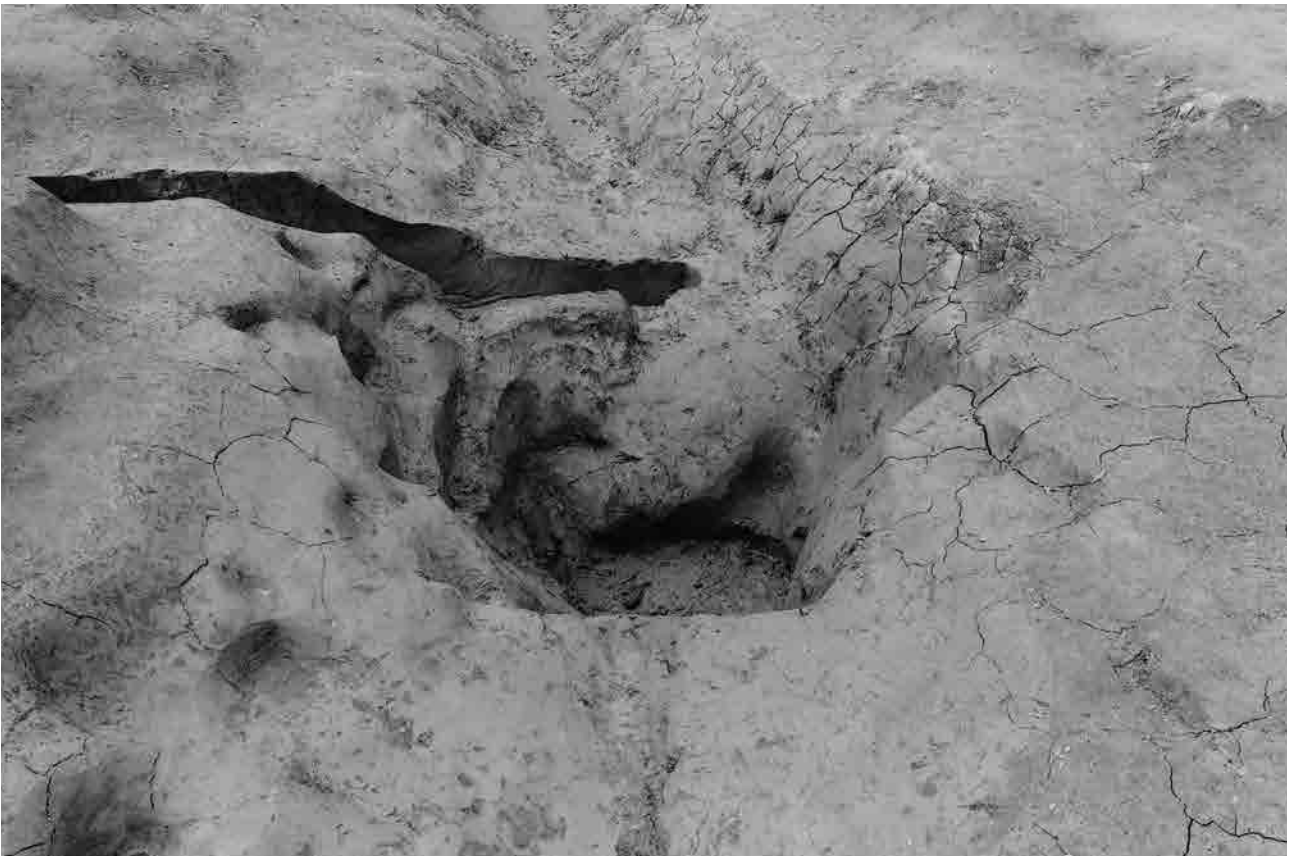
(2) H地区溝 S D25 方形組み合わせ
木製品部分拡大(南東から)



(3) H地区溝 S D25 方形組み合わせ
木製品部分拡大(南東から)



(1) H地区溝 S D25溝底土坑 S X56検出状況(南東から)



(2) H地区溝 S D25溝底土坑 S X56全景(西から)



(1) E 9 区島畑102全景(北東から)



(2) E 9 区下層遺構面全景(北から)

下水主遺跡第 9 次



(1) E 9 区島畑102全景(北から)



(2) E 9 区溝 S D07検出状況
(北東から)



(3) E 9 区溝 S D07土層断面
(南から)

下水主遺跡第 9 次



(1) E 9 区南壁土層断面(北東から)



(2) E 9 区完掘状況(北東から)



(3) E 9 区作業風景(南から)

下水主遺跡第9次



(1) E10区全景(北から)



(2) E10区島畑103全景(北から)



(3) E10区西壁土層断面(南東から)



(1) B 4 区上層遺構全景(南西から)



(2) B 4 区下層遺構全景(南西から)



(1) B 4 区島畑30全景(南から)



(2) B 4 区島畑89全景(南から)



(1) B 4 区北西壁土層断面(南から)



(2) B 4 区北西壁土層断面(西から)

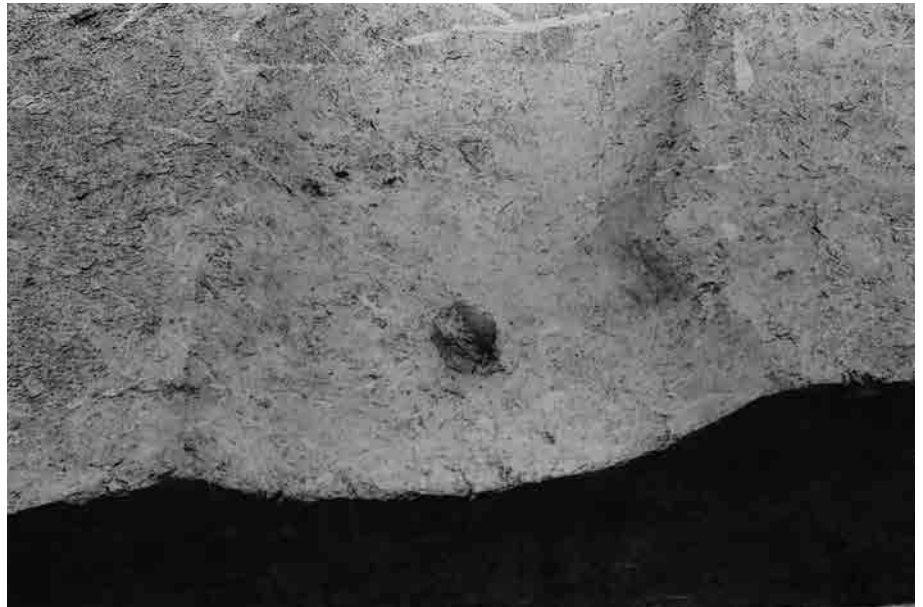


(3) B 4 区島畑30全景(北から)

水主神社東遺跡第 6 次



(1) B 4 区溝 S D04 全景 (南から)



(2) B 4 区溝 S D04 遺物出土状況
(南から)

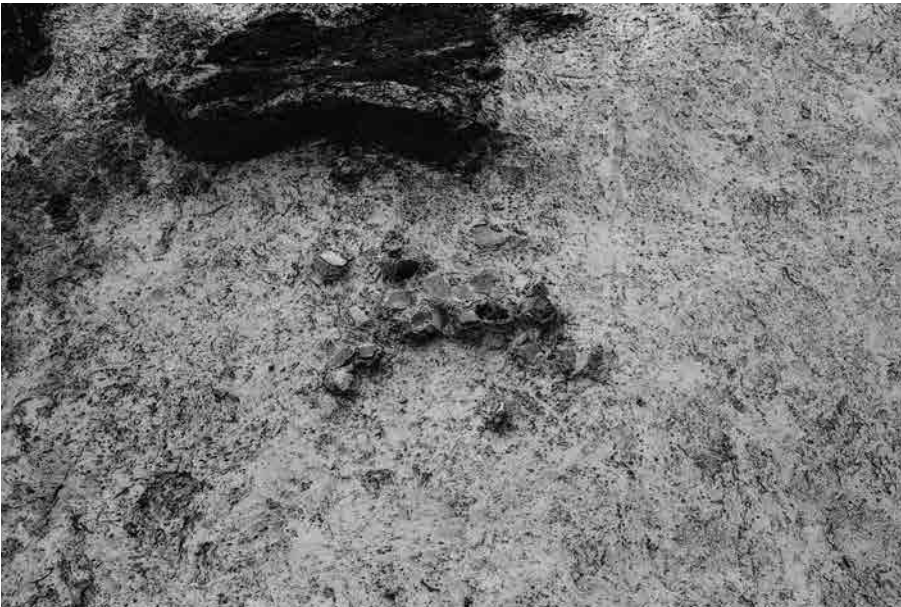


(3) B 4 区下層全景 (北東から)

水主神社東遺跡第 6 次



(1) B 4 区下層遺物出土状況
(南西から)



(2) B 4 区下層遺物出土状況
(北西から)



(3) B 4 区下層遺物出土状況
(北西から)



(1) D 地区上層遺構全景(東から)



(2) D 地区上層遺構全景(北から)



(1) D地区島畑111全景(北から)



(2) D地区島畑111全景(南から)



(1) D 地区溝状遺構 S D 02 全景(北から)



(2) D 地区中層遺構面全景(北から)

水主神社東遺跡第 7 次



(1) D 地区南半東壁土層断面
(南西から)

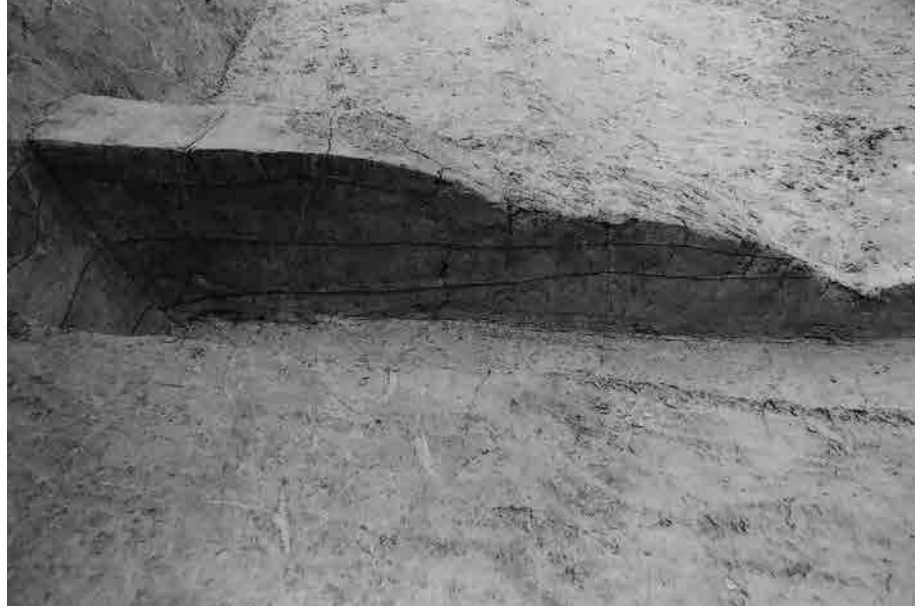


(2) D 地区島畑111土層断面
(北から)

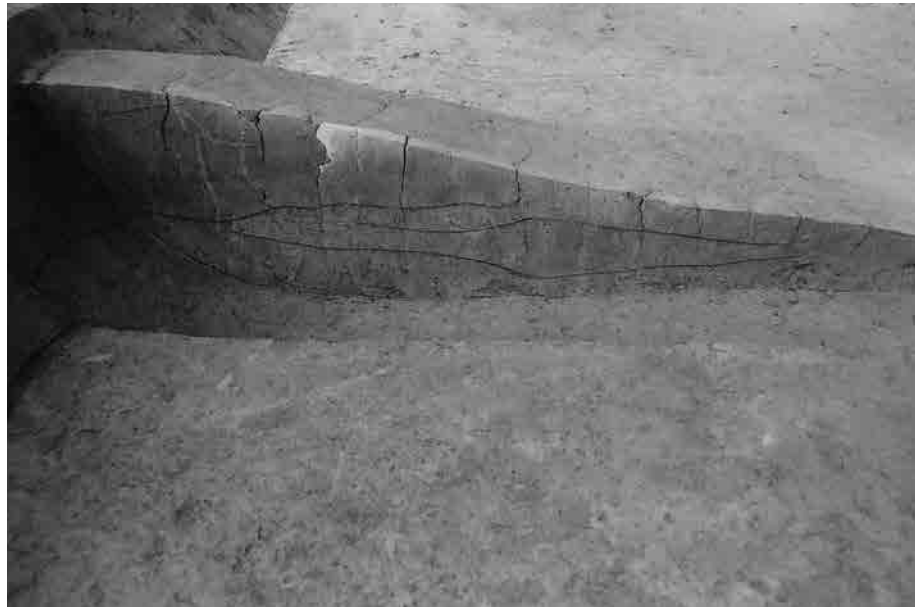


(3) D 地区溝状遺構 S D02土層断面
(北から)

水主神社東遺跡第 7 次



(1) D 地区島畑27裾土層断面①
(南から)



(2) D 地区島畑27裾土層断面②
(南から)



(3) D 地区島畑27裾土層断面③
(南から)



(1) D 地区溝 S D 23 全景 (北西から)



(2) D 地区土坑状遺構 S K 25・26・28 全景 (北東から)



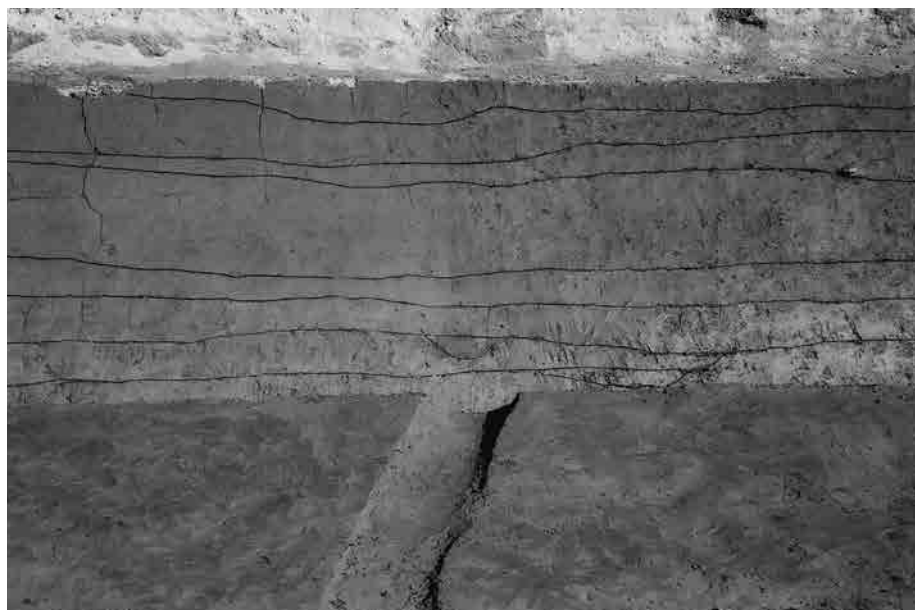
(3) D 地区不明遺構 S X 31 土層断面 (東から)



(1) D 地区下層遺構全景(北から)



(2) D 地区下層遺構全景(南東から)



(3) D 地区北壁土層断面(南から)



(1) D 地区溝 S D30 全景 (北から)



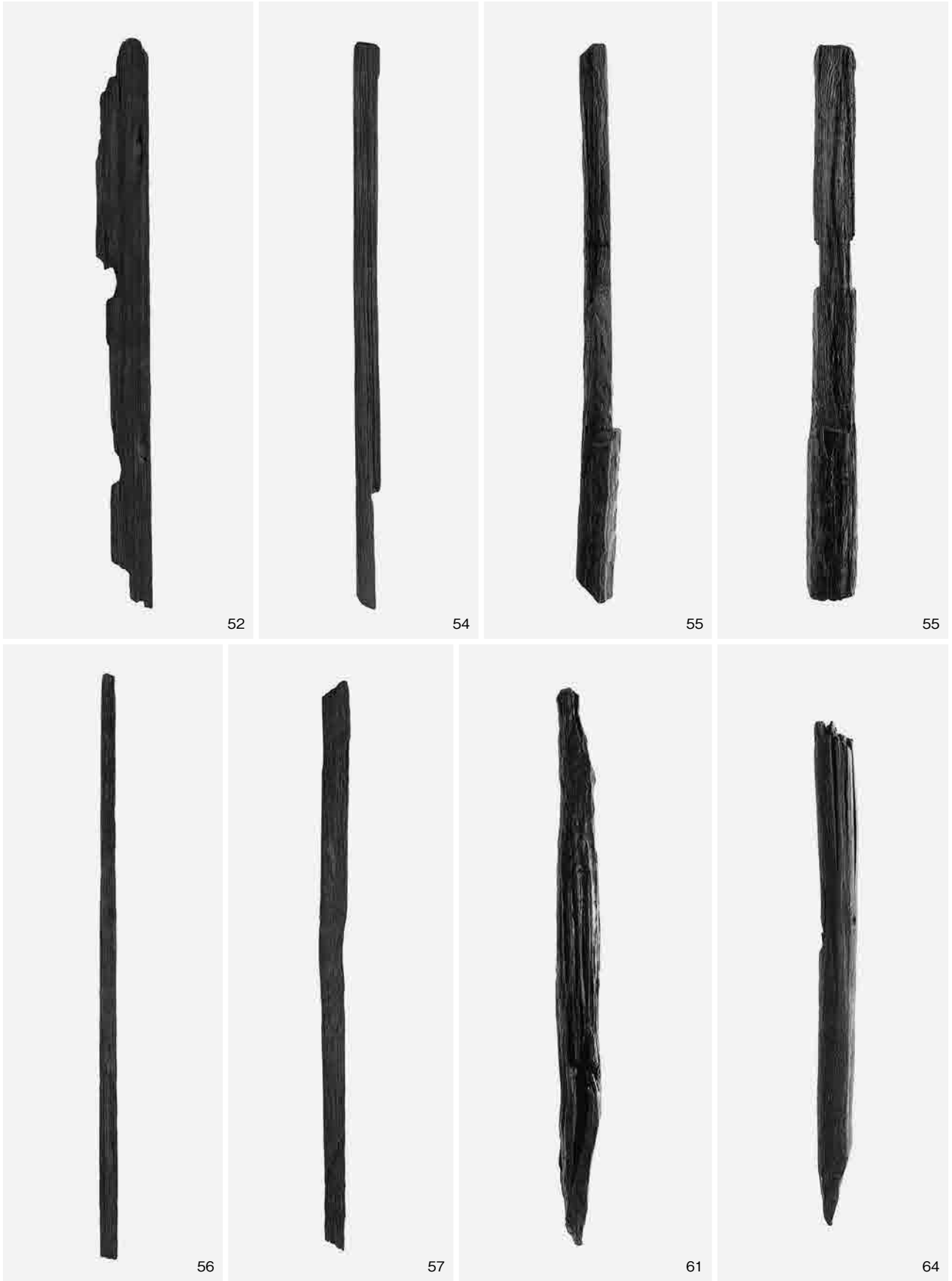
(2) D 地区溝 S D30 近景 (北から)



(3) D 地区溝 S D30 土層断面
(南から)

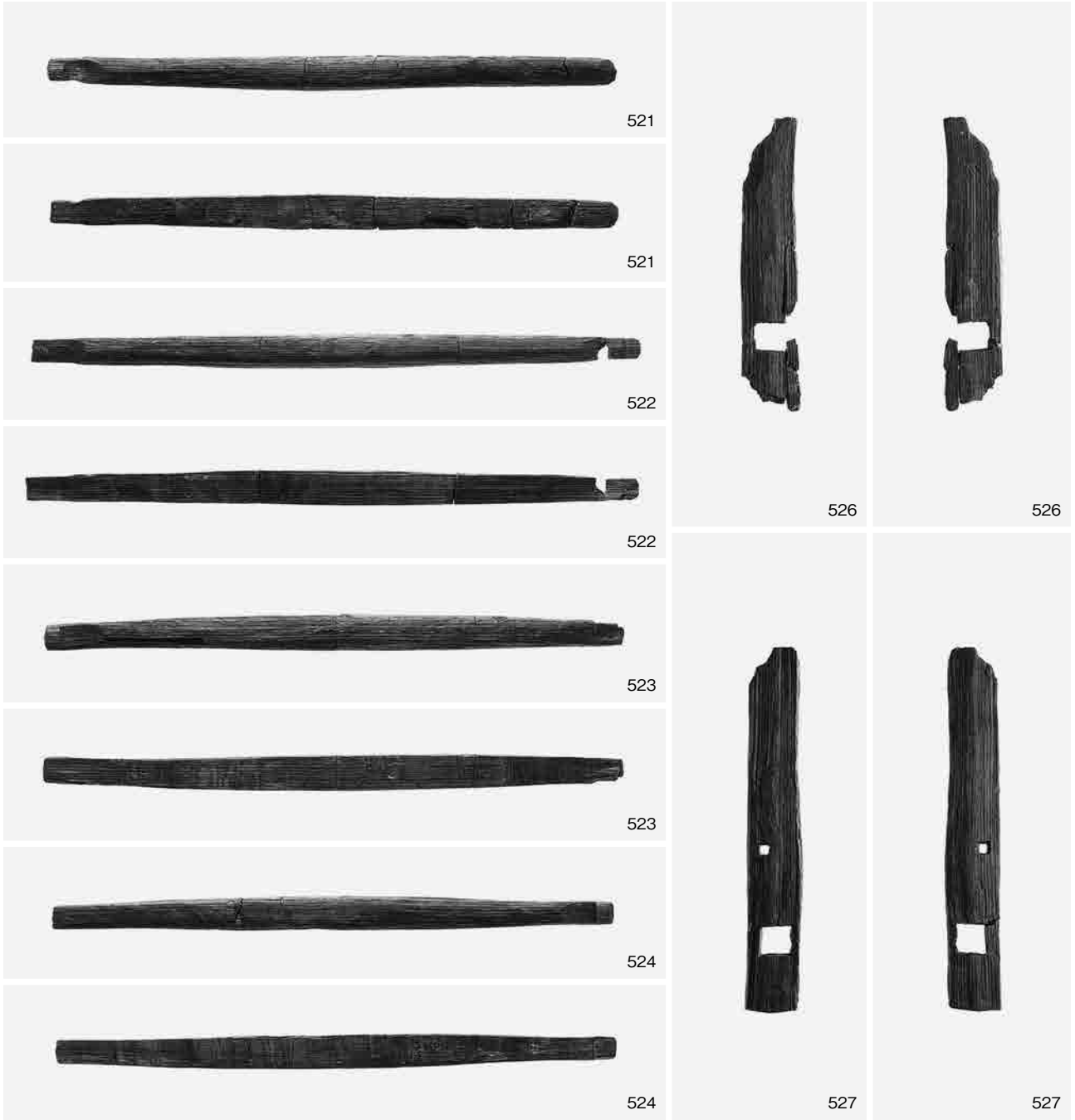


出土遺物 1



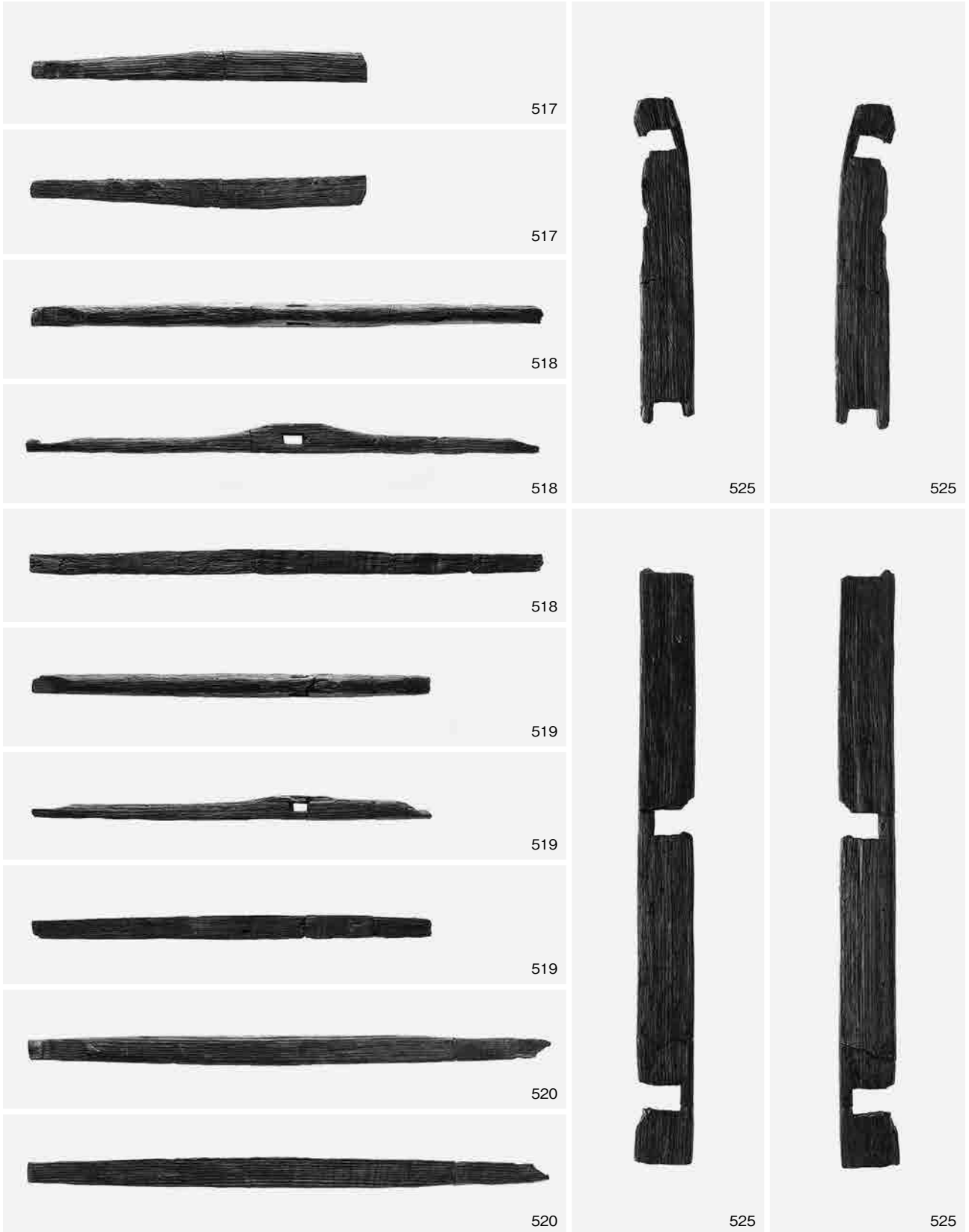
出土遺物 2

下水主遺跡第 9 次



出土遺物 3

下水主遺跡第 9 次



出土遺物 4

報告書抄録

ふりがな	京都府遺跡調査報告集
書名	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
副書名	
巻次	第174冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第174冊
編著者名	岡崎研一・筒井崇史・山崎美輪・渡邊拓也・桐井理揮
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番03 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2018年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
しもみずしいせき 下水主遺跡第6 ・9次	きょうとふじょうようしてらだかなお・いまばし 京都府城陽市寺田金尾・今橋	26207	88	34° 50' 51"	135° 45' 43"	20140409 ～ 20150306	15,510	道路建設
みぬしじんじゃひがしいせき 水主神社東遺跡第 6・7次	きょうとふじょうようしてらだかなお 京都府城陽市寺田金尾					20150518 ～ 20160205		

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下水主遺跡6・9次 水主神社東遺跡 6・7次	集落跡 生産遺跡	弥生～中世	鳥畑・土坑・柱穴・溝・ 流路	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・ 石器・土偶・木製品	

所収遺跡名	要 約
下水主遺跡第6・9次 水主神社東遺跡第6・7次	<p>上層では中世の鳥畑を検出し、現在の水田畦畔が、造成当初の鳥畑の位置をおおむね踏襲していることが確認できた。中層では古墳時代前期の溝や弥生時代の土坑・溝などを検出した。古墳時代の溝からは用途等は不明ながら「方形組み合わせ木製品」と仮称した木製品が出土した。また、弥生時代の溝や土坑は調査地の北半部にまとまって存在することから周辺に集落の存在が予想される。下層では、調査地の北半部で、「氾濫流路」と呼ぶ洪水痕跡を確認し、その堆積土から大量の縄文時代晩期の土器が出土し、やはり調査地周辺に集落の存在が予想される。また、同じ氾濫流路から、関西では類例の少ない遮光器系土偶の破片が出土した点は特筆される。</p>

京都府遺跡調査報告集 第174冊

平成30年3月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141